夫木和歌抄

下

例言

一、本卷は夫木和歌抄下卷として、その卷第二十一より卷第三十六まで全部を收めました。

一、本卷は前卷に傚ひ、學習院本に據り中山泰昌が校訂しました。

一、本卷には殊に難讀の歌が多く、それ等には出來うる限り異本の讀み方を旁書しました。

校註 國家大系第二十二卷目次

夫木和歌抄 下卷……藤原長清撰……一―六五五

卷第二十一 雜部三

洞……三
杣……四
嶺……七
根……一〇
嵩……一一
谷……一三
岡……一四
坂……二一
隈……二三

路……二四
橋……二九
　濱川橋は山城、山菅橋は下野、佐野の船橋は下野いなむやの橋、宇治橋、同近江、妹の山背の山によめり。
關……四二

卷第二十二 雜部四

野……六〇
原……六五
林……七四

森……七五
牧……八四
田……八五
畠……八八
園……八九
畑……八九
巖……九〇
石……九一
細砂（まさご）……九五
むらさ野・近江、うち野・山城、内の大野・大和、うりふ野・山城、まゝ野・近江、吹上の小野・紀伊、こす野・大和、衣手の小野・山城、あさは野・武蔵、あきつの・山城、あだち野・奥州、あはづ野・近江、さが野・山城、河内、みやぎ野・奥州、三笠野・大和よめり。

巻第二十三　雑部五
海……九六
湖……一〇七
島……一〇八
澳……一一一
江……一一三
池……一二九

巻第二十四　雑部六
河……一四〇
淵……一七三
瀬……一七三
沼……一七四

巻第二十五　雑部七

浦……一七八
鹽竈……二〇〇
濱……二〇一
湊……二一一
潟……二一五
泊……二一九

卷第二十六　雜部八

津……二三一
磯……二三三
崎……二三六
迫門（せと）……二三四
渡……二三五
岸……二四〇
淵……二四二
淀……二四二
灘……二四三
澤……二四九
井……二五一
温泉（ゆ）……二五五
水……二五七

洲　八十□洲・奥津洲・中洲・奥州

井　いづみ井・備中、淺香の岩井・奥州、のりの井・とほ井・いさら井（源氏にあり）・まつ井・山城

水　よるべの水（源氏にあり）、水草ゐるともよめり、野中の水、せきり水

卷第二十七　雜部九

鳥……二六四
鵜……二六五
鶏鴿……二七一
鷲……二七一

目次

鶉……二七二
鷲……二七三
鵲……二七四
烏……二七五
鸐（やまどり）……二七六
鶏……二七七
鷹……二七八
木莵（みゝづく）……二八一
梟（ふくろふ）……二八一
鶚（みさご）……二八一
鷗……二八二
鴉……二八三
鳩……二八四
鵯（ひえどり）……二八五
[illegible]（はしばみ）……二八五
放鳥（はなちどり）……二八五
鵺（ぬえ）……二八五
都鳥……二八六
百舌鳥……二八七
鵐（しとゞ）……二八八
鵤（いかるが）……二八八
雀……二八八
山陵鳥（やまがら）……二八九
小陵鳥（こがら）……二八九
四十雀（しじふがら）……二九〇
鵥（かやくき）……二九〇
庭叩（にはたゝき）……二九〇
鶸（ぬか）……二九〇
増子鳥（ましこ）……二九〇
火焼鳥（ひたき）……二九一
松雀（まつむしり）……二九一
都々鳥（つゝどり）……二九一

水乞鳥（みづこひどり）……二九一
箱鳥……二九二
佛法僧……二九二
龍……二九三
虬（たつ）……二九三
虎……二九三
熊……二九四
猪……二九四
牛……二九五
馬……二九六
犀（さい）……三〇〇
猿……三〇〇
野干（きつね）……三〇一
犬……三〇二
兎……三〇二
猫……三〇三
猯（たぬき）……三〇三
鼠……三〇三
鼯（むさゝび）……三〇四
龜……三〇五
貝……三〇六
蝸牛（かたつぶり）……三〇八
蜻蛉……三〇八
蛛……三〇九
蝶……三一〇
蝙蝠……三一一
蓑蟲……三一一
守宮（ゐもり）……三一一
海月……三一二
海老……三一二
蟹……三一二
魚……三一二

經……三一三
緯……三一四
結……三一四
綜……三一五
綛（かしぶし）……三一五
鋼……三一五
鐘……三一六

卷二十八　雜部十　植物上

草……三一八
竹……三一九
篠……三二三
葛（さきくさ）……三二五
苔……三二五
日陰草……三二七
山橘……三二七
淺茅……三二八
茅花（つばな）……三三〇
蘋……三三〇
蔓草（つゞら）……三三一
蘆……三三三
海松……三三五
藻……三三六
萍……三三七
蓬……三三八
思草……三三九
忍草……三四〇
忘草……三四〇
百代草……三四〇
白慈草（すまひぐさ）……三四〇
爾許草（にこぐさ）……三四一
朮（うけら）……三四一

菅……三四一
萱……三四四
濱木綿……三四四
小々妻（さゞめ）……三四五
藍（あゐ）……三四六
紅……三四六
紫……三四六
麻……三四七
萍……三四七
淺砂（あさゞ）……三四八
蓼（たで）……三八四
芹……三四九
水葱（なぎ）……三四九
母子草……三四九
駒繋（こまつなぎ）……三五〇
犬子草……三五〇
土筆……三五〇
折敷草（をしき）……三五〇
鏡草……三五一
莞草（おほひぐさ）……三五一
射干（からすあふぎ）……三五一
莎草（みくりぐさ）……三五一
芝……三五一
山苣（やまぢさ）……三五二
目覺草……三五二
夕陰草……三五三
指燒草（さしもぐさ）……三五三
葎……三五三
手向草……三五四
芭蕉……三五四
莫鳴菜（なのりそ）……三五四
和布……三五四

卷二十九　雜部十一　植物下

木……三五六
松……三五九
椿……三六九
栢……三七〇
桂……三七一
楸（ひさぎ）……三七二
枝保持（しはち）……三七三
槙……三七三
杉……三七四
檜……三七七
梨……三七七
李……三七八
杏（からもゝ）……三七八
柏……三七八
槍……三八一
椎……三八一
栗……三八三
槻……三八四
枌（なろ）……三八四
令法（はたつもり）……三八五
櫨……三八五
楒（ゆづりは）……三八六
妻摩々（津閇々、兩樣に）……三八六
合歡木（かうか又ねぶとも）……三八七
胡桃（くるみ）……三八七
樫……三八七
櫟（いちゐ）……三八八
猿滑（さるなめり）……三八八
榶（ぐみ）……三八九
樛（とが）……三八九

漆……三八九
もちひの木……三八九
黄楊木……三八九
こぶし……三九〇
ひゝら木……三九〇
そばの木……三九〇
ねずもち……三九〇
こめ／＼……三九〇
うはめの木……三九一
ねぶの木……三九一
すろの木……三九一
めづら……三九一
檟(えのき)……三九一
柹……三九二
桑……三九二
あせみ……三九三
逸師(いちし)……三九二
櫪(くぬぎ)……三九三
柴……三九四

卷第三十　雜部十二　居所上

國……三九六
禁中……三九九
仙家……四〇一
都……四〇二
故鄉……四〇五
故宮……四〇七
閑居……四一〇
窟……四一一
宅……四一三
廬……四一三
屋……四一五

屋影……四一八
鄰……四一八
山家……四一九
田家……四二三

卷第三十一　雜部十三　居所下

都……四二六
里……四二七
村……四四七
市……四五〇
驛……四五一
庭……四五二
籬（ませ）……四五三
牀……四五四
棟……四五四
窓……四五四
戸……四五五
門……四五七
墻……四五九
簾……四六二

卷三十二　雜部十四　雜物上

御調……四六四
酒……四六五
薬……四六七
文……四六七
硯……四六九
筆……四六九
太刀……四七〇
刀……四七〇
箱……四七一
弓……四七一

箙……四七二
行縢(むかばき)……四七三
沓……四七三
杖……四七四
鞠……四七五
蓑……四七五
笠……四七六
琴……四七七
笛……四七九
鼓……四八一
鐘……四八二
率都婆……四八四
金……四八五
寶……四八六
玉……四八六
鏡……四八九
枕……四九一
甃(いしだゝみ)……四九四
筵……四九五
簾……四九六
櫛……四九七
鬘……四九八
笭箵(かたみ)……四九九
火取……四九九
挿頭……四九九
祓麻……五〇〇
志折(しをり)……五〇一
標(しめ)……五〇一

巻三十三　雜部十五　雜物下

衣……五〇三
裳……五一〇

袴……五一〇
袋……五一一
組……五一二
帶……五一三
綾……五一三
錦……五一四
布……五一五
綿……五一六
絲……五一六
機……五一七
斤（はかり）……五一八
櫃……五一八
車……五一九
樋（水まかするひなり）……五二一
筏……五二三
船……五二三
梶棹……五三一
碇……五三一
綱……五三二
繩……五三二
緒……五三三
網……五三四
魚簗（やな）……五三五

卷第三十四　雜部十六

神祇……五三七
社（附宮）……五四九
釋教……五五三
寺……五七〇

卷第三十五　雜部十七

帝王……五七七

院……五八〇
春宮……五八〇
中宮……五八〇
親王……五八一
將軍……五八一
大臣……五八一
歌人……五八二
民……五八二
翁……五八三
法師……五八四
尼……五八五
優婆塞……五八五
父……五八五
稚子……五八六
未通女(をとめ)……五八六
島子……五八八
婦人……五八九
女……五八九
妹……九五〇
我妹子(わぎもこ)……五九〇
妻……五九一
使……五九一
商人……五九二
海人……五九三
夷……五九五
田子……五九五
匠……五九六
遊女……五九六
遊士……五九七
傀儡……五九七
樵夫……五九八
山老……五九九

夫木和歌抄 巻第二十一

雜部三

題　洞　杣　嶺　根　嵩（たけ）　谷
　　岡　坂　隈　路　橋　關

洞

古來歌
こけ深きほらの秋風身にしみて古きひはらの聲ぞ悲しき　土御門院御製

○深洞聞ㇾ風老檜悲

風ふけばふる木のひはら聲たてゝあとなき洞に昔こふらし　民部卿爲家

○朗詠百首

おのづから幾千とせまでふりぬらむ石の牀ふく洞の山風　同

○百首石牀留ㇾ洞嵐空拂（上イ）

春の色を幾よろづ代かみなせ川かすみの洞のこけの綠に　前中納言定家卿

○建保三年名所百首、水無瀬川

かめのをのみどりの洞に通ふらむわがたつ杣の法の光は　民部卿爲家

○文永五年毎日一首中、みどりのほら

久しかれ横川の杉のためしとて綠のほらにうつす水ぐき　同

○文應元年毎日一首中

かき流すよかはの洞の水莖によそのあかまでさぞ注ぐらむ　同

よそにきく涙をさへぞかきながすよかはの洞の杉の下水　同

○文永十年毎日一首中

〇家集、寺
（堅業）入る月の朝日待つこそはかなけれたかのの奥の苔のほらにて　權僧正公朝

〇拾薪設食のところ
おぼつかな峯のたきぎを拾ふまにこけの洞にや煙たつらむ　寂然法師

〇五十首歌
奥山の巖の洞にすむとてもあはれあなうとよをや嘆かむ　從二位家隆卿

〇同集、夜寄僧
ふけぬれば露と共にや宿らましいはやの洞の苔のむしろに　後京極攝政

〇家集
（玉種教）はな衣かさゝぎ山に色かへて紅葉のほらの月をながめよ　素意法師

此の歌は素意法師いまだ出家し侍らざりける時粉川の觀音にまうでて發心してやがてこもり侍りていづれの所にてか出家し何くにてか佛法修行して往生などとげ侍るべきといのり申しけるに內陣よりかくしめし給ひけるとなむ

杣

〇寶治二年百首、杣山
茂りあふ峯のひはらに杣たてている山人のやむときもなし　正三位知家卿

〇家集、寄外山
あさなぎの浦の杣山みつ潮によする舟人みやきつむらし　從二位家隆卿

〇建長八年百首歌合
そまかたを風わたるらし夏山に檜原のそよぐ音のすゞしさ　正二位忠宗卿

〇家集
河あひのまきの裾山いしたてて杣人いかに涼しかるらむ　西行法師

〇六帖題、そま
杣人は斧にみてくらとりそへてこまつりすらし谷深くいる　權僧正公朝

○家集、人にうたがはるゝ女にかはりて
すきくれをひく杣人は數多あれど君より外にそよめやはする　清輔朝臣

○賀茂社三百首歌合、霞
そまくだし霞たなびく春くれば雪げの水も聲あはすなり　皇太后宮大夫俊成卿

○弘長三年內裏百首、杣木
しげりそふ杣山たづの君が代につくるみやきは色もつきせじ　從二位行家卿

○久安百首
道みえぬこのくれ山の杣かたにまじるもしらす妹が待つらむ　花園左大臣家小大進

○六帖題
新六二
峯ごしの谷の杣木の綱弱みあがらですてしなこそ惜しけれ　光俊朝臣

○千五百番歌合
まきもくのひはちに雪やおもるらむたえぬ梢に杣木とる音　從二位家隆卿

○家集
まきもくのそま山櫻咲きぬらしまきたつ方にかをる春風　鴨長明

○崇德院御時百首
あなし河氷るにけりまきもくの檜原の杣木いかゞくださむ　藤原實清朝臣

○千五百番歌合
そまくだすにふの河上あとたえぬみぎはの氷みねの白雪　後京極攝政

○建長八年歌合
河上のにふの庵のまきのいたとりてぞいはふ萬代までに　光俊朝臣

○同年百首
さゞなみの大山もりのしめゆゐに朽木の杣の花ざかりかも　權僧正公朝

○同年百首歌合
古來歌に
紅葉せし昔の秋をしのびてやくち木の杣にやどる月影　土御門院小宰相

○題しらず
萬代
徒らになりぬる身こそ悲しけれ神のいつきの杣木ならねど　後一條入道關白

○あはざりける女に
家集
神のもるいつきの杣にたたねども徒らになるくれいかにせむ　實方朝臣

○永觀元年一條大納言障子繪歌
新拾參
大井河そまに秋風さむければたついはなみを雪とこそみれ　順

○家集、兼盛が大井河の家にて
大井河そまやま風のさむけきに岩うつ浪を雪かとぞみる　小大君

○題しらず
萬十一 新勅撰三
宮木ひくいづみの杣にたつたみの休む時なくこひ渡るから
讀人しらず

○家集、春歌中
そま人のくだす宮木もいづみ河かすみながらぞ春はながるゝ
從二位家隆卿

○文永二年七月白河殿七百首
日にそへて水もいづみのそま河に宮木を流す五月雨のころ
花山院内大臣

○弘長四年毎日一首中
いかばかりわがたつ杣の郭公むかし思へばねのなかるらむ
民部卿爲家

○六帖題、杣
新六二
宮木とる杣も佛のたねみえてわがたつをきくあとはたえせじ
信實朝臣

○家集中（あづさのそま）
郭公あづさの杣のそま人に聲うちそへて宮木ひくなり
俊頼朝臣

○承安元年八月奈玄法印房の歌合郭公
道とはみあづさのそまに尋ねきて夕暮にきく郭公かな
讀人しらず

○家集中（いぶきのそま）
杣くだすいぶきが奥の河上にたつきうつらしこけさなみよる
西行法師

○百首歌、杣寒月（しがらきのそま）
しがらきのまきの杣河こほりして影もながれぬ冬のよの月
從二位家隆卿

○五行綱歌、木（ひはらのそま）
年へたるひはらの杣の寂しきにたつきの音のほのかなるかな
後京極攝政

○寶治二年百首（みをのそま）
雲かゝる眞木も檜原も高しまのみをのそま山幾よへぬらむ
後九條内大臣

○同（あしがらのそま）
あしがらやひかぬ宮木の見えぬまでやへたつ雲の夕暮の空
從二位頼氏卿

○光明峯寺入道攝政家百首、河
かずならでよにふるみわの杣河に沉むなげきをひく人もなし
信實朝臣

○喜多院入道二品親王家五十首
山おろしは檜原がくれに響きて吹雪にまよふみわの杣人
禪性法師

○百首歌
杣人のいかにまたれむみわの山しげく嘆きをひくよなりせば
鷹司院按察

嶺

谷ふかみ峯かけ近き住居にはくれぬにくるゝ心ちこすれ　土御門内大臣

谷深くあさゐる雲やみちぬらむ麓もみえぬときはぎの峯　後鳥羽院御製

よぢのぼる峯に等しくたちいでていますゐみゆる山もとの杉　參議爲相卿

岩の上のこけうちはらひ幾秋かことばの峯の月をみるらむ　後九條内大臣

みな月になりぬとみえて大空にあやしき峯の雲の色かな　衣笠内大臣

此の歌判者光俊朝臣云左歌體始見二奇峯一雖レ驚二愚眼一遙隔二凡境一可レ迷二短慮一若夏雲多二奇峯一といふ文集の詩をおもへるならばみな月になりぬとみえてとざされむ事おぼつかなくや春雲こそ氣淺未レ成レ峯とは侍るめれ仲夏をすぎて晩夏にはじめて奇峯をなすやとみえ侍るさだめてふかきこゝろ侍るべしと云々

たかちほのくしふる峯ぞ仰がるゝ天のをずめ（細女）の初めと思へば　皇太后宮大夫俊成卿

かみをかの峯の嵐やはらふらむをの山もとに紅葉散るなり　從三位泰光卿

君が代はいふ限りなしみ吉野の黄金の峯にみよをまつまで　讀人しらず

神のますこがねの峯は法ときし鷲のみ山の跡とこそきけ　信實朝臣

○正治二年百首
○百首御歌
○海道宿次百首、今洲
○建長八年百首歌合（ことばのみね）
○同（あやしきみね）
○五社百首、山
○五十首歌（かみをかのみね、紀伊）
○奈良花林院歌合、祝
○家集、神祇歌中

○題不ㇾ知（國中あみだのみね、山城）
○家集
○題不ㇾ知（いまきのみね、今木、紀伊）
○同
○千五百番歌合
○家集
○嘉元三年楚忽百首
○建保四年百首歌中
○題不ㇾ知（わさみののみね）
○喜多院入道二品親王家五十首
○家集、名所中（こまつかみね）
○賜二鏡王女一（おほしまみね、大島、大和）
○家集（をのへのみね、高砂）
○建保三年名所百首
○永久三年十月内大臣家歌合、雪（かざこしのみね、風越、信濃）
○六帖題

道繁く障り多かる身なれどもあみだが峯はゆかむとぞ思ふ　讀人しらず

今よりはあみだが峯の月影をちよのさかまで賴むべきかな　前大納言公任卿

現存六
誰をかも今木の峯といひそめて妻まつの木の年をへぬらむ　讀人しらず

萬九
いもらがり今木の峯に波たてるつままつの木はふる人みけむ　人丸

新拾春下
かづらきやたかまの峯は雲はれてあくるわびしき有明の月　參議雅經卿

心あてにをらばやをらむ夕づくひさすや小倉の峯のもみぢば　從二位家隆卿

富士のねに春は花さく峯ならば雪にまされる名はふりなまし　爲實朝臣

いまぞ思ふいかなる時に富士のねの峯に煙のたち始めけむ　前中納言定家卿

萬十
わさみのの峯ゆき過ぎてふる雪の厭ふもなしとまうせそのこに　讀人しらず

ひれふりしまつらの峯はかすめども昔に通ふながめをぞする　禪性法師

暮れて行く秋や悲しき嵐吹くこまつがみねも鹿のなくなる　前中納言定賴卿

萬二　新千戀四
いもが家もたえずみましを大和なる大島峯にいへもあらまし　天智天皇御製

浪にしく月の光をたかさごの尾上のみねの空よりぞみる　西行法師

春のたつみぎはの浪も高砂のをのへにかよふみねの松風　從三位範宗卿

新六二
ふる雪にかざこしの峯あとたえてこえぞわづらふきその旅人　源兼昌

天の原はるけき空もかざこしの峯こえてこそ思ひしらるれ　衣笠內大臣

新後拾遺二
遠からぬふしみの里の關守はこばたの峯に君ぞすゑける　従二位家隆卿
○建保三年名所百首（こばたのみね）

秋風
雪深きこばたの峯を眺めつゝうちのわたりに人ぞまたるゝ　土御門院小宰相
○冬歌中

朝日さすみかさの峯の小松原そらに千歳のかげぞみえける　前中イ大納言忠良卿
○正治二年百首（みかさのみね）

み吉野のあをねが峯の名もしるく常磐にみゆる松のむら立　後嵯峨院御製
○寶治二年百首、峯松（あをねがみね、青根、大和又常陸）

みよしののあをねが峯の郭公苔のむしろにきく人やなき　順徳院御製
○百首御歌

苔筵あをねがみねも見えぬまで紅葉ふりしく神なづきかな　通清
○仁安二年二月歌林苑歌合

花まつといくよねぬらむみよしののあをねが峯の苔の筵に　後徳大寺左大臣
○御集、花歌中

萬七
みよしののあをねが峯のこけ筵誰かおるらむたてぬきなしに　讀人しらず
○詠レ蘿歌

今こそはききもあはすれ雉子鳴くをちの高ねはたかの峯とも　俊頼朝臣
此の歌はたなかみの山里にたかのみねと云ふ所にてきゞすのなくたき
きてよめると云々
○家集（たかのみね、膺、近江）

さゞれ石の巖となれば播磨なるいやたかの峯いやたかになる　元輔
○家集（いやたかのみね、近江）

歌苑抄
つくばねのみねの櫻を尋ぬとて幾瀬わたりぬ谷川の水　源經兼朝臣
○還尋二山花一といへることを（つくばねのみね、常陸）

夕暮やたはらの峯をこえゆけば凄くきこゆる山鳩のこゑ　西行法師
○家集、夕ぐれの山路（たはらのみね）

神無月しぐれはるればあづまやの峯にぞ月はむねとすみける　同
あづまやといふ所にて時雨ののち

根

○修行し侍りける時
はるかなるたかねの峯の白雲にこゑふきとむるすゞの秋風　僧正行意

○貞應二年六月名所百首
をはつせのたかねの花やさきぬらむ雪ふりのこす杉のむら立　民部卿爲家

○三百六十首歌合（はつせ山）
櫻さくたかねに風やわたるらむ雲たち騷ぐをはつせの山　後法性寺入道關白

○百首御歌
かひがねは山の姿も埋もれて雪のなかばにかゝる白雲　順德院御製

○建保六年百首歌合
春のくる霞をみればかひがねのねわたしにこそたなびきにけれ　信實朝臣

○寄二名所一戀
新拾遺
かひがねにこのは吹きしく秋風も心の色をえやはつたふる　前中納言定家卿

○弘長三年毎日一首中
たかねにはみ雪ふるらし嵐山したふく風に雲ぞしぐるゝ　民部卿爲家

○月照二瀧水一（たちのたかね、紀伊）
家上
雲きゆるなちのたかねに月たけて光をぬけるたきの白絲　西行法師

○家集（かづらきのたかね、大和）
かづらきの山のたかねにすむ人は谷の底にや雲を見るらむ　大納言經信卿

此の歌はかづらき山にすぎ侍りけるに山のうへなる人の家をみてよめると云々

○光台院入道二品親王家五十首、寄レ所戀
よそにみるかづらき山の雲だにも高根の松にかゝりやはせぬ　法印定範

○獨集（いよのたかね、伊豫）
道遠きいよのたかねを尋ねても人の行方をわれにしらせよ　岡屋入道攝政

○伊與溫泉にて、長歌
萬三
しま山の　よろしき國と　こゞしき　いよの高根の　いさに　赤人

はの　岡にたたして　うたおもひ　いふ（ことイ）おもひせし　みゆの
うへの　こむらをみれば　おみのきも

萬二十　續後撰旅
浪花とを漕ぎいでてみれば神さぶる生駒高ねに雲ぞたなびく　大田部三成

秋のよのむこのたかねに雪ふりてつもりの浦によする白玉　殷富門院大輔

更科の山のたかねに月さえてふもとの雪はちさとにぞしく　後京極攝政

いさぎよきひこのたかねの池水にすまば心のすまざらめやは　高辨上人

此の歌はある人つくしのひこの山にこもりて後世のことといのり申しけるついでに「いさぎよきひこの高峯のいけ水にすます心を又はけがさじ」とおもひつゞけてまどろみ侍りける夢につげさせ給ひける御返事と云々

疑開抄
ひもろぎは神の心にうけてけりひらのたかねも夕かづらせり　讀人しらず

玉冬
紅葉するひらのたかねに風吹けばまのの入江に錦をぞしく　同

吹く風のあらちのたかねの雪さえて矢田のかれのに霰ふるなり　衣笠內大臣

嵩（たけ）

明玉
いざ行きてあさひのたけに宿からむ小倉の山は春くれぬべし　道明法師

○題しらず（いこまのたかね、大和）
○家集、月歌中
○正治二年百首
○釋教歌合（ひこのたかね）
○題不レ知
○嘉應元年親智法眼歌合、紅葉
○弘長元年百首、霰
○家集中（あさひのたけ、山城）

萬十三
み吉野の　みかねが嶽に　ひまなくぞ　雨はふるといふ　ときなくぞ　雪はふるといふ　その雨の　際なきがごと　その雪の　　讀人しらず

萬十三
み雪ふる吉野のたけにゐる雲のよそにみし子にこひ渡るかも　　同

岩がねにたか葉かりしき眺むれば吉野のたけに月傾きぬ　　法橋顯昭

人家
風さゆるとをつ川上こほりして吉野のたけに雪ぞつもれる　　源仲業

萬代
よしの川吹きこす風のさえしよりかねのみたけは雪ぞ積れる　　紫金臺寺入道二品親王

我が戀の金（かね）の御嶽（みたけ）のかねならば彌勒のよにもあはましものを　　源仲正

ひえの山そのおほたけはかくれねど猶水のみは流れてぞふる　　俊頼朝臣

さえまさるいぶきのたけの山嵐に冰はてたる余吾の水海　　民部卿爲家

千秋下
朝日さす生駒のたけはあらはれて霧立ちこむるあきしのの里　　參議實俊卿

わけて行く色のみならず梢さへちぐさのたけは心そみけり　　西行上人

萬代
神代よりおほくの年の雪積り白くもみゆるゆふのたけかな　　橘爲仲朝臣

萬七
あなし川かは浪たちぬまきもくの弓槻がたけに雲たてるらし　　人丸

萬一
かげろふのゆふさりくれば里人のゆづきがたけに霞たなびく　　讀人しらず

風むせぶひはらの時雨吹き迷ひあなしのたけにかゝる村雲　　後九條内大臣

影きよきみかみのたけを出でし日の光は夢かおきの山のは　　後鳥羽院御製

○（みかねがたけ、御金、大和）
○題不レ知
○千五百番歌合
○百首歌
○御集（かねの御たけ、金御、大和）
○家集
○家集、かつみる戀（おほたけ、近江）
○結縁經百首（いぶきのたけ）
○秋歌中（いこまのたけ）
○大峯のちぐさのたけにて（紀伊）
○豐後國ゆふのたけの雲をみて
○詠雲（ゆづきのたけ、弓槻、大和）
○霞
○嘉禎二年遠所歌合、時雨（あなしのたけ、大和）
○御集、十首御歌中（みかみのたけ、三上又三神、近江）

○寶治二年百首（ふじのたけ、駿河）
もえ渡る思ひはそれと見えながらふじのみたけも煙立つなり　正三位知家卿

谷

○建保三年百首
はつせ山峯の鹿の音さそひきてふもとの谷にそよぐ秋風　俊成卿女

○光臺院入道二品親王家、するがに溪雲
谷ふりてながくたえにし笛のねのかたみともなしよその白雲　前中納言定家卿

○同
秋のよの月も眺めぬ谷の戸はくものあるじをとふ人もなし　隆祐朝臣

○花月百首
谷深きむぐらが下のうもれ水それにも月のひまもとめけり　後京極攝政

○六帖題
新六五
世の中にむなしき谷のひゞくをばたれ山彦となづけそめけむ　光俊朝臣

○寶治三年百首、谷五月雨
はつせ山おのれさつきの雲そへてひはらの谷に雨注ぐなり　光臺院入道二品のみこ

○同
五月雨にたえやしぬらむ遠山のうききづたひの谷のかよひぢ　常磐井入道太政大臣

○家集
明玉
こたかみや谷のこぬれ（くイ）にかくろへて風のよきたる春をみるかな　仲實朝臣

○千五百番歌合
今更に思ひいるこそはかなけれしめを飾りし谷のとぼそに　宜秋門院丹波

○百首歌
何事を松のふるきのいたづらに谷のかたそにくち殘るらむ　從二位家隆卿

○六帖題
新六一
しげ山のそがひの道の谷あひは夏とて風のふかぬまもなし　民部卿爲家

○建長五年毎日一首中
峯つゞきひとつにたかきすきまよりたにに（以下缺く）　同

○文永三年毎日一首中
谷つゞきそがひにみゆるまきの屋の上白妙に結ぶあさしも　同

山たかみいりぬとみれば行きあひの谷には月の影ぞ殘れる　民部卿爲家

山櫻ちらぬまでこそをしみつれふもとへ流せ谷川の水　西行上人

くれぬるか北に嵐のふきかへて山人おくるたにの下道　從一位良教卿

やま人のあふさきるさの朝夕におくりむかふる谷の下風　從二位行家卿

ふかくさの谷の鶯はるごとにあはれ昔とねをのみぞなく　鎌倉右大臣

萬七　萬十二
あさか山霞の谷にかげくもり（てよりイ）わがもの思ひは晴るゝよもなし　讀人しらず

六二
あさか山霞の谷に冬ごもりわがもの思ひのはるゝ世もなし　源養父

おもひやる苔の下こそかなしけれかすみの谷の春の夕暮　從二位家隆卿

花ならで櫻谷をば見にゆかじあきにもあきぬ道の遠さに　源俊重

此の歌はたなかみにて八月ばかりにつれ〳〵なりけるにいでてあそびけるついでにさくら谷にまかりけるに道のとほかりければやすみてよめる

にほてるやさくら谷より落ちきたる浪も花さくうぢの網代木　慈鎮和尚

東林吟
松たにの風いかばかりいたむらむよはの煙の心ぼそさを　同

○家集、花

○建長八年百首歌合

○同

○春雑歌中、萬（ふかくさのたに）

○題不レ知（かすのみたに）

○同

○後京極摂政うせ給ひける頃定家卿のもとへ

○俊頼朝臣家集（さくらだに、近江）

○日吉百首歌

○後京極摂政うせ給ひて後

岡

○題しらず

萬十
いでて見る向ひの岡のもと繁く咲きたる花のならずばやまじ　人丸

○建長八年百首歌合

夏にこそはやなりにけれいでてみる向ひの岡のもと繁るまで　光俊朝臣

此の歌判者行家卿云むかひのをかのもとしげるまで首夏の氣色見所ありて本歌の詞義相叶ひ侍るべしと云々

○六帖題、をか

新六二
岡ごえの道を苦しみ河ぞひのあすかの方をゆきかめぐらむ（て 新六）　信實朝臣

○あづまへくだりける道にて

これぞこのたのむ木のもと岡邊なる松の嵐よ心してふけ　源光行

此の歌路次記云前島の宿をたちてをかべのいま宿うちすぐるほど片山かげによりて云々

○建長五年あづまへ下りけるに海道の所々の歌、岡部を

かへりくる程はなげかじ朝霜の岡べのまくずうらがれにけり　民部卿爲家

○建長四年百二十八首、旅

古來歌
ありつゝとまたれしもせぬ岡の陰一よの宿りをがやをぞ吹く　前中納言定家卿

○夏御歌中

萬一
かた山のすその原のはなれをか夏くさ繁み鹿やこもれる　後一條入道關白

○題不レ知（いはしろのをか、石代、紀伊）

萬代
君が代も我がよもしれや石代の岡のくさねをいざ結びてな　讀人しらず

○寶治二年百首、岡篠

萬代
笹竹のいくよの霜かいはしろのをかの草ねに結ぼほるらむ　前大納言基良卿

○題不レ知（いまきのをか、今城、大和）

萬十　玉夏
ふちなみのちらまくをしき郭公今木の岡になきてゆくらむ　赤人

○家集、人の女の裳著の所にて蘭をとりて

をとめごがいまきの岡の藤袴こしゆふ露やいはひおくらむ　清輔朝臣

○承保元年大嘗會主基方御屏風（いたむらをか、稻村、丹波）

君が代はいづれの里もおしなべて稻村岡になりにけるかな　前中納言匡房卿

○天仁大嘗會
君が代の樂しき年のいねなれば稲村をかにみちてこそつめ　藤原正家朝臣

○秋歌中（いりひのをか）
しぐれつる程よりもなほ色こきは映る入日の岡のもみぢば　權大納言冬基卿

○寶治二年百首、岡篠
光さす入日のをかの松風におきもさだめぬ露の玉ざゝ　正二位忠定卿

○家集（いはてのをか、陸奥）
現存六
問へどこのいはてのをかの岩つゝじ紅ぞめのわが衣手ぞ　民部卿爲家

○同（となりのをか、山城）
夢かとよとなりの岡の郭公しのびもあへぬよはのひとこゑ　基俊

○寶治二年百首、岡篠
とねりこが袖も露けしとも岡の繁きさゝふの行くさきるさに　従二位頼氏卿

○三島社奉納かぐらの歌中
とも岡の篠のはしだり雪ふればこしにさしたるかたなひきなる　權僧正公朝

○文永二年七月白川七百首（ちしほのをか）
そめかへすちしほの岡の夕時雨猶もつれなく殘るしひしば　源俊平朝臣

○六帖題（かぐらをか、神樂、山城）
新六二
君が代の祈るいのりのかぐらをか松も千歳の色やそふらし　衣笠内大臣

○題しらず（類中）
吉田野のきねにも松はあらねどもまに／＼見ゆる神樂岡かな　讀人しらず

○秋歌中
深窓秘抄
ふりたててならし顔にぞきこゆなるかぐらの岡の鈴蟲の聲　民部卿範光

○百首歌（かめをか、山城或近江）
ちよふべきかめのをかなるをざゝ原嬉しきふしの繁き頃かな　前中納言定嗣卿

○三百六十首中
新勅多
ちはやふる神なび岡のならのはをゆきふりさけて（みわ新勅）たをる山人　好忠

○寶治二年百首（かたこひのをか、陸奥）
現存六
こゝにしもなに茂るらむ玉篠やうきふししげき片戀の岡　鷹司院按察

○六帖題（かたをか、山城又大和）
新六一
片岡のこがくれすぐるみたらしの川音涼しゆふやみの空　衣笠内大臣

○同
新六二
かけをのみ久しきよより頼むかなわが片岡の松のむらだち　正三位知家卿

片岡の岩ねのこすげいまさらに亂れやまさむ人になびかば　相摸

を山田をかへしたてれば片岡の花みてすぐと人やみるらむ　讀人しらず（道命法師古）

秋の野のかりねの岡の古きどすわれからことし物思ふかな　源仲正（讀人しらず古）

我妹子やかくれの岡の古きどすかりにもあはで年のへゆけば　同

たかをかに峯れゐる人も諸共にちよを契りしわかなをぞつむ　藤原正家朝臣

いかにせむつゞきの岡のくずのはの恨みて後は又もかへらず　光俊朝臣

つるがをかあふぐ翼のたすけにてたかきにうつれ宿の鶯　爲實朝臣

六二
みちのくのつゝじの岡のくまつゞら辛しと君をけふぞ知りぬる　讀人しらず

つののをか南にかをる梅の花君がみかどに通ふなりけり　前中納言匡房卿

明玉　家集　新拾雜中
うちつけに渚のをかの松風に空にも浪のたつかとぞきく　信朝朝臣

行く人もなぎさの岡の篠すゝきほにいでて誰を招くなるらむ　讀人しらず

秋風におもひみだれて苦しきは君をならしの岡のかるかや　嘉陽門院越前

住吉のならしの岡の玉つくりかずならぬ身は秋ぞ悲しき　好忠

白妙の（露イ）ならしのをかの玉つくり數ならぬ身の涙にやかる　家長朝臣

白妙の（露イ）ならしのをかのうす紅葉かつ〴〵秋の色やそふらむ　民部卿爲家

萬代　家
音にのみならしの岡のさねかづら人しれずこそくらまほしけれ　素性法師

○家集

○同

○題不レ知（かりねのをか、圖未勘之）

○家集戀歌中

○天仁大嘗會（たかをか、丹後）

○文永二年七月白川殿七百首

○嘉元三年楚忽百首、鶴岡奉納（つるがをか、相摸）

○題不レ知（つゝじのをか、陸奥又大和）

○大嘗會悠紀方御屛風津野岡（つのをか、近江）

○天曆御時名所御屛風歌（なぎさのをか、河内）

○永承三年太神宮後番歌合、薄

○千五百番歌合（ならしのをか、奈良之岡、大和又攝津）

○三百六十首中

○後九條內大臣家にて名所によする秋歌

○千首歌

○戀歌中

〇永曆二年正月中宮亮重家朝臣名所歌合、（ながらのをか、國未勘之）
子の日するながらの岡の小松原君よろづ代はひけどつきせじ　藤原實清

〇正治二年毎日一首中
いづれとか秋はそむらむゆふ時雨ならびのをかの松の下草　民部卿爲家

〇光臺院入道二品親王家五十首
ちとせとも限らじものを君がよにならびの岡の松のゆく末　寂蓮法師

〇光臺院入道二品親王家五十首、寄ノ松祝
幾ちとせ契りかおきし君が代にならびのをかの松のむら立　従三位範宗

〇同
法の花たえずならびの岡の松ともにちとせの影はかはらじ　西園寺入道前太政大臣

〇建長八年百首歌（ながゐのをか）
暮れかゝるながゐの岡をきてみれば露のみ繁きをざゝ原かな　鷹司院帥

〇岡擣衣（ゐかひのをか、豬飼、大和）
新六六
かるもかくゐかひの岡の寒き夜はいもやすぐ寐ず擣つ衣かな　後九條内大臣

〇六帖題
みまくさはかるともからむみこもりの猪養（ゐかひ）の岡の草の繁くに　信實朝臣

〇冬歌中（くらはしのをか、大和）
古來歌
行きかよふ人だにみえずくらはしの岡べの道につもる白雪　大藏卿隆博

〇承保元年大嘗會、くらをかのわかな（丹波）
をとめごが袖ふりはへてくらをかに千歳の春の若なつむらむ　前大納言匡房卿

〇正治二年百首
そめおてくやしほの岡の玉笹も君がやちよの末のかとりを　俊成卿女

〇堀河院御時百首
一字抄
浅からぬやしほの岡の紅葉ばをなにあかなくに時雨そむらむ　修理大夫顯季卿

〇一葉散林（山しなのをか、國未勘之）
いつしかと初秋風にやましなの岡べのくるす朽葉ちるらむ　藤原國友

〇題不レ知、戀中（まりのをか、長門）
まりの岡何をかかりと思ふらむかたうつ浪の音ばかりして　讀人しらず

〇（まさきのをか、大和）
尋ぬべき人こそなけれみ山なるまさきの岡に雪はふりつゝ　衣笠内大臣

〇題不レ知（まゆみのをか、大和）
萬二
とぐらたて飼ひし鷹の子巣立ちなばまゆみの岡にとひ歸りきね　讀人しらず

○中務卿親王家五十首歌合
荻の葉もおきふしそよぐ音すなりまゆみのをかの秋の初風　前左兵衛督教定

○貞應二年六月名所百首
白露も紅葉ばなからこぼるなりまゆみのをかの秋の夕風　民部卿爲家
此歌判者光俊朝臣云彼岡荻（候イ）作例未ㇾ存知ㇾ云々

○（ふなをか、能、山城）
舟岡やむかしの子の日あとふりて昨日の野べに松風ぞふく　後鳥羽院御製

六六
舟岡に花つむ人のそこはかとさして行くかたいかで尋ねむ　躬恆

○家集
ちよをへてみゆきあるべき舟岡の松ならぬみのおいぞ悲しき　同

○岡を（あとみのをか、大和）
現存六
霜枯のあとみの岡の冬くさもかくろへはててつもる白雪　權少僧都隆寂

○永承八年五月中納言泰憲卿家歌合（あみしのをか、國未勘之）
白浪を吹きあけの濱と見ゆるかなあみしのをかにふれる白雪　讀人しらず

○永仁大嘗會（あさゐのをか、淺井、近江）
秋はまたあさゐの岡の笹原むすびやすらむちよの初露　前中納言俊光卿

○家集（あそびのをか、大和）
ふえ吹の社の神は音にきくあそびのをかや行きかへるらむ　同

題不ㇾ知
玉旅　萬三
秋風の寒き夕をさののをかこゆらむ君にきぬかさましを　赤人

○寶治二年百首、岡篠
新拾旅
今宵もやさののをかべの秋風に笹葉かりふきひとりかもねむ　正三位知家卿

○題不ㇾ知（さたのをか、佐太、大和）
萬二
よしもなくさたの岡べに歸りなば島のみはしに誰かすまはむ　讀人しらず

○喜多院入道二品親王家五十首、祝（きぬがさをか、衣笠、山城）
神まつる衣笠岡の岩ね松ひさしくたてりときはかきはに　前大納言隆房卿

○家集（きりふのをか、近江）
立ちこむるきりふの岡の紅葉ばの色をば風のつてにてぞしる　郁芳門院安藝

○千首歌（ゆききのをか、大和）
夏と秋とゆききのをかの笹原あけむ一よの風をまつかな　民部卿爲家

新六二
みゆきせしふるき北野のみこし岡あはれ昔さはぞな戀しき　民部卿爲家

みこし岡あたりの雪やきえぬらむ古きあととて若菜つむなり　同

幾よとかきたのの原のみこし岡とだちの跡もふりまさるらむ　同

しるらめやみそめの岡の初尾花けふより下に思ひありとは　家長朝臣

萬十
秋風のひ毎にふけば水莖のをかの木の葉も色づきにけり　讀人しらず

萬十
鴈がねの寒くなくより水莖のをかのくず葉は色づきにけり　同

かりがねのなき渡るより水莖の岡のくずはら色づきにけり　從三位範宗卿

水ぐきのをかのあさぢを吹きしをり野風寂しき秋の夕暮　從三位行能卿

水ぐきのをかべの秋のくずかづらくる人あれや松蟲のこゑ　藤原康光

御田やもりせきいれて落す水ぐきの岡の葛はも浪やこすらむ　光明峯寺入道攝政

現存六
篠のはのさやぐ霜夜は水ぐきの岡の館にふしぞわびぬる　後嵯峨院御製

まくらゆふ袖さへぬれぬ水莖のをかのやかたの露の玉篠　冷泉太政大臣

水ぐきのをかべの里の郭公ねてのあさけにきかぬひはなし　前中納言光經卿

水莖のをかべの梅のさきそめてねてのあさけの風かをるなり　權僧正公朝

萬一
はるばると見やりの岡の若菜こそ千年の春はつむべかりけれ　左京大夫顯輔卿

しげをかに神さびたちて榮えたるちよ松の木の年のしらなく　紀鹿人

○六帖題（みこしをか、山城）
○文應元年七社百首、若菜
○同百首、鷹狩を
○建保四年百首、初戀
○題不知
○建保三年名所百首
○同
○同
○貞應百首夏祠歌
○同
○寶治二年百首
○光俊院入道二品親王家五十首、岡郭公
○中務親王家五十首歌合
○家集（みやりのをか、見遣、近江）
○題不レ知（しげをか、茂、大和）

○文應元年基政家會、寄ㇾ松祝

君がため枝さし葉さし繁岡に千代松の木のいやさかえ行く　　權僧正公朝

○六帖題御會、子日

古の子の日いくよとなりぬらむふりて久しきしげをかの松　　中務卿のみこ鎌倉

○岡松を

古來歌
色かへぬ松の緑はしげをかの神さびたちていくよへぬらむ　　藤原兼倫朝臣

○夏御歌中

いかばかりおきあまりてか夏草の繁みのをかの露のこぼるゝ　　後九條内大臣

○堀河院御時百首（しるべのをか山城）

村ぎえて雪もほかには見えなくにしるべの岡は猶ぞつれなき　　隆源法師

○同（しのぶのをか、陸奥）

しぼるゝもしる人もなき袂かなこれやしのぶの岡のかげ草　　前齋宮河內

○戀歌中

現存
人めのみしのぶの岡のまくず原いつあらはれて恨みそめまし　　源季茂

○百首御歌（しのぶのをか、武藏）

わが戀はしのびのをかに秋暮れてほにいでやらぬしののを薄　　慈鎭和尚

○御集（すくものをか、國未勘之）

時しあればすくもの岡の初わらび下にもえてもしる人はなし　　衣笠内大臣

坂

○六帖題、わらび

新六六
山人の歸るこさかの道のべにをりやすげなる下わらびかな　　正三位知家卿

○道

新六
こえわぶるこさかの道の雪どけにかへるさ苦しをのの里人　　衣笠内大臣

○堀河院御時百首

ますらをのこさかの道もあとたえて雪ふりにけり衣かせ山　　權大納言公實卿

○文永七年毎日一首中（みかさの山のさか）

老ののちみかさの山の坂こえてふりにし松のあとをみるか　　民部卿爲家

○つくしへまかりける道にて橘のさかを（たちばなのさか）

あはれなり昔の袖もかをるやと花たちばなの坂やこえまし　　太宰大貳高遠卿

○應和三年九月河原院歌合、うりふ坂に霧降（うりふざか、山城又近江）
○承久二年四季百首秋山（くぜのさぎさか、久世、山城）
○永久四年百首、稻荷詣（いなりざか、山城）
○題不レ知（あづまのさか、近江）
○建長八年三十首
○堀河院御時百首（ながさか、山城或伊勢）
○題不レ知懷中（まねきざか、伊勢）
○同（たつかみの坂）
○寳治二年百首（てこのよひさか手兒の欲比、タコノヨヒサカトモ、駿河或伊勢）
○題不レ知

ほかよりも立ちやそふらむ秋霧のうりふの坂に暗くもあるかな　讀人しらず
なに高くなりはしぬともうりふ坂霧のみたてば見えずもあるかな
神代より時雨ふりにし山城のくせのさぎさか紅葉しにけり　從二位家隆卿
いなり坂しるしの杉のさしはへて思ふ心をねぎぞかけつる　二條太皇太后宮肥後
萬十二 いきのをに我が思ふいもは鳥のなく東の坂をけふかこゆらむ　讀人しらず
萬十 逢坂をわがこえくればふたかみの紅葉ば流る時雨ふりつゝ　同
ふたかみをわがこえくれば逢坂のかしはが上に郭公なく　權僧正公朝
君がへむ御代なが坂のひむろには埋む氷のとけぬなりけり　中納言國信卿
まねき坂まねくを誰と問ひつれば霧のはれまの尾花なりけり　讀人しらず
懷中 秋なれば思ほゆるかなすゞか山しかときりとのたつかみの坂　同
いましはや鳥もなくなり東なるてこのよひ坂誰かこゆらむ　光俊朝臣
萬十四 東路のてこのよひ坂こえかねて山にかもねむ宿りはなしに　人丸
同 東路のてこのよひ坂こえていなばあれはこひむな後はあひぬとも
家集 ましも猶をち方人に聲かはせわれこしわぶるたこのよひ坂　紫式部

此の歌は都のかたへとて歸山をこえけるによひさかといふ所のいとわりなきがけぢをこしもかきわづらふおそろしとおもふにさるのこのは

○みかはにくだりける時おなじ國の名所歌合にあかさか
○同
○正治二年百首（きそのみさか、木曾、信濃）
○正治二年百首
○按察使公通卿家歌合
○東國風俗歌（みさか、甲斐）
○題不ㇾ知（うすひのさか、宇須比、上野或近江）
○越前の任のとき（いつはたのさか、伊都波多、越中）
○相模國歌（あしがらのみさか、足柄、相模）
○題不ㇾ知
○大寶元年十月紀伊國に幸のときの御歌（ふぢしろみさか、藤代、紀伊）
○洞院攝政家百首、眺望
○三百六十首中

の中よらおほくいできたればよみけると云々

あかさかをすみ上るよの月影に光をそふるたまざゝの露　為忠朝臣

秋きてぞみるべかりけるあか城の紅葉の色も月のひかりも　盛忠

五月雨にきそのみさかをこえかねてかけぢに芝の庵をぞさす　皇太后宮大夫俊成卿

いざさらばかけぢにしばし庵せむきそのみ坂に夕日さしけり　前大納言隆房卿

東路やきそのみ坂をこえゆけばふままく惜しき雪のかけ橋　盛方朝臣

み坂ぢに氷かしけるかひがねのささながさらすてづくりのこと（ながらイ）　能因法師

萬二十 ひな曇りうすひの坂をこえしだに妹が戀しく忘られぬかも　讀人しらず

萬十八 かへるまの道ゆかむ日はいつはたの坂に袖ふれ我をし思はば　中納言家持卿

萬十四 足柄のみ坂畏み曇るよのあかしたはへをこちてつるかも　讀人しらず

萬二十 足柄のみ坂にこして袖ふらばいはなる妹はさやにみもかも　同

萬九 藤代のみさかをこゆと白妙のわが衣手はぬれにけるかも　同

藤代の山のみ坂をこえもあへずまづめにかゝるふきあげの濱　民部卿為家

隈

くまごとにこゝちさやけき秋の月小倉の山の影はいかにぞ　好忠

○六帖題
みたかすゑ冬野をわくる狩人にいづれのやふか隈はかくさむ　好忠

○正治二年百首（をざゝがくま）
雜六三
とびがたみいかなる隈に身をうけて我（かイ）がたらちねの悲しかるらむ　光俊朝臣

野邊の草まだ淺しとや片岡のをざゝが隈にきゞすなくなり　三條入道左大臣

○百首御歌（つきのくま）
きよみがた雲もまがはぬ浪の上に月の隈なるむら千鳥かな　順德院御製

○長歌（かはくま）
風
はつせのかはに　いかたうけ　わがゆくかはの　かはくまの　讀人しらず
やそくまおちず　よろづたび　かへりみしつゝ

○家集
神中
たけくまのはなはにたてる松だにも我がごと獨りありとやはきく　重之

○題不レ知（あぶくま、陸奥）
阿武隈をいづれと人にとひつればなこその關のあなたなりけり　讀人しらず

○最勝四天王院名所御障子
風はやきあぶくま川のさよ千鳥涙なそへそ袖のこほりに　後鳥羽院御製

○建保三年名所百首
忘れじよ又あぶくまの川風にしばしなれぬと千鳥なくなり　參議雅經

○同
あけぬるかをち方人もあぶくまの七せの霧に袖の見えゆく　兵衛内侍

○文治六年五社百首（ひのくま）
深き秋にあぶくま川はしぐるれど色こそみえねせゞの埋木　藤原康光

○貞永元年八月十五日夜但馬御會
けさみればひのくま川は薄氷りをざさか原に霜置きてけり　皇太后宮大夫俊成卿

（こしまのくま）
たちばなのこじまの隈の川風に昔もきかぬすめる月かな　親季

路

〇題不レ知

萬五 常しらぬ道の長手をくれ〴〵といかにか行かむかりてはなしに　讀人しらず

〇六帖題

新六四 天のすむ里の長手の道つゞきかぎりあらばや恨みあくべき　民部卿爲家

〇女御入内御屛風

涼みにと道はこのまにふみなれて夏をぞたどる森の下風　前中納言定家卿

〇文治五年後京極攝政家雪十首歌合、雪中旅行

うちはらひ宿かりわびぬ雪をれの木々の下道面がはりして　同

〇家集、戀歌中

なるとすら道のとかる(みイ)はある物をなど我が戀のならむ時なき　源仲正

〇六帖題

新六一 暮れはてて道のあしみ(ゆ新六)のしられねばもとこし駒もなほぞ危き　正三位知家卿

〇千五百番歌合

わが君のあまねきみよの道つくりくぼめるみをも哀れとはみよ　家長朝臣

〇長歌

萬四 たをやめの　わがみにしあらば　みちもりの　とひこたへむ
を　いひやらむ　すべをしらずと　笠金村

〇題しらず

萬十一 岩ねふむ道は牀しと思へども今もとよりてはしのびかねつゝ　讀人しらず

〇建保三年内大臣家百首、旅

この森の紅葉の錦たてながら道のたよせにぬさたてまつる　家長朝臣

〇長歌

萬五 たまぼこの　みちのくまみに　くさたをり　柴取りしきて
とこしもの　うちこいふして　思ひつゝ　讀人しらず

〇題不レ知

萬七 海原の道遠みかも月よみの光すくなくよはふけにつゝ　同

〇六帖題㆑(なゝつのみち)

新六二 ゆたかなるななつの道のみつぎもの海山かけて定めおきてき　民部卿爲家

〇家集(あさみち)

家集 うちはへて朝風さむの冬のよやましろに霜のおける朝道　人丸

○實方朝臣みちのくにへくだりけるに
○千五百番歌合（よにふる道）
○賀茂社百首（よわたる道）
○文應元年毎日一首中（ことばの道）
○六百番歌合（こゝろのみち）
○洞院攝政家百首
○文治六年女御入内御屏風
○承久ののち後鳥羽院にたてまつりける歌中（やくものみち）
○家集、秋の夜月いたうくもりたるに（めぢ、眼路）
○家集、顯季卿のもとへつかはしける
○花月百首歌、はなのかよひぢ
○建保三年名所百首、緒絶橋
○賀茂社歌合（道心のみち）
○六帖題（きしみち）
○題不レ知（すそひく道）
○詞（三のみち）

別るべきわかれなりせば思ふとも涙の道にむせばましやは　能宣朝臣
みな人のよにふるみちぞ哀れなる思ひいるにも思ひいれぬも　後京極攝政
になひもつざうきの（よに似るみちのイ）いれこ町あしたよ渡る道を哀れとぞみる　慈鎭和尚
つたへくるやまと言葉の道なくば何か憂世のよすがならまし　民部卿爲家
たえぬべき程をきくにもいとゞしく心の道ぞ先づまよひける　隆信朝臣
たえはつる心のみちを恨みてもなほたどらるゝ夢の浮橋　俊成卿女
ながめやる心のみちもたえにけりちさとのほかの雪の曙　後京極攝政
頼みこし八雲の道もたえはてぬ君もいつもの恨めしのよや　從二位家隆卿
眺むれどめぢにもきりのたちぬれば心やりなる月をだにみず　和泉式部
續古今雜下
とへかしな玉櫛のはにみ隠れて鵙の草莖めぢならずとも　俊頼朝臣
かすみ行く宿の梢ぞあはれなるまだみぬ山の花のかよひぢ　後京極攝政
行く末のをだえの橋はきくもうしおもひの道の奥もしられて　正二位忠定卿
よどおほつ送り迎ふる年の暮は唯たうしんの道にぞありける　慈鎭和尚
新六
ひさぎおふる片山陰のきし道はしぐれてたえぬ秋の色かな　信實朝臣
萬十一
紅の裾ひくみちを中におきて我やかよはむきみやきまさむ　讀人しらず
現存六
かりそめに三の道をも教へずばひとつの門をいかでしらまし　衣笠内大臣

○六帖題、御歌くるま（車をくだく道）
○帝範の心をよみ侍りけるに、寄最篇を（つかさのみち）
○九十九首菊歌中（おどろの道）
○文應二年毎日一首中（にはのかけ道）
○花歌中（みやぢ）
○應三年九月河原院歌合、薄招人（のみち）
○家集、のぢと云ふ所にて（のぢのほそ道）
○安元二年十月右大臣家歌合、初雪（たにのいは道）
○千五百番歌合（みねのかけ道）
○懸百首中（ほきのかけ道）
○家集、雜歌中（あぜのほそみち）
○最勝四天王院名所障子（いはのほそ道）
○百首歌、山路（かけのほそ道）
○滋藤二年百首、山旅（いはのかけ道、はこね山）
○六帖題御歌（あらみち、いはくに山）
○題不レ知（ゆきげのみち）

人心車をくだく道なればたれか憂世をやすくすぎける　中務卿のみこ鎌倉

治むべき心ひとつをえらびてぞもゝのつかさの道もわきける　前參議公敦卿

かすがののおどろの道（下イ）の菊の花罪をかしなき（をかしなきわが身とはイ）身をばことわれ　爲實朝臣

ふる雨に木の葉ふりそふ山里の庭のかけぢはくる人もなし　民部卿爲家

萬代
あまつ風よきてふかなむうちびさす宮ぢの櫻今さかりなり　前中納言定家卿

花薄まねく袂のあまたあれば行きもやられず秋の野道は　讀人しらず

をらでゆく袖にも露はかゝりけり萩のみしげきのぢの細道　西行上人

けふよりは谷の岩みち雪ふりてあとたえぬべきみ山べの里　藤原本明

あはれをも人こそしらね雲の井（居るイ）は峯のかけぢを通ふ松風　俊成卿女

危きに人めぞ常によかれける岩のかけふむほきのかけ道　西行上人

わづらはで月にはよはも通ひけりとなりへつたふ畔の細道

ふみわけてさらにやこえむうつの山うつろふ蔦の岩の細道　從二位家隆卿

行きかよふかけの細道すゑ辿りこゆとしらする旅人のこゑ　參議雅經卿

玉くしげはこねの山の明方にともよびかはすいはのかけ道　民部卿爲家

岩くにの山のあら道たむけしてこゆるけふしも空のしぐるゝ　中務卿のみこ鎌倉

萬三
筑波ねをよそにみながらありかねて雪げの道をなづみくるかと　丹比國人

○同（みやけ、三宅、大和）
萬十三 父母にしられぬこゆゑみやけぢの夏のの草をなづみくるかも　讀人しらず

○同
萬十一 むまやぢに引舟渡したゞのりに妹が心にのりにけるかな　人丸

○同（みこしぢ、三越、越中）
萬九 みこしぢの雪ふる山をこえむひはとまれる我をかけて忍ばせ　笠金村

○同（つくしぢ）
萬十二 筑紫路の荒磯の玉もかりにても君が久しくまてどこざらむ　讀人しらず

○同（ならぢ、奈良、大和）
萬五 君がゆき長くなりぬならぢなるしまのこたちも神さびにけり　同

○光俊朝臣すゝめける百首
今もかも時雨ふりきぬならぢなるしまの梢は紅葉しぬらむ　正三位知家卿

○題不レ知（ならのおほぢ、奈良、大和）
萬十五 青によしならの大路は行きゆけどこの山道は行きあしかりけり　讀人しらず

○稲荷社百首（たつたぢ）
たつたぢの小倉の峯にちる花は瀧の上よりこゆる波かも　權僧正公朝

○旅歌（ふたみみち、二見、參河）
萬三 いもも我もひとつなるかも三河なる二見の道に別れかねつも　高市黒人

○旋頭歌（おほみあしぢ）
萬十一 岡崎のおほみあしぢを人な通ひそありつつも君がきまさむよきみちにせむ　讀人しらず

○題不レ知（とよはつせぢ）
萬十一 こもりくの豐はつせぢはとこなめの畏き道ぞ戀ふらくはゆめ　同

○建長八年百首歌合
旅人のゆきしにしのべ大和なる豐はつせぢの山のもみぢば　衣笠內大臣

○御集、將御歌中（はつせぢ、泊瀬大和）
泊瀬ぢやながやどりせし如月のうちの渡りはさぞかすむらむ　中務卿のみこ鎌倉

○洞院攝政家百首、旅
續古雜下 玉桙苦しき道のあととめてそのはつせぢをかちよりぞ行く　藻壁門院但馬

○千五百番歌合（ふるのなかみち大和）
幾のかみふるの中道立ちかへり昔にかよふやまと言のは　具親朝臣

○御集
ちはやふるふるの中道すぎがてに幾度こえぬをはつせの山　後法性寺入道關白

○同（ゐでの中道）
人しれぬ心へだつないはてのみ年月すぐす井手の中道　中務卿のみこ鎌倉

○家集、雪深
岩ねふむをのの苔道ゆきふれば梢ぞしづのつまきなりける　如覺法師

○正嘉二年毎日一首中
さかの山ちよのふる道ふみ分けてさらに昔のあとはしめつゝ　民部卿爲家

○弘長元年日吉社三首歌合（しがのふる道、近江）
こえ暮すしがのふる道けふみれば花にもあかぬ山の井の水　同

○信成卿日吉社會に、湖邊冬（しがのはまみち、近江）
思ひ出る人の袖もや氷るらむなれしみゆきのしがの濱道　從二位家隆卿

○しほ（なだのかけ道）
現存六
おほしまのなだのかけぢに汐滿ちてけふは鳴門に泊りぬるかな　藤原存氏

○みるめ（みなとぢ）
現存六
湊ぢの蜑の行き來のかひもなし我が爲にかるみるめならねば　鷹司院帥

○家集、忘草をみて（ゐなの中道猪名、攝津）
萬十二
思ふ人ありもこそすれ忘れ草おひけりゆかしゐなの中道　能因法師

○題しらず（やまとぢ）
わぎもこを夢にみえこと大和ぢの渡るせごとに手向わがする　人丸

○仁安三年奈良歌合、判者俊成卿
大和ぢのまの萩原きてみればふるえもたわに花咲きにけり　朝惠法師

○屛風にしかすがの渡に雪ふる旅人舟にのりて渡る所（しかすがのふる道）
雪により歸りやせましかすがのふる道とひていざ渡りなむ　能宣朝臣

○長歌（山しろのみち）
萬十三
つぎねふ　山しろのみちを　人づまの　むまより行に　おの　讀人しらず
つまの　かちよりゆけは

橋

○堀河院御時百首

思ふことはし柱にぞかきつけて昔の人はくらゐましける　　隆源法師

○六百番歌合

いざやさは君にあはずば渡らじと身を浮橋にかきつけてみむ　　法橋顯昭

此の歌判者俊成卿云君にあはずばわたらじといへる彼司馬相如が蜀郡のはしに題して大車駟馬にのらずば又此の橋をすぎじと云ひて後つひに馬騎（武イ）常侍として奉レ使蜀郡に入りけむ事によせたることになかしくこそ侍りけれかの文君にあへりけむ事さへおもひよそへられて募々ふかくみえ侍ると云々

○實方朝臣家集、ことに生かり（かりイ）猶も笠かりけるにわりごのふたにかきつけておくりけるに

橋姫によはの寒さもとふべきをさそはで歸るかり人やたれ　　藤原景政朝臣

○返哥

橋姫も袖かたしかむ程もなし假にとまらぬ人にたぐひて　　實方朝臣

○後鳥羽院宇治殿にて御會有りけるに、秋旅

橋姫のわれをばまたぬさ筵によその旅ねの袖のあさかぜ　　後京極攝政

○家集

ことゝなき君こひわたる橋の上に爭ふものは月の影のみ　　西行上人

此の歌は高野のおくの院のはしのうへにて月のあかかりければもろともにながめあかしてそのころ西住京へいでにけりその月わすれがたくて又同橋の月のころ西住がもとへいひつかはしけると云々

○返哥

思ひやる心はみえて橋の上にあらそひけりな月の影のみ　　西住法師

○六帖題（そりはし）

新六三

池水のすさきに渡すそりはしも傾くまでにふりにけるかな　　衣笠内大臣

○正治二年百首（たにのいははし）

つま木こる我が通ひぢのほかにまた人もとひこぬ谷の岩橋　二條院讃岐

○寶治二年百首、寄レ橋戀（山のたなはし）

いたづらに月日ぞわたる足引の山の棚橋かけてこひつゝ　正三位知家卿

○洞門青山何處高（雲のかけはし）

とひしりて雲のかけ橋こえ行かむいづれの方か山はさかしき　千里

○長永三年九月顯季卿家歌合

天の河雲のかけはしこえゆかむいかでか月のすみ渡るらむ　藤原顯方

此の歌判者基俊云天河に無二雲梯一只有二鵲橋一詩にも烏鵲橋とつくれり

橋と梯と其の儀不レ同河や池にわたすをば橋といふ此の峯より彼の谷にわたすをば梯といふ同じ事のやうなれども義ことなりと云々

○永久四年四首、春曙（いはのかけはし）

いなのめの岩のかけ橋ほのぐと暫し安らへまほならずとも　俊頼朝臣

○弘長四年毎日一首中

嵐山木の葉ふりしく谷かげの岩のかけ橋道たえにけり　民部卿爲家

○橋邊雪を（やそのいははし）

明玉 雪ふればあまの羽衣白たへに風さえわたるやそのいははし　前大納言顯朝卿

○承久二年四季百首、雨（むなしきはし）

軒の雨の空しき橋をうつたへに寢られぬよはの秋は難面き　前中納言定家卿

○家集

こぬ人は契り空しきはしの上にあめやはまちし軒の玉水　正二位忠定卿

○六帖題御歌（うきはし）

かりそめに舟もてあめるうき橋のかけて危きよを渡りつゝ　中務卿のみこ鎌倉

○東へくだりけるにすのまたと云ふ所にて

假のよのうきことみるもはかなしや身をうき舟の浮橋にして　安嘉門院四條

うき橋に竹のより綱うちはへてを舟ならぶるふじの川波　法眼慶融

○名所歌中

隅田川昔はきかずいまこそは身をうき橋のあるよなりけれ　光俊朝臣

此の歌は康元々年鹿島社に詣でけるにすみだ川のわたりをみればかの
わたり今はうきはしをわたしたりければと云々

萬代もつきじとぞ思ふ久方の天の浮橋かけむかぎりは　爲實朝臣
山櫻みねのあらしやわたるらむ細谷川の花のうきはし　北院入道二品のみこ
朽ちにけり人も通はず石のかみふるののさはに渡すまろはし　顯仲朝臣
いそのかみふるのの里のまろき橋くちぬる物は秋なりけり　後鳥羽院御製
千早ふる神もしるらむかけてだにふみみぬ物をふるのかけ橋　讀人しらず
うちわたすさほの河橋中たえてしづえをつたふ岸の青やぎ　光明峯寺入道攝政
たどるだにあやぶまれ行く黄昏に霰たばしるかけのまろはし　如覺法師
あともなき山ぢの櫻ふりはへてとはれぬしるき谷のしば橋　前中納言定家卿
夕まぐれすだく螢に谷川のふしきの橋のしるべなりけり　權大納言實家卿
思ひかねうらとふ橋よまさしかれよの人ごとを頼みわたらむ　家長
慰めてうらとふ橋よまさしかれつれなき中をまちも渡らむ　後九條内大臣
古來歌
おのづから花ゆゑ人も通ひけり山櫻どのみねのかけはし　源仲朝
古來歌
くちのこる野田の入江のひとつ橋心ぼそくも身ぞふりにける　平政村朝臣
一字抄
うれしとやみよながはしの川竹にそよと答へて風渡るなり　俊頼朝臣

○嘉元四年十月當座百首、祝（あまのうきはし）
○百首御歌（花のうきはし）
○堀河院御時、橋（まろはし）
○御集中（まろきばし）
○題不レ知（國中、ふるのかけはし）
○御集（さほのかははし）
○家集、橋上霰（かけのまろはし）
○建仁元年五十首、橋下花（しばばし）
○家集、行路歌（ふしきのはし）
○爲家卿百首（うらとふはし）
○寶治二年百首
○花歌中（みねのかけはし）
○題不レ知（ひとつばし）
○竹契二遐年一と云ふ事を（ながはし）

○(みはし)
玉葉賀 たかみくら雲のみはりをかゝぐとて登るみ橋のかひもあるかな　入道前太政大臣

此の歌は今上御卽位の時大納言三位とばかりあけつゝとめて上階して侍りしよろこび申しつかはすとてと云々

○文永三年毎日一首中(ぬまのふなばし)
水まさる沼の舟橋ともすればうきよわたりに袖ぬらしつゝ　民部卿爲家

○橋冬月を(ゆきあひばし)
明玉 はるゝまはいかばかりかはさえ渡る霜と雪との行きあひの橋　明教法師

○文治六年五社百首(まろきばし)
すゞか山きりのふるきの丸木橋これもや琴のねに通ふらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○弘長四年毎日一首中
哀れなりかけぢに渡すまろき橋あやぶまれてや身は過すらむ　民部卿爲家

○御集御歌
かさゝぎのはに置く霜のまろき橋ふみみぬ先にきえや渡らむ　鎌倉右大臣

○御集、寄橋戀
なにはがた入江に渡すまろき橋ふみそめしとや人は思はむ　法性寺入道關白

○題不レ知
六三 津の國の浪花の浦のひとつばし君を思へばあからめもせず　讀人しらず

○同(うちはし)
萬四 千鳥なくさほの河原のせを早みうちはし渡すなくと思へば　大伴郎女

○同
萬七 せの山にたゞにむかへる妹の山かどゆるすやもうちはし渡す　讀人しらず

○同(いただのはし、尾張)
萬十一をはりなるイ をはただのいただの橋のこぼれなば桁より行かむこふな吾妹子　同

○永安二年閏十二月東山歌合、隔河戀
待つ程にいただの橋も桁くちばわたせなしとて年をへよとや　登蓮法師

此の歌判者清輔朝臣云板田のはしは河のはしといふ事おぼつかなくおもうたまへるに名譽の人のよまれて侍るめればいまぞ疑關の歩をひら

き侍りぬると云々

○家集（いなむやのはし）
信濃路やいなむやいかなるかけ橋ぞ踏みもならさで先づ渡りなむ　相摸

○建長三年九月十三夜十首歌合（いそねのはし、國未ㇾ勘之）
かたしきによやふけぬらむ東路のいそねの橋に月渡るみゆ　正三位知家卿

○堀河院御時百首、橋（いたくらのはし、備中）
板倉の橋をば誰も渡れどもいなおほせ鳥ぞ過ぎがてにする　權大納言公實卿

○題不ㇾ知（はまなのはし）
六三　新勅撰四
戀しくば濱名の橋をいでて見よしたゆく水に影やみゆると　讀人しらず

○家集、はまなのはしにて
松かげのはまなの橋をうちすぎてとのうみ（う）あ（らイ）らき磯浪の聲　前民部卿雅有

○最勝四天王院名所御障子
朝霧にはまなのはしもとだえして雲居をわたる秋の鴈がね　大藏卿有家

○家集
古來歌
おきつしほたかしの浦の夕霞いづらはまなの橋もみゆらむ　權中納言長方卿

○遠江守になりてくだり侍りけるに
萬代
都にてききわたりしにかはらぬは濱名の橋の松のむらだち　大藏卿爲房

○つり
たち宿るたがためならじ東路のはまなの橋にあまぞ釣りする　藤原基政

○後京極歌合、羇中眺望
現存六
浪のうへにへだつる松の梢よりはまなの橋に秋風ぞふく　慈鎭和尚

○建保三年名所百首
うちわたすはまなの橋の入なみにたるゝしほ舟誰をこふらむ　從二位家隆卿

○文應元年七社百首（はしどの）
橋どののまきの板橋いしはしにつゞきてのぼる山ぞかしこき　民部卿爲家

○家集、院北面にて、橋上藤花
うすくこくのどかに匂へしづえまでときはの橋にかゝる藤浪　修理大夫顯季卿

○家集（とつなのはし、陸奥）
東路やとつなの橋もうちはへていくへの雪の下にくつらし　從二位家隆卿

○永久四年九月雲居寺後番歌合、霧（とゞろきのはし、近江）
旅人もたつ河霧におとばかりききわたるかなとどろきの橋　覺盛法師

○同年百首、不レ見レ書戀
○家集、此歌永久四年百首、不レ見レ書戀（とだえのはし）
○橋上月といふ事を上西門院にて人々よみ侍りけるに（とだえの橋陸奥）
○疑ニ行末一戀
○建保三年名所百首（をだえのはし、絶斷、陸奥）
○同
○六百番歌合
○（をがはのはし）
○家集（およみのはし）
○百首御歌
○（をののえのばし）

吾妹子にあふみなりせばさりともと踏みもみてまし轟の橋　源　兼昌

いざや又書きもみられずともすればとだえの橋の後ろめたさに　俊頼朝臣

此の歌は人のもとよりたび／＼申せど返事もなきはいかなることぞふみを御らんぜぬかなと申したりし返事と云々

をちこちの人ぞ通はぬすみわたる月にとだえの橋なかりけり　權大納言實家卿

歌苑抄
いかにしてとだえの橋にならひてか渡らぬ先にかくはあやぶむ　正三位季經卿

しらざりき忘れがたみに陸奥のをだえの橋のうきなばかりは　俊成卿女

思ひのみあづまにしめてひく琴のをだえの橋に道やまどはむ　兵衛内侍

新千載五
琴のねもなげき加はる契りとてをだえの橋に中はたえにき　前中納言定家卿

新續古今五
人心をだえの橋にたちかへりこのはふりしく秋の通ひぢ　同

みちのくのをがはの橋のあゆみ板の君し背かば我もそむかむ　讀人しらず

さよ更けておよみの橋を引きわたす音にぞしるきあだし野の駒　隆源法師

古來歌
假初にみしばかりなるはしたかのおふさの橋の戀ひや渡らむ　衣笠内大臣

潮くむいつきのいもゐ年ふりてやや朽ちにけりをののえの橋　鴨長明

此の歌伊勢記云御禊のはしといふ所有りこれは霜月のにひなめの祭にいつきの宮御しほあみ給ふとてはまへいで給ふゆゑにかくなづけたる

○戀歌中、橋（かやののはし）
○百首歌（かりののはし、常陸）
○建長四年毎日一首中（かさゝぎのはし、周防或土佐）
○康平四年三月祐子内親王家歌合（かさゝぎのはし）
○祇園社百首、千鳥（かものかはし、山城）
○題不レ知（よどのつぎはし、山城或近江）
○家集
○永萬二年五月中經盛朝臣家歌合、五月雨（よどのうきはし）
○家集、たかたまのはし、たかたまのはし、筑前）
○文應元年七社百首（よどのながはし）
○河集（たかののはし、紀伊）
○百首歌（ながらのはし、攝津）
○家集

なりもとはこゝをはなのの江といふはなののえのはしといふをききて
よめると云々

かしまなるかやのの橋のよとともに思ひ亂れて戀ひ渡らむ　衣笠内大臣
月影はすみわたるなりひだちなるかりのの橋の秋のしほ風　法印定圓
天の河くものみをなる五月雨にとだえもしらぬかさゝぎの橋　民部卿爲家
おぼつかな雲居の里をいかにして渡しそめけむかさゝぎの橋　加賀
ひこ星の雲の衣もたなびかぬ天のしたなるかさゝぎのはし　讀人しらず
河千鳥神をやたのむかも河原橋のわたりをなきわたるなり　皇太后宮大夫俊成卿
萬四 まののうらの淀のつぎ橋心にも思ふやいもが夢にしみゆる　吹黄刀自
現存六 たえね唯みるめもしらぬまのの浦に渡すかひなき淀のつぎ橋　隆祐朝臣
五月雨に水のまこもやかくるらし淀のうき橋うきまさりゆく　賀茂政平
島づたひと渡る舟のかぢまよりおつる雫やたかたまの橋　太宰大貳高遠卿
舟よばふ淀のなが橋ひきかへてやすく渡らむわがよともがな　民部卿爲家
これやこの音にたかのの橋ならむきき渡りしにたがはざりけり　法性寺入道關白
舊りにけるゆききの便りいつよりかながらの橋に舟よばふらむ　信實朝臣
古來歌 我のみぞながらの橋を渡りける共にふりぬる身とやなりぬる　貫之

○家集、ながらのはしをみて
ありけると橋はみれどもかひぞなき舟ながらにて渡ると思へば　和泉式部

○文治六年五社百首
跡だにもながらの橋の渡りには枯葉のあしぞかたみなりける　皇太后宮大夫俊成卿

○雪歌中
雪をれにのこるながらの橋柱あしのはならぬ跡はありけり　信實朝臣

○橋を
六帖 あはれとは思ひながらの橋をなみ通ひがたきは住吉の里　讀人しらず

○家集
雲葉 人しれずこひ渡るまに朽ちにけりながらの橋を又やつくらむ　前大納言隆房卿

○こしぢのかたなる人に（なごのつぎはし、越中八雲には越後）
いそぎしも越路のなこのつぎ橋もあやなく我や歎きわたらむ　和泉式部

○天喜元年八月頭家朝臣家歌合、越中國名所名子續橋
いとゞしく戀ぢに迷ふ我が身かななごのつぎ橋とだえのみして　讀人しらず

○貫之が土佐日記を繪にかけるにうたゝねのはしを旅人行く（うたたねのはし、大和）
橋の名を猶うたゝねときく人のきくは夢路かうつゝながらに　惠慶法師

○永久四年七月忠隆家歌合、戀
君こふる涙の川のたえせねは歎きぞわたるうたゝねの橋　琳賢法師

○百首歌、橋（うぢばし、山城）
吉野山思ひいるべき通ひぢもよをうぢはしをまづや渡らむ　従二位家隆卿

○欵冬藏レ橋（ゐでのいははし）
一字抄 通ひこしゐでのいは橋たどるまでところもさらずさける山吹　修理大夫顯季卿

○建長五年毎日一首中（のちのうきはし）
水まさるのちのうきはし浪こえて雨のひかずに人も通はず　民部卿爲家

○大江のはしのかたかける所を（おほえのはし、大江、山城或攝津）
はるかなる大江のはしはつくりけむ人の心ぞ見えわたりける　俊頼朝臣

○六帖題やしろ（わたのべのはし）
わたのべや橋のうはてを始めにておほかるきち（くイ）のつま社かな　權僧正公朝

○文治六年五社百首（おほえのはし）
哀れなりながらはあともくちにしを大江の橋のたえせざるらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○家集
ふままうきもみぢの錦ちりしきて人も通はぬおもはくの橋　西行上人

此の歌はしのぶの里よりおく〳〵へ一日二日ばかり入りてふりたる橋あり
人にとへばおもはくのはしと云ふもみぢありと云々

○家集、としへて物いはむとたのめたる女につかはす（くめのつぎはし、大和）
六三 葛城やくめのつぎ橋つぎ〳〵にわたしもはてじかづらきの神　清正

○返事
葛城やくめのつぎ橋ならなくに渡しはやまじくめのかけぢに　讀人しらず

○題不レ知
六三 神樂歌 葛城やわたすくめぢのつぎ橋の心もしらずいざ歸りなむ　同

○閑居入道攝政家百首、橋に落葉（くめのいははし、大和）
ちりつもる紅葉の錦わたらでもなかばたえけるくめの岩橋　民部卿爲家

○家集、雜歌中
さりともと祈りし中のたえしよりあふこと難きくめのいは橋　從二位家隆卿

○御集
雲葉 とにかくにこけの亂れて思へどもたえて年ふるくめの岩はし　後嵯峨院御製

○題不レ知（くらはしかはのつじのはし、大和）
萬七 はしだての倉橋河に石の橋はも渡りにしわが渡したる石の橋かも　人丸

○[illegible]攝家參河國名所歌合、八橋
あふち河こえにしかども八はしを猶よと共にこひ渡るかな　寂念法師

○同
三河なるこひぢに渡す八橋はひとりぶしするまろきなりけり　意尊法師

○秋御歌中
八はしのあたりの里の秋風にきつゝなれにし衣うつなり　中務卿のみこ

○建仁二年五十首、橋下花
風わたる花をみかはの八橋のくもでにかゝるたきの白絲　慈鎭和尚

○海道宿次百首、やつはし
ふりにける名をのみかけて八橋のあとは水行く河だにもなし　參議爲相卿

○家集
音にきくやすのかけ橋かけてのみなげきぞ渡る心ひとつに　相摸

○題不レ知（國中、やますげのはし、下野）
おいのよに年を渡りてこぼれなばねづよかりける山すげの橋　讀人しらず

逢ふ事のとだえがちにもなり行かば文だに通へまののつぎ橋　二條太皇太后宮肥後

かつしかや川ぞひうつぎ咲きぬらし浪より傳ふままのつぎは　鴨長明

今更に戀ぢにまどふ身をもちてなにはたかけむままのつぎ橋　大納言師頼卿

かち人の渡ればゆるぐかつしかのままのつぎ橋朽ちやしぬらむ　鎌倉右大臣

萬十四　あの音せずゆかむ駒もが葛飾のままの續橋やまず通はむ　讀人しらず

萬十一　石の上ふるのたか橋たかだかに妹が待つらむよぞ更けにける　同

五月雨に水こえにけりさはだ河くにのみや人わたすたか橋　三條院入道左大臣

さはだ河袖つくばかりあさけれどくにの宮人たかはし渡す　讀人しらず

一字抄　舟くゝるこつのしば橋かち人の行き來あやふきよを渡るかな　安嘉門院四條

くれて行く春やこれよりすぎつらむ花ちりつもる青柳の橋　堀川右大臣

ことづてむ人の心もあやふきにふみだにもみぬあさむつの橋　前中納言定家卿

あさみつの橋は忍びて渡れどもところ〴〵になるぞわびしき　讀人しらず

催馬樂　あさみつのはしのとゞろ〳〵とふりし雨のふりにしわれをたれそこのなか人たてて　同

みし人も袖やぬるらむ五月雨になさへ忘るゝあさ水の橋　光俊朝臣

日をへつゝ積れる雪にかくろへぬ名のみなりけりあさふりの橋　大炊御門左大臣

○永久四年百首（まののつぎはし、攝津）
○家集（ままのつぎはし、下總又近江北總）
○堀河院御時百首
○屏風繪にかち人のはしわたり其（たるイ）の所
○題しらず
○（ふるのたかはし、大和）
○喜多院入道二品親王家五十首
○題しらず（催馬樂）
○春日社奉納百首、橋
○御集、落花埋橋
○文治三年百首、忍戀（あさむつのはしみつとも三兩本、淺水大和又山城或飛驒）
○題不レ知（懷中）
○文永二年白河殿七百首
○久安百首（あさふりのはし、國未勘之）

朽ちぬらむあねはの橋も朝な〳〵うら風ふきて寒きはまべに　能因法師

萬十四
かみつけのさのの舟橋取り放しおやはさくれどわはさかるかへ　人

山もとやさのの舟ばしなか〳〵に樂しきことをきき渡るかな　前中納言匡房卿

五月雨にさ野の舟ばしうきぬればのりてぞ人はさし渡るらむ　西行上人

あづまぢのさののふな橋白浪のうつゝぞ通ふ花のちるころ　後京極攝政

東路にかけてはすぎじなか川のとだえもつらきさ野の舟橋　兵衛内侍

もらさばや浪のよそにもみわがさきさ野の舟橋かけし思ひを　正三位忠定卿

煙たつ里のしるべをめにかけてまだ程遠しさ野の舟ばし　民部卿爲家

戀ひわたる都をかけて忍べども程はるかなるさのの舟橋　同

此の歌は建長五年あづまへくだりけるにあしがらのふもとにさのといふ所にてよめる歌每日一首中

賴もしき名にもあるかな道行かばまづさいはひの橋を渡らむ　太宰大貳高遠卿

くまのなる音なし河にわたさばやさゝやきの橋忍び〳〵に　讀人しらず

信濃路や谷のこずゑをくもでにてちらぬ花ふむきそのかけ橋　後鳥羽院宮內卿

その原やふせやにとつくかけ橋もたが爲にかは我は渡しし　重之

思ひかねそのこのもとにゆふかけて祈りぞ渡るみつかはの橋　慈鎭和尙

○みちのくにてあねはのはしを(あねはのはし、陸奥)
○題不レ知(さのゝふなばし、近江又上野)
○大嘗會悠紀方屏風風俗歌(近江國)
○家集、五月雨歌中
○名所五十首、橋下花
○建保三年名所百首
○同
○寛喜三年百首
○家集、つくしへまかりけるにさいはひのはしを(筑前)
○題不レ知(懷中、さゝやきのはし、越後)
○建仁二年五十首歌、橋下花(きそのかけはし、信濃)
○百首歌、戀
○六百番歌合、祈戀(みつかはのはし、近江)

くれゆけばこの下くらき岩橋のみたらし河にとぶ螢かな　　從二位賴氏卿

月のすむみたらし川の橋の霜たましけるともみえわたるかな　　皇太后宮大夫俊成卿

五月雨はみなそこのはし名におひて浪こそわたれ人は通はず　　同

河上にとはばこたへよみなそこの橋の上にや渡るせはありと　　讀人しらず

うかりけるみかのの橋の朽ちもせで思はぬ道によをわたるらむ　中務卿のみこ

此の御歌は都にかへりのぼちせ給うけるにとほつあふみにみかのとい
ふ橋をわたらせ給ふとてよみ給ひけると云々

日暮るれば岡の屋にこそふしみなみ(れイ)あけて渡らむひつ河の橋　　讀人しらず

いづくにも歸るさまのみ渡ればや戻り橋とは人のいふらむ　　和泉式部

雲葉
行く月の鏡の山やふけぬらむおとすみわたるせたのなが橋　　能因法師

古來歌
あさぼらけ空にみかさの山みえて霧立ち渡るせたのながはし　　權大納言長雅卿

河霧をけさふく風やはらふらむあらはれわたるせたの長橋　　左近中將公衡卿

あはづ野のあはですぐるはせたの橋こひて渡れと思ふなるべし　兼盛

此の歌はするがのかみに成りて下りけるにあはづといふ所にやどりた
るに惠慶法師とひて侍る返事と云々

○寶治二年百首、水邊螢（みたらしがはのはし）
○文治六年五社百首、賀茂
○後法性寺入道關白家、五月雨（みなそこのはし）
○みなそこのはしを（懷中）
○裥集（みかののはし、遠江）
○題不レ知（懷中、ひつかはのはし、山城）
○家集、やましろのもどりばしを（遠江）
○山月を（せたのはし、近江）
○百首歌
○同
○家集

關

いにしへの人の心のゐしせきはいづれの世より跡たえにけむ　後鳥羽院御製
よの中は關とに防ぐ逆茂木のもがれはてぬる身にこそありけれ　皇太后宮大夫俊成卿
遠つみち急ぎていでしせきぢにはやこゑの鳥を人ぞもるべし（とイ）　仲實朝臣
うき人の心にすゑてたゆまねばふみだにみせず關のみち守　前大納言顯朝卿
此の歌判者光俊朝臣云なべては關のせき守など申し侍るを跡守とふるきにかへるすがたなかしかるべしと云々
古のいはれのみよの關といひて七つの道にみちみすゑけむ（てイ）　權少僧都玄覺
よをかさね心の關のかたきかなわかれはとりの空ねならねば　大藏卿有家
都思ふ心のせきはきよみがた浪間につたふ岩のほそ道　寂蓮法師
新六二 いさぎよき心の底の關の戸は手にまかせつゝあけぬ日ぞなき　光俊朝臣
久方の空にもかへる秋ならばあまの關守せきもとゞめよ　左近中將具氏卿
雲居なるうみ山こえて行く秋をえやはいはとの關もとゞむる　從二位家隆卿
あまつ空いはとの關のあけ方に風の吹きしくさをしかの聲　後鳥羽院御製
うれしさの涙も更にとゞまらず長きうき世の關をいづとて　前中納言定家卿

○三十四御歌（首イ）
○述懷百首、關
○堀河院御時百首
○建長八年百首歌合
○建長七年顯朝卿家歌
○六百番歌合（こゝろのせき、肥前名所云々）
○後京極攝政家、淸見關
○六帖題
○建長八年百首歌合（あまのせき）
○建保三年内大臣家の百首、暮秋（いはとのせき）
○御集、關路曉鹿
○十題百首十地歡喜地（うきよのせき）

○正嘉三年毎日一首中

いつまでかつらき迷ひをほだしにて憂世の關をいでがてにせむ　民部卿爲家

○結緣經百首

思へども心はいでて身はいでぬ家ぞうき世の關やなるらむ　同

○建保三年内大臣家百首、寄レ關述懷

たらちねの親の守りも別れにしうき世の關もいでがての身や　從二位家隆卿

○嘉保二年三月内裏歌合、三月盡（ませき）藤イ

武士のたつといふなるませきにもとまらで春の今宵過ぎぬる　仲實朝臣

○六帖題（いもがせき、國未レ勘之）

新六五
これやこの道さまたげのいもが關思ひいでずばたゞぞ過ぎまし　信實朝臣

○家集（いはてのせき、陸奥）

人ぬもるいはての關はかたけれど戀しきことはとまらざりけり　俊頼朝臣

○家集、戀の心を

人しれず袖のうらにはなみかけていはての關に日數へにけり　如覺法師

○六帖題

みちのくにありてや關のいはで思ふ心の奥は誰かしるべき　中務卿のみこ

○永久四年百首、隔二遠路一戀（いなむやのせき、出羽）

すぐせ山猶いなむやの關をしもへだてて人にねをなかすらむ　俊頼朝臣

○嘉應二年十月法性寺殿に歌合、關路紅葉（はゞかりの關、陸奥）藤イ　住イ

こえやらでふままくをしくみゆるかな紅葉の色にはゞかりの關　按察使公通

（越中國任の時僧三首詠歌（となみのせき、越中）

萬十八
やきたちをとなみの關にあすよりはもり（ひとイ）べやりそへ（てイ）君を留めむ　中納言家持卿

○六帖題

新六二
何處にか我が宿りせむやきたちのとなみの關にこえぞ暮れぬる　衣笠内大臣

○寶治二年百首

あけ渡るとなみの關のまさしくはかつ別れ行く關をとどめよ　前中納言定嗣卿

○堀河院御時百首

いもが家にくもの振舞しるからむとなみの關をけふこえくれば　修理大夫顯季卿

○題不レ知（小山田せき、武藏）

六二一
あふことを苗代水にまかせてぞこさむこさじは小山田の關　讀人しらず

○六百番歌合、關戀

六二一
あふことは苗代水をひきとめてとほしはてぬや小山田の關　法橋顯昭

○家集、關路歸雁（おさへの關、[illegible]）
○題不レ知（懐中）
○光明峯寺入道攝政家百首、關霞
○嘉元元年式部卿親王家千首歌、野霞
○家集（かるかやのせき、國未勘之）
○建暦二年五月經成卿家歌合、五月雨（かはあひのせき）
○題（河口の關）
○堀河院御時百首
○寶治二年百首、關霧（たかしのせき）
○亭子院御時歌合（なこその關、陸奥）
○寶治二年百首
○久安百首、長歌（ながとの關、長門）
○題不レ知（むやむやのせき）
○久安五年七月山路歌合、雪

雲路にもおさへの關のあらませばやすくは鴈の歸らざらまし　源仲正
まれにきて戀もつきぬと急ぎ行く人をおさへの關もすゑなむ　讀人しらず
東にはかすみを關の名にたてて春くることを人につぐらむ　慈鎭和尙
わけそむる關路の名のみ霞にてすゑはきりなる武藏野の秋　藤原爲守
いつよりか心にそへてみちもなく思ひみだれむかるかやの關　光俊朝臣
五月雨はかはあひの關や水こえて淸くやすまむかみゐ心も　高松院右衞門佐
六二一
河口の關のあらがきいかなれば夜の通ひ路ゆるさざるらむ　讀人しらず
もろ人もまだ絕えなくに河口の關のくぎぬきはや朽ちにけり　隆源法師
關といふなこそたかしのうら人は霧をわけても行き通ひつゝ　正三位知家卿
なしめども𛀙ゑりもあらず行く春を名こその山の關もとめなむ　貫之
夢路にもなこその關やつゞくらむわが身に通ふ面影ぞなき　後九條內大臣
身のはても　ゆかしかりけり　いまはたゞ　いのちながとの
せきすゑて　過ぎ行く年を　とゞめてしかな　待賢門院安藝
歌林良材
東路のとやとやとほりの曙にほとゝぎすなくむやむやの關　讀人しらず
同　袖中抄
武士のいづさ入るさに栞するとやとやとほりのむやむやの關　同
ふる雪に賤のしをりも埋もれてたつきもしらぬむやむやの關　太宰大貳重家卿

○名所歌中、三月盡を
我をしむ心もつきぬ行く春をこさでもとめよ鶯のせき　康資王母

○永久四年百首（ふはきの關、美濃）（ふはイ）
東路のふはの關なるすゞ蟲をむまやにふると思ひけるかな　仲實朝臣

○殿下御會、關鶯
ふはの關あしみを駒にをしへ行く聲ばかりこそ霞まざりけれ　俊頼朝臣

○嘉應二年十月法性寺殿歌合、關路落葉
みるまゝにとまらぬ人ぞなかりけるちる紅葉ばやふはの關守　盛（成イ）方朝臣

○法性寺入道前關白家百首
萬代　ふはの關あさこえ行けばかすみたつのがみのかたに鶯ぞなく　隆信朝臣

○みののくにへ下りけるとき女につかはしける
明玉　暫しともなどかとゞめぬふは（ばイ）の關いなりの山のいなばいねとや　津守國冬（基イ）

○嘉應二年十月法住寺殿歌合、關路落葉
ちりかゝる紅葉の錦うはきにて衣のせきをすぐる旅人　土御門內大臣

○衣川のせきのをさのおいけるを見て
昔みし關守みればおいにけり年のゆくをばえやはとゞめぬ　貫之

○家集
紅葉ちる衣の關をきてみればたゞかたつまをそむるなりけり　近衞院因幡光信女

○寶治二年百首、關霧（ころもでのせき、陸奧）
たれかまた重ねてもきむ秋ぎりのたてにも寒き衣手の關　辨內侍

○關
六二　あさこまのこじまの關のかためてし妹が心はうたがひもなし　讀人しらず

六一　八雲立ついづもの國のてまの關てまとなづけそよくまじければ　同

○百首歌、關路雲
君が代に雲吹きはらへあまつ風こえてかへらむてまの關山　從二位家隆卿

○堀河院御時百首
さりともと思ひしかども八雲たつてまの關にも秋はとまらず　大納言師頼卿

○（あふさかの關）
逢坂の關守いでてみようまやづたひのすゝきこゆなり　前中納言匡房卿

○家集
みつぎものはこふ（ほイ）よをろしおほかれば道もさりあへず逢坂の關　左京大夫顯輔卿

○千五百番歌合

草のいほはたづねしあともふりはてて嵐ぞ寒き逢坂の關　具親朝臣

○百首御歌

逢坂の關のわらやはあともなし秋のしらべを松に殘して　土御門院御製

○嘉元々年百首、關

忘れずよ夕の雨にせきこえてかねききとめしあふ坂の山　參議爲相卿

○建保三年名所百首

旅衣いつより露をかさぬらむまたみやこなる逢さかの關　從二位行能卿

○嘉祿二年十月法性寺殿歌合、關路落葉

逢坂の關の岩かどたゝきあげて木の葉もてくる風のつかひか　前大納言隆季卿

此の歌判者俊成卿云左は歌のふるまひこゝろばへをかしくみゆるを歌合の歌にとりてはいかゞとやうに申し侍りしをせきのいはかどとは亘遁法師のひが事いひたりけることばかりなど申す人侍りきしかれどもかのせきのいはかどふみならし山立ち出づるきりはらのこまといふ歌をいはの廉といへるぞいはの門とよみたるといふあらそひのあるにこそあれ詩にも關門といひ巖門といふ事はつねの事なればあふさかのせきに關のいはかどとよみたらむいまゝゝもさらにとがあらじと思うたまへてそのことにおきてはさやかに申し侍りしなりと云々

○千五百番歌合

杉の葉のかすむにしるし逢坂や關のいはとの春のあけぼの　西園寺入道前太政大臣

此の歌判者忠良卿云左の せきのいはとのはるの曙すがたはをかしくきこゆるを山立ちいづるきりはらのこまといふ歌をおもへるにやそれは

石門にはあらずいはのかどなりとも申すにや又石門なるにてもいは戸といはむ事いかゞ侍るべからむ門と戸とはことなる物にこそ侍るめれ初五文字いたくたしかにや侍らむと云々

〇家集、關路雪（あしがらのせき相模）

せきの戸も松のしたをれあとたえて雪にゆるさぬ足柄の山　民部卿爲家

〇貞應三年百首、關夕嵐

あらしふくあしがら山の關守に夕こえくれて宿る旅人　同

〇家集（あひづのせき、國不分明）

くる毎にあひづの關も我といへばかたた（くイ）なしくも濡るゝ袖かな　俊頼朝臣

〇萬、關戀（あかまのせき）

君こふとおさふる袖はあかまにて海にしられぬ浪ぞ立ちける　同

〇人々詩をつくり歌よみける切字にて關を

なのりしてよ深くすぎぬ郭公われをゆるさぬあさくらの關　後一條入道攝政

〇寶治二年百首、寄關戀（あふちのせき）

しなのぢや通ふ心はありながらさもぞあふちの關は寂しき　正三位知家卿

〇題不レ知

萬四 我がせこが跡ふみもとめおひゆかばきの關守やとゞめてむかも　笠金村

〇同、此歌詞在之

よこばしり清見が關の通ひぢをいへてふことはながく留めよ　平兼盛

〇堀河院御時百首

足柄の山のもみぢばちるなべにきよみが關に秋風ぞふく　大納言師頼卿

〇嘉應二年十月法住寺殿歌合、關路落葉

浪の上に紅葉こきおろすきよみがた山の高根に嵐ふくらし　清輔朝臣

山おろしに紅葉し散ればきよみがた錦をかくるなみの關守　□（修イ）範朝臣

〇建保三年名所百首

清みがたかねのこゑだに渚うつ浪のせきとにあくる月影　從二位家隆卿

〇冬歌中

山は雪磯べはしほに道たえぬいかできよみが關をすぎまし　正二位能清卿

○永仁三年爲相卿家三首歌合、海邊暮秋
月のみやきよみが關の秋のなごり山はこのはの色もとむらむ　藤原爲顯

○名所歌中
淸見がた關のとやまの秋霧にあくるまくらき松のむらだち　爲相卿

きよみ潟せき吹きのぼるしほ風に浪のこゑきく峯の松ばら　同

○同
淸みがた磯山もとの浪のうへに關もとゞめずかよふ松風　爲實朝臣

○（みづきのせき、肥前）
いはがきのみづきの關にむれむかふうちの心もしらぬ諸人　太宰大貳高遠卿

此の歌はつくしへまかりけるに府に入日みづきのせきに小貳府官などむかへにあつまりきたりけるによめると云々

○寶治二年百首、關霧
夕霧やたちへだつらむいはがきのみづきの關に舟も通はず　光俊朝臣

○不題ㇾ知（關中、みるめのせき、攝津）
あふことは猶かた絲のわればかりみるめの關に許しやはせむ　讀人しらず

○（みかほのせき、下野）
萬代　新千載
石ふまぬあそのかはらに行き暮れてみかほの關にけふや留らむ　蓮生法師

○家集、關路雪（しらかはのせき陸奥）
みどりなる松のこずゑも雪とぢておのが名しるき白河の關　民部卿爲家

○建保三年名所百首
そめあへず木の葉やおつる秋の霜けさ白河の關のあらしに　正二位忠定卿

○建仁二年五十首、關路花
すぎかはる月日は花にしらせけり秋風ふきし白かはの關　俊成卿女

○最勝四天王院名所御障子
そこともなく山路は雪に埋もれて名をたのみこし白河のせき　同

○同
白河のせきの秋とはききしかど初雪わくる山のべの道　後久我太政大臣

○名所歌合、白川關
扶桑
浪かゝるすゑの松ともみゆるかな雪ふりそむる白河の關　藤原忠隆

思ふには契りもなにかあさもよいきの河上のしらとりの關　鴨長明

追風にいたてに走れ筑紫舟しきなみの關せきとゞむとも　權僧正永緣

あなわびし人目の關をこえわびて道を忘るゝ時のまぞなき　藤原仲文

文字の關おつる淚のたまづさをかきあへぬまで都をぞ思ふ　衣笠內大臣

まれにだに逢ふことかたき道なりと一ふでみせよもじの關守　藻壁門院小宰相

忘るなよ霧のまよひに一よねて關こぎいづるすまのとも舟　後京極攝政

すまの浦や岩うつ浪の聲はして人をとゞむる關はなかりき　土御門院御製

關の戶はすまのせきこそあはれなれとほきせきには白河の關　皇太后宮大夫俊成卿

のこるくまは關屋にたてる松ばかりさらでは月のすまの浦風　參議爲相卿

すゞかなる關の山の端たかけれどこえてすぎ行く秋のよの月　祭主イ登王輔親

こはぎ原花にぞ秋はとまりける關やは風のもる名のみして　鴨長明

此の歌家集云伊勢へくだりけるにすゞか山こえはててせきやをみれば人もゐずあれにけりみやこのかたにはちりはてにし萩のところ〴〵のこりたるをみてよめると云々

夫木和抄卷第二十一終

○家集（白鳥關）
○堀河院御時百首（しきなみのせき、國未勘之）
○左京の君につかはしける（人めのせき、國不分明）
○建長八年百首歌合
○寶治二年百首
○仙洞影供歌、關路曉霧
○百首御歌
○祇園百首、關
○當座千首歌、月
○月のあかきにすゞかの山をすぐとてよめる

夫木和歌抄　卷第二十二

雜部四

題　　野　原　林　杜　牧　田
　　　畠　園　畑　巖　石　細砂

野

玉葉春上
松の雪きえぬやいづこ春の色に都の野べはかすみゆくころ　前中納言定家卿

若葉つむみやこの野べにうちむれて花かとぞみる峯の白雲　同

新六二
みわたせばのすぢまじりの道のべにたえだえ遠き草の原かな　信實朝臣

里人のおほぬさこぬさ立ちなめてうまはた結ぶのべになりぬる　西行上人

野べは皆さが野とりべ野いまは里遠き野べこそ野は殘りけれ　皇太后宮大夫俊成卿

かぎりとてのべの遙けくみえゆけばたつ白雲も深くぞありける　千里

萬七
言いたくは（こちたくは萬）まてと思ふを（かもかくせんを萬）岩代の野邊の下草われしかりてば　讀人しらず

いはしろの野中の清水結べどもこひをばけたぬ物にぞありける　源經兼朝臣

○建保二年内裏詩歌合、野外霞
○喜多院入道二品親王家五十首
○六帖題
○家集
○祇園社百首、野
○野路白雲浮
○題不レ知（いはしろの野、磐代、紀伊）
○元永元年六月八條入道太政大臣家歌合、夏戀

○寄雲（いはくらのをの、石瀬、山城又大和）
○柿本影供百首、夏御歌
○冬御歌中
○正治二年百首（いはたのをの、石田、山城風土記、尾張）
○家集（いくたのをの、生田、攝津）
○永久二年太神宮禰宜歌合、薄（いはてのの、陸奥）
○堀河院御時百首
○鷹狩を（いはせの、石瀬、越中）
○長歌
○永久二年七月（六イ）内大臣家歌合、草花
○百首歌中（いはれの、大和）
○長歌（いなみの、稲見、播磨）
○題不知
○夏歌中（三兩本）

萬七
いはくらのを野の秋つに立ち渡り雲にしもあれや時をしまたむ　讀人しらず
時ならでしかはなかねどいはくらのをのの秋つと月ぞみえける　後九條内大臣
古來歌
いはくらのをのに立ちいでて見渡せば秋つのかたは猶時雨けり　第三のみこ惟
あはれとも人は岩田のおのれのみ秋の紅葉を涙にぞみる　前中納言定家卿
わけもせず尋ねもいらじ今宵なぞ生田のを野のこがらしの聲　同
たれをともいはての野邊の花薄まねきにまねく秋の夕暮　讀人しらず
ともかくも人にいはての野べにきてちぐさの花を獨りみるかな　隆源法師
現存六
しひてこそ猶かり行かめいはせ野の萩のかりふ（れカ）は雪深くとも　洞院攝政
萬十九
秋さけば　はや咲き匂ふ　岩瀬野に　むまたぎゆきて　をち　中納言家持卿
こちに　鳥ふみたてて　しらぬりの　こすゞもゆらに
山の影ゐでのにさけるをみなへし色ゆゑ人につまれぬるかな　權中納言師俊卿
なげかじよよしやいかにも磐余野の淺ぢ刈萱露みたるとも　安嘉門院四條
萬六
わが大ぎみの　かみのまに　たかくしらるゝ　いなみ野の　赤人
おほうみのはらの　あらたへの
萬二
いなみ野のあから柏は時あれど君をあが思ふ時はさねなし　讀人しらず
いなみのにむら〳〵みえし柏木の葉廣になれる夏はきにけり　重之

としへても思ひいづやといなみ野のふるき淸水に昔をぞとふ　後久我太政大臣
いなみのの花のはご（えイ）とにうつりゆくながめの末はおきつ白波　鴨長明
あかし潟うらちのなみをへだてても又袖ぬらすいなみ野の露　民部卿爲家
さをしかのいるののの薄ほの〴〵とあけぬるか夜の峯のうす霧　具親朝臣
をしめどもあきはいく野の花薄まねかばかへれくずのうら風　待賢門院安藝
いづくまでけふはいくのの道ならむえぞしらすげの草枕かな　正三位季經卿
秋萩にまじる花野の花すゝきまねく袂ぞにしきなりける　前大納言顯朝卿
露すがる花野の薄おのれのみくさの袂の秋やしるらむ　民部卿爲家
萬代
春くさのほさかのを野のはなれ駒あきは都へひかむとすらむ　權中納言師俊卿
ともづるや澤邊のあしをあさるらむ遠里小野の雪のむらぎえ　喜多院入道二品のみこ
一字抄
ゆく末は遠路のをのに月はみむ出づるもいるも山のはもなし　從二位範定卿
みれどあかぬとほりのを野の萩が花袖に移れる香さへなつかし　修理大夫顯輔卿
六帖一　萬十
あま小船とませのをのにふる雪のけながく戀し君がおとする　讀人しらず
沖つ浪たかくみゆるやあまを舟とませのをのにつもる白雪　光俊朝臣
鶯のとぶひの野べの雪の中にそれかとばかり匂ふ梅がえ　後鳥羽院御製
立ちかへり又もきてみむはし鷹のとやのをいづる秋のよの月　從二位家隆卿

〇最勝四天王院名所御障子
〇家集
〇建長四年毎日一首中
〇建永元年和歌所三首歌合、朝草花
〇久安百首（いくの、丹波）
〇正治二年百首
〇建長八年百首歌合（はなの花、野歟近江）
〇貞應二年六月名所百首
〇春駒を（ほさかのをの、甲斐）
〇家五十首、既望（とほざとをの遠里小、攝津）
〇建保三年内裏歌合（とをちのをの、十市、近江）
〇家集、野花薫ㇾ袖（とをりのをの未勘）
〇題不ㇾ知（とませのをの、泊瀨、大和）
〇建長八年百首歌合
〇百首御歌（とぶひの、大和）
〇光明峯寺入道攝政家、野徑月（とやの、等夜、國未勘之）

○千五百番歌合(をの、小、山城)
夢なれや小野の菅原かりそめに露わけし袖は今もしをれて　前中納言定家卿

○三百六十首中
宮木き(こイ)るをののかはら(しのはらイ)をみ渡せばめもはる〲とあさ緑なり　好忠

○題不レ知
みやきひくを野の篠原忍ぶれどあまれば人の戀しかるらむ　讀人しらず

○海道宿次百首、をの
水うみも都の山も見えそめて坂こえくだるをののふる道　參議爲相卿

○寶治十首歌合、野外雪
あさぢ原かれふのを野の草のうへにまじる色なくつもる白雪　民部卿爲家

○題しらず(わさみの、美濃)
萬十一
吾妹子がかさのかりてのわさみ野に我はいりぬと妹につげこせ　讀人しらず

○最勝四天王院名所御障子(かたの、河内)
宿かさむ人もかた野の笹の葉にみ山もさやにあられふるよを　後鳥羽院御製

○同
立ちかへりなぎさの宿やかり衣交野のあらし袖おもるなり　從二位家隆卿

○建保三年名所百首
あきの色を交野の暮にみ渡せばいこまのたけは時雨してけり　正三位忠定卿

みかりするかた野のま柴風さえて薄雪白し道のさゝはら　正三位知家卿

○貞應二年常座百首、野徑初雪
かりくらすかたののみののかへるさに初雪白しみちの楢柴　民部卿爲家

○寶治十首歌合、野外雪
みなせ山近きみ狩のおもかげや交野の雪に猶のこるらむ　土御門院小宰相

○永久四年百首、雉
みかりする交野のみのをけさゆけば一つ松ねに雉子なくなり　仲實朝臣

○建保元年影供百首
夕立のすぐるかたのの松風にあかでくれぬる村雲の空　信實朝臣

○伊勢國歌(かはぐちのの、伊勢)
萬六
河口の野べにいほりてよのふれば妹が袂のおもほゆるかも　中納言家持卿

○家集、留信失戀(かくれのをの)
なか〲にかくれのを野の女郎花露のかたみを何に置きけむ　清輔朝臣

萬十七・大御船さほひてさすを高島のみをのかぢ野のなきをしぞ思ふ　讀人しらず

萬三　新勅撰　いづくにかわが宿りせむ高島のかち野の原にこのひくらしつ　高市連黑人

夏深きかやののをののかやむしろ短きよはのふしのまもうし　民部卿爲家

萬十二　みかりする狩場のを野のなら柴のなれは増らで戀こそまされ　人丸

若菜つむ袖こそかすめとほつ人かりぢのを野の雪はけぬらし　法印實伊

尋ねても其の世とはばやかまふ野の鶴は昔のあとにすむらむ　參議爲相卿

若菜つむをちかた人もあさな／＼つゞくかさ野の雪掃ふなり　後九條内大臣

かづらきや夏は裾野の草しげみ雨におく露をたれかわくらむ　慈鎭和尙

すぎ來つる里もはるかになく鳥のかけろのを野の東雲の空　正三位知家卿

新六六　みよし野のかけろのをのにはふ葛の下に恨みはしる人もなし　衣笠内大臣

新六六　しられじな霞にこめてかげろふのを野の若草下にもゆとも　民部卿爲家

萬十一　みよし野のかたちのをのに刈萱の思ひ亂てぬるよしぞ多き　讀人しらず

みれどあかぬ形のを野の女郎花己れはとまれ秋はすぐとも　同

六帖　旅人に宿かすが野のゆづるはの紅葉せむよや君を忘れむ　同

六帖　萬七　春日野に犬よびこして鳥狩する君青山の葉茂き山べに馬休め君　同

萬十六　夕立の雨打ちふれば春日野の尾花がうへの白露おもほゆ　小鯛王

○題不レ知(かちの、近江)
○久德元年(文應)毎日一首中(かやの)
○題不レ知(かりはのをの、狩場、國未勘之)
○建長八年百首歌合(かりぢのをの、狩路、國未勘之)
○海道宿次百首(かまふの、蒲生、近江イ)
○柿本影供百首續歌(かさの)
○百首歌(かづらきのすその、大和)
○寳治二年百首、曉鷄(かけろのをの)
○六帖題
○(かけろふのをの、蜻、大和)
○題不レ知(かたちのをの、形、大和)
○永久二年太神宮禰宜歌合、女郎花
○ゆつ(ろイ)は(かすがの、大和)
○題不レ知

かすがのや咲きちる梅も白妙に雪ふりやまず若菜つむ袖　参議雅經卿

はるの日の長閑になれば春日野のこのくれ稀にのこる白雪　民部卿爲家

いかにせむ道なしとても春日野の萱が下折れよにもこたへよ　同

たぐひなきなき名は悲しかすがにも紫おふる野べはありけり　權僧正公朝

萬四 春日野に朝ゐる雲のしく〳〵に我はこひますつきにひごとに（にけに萬）　讀人しらず

萬十二 朝日さす春日のをのに置く露のけぬべきわが身惜しけくもなし　同

春日野の松しかれずばみたらしの水の流れてたえじとぞ思ふ　同

菫さくよこ野のつばなおひぬれば思ひ〳〵に人通ふめり　西行上人

春秋もしられざりけり榊葉の色もかはらでしげるよどのは　武藏

秋霧のよつまが野べの女郎花わがみにくれば立ちかくすらむ　實淸朝臣

露深きたこの入野の草まくらぬるともこよひ又や結ばむ　光俊朝臣

萬十四 あがこひはまさるも悲し草枕たこのいり野のおくも悲しも　讀人しらず

萬十二 たがは野にたちしなひたるみわ小菅誰故にかはわび戀ひざらむ　同

雲さそふ峯の木枯吹きなびきたまだ横野にあられすぐなり　從二位家隆イ

露しげきたま野の原の萩ざかり風ものどかにみつる秋かな　俊成卿

ふる雨を涙と見てやおいらくのたもとの小野に秋は來ぬらむ　後九條内大臣

○最勝四天王院名所御障子
○文應元年七社百首
○建長四年毎日一首中
○六帖題、なき名
○だいしらず

○延喜二十年三月京極御息所歌合
○家集（よこの、横、近江又上野河内）
○六條齋院歌合（よどの、淀、山城）
○久安百首（よつまかの、國未勘之）
○園歌中（たこのいるの、多胡伊利、上野）
○題不知

○（たがはの、誰葉、大和）
○西園寺入道太政大臣家三十首（たまだよこの、玉田横、河内）
○大嘗會悠紀方御屛風、玉野原（たまの、近江）
◎御集、初秋雨（たもとのをの、國未勘之）

しろきかなたはれの野邊の女郎花ねくたれおきの露の景色に　讀人しらず

萬七 葛城のたかまの草のはやしりてしめざらましを雲ぞくやしき　同

高圓の野わきの風にけふみればまたき草木の色ぞしをるる　順徳院御製

たかまどの野べの秋萩ちりはてて色なきつゆに嵐ふくなり　正三位家隆卿

たかまどの野べのちぐさの花薄秋も末こすこがらしの風　正三位知家卿

萬代 見渡せばたかのの野邊のうづき原みな白妙に咲きにけるかな　大江文通

湊河うきねの牀によひこそ秋をつげのの鹿もなくなれ　左近中將公衡卿

えぞかすむつがろののべの萩盛りこや錦木のたてるなるらむ　參議親隆卿

現存六 けさみれば（た）なる（る）み（ひ現存）の上のうす緑それかとばかりもゆる若草　法眼長敦（尋現存）

ふなはりのなみしばの野の秋風に早くよわたる月のさやけさ　前中納言定嗣卿

なかぬまの野を朝ゆけば山ごえにかひの白根ははつ／＼にみゆ　光俊朝臣

家集云康元元年十一月長沼野と云所すぐれば西いぬゐにめぐりてぬの
なひきわたしたるやうにしろくみゆるこれなむ甲斐のしられといふな
ききてよめると云々

武藏野のあしのをぎふを分けゆけば末葉よりこそ空はみえけれ　俊頼朝臣

武藏のやかれにしまゝに下荻のなかばぞ霞む雪のむらぎえ　順徳院御製

○永久三年大神宮禰宜歌合、女郎花(たはれのの、國未勘之)
○雲葉歌(たかまのくさの、大和)
○建保三年名所百首御歌(たかまどの野、高圓、大和)
○同
○同
○天治元年五月權中納言家歌(合カ)と云
(たかのの野、山城)
○百首歌(つげのの、攝津)
○久安百首(つがろのの、陸奧)
○題不知(なるみのうへの、尾張)
○寶治二年百首(なみしばのの)
○(なかぬまのの、國不分明)
○野宿草紫(武藏野)
○建保二年内裏詩歌合、野外霞

○久安百首
こひせぬ（をれイ）と袖ぞ露けき武藏野の淺茅おしなみさぬるよすがら　前大納言隆季卿

○五十首、野春雨
春雨に又も萌えなむむさしのや煙ののちの荻のやけはら　土御門院小宰相

○最勝四天王院名所御障子
むさしのや横雲かすむ曙にはるのかなしきいろはみえけり　如願法師

○雜、野
六二 むさしのにしかもあかねの多かるかたゞ紫の名のみなりけり　讀人しらず

○家集、述懷百首中
むさしののうけらが花のおのづから開くるときもなき心かな　清輔朝臣

○建保三年名所百首
假庵のつまとふ風も寒きよにいくよかねなむむさしのの原　從二位家隆卿

○百首歌、羇中風冷
重ぬべき妻も籠らぬ武藏野の袖をばよきよ篠のをふゞき　寂蓮法師

○秋御歌中、鹿
むさしののしののをふゞき寒きよに妻もこもらぬさを鹿の聲　後京極攝政

○三十首歌、旅行
いくかみぬ遠山どりのむさしのは露かり衣われぞなきゆく　從二位家隆卿

○西季百首、野
續古旅 武藏のは草のはやまも霜がれて出づるもいるも月ぞさはらぬ　同

○光臺院入道二品親王家五十首、野德月
石向 むさしのはゆく末ちかくなりにけり今宵ぞみつる山の端の月　正三位知家卿

○むさしのにてふじのたかねの見えけるを
林葉 武藏のは山のはしらぬならひにもふじの高根は猶ぞみえける　法印最信

○旅歌中
東路の足柄こえてむさしのの山もへだてぬ月をみるかな　藤原時朝

○三百六十首御歌中
ほりかぬる水とのみきくむさしのもみな五月雨の波の下草　後九條內大臣

○題不レ知（むらさきの、紫、武良前、近江又山城）
萬一 あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき野守はみずや君が袖ふる　額田王

○文永七年每日一首中（うちの、內、山城）
小倉山夕いそぎていでつれどうちのの野邊はくれはてにけり　民部卿爲家

霜さやぐうちのおほ野の冬枯に朝ふませゆく駒なづむなり　從二位行家卿
うりふ野のさはにすみけるをし鳥の雲居に通ふ心あるらし　小大君
雨晴れて朝ふく風にいづみなる上野のはぎはちりかすぎなむ　衣笠内大臣
現存六 うたの野に柴かるをのこ心せよ御狩の鳥立ちあせもこそすれ　明珍法師
萬二 うけ衣としまたまけてみゆきせしうたの大野はおもほえむかも　讀人しらず
昔みし道尋ぬれどなかりけりぬるでまじりのゐなのふし原　基俊
明玉 雪ふかきゐなの笹原かくろへてうべさえけらし室の浦風　刑部卿範兼
新拾冬 みわたせばまじるすゝきも霜がれて緑すくなきゐなの笹原　土御門院御製
現存六 しもがれのゐなの笹生のふししばも春雨ふれば淺緑なり　民部卿爲家
青山にかすみ棚引くしながゐなのふしはら宿はなくして　權僧正公朝
萬四 おもはぬを思ふといはばおほのなる御笠の杜の神ぞしるらむ　讀人しらず
萬九 大和には聞えも行くかおほかののたかは刈りしき庵せりとは　同
吹きさやぐ夜風を寒みおほかのの誰葉かりしき臥しぞわびぬる　中務卿のみこ鎌倉
おふの浦の野邊の下草かれぬとやすさめし駒も立ちなづむらむ　源仲正
おほあらきの遠野の外にすむ人をみすててゆけば袖ぞ露けき　長能
おのづからくる人もなしおほあらきの遠野の原の五月雨の頃　源仲業

○弘長三年内裏百首、枯野（うちのおほの、内、大野、大和）
○家集（うりふの、瓜生、山城）
○綱集
○しは（うたのの、宇陀、大和）
○題不レ知（うたのおほの、大和）
○堀河院御時百首、野（ゐなの、攝津）
○二條院御時たてまつりける百首歌
○百首御歌
○春野
○正嘉二年詩歌合、羇中春
○題不知（おほの、筑前）
○大寶元年太上天皇紀伊國に幸のとき（おほかの、大我、大和）
○六帖題御歌
○永久元年十一月藤原實通家歌合寒草（おふのうらのの）
○心細げなる山寺に籠りたる人の許にいきて歸るとて（おほあらきのとほの、山城）
○建長七年顯朝卿家千首歌

○秋歌中（おほはらのうへの、山城）
○元久元年宇治御幸、野薄（くぜのはらの、山城）
○七百首歌（くるすのをの）
○正治二年百首
○百首御歌
○家集（くるすの、栗栖、山城）
○堀川院御時百首（くだらの、百濟、攝津）
○冬歌中
○題不レ知
○康保三年八月内裏前栽合（くらぶのの、山城）
○御集、冬の朝（やたのひろの、矢田、越前）
○清水寺歌合
○題不レ知（懐中、やまふぢのの、山城）
○（やすのの、安、近江）
○雨中草花（まくまの、紀伊）
○永久四年五月顕輔卿家歌合、夏草（まの、眞、近江）

萬代
おのづから過ぎがてにする大原のうへのの原にすがるなくなり（うづらなく也他本如此）　仲實朝臣

山城のくぜのはら野のしの薄たまぬきあへぬ風の白露　前中納言定家卿

時うつるくるすのをのの櫻がりふるねの萩をふみしだきつる　權僧正公朝

蕨をりしくるすの小野を來てみれば雪ふりにけりほどろ〳〵に　正三位季經卿

秋はけふくるすのをののまくず原また朝露の色ぞにほはぬ　後鳥羽院御製

くるすのの氷室の氷いつまでか結ぼほれつゝとけじとすらむ　相摸

歌林
百濟野のちがやが下の姫百合のねどころ人にしられぬぞうき　仲實朝臣

萬八
百濟野のさゝめが下に伏すうづら聞もあらはに冬は來にけり　道因法師

くだらのの萩のふるえに春まつとをりし鶯なきにけむかも　赤人

女郎花くらぶの野べの種ならば人にこえたる色ぞみえまし　右大將濟時卿

雪さそふ峯のあらしの音冱えて矢田のひろのは霜がれにけり　中務卿のみこ鎌倉

萩しげるやたの廣野をわけゆけばすゑこす風ぞ秋に變らぬ　藤原親盛

六五
山城の山ふぢの野にふす鹿の朝ふしかねて人にしらるゝ　讀人しらず

萬四
君が爲したみし酒をやすののにひとりや飲まむ友なしにして　同

眞熊野に雨そぼ降りてこがくれのつかやにたてる鬼のしこ草　俊頼朝臣

まくずはふ眞野の篠原繁りあひてはるこし道ぞ忘られにける　同

夏くればまのの萩原繁り合ひて行き來の人は聲のみぞする　皇太后宮大夫俊成卿
○長永三年六月常磐五（井イ）番歌合、野径草露

わが戀はふるのの道の小笹はらいく秋風に露こぼれきぬ　大藏卿有家
○六百番歌合、寄戀（ふるの、大和）

石の上ふる野の雪の朝ぼらけかげそふしでの色ぞ寒けき　慈鎮和尚
○百首御歌、雪

いそのかみふるのの淺茅霜がれてすゝはの露に宿る月かげ　大藏卿有家
○寶治二年百首

新續古卷下
ゆきとのみふるからをのの櫻花なほこのもとは忘れざりけり　後嵯峨院御製
○文永二年白河殿七百首、野花

萬十
ふなはりの野木にふり蔽ふ白雪のいちじるくしも戀ひむ我かも　讀人しらず
○題不レ知（ふなはりの、國未勘之）

催馬樂
藤生野のかたみが原をしめはやしいづち祝ひし時に逢へるかも
○（ふぢふの、藤生、山城）

藤生野にたみのやつこの絶えずかる誓しも戀の身をぞ休めぬ　從二位行家卿
○家集

濱風の吹きあげのをのの淺茅原なみよる浦に玉ぞちりける　中納言國信卿
○堀川院御時百首（吹上のをの、紀伊）

續拾参
きのくにや吹きあげのをのの淺茅原なびく霜夜にさゆる松風　後九條内大臣
○冬御歌（松風）

風さゆるふじのすそののあさぼらけ枯ふの尾花雪かとぞみる　民部卿爲家
○建長五年毎日一首中（ふじのすその、駿河）

月に行くふじの裾野ぞいそがるゝ清見がせきのみほの浦まで　家長朝臣
○家集、野径月

たぐひとやふじのすそのの夏かりにかのこまだらの峯の白雪　權僧正公朝
○六帖題、かり

萬一
玉簾の　こすの大野の　朝露に　玉藻はひづち　夕霧に　衣は濡れて　人丸
○長歌（こしのおほの）

花薄ひともこすのの名をしらでたれまねくらむ秋の夕風　大炊御門右大臣
○久安百首（こすの、越、大和）

○春野
現存六 たまだれのこすのおほのの夕霞ひまもる風は花のかぞする　正三位知家卿

○野春雨(衣でのをの、山城)
明玉 たのめおく妻はなけれど衣手のをのの春雨ふりなかくしそ　後光明峯寺攝政

○三百六十首中(こまの、狛、山城)
うりうゑし狛野の原のみそのふの繁くなり行く夏にもあるかな　好忠

○山露を(こま山の、國未勘之)
明玉 そめかねていかなる露の氷るらむこまやまのべの松の下草　後光明峯寺入道攝政

○題不レ知(あしきの、蘆、筑前)
萬八 をみなへし秋萩まじるあしきのにけふを始めて萬代にみむ　讀人しらず

○(あさはの、武藏)
萬十一 紅のあさはの野らにかる草のつかの間(あひだ)もわれわすれすな　人丸

○爲家卿家百首
紅のあさはののらの草も木もまだそめはてぬ初時雨かな　家長朝臣

○六帖題(あさざはをの、淺澤小、攝津)
新六三 あきさるゝ朝澤をのの人はなれさびしく遠きみつの聲かな　信實長臣

○題不レ知(あきつの、秋津、山城又紀伊)
萬四 かくしのみこひやわたらむ秋津野に棚引く雲の末とはなしに　大伴宿禰千室

○同
萬十二 みよしのの秋津のをのに刈る草の思ひ亂れてぬる夜しぞおほき　讀人しらず

○建保三年名所百首(あだちの、陸奥)
あだちのも雪ふりにけり狩人のひかぬまゆみの末たわむまで　正二位忠定卿

○春駒
萬代 あだちのの野澤のますげ萌えにけりいばゆる駒の景色しるしも　後德大寺左大臣

○最勝四天王院名所御障子
あだちのの朝風そよぐ村すゝきうき物とてや鹿のなくらむ　如願法師

○永仁三年或所會、粟津野(あはづの、近江)
をみなへし花の色さへ粟津野に結べる露のみだれてぞ散る　藤原爲顯

○天仁三年四月師時卿家歌合、野草(あげをの、攝津)
あげをののひさぎまじりの淺茅生も今は駿河のふじとなりけり　仲實朝臣

○堀河院御時百首(あけの)
月清みあけのゝはらの夕露にさゝめわけくる衣さぬれぬ　同

○遐所後十首歌合、野春雨（あさの、淺、淡路）
たきの上のあさ野の原の淺緑そらにかすみて春雨ぞふる　隆祐朝臣

○久安百首（あたのおほの、阿多大、大和）
秋ふかみあたの大野の露霜にかやがうは葉も移ろひにけり　實清朝臣

○家集（あぢまの、安治麻、越前）
あぢまのにあぢさゐ咲ける夕づく夜露の宿りは朝ならずとも　從二位家隆卿

○建保三年內大臣家百首に、名所二首（あたしの、大和又攝津）
淺茅原賴むにもあらずあだしのの仇に結べる露の契りは　家長朝臣

○貞應三年名所百首歌
草わくる衣で薄しあだし野のしののをふゞき心してふけ　民部卿爲家

○綱集、月五首中、野月
嵐ふくのざはのつゆのあだしのにしをれて宿る有明の月　後鳥羽院御製

○寶治二年百首、旅宿（あづまの）
あづま野のさゝやの牀のかり枕臥しもならはぬ夜を重ねつゝ　前大納言爲氏卿

○弘長元年百首
あづまののかやが下行くわすれ水むせぶ淚や猶みだるらむ　後九條內大臣

○題しらず
萬一東の野にかぎろひの立つ見えて萬
東野の煙のたてるところみてかへりみすれば月かたぶきぬ　人丸

○文永八年毎日一首中（さがの）
やま人のかへるさがのの追風に夕暮いそぐをぐら山かな　民部卿爲家

○家集
おいてすむさがのの原の草の庵幾秋なれぬさをしかのこゑ　同

○貞應二年六月名所百首歌
あはれなり秋はさがののをざゝ原いかなるふしに露冰るらむ　同

○建保三年名所百首
くれぬともさがのはすぎむ廣澤や宿らばなけの月の影かは　從二位家隆卿

○六帖題（さぬかたののべ、未國）
新六六
このねぬる朝風さむしさぬかたの野べの秋萩今ちらむかも　民部卿爲家

○上野國歌（さの、佐野、河內又上野）
萬十四
上野の佐野のくゝたち（と萬）をりはやしあれはまたむし今年みずとも　讀人しらず

○綱集
忘れずよ松の葉越しになみかけてよ深くいでし佐野の月かげ　後鳥羽院御製

○四季の御さうしのゑにある所々をかきたるに（さくらあさのの）
○題不レ知（さくらのをか、國未勘之）
○文應元年七社百首（きたの、北、山城）
○家集
○（ゆめの、夢、河内）
○建長八年百首歌合（めう野）
○文治二年五社百首、刈萱（みやの、伊勢）六イ
○家集（みやぢのの、參河）
○（みやぎの、宮城、陸奥）
○御集
○元永元年十月内大臣家奥州名所歌合、宮木野
○寳治二年百首梅薫レ風（みかさの、三笠、山城）
○六帖題（みつの、美豆、山城）

櫻あさの野べの若菜をつみにくる年こそ春のかたみなりけれ　平　祐　擧
萬十六
天に在るやさゝらのをのに茅萱刈りかやかりはかにうつらをたつも　讀人しらず
けさみればきた野の松のこのまより一よの程に花咲きにけり　民　部　卿　爲　家
つばなぬく北野のしばふあせゆけば心すみれぞさき變りける　西　行　上　人
あはせてやいむとわぶらむぬばたまの夢野の鹿の諸聲になく　鴨　長　明
妙野には尾上のあらし音さえて笹の葉そよぎ霰ふるなり　前大納言顯朝卿
此の歌判者光俊朝臣云彼の妙野には細竹生ひて西のかたには三峯そばだてりと風土記に見えたるがゆゑにをのへの嵐さゝのはそよぎてとはよまれたるにこそ山野之勝終深臨畢氣色誠浮二眼前一は揺輪也云々
神風やみやのの原のかる萱をかられてのみはすぎむものかは　皇太后宮大夫俊成卿
現存六
うちひさす宮路の野べの朝霞つかへし道をなどへだつらむ　民　部　卿　爲　家
宮城野の燒生の萩の下葉よりもとあらに咲かむ花をしぞ思ふ　好　忠
いとはるゝみを恨みつゝ宮城野の松としきけばけふぞ嬉しき　清　愼　公
宮城野の本あらのこ萩霜枯れてすゞのしのやも隱れなきかな　藤　原　忠　房
さきにけりいまや匂ひを春日山みかさの野べの梅の下風　從二位賴氏卿
新六六
みつの野やまきのひつぎの刈草の束のまもなし戀のみたれば　民　部　卿　爲　家

〇建保五年四月庚申、臨時祭を

山あゐの袖かへるらし風わたるみつのうへののはるの曙

〇建長四年百首

朝ぼらけさくら山吹かざしつゝかへるみつのの春の曙　従二位家隆卿

〇こめ、三くまの（紀伊）

六六 み熊野にかるやみこものおみかけてゆふてに思ふ君ならなくに　讀人しらず

〇題しらず（みしまの、攝津又越中）

萬十八 みしまのに霞棚引くしかすがにきのふもけふも雪はふりつゝ　同

〇長歌

萬十七 三島野を　背向に見つゝ　二上の　山を飛び越えて　雲がくり　翔けりいにきと　中納言家持卿

〇寛治七年郁芳門院歌合、女郎花（しめしの、山城）

しめしのの霧のまぎれに女郎花たはれにけりな風のまに／＼　八條入道太政大臣

さいたづまうら若かりししめし野の篠のを薄穗にいでにけり　源頼綱朝臣

〇家集

秋のよはひとりしめ野の笹の庇袖こそ月のやどりなりけれ　鴨長明

〇野徑月（しげみのをの）

古來歌 やへむぐら茂みのをののふる道に宿りもをしくすめる月かな　法性寺入道關白

〇題不ㇾ知（しきのの）

萬十 君にこひうらびれをればしきの野の秋萩しのぎさを鹿なくも　讀人しらず

〇承安二年閏十二月東山歌合、連日雪

ひくまのにかりしめさせる淺茅原雪の下にて朽ちぞはてぬる　清輔朝臣

〇寂蓮十首歌、夜鹿（ひきの、壹岐）

武士もあはれと思へ梓弓ひきののよはのさをしかのこゑ　後久我太政大臣

〇越中國歌（ひめの野イ、越中）

萬十七 ひめの野の薄おしなべふる雪に宿かる（なるイ）けふし悲しく思ほゆ　讀人しらず

〇題しらず（ひなのあらの、國未勘之）

萬二 天さかるひなの荒野に君をおきて戀ひつゝあればいけりともなし　人丸

〇御集十首御歌、野春雨（せりかはのの、芹河、山城）

芹河の野べのふる道たえぬとやおのれあととふ春雨の空　後鳥羽院御製

萬十一 梓弓末の原のにとかりする君がゆづるのたえむと思へや　讀人しらず

○題不レ知

わが宿は菅原のべとなりにけりいかにふしみへ人の行くらむ　和泉式部

このうたはすみなれて侍りける所にほどへだててまかりてみけるに荻薄も萩のませのあともみなこぼれければよめると云々

○家集（すがはらの）

うちなびく景色をみれば女郎花すがたの野べはおのれなりけり　讀人しらず

○永久二年太神宮禰宜歌合、女郎花（すがたのの）

萬十九 すぎの野に棹とる雉子いちじるく鳴きにしも鳴かむ籠る妻かも　中納言家持卿

○聞暁鳴雉（すぎのの、越中）

鈴舟をよする音にやさわぐらむすまの上野に雉子なくなり　法橋顯昭

○千五百番歌合（すまのうへの、攝津）

六帖 はつかにも人をみまくの薄野の穗に出でて今ぞ戀しかりける　讀人しらず

○題不レ知（すゝきの、伊勢）

雉子鳴くすだのに君がくちするゑて朝ふますらむいざゆきてみむ　俊頼朝臣

○家集（すだの、國不知）

夏のをぎのすがのになびく匂ひより秋になり行くみねの松風　慈鎭和尚

○賀茂社百首御歌、すがの、近江）

秋風にすがのの薄みだれあひて旅ゆく人の道だにもなし　前中納言匡房卿

○家集

年をへてすがの荒野にかるかやにくらべやせまし戀の亂れを　祐子內親王家紀伊

○永久元年十一月藤原定通家歌合戀（すがのあらの、須賀の荒、信濃）

みなづきのすがの荒野の時鳥まだ萩さかず又歸りなけ　從二從家隆卿

○家集、夏歌中

ゆふされば錦とみゆる住の江の岸の野はぎをあらふ白波　野宮左正臣

○喜多院入道二品親王家五十首（すみよしのきしの、攝津）

原

○弘長元年百首（くさはら）
（建長五年毎日一首中
○喜多院入道二品親王家五十首、冬歌（ちはら）
○家集、秋月を（すそののはら）
（建保四年内裏十首歌合（かりたのはら）
○千五百番歌合（あさぢふのはら）
○題不レ知（よもぎがはら）
○家集、歌の一字おく三十一首中（とやまのはら）
○家集、あかつき（をのへのはら）
○六百番歌合（いるさのはら、但馬或國未考）
○いそしのはら（長歌）
○家集（いしべのはら、國未勘之）

おなじ野も枕むすばぬ草原や人にはうとき霜もあるらむ　後九條内大臣
日をへつゝ秋風さむみあさぢふのをの野の草原色かはりゆく　民部卿爲家
鶉ふすとこもあらはになりけにり霜がれ渡るち原よもぎふ　源　師光
秋のよの月の光の影ふけて裾野の原に鹿なくなり　西行上人
霜白き刈田の原を見渡せばおだにすみこし庵ぞのこれる　従三位行能卿
行く秋のわかれし野べはあともなしたゞ霜ふかきあさぢふの原　参議雅經卿
萬代 玉雜三 た家
我ならでまづうち拂ふ人もなきよもぎが原をながめてぞふる　女御徽子女王
いかならむ外山の原にあき暮れてあらしにはるゝ峯の月かげ　前中納言定家卿
あかつきはをのへの原に風さえて霜にこたふる鐘聞ゆなり　六條院宣旨
あづさ弓春のひぐらしひきつれているさの原に圓居をぞする　正三位經家卿
萬十三
掛卷も　綾に畏し　山のへの　いそしの原に　内日刺す　大宮仕へ　讀人しらず
よこた山いしべが原のよもぎふに秋風さむみ都戀しも　鴨長明

この歌は伊勢へくだりけるにのちうちすぎていしべが原と云ふ所にてとも待つほどに風のいたくふけば馬よりおりてよもぎのたかによりふして

○百首歌中（とぶひのはら、大和）
○永保元年大嘗會御屛風（ちゝの松原、千々、或近江）
○正安大嘗會
○三百六十首中（をののしの原、小野小竹、山城）
○秋歌中（をじかの原、駿河）
○家集
○（をかべのはら、岡邊、武藏）
○弘長元年百首、薄（をかだのはら、近江）
○好忠百首歌を和しける中に
○三百六十首中（かたののはら、河内）
○最勝四天王院名所御障子
○承安二年法輪寺歌合、草花（かたちがはら、形）
○御裳濯歌合
○六帖題（かちののはら）

桑門 續後拾春上 箸鷹のはがひの山をあさゆけばとぶひの原に雉子なくなり　隆信朝臣

續千賀 ときはなるちゞの松原色深みこ高きかげのたのもしきかな　前中納言匡房卿

すべらぎをいのる祈りのかひありてちゞの松原苔ぞむしける　兼仲卿

淺茅おふる小野のしの原草深みさゝの宿りを誰かしるべき　好忠

秋風 行く人も袖やぬるらむつまこふる鹿の原の秋の白つゆ　鷹司院按察

時しもあれを鹿の原を秋ゆけばあづまをさへぞけふ別るべき　源順

武藏野のをかべの原の秋萩も花さきがたになりにけらしも　好忠

みわたせば尾花かたよりさゞ浪やをかだの原に秋風ぞふく　従二位行家卿

萬代 續後拾春上 東路に春やきぬらむあふみなるをかだの原に若菜むれつむ　惠慶法師

雉子なく片野の原をすぎゆけば木の葉もいとゞ色付きにけり　好忠

あられふるおとぞ寂しきみかりするかた野のみのの楢の葉柏　後久我太政大臣

藤生野のかたちが原の女郎花色めくさまもけしきことなる　諒雅法師

此の歌判者清輔朝臣云右歌催馬樂のことばをとりてふるまひたれどさせる事なしと云々

新六二 かれのうづむ雪に心をまかすればかたちの原に雉子鳴くなり　西行上人

思ひしる人なからめや馬はあれどかち野の原にしをれきつるを　正三位知家卿

おひくだり山の裙野の柏原もとつ葉まじりしげるころかな　参議爲相卿
すゞか山せきの原なみ花薄袖ふりはへてたれまねくらむ　民部卿爲家
若菜つむかすがの原の雪まよりそれかと匂ふのべの梅か枝　後鳥羽院御製
袖ぬれてかたみに忍べ若菜つむ春日の原のゆきのした水　如願法師
行きくらすよさみの原のよそにして誰かあふみに人を契ヒイらむ　従二位家隆卿
あふみてふ依網の原にゆく人はいもがあたりのこと語らはむ　信實朝臣
みち遠み日も夕ぐれになりぬれば園原までとまちてこそゆけ　六條院大進
帚木につまや籠れるさをしかの園原になく鹿のきこゆる　爲忠朝臣
萬十三
なら山こえて　山しろの　つゞきの原を　ちはやぶる　うちのわたりの　たきのやの　あこねのはらを　ちゝとせに　讀人しらず
たが里につゞきの原の夕がすみ煙もみえず宿はわかまし　従二位家隆卿
武蔵野の草のゆかりもとひわびぬつゞきの原の雪の夕暮　法橋顯昭
思ひかねこしげき梅の原ゆけばいもが袂に移り香ぞする　惠慶法師
たれこゝのありすなるらむうめの原など鶯のひとりなくらむ　讀人しらず
懷中
しらざりきたのめしことを忘れ草身をうの原に生ふる物とは　同
あふさかの關をばしらで人心うきねの原になど迷ふらむ　源仲業

○海道宿次百首、かしはばら（かしはら）
○文應元年七社百首（せきのはら）
○最勝四天王院名所障子（かすがのはら）
○同
○建保三年内大臣家百首、寄二名所一戀（よさみのはら、依網、近江）
○寶治二年百首、寄鹿戀
○永久四年百首（そのはら、信濃）
○家成卿家歌合、鹿
○長歌（つゞきはら、相模、又山城）
○光明峯寺入道攝政家百首、原上霞
○千五百番歌合
○家集（むめのはら、山城）
○題しらず（懷中）
○同、うのはら（山城）
○建長七年顯朝卿家千首歌、寄レ原戀（うきねのはら、國未勘）

○建保三年名所百首（うきしまがはら、駿河）
雲のなみ尾花の波の果てもなし霜にかれたるうき島が原　従二位行能卿

○貞應元年百首、眺望
浮島の原のうら浪はるぐ＼とはなれずおくるふじのしば山　民部卿爲家

○弘長二年[illegible]根宮に奉納歌
旅人の道ゆきくらすひかりとやさはに螢のうき島が原　安嘉門院四條

○浮島がはらにて
影しづむふじの高嶺は下に見えて浪のゆるげばうき島がはら　他阿上人

○冬歌中
雲葉
東路やかれ野の薄かぜ分けて袖になみこすうき島が原　業清朝臣

○永久二年太神宮禰宜歌合、雪（ゐなのふし原、攝津）
ふる雪にゐなのふじ原埋もれてかるもかくべき方やなからむ　讀人しらず

○元永元年家歌合、時雨（ゐなのかさ原、攝津）
あやしくもしぐれに歸る袂かなゐなのかさ原さしてゆけども　法性寺入道關白

此の歌判者俊頼朝臣云ゐなのかさはらなどよめるあたりいひなれたり

但しぐれにかへるなどいはばきぬのいろやみゆべかるらむと云々

○正安大嘗會（ののみやのはら、野宮、近江）
千代ふべき子の日の小松ひきうゑて君をし祝ふ野のみやの原　兼仲卿

○旅歌中（おきつがはら、駿河）
明玉
なみたてるくぬぎがもとに駒止めて沖つが原にしばしすゞまむ　紫金臺寺入道二品みこ

○家集（おほののはら、國未勘）
花薄おほ野の原のみだればし秋の心にたぐへてぞ行く　鴨長明

この歌は伊勢へくだりけるに大ののはらのすゝきわけゆけばすゑに橋

ありなをみだればしと云ふと云々

○くりはら、栗原、陸奥）
ふるさとの人にかたらむくり原やあねはの松の鶯のこゑ　同

○親子内親王家にまゐりて（山田のはら、伊勢外宮也）
神のます山田の原の鶴の子はかへるよりこそ千代はかぞへめ　順

たけがはやゆたのをみればはる〴〵と山田の原の松は雲なり　鴨長明

このうたは長明伊勢へ下りけるにゆたのと云ふ處にてよめると云々

雲葉 人家 いほりさすいなばの雲も打ち靡き山田の原は時雨れてぞゆく　後光明峯寺攝政

なきてくる鴈の涙か花すゝきまそでの原における白露　正三位重氏卿

萬三 新千巻二 陸奥のま野のかや原とほけれど面影にしてみゆといふものを　笠女郎

霧をいたみま野の萩原しぐれして笨に袖をもとろ（ほどろ家）かしつる　僧賴朝臣

萬八 ひさかりはあそびて行かむ影もよしま野の萩原風立ちにけり　同

大口の眞神が原にふる雪はいたくなふりそ家もあらなくに　讀人しらず

たちよりてかるべき宿もなきものをまかみが原に雪はふりつゝ　前大納言顯朝卿

此の歌判者行家卿云まかみがはら家もあらなくにと侍る本歌のことわり叶ひて雪中の旅懷戚有所思と云々

萬二 とぶとりの　まかみがはらに　ひさかたの　あまつみかどを　人丸
かしこくも　さだめたまひて

萬代 あすか風うべさえけらしけさ見ればまかみが原に雪は降りつゝ　藤原良清

萬七 またまつくこしの菅原われかくて人のからまくをしき菅原　讀人しらず

新六五 戀ひわびぬありしばかりの玉藻かなこしの菅原人目もりつゝ　衣笠内大臣

○家集

○秋歌中

○秋歌中（まそでのはら、國未勘之）

○題不レ知（まののかや原、眞野、陸奥）

○永久四年百首、原（まののはぎはら、眞野、大和）

○家集、樹陰風來

○題不レ知（まかみがはら、眞神、大和）

○建長八年百首歌合

○長歌（あすかの、或本）

○後法性寺入道關白家百首

○寄レ草戀（こしのすがはら）

○六帖題

○家集、戀歌中	しらざりきこしの菅原枯れ果ててかりにもあはぬ契りありとは	従二位家隆卿
○中務卿親王家歌合、戀	なにと又人のからまく惜しむらむしめゆはましをこしの菅原	權僧正公朝
○康平四年三月祐子内親王家歌合（こひの松原、若狹或國名勘之）	ほのかにも猶あふことをたのみてやこひの松原茂りそめけむ	駿河
○後朱雀院一宮歌合	いかにせむあひみぬ程のふるまゝに茂りぞまさるこひの松原	甲斐
○爲忠朝臣家參河國名所歌合、小松原（近江又備中）	行末のはるかにみゆる小松原君が千歳のためしなりけり	清輔朝臣
○同	神代よりおひやそめけむ小松原いくちよへぬとしる人ぞなき	藤原道經
○正安大嘗會、所々名を	綠なるおなじふたばをひきそへて小松が原に若菜をぞつむ	大藏卿隆敎
○絢集（こやの松原、攝津）	夕さればこのまの月しくらければたどりて渡るこやの松原	法性寺入道關白
○建保三年名所百首（あだちの原安達、陸奥）	紅葉するあだちの原のしらまゆみのこる梢に嵐吹くなり	僧正行意
○同	あらし吹くこの下露や結ぶらしあだちの原は霜がれにけり	藤原康光
○長勝四王院名所御障子	御障子 染めはてぬ木の葉しぐれも陸奥の名よりあだちのはらふ山風	具親朝臣
○百首歌	冬枯れのあだちの原になく雉子たのむ草葉もかくれなのよや	八條院高倉
○建保三年名所百首、雪歌（あられ松原、攝津）	うら風のあられ松原ふき迷ひたまよせかぬる住のえの波	正二位忠定卿
○同	さよふけてあられまつ原すみよしの浦ふく風に千鳥なくなり	正三位知家卿
○門妙社歌合、萩を（あはずのはら、國未勘之）	こふれどもあはずの原に咲く萩の花とちりなむ名こそ惜しけれ	源親房
○永久四年百首、原（あをやぎのはら、國未勘之）	春のうちは霞のなかにみえしかど霧も立ちけり青柳の原	仲實朝臣

いしかづらあけぢの原を行く駒はこひのみとなる八橋のみよ　祐　擧

霞立つあしたの原をけふみれば駒放つべく野はなりにけり　讀人しらず

鶯の聲きく野邊にいづる日のあしたの原は春めきにけり　後九條内大臣

さらにまた道こそなけれかた岡のあしたの原の花の白雪　民部卿爲家

わかれぬるあしたの原のわすれ水行く方しらぬわが心かな　源　兼昌

淺茅生の露に上毛やそぼつらむあしたの原にうづら鳴くなり　同

千五百番
歸るさのあしたの原の青つゞら苦しき道と今ぞしりぬる　源俊平朝臣

はりまがた恨みてもなほたのめとや末にありてふあふの松原　正三位季能卿

明玉
時鳥今來なけとやかゞみなるあは野の原に匂ふたちばな　從二位行能卿

よそふともあだにちらすな神なびのあさきは原の露の言のは　前大納言爲氏卿

萬二　玉葉三
ゆの原になくあしたづはわが如く妹にこふれや時わかずなく　大納言旅人

ときのまもいかでか露のたまるらむゆるぎの原の草の葉末は　左近中將具氏（經家イ）

霞たつみかさの原の朝朗いづれかいもが宿りなるらむ　資隆朝臣

初時雨ふりにし里をきてみればみかさの原は紅葉しにけり　前中納言匡房卿

六五　萬十一
君がきる三笠の原にゐるくものたえてはかへる戀もするかな　讀人しらず

うらやましみあけの原の藤袴誰にむつれてひもときつらむ　神祇伯顯仲卿

○いしかづらあけぢのはらやつはし
○天延三年關白家歌合（あしたのはら、大和）
○寶治二年百首
○貞應三年四月攝政家百首、岡花
○康和二年四月國信卿家歌合、後朝
○永久四年百首、原
○寶治二年百首
○千五百番歌合（あふのまつばら、陸奥又播磨又筑紫）
○野郭公を（あはののはら、近江）
○寶治二年百首（あさきはら、讃岐、備後、大和）
○湯田温泉にて作る歌（ゆのはら大和又筑前）
○建長八年百首歌合（ゆるぎのはら、近江）
○家集、霞歌中（みかさのはら、三笠、大和）
○仁安二年八月經盛（資イ）卿家歌合、紅葉
○原
○門妙社歌合、顯戀（みあけのはら、國未勘之）

現存六
みかの原ふりにし里の都にもやまと河とぞあとのこりける　讀人しらず

○題不レ知（みかのはら、三日、三香、山城）

萬四
瓶のはら　たびのやどりに　玉鉾の　みちの行きあひに　あまぐもの　よそにみえつゝ　こととはむ　笠金村

○三香原離宮にみゆきの時作る歌云々

葛城やよそのしらくもあともなく霞ぞたてるみよし野の原　大納言忠信卿

○建長二年内裏詩歌合、野外霞（みよしののはら）

新續古夏
いくかへり山もかすみてとしふらむ春立つ空のみ吉野のはら　前中納言定家卿

○建久二年六月色葉四十七首

雲葉
けふこずばみわのひ原の時鳥ゆくてのこゝろを誰かきかまし

○最勝四天王院名所障子（みわのはら、大和）

かはらじな三輪の檜原のおのれのみ人のしぐれは秋深くとも

○家集

中務集
かた岡のみかきが原の鶯は花ちりぬとや春は（ねをば中務集）なくらむ　讀人しらず

○題不レ知（懐中、みがきかはら、御垣、大和）

こゝのへのみかきがはらの朝霞開近きほども立ちへだてつゝ　民部卿爲家

○文應元年七社百首

心をば色とこゑとにわけとめつ萩に鹿なくみやぎ野の原　喜多院入道二品のみこ

○正治二年百首（みやぎののはら陸奥）

あたご山しきみの原に雪つもり花つむ人のあとだにぞなき　好忠

○三百六十首中（しきみがはら、檍之、山城）

しぐれつゝ日數はふともあたご山しきみが原の色はかはらじ　顯仲朝臣

○堀川院御時百首

現存六
通ひける人のあとだにみえぬかなしきみが原にふれる白雪　民部卿爲家

○冬歌中

あらはれて露やこぼるゝみちの野の忍ぶが原に秋風ぞふく　後一條入道關白

○御集、原上露（しのぶがはら、陸奥）

萬七
人こそはおほにもいはめわが心忍ぶが原をしめゆふなゆめ　讀人しらず

○題不レ知

あふさかや旅行く人のしの原に一夜も宿りとらぬものかは　藤原義孝

○家集、戀歌中（しのはら、或播磨近江又加賀）

篠原やさ野のくゝたちさかなにて旅行く人をしひとゞめばや　源仲正

くれかゝる野路の旅人わけ過ぎて露のみやどるすゞの篠原　後鳥羽院宮内卿

新六二
宿しめてなに山賤のしづ原や静かなるべきあたらすまひを　信實朝臣

新六二
くさたちししめぢが原は霜枯れて身はあらましの賴みだになし　衣笠内大臣

しもつけやしめぢが原の草隠れさしもはなしにもゆる思ひぞ　光俊朝臣

なにおはば虎や臥すらむ東野にたつといふなるもろこしが原　藤原忠房

はるかなるなかこそうけれゆめならで遠くみえけり諸越の原　讀人しらず

かたのなるもゝへが原をつかのまもこひずやあらむ花の都を　鴨長明

なきかはす鶯のねにしきられてゆきもやられぬ關の原かな　源仲正

林

風さゆるしげき林の松の雪久しくもあるか神やのこせる　皇太后宮大夫俊成卿

たれかすむこのはの杜をたき捨てて雪のあしたも煙たつらむ　従二位家隆卿（行家イ）

うちはへて世は春なれやあまの原ほしの林も花とみゆらむ　同

秋くるゝときはの森は名のみして今ぞ紅葉の林なりける　權中納言公雄卿

さがのなる常磐ばやしのなのみしてうつろふ色に秋風ぞふく　前大納言實冬卿

○家集、野前
○建仁元年老若五十首歌合
○六帖題、原（しづはら）
○（しめぢがはら、下野又上總）
○建長八年百首歌合
○永久四年百首、原（もろこしのはら、相模）
○題不レ知（夢中）
○家集（もゝへがはら）
○家集、行路鶯（せきのはら、國未勘之）
○光明峯寺入道攝政家百首、林雪
○同百首（ほしのはやし）
○永仁元年九月龜山殿十首、林頭暮秋（もみぢのはやし）
○（ときはばやし、山城）

○（かた山ばやし）

まさきちるかた山林くるゝ日に今はなごりと秋風ぞふく　大藏卿重經

○建長七年顯朝卿家千首（み山ばやし）

ねにたてぬみ山林のさを鹿はつまとゝのへて戀ひやねぬらむ　従二位行家卿

○林中櫻（さとばやし）

さくらさくうしろの方の里林春はむかひになりにけるかな　源仲正

○（うたのはやし）

おぼつかな歌の林にあつむなる其の言の葉はちるやちらずや　法橋顯昭

この歌は林苑にて俊惠法師歌苑抄えらび侍りける比ゆかしくこそなど申しつかはすとてよめりと云々

○返し

ちりぬべきうたの林の言の葉もそなたの風をまつとしらなむ　俊惠法師

○百首歌、はのはやし

呉竹のわがいもは皆ならへどもひとりよそなるはの林かな　前中納言定家卿

○建久三年左大將家にて一字おく三十一首歌（にしきのはやし）

るりの水にしきのはやしいろ〳〵に心うきたつ秋の山河　同

○林變容耀宿雪紅（ゆきのはやし）

くれなゐの霞はけさや匂ふらむ雪のはやしの春の初花　土御門院御製

○家集（くものはやし、雲林院也）

きかせばやあはれをしらむ人もがなくもの林の鴈の一こゑ　和泉式部

○久永十年毎日一首歌、故郷を（はなのはやし）

いけ水の花の林にきてみればふるきによらずあせにけるかな　民部卿爲家

森

○題しらず（いはたのもり、石田、山城）

萬十二　山城のいはたの森に心おそくたむけしたれば妹にあひがたき　人丸

○同

萬九　山科の岩田の森にふみこえば蓋しわが妹にたゞに逢はむかも　式部卿宇合

○同

萬六 山科の　岩田の杜の　皇神に　幣取りむけて　我は越え行く　讀人しらず

相坂山を

六帖二 やましろの岩田の杜のかしは原（はゝそはら六）いはねど秋は色に出でにけり（づき六）

○家集、くまのへまゐるとて（いはしろのもり、紀伊）

岩代のもりのたづねていはせばや幾代か松は結びはじめし　増基法師

○爲家卿家百首（いはかみのもり、國未勘之）

いはかみの森の下水ゆふかけておほみや人の涼むころかな　従二位家隆卿

○建保三年名所百首（いはせのもり、石瀬、大和）

神なびのいはせの森のいはばたゞ吾が戀まさる鳥のねもうし　同

○蟬を（六帖）

六二 かつみつゝいはせの森に住む蟬の時もしらずやなき渡るらむ

○家集、聞郭公忘歸（いくりのもり、國未勘之）

郭公こゑあかなくにたづねきていくりの森にいくよへぬらむ　修理大夫顯季卿

○森を

現存六 何方にいくりの森の春ならむあかれぬふぢの色をみすてて　正三位知家卿

○題不知（懐中、いはてのもり、陸奥又攝津）

陸奥のいはての森のいはでのみ思ひをつくる人もあらなむ　讀人しらず

○家集（いくたのもり、生田、攝津）

難波女がいくたの森に雨ふれば昔ながらと人はいひける　和泉式部

○最勝四天王院名所御障子

續後拾秋上 つのくにのいくたのおくの秋風に鹿のねなるゝ森の下露　參議雅經卿

○同

鹿ぞとふ生田の森の下もみぢ露も時雨もそめぬこずゑに　後久我太政大臣

○建長八年百首歌合

吹きはらふいくたの森の下風に河霧はれて月やすむらむ　従二位行家卿

○ちか言たてよといふ人に

難波なるいくたの森のいくたびか神をかけつゝ我は誓はむ　能因法師

○ぬのびきの瀧のもとにて

萬代 立ちかへり生田の森のいくたびもみれどもあかぬ布引のたき　後久我太政大臣

○家集（いつきのもり、國未勘之）
言のはにかけてもなにか思ひいづるいつきの杜のしめの下草　鴨長明

○題不レ知（いでいりのもり、國未勘之）
六二 萬十七 いもが家のいでいりの森の藤の花今こむ春もかくこそはみめ　讀人しらず

○いつしかのもりを（國未勘之）
鶯は春まちつけていつしかの森のたまえに聲ならすなり　俊頼朝臣

○六帖題（はゝそのもり、山城）
新六二 いづみ河ゆふわたりきて山しろの柞の森に宿やからまし　衣笠内大臣

○最勝四天王院名所御障子
白妙のゆふなみ涼しいづみ川はゝその森のたけの下道　従二位家隆卿

○同
いづみ河かは波涼し水鳥のはゝそのもりの夏の夕暮　如願法師

○同
涼しさに秋ぞうちいづるいづみ川はゝその森の岸の下水　後久我太政大臣

○雜歌中（はつかしのもり、羽束之、山城）
朽ちねたゞ多くの春に花さかでおい木となるもはつかしの森　權僧正公朝

○千五百番歌合
時鳥たづねかねたる恨みして歸る人めやはつかしの森　小侍従

○女御入内御屛風、五月杜陰時鳥（ときはのもり、山城）
續後拾夏 はつこゑを都にいそげ郭公ときはの森の松はふりにき　従二位家隆卿

○建保三年名所百首御歌
秋はともたれかはいひししひしばの常磐の杜に鹿はなくなり　順徳院御製

○御集、ときはのもりなのみして（のイ）もみぢたるを
ことわりにかはりける身か山城のときはの森も紅葉するかな　中務卿のみこ鎌倉

○千首歌
おそしともみるべき花はなけれども春やときはの森の鶯　民部卿爲家

○寶治二年百首、杜紅葉
まつさむきときはの森の夕時雨たま〳〵そむる秋の紅葉ば　従二位頼氏卿

○千五百番歌合（ときはのもり、國未勘之）
霞しく春のとなりになりぬれば今ひとしほのときは木の森　醍醐入道大政大臣

○家集もみぢを（をぐらのもり、小倉、山城）
六二 うぢやまの紅葉の色をやとふかな小倉の杜のおぼつかなさに　小大君（或本女藏人左近）

○承保元年大嘗會主基方御屏風(わかまつのもり、國未勘之)
○千五百番歌合(かすがのもり、大和)
○永久四年百首
○正安大嘗會(かはたのもり、河内、近江)
○建長八年百首歌合(かたをかのもり、片岡、山城)
○中務卿親王家歌合(かしはぎのもり、柏木、大和)
○六帖題(かへのもり)
○題不レ知(かたびらのもり、かたこひのもり陸奥也、國未勘之)
○春歌中(かせのもり伊賀、或國未考)
○喜多院入道二品親王家五十首、述懷(よし田のもり、國未勘之)
○建長八年百首歌合
○依網社にたてまつりける歌に(よさみのもり、攝津)
○題不レ知(龍田のもり、大和或山城)
(建仁元年五十首御歌
○正治二年百首(たれそのもり)
○百首御歌(たゞすのもり)

二葉なるわかまつの森としをへて神さびむまで君はましませ　前中納言匡房卿
みよし野のかすがの森の梅の花とるさかきばにかを交へけり　野宮左大臣
若菜摘む年はへぬれど春日野の森は今日をや春としるらむ　藤原忠房
久方の長閑けき空をけさみればかはたの森は霞みきにけり　兼仲卿
かた岡の森の梢をいづるよりみたらし河に月ぞさやけき　藻壁門院少宰相
春深くゆはたそむてふ紫の藤さきかゝるかしは木の森　權僧正公朝
新六六
しめのゆき紫野なるかへの森はかへすなからうづもれにけり　民部卿爲家
六二
かたびら(こひ)の森のこの葉(ことのはイ)はちりぬとも(れど)思ひは山の(の以上六)松ぞかはらぬ　讀人しらず
古來歌合イ
うらみじな風の森なる櫻花さこそあだなる色にさくとも　鷹司院按察
ゆく末もよしだの森の藤の花へだてぬ春のひかりをぞまつ　野宮左大臣
しるしあれば吉田の杜の夕だすき近きにいとゞかくる頼みは　藤原伊長朝臣
君がよは依網(よさみ)のもりのとことはに松と杉とやちたび榮えむ　前中納言定家卿
萬葉
山ひめのちえだの錦おりはへてたつたの杜は神さびにけり　源信明朝臣
あさ緑松にかすみのたつた山森の雫や冰とくらむ　後京極攝政
さよ更けてたれその森の杜宇なのりかけてもすぎぬなるかな　正三位行家卿
みそぎするかもの河波ゆふかけて紀の杜にひぐらしの聲　順德院御製

○森郭公を（たかまのもり、高間、大和）
○家集
○光臺院入道二品親王家五十首、社卯花（つきよみのもり）
○家集（ねぶりのもり、國未勘之）
○文應元年七社百首（なかれきのもり、國未勘之）
○永萬二年五月經盛卿歌合、郭公（なでしのもり、國未勘之）
○五百番歌合
○さねかづら（なげきのもり、國未勘之）
○家集、あひしりたひる女いがの國ながたの杜と云ふ所にありときて（ながたのもり）
○題不レ知（うきたのもり、浮田、山城）
○家集
○御集
○後京極攝政家御會、浮田杜、述懷
○題不レ知（うなでのもり、美作）

よそに似る或本
茂りあふたかまの森のこずゑより雲居につたふ郭公かな　藤原教經朝臣
萬八
久方のたかまのもりのしぐれてや雲のはたての錦なるらむ　隆祐朝臣
神代よりひかりやかけてうの花の春もあまてる月讀の森　法印言範
新續古雜下
おひ茂る眠りの森のしたにこそめざまし草はうふべかりけれ　俊頼朝臣
このうたはあそびける所に隆源法師のねぶり侍りければさかづきすと
てよめると云々
こほりゐし河瀬も今は流れ木の森のこかげにもゆるさわらび　民部卿爲家
みなづきのなごしの森の郭公こゑの限りはこれにやあるらむ　藤原資隆朝臣
みなづきのなごしの森の夕涼み御禊もまたぬ秋の下風　正三位季能卿
現存六
まどはるゝなげきの森のさね葛たえぬや人のつらさなるらむ　信實朝臣
いのちだに永田の森のなかりせばたよりに君が宿をみましや　爲頼朝臣
萬十一
かくしてや猶や止みなむ大あらきの浮田の杜のしめならなくに　讀人しらず
ほのめかすうきたの森の時鳥思ひ沉みてあかしつるかな　俊頼朝臣
萬代
いつまくかうきたのもりの椎柴のしひても人をこひ渡るべき　衣笠内大臣
名をたのみ浮田の森に祈るとも身は埋れ木の朽ちやはてなむ　從二位家隆卿
萬七
ま鳥すむうなでの杜の菅の根をきぬにかきつけきせむこもかも　讀人しらず

眞鳥すむ森のかみにもとひてきけ思へばこそは思ふとはいへ　皇太后宮大夫俊成卿

神のますうなでの森を朝ゆけば聲をたむけて千鳥なくなり　前大納言隆房卿

なつぞひくうなでの杜の村雨にした葉のこらぬ草の夕露　正三位知家卿

いかにせむうさかの森にみはすとも君がしもとの數ならぬ身を　俊頼朝臣

枝そよぐ風に夏なきおほあらきのもりくる水の影ぞ涼しき　西園寺入道太政大臣

野べの色も茂りにけりなおほあらきの梢につゞく杜の下草　參議雅經卿

みひとつよ涙にそめて下もみぢ思ひの森は色づきにけり　左近中將

鏡山たち野のかげも猶みえておいその森にふれる白雪　前民部卿雅有

み山よりいでてやきつる杜鵑おいその森にまづきなくらむ　道因法師

東路のおいその杜の花ならばかへらむことを忘れましやは　俊頼朝臣

紅葉散るおほかの森のゆふだすき又めにかゝる山のはもなし　光俊朝臣

このうたは武藤野をすぎけるにやまは見えずしておほかのもりといふ

もりばかりわづかにもみぢしてみえけるによめると云々

萬七

山城の栗栖の杜の草な手折りそおのがとき立ちさかゆとも草な手折りそ　讀人しらず

村雨のけさもゆききの雲の杜いくたび秋の梢そむらむ　正三位知家

二一イ

○文治六年五社百首

○正治二年百首

○家集

○同（うさかのもり、越中イ）

○寛喜元年女御入内御屏風、杜邊山井樂水（おほあらきのもり、山城）

○家集

○建長八年百首歌合（おもひのもり、國未勘之）

○家集、あづまへくだり侍るとておいそのもりにて（おいそのもり、息濱、近江）

○承安三年經正朝臣家歌合、郭公

○花下忘レ歸と云ふ事を

○家集（おほかのもり）

○同不知（さしすきの或本くろすのもり、國未勘之）

○寶治二年百首、森紅葉（くものもり、國未勘之）

さもこそは秋はくれたの森ならめ梢の紅葉しばしとゞめよ　六條院宣旨

紅葉ちるまがきの森のこのもとに荻のはそめて秋風ぞ吹く　後九條内大臣

すべらぎを守りますだの杜なれやあから柏のあからめもせず　左京大夫顯輔卿

六二 わがためにつらき心を大すみのけしきの森のさもしるきかな　讀人しらず

けふよりは秋のけしきの杜なれややがて身にしむ山颪の風　醍醐入道太政大臣

あけわたるけしきの森に立つさぎの上毛も深く雪はふりつゝ　順徳院御製

下草に露おきそへ(めイ)て秋のくるけしきの森にひぐらしぞ鳴く　後京政攝政

なげかじなふなきの森の郭公月のでしほに浦づたひして　俊頼朝臣

紫のくもとよそにてみえつるは小高き藤の森にぞありける　小侍従

新六六 深草はなのみなりけり藤の森春をかけてぞ花咲きにける　信實朝臣

時雨の雨まなくしふればなにしおふこのはの杜も色かはり行く　光俊朝臣

人のおやの思ふ心やいかならむこゞひの森の秋の夕ぐれ　惠慶法師

待ち得たるかひもあるかな時鳥こゞひの森にをちかへり鳴く　寬玄法師

萬葉 春は花秋はもみぢとさそはれて人もたちよる衣手の森　馬内侍

木々にはふ蔦もみぢせりこがの森淀のわたりや時雨しつらむ　光俊朝臣

扶桑 なげきのみ我が身一つに茂ければこひの森ともなりやしぬらむ　經盛女

○家集、秋のはて（くれたのもり　國未勘之）
○柿本影供百首（まがきのもり、國未勘之）
○家集（すまだのもり、近江）
○題不レ知（けしきのもり、大隅）
○千五百番歌合
○承久元年内裏歌合
○御集、立秋御歌
○家集、郭公歌中（ふなきのもり）
○康平四年三月祐子内親王家名所歌合、葎杜號後朱雀一宮（ふぢのもり藤、山城）
○六帖題
○寶治二年百首、杜紅葉（このはのもり、木葉、越中）
○屛風歌に秋こゞひの杜にもみぢ見る人あり（こゞひのもり、山城又伊豆或美作）
○承安元年八月全玄法印房歌合、郭公
○題不レ知（衣手のもり、衣手、山城）
○建長八年百首歌合（こがのもり、久我、山城）
○名所歌合（こひのもり、戀、伊賀又山城）

〇森を
〇題不レ知（こがらしのもり、木枯、駿河又山城）
〇家集、森（あさまのもり、國未勘之）
〇六帖題（あはづのもり、近江）
〇同題を
〇康平四年三月祐子内親王家歌合青柳の森（近江又丹波）
〇家集、山城あめのもり（山城）
〇題不レ知（讃中）
〇あはでのもり（阿波手、尾張）
〇文應元年七社百首（きたののもり、山城）
〇題不レ知（ゆるぎのもり、綾木、近江）
〇久安百首
〇永萬二年重家卿家歌合、郭公（ゆめのもり、國未勘之）
〇洞院攝政家百首、杜（みかさのもり、大和又筑前）

六帖五
うづもれ（ちむ六）てこむ人は猶こひ（か六）の森きゞの木の葉のまだちらぬまに　讀人しらず

六二
人しれぬ思ひするがの國にこそ身を木枯の森はありけれ　同

六二
君こふと我こそ胸をこがらしの森とはなしにかげになりつゝ　同

いかゞ（にイ）せむかかる憂世に櫻咲くあさまの森の淺ましの身や　中務卿のみこ鎌倉

人ぞうき粟津の森にゐるさぎのみのけにとりと思ひなせども　同

新六一
夕づく日關こえゆけば粟津野の森の梢に月ぞいざよふ　正三位知家卿

薄くこくはなだの絲をよりかけてたまをそめける青柳の森　小侍従

ありとてもとふ人なくてふる里に雨のもりくる音ぞ悲しき　和泉式部

このもとを賴む心もあるものを雨のもりにぞ思ひわづらふ　讀人しらず

讃中
つ花ぬく便りにとこそ思ひしがあはでの森にかへりぬるかな　同

松ならぬよその紅葉も一夜にてきた野の森は色づきにけり　民部卿爲家

さりともときた野の森の時鳥神のちかひを賴みてぞ鳴く

六二
たかしまやゆるぎの森の鷺すらも獨りはねじと爭ふものを　讀人しらず

春深き（くイ）ゆるぎの森の下草のしげみにはむや青柳の駒　花園左大臣家小大進

まちかねてまどろむほどに郭公ゆめの森にて今ぞなくなる　法性寺入道關白家左京大夫

君がためかみぞしりけるよろづよをみかさの森の松風の聲　俊成卿女

しぐれの雨さしもふればや春日なる三笠の杜は紅葉しぬらし　辨内侍

桑門
はし鷹のみかりの森のゆふしでや鳥立をかけてふれる白雪　光俊朝臣

新六二
淀河のむかひにみゆるみつの森よそにのみして戀ひ渡るかな　民部卿爲家

すぎゆかむみわの山べをしるしにて都の森のなをな忘れそ　祐擧

この歌はさつまへくだりけるにみわの山みやこのもりなどいふ所をおもひやりてよめると云々

六二一
いづみなる信田の森の樟の木のちえに別れて物をこそ思へ　讀人しらず

晴れ曇りいくたび空にしぐれてか信田の森を染め盡すらむ　隆祐朝臣

笹のはもしのだの森も秋くればつゆにはあへず色ぞうつろふ　從二位家隆卿

空蟬のなみだの露や結ぶらむしのだの森のちえの下草　從三位範宗卿

涼しさを楢のは風にさきだてて忍ぶの森に秋やきぬらむ　法橋顯明

なにしおはば忍ぶの森の紅葉ばのいかに時雨れて色かはるらむ　正三位經朝卿

夕立のしづくの森のした草は秋よりけなるつゆやおくらむ　衣笠内大臣

六二一 とは六
思ふことなにをか更にみ山なるしげりの森は我としらなむ　讀人しらず

くれなゐの木葉のみちる冬さへや猶もしらぎの森といふべき　親實（親意イ）法師

この歌判者清輔朝臣云右しらぎのもり耳とほけれどもし新羅社邊にさ

○寶治二年百首
○同（みかりのもり、國未勘之）
○六帖題、もり（みつのもり、美豆、山城）
○家集（みやこのもり）
○森（しのだのもり、篠田、信太、和泉）
○洞院攝政家百首、紅葉
○百首歌
○建保三年名所百首
○千五百番歌合
○寶治二年百首
○御集（しづくのもり、攝津、或國未勘之）
○題不レ知、しげりのもり、大隅）
○新羅社歌會、紅葉（しらぎのもり）

ろもりの侍るにやさらば所に臨みてよめらむに無ㇾ咎云々

○家集、すぎ村のもりを
はふきつゝいまや都へ時鳥過ぎがてになくすぎむらの森　道信朝臣

牧

○堀河院御時百首（みつのみまき美豆、山城綴喜）
夏くともいかゞとるべき草わかみ美豆のみまきにあるゝ春駒　基俊

○建保三年名所百首御歌
かりてほすみつのみまきの夏草は茂りにけりな駒もすさめず　順徳院御製

○同
玉葉夏 舟とむるみつのみ牧のまこも草からでかりねの枕にぞしく　俊成卿女

○同
雨はるゝみつのみまきのまこも草からで吹きほす淀の川風　正二位忠定卿

○同
くさふりて螢空しくたちぬなりみつのみまきの夕闇の空　從三位行能卿

○洞院攝政家百首、五月雨
五月雨にからぬ茂みのすゑはのみ美豆の御牧にのこるうき草　隆祐朝臣

○千五百番歌合、雜歌（あらののまき、國未詳之）
陸奥のあら野の牧の駒だにもとればとられてなれゆくものを　皇太后宮大夫俊成卿

○六帖題（おくのまき）
新六二 おくの牧の野とりの駒のかたなづけともすれば又あるゝ君かな　民部卿爲家

○文治六年女御入内御屏風、駒迎（たちのまき、陸奥）
はるばるとたち野のまきにひく駒のなづまずこえぬ相坂の關　正二位季經卿（三イ）

○喜多院入道二品親王家五十首
霧がくれたち野の牧にひくこまの音つゞくなりせたの長橋　野宮左大臣

○家集、人のもとへいひやりける能登國すゞのみまき（能登）
なづけたるすゞのみ牧の駒なれやかひし古野を忘れざりけり　祐擧

○返し
あはれにも駒かへりける心かないかなるすゞのみ牧ならむ　讀人しらず

六一 家 都までなづけてひくはをがさはらへみ（みつ家同）のみ牧の駒にぞありける（や有るらむ六） 貫之

六二 をがさ原へみのみ牧に荒るゝ馬もとればぞ懐くなづけてぞとる（こらが袖はゝ六） 讀人しらず

をがさ原へみのみ牧の放れ駒いとゞけしきぞ春はあれ行く 顯仲朝臣

新千續下 ひたちなるを野のみ牧の月草のうへし（つイ）は駒のおくにぞありける 大納言朝光卿

田

山里は籬のをだの苗代にかけひの水をまかせでぞみる 從二位家隆卿

行き通ふみちの小山田をり／＼にかはるしわざも民や苦しき 民部卿爲家

にひはりの道のよこ川を引き捨ててよゝのふる跡早苗とるらむ 同

田をうれへいへをうれふる山賤の心しられてねこそなかるれ

古の神のみとしろ跡しあれば今も種まけあまのむらわせ 參議爲相卿

田ある物は田をぞうれふる苗代のみづから身をば苦しむるかな 藤原爲顯

にひはりの十代の門田植ゑしより秋はねやこそ定めがたけれ 權大納言公重（實イ）卿

をしねほす山田も冬になりてこそ治まれるよの程は見えけれ 皇太后宮大夫俊成卿

こゝにみる春の小山田うちかへし思へば花も昔こふらし 龜山院御製

新六二 かた山の裾田の畦の水おちにくだりのみ行く身をいかにせむ 民部卿爲家

○家集、こまひきを（へみのみまき、甲斐或伊豆）
○馬
○堀河院御時百首
○をののみまきより有りける草をみて（をののみまき、常陸）

○百首歌（まがきのをだ）
○建長四年毎日一首中（みちのをやまだ）
○文應元年七社百首（みちのよこた）
○楚忽百首歌中
○楚忽百首
○堀河院御時百首、田家（そしろのかどた）
○正治二年百首（山田）
○正應五年白河殿の五十首歌合に
○六帖題（すそだ）

新六二 口あたりのさはの深田の霜どけにつたひかねたる畦の細道　光俊朝臣
○同(さはのふかだ)

新六二 山賤のそともの小田のかたあらしこぞの作りはしめもおろさず　正三位知家卿
○同(そとものをだ)

新六二 夕なぎに汐滿ち來らしみなとだのほなみにつたふ秋の浦風　同
○同(みなとだ)

新六二 浦風にはまだのをしねうち靡きはやかりし穗になりぞしにける　光俊朝臣
○同(はまだ)

新六 かりを田の鴫の上毛に降る霰たまもてとりをうつかとぞきく　信實朝臣
○同(かりをだ)

今更に水もまかせずそこ深き沼のうき田に早苗とるなり　民部卿爲家
○寛元三年結縁經百首(ぬまのうき田)

あきさゐる河添ひ小田の畦つゞきほのめき渡る夕づく日かな　後德大寺左大臣
○御集(かはぞひを田)

草迷ふせなかわさ田を掻き分けて入るとせしまにも裾ぬらしつ　好忠
○家集(せなかわさだ)

里遠みつくる山田のみもりすとたてるそほづにみをぞなしつる　同
○同(やまだ)

見えわたる刈田の面の冬がれにむら〳〵のこる畔(くろ)のたまざゝ　民部卿爲家
○貞應三年百首、冬田(かりた)

あらしおく田のものはくさ茂りつゝよの營みのほかや住みうき　前中納言定家
○人間葉翠因纖淺林下幽閑氣味深

石ひろふひばりのふじの河原田や急ぐ早苗のとりどころなき　源仲正
○家集、早苗(かはら田)

五月雨は深田の早苗みがくれてなにをかゆひも取りてかへらむ　同
○(ふか田)

昔きく神のまゝ田の種なれば二萬のみしねは八十倉ぞつむ　從二位行家卿
○文應元年大嘗會主基備中國稻舂歌(かみのまゝた)

たつのすむ冬のあらたのうねの野にひと村すゝき一よ宿かせ　從二位家隆卿
○洞院攝政家百首、旅(あら田うねの野)

三くさゐるあらたの氷うち解けてつのぐむあしぞ短かりける　權僧正公朝
○家集、百七十首中

みぞれふるを野の荒田にゑぐつめば誰かはきせむ菅の小笠を　顯仲朝臣

桑門　芹河や竹田の早苗さのみなどよのうきふしのかずをとるらむ　中務卿のみこ

萬三　櫻田へたづなきわたるあゆちがた汐干にけらしたづなき渡る　高市連黑人

あゆちがた汐みちぬらし櫻田のほむけの風にたづなきわたる　權僧正公朝

歌林二　雪にしくものなかりけり筵田のうへ野の原の冬のけしきは　賀茂政平

催馬樂　むしろだのいつぬき河に住む鶴の千歳をかけて遊びあらそふ　讀人しらず

三島江の入江の蘆をかりしきて澤べのをだはけふぞううめる　隆實法師（朝臣イ）

つくば山をかだの早苗急ぐとてせくかたしげきみなの河浪　後九條內大臣

しがの浦をちの濱田のかりしほに色付くみれば秋立ちにけり　民部卿爲家

もろ共にたつなもつまもいもせ山やま田の澤の水もぬるめり　藤原長能

おのづからしがの山田の里人も年にいくたびゆききなるらむ　民部卿爲家

さゞ波やしがのかみたの御戸代にけふとるなべは萬代のたね

みつや河末せきかけて春日野の野田の早苗はけふぞとるなる

住吉の岸田のはるの若草にたなれの駒はたちもはなれず

すみよしのあさ澤水のたえ〳〵に岸の荒田は種蒔きにけり

住吉の濱田の早苗おひぬとてけふぞ五月と急ぎとるなり

○家集（をのゝあれた）
○御集
○羇旅（さくら田、紀伊）
○家集、鶴
○冬歌中（むしろ田）
○題不レ知
○天治元年五月無動寺歌合、早苗
○柿本影供百首（をか田つくば山）
○建長五年毎日一首中（はまだしがのうら）
○ある女のもとにあそびて（山田いもせ山）
○文應元年七社百首（しがの山田近江）
○（しがの神田）
○（かすがのの野田、大和）
○（すみよしのきしだ、攝津）
○（きしのあらたあさざは）
○（すみよしのはまだ、攝津）

○六百番歌合、舊戀（ふるのあらた、大和）
○百首歌（ふるのわさだ）
○南北百番歌合（とばた）
○家集（そとも田）
○承保三年十一月源經仲朝臣出雲國名所歌合、長田縣（ながた、長田、近江）
○上野國（さの田、上野）
○題不知（ふしみの田、山城）
○千五百番歌合
○永久四年鳥羽殿歌會（ふしみの田、早苗）
○仁安三年二月善勝寺歌合、歸雁
○百首御歌（の田、陸奧）
○三百首御歌（あへの田、駿河）

我ながらふるの荒田と打ちすてて誰にゆきあひのわせ作るらむ　法橋顯昭

百首夏
みわかはの水せきいれて山となるふるのわさ田は早苗とるなり　從二位家隆卿

風の音は鳥羽田のおもにさきだちぬ淀の渡りに秋やきぬらむ　慈圓和尚

朝霧のたえだえかゝるそとも田はむらほにたてる心地こそすれ　清輔朝臣

此の歌は五宮にさゐれりけるにいづみ殿の御所の御前なる田にきりのところどころたちたるをみてと云々

なが田なるちもとの稲をかずにしてよむともつきじ君が齡は　親經

萬十四
上野のさの田のなへのむら苗にことは定めつ今はいかにせむ　人丸

萬九
おほくらの入江ひゞくなりいめ人の伏見のたゐに鴈渡るらし　讀人しらず

五月雨はふしみのたゐに水こえて庭までつゞくうちの河波　隆信朝臣

萬代
時くればたごもいとなし菅原やふしみの野田に早苗とりつゝ　仲實朝臣

さよふけて伏見の野田もあるものを宿かりかねて歸る鴈かも　行眞法師

霜こほりの田のうはてにせく池の汀になびくしの薄かな　後鳥羽院御製

早苗とるあへの田のもの村雨にさかこえてなく郭公かな　中務卿のみこ

畠

○六帖題

新六六 はりまなるしかまにつくる藍畠いつあながちのこ染をかみむ　信實朝臣

新六六 いたづらに荒るゝ園生の畠芹わびしげにてもあるよなりけり　正三位知家卿

園

○寶治二年百首

雨ふれば田なかの道は水こえて園生ふみわけかよふ里人　隆祐朝臣

○永久二年內裏御會

あすよりはひともすさめじ山賤のそのふの桃の花の夕かぜ　民部卿爲家

○千五百番歌合（もゝのその）

今よりやあくまで花もみちとせになるてふ桃の園をうつして　寂蓮法師

○三百六十首中（むめのその）

山里の梅の園生に春たてば木づたひくらすうぐひすの聲　好忠

○光臺院入道二品親王家五十首（たけのその）

竹の園まがきの菊の匂ふ袖いくちよ露にぬれてほすらむ　從二位家隆卿

○（しがのはなぞの）

にほのうみの霞ふきゆく春風に波もいくへのしがの花園

○永久四年百首（しかまのその）

かちそむるしかまのみ園かれはててあひみてすぎし神無月かな　仲實朝臣

畑

○百首御歌（とを山がた）

玉葉雜三 あはれなる遠山はたのいほりかなしばの煙のたつにつけても　順德院御製

○御集、山家（そののふるはた）

山里の園のふる畑あれにけり昔やこけのたねをまきけむ　後九條內大臣

○六帖題（やけ山はた）

新六一 風わたるやけ山畑の下もえもまたことゆかずさゆる白雪　民部卿爲家

新六
古枝のふしのみのこるうつぼぎのたてるも寂し畑のやけ山　信實朝臣

新六一
山もとに畑やく里の夕ぐれも遠きはほそき煙とぞみる

かた山の畑のかきほの杉原のたねよりもけにしげる夏草　同

○寶治二年百首、畠

萬代
人のすむ里のけしきになりにけり山ぢのすゑの賤のやけ畑　前大僧正行尊

この歌修行にいでて山をこゆとてと云々

○燒畑(やけはた)

巖

風ふけば波よせかくる岩の上のいつもの花のいつかあひみむ　前大納言隆季卿

○久安五年六月家成卿家歌合、戀

よそねじま苔むすいはを君が代に千度ぞなでむあまのは衣　花園左大臣家小大進

○久安百首

新六二
すみがたきわが心こそ悲しけれ巖のなかに宿はあれども　衣笠内大臣

○六帖題、巖

新六二
つもり行く歎きはつきじ少女子がなづる巖のはてはみるとも　正三位知家卿

○同

新六二
岩の上のかど〳〵しきもある物を人のこゆるをいたみだにせぬ　信實朝臣

○同

新六二
むす苔の深き巖の中とてもいかゞは風のきこえこざらむ　光俊朝臣

○同

荒磯に苔むすほどに年へたる巖はいつのまさごなるらむ　民部卿爲家

○岡屋入道攝政家二百首歌

新六六
谷深き巖の苔のみだれあひて昔のあとぞみえずなりゆく　同

○六帖題

あやまりは重き巖のみにしあれど沈まぬ舟を頼むばかりぞ　中務卿のみこ鎌倉

○同

○同
新六六 河岸のいはほにねざす岩つゝじ思ひいれどもかくれなのよや　民部卿爲家

○保延元年家成卿家歌合、祝
君が代に譬へていはば動きなきちゞの巖もことふりにけり　大藏卿行家（宗イ）（定イ）

石

○百首御歌、寄名所戀
ななひろの石よりも猶つれなきはひかれぬ人の心なりけり　土御門院御製

○祝の心を
君がよのときはの石は天下り少女の袖もいかゞなるらむ　前中納言匡房卿

○建長八年百首歌合
君が代は動きもあらじ苔のむすときはの石のいつもときはに　從二位行家卿

○六帖題
新六二 わが心くだけおちたる谷石をひきあぐる人のなきぞ悲しき　信實朝臣

新六三 こもり石の浪の下かとしげからじ渚のを舟心してこげ　同

○弘長元年百首
大井河ゐぜきの石を君がためひろひかくるはちよのかずかも　同

○仁安二年八月經盛卿家歌合、月
小倉山下ゆく水のさゞれ石もかずかくれなくてらす月かな　清輔朝臣

○六百番歌合
いせの海のしほせにさわぐさゞれ石の碎けて物を思ふ頃かな　從二位家隆卿

○隱居百首歌
沖の石の浪のさわぎにせめられてたへ難きよを猶すぐすかな　民部卿爲家

○天祿三年五月資子内親王家歌合
心あてにしらゝの濱にひろふ石の巖とならむよをしこそまて　讀人しらず

○天延三年三月法性寺太政大臣家石(石ナシカ)名所歌合
君が代の數にとりおくさゞれ石のうりふの山のまづなれるかな　同

○喜多院入道二品親王家五十首
沖つ風吹上の濱のさゞれ石や君が齡のかずにとるべき　禪性法師

○述懐中
○述懐百首
○文治三年百首、述懐（拾遺愚草）
○千首中
○家集
○永久四年百首、石
○同
○同
○（たゞ）をとこ待てる女にかはりて
○題しらず
○永萬二年重家朝臣家歌合、戀

石をう（にイ）つ水の契りはあひがたみむせぶ心はとほるよもなし　後九條内大臣
石をうつ光のうちによそふなるこの身のほどをなに歎くらむ　皇太后宮大夫俊成卿
こすなみの殘りを拾ふ濱の石のとをとてのちも三年すごしつ　前中納言定家卿
われとせぬもとの谷川やり水に石たてわたす奧山のいほ　民部卿爲家
ぬなは延ぶ池にしづめるたて石のたてたることもなき汀かな　西行上人
石さはもたてける人の心さへかたかどありて見えもするかな　俊頼朝臣
君がよの數にしとらばうちのぼるさほの河原の石もたらじな　源兼昌
君が代は千年に一つとる石のとを〳〵にならむ程をこそまて　俊頼朝臣
君が爲ゆたのをわけてひろひつる千曳の石に誰かあふべき　同
　このうたは伊勢のさい宮に侍りけるころいしなどりの石合といふことをせさせたまひけるにちひさきさうしを十つゝりていしのおほきさにてひとつ〳〵かき侍りけると云々
石とだになりける物を人まつはなどかわが身のけぬべかるらむ　能因法師
賴めつゝ來がたき人を待つほどに石にわが身ぞなりはてぬべき　讀人しらず
（歌林良材）
戀河に沈むにつけて思ふかなわが身も石になるにやおるらむ　藤原賴保
　此の歌判者俊成卿云左こひがはにしづむわが身もいしなどいへるふか

くかたき義なるべし但しこの名になる事は若し望夫石と申す事にやあらむそのかみぞおろ〳〵見侍りしかば武昌北山上有二望夫石一其狀如レ人云、昔貞婦ありけりその男とほき國へゆきけりわかれを惜しみて後山の上にたてりて夫を見送りけるが化してたてる石となりにけりされぼこひがはにしづむには思ひいづべしとおぼえれどもたゞ石になるといふばかりに侍るめりと云々

○永萬二年五月經盛卿家歌合、戀

あふ事の難きなげきにこひしなば我もや野べの石となりなむ　小侍従

此の歌判者清輔云望夫石はをとこの物へゆくを見おくりてたてりし女の石になれるなり戀をしてなれるにはあらねば戀の歌にはかなはぬよし申す人も侍るめれどそれはなどてかをとこをまちかれて石になりなむは定戀にてこそ侍りけめひが事にはあらず野邊と侍るぞあやしきと云々

○久安百首

あひみねど心ばかりは通ひ石の音にききても哀れしらなむ　待賢門院堀川

○同

さゞれ石の中の思ひのいかにして打ち出でぬ先に萌ゆるなるらむ　上西門院兵衛

○同

わが戀は山下かげのしづく石こゝらぬるくもしる人ぞなき　花園左大臣家小大進

○桐集(述懐)

思へたゞみづになげける石なれば浮ぶよもなく沈みぬるかな　後九條内大臣

○永久四年百首、石
たのめ猶河せの眞砂としふりてさこふの石とならむ世までに　仲實朝臣

○同
惜しからでなけもやられぬわが身こそ千曳の石の類ひなりけれ　藤原忠房

○保延四年督中納言經定卿家歌合
わが戀は千曳の石にあらねどもあふばかりなき音をのみぞなく　大藏卿行宗

○建長八年百首歌合
大空に河邊の石はのぼりつゝ星となるとも君は忘れじ　衣笠内大臣

此歌判者光俊朝臣云不ㇾ載二異國之撰一僅逃我朝之習俗歟云々

○建保三年内大臣家百首
新勅戀二
しらせばや思ひ入江のたまがしは舟さす棹の下にこたへて　家長朝臣

○一條太政大臣家三十首中に
假初のままの入江の玉がしはそことばかりの行方だになし　同

○家集
たづねかねけふみつるかな千早ふるみ山の奥の石のみましを　光俊朝臣

此の歌或抄云光俊朝臣鹿島社にまうで侍りけるに奥の御前とて不開の御殿よりは二三町ばかり東の山の中におはします御殿にてふるき神官なよびてこれに平なる石の圓なるが二尺ばかりなるやあるとなむとひ侍るにさる石ありとて御殿のうしろの竹の中にうづもれて侍りけるを掘り出でてけり此の明神天よりくだり給うて此の石の上にて座禪せさせ給ふ石なり萬葉集に石のみましと云ふこれなりとなむ神官にかたり侍りけると云々

○題不ㇾ知
萬十九
藤浪のかげみる水の底清みしづく石をも玉とぞわがみる　讀人しらず

○名所歌、しらいしな（しらいし）
とへかしな沖のしら石しらずとも物思ふ舟のなきこがるゝを　俊頼朝臣

○家集（いし）
ゆるぎなき大内山の石なれば千歳とるともおちしとぞ思ふ　同

細砂

○題不レ知
萬十一
沈みては水沫にうかぶ眞砂にも我なりにしか（はなりしか萬）戀はしなすな（て萬）　讀人しらず

○弘長三年玉津島歌合、濱霞
浦遠くかすみにけりな汐風の同じまさごの吹きあげの濱　前大納言爲氏卿

○同
浦風や吹きあげの濱の眞砂路にひとつになびく夕霧かな　從二位爲教卿

夫木和歌抄卷第二十二終

夫木和歌抄　卷第二十三

雜部五

題　海　湖　島　澳　江　池

海

新六四 君が代はそこひもしらぬわだつ海の駒うち渡す道となるまで　正三位知家卿

新六二 もゝたにのぬしといふなる海なれば水の心のそむくよぞなき　光俊朝臣

現存六 もゝ川のおちあつまれる渡つ海のからき鹽あひは一つなりけり　光明峯寺入道攝政

○千五百番歌合
よつの海の波靜かなる君が代に海士の命もうれしかるらむ　小侍從

○仁安元年俊成卿家歌合、祝
海原のみたび桑田になるをみし人にもまさる君がへむ世は　法印靜賢

○題不レ知
萬代 夕さればかぢ音すなりかづきひめ沖つ藻かりにいづるなるべし　人丸

○長歌
萬十九 へたに出で立ち　朝夕に　滿ち來る鹽の　八重浪に　靡く玉藻の　時の間も　中納言家持

○一條太政大臣家屏風に末松山
音にきく末の松山けふこそはみちくる浪のこえたえずみめ　能宣朝臣

○新羅國の山の見えければつしまにわたりて

[萬代] 舟出せしはかたやいづら對馬にはしらぬ新羅の山ぞみえける　津守國基

[新六二] けふは又なごろがたより風[新六 せ]やめてやゝ晴れわたる沖の朝なぎ　信實朝臣

風あれし昨日の海の名殘までけさもたゆたにおきつ白浪　前中納言爲實卿

○述懐百首

四方の海をひとつのけして汲みほさむ時にや[このイ]わが身なりも出づべき　俊頼朝臣

○ある所にて舟の字をさぐりえたり

こぎ歸れかぢもみとろしすはへしてすゝけにけらし沖津島崎　同

○承久二年四季百首

あれくらし浪間も見えぬ冬の日の海の面はゆく舟もなし　從二位家隆卿

○弘安元年百首

諸人のうきいつはりぞあまるらむ霞みてとほき海のおもてに　後九條内大臣

○地議百首中、寄月海

和田の原月をひたせる白波のやへのくままで影はすむらし　參議爲相卿

○祇園社百首、川

川は皆流れいりては海なればうみはかみなきほとけなりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○六帖題

わが袖の海となるをば津の國のながす涙のつもりなりけり　民部卿爲家

○百首歌

住吉の松のあらしに通ふなりあはのなるとの浪の音まで　慈鎭和尙

○題しらず

うしまどの浪の汐あひ常なれば思ひ思はずみえぬるものを　讀人しらず

○建保四年内大臣家歌合、寄海雜

淡路島難波をかけて見渡せば浪のいろはのあしでなりけり　從二位家隆卿

○後法性寺入道關白家百首、後朝戀涙の海

いまはとて涙のうみに梶をたえ沖にわづらふけさの舟人　後京極攝政

○五十首御歌

梶をたえ涙の海に漕ぎ出でぬとゆふつけ鳥のおとにも傳へよ　光明峯寺入道攝政

○家集、戀歌中

戀すればなみだの海にたゞよひて心はつねにうき鳥の浪　源仲正

○千首歌
わが身こす涙の海にうく舟のゆたのたゆたにぬるゝ袖かな
民部卿爲家

○家集
ひとこふる涙の海に沈みつゝ水の沫とぞおもひきえぬる
好忠

○家集、山した海
霜さゆるみぎはの朽葉ふみしだき山した海に千鳥なくなり
從二位家隆卿

○家集、法門歌みのりの海
かずならぬうき水草の跡までもみのりの海にいるぞ嬉しき
殷富門院大輔

○百首歌、法の海
法の海浪のかけてもきかぬ世にとみの小川の流れてぞしる
同

○寄人官十五番歌合、くるしき海
いける日の浮世の浪に漂ひてくるしき海の舟をしぞ思ふ
慈鎭和尚

○新古今竟宴おこなはれける時、ことばの海
雲葉
敷島や大和ことばの海をえてひろひし玉はみがかれにけり
後京極攝政

○御集、述懐
花のあみ結ぶ青葉の海をえて光なき身も世にやひかれむ
後九條内大臣

○雑御歌中
難波津はいまもこと葉の海の月さぞ蘆原のみちまもるらむ
同

○みかみ山にて南海はれて月限なく見えければ、南の海百首歌合
波とほき南の海はくもはれてみかみのやまにすめる月影
前大正隆辨

○寛元三年楚忽百首
男山よどのわたりの春の波みなみのうみにおもかげぞたつ
從三位爲實卿

○洞院攝政家百首、西の海
西の海げにもろこしの空なれやから紅にうつる日かげは
藻壁門院但馬

○光臺院入道二品親王家五十首、海旅
西のうみ夕しほたどる浪間より來しかたしるくいづる月影
從二位保季卿

○題不レ知、大海
萬七
大海に島もあらぬに天の原たゆたふなみにたてる白雲
讀人しらず

○千五百番歌合、はし立
風わたる松の下根のさよまくら夢路とだゆる天のはしだて
參議雅經卿

○最勝四天王院名所障子
たちまよふ波と霞の絶え間よりくもるにみゆるあまの橋立
知顧法師

かりかへるよさの浪路のくもゐまで春にかすめる天の橋立　俊成卿女

〇家集、給に橋立に馬に乗りたる人あり

こまならむ人はなれたる行方なく舟流したる天のはしだて　和泉式部

〇家集、題不レ知

はななみの里としきけば物うきに君引きわたせあまのはし立　同

〇康平六年十月公基朝臣家歌、海士橋立

あさりするほかげばかりをしるべにて心の通ふ天の橋立　讀人しらず

この里に跡たれそめしそのかみの雲路をかけしあまの橋立

〇建保三年名所百首

かりてほす浦のみる目もいとまなみこやよをわたる天の橋立　正三位知家卿

うまたまの夜わたる月の澄むさとはげに久方のあまの橋立　前中納言定家卿

〇雑歌中

ながむれば入日の影のうつろひて松の葉うすき海士の橋立　右近中將經家卿

〇あまのはし立をみてよめる

新撰 はるかなるいり海かけて沖津浪きくにこえたる海士の橋立　前大納言爲氏卿

〇題不レ知、伊勢海

萬十一 伊勢の海に鳴くなるたづのねもごろに君が聞えばわれ戀ひやむも　讀人しらず

〇題不知

萬四 伊勢の海の磯もとゞろによする浪畏き人に戀ひわたるかも　同

〇家集

いせの海に遊ぶ海士ともなりにしか波かき分けてみるめかづかむ　伊勢

〇題不レ知

萬代 伊勢のうみの渚を清みすむ鶴のちとせの聲を君にきこえむ　墨主

〇だいしらず

萬代 いせの海の朝滿つ鹽の辛ければかづきわびぬと海士もいふなり　小大君

〇建保三年名所百首

伊勢のうみの玉よる波にさくら貝かひあるうらの春の色かな　前中納言定家卿

〇六帖題

新六三 いせの海の磯のなか道急げども早あさしほは滿ちぞしにける　衣笠内大臣

○喜多院入道二品親王家五十首、旅
伊勢のうみ清き渚に駒とめてみやこのつとに小貝ひろはむ　源師光

○御集、海邊月
伊勢の海浪にたけたる秋の夜の有明の月にまつ風ぞふく　鎌倉右大臣

○筑前國に下りける時、いなみの海
萬三
なぐはしきいなみの海の沖津波ちへにかくれぬ大和しまねは　人丸

○長歌
我が大君の　神のまに　高くしらせる　いなみ野の　大海の
原の　荒妙の　ふぢ井の浦に　しひつると　あま舟とよみ
鹽やくと　讀人しらず

○六帖題
新六三
わぎも子がいなみの海の白浪のよるはすがらに碎けてぞ思ふ　衣笠内大臣

○御集
はりまなるいなみの海に舟出して朝漕ぎゆけば大和しまみゆ　中務卿のみこ鎌倉

○長歌（石見の海）
津のさふる　石見のうみの　ことさへぐ　からのさきなる
いくりにぞ　ふかみるおふる　荒磯にぞ　玉藻はおふる　人丸

つのさふる石見の海の深みるの深きうらみはほす袖ぞなき　光明峯寺入道攝政

○家集、いかごの海（近江）
いかでかはいかごの海に昔よりおひぬみる目を人のかるまで　相摸

○正應五年三島社十首歌、海霞、いづのうみ
伊豆の海や興津波路の朝なぎに遠島きえてたつかすみかな　爲道朝臣

○伊豆國歌
萬十四
伊豆の海にたつ白浪のありつゝもとけなむ物を亂れしめやも　讀人しらず

○箱根海を（相摸）
玉くしげ箱根の海はけゞにあれやふた國かけて中にたゆたふ　鎌倉右大臣

○三島社十首、山月
たまくしげはこねの山の峯ふかく湖みえて澄める月かげ　法眼慶融

○家集歌中（土佐、とさの海）
とさのうみに御舟浮べてあそぶらし都の冬は風ぞのどけき　家隆卿

○久安百首
ひ計りを頼みて出でぬこの旅はこくてもたゆきとさの舟路に　前參議隆親卿

○祝言
萬代
君が代は浪にわづらふとさの海の駒にまかする道となるまで　空仁法師

○ちねのうみ（陳奴、攝津）
現存六
ちぬの海の濱べの小松潮こえて浪の音にぞ秋かぜはふく　正三位知家卿

○題不レ知
萬六
ちぬの海の濱べの小松根深めてわれ戀ひわたる人のこゆべき　人丸

○寛喜元年女御入内御屏風、海邊網引、ちひろの海（伊勢又紀伊）
うちはへてながけき御代を頼め置く千尋の海の網のうけなは　西園寺入道太政大臣

○家集、春歌中
永き日のあまのたく繩打ちはへて千尋の海にかすみたなびく　從二位家隆卿

○題不レ知（懷中、近江）
秋風もたえてな吹きそわたの海の沖なる玉藻わがかづくまでに　讀人しらず

萬十一
大舟のかとりの海にいかり下しいかなる人か物思はざらむ

○家集
浪荒きかとりの海の夕汐にわたりかねたる世をなげくかな　光俊朝臣

此の歌に康元々年十一月九日鹿島社をたちて香取社に參りけるに其の海の渡をするに船おそくて濱づらに下り居る風あらくて思ひわづらふ程に風もゐぬ舟もつきて侍りければ日も暮がたに成りて侍りしかどしひて海をわたり侍りけるになごろはしづまらざりしと云々

○天仁元年大嘗會悠紀方御屏風（近江國）
よごの海の沖津白浪よせくればのどかにみゆる濱千鳥かな　前中納言匡房卿

○家集
よごの海にきつゝなれけむ少女子が天の羽衣ほしつらむやぞ　好忠

○讀人不ㇾ知、人麿

よごの海の君をみしまに引く網の目にもかゝらぬあぢの村鳥　西行上人

○家集中（豊後）

よさの海の内外の濱にうらさびて浮世を渡るあまの橋立　好忠

興作の海に島がくれ行く釣舟のゆくへもしらぬ戀もするかな　俊頼朝臣

○たごの入海（或本）

わかめ刈るよさの入海かすみぬとあまにはつげよいねの浦風　鴨長明

○家集中

浦島やよさの旅ねの秋の客はかなくあけしならひのみかは　同

○同

萬代

よさの海海士のしわざとみし物をさもわがやくとたるゝ鹽かな　和泉式部

○弘安元年百首

霧はるゝよさの浦松ほの〴〵と夕日かゝれる山のいりうみ　後九條内大臣

○常陸國歌

萬十四

常陸なるなさかの海の玉藻こそひけばたえすれあせか絶えせむ　讀人しらず

○家集、上總、（たるかのうみ）

弓張の月の宿れる底をみてなるかの海にあまのいるらむ　祐擧

○通しらず（越中）

萬七

なごの海のあさけの名殘けふもかも磯の浦わに亂れてあらむ　讀人しらず

○越中國歌

萬十八

なごの海に鹽のはやひはあさりしに出でむとたづは今ぞ鳴くなる　田邊福丸

○越中國任の時、長歌

萬十八

さふるそのこに　ひものをの　いつかりあひて　鴉鳥の　ふ　中納言家持卿
たりならびゐ　なごの海の　おきを深めて　まどはせる

○島水鳥

なごの海にあれたるあまの島がくれ風に片よるすがの村鳥　平經正朝臣

○岡屋入道攝政家百首、海湖

なごのうみの汐干のかたの秋霧に猶あらはれぬ磯の浦松　民部卿爲家

○家集、海眺望

なごのうみの汐干のかたは遠けれど目に近からし淡路島山　權僧正公朝

○戀歌中
家門 磯なつむなごの海士人こと問はむほすに乾かぬ袖はありやと　法橋顯昭

○筑前
なだのうみ清き渚の濱千鳥ふみおくあとを浪やけつらむ　伊勢

○長歌（紀伊）
紀の國の　むろの海べに　ちとせに　さはる事なく　萬代に
かくしあらむと　おほ舟の　讀人しらず

（題しらず（攝津）
萬十五 むこの海のにはよくあらしあさりする海士の釣舟浪の上にみゆ　讀人しらず

○家集、霧を
むこの海に海士の呼び聲聞ゆなり霧のあなたに網引すらしも　權中納言長方卿

○家集（丹後）
うちの海の釣する海士の舟に乘りてのりにし心つねに忘れず　人丸

○御集（攝津）
みなと風いたくな吹きそしながゐる野の海に舟とむるまで　鎌倉右大臣

○題不レ知
大海に嵐なふきそしながどりゐるなのみなとに舟はいるらむ　讀人しらず

○正治二年百首
しながゐるな野の海に舟とめて小篠が原の風をまちみむ　前中納言隆房卿

（題しらず
萬十二 のとの海に釣する海士のいさり火の光にいゆく月待ちがてら　讀人しらず

○洞院攝政家百首
のとの海のどかにかすむ春の日は沖にいでそふあまの釣舟　從二位家隆卿

○題不レ知（陸奧）
おくのうみ汐干のかたの片思ひに思ひやゆかむ道のなかてを　讀人しらず

○千五百番歌合
尋ねみる辛（つら）き心のおくの海よ汐干のかたにいふかひもなし　前中納言定家卿

○弘長元年百首
たのめてもあだし心をおくの海の荒き磯邊はよる舟もなし　常磐井入道太政大臣

○弘安元年百首、戀歌中
わが方はそむきの島の人ばなれしらず心のおくのあら海　後九條内大臣

○述懐百首（伊勢）

おふの海にしのまの海士のかづくてふ風のかゞみの排へ難のよや　俊頼朝臣

○弘長百首

置きまよふ霜深き夜の浦風に月もこほれるまののいりうみ　衣笠内大臣

○建長元年歌合（筑前）

こぎいでて松浦の海をながめつゝ月になれぬる秋のさよひめ　花山院内大臣

○題不レ知（越前）

萬三
けひの海のにはよくあらし刈るこもの亂れてみゆる海士の釣舟　讀人しらず

○布施の海にて、作歌（越中）

萬十七
ありそのさきに　沖津波　よせくる玉も　かたよりに　かつ　大伴池（池主カ）
らにつくり　いもがため　てに卷き持ちて　うちくはし　ふせ
の湖に　あま舟に　まかぢかひぬき　しろたへの　袖ふりかへ
し　跡もひて　我が漕ぎ行けば　おふのさき　花散りまがひ
渚には　あし鴨さわぎ　さゞら波

○越中國任の時、布勢の湖を

夕されば　てたづさはりて　いづみ川　きよきがうちに　出　中納言家持
でたちて　我たちみれば　あゆのかぜ　いたくし吹けば　湊に
は　白波たかみ　妻よぶと　すとりはさわぐ　あし刈りと　海
士の小舟は　入江こぐ　梶音高し　そこをしも　あやにともし
み　しぬびつゝ　あそぶさかりを

○題不レ知（長歌）

ふせの海　小舟つらなめ　まかいかけ　いこぎめぐれば　お　讀人しらず
ふの浦に　かすみたなびく　たるひめの　藤浪咲きて　濱淸く

白波さわぎ

〇題不レ知（筑前）
紫のこがたの海にかづき鳥玉かづきてはわが玉にせむ　同

〇安元元年閏九月歌合、見海上月（越中、越前）
西の海の山なき西をながむれば心にのみぞ月はいりける　道因法師

〇建保五年内裏歌合、冬海雪
さえわたる峯のくもよりこしの海の空ともなみの雪の潮風　俊成卿女

〇村雲のあさりの方にて海の近く見えければ（近江）
足引の山の高ねにのぼりてぞえなつ（がたカ）の海はちかくみえける　能因法師

〇永久四年百首、冬海
夕づく日えがたの海のいりしまに雲すはへしてみのもすゝけぬ　俊頼朝臣

〇題不レ知
萬十三 相坂をうちいでてみれば近江の海しらゆふ花に波たちわたる　讀人しらず

萬十一 近江の海しづく白玉しらずしてこひせしよりは今ぞまされる　人丸

萬七 近江の海へたはおほかりいづくにか君が舟とめ草結び（まくらせりけむイ）けむ　讀人しらず

〇長歌
萬十三 近江の海　泊八十有り　八十島の　島の崎々　有り立てる　花橘を　秀枝には　同

〇正治二年百首
君が代に近江の海をいくそ度桑田になせと定め置きけむ　小侍従

〇長歌
萬二 鯨（イサナ）とる　近江の海の　おきさけて　漕ぎ來る舟の　へにつきて　讀人しらず

〇家集（播磨、懷中）
かひなくてあかしの海の秋風に戀しき波ぞたちさわぎける　中務

〇題不レ知（攝津又長門）
萬七 時津風ふかまくしらすあこの海あさけの潮に玉藻かりてな　讀人しらず

萬十三 わぎもこに　戀ひつゝくれば　あごの海の　あら磯のうへに　同

○建保三年内裏歌合、湖上月（近江）
○建長七年顯朝卿家千首に
○東に下りける道にて（相模）
○六帖題（紀伊）、網
○題不レ知（若狹）
○洞院影供百首
○永仁大嘗會
○堀河院御時百首
○題不レ知
○家集（常陸）

はまなつむ　海士少女らが
あらつの海わきぬさまつりいはひても早歸りませ面變りせず
明けぬるかまた月影はたかしまやあしりの海をいづる釣舟　従二位家隆
たづが居し沖のしらすもかくろへぬあしりの海の五月雨の頃　源仲遠
今よりは思ひ亂れしあしの海の深きめぐみを風に任せて　源光行
此の歌路次記箱根山にもなりにけり岩が根高く重なりて駒もなづめばかりなり山中にいたりて水海廣くたゝへたり箱根の水海と名づく又あしの海とも云ふとも有りと云々
新六六 紀の海にたいひく網の沖かけておく程見ゆるうけの數かな　衣笠内大臣
わかさなるみかたの海の濱淸みい行きかくらひみれどあかぬかも　讀人しらず
おのづから北にはのこれ夜半の雲月はみかたの海もさやけし　後九條内大臣
しがの海や磯山おろししづかにて浪路のどかに通ふ舟人　前中納言光俊
春霞しかまの海をこめつればおぼつかなしやあまのとも舟　權大納言公實
萬十二 吾妹子をよそにやみむと越の海のしな野の海の島ならなくに　讀人しらず
波かゝるかゝりやいづこ常陸海のかしまが崎の蜑のいさり火　鴨長明
萬十七 すゞの海に朝開きして漕ぎくればなが濱の浦に月てりにけり　中納言家持

○兵部卿親王家出宴咏之時歌（攝津）
須磨の海釣りせし人もけふよりや千歳を松のえに渡るらむ　惠慶法師

○駿河國歌（駿河）
駿河の海をしべに生ふる濱つゞらいましを頼みはゝにたがひぬ　讀人しらず

○家集
現存六
霧がくれうたふ舟人聲ばかりするがの海の沖に出でにけり　信實朝臣

○康元二年毎日一首中（信濃）
すはの海の冬の里人われとしや氷を踏みて世を渡るらむ　民部卿爲家

○同
東なるすはのみ渡りいかならむ氷らぬしもぞあやふかるべき　同

○百首歌
とぢそむる氷をいかにいとふらむあぢむら渡るすはの水海　西行上人

○百首御歌
すはのとを音せで渡るあらしかな波は氷にたたばこそあらめ　慈鎭和尚

○久安百首
すはの海に氷すらしも夜もすがらきそのあさぎぬさえ渡るなり　清輔朝臣

○千五百番歌合
氷してかち渡りするすはの海に出でわづらふはかもの浮舟　法橋顯昭

湖

○寛喜元年女御入内
鳰の海は氷らぬ浪もなかりけりちさとにすめる冬のよの月　光明峯寺入道攝政

○康元二年毎日一首中
見渡せばにほの朝なぎ空はれてはるかにかすむ沖津島山　民部卿爲家

○建久七年百二十八首和歌
跡もなきわがたつ杣に杉ふりてながめ涼しきにほの湖　前中納言定家

○永久元年七月宇治御幸、水月
鳰の海やしたひてこほる秋の月みがく浪まをくだす柴舟

○岡屋入道攝政家百首、湖水鳥
さゆる夜はうき寢や寒きにほとりの名におふ海も初氷りつゝ　民部卿爲家

〇永久二年四季百首
さゞなみや玉藻にあそぶ鳰のうみの霞の隙は春風ぞふく　従二位家隆

〇名所歌中、はし本にて
いりうみの夕の浪はこゑなくてまつのみ浪にあらき潮風　参議雅相

〇乾元々年仙洞歌合、雑、湖
たかせ山朝こえ来れば濱松のいりうみかけて波ぞいさよふ　前中納言為兼

〇家集、永仁六年、湖中眺望
たかしやまこえ来てみれば濱まつの一すぢ遠き浦の入海　法眼慶融

〇題不ㇾ知
さゞ浪や志賀のおほわたよどむとも昔の人に又もあはめやも　人丸

〇百首歌、波揚無量自然妙響
よせかへる志賀のさゞ浪かずかずに岩に砕けて聲ぞ聞ゆる　藤原為顕

〇建保三年名所百首
志賀の海のしらゆふ花の浪のうへに霞をかけて浦風ぞ吹く　従二位家隆

〇西洞隠士百首、夏
しがのうみの袖吹きかへす山おろしにまたき秋たつ鳰の水海　後京極攝政

〇題不ㇾ知
萬七 さゞ浪のひらの山風うみふけば釣りする海士の袖かへるみゆ　讀人しらず

〇百首歌、湖歸鴈
おのれさへみるめは絶えぬかへる鴈にほの沖べの春の霞に　従二位家隆

〇同集
あふみがたみほのみさきの浦風に曇らぬ沖の月をみるかな　衣笠内大臣

島

〇題不ㇾ知
萬二十 曉のかはたれどきに島かげを漕ぎにし舟のたどきしらずも　讀人しらず

〇六帖題御歌、蓬
四五 古も名をのみ聞きしわたつ海のよもぎが島を尋ねてしかな　中務卿のみこ鎌倉

〇祝言歌
海原におのころ島のあらはれてわがすべらぎの御代ぞ久しき　中原師光朝臣

〇家集、水邊納涼

かは島の松の木陰のまどゐには千世の齢ものびぬべきかな　清輔朝臣

〇同戀歌中

河島の松の心はしらねどもつれなく見えて年はへにけり　隆祐朝臣

〇題不レ知（周防）

萬十五 草まくら旅行く人をいはひ島いく代ふるまでいはひ來にけむ　讀人しらず

〇寶治二年百首、島鶴

君が代をいく萬世とすむ鶴はいはひ島より祝ひ來つらし　前中納言定嗣

〇題不レ知（備中、出雲）

朝夕に定めなき世をなげくにはいき島にこそすむべかりけれ　讀人しらず

〇家集（伊勢）

白浪のいらごが島の忘れ貝人わするとも我忘れめや　基俊

〇題不レ知

萬一 うつ蟬の命を惜しみ浪にひぢいらごが島の玉藻かりしく　麻續王

〇幸行伊勢國の時留京

しほざゐにいらごの島へ漕ぐ舟に妹のるらむかあらき島わを　人丸

〇爲家卿家の百首

島ひゞくいらごが島の鹽ざゐにわたる千鳥の聲かすかなり　從二位家隆

〇下筑紫時（出雲又播磨）、長歌

萬十四 いへの島　あら磯のうへに　うちなびき　しゞにおひたる
なのりその　などかもいもに　丹比眞人笠丸

〇題不レ知

萬十五 家島は名にこそありけれ海原をあが戀ひきつる妹もあらなくに　讀人しらず

〇弘安元年百首

海遠く山もたゆたふあけぼのに浪もてふけるあまのいへ島　後九條内大臣

〇家集

うゐおきしたが家島の山櫻春行く舟のとまりなるらむ　從二位家隆

〇寶治二年百首

いもが島かたみの浦の藻かり舟よるべもみえず浪の心は　光臺院入道二品のみこ

〇題不レ知

萬七 藻かり舟沖漕ぎ來らしいもが島かたみの浦にたづかけるみゆ　讀人しらず

詞林
伊與の海のいはきが島は我なれやあふ事かたき鹽のみぞやく　讀人しらず

玉の浦はなれ小島の潮の間に夕ありするたづぞ鳴くなる　衣笠内大臣

荒磯にもまじりて思へや玉の浦の離れこ島は夢にしみゆる　讀人しらず

波にしく紅葉の色をあらふ故に錦の島といふにやあるらむ　西行上人

君なくてひとりぬる夜の床島は寄する涙ぞいやしきりなる　讀人しらず

桑門
よそに見し豐浦の島のふた心ありとしきけば我は賴まむ

のじまにや潮滿ちぬらし玉藻かるとしまもすぎずたづのなくらむ　法印定圓

面影のさきだつ月に音をそへて別れはちかの島ぞかなしき　後一條入道關白

白浪のかゝれる山を見わたせばちかの島にはあらぬなりけり　重之

淺ましや千島のえぞがつくるなるとくきのや（毒氣矢）こそ隙はもるなれ　左京大夫顯輔

やそしまの千島のえぞがたつか弓心強さは君にまさらじ　清輔朝臣

思ひこそ千島の奥を隔てねどえぞかよはさぬつぼのいしぶみ　法橋顯昭

曉やをじまが磯の松風にころもかさねよゆらのうら人　神祇伯顯仲卿

玉葉
あけわたるをじまの松の梢より雲にはなるゝ海士の釣舟　從二位家隆

ちりぬべきをじまが磯の紅葉ばにあらくもよする沖津浪かな　藤［原忠兼

あかし潟迫門とはきけど春霞わたりの島をなほぞへだつる　信實朝臣

○いはきのしま
○寶治二年百首（紀伊）
○題不知
○家集（伊勢）
○題不知（備中、美濃）
○弘安元年百首續歌（攝津又淡路）
○從一位倫子かくれて後十首歌よみ侍りけるに、島月を（肥前）
○家集
○（陸奧）
○家集、戀
○六百番歌合
○家集、松風曉冷といふ事を（伊勢又陸奧）
○長承三年九月顯輔卿家の歌合、紅葉
○寛元四年十禪師歌合、霞中孤島

○題不レ知（出雲又肥前、播磨）

萬三 いなみのも行き過ぎがてに思へれば心戀しきかこのしまみゆ　人麿

○柿本影供百首

けふはまた田鶴の鳴く音も春めきて霞みにけりなかこの島松　從二位行家

○六帖題和歌

かこのしま松風高くなくたづの聲きくなべにあけぬこのよは　中務卿のみこ鎌倉

○久安百首

はりま潟あかしのとなみ騷ぐなりしばしな出でそかこの島人　實清朝臣

○島

かこのしま沖のなごろや高からし岩間につたふ海士の釣舟　衣笠内大臣

○文永二年五十首歌合和歌（筑前）

山路よりみえしがみえぬ夕かな霞にけりなかさゆひの島　中務卿のみこ

○家集、戀（出雲）

萬六 玉藻かるからかの島のからきかな妹にあふべきかたのなければ　修理大夫顯季

○題不レ知

萬六 玉藻刈るからに（かこ）の島に漁りするうにしもあれや家思はざらむ　赤人

○最歌

萬六 まかぢぬき　わが漕ぎ來れば　あはぢしま　野じまを過ぎ　同
いなみつま　からに（かこ）の島の　島まより

○千首の歌（筑前）

逢ふこのかたの大島いたづらに心づくしの浪にぬれつゝ　民部卿爲家

○家集、戀歌中

海士衣かたのおほ島ゆき迷ひあはでこよひや浪にしをれむ　從二位家隆

○周防國麻生布浦行之時作歌

萬十五 筑紫路のかたの大島しましくもみねば戀しき妹をおきて來ぬ　讀人しらず

○建保三年名所百首（紀伊又備中）

夕浪のかけてぞこふるかみ島や磯まの浦に衣かたしき　從二位家隆

○不題レ知

つきよみの光を清みかみ島のいそまの浦に舟出す我は　讀人しらず

○神島伊勢國名所

秋をゆく神島山はいろきえてあらしのするゑにあまのもしほ火　鴨長明

此の歌は伊勢記云西行法師住み侍りける安養山といふ所に人歌よみ連歌などし侍りし時海邊落葉と云ふことをよめると云々

○寶治六年百首（丹波）
かち島の磯ふきこゆる潮風に夕浪さむみたづぞなくなる　従二位行家

○題不レ知
萬九
あかつきの夢に見えつゝかち島の岩こす浪のしきて思へば　式部卿宇合

○千首歌
六藏
秋の夜のあらひの崎のかさじまにさし出づる月は草陰もなし　民部卿爲家

○題不レ知
萬十二
草陰のあらひのさきのかさ島をみつゝや君が山路こゆらむ　讀人しらず

○柿本影供百首
尋ねきてたゞくり返しかぐら島いはばやものを浪はかくとも　後九條内大臣

○かさまの島さはのこほり　周防）
あらしだにかさまの島を吹きやまばさはの氷は薄くなるらむ　祐擧

○家集
よそね島岩の浪間をとび迷ふ淸水をみれば飛鳥井と名に流れたる　俊頼朝臣

○題不レ知（懷中趣後又備中）
さよ更けて月たけ島の影みればふしうき旅のねをのみぞなく　讀人しらず

萬七
たけ島の跡白浪はとよむともわれはいへ思ふいほり悲しも

○家集、千島を
たけしまの跡白浪のをちかへり磯もとゆすりなく千鳥かな　權僧正公朝

現存六
たけ島によする小浪幾かへりつれなきよゝをかけてこふらむ　民部卿爲家

○名所島
海士のたく煙の末やたけ島の名に立ちそめて代々をへぬらむ　參議爲相

○建長七年顯朝卿家千首歌
代々をへておのがねぐらのたけ島のふしなれてなく鶯の聲　前中納言雅言

○家集（下總又近江）
現存六
たか島のとほつ沖べを漕ぐ舟のしげぬくかぢは聲ほのかなり　従二位行家

○御集、湊月（紀伊）
玉津島みがかるゝよのみなとより時にあへりと月やすむらむ　後九條内大臣

○徒然百首、島鶴
あしたづの心をしらば玉津島代々につたふる跡な忘れそ　民部卿爲家

○永久四年七月忠隆家歌合、薄
玉津しま岩ねの薄ほにいでてまねけばかへる和歌の浦浪　源　兼昌

○玉津島三首歌合、島春月
たまつ島磯べの松の木の間よりおぼろにかすむ春のよの月　右兵衛督爲教

○題不レ知
六三
玉つしま入江の小松おいにけりふるき御幸の事やとはまし　讀人しらず

○同
玉津島磯の浦まのまなこにも匂ひてゆかないももふれけむ　人麿

○建保三年名所百首（攝津）
霰ふる田蓑の島のとまやかた名にはさはらずはらふ袖かな　俊成卿女

○千五百番歌合
誰かきく難波のしほのみつなべに田蓑の島の鶴のもろ聲　慈鎭和尚

○建保三年名所百首
雨による田蓑の島のあま衣さらではぬれぬあまの袖かな　順徳院御製

○題不レ知（山城又河内）
萬七
たち花の島にしをれば川遠みさらさでぬひしわがした衣　讀人しらず

○長歌（越中）
津なしとる　ひみのえ過ぎて　たこのしま　とひたもとほり　中納言家持
あし鴨の　すだくふる江に　をとつひも

○題不レ知
一字抄
あまた度君が心をみちのくの田子の浦島うらみてぞふる　讀人しらず

○天喜元年八月韻家朝臣家越中國名所歌合、立島（越中）
いつとなくもしほの煙たつ島にたなびきそふる春霞かな　同

○題不レ知（出雲）
萬七
少女等がをるはたかみをまくしもてかゝげたく島浪間よりみゆ　同

○承保三年十一月源經仲朝臣出雲國歌合、燒島戀
人しれぬわが戀なれやたく島のあまのもしほの絶えぬ煙は　藤原通具

○文應元年百首、島螢
たはれ島浪のぬれぎぬきる人の思ひをみせてとぶ螢かな　權僧正公朝

○百首御歌（紀伊）
汐たるゝ海士の袖しま漕ぎかくれおさふる舟も人目よくらし　後九條內大臣

○[illegible]十四年三月輔子內親王家名所歌合、つゆしま
朝毎におきやますらむにごりなき玉をしけるとみゆるつゆ島　少將

六帖
白玉をしけるかはぎのうつるとも見えもわかれずひかる露島　陸奥

○題不レ知（出羽）
六帖
別るれど別ると思はず出羽なるつがるの島のたえじと思へば　讀人しらず

わが命ながとの島の小松原いく世をへてか神さびわたる

○千五百番の歌合
君が代は長とのしまの小松原神さびてまたわかばさすまで　正三位季經

○家集（攝津）
霧はるゝゐな野を行けばむこの島月をぞみつる宿はなくして　信實朝臣

六三
下野やむろのや島にたつ煙思ひありとも今こそはしれ　讀人しらず

○戀歌中
雲葉
まてしばし煙の下にながらへてむろの八島も人は住みけり　隆祐朝臣

○題不レ知
歌林
室の浦のせとのなき島なきをれば濡れにぞぬるゝとふ人はなし　俊惠法師

○家集、島松雪（攝津又紀伊）
浪かけぬまつの梢も白妙にふりつむ雪のうらの初島　民部卿爲家

○同集
古來歌
夢の中に行きてやみましかへすてふ夜半の衣の浦のはつ島　中務卿みこ鎌倉

○家集、海邊雪
湊こす汐風寒し紀の國やうらのはつ島雪はふりつゝ　權僧正公朝

○建仁元年老若五十首歌合（丹後）
ながむれば松の木影にほのぐとあくるもつらき浦島の月　後鳥羽院御製

○大宮太政大臣家にて浦島の子といふ事をよめる
うら島を浪もあけくれうつせ貝あまのはこのみ空しと思ふに　俊頼朝臣

○長歌

萬九 水の江の　浦島の子は　鰹釣り　鯛釣りかねて（ほこり萬）　七日まで　家にもこずて　讀人しらず

○題不レ知

萬十一 牛窓の浪の潮ざゐ島ひゞきよがれし君にあはずかもあらむ　同

○御集

ながめばや言のはだにもかはるなるうるまの島の秋のよの月　中務卿のみこ

○題不レ知（能登又豊後、豊前）

うたの島岸のしたには音信れて舟にはのりの聲ぞきこゆる　俊頼朝臣

○新御歌中

古來歌合 ながむれば思ひみだるゝことぞなきうどのこ島の有明の月　法性寺入道關白

○家集（陸奥又駿河）

祈りつゝ猶こそたのめみちのくにしづめたまふなうき島の神　爲仲朝臣

うき島の松のみどりをみ渡せば柞がすゑも紅葉しにけり　元輔

○一條太政大臣家障子繪

わたつ海の底にねざさぬうき島は龜のせなかにつめる塵かも　能宣朝臣

○建保三年名所百首御歌、浮島原

ときしらぬ山は雪けの雲ながら有明の月のうきしまの松　順徳院御製

○同

富士の山たかねの風や通ふらむ今朝ゆき白し浮島の松　僧正行意

○題不レ知（尾張、懷中）

舟よするいさりの島は風ふかで浪もたたでやのどけかるらむ　讀人しらず

○寶治二年百首（出羽）

ふりたつるゆづゑもみえず夏草の野島が道を過ぐる狩人　後嵯峨院御製

○題不レ知

萬三 なはの浦をそがひにみゆる澳の島こぎまふ舟は釣をすらしも（せす萬）　赤人

○五百首御歌、島紅葉

紅葉こそそむきにみゆれなはの浦時雨やおくの島めぐるらむ　後九條内大臣

○家集（播磨又伊豆、備前）

おほ島やをちの汐あひを行く舟の梶とりあへぬ戀もするかな　惠慶法師

〇建長八年百首歌合
さりともと身のうきことはおほ島の神の心をたのむばかりぞ　左近中将具氏

〇寄島祝言
萬代
おほ島や浪間に急ぐはや舟のほに出でずしてこひ渡るかな　卜部兼直

〇羈旅、羈旅歌（大和）
あまさかる八十島傳ひ漕ぎ行けば昨日もけふも大和島みゆ　後九條内大臣

〇備後守範伊へ下りける時餞せさせ給ふとて（陸奥又常陸）
人しれず思ふ心の深ければいはでぞ忍ぶ八十島の松　謙徳公

〇長久元年五月良子内親王家歌合うら人の手ごとに貝ひろひたる所
うらわかす八十の島人うちむれて一つ心にひろふ貝かな　讀人しらず

〇家集、みちのくへ下りける人をしのびて
末をこす浪だになくば今こそはねはあらはれぬ八十島の松　主殿

〇高倉院入道二品親王家五十首、眺望
海士の舟八十島つたふ浪の上もこぎのく跡は松のひと村　寂蓮法師

〇春宮女御の實綱屏風に、出羽の八十島に舟に人のある所
八十島の浦の渚をなげきつゝとまればとしもあまたへぬべし　元眞

〇百首歌
もゝづたふやそ島かけてみ渡せば容こそ海のへだて（きはめイ）なりけれ　皇太后宮大夫俊成

〇同
八十島の松の葉數をかぞへつゝ今ゆくすゑにくらべてしがな　重之

〇題しらず（拾遺）
淀川ややそぢが島にすむ千鳥はしにてなどかはをくゞるらむ　讀人しらず

〇壱岐、懐中
海士のかるみるめの島に白雪のまだら島にもふりかゝるかな

〇弘安元年百首（陸奥）
千里まで枝さしかはす松島はいづれの木よりなりはじめけむ　後九條内大臣

〇建保三年名所百首
更くる夜を心一つに恨みつゝひとまつ島のあまのもしほ火　前中納言定家卿

〇寶治二年百首（陸奥）
すむ鶴も千世に千とせや重ぬらむ岩ねにおふるまつが浦島　常盤井入道太政大臣

〇同百首、島のつるを
あしたづのなくねも遠くきこゆなり浪しづかなる松がうら島　源俊平

○六帖題、あま
鹽たるゝあまにその名をまがへてや住み初めけむまつが浦島　權僧正公朝

○康平三年毎日百首中
夏かりの沖のふるえの寂しさにいとゞ戀しき松がうら島　民部卿爲家

○六百番歌合、近戀、(陸奥)
へだてけるまがきの島のわりなきに住むかひなしやちかの鹽竈　法橋顯昭

(海　松
明玉
鹽竈のまがきの島のそなれ松浦寂しくも年ふりにけり　從三位基雅

○公任卿家歌合
海士の住むまがきの島のいさり火に色見え紛ふとこなつの花　惠慶法師

○戀歌中
古來歌
松たてるまがきの島の名にぞ聞くかはらぬ色の人のへだては　經平卿

○題不レ知(山城)
槇の島さらしかけたる手作りに見えまがふまで鷺ぞむれゐる　素覺法師

○久安五年七月山路歌合、月
くまもなき月の光をひるかとて布やさらせるまきの島人　藤原宣兼

○六帖題、深
槇のしま舟さしよせて夏の日にすがもかるなり宇治の川をさ　權僧正公朝

○建長三年九月十三夜十首歌合、名所月
たれしかも見て忍ぶらむかるもかくふするゐの島の秋のよの月　衣笠内大臣

○堀河院御時百首(備前又阿波)
難波がたあさみつしほや高からしこ島をさしてたづ鳴き渡る　修理大夫顯季卿

○康元元年毎日一首中
あさまだき沖のこ島のはなれ岩も潮みちくらし見えずなり行く　民部卿爲家

○御集、衣の島
いやましに夜さむにもあるか浪のうつ衣の島の秋の浦風　中務のみこ

○題不レ知(山城)
武士の八十宇治川のえびす島おち來る水のたけくもあるかな　讀人しらず

○花月百首御歌(出羽又陸奥)
あたらしやえぞが千島の櫻花ながむる色もなくてちるらむ　慈鎭和尚

○家歌
いたけもるあま見る時になりにけりえぞが千島を煙こめたり　西行上人

○洞院摂政家百首、眺望（淡路）
○堀河院御時百首
○家集、海路時雨
○弘長元年百首、海路
○題しらず
○（淡路又阿波）
○家集、雲遠霞
○文治六年五社百首、霞
○長歌
○寶治二年百首
○題不ㇾ知（長門）

浪たてる浪の行くてもかすむよの月のみやこに淡路島山　後九條内大臣
淡路島こ島が磯にあさりするたな無し小舟いく世へぬらむ　大納言師頼
松風のふく音すればあはぢ島時雨すぐとてとま葺ぬなり　權中納言長房
汐風のなるとばかりに淡路島そがひにみえて渡る舟人　民部卿為家
七萬 荒磯こす浪をかしこみ淡路しま見ずてや過ぎむこゝた近きに　讀人しらず
標中 淡路島汐つをさしてこぐ舟のなはふりにしを淺からぬやは
住よしの岸にむかへる淡路島あはれと君をいはぬ日ぞなき　人麿
萬三 むこの浦こぎまふ小舟粟島をそがひに見つゝともしき小舟　赤人
萬七 あは島に漕ぎ渡らむと思へどもあかしのとなみいまだ騒げり　讀人しらず
もゝづたふ八十の舟路の夕霞いくへ隔てつ粟の島山　重之
秋霧にむこの浪路を見渡せばほのかになりぬあはのしま山　皇太后宮大夫俊成
萬四 ひなの國へに　たゞむかふ　あはぢを過ぎて　あはしまを　讀人しらず
そがひにみつゝ　あさなぎに　かこの聲よび　ゆふなぎに
かぢおとしつゝ　なみのうへを
なきすみのふなせを過ぎて今みればそむきにかすむあはの島山　光俊朝臣
長門なる沖つかり島おくまへてわが思ふ君は千とせにもがも　讀人しらず

○綱（紀伊）
六三 あふ事をあとぎ（こイ）の島にひく鯛のたびかさならば人知りぬべし　同

○家集
ちゝのほのちゝえの海につく程はのどけからなむ秋あらしの島　祐擧

この歌はこれのぶの朝臣びぜん（備イ）へ下りしにすぎ箱にあふぎ三十ばかりしてやりけるに秋あらしの島といふ所のかたを書きて舟いとおほかるにと云々

○題不レ知
萬七 夢にのみつきて見ゆればさゝ島の磯こす浪のしきしく思ほゆ　讀人しらず

○寶治二年百首
さゝ島の磯の白浪たづぞ鳴くすむや汀の夜寒なるらむ　從二位顯氏

○弘長二年中務卿親王家歌合（讃岐）
夕さればさみねの島になく千鳥あら磯みちに汐やみつらむ　顯盛

○讃岐狹島觀石中死人作長歌
たへなりし　さみねの島の　あら磯に　いほりてみれば　浪の音の　しげき濱べを　人麿

○題不レ知
萬六 やまと路の吉備のこ島をすぎ行けば筑紫の小島思ほゆるかな　大納言大伴

○七百首歌中（備中）
大和路のきびの小島は遠けれどちへのいほへの浪間よりみゆ　權僧正公朝

○寛元四年日吉社歌合
行末のこゝろづくしに大和路のきびのこ島は霞こめたり　正三位知家卿

○つくしにて水島渡る時（豐前又長門）
萬三 ききし事まことたふとくあやしくも神さびをるかこれの水島　長田王

○寶治二年百首、島鶴（陸奥）
心ありてなくにはあらじをぐろ崎みつの小島のたづのもろ聲　辨内侍

○題不レ知（陸中）
をぐろ崎みつの小島にすまばこそ都のつとに人もさそはめ　讀人しらず

○家集、建保中
なぐろさきみつのこじまの夕霧に棹なし小舟行方しらずも　従二位家隆

○つくしへ下る道にてみち島の花を見て（未國）
老の浪よをうみ渡る旅なれば心をぞやるみちしまのはな　太宰大貮高遠

○弘長元年中務卿親王家の百首
わかれぢに身をやくおきの數そへてみやこ島べにとぶ螢かな　權僧正公朝

○家集、熊野山二十首（未國）
三熊野い浦わにみゆるみふね島神のゆききにこぎめぐるなり　少將內侍

○家集
そこのせに誰棹さしてみふね島神のとまりにことよさせけむ　廬主

○みてくら島といふ所をすぐとて（攝津）
夕かけてみてくら島をすぎゆけばその川上にたむけてぞさす　俊頼朝臣

○家集（攝津又筑前）
夕霧にみしまがくれしをしのこのあとをみる〳〵惑はるゝかな　紫式部

此の歌はなくなりにける人の親のてして書き付けたる物をみてよめる

と云々

○すけ
現存六
武夫のゆづるに卷けるみしま菅みしまゝながらとけぬ難面さ　正三位知家

○家集（豐前）
村雨にぬるゝ衣のあやしきに猶みの島の名をやからまし　重之

○（筑前）
みやこ人しがの島べと急げどもかのこまだらに波ぞたつめる

○題不レ知（常陸）
歌林
あきさるるうなかみがたをみ渡せば霞に浮ぶしたの浮島　従三位頼政

○家集、島を（淡路）
うつすともふでもおよばじ淡路なるゑ島の磯にかゝる白波　權中納言長房

○文應元年七社百首
うすくこく色どり渡る時雨かなゑ島がうへの木々の木ずゑを　民部卿爲家

○最勝四天王院名所御障子
たづのなくわかの浦風ふきぬらしゑ島の浪に月渡るみゆ　參議雅經

○題不レ知（豊後）
○御集、鶴
○永久四年百首（備後又筑前）
○題不レ知（尾張、備中）もとめ島
○家集（越後又紀伊）
○述懐、百首歌
○家五十首、眺望
○喜多院入道二品親家五十首
○家集、御歌中
○題不レ知
○千五百番之歌合

玉津島昔のあとに風ふけばゑ島にかゝるわかの浦浪　慈鎮和尚

萬二　いもが名は千世に流れむ姫島の小松がうへに苔むすまでに　讀人しらず

姫島の小松がうれにゐるたづは千年ふれどもとしおいずけり　鎌倉右大臣

ひく島のあみ（きイ）のうけ舟浪間よりかうてふま（らイ）すとゆふしでてみゆ　俊頼朝臣

白波のたちのみかくすわかめ草もとめ島にやあまは程へし　讀人しらず

からすさぎの濱の碁石と思ふかな白もまじらぬすが島のくろ　西行上人

あはせばや鷺と烏と碁をうてばたえしすが島くろしろの濱

すが島を渡るあきさの音なれやそらめかれても世を渡るかな　俊頼朝臣

澳（おき）

目もはるに沖かけさかり行く舟はかこの聲こそまづはきえけれ　喜多院入道二品のみこ

尋ねける天の河にや通ふらむ沖こぐ舟の雲にいりぬる　野宮左大臣

はれぬれば山もみえけりわだの原雲こそ沖の汀なりしか　覺延法師

礒にをる浪の間しげくみゆるかな沖になごろや高くみゆらむ　西行上人

萬十五　汐干なば又も我こむいざゆかむ沖つ潮ざゐたかく立ちきぬ　人麿

これやさは秋のかたみの浦ならむかはらぬ色を沖の月かげ　前中納言定家

○堀河院御時百首
手もたゆく浦づたひして漕ぐ舟は沖のなごろをおつるなるべし　權中納言師時

○家集、月歌中
はりま潟なだのみ奥にこぎ出でてあたり思はぬ月をながめむ　西行上人

○最勝四天王院名所御障子
難波江や蘆のは白くあくる夜のかすみの沖に鴨もなくなり　後鳥羽院御製

○承安二年廣田社歌合（七首中）六社湊
朝なぎにおまへの沖を漕ぎいでて雲をば海のものとしりぬる　隆信朝臣

○建仁元年十首歌合、海上曉霧
しがの浦やいづくを霧のへだつらむ浪より出づる有明の月　大納言通具

○寶治二年百首、海眺望
清見潟うち出でてみればいほ原のみほの沖つは浪しづかなり　前大納言爲氏

○堀河院の御時百首
かざはやの湊つ潮ざゐ高くともいたてにはしれむこの浦まで　權大納言公實

○建仁元年十首歌合、湖上曉霧
志賀の浦やにほてる沖に霧こめて秋もおぼろの有明の月　後鳥羽院御製

○最勝四天王院名所御障子（肥前）
白妙のひれふる雪を峯たかみまつらの沖のとほつ舟人　大藏卿有家

夢の夜は玉ゆらもなしたまくしげ二見の沖にあくる月かげ　從二位家隆

哀れとやかすむにつけて鹽竈の沖こぐ舟のとほざかるころ　後久我太政大臣

○洞院攝政家百首、曉雲
雲のゆくかた野の沖やしぐるらむやゝ影しめる蜑のいさり火　前中納言定家

○建保三年内大臣家百首、江月
秋深き玉江の沖のうき枕人はいづくに月をみるらむ　從二位家隆

○同集、攝津
理春六
霞たつ難波のおきの朝ぼらけかくこそは見め春のけしきを　後九條内大臣

○家集
なごの浦浪だに今朝ははげしきにいかになるとの沖騒ぐらむ　俊頼朝臣

○家集、しらせてやしむ戀
わが戀はみしまが沖にこぎいでてなごろわづらふ海士の釣舟　西行上人

○冬歌中
はまなかはいり汐寒き山颪にたかしの沖もあれまさるなり　土御門院小宰相

○建保三年名所の百首（播磨）
古來歌
とりし火のあかしの沖のとも舟のゆく方たどる秋の夕霧　前中納言定家

○喜多院入道二品親王家五十首
はるばるとあかしの沖をこぐ舟のやがて浪間に影ぞきえゆく　源師光

○承安二年廣田社歌合（攝津）
朝ぼらけあしやの沖をゆく舟のよそ目は鴨のゐるかとぞみる　按察使公通

○家集
浪高きあしやの沖をかくる舟のことなくて世を過ぎむとぞ思ふ　西行上人

○永久四年百首、唐人（筑前）
海原やはかたの沖にかゝりたるもろこし舟にときつくるなり　源兼昌

○家集
けふの日はぬさよくまつれ舟人のかとりの沖に風むかふなり　從二位家隆

江

○建長四年毎日一首中
せきわくるのだの入江の澤水にこほりてとまる冬のうき草　民部卿爲家

○建仁二年五十首、澤邊月
人しれぬあしまに月の影みえていり江の澤に秋風ぞふく　前中納言定家

○仙洞五十首、江上月
旅人の送りし秋のあとなれやいりえの浪にひたす月かげ　後京極攝政

○御集、月歌五首中
四の絃のしらべは浪にきこえねど入江の月に昔をぞ思ふ　後鳥羽院御製

○百首御歌中
舟とむる入えの月のかげすみて笛の音寂し夜半の浦風　中務のみこ

○六帖題御歌、むら雨
舟とむる入えの浪におどろきて昔おぼゆる夜半の村雨　同

○閑居百首、贈答
別れけむ入えの舟のあととめて月をぞおくる荻の上風　光俊朝臣

○六帖題
舟とむる秋のいりえの月影にひかりたまらずちる桂かな　民部卿爲家

○大井川行幸入江松年へたる
龜山にいざ言とはむこのえなる松のみどりはいく世へにきと　花山院御製

○建保、秋歌中
水清きふもとの入江霧はれて山路あきなる雲のかけはし　後京極攝政

○旅歌中
山もとの入江の舟やくだすらむ月ぞはるかにさしのぼりぬる　從二位家隆

○江五月雨を
五月雨にゐどのうはての水こえて入江のす鳥今かたつらむ　右兵衛督基氏

○寛喜元年女御入内御屏風
いつかとぞ待ちし沼えの菖蒲草けふこそ永きためしにはひけ　前中納言定家

○正治二年百首、花落城中地春深江上天
春の空入江の浪にうつるいろ都もふかく花やちるらむ

○題不レ知
萬十一 あしたづの騒ぐ入江のしら菅のしられむ爲と戀ひいたむかも　讀人しらず

○遠江國歌（遠江又尾張）
萬十四 遠つあふみいなさ細江の澪標（みをつくし）あれを頼めて逢はましものを　同

○海道宿次百首、みつけ
我ぞなくいなさほそ江の友千鳥あとふみつけし昔思へば　參議爲相

○筑紫の道にて、いかのえ
風を痛みながゐしつべきいかのえにゆめ清ぎよすな藻菜刈る舟　太宰大貳高遠卿

○題不レ知（攝津）
萬二十 堀江よりみをさかのぼる梶の音のまなくぞならば戀しかりける　讀人しらず

萬二十 堀江より朝潮みちによるこつみ（モイ）かひにありせばつとにせましを

萬二十 さきもりの堀江こぎ出づるいづて舟梶とるまなく戀はしげけむ

○難波行幸の時
萬十八 堀江にはたましかましを大君の御舟こがむとかねてしりせば　佐保左大臣

堀江よりみを引かしつゝ御舟さすしづをのともは河のせまをせ　田邊福丸

○六帖題、江
水口はみだれほり江のしほがれにひかれていづるまつら舟かな　権僧正公朝

○家會二百首歌
玉島の堀江をかけてかすむなり風をまつらの浪のうへの月　前中納言定家

○題不レ知
かものゐる難波堀江に月さえてこやの蘆がきかずもかくれず　中宮権大夫家房

○湊中遊帆と云ふ事を（淡路）
淡路潟梶の音すなりちたの江のあさけの霧に片帆かくれて　紫金臺寺入道二品のみこ

○家集（伊勢）
桑門
かげろふのをののふる江をこす潮の湊やいづく春の夕なぎ　光俊朝臣

○建保三年名所（紀伊）
ひとなみに君忘れずばわかの浦の入江のもくづ數ならずとも　俊成卿女

○御集
汐風はなる尾の松に音づれてわたの入江にのこる月影　紫金臺寺入道二品のみこ

○（近江）
眞野の浦の淀の濱べの明けがたに櫻よせくるひらの山風　衣笠内大臣

○洞院攝政家百首（近江）
ふみしだくよこの入江の薄冰わたればぬるゝかち人の袖　家長朝臣

○後鳥羽院御時八月十五夜撰歌合
湖上月明
にほてるやよこの入江のなみ晴れて月よりうへに松風ぞふく　如願法師

○洞院攝政家百首
澳津風たつの細江のしき浪にかさなるものは恨みなりけり　従二位行能

○六帖題
新六三
沖つ浪たつのほそ江の浦がくれ風もふくやととまる舟人　正三位知家

○家集、秋江眺望
拾ひのこす玉津島江にこぎかへりいづれの秋かまた月はみむ　前民部卿雅有

○寶治二年百首江眞（陸奥）
蘆の葉のしげみに露をぬきとめて玉つくり江に村雨ぞふる　正三位知家

○江月
湊ぢにいさ舟とめて今夜われたまつくり江にてる月をみむ　前中納言高定

○寛治六年五月五日宗通卿家歌合
玉の江におふる菖蒲（あやめ）の根をみれば末の世長きためしなりけり　源經仲

〇百首御歌合（越前又攝津）
契りをや玉江の水に結ぶらむかへらぬ鴈の聲きこゆなり　後鳥羽院御製

〇家集
家下
鴨のゐる玉江におふる花がつみかつよみながらしらぬなりけり　俊頼朝臣

〇題不レ知（播磨）
萬六
風ふけば浪か立たむと待つほどにたつの細江に浦がくれせり　赤人

〇六帖題御歌
さ夜くく吹くつたの細江の汐風になく小夜千鳥うらがくれつゝ　中務卿のみこ

〇夏歌中
新撰六
夜もすがらつたのほそ江にともす火はもゆる螢の光なりけり　殷富門院尾張

〇寶治二年百首
ほに出づるうきねの蘆の葉ければつたの細江の草がくれつゝ　衣笠内大臣

〇正治二年百首
五月雨の日をふるまゝにかはりゆくつたの入江の澪標かな　小侍従

〇[illegible]久二年五月庚申夜禖子内親王家歌合、つくまえのあし（攝津又近江）
つくま江の玉江の蘆のよたけきもかりのみかきに下がれにけり　讀人しらず

〇夏歌中、秋園
つくまえのま菅まじりのかつみ草かつかりほさむ夏の日よりに　意尊法師

〇久安百首
つぶら江のせなの霞も春きえて霧たちわたる秋の夕暮　前大納言隆季

〇寶治二年百首、江蘆を百首（越中又越前）
萬代
なごの江に蘆の葉そよぐみなと風こよひも浪に寒くふくらし　前大納言基良

〇雑御歌中
なごの江に妻よびかはし鳴くたづの聲うら悲しさ夜や更けぬる　中務卿のみこ

〇家集、秋江眺望（攝津）
難波がたよその日影は空はれて江のうへくもる秋の朝霧　民部卿雅有

〇六帖題、うらみ
難波江にみつなかしはをちらしても恨みにたてぬ色をみせばや　權僧正公朝

〇家集
難波江につりする蜑にわかれけむ人もわがごと袖やぬれけむ　小町

〇夏歌中（攝津）
あしべ行くたづの羽風にうちなびて螢浪よるなはのつぶら江　權中納言兼光

○六帖題、江　汐むかふをのの湊のながれ江に猶漕ぎかねてとまるいせ舟　光俊朝臣

○弘長三年住吉社三首歌合、江藤　藤浪にさきこぼれたるながれ江にとまらぬ春の日數をぞしる　信實朝臣

○題不レ知（紀伊）　扶桑　わたのへやおほ江の岸に水こえてこや野のきはに舟繫ぐなり　良暹法師

○（下總）　萬四　くさか江の入江にあさる葦たづのあなたづ〳〵し友なしにして　大納言大伴

○弘長元年中務卿親王家百首　くさかえの入江の葦の茂ければありともみえであさりするたづ　權僧正公朝

○百首歌　近江なるやすの入江にさす網のこほりをいをとけさぞみえける　重之

○江秋（近江）　秋風の入江の濱の白妙に尾花もつゞくまのの浦なみ　民部卿爲家

○新三十六人歌合　あさりするまのの入江に澄む月はかもの夜かれぬ氷なりけり　平正綱朝臣

○題不レ知（下總又伊豆）　萬三　葛飾のままの入江に打ちなびき玉藻かりけむてこなしぞ思ふ　赤人

○千首歌　忘られじまのの入えのみをつくし朽ちなば袖のしるしともみよ　民部卿爲家

○百七十首歌の中に　よばへどもいづらは歸る松がえの薄おしなみ秋に戀ひつゝ　權僧正公朝

○六帖題、すゝき　よばへども都はいでぬ松がえの秋の薄に心とめつゝ　同

○名所歌中、江螢を　茂りあふこやの入江のあしの葉にかくれもやらで行く螢かな　參議爲相

○家集、あやめを　こもり江の汀の下にけふまつとねざしつもれるあやめ草かな　能宣朝臣

○題不レ知　いかにせむ程なき袖のこもり江に沈める戀のかくれなき身を　相摸

○六帖題、鹽　こもり江の干潟は鹽のいつか又せにさし出でて辛きめをみむ　權僧正公朝

○文治二年百首
こもり江の葦の下葉のうき沈み散りうせぬ身のあぢきなの世や　權中納言定家

○家集（攝津）
難波潟こぎ行く舟はあしわかのえざる程こそ寂しかりけれ　元眞

○文永十年毎日一首中（近江）
さゞ浪やさかひの入江影みえて旅人通ふはまの細道　民部卿爲家

○家集中（亦後又攝津）
立ちかへり見るともあかじみつの江のあし間をわくる水の白浪　人しらす

○洞院攝政家百首（攝津又越中）
堀
うしとのみ人の心をみしまえの入江のこもの思ひみだれて　權中納言公實

○雜歌中
みしま江の岸にひまなき深緑君が御幸をまつにぞありける　讀人しらす

○家集
打ち靡く蘆の裏葉にとひみばやかかる御幸をいつかみしま江　伊勢大輔

○寛元四年日吉社歌合、江五月雨
みしま江はをちの河瀨の水こえてそこともみえぬ五月雨の頃　光俊朝臣

○題不レ知
萬十一
三島江の入江のこもをかりにこそ我をば君は思ひたりけれ　讀人しらす

○貞應三年百首、江春
三島江やさはの若ごも下もえてかつ水になる薄氷かな　民部卿爲家

○貞應二年六月名所百首歌
みしま江の澤べの蘆の夏がりにこゆるや浪のよるのみじかさ　同

○百首御歌
みしまえやあしのは近くみつしほのほなみや通ふ冬の川風　土御門院御製

○建保三年名所百首御歌
みしま江や渚にしづむ松のはの色より深き春のかげかな　順徳院御製

○寛元四年日吉社歌合、江五月雨（近江）
現存六
うちわたすしがの濱江の水こえて人も通はぬ五月雨のころ　民部卿爲家

○題不レ知（飛驒）
萬十二
しらま弓ひたの細江にすがる鳥の妹にこひむやいをねかねつゝ　讀人しらす

○（下總又尾張）
萬十一
あぢのすむすさの入江のありそ松わをまつ蘇はたゞ一人のみ　同イ

萬十七 あぢの住むすさの入江の籠りぬのあないきづかしみず久にして 同イ

○戀歌中

萬代 みさごゐるすさの入江にさす潮のからしや人に忘らるゝ身は　登蓮法師

○十首歌、江菖蒲

菖蒲かるすさの入江のこもりぬにおりたつ田子の袖もぬるらし　後鳥羽院御製

○千五百首の歌合（攝津）

住のえの松風通ふからことを浪のをかけて潮やひくらむ　土御門内大臣

○百首歌、浦舟

すみのえやちらぬ松ふく浦風にうかぶ木の葉やあまのつり舟　從三位行能

○住吉社百首歌

すみの江やあからさまなる小舟まであはれをみする跡の白浪　慈鎭和尚

○文集百首、花落城中地春深江上天

夕霞深くなり行く住の江にみやこの花を思ひやるかな　同

○家集

住のえはあまのいさめしなにならでみやこ忍ぶの草ぞ茂れる　四條宮下野

池

○御集

山川の水のおちあひをせく池のとほきつゝみになびく青柳　衣笠内大臣

○柿本影供百首

咲く花のこぞめのはちす浪かけてさきちる池の秋の村雨　後九條内大臣

○六帖題

現存六 山の尾のゆきあひにせく池水のいりこもりしや我が身なるらむ　民部卿爲家

新六三 道のべの堤のきはにいりたててとやまがくれの池ふりにけり　信實朝臣

籬 したみおとすみな口はやく堀池にとまる舟子（鯛イ）の數ぞ知られぬ　同イ

○洞集、春歌中

かつみればつのぐみにけりみゆきせし神の園なる池の若ごも　民部卿爲家

○永久四年百首

世にわびて浪忽ちに立つなれどあそのみおき（いけ永久）に幣たてまつる　俊頼朝臣

○戀歌中

冬の池の入江の葦間さえ〳〵ていつかはしみのうちもとくべき　同

○白川院にていでゝはてぬ月の松陰よりもりたるに

池水のおくなる松の枝しげみさやかに見えぬ山のはの月　長能

○長歌

萬十三　神なびの　きよきみたやの　かきつだの　池の堤の　もゝたらぬ　みそのつき枝に　水えさし　讀人しらず

○弘安二年三島社百首

たのもしな池の鏡をみしまなるかみのちかひも萬代のかげ　安嘉門院四條

○文永二年七月白河殿七百首、初春

かこ山の松風はやく春たてば浪にぞかへる池のこほりは　光俊朝臣

○池（大和）

六三　あだなりと名にし磐余（いはれ）の池なれば人にねぬなは立つにぞありける　讀人しらず

○永久四年百首

くみてしる人はあらじな思ふ事いはねの池のいひしいでねば　六條院大進

○百首歌（伊勢）

人家　櫻ちるむろの山風ふきぬらしいちしの池にあまる白浪　法印定圓

○建保三年名所百首（攝津）

時雨ゆくいく田の森の木がらしに池のみ草も色かはるころ　前中納言定家

○同

とへかしないく田の池に月かげも杜の秋風ふくにつけつゝ　俊成卿女

○同

たづねつゝいく田の池に玉藻かる袖より秋の露もおきけり　從三位範宗

○同

月宿るいく田のいけの蘆のはにしもふきかぬる秋の風かな　藤原康光

○貞應三年百首、古池菖蒲

あはれなりいく田の池のあやめ草いかなる人のねか通ひける　民部卿爲家

○題不知（懐中、近江）

近江なるいかごの池のいかに〳〵契りし人の心なりける　讀人しらず

萬四 かも鳥のはなちの池に木の葉ちればうとき心をわれ思はなくに　同

○冬歌中

歌林 冬深みはこの池邊をあさ行けば冰のかゞみ見ぬ人ぞなぎ　智經法師

○題不レ知

六帖 こひこもる（すてふ六）はりま（さやま六）の池のみくりこそひけばね絶ゆれ（たえすれ六）我やはたゆる（ね六）　讀人しらず

○はらの池（攝津）

同 原の池におふる玉藻の假初に君が（をイ）我思ふものならなくに　同

○六帖題、ぬなは

原の池のみさび交りの浮きぬなは我にもあらずよも紛れつゝ　民部卿爲家

○永久四年百首

冬寒み鴉どりすだくはらの池もよに結ぼるゝこほりしにけり　仲實朝臣

○冬歌中

現存六 原の池のいりの水おちふしつけてたもさす朝ぞ冰りそめぬる　橘則廣（或本知家卿）

○依レ月不レ忘レ秋

はらの池の蘆間にやどる月影はわかれし秋のかたみなりけり　俊頼朝臣

○寶治二年百首、池氷

むべしこそ冰とぢけれ霜枯の冬野に續くはらの池水　信實朝臣

○正安大嘗會（備中）

はじめてや千歳の影を映すらむにゐたの池の春のあをやぎ　大藏卿隆教

○題不レ知（六帖、近江）

萬十 あすといへば心ほそみの池におふる菱の下根の流れこそすれ　讀人しらず

歌林 いもが手をとりこの池の浪間より鳥の音聞ゆ秋すぎぬらし　同

○冬歌中

いづ方へたちはなるとも見えぬかなとりこの池にすだく葦鴨　正三位季經

○洞院攝政家百首（大和）

今は早とほちの池のみくりなはくる夜もしらぬ人ぞ戀ひつゝ　民部卿爲家

○家集

沼のをの池のたま水神代よりたえぬや深き誓ひなるらむ　光俊朝臣

此の歌は康元元年十一月五日鹿島社に詣でて次宮めぐりし侍るに沼尾

社へかの池の事ざまいさぎよくみて神代に幸より水くだりてと思ふもいと有りがたし蓮のおひて服する物不老不死なりなど風土記にみえたるにいまはなきふることになむ侍りけると云々

○題不レ知
萬十四
小山田の池の堤にさす柳なりもならずもなどふたりはも　讀人しらず

○(武藏)
萬九
さいたまの小崎の池に鴨ぞはねきるおのがをにふりおける霜ははらふ時あらじ　同ィ

○家集
心ゆゝ水のけしきはけふぞみるこやよに歸るかひ沼の池　紫式部

○百首和歌(人家)
浮草にかくれの池のむもれ水はらへばしたに月ぞありける　後九條内大臣

○題不レ知(國中、大和)
萬七
我もいざたちよりてみむ玉ひかるかほの池には水や光ると　讀人しらず

○參歌中(大和又河内)
かるの池の入江をめぐる鴨鳥のうは毛はたゞにおける朝霜　左京大夫顯輔

○六帖題(未國)
新六三
かる島のあかりの宮の昔よりつくりぞそめし唐人の池　衣笠内大臣

○題不レ知(山城又加賀)
萬十二
とほつ人かりぢの池にすむ鳥のたちても居ても戀をしぞ思ふ　讀人しらず

○永久四年百首、池(讃岐又近江)
みさび居ぬ鏡の池に住むをしはみづから影を竝べてぞみる　太皇太后宮肥後

面影に見つゝををしむ花の色をかゞみの池に移しうゑてば(むィ)　謙德公

つれ／＼にこひしきまゝに鏡のめぐりにさくら山吹折りたてて水鳥などすべて思ふと云々

○題しらず
萬十六 かつまたの池は我しる蓮なししかいふ君がひげなきがごと
讀人しらず

○(下總又美濃)
六二(六帖になしイ) かつまたの池に鳥なし昔よりこふる妹をぞけふ今にみぬ
同イ

年をへて何頼みけむかつまたの池におふてふつれなしの草
同イ

○(袖中)
かつまたの池にあるてふこひ〳〵て稀にはよそに人をみるかな
源道濟

○白河院御會、柳臨ニ池水一
かつまたの池も綠にみゆるかな岸のやなぎの色に任せて
顯仲朝臣

○三百六十首中
かつまたの池の冰のとけしよりやすのうらとぞ鴉鳥もなく
好忠

○承安五年三月重家卿家歌合、池邊寒蘆
霜枯のあしばかりこそかつまたの池のしるしに立ち殘りけれ
二條太皇太后宮大貳

○千五百番歌合
かつまたの池に鳥ゐし古のすぎにしほどや君がゆくする
具親朝臣

○御集、花御歌中
散りまがふさくらを風のふきよせて深き浪たつかつまたの池
後京極攝政

○百首御歌
五月雨にゆきて尋ねむかつまたの池もやいまは沖津白浪
慈鎭和尚

○冬歌中(大和又攝津)
いかるがやよるかの池は冰れどもとみの小川ぞ流れ絶えせぬ
權僧正公朝

○家集、戀歌中
片絲のよるかの池のねぬなはのねぬ夜は波の下ぞくるしき
從二位家隆

○寶治二年百首
朝こほり結びにけりな白絲のよるかのいけはゐる鳥もなし
衣笠内大臣

○三百六十番歌合
五月雨によどの河をさ舟出していけのまこもは浪の下草
喜多院入道二品

○名所の歌讀みけるに、玉さかの池(攝津)
憂世には有りへむ事も玉さかのいけらむとだに思ひやはする
和泉式部

○家歌(杜若、未國)
あふ事はたえまの池のかきつばた隔つる中となりやしぬらむ
六條院宣旨

○長歌（大和）

第十三
みはかしを　つるぎの池の　蓮葉に　たまれる水の　行くへなみ　わかせる時に　　讀人しらず

○家集（山城）

人はいさわれは昔のわすられぬ心ならひの池までぞとふ　　能宣朝臣

此の歌は物いひ侍りける人の年比多く隔てて有る所も知り侍らぬにならびの池の邊なる寺にて相逢うてせうそこすとてよめる云々

○永久四年百首（攝津）

すめらぎのなか井の池は水澄みて長閑に千代の影ぞみえける　　太皇太后宮肥後

○戀歌中

よしさらば涙の池に身をなしてこゝろのまゝに月を宿らむ　　西行上人

○入唐の時の歌

袖はひぢ涙の池に目はなりて影見まほしきねをのみぞなく　　成尋法師母

○家集、屛風の歌（近江）

ながさはの池の底なる龜までもおのがよはひを君にとぞ思ふ　　能宣朝臣

○家集

年ごとにたえずひくかな菖蒲草ねもながさはの池を尋ねて　　左京大夫顯輔

○題不レ知（懷中、大和）

改めて頼むのみかはくみてしれはかなながらの池の心を　　讀人しらず

○建長八年百首歌合

時鳥今ぞ五月とねをたててなのりの池はあやめひくなり　　左近中將具氏

○百首歌（未國）

雲葉
風ふけばうらはの池にいる汐やよるの氷のたえ間なるらむ　　從二位頼氏

○柿本影供の百首（大和）

水あさぎ鴨のうきぬの池よりもうきたる身こそ隱れかねたれ　　後九條内大臣

○六帖題

新六
哀れみをうきぬの池といひ立てて自ら偕も出でぞわづらふ　　正三位知家

○家集（山城）

鴈のくる浮田の池のすみえずばよそになりける月をしぞ思ふ　　鴨長明

○題不レ知（大和）
萬二はにカ
うゑやすの池の心のかくれぬの行方もしらぬねよりまどひぬ　讀人しらず

○霜を
大澤の池の水くさかれにけり長き夜すがら霜やおくらむ　鎌倉右大臣

○建保四年内裏歌合（山城）
大さはの池の玉藻のみがくれに蛙なくなり五月雨のころ　藤原康光

○題しらず
大澤のいけの水莖たえぬともなにか恨みむさかのつらさを　皇太后宮大夫俊成

○（陸奥、懷中）
思へども人目をつゝむ涙こそおさへの池となりぬべらなれ　讀人しらず

○文永二年白河殿七百首（未國）
賴め唯くゝりの池に住むときく鯉こそつひのしるべとはなれ　光俊朝臣

○題不レ知
萬十
まのの池の小菅を衣にぬはずして人のよそ猶たつべきものか　人麿

○家集
夜もすがらまのの萱原風さえて池の汀もこほりしにけり　俊頼朝臣

まのの池にこほりしぬれば蘆間なる橋も尋ねて島づたひしつ　同ィ

○弘安元年の百首
ま野の池の島傳ひゆく鴈がねや春はさしまの橋とみゆらむ　後九條内大臣

○承安五年三月重家卿家歌合、池邊寒蘆
冬深みしをれにけりなまのの池の汀のあしも穗末まばらに　良一法師

○建保三年名所の百首（大和）
涙のみます田の池のみをつくし嘆くしるしやみえてくちなむ　從三位範宗

○貞應二年六月名所百首
雨ふればからでやくちむ菖蒲草いとゞますだのいけの澤水　民部卿爲家

○堀河院御時百首（未國）
はちす葉はたへなる法の花なれば誠の池の心にぞさく　顯仲朝臣

○六帖（大和）
笛ふきの池の堤は遠くともこちくといふ名は忘れざらなむ　讀人しらず

○題しらず（懷中、未國）
見てもあかぬ花盛りなるころの池はすぐる月日も恨めしきかな　同

○池上氷月（攝津）
伊駒山たかねに月のいるまゝに冰きえゆくこやの池水　權中納言長方

○正治二年百首御歌
こやの池に下るる鴨のひとつがひたがぬく春の姿なるらむ　第三のみこ

○和歌所歌合、[illegible]
こやの池のみ草にまじる蘆のはの下にや袖のくち果てなまし　如願法師

○池松風を（松風、未國）
秋風にふきしかれたる島松のえだの池にや浪のこすらむ　從二位行家

○（未國）
六三 逢ふことはあらし（なにし六）の池の水なれやたえみたえずみ年のへぬらむ　讀人しらず

○家集、あしまの池と云ふ所を（攝津）
明玉 うら近きあしまの池の水の色は淺みどりにぞ春は見えける　伊勢大輔

○家集、池
なにと我蘆間の池のみくりなは人くるしめに世にまじりけむ　中務卿のみこ

○あた人の池を（未國）
あだ人の池の心もしらなくにいざともかくはいひも放たじ　二條太皇太后宮攝津

○建長八年百首歌合
住みはてむ心のそこもしらなくにいかゞ賴まむあだ人の池　衣笠內大臣

○題不レ知（備中、阿波）
鏡ともみるべきものを春くればちりのみかゝるさくらまの池　讀人しらず

○上野又和泉
我がせこをおぼゆるがをし篠の池の菰にもがもや刈り上げはやさむ　同

○家集（筑後又相模）
布さらすこれや相模の池ならむ篠分ごろもぬきもかへばや　四條宮下野（或相模）

○題不レ知（山城）
荒小田にほり任せつるてすさびの池となるまでたゝへぬるかな　讀人しらず

○（大和）
六帖 さる澤の池も辛（つら）しなわぎも子がたまひくまさは水もひなくに　同

○建保三年内大臣家百首、池菖蒲
さる澤の池のあやめの玉かづら昔をかけてねぞ殘りける　大藏卿有家

○題不レ知（未國）
六三 我が君のおふるが惜しさゝたの池のこもぐゝかくや刈りあげはやさむ　讀人しらず

○(河内又丹後又肥後)
○さかさまの池(未國)
○永久四年百首(大和)
○三百六十首中(攝津)
○家集
○六百番歌合
○氷滿二池水一
○題不レ知(六帖、未國)
○(大和)
○永久四年百首
○題不レ知
○康平四年三月祐子内親王家名所歌合(伊勢又山城)
○(河内又播磨)
○六百番歌合(山城)

六三 戀すとてさ山の池のみくりこそひけばたえすれ我れやたえする　同イ
行くとも(がともイ)もかへらぬ物をいかでかはいひ返すべきさかさまの池　祐擧
汀にはたちもよられぬ山賤の影はづかしききよすみの池　神祇伯顯仲
冰るるみはらの池のいけ堤おぼえぬはこのかゞみとぞ思ふ　好忠
いひたえばさこそは絕えめ何かそのみはらの池の堤かもせむ　紫式部
君をのみ心づくしのきくの池いひいでぬより袖ぞぬれぬる　正三位經家
今朝よりはみはらの池に冰ゐて(つゝらイ)あぢのむら鳥際もとむらむ　俊頼朝臣
みづがきの池に鳥ゐし昔よりこふる妹をぞけふいまにみぬ　讀人しらず
萬十六 耳なしの池し恨めしわぎもこがきつゝかくれば水はかれなむ　同イ
いせならばひが事ぞとや思はまし山となりてふみまさかの池　藤原忠房
六三 水鳥のうきて心はまどふかなみやぢの池に年はへぬれど　讀人しらず
明玉 ことしおひのみかはの池の菖蒲草長きためしに人はひかなむ　女御徽子女王
春ふかくなりゆくまゝに綠野の池の玉藻も色ことに見ゆ　和泉
春雨のふりそめしより綠野の池のみぎはもふかくなりゆく　小侍從
濁りなき淸水の池は影みえて見るに涼しきかゞみなりけり　美作
ひろさはの池には沉む月影のおとはの山にたちのぼるかな　中宮權大夫家房

月きよみ都のそらも雲きえて松風はらふひろさはのいけ　寂蓮法師

○家集、夏歌中
五月雨にきしの松かげ水みちてみぎはぞせばき廣澤のいけ　二條院讃岐

○光臺院入道二品親王家五十首、池氷
ゆられゆく鳩のうき巣のよるべなみ氷らぬ程ぞ廣澤の池　參議雅經

○院北面御會、池上落葉
紅葉ふく風はこずゑにおとたえて浪にいろある廣澤のいけ　如願法師

○光臺院入道二品親王家五十首
月みても心みだれぬひろ澤の昔の秋をしのぶもぢずり　大藏卿有家

○嘉元元年竹園御會、名所池
いにしへをしのぶのみだれ影たえて面影うかぶ廣澤の池　參議爲相

○ひろ澤にて
ひろさはの池にうかべる白雲はそらふく風の浪にちりける　重之

○正治元年新宮歌合
風ふけばみさびうき草片よりて月になりゆくひろ澤の池　藤原季景

○弘長四年百首、ひろ澤眺望
ながめする月の桂のあとまでもひとつにすめるひろ澤の池　民部卿爲家

○寛喜二年當座百首、古池蘆花
ひろ澤やあしのほずゑも白妙にあらはれいづる池の月影　同

○古池水鳥
廣澤やすみけむ人はおとたえてうきねの鴨になるゝいけ水　同

○周防防守にて下りける時貫之家歌合（周防）
拾集
こほりにし冰室の池も冬ながらこちふく風にとけやしぬらむ　讀人しらず

○題不レ知（六帖、豐前）
とよ國の菱の池なるひしのねをとるとや妹が袖ぬれにけむ　同

○大和
六一
鳩鳥いさわぐ姿の池なればみなととのみぞ（のみこそイ）たつべかりける　同イ

○題不レ知
現存六
つれもなきすがたの池のまこも草假のうき世に猶亂れつゝ　土御門院小宰相

○正治二年百首
しらせばやすがたの池の花がつみかつみる儘に何しをるらむ　式子内親王

○承安五年三月重家卿家歌合、池邊寒蘆
○堀川院御時百首
○千五百番歌合
○岡屋入道攝政家百首、池邊柳
○百首歌、減同類形無異狀
○住吉社奉納百首御歌（攝津）

水はらむすがたの池の汀にてしをるゝ蘆や我が身なるらむ　勝命法師
おく霜におひたる蘆のかれふしてすがたの池の現はるゝかな　權中納言師時
いつかわがすがたの池と思ふにも枯葉の蘆のあはれなるかな　前大納言兼宗
さほ姫のすがたの池のあさねがみ岸の柳にみだれてぞほす　民部卿爲家
おしなべて同じすがたの池なればひとつつらなる秋の鴈がね　藤原爲顯
暑さをば松の嵐にをさめ置きて秋をうかべる住のえの池　慈鎭和尙
くれの秋住のえどのの池に來て波間の月にこゝろすましつ　同イ
五月雨のなほ住の江に日をふれば海より池にかよふ白波　同イ

夫木和歌抄卷第二十三終

夫木和歌抄　卷第二十四

雜部六

題　河　淵　瀨　沼

河

○六帖題、山川
新六二 山川のおちまふそばの岩さきによどめる水のわきかへりつゝ　衣笠内大臣

○同、ゐぜき
同三 山河のせゞのゐくひをうちそへて早くも水をせき落すかな　正三位知家卿

○同、うたかた
同 うきて世をめぐるも悲しうたかたや渦まく河の岸のみわたに　民部卿爲家

○初めおろそかにて末増補
わが戀は細谷川の水なれやすゑにいはわる音きこゆなり　西行上人

○洞院攝政家百首、五月雨
五月雨は舟よすばかりなりにけりまさごがくれの浦のはま河　常磐井入道太政大臣

○文永四年毎日一首中
さゞ波や浦のはま川水みちてわたりかねたる五月雨の頃　民部卿爲家

○中務卿親王家五十首歌合
この程はうらの濱川水こえてしほあひみえぬ五月雨のころ　前僧正隆辨

○永久四年百首
夕立にをちのみぞ川まさりつゝふらぬ里まで流れきにけり　源兼昌

○夏御歌中、人家
夕暮は木の下凊きまさご川わが山もとたれすゝむらむ　後九條内大臣

○承久四年卒爾百首、海路
○家集、秋花（萩イ）映レ水
○あそびける所に人のきて侍りければよめる
○古物語歌或抄物在レ之
○家集、ゐ中へやるふみのかきつけに、七月七日
○承安二年廣田社歌合、眺望

○歌苑抄、源師光家會歌合
○河邊霞を
○道雅卿山莊歌合
○千五百番歌合
○文治三年古歌雜歌中
○但馬溫泉へくだり侍るとて
○文治六年五社百首、泉川（山城又近江）
○正治三年百首

今はまた波路の跡になりにけりしるべにいでし沖津しま川　民部卿爲家

風ふけば野河の水に枝ひててあらへどはぎの色は流れず　源仲正

嬉しやなきなる河せや澄みぬらむ君が光ののぞむしるしに　俊頼朝臣

天の河浮木にのれる我なれやありしにもあらず世はなりにけり　讀人しらず

天の河うききにのれる我なれば君があたりにけふはきなまし　小大君

雲の波わけ入るふねのきえぬるは天の川原にこぎやつけぬる　俊惠法師

此の歌判者俊成卿云彼張博望之到二牛漢一泝二十萬里之濤一といふ句の心をとられて侍りいとをかしくこそ侍れと云々

天の河やそのうらはに雲きえてなぎたるよはの月をみるかな　同

尋ねゆく人も道にやまよひけむかすみへだつる天の河波　權中納言長方卿

天の川みぎは涼しき松風にけふはあふぎのかぜもわすれぬ　藤原家經朝臣

天の川水かげ草のうちなびき磯のまくらに松風ぞふく　第三のみこ惟

さかのぼる波のいくへにしをれけむ天の河原の秋の初かぜ　前中納言定家

ながれ出づる谷のいしかは同じ世を渡れと遠きむこの山道　民部卿爲家

さみだれは（にイ）水上まさるいづみ川かさぎの山も雲がくれつゝ　皇太后宮大夫俊成卿

けさははやきちと思ふぞたのもしきけふ泉川わたりはてては　土御門内大臣

○堀河院御時百首
○家集
○最勝四天王院名所御障子
○題不知
○(懷中)
○(懷中)
○泉川にて作る歌中
○題不知
○長歌
○同
○題不知(新水、錦中)
○百首歌中
○家集、つくしにていはぶち川をすぐとて(いはぶち川、筑前)
○石間水(いそのの河、未國)

千冬
泉川水のみわたのふしつけにしまばの冰る冬はきにけり　仲實朝臣

古今歌
いづみ川水のみわたの杙のうへに山かげ涼し秋のはつ風　和泉式部

秋の色をやゝみかの原いづみ川むすべば露の玉の井の水　大藏卿有家

萬十七
あをによしなら山すぎて泉川清きかはらに駒はとめてよ　讀人しらず

同
いづみ川駒のわたりのとまりにもまだみぬ人の戀しきやなぞ　同

同
山城の大和にかよふ泉河これやみくにのわたりなるらむ　同

萬九
彥星のかざしのたまの妻戀ひにみだれにけらしこの河のせに　同

萬十三
泉川わたるせふかみわがせこが旅ゆく衣ぬれつらむかも　同

萬十七
いしばしる　いづみの河の　かみつせに　うち橋わたし　よどせには　浮橋わたし　祝部宿禰老丸

萬十三
みれどあかぬ　なら山こえて　まきつめる　泉の川の　はやきせを　さをさし渡り　讀人しらず

萬十九
朝每にきけばはるけし泉川あさこぎ出でてあそぶふな人（ことにしつゝうたふ萬）　同（中納言家持卿萬）

卯の花の波たちまがふ岩瀨川月の宿るやながれなるらむ　荒木田氏貫

海山を夕こえくればみかさなるいはぶち川に駒なづむなり　爲賴朝臣

冬枯のいそのの河や冰るらむいはまのこ草しみつきにけり　後一條入道關白

萬二
けふ〳〵と我がまつ君は石河の貝にまじりてありといはざらめ　讀人しらず
○(石川、石見)

萬二
たゞにあはば逢ひもかねてむ石河に雲たち渡れみつゝ忍ばむ　同

逢坂の關のあなたのいさや川いざやわたりて末ぞたえまし　大藏卿信通卿
○洞院攝政家百首（いさや川、不知也、近江）

萬四
近江路のとこの山なるいさや川このころ〳〵はこひつゝもあらむ　岡本天皇御製
○題不レ知

いかばかり深き心の底をみていくたの川に身をしづめけむ　前中納言定家卿
○文治三年百首（いくた川、攝津）

みなかみの山のたきつせ冰るらし生田の川はゆく水もなし　民部卿爲家
○貞應三年四季百首、冬川

新續古雜下
津の國の生田の川のみなかみはけふこそ見つれ布引の瀧　藤原基隆
○百首歌、人家

波はみなこほりて結ぶいとは川岩をこゆるは霰なりけり　後九條内大臣
○弘安三年百首、いとは河（未國）

六三
みだれつゝ人だによらぬいとは川波のさはりは水をよるとか　讀人しらず
○題不レ知（六帖）

中たゆる冰のひまやいかならむいはなみがはの春の初風　後九條内大臣
○柿本影供百首、岩波河（未國）

出雲川ふるきみなとを尋ぬればはるかに傳ふ和歌の浦波　寂蓮法師
○いづものきづきの宮にまうでていづも河のほとりにて

いづも川底のみくづのかずさへに見えこそ渡れ夜半の月影　祺子内親王家中務
○承保三年十一月源經仲朝臣出雲國名所歌合

新千賀
むしろ田のいつぬき河のしきなみに羣れゐる鶴の萬代の聲　後京極攝政
○正治二年百首（いつぬき河、美濃）

むしろ田のいつぬき川に年をへて波やたつらむつるの毛衣　法橋顯昭

六三
稻葉川いなとし終にいひはてば流れて世にもすまじとぞ思ふ　讀人しらず
○戀歌、秋風（いなば河、因幡）

同　新勅雜四　いはみの六　の六新勅
朝毎にいくみの川に身をたえず戀しき人にあひみてしがな　同
○題不レ知（いくみのかは、未國）

○同懐中（いさゝ河、常陸）
せきとむる人もなき世に怪しくもいさゝの川の行きもやられぬ　同

○同懐中（いほの井川、近江）
近江なるいほの井川の水すみて千歳のかずのみえ渡るかな　同

○家集
国もせにつくれるみよの田にたてるいほの井川の音のさやけさ　能宣朝臣

○題不ㇾ知（いらかは、山城或常陸）
水上も白くぞみゆるいら川はほのほの波のたてばなりけり　読人しらず

○家集（いしふり川、紀伊）
み熊野やいしふり川の早くよりねがひをみつの社なりけり　忠盛朝臣

○題不ㇾ知（はつせ川、大和）
萬九 初瀬川ゆふわたりきてわぎもこが家のみかどに近くきにけり　人丸

○同
萬七 續後撰 初瀬川ながるゝみをの瀬を早み井手こす波の音のさやけさ　読人しらず
萬七 初瀬河しらゆふ花におちたぎつせをきよしみと見にこし我を

○三輪川邊の禊をよめる
みむろのや神のおはせる初瀬河みをのたえずば我忘れめや　大神大夫

○題不ㇾ知
萬十三 初瀬川はやみはやせを結びあげてあかずや妹ととひし君はも　読人しらず
六三 祈りつゝ頼みてわたる初せ河嬉しき世にも流れあふやと　同

○千首歌
おち瀧津はつせがはらの白妙に幾よかゝぐる波のゆふはな　民部卿為家

○六帖題
新六六 かくれぬの初瀬の河のかはくまに神さびたてる杉はふたもと　衣笠内大臣

○家集、詠物百首中
初瀬河谷がくれゆくさゞれ水浅ましくてもすみわたるかな　清輔朝臣

○長歌
萬十三 こもりえの　はつせの川の　のぼりせに　ゐぐひをうちて　くだりせに　まぐひをうちて　ゐぐひには　かゞみをかけて　読人しらず

まぐひには　またまをかけて

○長谷寺にまうづとてはつせ河に紅葉のながるゝをみて（はせがは大和）

家 唐錦あらふとみればはせ川や大和の國のわざにぞありける　中納言兼輔卿

○御集（はまな河、遠江）

はまな川みなとはるかに見渡せば松原めぐるあまの釣舟　中務卿の御子

○遠江原かはといふ川をわたるにきりふかくして

霜枯のはらの河霧うきてのみたひの空にもあるおもひかな　光俊朝臣

○六帖題（はやかは、相摸）

はやかはのせきり危き舟わたりそがひに向へ道遠くとも　信實朝臣

東路のゆさかをこえて見わたせばしほ木流るゝ早川の水　安嘉門院四條

此の歌路次之記云あしがらの山は道遠しとてはこれにかゝるなりけり

いとさかしき山をくだる人のあしもとゞまりがたしゆさかとぞいふなるからうじてこえ果てたれば又ふもとにはや河と云ふ河有り誠にはやし木のおほくながるゝをいかにと問へばあまの鹽木ながすと云々

○題不レ知

萬四 美しとわがおもふ心早河のせくとせくともなほやくづれむ　坂上郎女

○同

萬四 早河のせにゐる鳥のよしをなみ思ひてありしわがこはもあはれ　讀人しらず

○家集（はりかは、伊勢）

唐衣ぬふはりかはの青柳のいとよりかくるはるはみにこむ　躬恒

○題不レ知（にぶのかは、丹生、大和）

萬七 新千戀二 ひた人のまきながす（おろすイ）てふにぶの川ことは通へど舟は通はず　讀人しらず

○家集、川上紅葉

いかださす錦をわけて下すめりにぶの川上紅葉ちるらし　權中納言長方卿

○弘安百首

かち人のわたせの波も道たえてにぶのかはらの五月雨の頃　常磐井入道太政大臣

○資方朝臣家集（にしかは、西、山城）
○正安大嘗會（にほのかは、寶保、近江）
○ほしがは（未國）
○題しらず（ほり川、山城）
○みやこ鳥（ほりえの川、攝津）
○建長八年百首歌合（とかは、未國）
○百首の歌、とこの山川（近江）
○八幡宮歌合、河上霞（とをつかは、大和）
○建保四年百首
○七百首歌、隱居
○承安二年閏十二月ひがし山歌合隔レ河戀（泊瀬河、大和）
○家集、祝を、富緒かは（丹後又大和河内）
○題不レ知（とねがは、武藏或上野）
○六帖題（とよ川、三河）

ひをのよるうちならずとも西川の網だにあらばいをも掬はむ　藤原義孝
諸人もよはひをのべて結ぶなりにほの河瀨のきくの下露　爲仲卿
あけぬとて空さかり行く星川に我さへかげや見えずなるらむ　光俊朝臣
此の歌家集に云鹿島社にまうでてかへりけるにほしかはといふ所にとまりてあかつきたつとてよめると云々
六二
ほり川のせきのゐぐひのうち渡しあはでも人にこひ渡るかな　讀人しらず
都鳥こゑもさむけしふなきはふ堀江の河のこほる霜よを　衣笠内大臣
石ばしるとかはのたきつ行く水のせきとめ難く過ぐる春かな　同
近江路のとこの山河流れてもよるべしらする波のまもがな　前大納言基良卿
とをつ川をちかた人やきよむらむ霞のまより袖うちかづく　家長朝臣
五月雨にむかひの岸のとをつ川舟こそ通へことは通はず　同
みよし野の山のあなたのとをつ川泉のはらも哀れうき世を　權僧正公朝
とませ河あなたの里に妹を置きて岩とがしはゐ踏みならしつる　藤原範孝
たえず澄む富のを川のみをつくし幾夜とさして君を祝はむ　源有仲
六三
とね川の下はにごりてうはすみてありける物をさねてくやしき　讀人しらず
新六二
かり人のやはぎにこよひ宿りなばあすや渡らむとよ川の波　衣笠内大臣

○雜歌中（とほりかは、河内）
放ちてやとほりの川の朝ぼらけつゝみむかひに舟よぶや誰　中原師光朝臣

○同（ちくま川、信濃）
六三
をばすての山をもめでじちくま川底にのみこそ忍びわたらめ　中納言兼輔卿

○題不レ知
萬十四
信濃なる千曲の川のさゞれ石も君しふみては玉と拾はむ　讀人しらず

○洞院攝政家百首（ちとせ川、筑前）
君が爲限りもあらじ千歳川ゐせきの波のいくめぐりとも　光明峯寺入道攝政

○家集（ちぐさのかは、未國）
堀百
水まさる千草のかはら我ならぬ霧もいたくぞたちわたりける　顯仲朝臣

○建長八年百首歌合、ぬま川、未國）
わが袖はぬれにぞぬるゝ沼川の蘆間の草のみがくれてのみ　衣笠内大臣

○山階入道左大臣家
水上は瀧のみをにてはやければ布引川のすゑぞこほれる　従二位行家卿

○題不レ知（ぬるやがは八、雲抄、此名所在之）
萬十一
あさがしはぬるや河邊の東雲に思ひいづれば夢に見えけり　人丸

○長久二年四月土御門左大臣家歌合、水、おとは河（山城）
音はがはをちかた人も袖たれてわたるばかりに氷しにけり　讀人しらず

○御集（山科）
音羽川いはねをおとすもかり舟めもあはせずもすぐる年かな　法性寺入道關白

○家集、雄神河（越中）
をかみ河ねしろ高萱ふみしだきとるあしつきも君が爲とぞ　俊頼朝臣

○題不レ知
萬十七
をかみ河紅匂ふ少女らがあしつきとるとせにたたすらし　讀人しらず

○承安三年閏十二月東山歌合、隔レ川戀
君があたりをばたゞ河のなくもがなけたよりゆかむ橋も危し　平徑（經イ）正朝臣

此の歌判者清輔朝臣云をばたゞがはこそおぼつかなければをばたゞのいただのはしとよめる歌は萬葉集には一首侍る何の里とも見えず又かは有りともしらずをばたゞ河といふ事なににみえて侍るにか川にこそは

しはわたしたらめとはおもへどさらぬはしもありましくみえたる事
のなければ承はらまほしきなりと云々

○家集（度會川、伊勢）
君にかくわたりあひかは長らへて思ふ心のあせずもあるかな　祭主輔親卿

○同、わすれ河（甲斐）
わすれがは又や忘れぬうき事の忘られずのみ思ほゆるかな　忠岑

○題不レ知（六帖）
六三
忘れ河よく道なしと聞きてこそいとふのかみはたちもよりけれ　讀人しらす
（も）（は六）

○名所歌中
扶桑
うき人の忘れ果てなで忘れがはなにとてたえず戀ひ渡るらむ　藤原忠隆

○堀河院御百首（桂河、山城）
桂河てる月影のやどる夜はもに住む蟲ぞ底にみえける　權中納言師時卿

○家集
續後撰雜上
かつら川かざしの花の影見えし昨日のふちぞけふは苦しき　貫之朝臣

○御集（かも川、山城）
鴨川のかもの河せの釣人にあらぬわが身もぬれまさりけり　延喜御製

○家集
千早ふるかもの河霧きりなかにしるきはすれる衣なりけり　順

○家集、五月雨
鴨川をふせぐつかさも心せよつゝみくづるゝ五月雨のころ　家長朝臣

○四季百首獨歌
身にぞしむこまうちわたす諸人の山あひの袖に鴨の川波　慈鎭和尚

○題不レ知
萬十一
鴨河の後瀬しづけみ後も逢はむ妹にはわれよ今日ならずとも　讀人しらす

○大治三年八月廣田社歌合、月遍國（かゞみ川、土佐）
かゞみ川かげ見る月に底すみてしづむみくづの恥しきかな　神祇伯顯仲卿

○題不レ知（國中）
影みむと思ひしものをかゞみ川淺ましくても絶えしみづかな　讀人しらす

○同、紙屋河（山城）
六三
かりにてもわかると思へば神や川瀬々の千鳥の亂れてぞなく　同

○天喜元年八月頼家朝臣家歌合、越中名所
をちこちの岸の青柳ひまなくて淵瀬も見えぬかゞみ河かな　讀人しらず

○題不レ知（懐中かくれ川、未國）
萬十一
かげろふの岩かき淵のかくれ川ふしてしぬとも汝が名はいはじ　同

○文永四年歌合（かこの川）
旅人の駒うちわたすむさし鐙たたなぞかへるかこの河波　民部卿爲家

○海道宿次百首（かたせ河、相模）
うちわたすいまや潮干のかたせ河思ひしよりも淺き水かな　參議爲相卿

○題不レ知（よしの河、大和）
よしの河いはとかしはの常磐なるわれは通はむ萬代までに　讀人しらず

○吉野の宮御幸時
萬三
八雲たついづものこらが黑髮は吉野の河の沖になづさふ　柿本人丸

同一
春べには　花かざしもち　秋たてば　もみぢかざせり　ゆふかはの　神もおほみけに　つかへまつると　のぼりせに（かみつせにイ）　うかはをたてて　くだりせに（しもつせにイ）　さでさしわたし　山河も　同

○長歌幸二于吉野の宮一之時
萬一
やすみしし　我がおほ君の　かみながら　かみさびせずと　よしの川　たきつがうちに　たかどのを　同

○吉野川を
萬六
山たかみ白ゆふ花の落ちたぎつ瀧津がうちはみれどあかずかも　笠金村

○建暦二年仙洞二十首
みよしのの瀧津がうちの春の風神代もきかぬ花ぞみなぎる　前中納言定家卿

○家集
吉野河岩のゐせきをわきかへりしらゆふ花やたきつ白絲（の玉水家）　俊頼朝臣

○水上落花
歌苑抄　風春下
吉野川みなとの波によるはなやあをねがみねにきゆる白雲　從三位頼政卿
此の歌はみたけへ參りける道にてよしの川の邊にてよめると云々

〇六帖題
新六六 山吹のはなの盛りによしの川井でこす波もこゝろあらなむ　衣笠内大臣

〇川（六帖）
萬九 六三 いにしへの賢き人の渡りけむ吉野の川は見れどあかぬかも　讀人しらず

〇建保三年右所百首御歌
吉野川あさき瀬もなく行く水の人の心はうへぞつれなき　順徳院御製

〇家集（よど川、山城）
萬十 をしほ山ふもとの霧のたえまより淀の川せに船わたるみゆ　光俊朝臣

〇同
六六 よど河の水ぐき（うイ）すぐに見るまでに三笠の山はあれにけるかも　赤人

〇題不レ知（六帖）
六六 水まさる淀の河せにたつ鷺のたちても居てもなかぬ日ぞなき　讀人しらず

〇貞應三年百首
舟おとすよどの河瀬の朝霧にたえ／＼みゆる岸のかち人　民部卿爲家

〇建長五年毎日一首之中
山のはの朝日うつろふ川波に又さしいづるよどのふな人　同

〇嘉祿二年百首
さみだれは岸のうはてに船とめて渚を道のよどの川水　同

〇文應元年七社百首、石清水
み山ふくあらしのつてに雪ちりて霞もやらぬよどの川波　同

〇洞院攝政家百首、五月雨
五月雨に淀のふるかは水みちてむかひの岸ぞ遠ざかりゆく　從三位行時卿

〇よどの渡りにてよめる
川舟のはやきつなでに引きすぎてみはてぬ岸に殘る松原　讀人しらず

〇題不レ知（よしき川、春日、大和）
萬十二 わぎもこに衣春日（かすが）のよしき川よしもあらぬかいもがめをみむ　同

〇千首歌
世の中は衣かすがのよしき川ことも宜しくぬるゝ袖かな　民部卿爲家

〇嘉祿元年五十首冬歌中（橫がは、近江）
さゆる夜のよかはの水の薄氷とけずなり行く冬の空かな　同

〇祉
六一 立田川たきのせわきにはらへつゝ祈りくらすは君が爲とぞ　順

○かめ（六帖）
流れては立田の河の底にすむかめのこふともきかば頼まむ　讀人しらず

○石清水若宮歌合、海邊霞
あさまだき霞のみをも白波のたつたの河をわたるふな人　從三位頼政卿

○題不レ知（たま島川、肥前）
萬五
玉島のこの河上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき　讀人しらず

萬五
まつらなる玉島川に鮎つるとたたせるこらがいへ路しらでも　同

○保安二年閏五月鳴左大臣長實家歌合
金葉戀上
しらせばや玉島河に袖ひぢてなゝせのよどに思ふこゝろを　神祇伯顯仲卿

○家集、社歌合
風雅秋上
玉島やおちくるあゆの河柳した葉うちちり秋風ぞふく　從二位家隆卿

○寶治二年百首、川紅葉
たましまやこの川上の柳影おつる紅葉もせかぬ日ぞなき　後九條内大臣

○嘉元三年百首、川
さゞれ行く玉島川のあだ波も堀江になれば音ぞのどけき　參議爲相卿

○題不知（催馬樂、竹がは、河内或大和伊勢）
竹がはの橋のつめなる花園にわれをば放てめざしたぐへて　讀人しらず

のちに又たれかきてみむ竹がはや結ぶ雫も紅葉ちるやま　前中納言定家卿

○述懷百首（たまつをがは、近江）
みすりせくたまつを川のとこなめに忍ふ思ひに面變りせよ　俊頼朝臣

○家集、玉つくり川（播磨）
いくちたび君がみよには近江なる玉つくり川すまむとすらむ　元輔

○題不レ知（懷中）
重之家集
ひとつして萬代てらす月なればそこも見えけり玉つくり川　讀人しらず

○同（たまほしがは、陸奥）
陸奥のたまほし川のたまさかに流れあふせやあるとこそまで　同

○同（たかせ川、山城或河内攝津又安房又上野）
限りなく我がきみ山の谷水をたかせ川にもよどむよあらむ　同

○家集
萬代
下騒ぐたかせの川の波間よりかすむや袖のみなとなるらむ　信實朝臣

○御集（たゞすの川、山城）
○建長八年百首歌合（たまくせの川、未國）
○承保元年大納言家東方講師[illegible]（近江國）
○貞應三年百首、そがのかは（近江又下野）
○承久二年四季百首（そめかは、筑前）
○御集（そでのかは、山城）
○冬歌中（つくまがは、未國）
○題不レ知（なつみの川、大和、近江）
○名所夏月
○洞院攝政家百首、暮春
○題不レ知（なきのかは、山城）
○家集（長谷川、山城）
○正安大嘗會（長柄川、備中）
○家集（なとり川、陸奥）
○百首歌

風ふけばたゞすの川にたつ波の夕かたかけてみそぎをぞする　衣笠内大臣
たまくせの川せを清みぬさたてて千年をいのる夏ばらへしつ　前大納言顯朝臣
近江なるたかつき河の底きよみのどけき御代の影ぞ映れる　前中納言匡房卿
汀なる岩根のま菅ふみしだきそがの川原にたづぞ鳴くなる　民部卿爲家
山風のおろす紅葉のくれなゐをまだいくしほかそめ川の渡　從二位家隆卿
都をばけふぞ立ちける旅衣そでの河原のきりのまよひに　衣笠内大臣
つくま河入江にをしの聲かぬは蘆の裏葉にこほりしぬらし　惠慶法師
萬九 山高み白ゆふ花におちきたるなつみの川はみれどあかぬかも　讀人しらず
萬九 大瀧を過ぎてなつみを添へてゐて清き河せをみるがさやけさ　同
影きよきなつみの河に秋かけてしらゆふはなをてらす月かな　前中納言定家卿
明日よりはなつみの川の河風にしらるな櫻山かげにして　光明峯寺入道攝政
萬九 衣手のなきのかはべを春雨に我たちぬると思ふらむかも　讀人しらず
いはくらや八しほそめたる紅葉ばを長谷川におしひたしたる　西行上人
彦星のちぎりの末のながら川逢瀨はいつの秋もたえせじ　大藏卿隆教
名とり川かはなる鳥ぞ流れても下ゆく水のまてもとぞ思ふ　能因法師
名取川渡りていづる小山田をもるにつけてはよがれのみする　重之

○瀬
六三 名取川幾瀬かわたりなゝせとも八瀬ともしらず夜し渡れば　讀人しらず

○永久四年百首、萍（涙川、伊勢）
涙川みなとにうかぶ浮草のうきねとゞめむかたのなきかな　神祇伯顯仲

○堀河院御時百首
涙川身をうき舟のなげきにも思ひたえせぬつなでひくらし　前中納言匡房卿

○仁安二年三月、歌林苑歌合
こひわぶる涙の川の浮草は人にねもみぬわが身なりけり　清綱

○洞院攝政家百首
瀬絶えして水沫ながるゝなみだ川底もあらはに氷とぢつゝ　前中納言定家卿

○同
なみだ川逢瀬は今もいなふねの下にこがれぬ浪のまもなし　後九條内大臣

○弘長元年百首
涙川まろねの中のもろきはしこぬうきせには夢も通はず　同

涙川ふなでやせましいせの海のみかはへ渡るみなと尋ねて　祭主輔親

此の歌は三かはの守なる人をかたらひけるいせに有りける時せうそこせむとてよめると云々

○戀歌中
人をのみうみに出でたる涙川さてもよな／＼みるめやはある　從二位家隆卿

○家集、冬戀
なみだ河戀よりいでて流るればかく氷る夜もさえぬなりけり　能因法師

○久安五年七月山路歌合、戀
つきもせぬ涙ねの川のわれふねの逢瀬なぎさにくちや果てなむ　西念法師

○家集中（山城）
中河にすゝぐ（あらふイ）たぜりのね（ねイ）なきごと現はれてこそあるべかりけれ　實方朝臣

此の歌はうきやう（ぞイ）でんのさいしやうの君さとに出でたるに人のあるけしきなれば歸るとて中河にせりあらひけるめしてつかはしけると云々

○家集、しれる人になかがはへだてすみけるに、七月七日

七夕のくもではしらず中河をはやうちわたれかさゝぎの橋　爲頼朝臣

○文應元年七社百首

またさらにすまばやすまむ浮草のさそはれいでて中河の水　民部卿爲家

○百首の御歌

秋風の山吹のせのいはなみにぬる夜よそなるうぢの橋姫　後鳥羽院御製

すがもかるやそ宇治川の瀬を早みてにもたまらずくるゝ年かな

○御集

現存六　しられじなやそうぢ川の底におふるすがもの長く戀ひ渡るとは　衣笠内大臣

○六百番題

むつた河岸の柳のみなれ棹をゝしく波にたかせさすなり　權僧正公朝

○夏歌中

明玉　夕ぐれは下風すゞしかはづなくむつたの川の岸の青やぎ　從三位基雅卿

○題不知（懷中）

つの國にありといふなるむこ河の流れて名にもいはれきしかな　讀人しらず

○家集

いかにしていひはじめけむ言のはぞ昔川にぞ聞ふべかりける　能因法師

このうたはみちのくにに下りけるにくり原のこほりにてそこにある物

是はおとなしのたきに侍り又河をばむかし河といひ侍るといへばよめ

ると云々

○家集、心うしと思ふに人のもとより梅をおこせたれば

梅津河るぜきの水も洩るなかとなりにける身をまづぞ恨むる　和泉式部

○家集

さき匂ふ梅津の河の花ざかり映るかゞみの影もくもらず　民部卿爲家

○題不知

萬七　宇治川の舟渡せよとよばへどもきかずぞあらしかちの音せず　讀人しらず

○長永三年九月顯輔卿歌合に、月

石間ゆくやそうぢ河のはやきせに波はたてども宿る月かな　大藏卿經忠

○洞院攝政家百首、詠
せきそめし宇治の川波立ちかへりたづの齡も君がつたへむ　家長朝臣

○千五百番歌合
もののふのやそうぢ川の橋柱のどかにおとせまきのしば舟　後鳥羽院宮内卿

○十題百首
わきかへる岩せの波に秋すぎて紅葉になりぬうちの川風　前中納言定家卿

○家集
雨ふりてうぢの川波たちまさるしがの浦風ふきやこすらむ　仲實朝臣

○禖子内親王家歌合
程とほきうぢの河せのかゞり火は水に宿れる星かとぞみる　修理大夫顯季卿

○河（宇佐可川、越中）
現存六
見るまゝに人の心のうさか川わたる瀨多しいかゞ賴まむ　衣笠内大臣

○家集、名所歌中（うつの山川、駿河）
ちらぬよりもみぢに波はうつろひて蔦の下ゆくうつの山川　參議爲相卿

○題不レ知（いながは、攝津）
萬十六
かくのみにありける物をゐな河の沖を深めて我かへりける　讀人しらず

○夏御歌
古來歌
五月雨にゐなの河岸水こえてをざゝがはらやいづこなるらむ　後法性寺入道關白

○永久四年百首、經年戀（ゐなのみそ川、攝津）
年こえぬさのみは待ちししながゐなのみそ川すまじとすらむ　俊頼朝臣

○仁安三年無動寺歌合、忍戀
戀ひ渡るとだにしらじなしながゐなのみそ川すまぬ限りは　讀人しらず

○題不レ知（能登川、大和）
萬十九
のと川の後はあひみむしばらくも別れといへば悲しくもあるか　同

○詠花
六イ
萬十
のと川のみな底さへにてるまでに三笠の山はさきにけるかも　同

○建長八年百首歌合
みかさやま春くれゆけばのと川のみなそこかけて匂ふ藤浪　從一位良教卿

○建保四年内裏十首歌合（のだの玉川、陸奥）
みちのくの野田の玉川見わたせば潮風かけてこほる月影　順德院御製

○大神宮百首御歌
ふゆさればのだの玉川こほりゐてはきこす物は夜半の白雲　後鳥羽院御製

○家集、秋歌中（のちの玉川、近江）
明玉
うづらなく野路の玉川けふみれば萩こす波に秋風ぞふく　従二位家隆卿

○家集（雲葉、大井川、山城）
續古雜中
この河の入江の松は老いにけり古きみゆきのことや問はまし　坂上是則

此の歌は亭子院西川にみゆき有りけるに江松老といふことをよめると云々

○建保三年名所百首御歌
大井川みゆきふりにし色ながら入江の松になつもきにけり　順徳院御製

○同
新六三
大井川ふるき江までは待たれねど假の庵とふ夏もきにけり　従三位行能卿

○六帖題
六三
大井河波うつせきのふるくひは寛ぎながらぬくるよもなし　信實朝臣

○題不レ知
六三
大井川ゐぜきのゐぐひうちわたし戀しとのみや思ひ渡らむ　讀人しらず

六三
大井川せきのふるくひ年ふとも我わすれじといひしたれなり　同ィ

六三
大井川ゐぜきにふせるかめ山の命のかぎりあひみてしがな　同ィ

○最勝四天王院名所御障子
嵯峨の山みゆきを映す大井川紅葉にまがふかり衣かな　従二位家隆卿

○貞應三年の百首
うちわたすゆく瀬あまたの大井河見えてぞ遠きはつくらの山　民部卿爲家

○遠江國名所歌に、大井河初秋
波まより秋やたつらむ大井川わたる瀬ごとに風ぞ涼しき　參議爲相卿

○月歌中（おきつ川、駿河）
古來歌
清みがた月にむかへるおきつ川流るゝ影やうみにいづらむ　權僧正承澄

○海道宿次百首（おほやがは、三河）
瀬を早み流るゝ水はおほや川あやふき橋をわたるかち人　參議爲相卿

○河
現存六
日の暮におほや川原をわけ行けばすがもが下にくゝひなくなり　唯明法師

○題不レ知（懷中、大川、大和又備前）
萬二一
大川のをち方人に刈萱のつかのまもわが忘られぬやは　讀人しらず

○正嘉二年毎日歌中（大みやがは 一首イ 山城）
のどかなる大宮河のながれにぞ再びすめる影はみえける　民部卿爲家

○題不レ知（おふの川、未國）
萬十一　六五
まこも刈るおふの河原のみこもりに戀ひこし妹か紐とく我は　讀人しらず

○建長八年百首歌合
なく千鳥われさへ悲し白すげのおふの川風さむく吹くなり　衣笠内大臣

○千鳥を
現存六
白すげのおふの川原のかは千鳥鳴く夜の月の影のさむけさ　從二位行能卿

○題不レ知（六帖、おほわたり川、肥後）
六三
筑紫なるおほわたり河大方は我ひとりのみ渡るうき世か　讀人しらず

○家集（おもひ川、筑前）
思ひ川みわたにかゝる埋れ木の流れてさへの名こそをしけれ　後鳥羽院下野

○建保三年禰歌、名所戀
續後撰戀一
かけてだにしらじなよそに思ひがは浮ぶ水泡のきえ返るとも　光明峯寺入道攝政

○寬元三年結緣經百首
思ひ川しがらむ水のわき返りいまはほしさをまづ洩らさばや　民部卿爲家

○貞應二年當座百首、無御返事戀
言の葉を流しそめつる思ひ川かへらぬ波にあとをみるかな　同

○久安三年六月顯輔卿家歌合、戀
思ひ川なゝせのよどにせかれつゝあふこと波のたち返るかな　隆緣法師

○洞院攝政家百首（おき中川、未國）
こほりゐておき中河のたえしより通ひし鳰の跡をみぬかな　前中納言定家卿

○題不レ知
萬二十
にほ鳥のおき中河のたえねども君にかたらむことつきめやも　讀人しらず

○六帖題（草川、山城）
新六三
夕すゞみかへるさやすむますらをのかりてすゝげる草川の水　衣笠内大臣

○建保五年毎日一首中（草刈川、未國）
うなゐ子が草刈河のつな手繩ひくてもたゆく上る舟人　民部卿爲家

○くもり川に月のやどれるをみて（未國）
水のおもに宿れる月をみぬ人やくもり河とはいひはじめけむ　中原師尚朝臣

〇家集、くろま川にて（未國）
くろま川いふ名やなどて流れけむ恐しげにも見えぬわたりを　和泉式部

〇題不レ知（懷中くろかは、未國）
くろかはと人はみるらむ墨染の衣の袖にかゝるなみだを　讀人しらず

〇同（くだらがは、攝津）
六三
くだら川河せを早みあが駒の脚のそゝぎにぬれにけるかな　人丸

〇同（くじかは、常陸）
くし川はさきくありまて鹽船にま梶しゞぬき早かへり來む　讀人しらず

〇家集（櫛田川、いせ齋宮川也）
君が住む櫛田川にやみだれたるかみの心もうちとけぬらむ　俊頼朝臣

〇同（くたし川、未國）
世の中に沈むとならばくたし（した家）河流れうせぬるわが身ともがな　同

〇文治六年五社百首
くもつ川せきいれてまける苗代は秋の姿こそかねて見えけれ　皇太后宮大夫俊成卿

〇題不レ知（くめがは、大和）
み狩する君歸るとてくめ川にひとことぬしぞ出でませりける　讀人しらず

〇御集（やまと川、大和河內にも）
やまと川櫻みだれて流れきぬはつせのかたに嵐ふくらし　衣笠內大臣

〇家集（やすかは、近江）
やす川の水底みえているかめの萬づ代しりて遊ぶをぞみる　兼盛

〇同
やす川の川邊に遊ぶあしたづは千年の數を竝べてぞ思ふ　能宣朝臣

〇永久四年百首、樹陰
夏の日もやすの河原の柳かげふきこす風は下ぞ涼しき　仲實朝臣

〇同
現存六
かちわたりやすの河よと行く駒に波もせごしの五月雨の頃　信實朝臣

〇名所歌中に、八洲河舟
雨ふれば船よりぞ行くやす河のやすく渡りし瀬をばたどりて　參議爲相卿

〇題不レ知（五葉）
萬十三
百千鳥やすの河原に築れるつゝ（こもりく萬）友よびかはすこゝろあるらし　讀人しらず

〇長歌（やばせ川、近江）
あま雲の　かげさへ見ゆる　かくらくの　はつせの川は　う　同

らなきか　舟のよりこぬ

○久安百首（やはぎ川、參河）
矢矧川うへのにたてるかば櫻いつか軒ばにならむとすらむ　前參議親隆卿

○題不レ知（まきもく川、大和）
萬七
むば玉のよるさりくればまきもくの川音高しあらじかもとき　人丸

○六百番歌合、寄レ河戀（まつら川、肥前）
いつかさは又は逢瀬をまつら川この川上にいへばすむとも　前中納言定家卿

○題不レ知
萬五
遠津人まつらの川にわがゆへるいもが袂を我こそまかめ　讀人しらず

同
まつら河なゝせの淀はよどむとも我は淀まず君をしまたむ　同ィ

同
まつら川かはの瀬早み紅のもの裾ぬれてあゆかつるらむ　讀人しらず

○東山歌合
まつら河川せの霧の絶え間あれやあかも匀へるつり少女みむ　殷富門院大輔

○永久四年百首、元服（まきそめ川、未國）
うなゐ子がはなちの髮を取りたててまきそめ川よ淵瀬たがふな　俊頼朝臣

○題不レ知
萬七
白妙に匂ふまつらの山川にわが馬なづむ家こふらしも　讀人しらず

○百首歌
神人や濱のみそぎにいでつらむまきのとかはの音ぞ涼しき　従二位家隆卿

○個集（まへのかは、相摸）
濱邊なる前の川瀬を行く水のはやくもけふのくれにけるかな　鎌倉右大臣

此の歌は二所詣下向にはまへの宿のまへにまへかはといふ河有り雨ふりて水まさりにしかば日くれてわたり侍りし時よめると云々

○昔みたりける人にある人物申すときゝて（ふるせがは、未國）
袖たれて渡りしものをふるせ川深くも人の思ひけるかな　俊頼朝臣

○題不レ知（ふみまき川、下總）
水莖のかきながせども流れぬはふみまき川といへばなりけり　讀人しらず

○六帖題（すぎふるかは、大和）
○永久四年[illegible]百首、春雨
○家集、くまの細山にて雨人をこふといふ事をよみける（ふた川、未國）
○家集（ふぢゐのかは、同前）
○同（ふじかは、するが）
○定文家歌合
○延喜五年定文家歌合、不レ逢戀
○題不レ知
○建長五年毎日一首中
○建長八年百首歌合（ふえ川、いせ）
○松近レ汀といふ事（衣川、陸奥）
○建長七年顯朝卿家百首歌（こちかぜ川、未國）
○寛喜二年十首歌合、久戀（こひせ川、ひだち）

新六六
いかばかりふる川のべに年もへぬいつ相生のふたもとの杉　正三位知家卿

春雨のふるかはのべの身をつくしやがてうへ行く水のしら浪　民部卿爲家

流れてはいづれのせにか上るべき涙をわくるふたかはの關　西行上人

家集
音にきくふぢゐの河をたちかへり悲しき瀬をも渡りぬるかな　元眞

家集
行く水のゑにだにあらばふじ川の流れて人にすまざらめやは　好忠

峯はもゑ麓はこほるふじ川の我もうき世を住みぞわづらふ　深養父

家集
あはむとは思ひ渡れどふじ川のつひにすまずば影も見えしを　躬恒

六三
ふじ川の世にすむべくも思ほえず戀しき人の影し見えねば　讀人しらず

吹きおろす雲かとみれば白妙に眞砂ぞなびくふじの川風　民部卿爲家

ねにたてて恨みやせまし笛川のせにより竹のおのがうきふし　後九條内大臣

此の歌判者光俊朝臣云笛かはのせにより竹ひとふしありてめづらしくこそ聞え侍れ文選長笛賦に龍鳴二水中一不レ見已截レ竹吹當相似といへり今此の歌是れを思へるにこそ尤も優美なるかなと云々

衣川汀によりてたつなみは岸のまつがねあらふなりけり　西行上人

山ひとくこち風河のふきこしに水かさ高くや波のたつらむ　從二位行家卿

こひせ川つれなき中に行く水はとしもせかれぬ涙なりけり　從二位家隆卿

○題不レ知（こつがは、山城或河内）

六三 君こずばたれに見せましこつがはのせゞの渦まく瀧の白絲　讀人しらず

○五月雨を（こばた河、山城又近江）

五月雨にいかにかもせむこばた川かちより人の渡る瀬もなし　從二位行家卿

○家集

よそにみてふしみもしらぬこばた川こはたが故にぬるゝ袂ぞ　寂蓮法師

○題不レ知（こほり川、武藏又安房又備前）

打ち解けて水も掬ばずこほり川下なるこひやわびしかるらむ　讀人しらず

○名所歌

うらさむみ月の光はさやけくてこほり川には水も流れず　同

○後朱雀院女一宮承平四年三月祐子内親王家名所歌合、氷河

こほりがは水底ふかくとぢてけり早く流れし音もきこえず　禰（彌イ）式部

○同

冬くればふちせもしらず冰川うへは鏡と見えわたりつゝ　紀伊

○題不レ知（あしきの川、筑前）

萬八 玉くしげあしきの河をけふみれば萬代までに忘られむやも　讀人しらず

○弘長元年百首

ふる雨のくもる五月の玉くしげあしきの川は水まさるらむ　後九條内大臣

○題不レ知（あとかは、吾跡又阿波、近江）

萬七 あられふるとほつ（たみイ）えにある跡かはやなぎかりつれとまたおふといふあとかはやなぎ　人丸

○同

萬二千九 たかしまのあとかは波は騷げども我は物思ふやどり悲しみ　讀人しらず

○家集

筏おろすあとのはや川せき留めてくれ行く秋は暫し止めむ　好忠

○弘長元年中務卿親王家百首

たかしまのあと川波に舟とめてあすはかちのの原をゆかなむ　權僧正公朝

○承久内裏歌合（あふせ川、陸奥又未國）

せきとめぬ人めづゝみにことよせて流れもやらぬ逢瀬川波　大納言雅定卿

○承安二年東山歌合、隔レ川戀

あふせ河袖つくばかり淺けれど君許さねばえこそわたらね　太宰大貳重家卿

○題不レ知
○嘉元百首（あしかは、攝津）
○題不知（あぢきな川）
○同（あその川、下野）
○六帖題（あまの川、河内又七夕のは天也）
○最勝四天王院名所御障子、攝津
○家集
○同、扶桑
○題不知（あすか川、大和又常陸）
○挽歌
○同
○同

雲葉
程もなく流れぞとまるあふせ川かはる心やるせきなるらむ　藤原基方朝臣
ひとよともやどをばかへず數多度立ちよりてみるあし川の波　参議爲相卿
世の中はあぢきな川の岸におふる菅しばかりをなに思ふらむ　讀人しらず
萬十四
しもつけのあその川原よいしふまずそらゆときぬよなが心のれ　同
新六三
是れやこの空にはあらぬ天の川かた野へゆけばわたる舟橋　光俊朝臣
露わけし野べの秋草かれしよりみかりはつらき天の川風　知顕法師
思ふらむ磯のまに〳〵ひろふなる天の河原の（にイ）かひに（はイ）くらべむ　能宣朝臣
天の川流るゝ月のすむ影をいくよかみつるいはさくのかみ　神祇伯顕仲卿
萬七
とし月はいまだえなくに飛鳥川せゞにわたしし石橋もなし　讀人しらず
萬二
飛ぶ鳥の　あすかの河の　かみつせに　いしばしわたし　し　人丸
もつせに　うちはし渡し　いしばしに　おひなびきたる　た
まもぞ　たゆればおふる
同
とぶ鳥の　あすかの河の　かみつせに　おふるたまもは　下　同
つせに　流れふれふる　玉もなす
萬十三
神なびの　みむろの神の　おびにする　あすかの河の　みを　讀人しらず
はやみ　いきたみがてに　いはまくら　こけおふるまでに

みむろ山神のおびなる飛鳥河あふせにかへる淵はあせつゝ　光俊朝臣
○建長七年顯朝卿家千首歌（卿イ）

花も又ちりぬるゐでのあくた川返らぬ波に春ぞくれぬる　藤原爲顯
○百首歌、河五首中（芥がは、攝津）

拾六五　伊勢集
はつかにも君をみしまのあくた河あくとや人の訪れもせぬ　伊勢
○家集

聞きわたるありなれ川の水にこそ影を竝べてすままほしけれ　法橋顯昭
○六百番歌、寄ㇾ河戀（ありなれ川未國）

あかざりし君を忘れむものなれやありなれ川の石はつくとも　和泉式部
○家集

神風やいせぢをゆけば冬寒みあのゝ河原に千鳥なくなり　法印尊海
○冬歌中（あのがは、伊勢）

御禊するあさの葉がはの風わけて秋をよせ來るなみの夕聲　嘉陽門院越前
○千五百番歌合（あさの葉川、未國）

稀にきてあかず別れしあした川涙ぞ袖にみをとなかるれ　讀人しらず
○題不ㇾ知（あした川、備後）

ありす川松の齡の影みえてちよもいつきのすみぬべきかな　富家入道關白
○補集（ありす川、八雲に云齋院御所山城又いせ）

音に聞くいつきの宮のありす川たゞ舟岡のわたりなりけり　躬恒
○家集、北野行幸に本院の邊にてよめる。

いさしらずみえねばこゝにありす川君が行幸にけふこそはみれ　同
○家集

みなは卷きとこなめはしるあなし川隙こそなけれ波の白ゆふ　仲實朝臣
○堀河院御時百首（あなし川、大和）

萬七
まきもくのあなし川より行く水のたゆることなく又返りみむ　人丸
○題不ㇾ知

まきもくのゆづきがたけに雲さえてあなし河波あさ冰せり　従二位家隆卿
○家集

あすは又あぶくま川のしがらみに昨日の秋の色やのこらむ　順德院御製
○建保三年名所百首御歌（あぶくま川、陸奥）

たち曇るあぶくま川の霧のまに秋をややらぬ關もすゑなむ　前中納言定家卿
○同

〇最勝四天王院名所障子
冬の夜を長くや契る友千鳥あぶくま河のたえぬみぎはに　大藏卿有家

〇題不知（あきつ川、大和）
萬六
み吉野の秋津の川の萬づ代にたゆる事なく又かへりみむ　讀人しらず

〇千首歌
さてもなほ流れてすめる我が身かな秋津の河のあき果てし世に　民部卿爲家

〇洞院攝政家百首、忍戀
み吉野のあきつの蛙おのれのみ鳴くはならひに人もとがめず　從二位行能卿

〇不知題（さらした川、信州）
六三　新拾遺四
今更に更科川のながれてもうき影みせむものならなくに　讀人しらず

〇同（さほ川、大和）
萬四
さほ川のさゞれ踏み渡りむばたまの駒のくる夜は年にもあらぬか　大伴郎女

〇洞院攝政家百首、氷
あさでほすさほの川風さえぬらし氷をかくるゐでのしがらみ　常磐井入道太政大臣

〇家集、氷を（さのの中川、上野）
せぎりせしさのの中河氷柱ゐてゐぐひに波の音たえにけり　俊頼朝臣

〇百首歌、五月雨
堀百イ
五月雨はいくかになりてせだえせしさのの中河船通ふらむ　神祇伯顯仲卿

此の歌に或抄堀河院百首注レ之可レ勘之

〇建保四年内裏十首歌合（さのの川、未勘）
風になびくさのの川波うち靡きしらぬ露ちる夕立のそら　後久我太政大臣

〇洞院攝政家百首
あさぼらけしもさえとづるさゝ河の氷ふみわけて通ふ里人　從二位家隆卿

〇題不知（さはだ川、山しろ又大和、未勘）
萬十九
年をへてあゆし走ればさはだ川鵜八つかづけて川瀬尋ねむ　讀人しらず

〇同
催馬樂
さはだ川袖つくばかりあさきを（けれどイ）やくにのみや人たかはし渡す

〇家集、春歌中
さはだ川まきのつぎ橋中たえて霞ぞわたる春のあけぼの　從二位家隆卿

〇家集
さはだ川流れて人のみえこずば誰にみせましせゞの白玉　好忠

さはだ川せゞのうもれ木あらはれて花さきにけり春の白浪　同ィ

○寶治二年百首、浅雪
さはだ川水の心のあらはれて袖つくばかりふれる白雪　正三位知家卿

○あめつちのもじを上下におきてよめる（さみだれ、未國）
せを早み五月雨河のなり行けばみをさへ海に思ひこそなせ　順

○長永三年五月常磐五百番歌合、螢照廻日（さかさま川）
とびちがふよはの螢の光にぞさかさま河のせとはしらるゝ　源淳國

○建長四年毎日一首中
きき渡る名さへ恨めし熊野ぢやさかさま河のせをいかにせむ　民部卿爲家

○題不知（さきた川、越中）
萬十九
年毎にあゆしはしればさき田川鵜八つかづけて河せ尋ねむ　讀人しらず

○鵜川
さきた川下すう舟にさす棹の音さゆるまでよはふけにけり　二條院讃岐

○御集（さくら川、常陸）
秋の夜は月ぞ流るゝさくら川花はむかしのあとのしら波　中務卿のみこ

○文治六年五社百首（貴船川、山城）
五月雨は岩波遊ぶきぶね川かはやしろとはこれにぞありける　皇太后宮大夫俊成卿

○文治三年貴船社歌合
たのみくる心も涼しきぶね川岩ねをこゆるおきの白たま　成家

○家集、冬歌中
雪深き山のなかゆくきぶね川さすがにのこせせゞの岩なみ　從二位家隆卿

○文永六年毎日一首中（清たき川、山城）
山もとの清瀧川の霧のうへにかげさだかにも殘る月かな　民部卿爲家

○建保三年名所百首
新續古今冬
くりためてけさやこほりに結ぶらむ清たき川のせゞの白絲　僧正行意

○建長八年百首歌合（きそぢ川、信濃）
みせばやないかゞ信濃のきそぢ川君に思ひの深きわたりを　從二位行家卿

○家集
かざこしの峯こえくればきそぢ川波もひとつにうつせみの聲　鴨長明

○五首歌合、水上月、判者俊成卿（きさの小川、大和）
よしの山あをねが峯に月すめばきさの小川にたまぞ沉める　智海法師

○家集（きの川、紀伊）
あさもよいきの川上を見渡せばかねのみたけに雪ふりにけり　法橋顕昭

○名所歌中、菊川（七夕、きくがは、遠江）
なみに今うつしてみばや菊川の名もたよりあるほし合の空　参議為相卿

○文應元年七社百首、石清水（きつね川、未國）
とにかくに人の心のきつね川影あらはれむ時をこそまて　民部卿為家

○三百六十首中（きよみ川、駿河）
きよみ川いづるみなとに臨みてばせかれてたゞふ浦の入海　衣笠内大臣

○題不レ知（ゆふは川、未國）
萬七わが袖の妹がてもちてゆふは川又かへりみむ萬づ代までに　讀人しらず

○雑歌中
ゆふは川波ぢも白くあけにけりとあさの舟のよる程もなく　献（顕イ）昭法師

○題不レ知（ゆふかは、豊前）
萬一朝たちて紅葉かざせりゆふ川の神もおほ君につかへまつらむ　讀人しらず

○播磨の國ゆめさき川をわたるとて
家別れてもぬるとはなしにわがみつるゆめさき川を誰に語らむ　王生忠見

○太宰任にてくだり侍るにゆめさき川わたるとて
春のよの夢さき川をこぎわたり戀しき人にあふがまさしき　太宰大弐高遠卿

○弘長元年百首（めづらの川、肥前）
我がゆづる神代もとほし玉島やめづらの川の昔おもへば　従二位行家卿

○題不レ知（めなし川、大和）
六三みなし川みゝなし山のみえきかずあらせば人を恨みざらまし　讀人しらず

○祈レ逢戀（みわ川、大和）
みわ川の清き流れにいぐしたて夢にみむとや我はいのりし　俊恵法師

○洞院攝政家百首
五月雨に水まさるらし三輪川のとなせのるぐひ波がくれゆく　民部卿為家

○寛喜、十八首、述懐
程もなくうきて沈みし三わ川のさゞれがくれに崩る埋れ木　同

○堀河院御時百首
岩ふるゝ水わきおつるみわ河のきよきせ波（ながれイ）の音のさやけさ　仲實朝臣

○文應元年七社百首、春日（みつや川、大和）
うちいづる氷のひまのみつや川春日のどかに波やたつらむ　民部卿為家

○題不知（みやせ川、未國）
萬十四 うちびさすみやのせ川のかほはなの衣ひつらむきそも今宵も　讀人しらず

○六帖題
打わたすみやのせ河のせを早み武蔵近江はさすがぬれつゝ

○家集（みしま川、攝津）
かりにても心をかへてみしま川今はのどかになりもしなまし　馬内侍

○題不知（みせ川、伊勢）
すゞか山いせぢにかよふみせ川のみせばや人にふかき心を　讀人しらず

○家集（みたらし川、山城又するが）
つかふべき數にをとらむかくしつゝみたらし河の底に水玉（わくイ）　兼盛朝臣

○同（みもすそ川、伊勢）
新千戀二 神風やみもすそ河の岸におふる人をみつゝのかしはともがな　祭主輔親卿

○正治元年十首歌合
神風やみもすそ川に契りおきしながれのすゑぞきたの藤波　後京極攝政

○題不知
仕へませ白髮の髮をゆふにしてみもすそ川のみづはぐむまで　讀人しらず

○建保三年名所百首
夏びきの絲しておれる永き日のみもすそ川は千代も澄むべし　從二位家隆卿

玉櫛のはつ色なびくみな月や千代までかゝれみもすその波　從三位範宗卿

○御集
續後神祇 久方の天のつゆしも幾代へぬみもすそ河のちぎのかたそぎ　後鳥羽院御製

○家集、祝
なみ衣みもすそ川の早き瀬に岩きる波もたえぬ御代かな　源有仲

○永久三年五月太神宮禰宜歌合、祝
君が代は神のみむろに流れ出づるみもすそ川の千度すむまで　讀人しらず

○御集、寄河戀（水ぐき川、近江又加賀）
思ふこと水莖河にかきながしみなと渡りの人にみせばや　法性寺入道關白

○題不知（みへの河、下野）
萬九 わがたゝみみへの川原の礒のうちにかばかり妹と啼く蛙かな　伊保丸

○永久四年十月禰宜宜旨家名所歌合（みそぎ川、近江）
けふよりは荒ぶる神もあらじかしみそぎ河にて御禊しつれば　讀人しらず

○題不レ知（みなれ川、大和）
○承安三年閏十二月東山歌合、隔川霧）
○堀河院御時百首
○[illegible]山[illegible]五百首歌、川邊擣衣を（みくさの川、攝津）
○不レ知レ題（みゝとがは、山城）
○家集
○をしきのおもてはあしでにて
○題不レ知（みなのせ川、相模）
○喜多院入道二品親王家五十首
○名所歌中、水無瀨河霞
○寛元三年[illegible]百首
○百首御歌（みなと川、攝津）
○家集（湊川、千鳥）
○貞應三年百首歌、川邊蘆
○貞應二年六月當座百首、河落葉

夏はつるけふやなごしのみそぎ川川邊の風は涼しかりけり　讀人しらず
新勅撰河　六三
世の中はなぞ大和なるみなれ河みなれそめてぞあるべかりける　同
みなれ川わたす小舟にことづてむ涙にうくと君にしらせよ　藤原章綱
急げども渡りやらねばみなれ川みなれし人の影やとまると　前齋宮河内
霜結ぶみくさの河の秋風にたれうらがれて衣うつらむ　光俊朝臣
六三
百敷の大宮ちかきみゝと川ながれて君をきゝわたるかな　讀人しらず
六一
みゝと川きけばおほしくおほぬさにかくいふ事を誰か憎まむ　みつね
耳と川やほ萬づ代の夏ごとになごしのみこそ聞き渡るらめ　元輔
萬十四
まかなしみさねにははやく鎌倉のみなのせ河に潮みちなむか　讀人しらず
東路やみなのせ川にみつ潮のひるまもしらぬ五月雨の頃　野宮左大臣
潮よりも霞やさきにみちぬらむみなのせ川のあくるみなとは　參議爲相卿
たちまがふ波のしほぢもへだたりぬみなのせ川の秋の夕霧　從三位信實卿
あかしがた月影おくる浦風はみなとがはらの秋の松原　慈鎭和尙
みなと川夕しほみちて風さむみふるき都に千鳥なくなり　前民部卿雅有
夜をかさねかれゆくあしの湊川さしいる舟もとゞこほるらむ　民部卿爲家
こきいれし秋のこの葉の湊川となせの波ににしき立つなり　同

○題不レ知（みなせ川、山城又攝津或大和）
萬四 戀にもぞ人はしにけるみなせ川下にわれやす月にひごとに　讀人しらず

○天仁二年十一月顯季卿家歌合、夏祓）
ひさぎおふるみなせ川原の淸ければ七瀨を分けて御禊をぞする　保俊朝臣

○家集
水無瀨川流れてとまる水莖のみえぬたえ間は淚なりけり　元眞

○題不レ知
底深き淵なければやよの人のみなせ河とはいひはじめけむ　讀人しらず

○堀河院御時百首
水無瀨川おちくる水の岩ふれてをる人なしに波ぞはなさく　藤原基俊

○御集
水無瀨川たかせ吹きまく山おろしにいはさきのぼる波の夕花　後九條內大臣

○最勝四天王院名所御障子
おちたぎつ菊の下露水無瀨河ながれをくめるよろづ代の秋　後久我太政大臣

○同
庭にうつす山ぢの菊をみなせ川ぬれてふきほす千世の松風　參議雅經卿

○同
なみかぜにつけても千世をみなせ川峯のまつ山菊の下露　具親朝臣

○家集、五月雨
みなせ河をちのかよひぢ水みちて舟渡りする五月雨のころ　西行上人

○家集、戀歌中
うち渡す人しおほののみなせ川淺き心をたれかみざらむ　俊賴朝臣

○題不レ知（しかま川、播磨）
萬十五 渡つみの海に出でたるしかま河たえむ日にこそわが戀やまめ　人丸

○同
六二 新千戀二 播磨潟うみにいでたるしかま川たえむ日こそはわが戀やまめ　讀人しらず

○百首歌、岡邊早苗
しかま河霜おくまでにかりし田を岡べの早苗なに急ぐらむ　從二位家隆卿

○題不レ知（白かは、山しろ、筑前、陸奧關也）
六三 おとはよりおつる白川しらねども蛙が聲はとめてきにけり　讀人しらず

としふれど水だにすまじ白川の月のとまりとなりにけるかな　同ィ

○家集
○同
○三百首歌（しほたの川、未國）
○百首御歌
○題不知（泉川、山城又大和）
○六帖題（ひつかは、山城）
○嘉元四年十月當座百首
○題不知
○寶治二年百首（ひのくま川、河内又大和）
○六帖題、夕立
○弘長元年百首（一よがは、未國）
○西行上人家集（もがみ川、陸奥）

戀なれど底にもすまぬしら川は水にごれりとおもほゆるかな　元輔
家 もゝ草の花の影までうつしつゝおともかはらぬしら川の瀧　貫之
此の歌は延長八年とさのくにに下りて承平五年に京にのぼりて左大臣
どの白河殿におはします御伴にまうでたるに歌つかふまつれとあれば
よめると云々
岩高きしほたの河に舟うけてさしのぼりたる月をみたかな　中務卿のみこ
明けわたるしのみや河原霧はれてをちかた人の數ぞみえゆく　順徳院御製
萬七 ひろせ河袖つくばかり淺きをや心ふかめてわがおもふらむ　讀人しらず
新六六 ひつかはの岸に匂へるかば櫻ちるこそ花のとがめなりけれ　衣笠内大臣
明けくれは心ぞかゝる春日山ふもとにかよふひつ川の波　從三位爲實卿
六三 年をへて袖ひつかはのうづまきに戀しき人の影なかりけり　讀人しらず
あかねさすひのくま川を急ぐとて影だにとめず駒ぞ過ぎぬる　光臺院入道二品のみこ
つまこめて八重立つ雲になるかみやひの川上の夕立の空　權僧正公朝
たのまじななれし名殘の一よ川枕にさわぐみなとありとも　後九條内大臣
もがみ河つなでひくともいな舟の暫しが程はいかりおろさむ　崇徳院御製
此の歌は西行上人ゆかりたる人のあやまちありてまゐらざりけるなゆ

ろし給ふべきよしそうして侍りければよませ給うけると云々

○御返事
強くひく綱手と見せよもがみ川そのいな舟のいかりおろさで　西行上人
かくそうして侍りければ程なく御ゆるし有りけると云々

○隠居百歌
最上川早瀬に過ぐるわれ舟のとゞこほるべきこの世とやみる　民部卿爲家

○家集
もがみ川たのめし船のつなくりてこぎ離れぬる行く先をみむ　元輔

○題不レ知（もろよせ川、但馬）
心せしもろよせ川の水なくば淵瀬もわかずおもひわたらむ　讀人しらず

○家集（もゝせがは、未國）
名のみしてさても嵐をもゝせ河ゆゝしきせをば我ぞ過ぎまじ　左京大夫顯輔卿

○續御歌中（せきのふぢ川、美濃）
つかふべき契りは君に結びきぬ流れよたゆなせきのふぢ河　常磐井入道太政大臣

○建長五年毎日一首中、あづまへ下るとて駿河の國にてよむ
せな川のはやせに見えずゆく水や妹こひわたる涙なるらむ　民部卿爲家

○海道海宿次百首
おなじくは近く渡せる河かみのはしは遥かにめぐりてぞゆく　參議爲相卿

○六百番歌合祈戀（せみのをがは、山城）
いし川やせみのを河にいぐしたてねぎしあふせは神に任せむ　法橋顯昭

○弘長元年百首
いし川やせみのを川の流れても今もたえせぬかもの御手洗　從二位行家卿
（ぞイ）

○三百六十首中（せたの川、近江）
田上やせたの河せにやなさしてよるとしなれば浮寐をぞする　好忠

○題不レ知（すゞか河、いせ）
萬十二
すゞか川やそせ渡りて誰故かよこえにこえむ妻もあらなくに　讀人しらず

○建保三年名所百首
鈴鹿河やそせふみ渡りみてくらし君が代ながき千よの長月　前中納言定家

○家集
名にはいへど鷹にもつけぬ鈴鹿川せゞの音こそさやけかりけれ　忠峯

○題不レ知
哀れてふ人もなきよに名にしおはば身をすゞぎ川は淸く流れよ　讀人しらず

○建保三年名所百首御歌(すみだがは、駿河武藏又大和伊勢)
こよひ又たれ宿からむいほさきの角田河原の秋の月影　順德院御製

○同
都どり角田川原にふなでしぬさしてとふべき人しなければ　僧正行意

○同
水莖の跡かきながす角田川ことづてやらむ人もとひこず　前中納言定家卿

○同
月影のさすやいほさきすみだ河こえてまつちや山のかひより　從二位家隆卿

○寶治二年百首、渡月
角田川あなかま舟のかぢかくせよわたる月をとゞむばかりに　正三位知家卿

○家集
いほはらやすみだ河原の磯枕とひ〱みればあかぬ空かな　家長朝臣

○題不レ知
(六二)いではなるあねそ(とイ)のせす(とイ)の角田河流れてもみむ水や濁ると　たゞみね

淵

みよしのの瀧の岩淵なれをしもいかに深めて賴みそめけむ　衣笠内大臣

みくりひく浪まやいづく沼淵の深きも見せず凍る冬かな　信實朝臣

涙川あさきせぞなきみちのくの袖のわたりに淵はあれども　從二位行家(能イ)

○柿本影供百首續歌
しきたへの枕の下に神なびの山のいはぶちいくよせくらむ　後九條内大臣

○題不レ知
(萬十一)神なびの(萬)をうちまふさき(わの萬)の岩淵に隱れてのみやわが戀ひをらむ　讀人しらず

○嘉應元年觀智法師房歌合、螢
池水にすだく螢をいにしへのふちに沈めし玉かとぞみる　同

瀬

○六帖題（瀬）
新六三 いつみ河下るを船のうちかひに淺瀬ぞしるきゆき惱みつゝ　衣笠内大臣

○同
同 月毎のなゝせのみそぎ絶えせぬは誠にちかきかはらとやみむ　信實朝臣

○遠所十首歌合
船とむるおきつしほせの夕なぎにとほ山うかぶ秋の浦波　後九條内大臣

○建長八年百首歌合
舟人の沖のひろせにこぎかけて潮のむかへにくるを待つらし　光俊朝臣

○六帖題
新六三 この川の港やちかくなりぬらむひろせをこえて潮滿ちにけり　同

○百首御歌（山吹のせ、山城うち也）
ゆく水のそこはかとなく移ろひぬ山吹のせの花のしがらみ　順徳院御製

○家集（いはせ、大和）
みよしのの山もたかせのあさ嵐いはせの川も浪高くみゆ　伊勢

○元永元年六月
となせよりくだす鵜舟のみなれ棹ゐぐひおとなふ心してとれ　俊頼朝臣

○六帖題
新六三 五月雨にみかさぞまさる大井河となせのゐぜき落すばかりに　衣笠内大臣

となせのたきこのもかのものあらしの花と云々

○家集（あやのせ、陸奥）
あやのせに紅葉の錦立ちかさねふたへにおれる立田姫かな　能因法師

此の歌はとがはといふ所を舟にのりてくだるほどにある物このわたりをあやのせとぞ云ひはべる歌よみて神に奉る所なりといへばよめると云々

〇沼部
〇家集（あさいのぬまをよめる）
〇正治百首御歌
〇建長八年百首歌合
〇文治六年五社百首
〇家集
〇堀河院御時百首（淺さはぬま、攝津）
〇同（いただのぬま、河内）
〇修理大夫顯季卿家にて戀の心をよめる（かほやがぬま、上野）
〇上野國歌（いかほのぬま、上野、陸奥）
〇建保三年名所百首御歌
〇同
〇同

沼

萬十九
大君はかみにしませば水とりのすだくみぬまを都になしつ　讀人しらず

沼水も氷りにけらしうたかたの山路もけふはこえやしぬらむ　家盛

かくとだに岩かき沼のみをつくししる人なみにくつる袖かな　式子内親王

わが袖はぬれにぞぬるゝ沼川のあしまの草の身がくれてのみ　衣笠内大臣

奥山の谷のうきねの菖蒲草ひくひとなしにねやなかるらむ　皇太后宮大夫俊成卿

しげりゆく野草がくれの沼水を人にしらせてなく蛙かな　民部卿爲家

かきつばた淺澤小野の沼水に影をならべてさきわたるめり　大納言師頼卿

堀百
すみよしの淺澤沼のかきつばたあらぬ色散けふもとまりぬ　權中納言師時卿

けたおちて苦むしにけりおほたどのいただの沼に渡す舟ばし　仲實朝臣

東路のかほやがぬまのかほよ花時ぞともなくせなぞこひしき　同

萬十四
上野のいかほの沼のうゑこなぎかくこひむとや種もとめけむ　人丸

まこもおふるいかほの沼のいかばかり波こえぬらむ五月雨の頃　順徳院御製

萬十四
こなぎ植ゑしいかほの沼の菖蒲草ながき種をば誰か求めむ　僧正行意

いかほのやいかに程ふる五月雨に沼の岩がき浪もこすらむ　正三位知家卿

唐衣かくるいかほの沼水にけふはたまぬく菖蒲をぞひく　前中納言定家卿

水とりのたまものとこやしをるらむいかほの沼の夕立の空　藤原康光

花がつみかつみちたゆる鳰鳥のあさかの沼にみなれそめけむ　兵衛内侍

笹わけしあさかの沼の花がつみかつみる夢のあくる程なき　後鳥羽院御製

音にきくあさかの沼の朝ぼらけたえぬ煙は名のみなりけり　元眞

金葉雑上
さよ中に思へば悲しみちのくのあさかの沼に旅寐しにけり　大納言師頼卿

此の歌家集云みちのくのあさかの沼のほとりに京より人たちとまれり

萬十四
かみつけのいならの沼のおほゐ草よそにみしよは今こそまされ　讀人しらず

逢ふことはいならの沼のおほゐ草よそにやこひむ袖はくつとも　順徳院御製

おほゐ草浪はうへになりにけるいならの沼に晴れぬ五月雨　民部卿爲家

見渡せばふかぬ屋づまもなかりけりよどのの沼にひける菖蒲を　讀人しらず

あやめ草尋ねてぞひく眞こも刈よどのわたりの深き沼まで　祭主輔親

いかにけささえのの沼の凍るらむをしほの山に雪はふりつゝ　光俊朝臣

續古今
をしほ山やま風さむみ大原のさえのの沼やさえはじむらむ　元輔

ひくねさへ逢かなるかな君が代のながしの沼におふる菖蒲は　藤原公房朝臣

あはづのの澤べの沼に蛙なく春のみどりぞふかくなるらむ　元輔

○同
○同
○同、あさかのぬま（陸奥）
○最勝四天王院名所御障子
○東宮女御賀御屏風歌
○堀河院御時百首
○百首御歌
○貞應三年百首
○天仁三年十一月顯季卿家歌合、菖蒲（よどのの沼、山城）
○長元八年關白左大臣家歌合
○建長八年百首歌合（さえのの沼山城）
○永觀元年九月右大臣賀の屏風、大原野
○寛治六年五月宗通卿家歌合（ながしのぬま、攝津）
○天延元年内裏屏風（あはづの沼近江）

○長曆一品宮歌合（たまえの沼、越中）
○家集（ふるのの沼、大和）
○建長七年顯朝卿家千首、沼春駒（よしのゝ沼、駿河）
○あづまへくだりける道にて
○海道宿次百首浮島が原をすぎていきぬ
○延喜六年定文家歌合、綠沼紅蓮（みどりの沼、未國）
○永久四年四月鳥羽殿歌合、菖蒲（なが沼、未國）
○同
○讀不知（ななしの沼、陸奧）

敷島やたまえのぬまの菖蒲草つらぬくちよの數とこそみれ　相摸

かくて世にふるのの沼の菖蒲草ねがくれ袖は乾くまもなし　同

春草はかりかふばかりなりにけりふしのの沼に駒やとめまし　源仲遠

かけひたすぬまの入江にふじのねの煙も雲もうきしまの原　源光行

此の歌路次之記云うきしまが原はいづくよりもすぐれてみゆ北はふじのふもとにて東西はるばるとながき沼ありぬのなひけるがごとし山のみどりなひたして空も水もひとつなり蘆刈小舟所々にさなさしてむれたる鳥おほく見わたされて雲の波けぶりの浪いとふかき所なり眺望いづれもとりどりに心ぼそし原にはしほやのけぶりたえだえたちわたりてと云々

水近き蘆の沼のよそながらいさるる鳥のさだかにはみず　參議爲相卿

みどりぬにうきたるはちす紅に水にごるなり波立つなゆめ　讀人しらず

紅にはちすうきたるみどりぬに白波たてばこきまぜの花　同イ

はるばると遠ながき沼のあやめ草千歳のけふはひかむとぞ思ふ　仲實朝臣

君が代はなほなが沼のあやめ草ゆく末とほく尋ねてぞ行く　宗俊朝臣

みちのくの名なしの沼の水たえていひはあれども人頼めなる　讀人しらず

○家集（をだえのぬま）

○歳時記武藏國歌（をさきの沼）

色に出で人しりぬべきをだえぬの沼よりもげに上ぞつれなき　好忠

萬九
さきたまの　をさきのぬまに　かもぞはねきる　おのがをに

ふりおけるしもを　はらふとならし

夫木和歌抄巻第二十四 終

○百首御歌
○六帖題（ふね）
○建保三年名所百首御歌（いそまのうら、磯間、駿河或紀伊）
○家集中イ
○題不知
○歌中
○かひ

夫木和歌抄　巻第二十五

雑部七

題　浦附塩竈　濱　湊　潟　泊

浦

契らすな人を見るめのよそながら心のうらに袖ぬらせとは　順徳院御製

浦ふかく沈みはてたる捨舟のそがひにすぐるまほの影かな　権僧正公朝

新六三
須磨明石浦の見渡し近けれど歩み苦しきたかすなごかな　光俊朝臣

かみしまや磯間の浦にあまのかるもにすむ蟲のみを恨みつゝ　順徳院御製

いたづらに磯間の浦のうつせがひあはでや浪の下に沈まむ　兵衛内侍

いかにせむいそまの浦にやくしほも空にはしるき煙たちけり　従三位範宗卿

萬十五朱點也
月よみの光をきよみかみしまのいそまの浦に船出す我は　讀人しらず

[illegible]
波よする磯間の浦のそなれ松ねをしほにのみぬるゝ袖かな　橘庵衆

現存六
かみ島の磯間の浦による貝のみはいたづらになりはてぬはた　光臺院入道二品のみこ

萬代 ほのめかすかひこそなけれ逢ふ事をいなみの浦の海士の漁火　法橋顯昭

歌林 ひとかたに思ひ靡けばいかでかは生田の浦に身をもなくべき　賀茂重保

萬九 ゆらの崎汐干にけらししらかみの磯の浦みをあへてこぎとよむ（くとよイ）　讀人しらず

磯の浦に夕汐みてば小舟さすかるものあまもいま歸るなり　從二位行家卿

いはばやなしらでや人の急ぐらむいかごの浦は見るめなしとも　俊頼朝臣

玉葉冬 月清みさよふけゆけば伊勢島やいちしの浦に千鳥なくなり　鎌倉右大臣

なみの音も松の嵐もいまのうらに昨日の里の名殘をぞ聞く　源光行

此の歌路次記云遠江國府いまのうらにつきぬこゝに宿りて一日二日留りたる程にあまのをぶねにさをさしてうら〳〵のありさま見めぐればしほ海水海の中にさきとほくへだたりて松所々におひつゞけるさま橋本にあひ似たりと云々

歌林良材 神風やいせのうらわにきよすなるとこよの波や君がよの數　讀人しらず

かみのます出雲の浦にやくしほの煙ややがて八雲なるらむ　後九條内大臣

家集 いかにしてをばすて山の月よりも出雲の浦にてりまさるらむ　讀人しらず

はこの浦あけくれ遊ぶ蘆鶴の千歳の影ぞともにみゆらむ　重之

罪深き身はほろぶやと音にきくはちすのうらを行きてだにみむ　讀人しらず

○戀歌中
○題不レ知（いくたのうら、攝津）
○同（いそのうら、越中又紀伊）
○建長八年百首歌合
○近江のいかごといふ所へまかりける人に（いかごのうら、近江）
○海邊千鳥といふ事を人々あまたよみけるついでに（いちしのうら、伊勢）
○あづまへ下りける道にて（いまのうら、遠江）
○題不レ知（かぜ、いせのうら、伊勢）
○御集、雜歌中（いづものうら、出雲）
○承保三年十一月源經仲朝臣出雲國名所歌合
○はこのしきにかくべき歌とて人のめし（けめイ）ければ（はこのうら、未國）
○題不レ知（懷中、はちすのうら、加賀）

峯高きこのやまもとは影くれて夕日殘れるにほのうら波　民部卿爲家

己れのみことゝへ夜半の沖津波ならはぬとこの浦路なりとも　後九條内大臣

打ち拂ふをりもありけりとこの浦浪になれたる夜はのさ筵　大納言通具卿

萬十二
郭公とばたの浦にしきなみのしば〳〵君をみむよしもがな　讀人しらず

しらくものとばたの浦の山風にそらさえまさる秋の夜の月　從二位賴氏卿

萬三
鞆の浦の磯のむろの木見るごとにあひみし妹は忘られむかも　讀人しらず

萬七
海士小舟ほかもはれぬとみるまでに鞆の浦わに波たてるみゆ　同

旅ねして月ばかりこそ鞆の浦の磯のむろ野に明けぬこのよは　信實朝臣

此の歌判者光俊朝臣云鞆浦の磯室野こそ未だ見及び侍らねめづしさも理りなるべし天平二年十二月太宰師大伴卿向レ京上レ道時歌には「とものうらのいそのむろの木みるごとにあひみしいもはわすられむやは」とこそ侍れ室野とは見えずもしかきあやまりにて木なにとかかれて侍らば木はさしてあけぬこのよといはむ事山のはなみのうへの心ちやし侍らむ云々

新六
あづさ弓磯邊にたてるむろの木のとことはにうつ鞆の浦浪　民部卿爲家

思ひいづるときの浦にもうき人は忘れ貝こそ拾はれにけれ　讀人しらず

(家集（にほのうら、近江）
(寶治二年百首、旅泊（とこのうら、鳥籠、近江）
(千五百番歌合
(題不知、萬十五（とばたのうら、飛驒、紀伊又筑前）
(貞永元年八月十五夜名所歌合
(題不知（とものうら、鞆、備後）
(建長八年百首歌合
(六帖題、むろ
(題不知（懷中、ときのうら、長門）

○家集（とふのうら、陸奥）

浪かくるたまものねやのひじきものあまにや何をとふの浦人　長明

○中務卿親王家五十首歌合

秋風　みちのくの野田のすがごも片しきて假寐寂しきとふの浦風　道因法師

○題不レ知（ちえのうら、未國）

萬十一　秋風のちえのうらわのこづみなる心はよりぬ後はしらねど　讀人しらず

○千五百番歌合

思ふことちえの浦わのうき木だによりあふ末はありとこそきけ　寂蓮法師

○題不レ知

歌林　たづのすむちえの浦わに我れもきて老の浪をばよせじとぞ思ふ　祐盛法師

萬七　妹がため貝を拾ふとちぬの浦ぬれにし袖はほせど乾かず　讀人しらず

○天仁大嘗會（ちさかのうら、千坂、近江）

我が君はちさかの浦にむれてゐるたづや雲居の試しなるらむ　前中納言匡房卿

○承保三年大嘗會主基方御屏風

すべらぎは千坂の浦のさゞれ石の雲居に見ゆる岩となるまで　同

○弘安元年百首秋、歌

さき匂ふ千草の浦の潮風に秋はいろ〱の浪ぞよせける　法印定圓

○家集、昔あへる人の許より貝をおこせたるに、ちとせのうら

わかれにしちとせの浦の忘れ貝けふこそみつれ波のつかひに　祐擧

○第三親王家十五首歌（ちかのうら、攝津、近江又陸奥或肥前）

もろこしもちかの浦わのよるのゆめ思はぬ中にとほつ舟人　從二位家隆卿

○百首御歌（をみのうら、嗚呼見の、伊勢）

みるめほす濱のまさごの白妙に日影もなびくをみの浦風　順德院御製

○建長八年百首歌合

をみの濱日かげになびきよる潮のひがたも遠く浦風ぞふく　前大納言伊平卿

○正治二年百首（をののうら、紀伊）

きのくにやをののうらわの友千鳥ゆふかけてこそ聲は聞ゆれ　正三位經家卿

○承元三年長尾社歌合、海邊歸鴈（をじまのうら、陸奥又常陸）

ゆく鴈のなごりをじまの浦みても袖しほたるゝ春のあま人　權少僧都行敎

○題不レ知

歌林　おきつ風やゝ寒からし松島やをじまのうらに千鳥鳴くなり　源季廣

○百首歌中、秋風（わかのうら、紀伊）
○くまのにまゐりけるとき
○寛元四年實國家歌合、曉浦潮
○題不知
○熊野へまゐりけるに藤代にてわかの浦を見やりて
○題不知（かとりのうら、香取、下總或近江）
○（かたみのうら伊勢）
○詠海歌中
○國々名所にて作る歌（なさはのうら、駿河或伊豫）
○家集（かるものうら、未國）
○同（かただのうら、近江）
○同（かつしかのうら、下總）
○寶治二年百首御歌（かたのうら、未國）
○すはうに侍るかつまのうらやといふ所にて（かつまのうら、周防）
○建保三年名所百首御歌（かすみのうら、霞、常陸）
○同

都ぢにたがはずいかで語らまし浪より見ゆる和歌の浦松　後德大寺左大臣

道木 和歌の浦にうちいでて見れば淡路島月に波こすやへの潮風　前中納言定家卿

和歌の浦やなぎたる朝の濡標（みをつくし）朽ちぬかひなき名だに殘らで　同

六三 和歌の浦に若めかりほす我をみて沖こぐ舟のすぎがてにする　讀人しらず

白浪の立ちよらねども和歌の浦を海士の漁火仄かにぞ見る　六條院宣旨

萬七 いづくにか舟のりしけむたかしまの香取の浦にこぎてこし（かくるイ）舟　讀人しらず

萬七 もかり舟沖こぎくらし妹が島かたみの浦にたづかけるみゆ　同

現葉 よしやたゞかたみの浦のうつせ貝空しき中はあるかひもなし　後一條入道關白

萬十五 我ゆゑに妹なげくらしかざはやの浦の沖べに霧立ちにけり　讀人しらず

をだひつるかるものあまも春くれば浦々毎にながめをぞする　好忠

うちとけてぬるもかただの浦風に浪の枕もこほりしにけり　從二位家隆卿

續後撰戀一 かつしかの浦間の松のうちつけに見そめし人の戀しきやなぞ　藤原道信（續後）

朝日さすかたの浦風しづかにてけふはいでそふあまの釣舟　後嵯峨院御製

家 思ひいでよ千代の子の日の春毎にかつまの浦の岸のひめ松　元輔

新後撰戀一 ほのかにもしらせてけりな東なる霞の浦のあまのいさり火　順德院御製

しらせばや煙を空にまがへても霞の浦のあまのもしほ火　正三位知家卿

○御集、海邊霞
佐保姫はしほやくあまといつなりて霞を浦の名には立つらむ　後九條内大臣

○建長八年家百首歌合
てりもせず曇りもはてぬいさり火や霞の浦の苫屋なるらむ　同

○永久四年十月齋宮宣旨家歌合、浦霞
はるたてばかすみの浦のあま人は櫻貝をやまづ拾ふらむ　讀人しらず

○顯仲卿すゝめける住吉社歌合、荻（よさのうら、丹波）
よさの浦にひとむらたてる濱荻のなびく方なき戀もするかな　源兼昌

○おなじき歌合判歌
汀なるしほあひにまがふ濱荻はよしとぞみゆるよさの浦人　神祇伯顯仲卿

○六帖題（よごのうら、余吾、近江）
新六三　いまもかもよごの浦風たかからしとまる舟人沖にいづなゆめ　光俊朝臣

○家集、並レ而戀
いかごがた余吾の浦わに引く網のめを竝べてもあはでやめとや　權中納言長方卿

○題不レ知（たまのうら、玉、紀伊）
萬九　わがこふる妹はあひさす玉の浦に衣片しきひとりかもねむ　讀人しらず

○同（玉島のうら、肥前）
萬五　まつらがは玉島の浦にわがゆづるいもらをみらむ人のともしさ　同

○百首歌（たけのうら、未勘國）
古來歌　音ぞよくたけの浦風ふきたてて眞砂にあそぶ秋のかりがね　光俊朝臣

○題不レ知（懷中相模、たもとのうら、相模）
なびきこし袂の浦のかひしあらば千鳥の跡をたえずとはなむ　讀人しらず

○魚鹿津にて作る歌（たゆひのうら、手結、越前）
萬三　こしの海の手結の浦を旅にしてみればともしみ山跡（やまと）思ひつ　笠金村

○名所歌よみけるに旅のうら（未勘國）
島づたひあさなゆふなに舟出して宿もさだめぬ旅の浦人　二條大皇大后宮肥後

○百首御歌
都いでてけふやいくかのたびの浦とほやま松にかゝる白波　後九條内大臣

○同（たこのうら、田兒、多枯、駿河又越中、丹波）
朝日さす田兒の浦浪たたぬ日はあるかなきかのをちの濱松　洞院攝政

○千五百番歌合
松が枝に沖津しほかぜはるかけて霞になぎぬ田兒の浦波　後鳥羽院宮内卿

○家集、氷結 讃
○正治二年百首
○題不レ知
○家集
○仁和二年二月清輔朝臣家歌合、海邊霞
○經集
○布勢水海にて作る歌（たるひめのうら、多祜比賞、越中）
○題不レ知（たかしきのうら、對馬）
○六帖題、謠（たかしまのうら、近江）
○百首歌（たけちのうら、未勘國）
○家集（たかしのうら、近江又和泉）
○花月百首御歌（たかさごのうら、播磨）
○承安元年八月今玄法師房歌行、花

朝こほりにほも通はずなりにけりなにをよすらむ田兒の浦波　　第三のみこ惟

あさ霞こしぢも見えずたちぬれば晉にこそきけ田兒の浦波　　従二位家隆卿

萬三 新古參
たごの浦にうち出でて見れば白妙のふじの高峯に雪はふりつゝ　　赤人

源顯兼也
たごの浦のまつり事（人イ）さへ百敷のえらびに入りてなれるなるべし　　好忠

たごの浦にきつゝなれけむ少女ごがあまのは衣さほすらむやぞ　　同

明けぬとも思ひ分かじなたごの浦の霞のうちのいねのあま人　　前中納言師仲卿

萬代
ふねとむる田子の浦わの夕汐にふじのみたけは霧こめてけり　　紫金臺寺入道二品親王

萬十七
たるひめの浦をこぐ船舵間にもならのわきべを忘れて思へや　　中納言家持卿

萬十五
たかしきの浦間の紅葉我行きて歸りくるまでちりこすな夢　　讀人しらず

新六三
たかしまの浦間の風になびきものよる〳〵世をば思ひしりてき衣　　笠内大臣

萬七
しらざりし昔さへこそ戀しけれたけちの浦の月をながめて　　寂蓮法師

身をなげくうらみはいづくいづみなる高師の浦にみちし潮風　　躬恒

高砂の松に浦風かよふなりをのへの花のあたりなるらむ　　後京極攝政

春風にをのへの花やちりぬらむ櫻なみよるたかさごの浦　　玄有法師

此の歌判者清輔朝臣云左歌花のさき所おもひかけずや野宮歌合源順判
にも女郎花の歌にさがのなすぎてくらぶ山までたづねけるあひなしと

こそ難じ侍れ是れは古歌にたかさごのをのへの花とよめる事まゝ侍るにはかられたるにやかれは播磨のたかさごにはあらず山の一の名なたかさごといへば山のをのへとよめるなりこれはたかさごのうらといへればさしたる事ときこゆと云々

白妙の袖の浦浪よる〳〵はもろこし舟やこぎわたるらむ　前中納言定家卿

しくなみだひとりやねなむ袖の浦騒ぐみなとはよる舟もなし　従二位家隆卿

いまはたゞ戀わすれ貝たねたえてひがたもしらぬ袖の浦波　光明峯寺入道攝政

（現葉）旅衣たちよるいその松かげに涼しくかよふそでの浦風　平宣時朝臣

うたゝねの寒くもあるかな唐衣袖のうらにや秋のたつらむ　和泉式部

袖の浦にたゞわかやぐと鹽たれて船流したる海士とこそなれ　大納言經信卿

（家）袖の浦の色の濱とはなりぬとも何のかひかはあらむとすらむ　伊勢

しきりつゝ涙のかゝる袖の浦にわすれ貝をば拾はざりけり　中務

潮のみつ袖しの浦のかたをなみあしべの鶴のねをのぞなく　法印定範

滿つ潮のそこひの浦にくらぶとも我が衣手はなほや沉まむ　後九條内大臣

（萬十五）天つちのそこひの浦にあが如く君にこふらむ人はさねあらじ　讀人しらず

（萬二）大船の津守の浦（占ナリ浦ニアラズ）に（いで）つまむとはまさしにしりてわがふたりねむ（レイ）　大津皇子

○貞永元年七月、戀古歌（袖のうら、出羽）
○建保三年名所百首
○洞院攝政家百首御歌
○夏歌中
○安（家イ）集（袖のうら、出羽國）
○家集
○同
○同
○光臺院入道二品親王家五十首、寄レ鳥戀（袖しのうら、出雲）
○寶治二年百首（そこひのうら、曾許比能）
○題不レ知
○（つもりのうら、攝津）

○御集
住吉は齢つもりの浦なれば神は年をやをしまざるらむ　慈鎮和尚

○題不知（なつみのうら、夏身、紀伊）
萬十一
すが島のなつみの浦による浪の間も置かずわが思はなくに　讀人しらず

○家集中
家六三
われを君心のまゝにすが島のことをなつみの恨みてぞふる　俊頼朝臣

○貝（なごのうら、名兒、越中）
きてみればなごの浦までよる貝のひろひもあへず君ぞ戀しき　伊勢

○六百番歌合、寄煙戀
なごの浦にやく潮煙空にのみ吾が名をたててやまむとやする　法橋顕昭

○建長八年百首歌合
夕されば潮風吹きてなごの浦の寒さすざきにたづぞ鳴くなる　鷹司院帥

○戀歌中
萬代　新千載雜三
磯菜つむなごの海士人こととはむほすに乾かぬ袖はありやと　法橋顕昭

○題不知
萬十八
浪たてばなごの浦間によるかひのまなき戀にぞ年はへにける　福丸（麿イ）

○題不知（なみだのうら、丹後）
新撰萬葉
獨りぬるねやの隙よりいる月や涙のうらに影うかぶらむ　讀人しらず

○天仁三年四月晦時朝家歌合、寄玉戀
あはざらばしほひの袂いかゞせむ涙の浦にぬるゝたもとを　藤原敦隆

○保安二年九月内大臣家歌合、戀（なるとのうら、阿波）
暮れゆけば忍びもあへぬ我が戀やなるとの浦にみつ潮のごと　俊頼朝臣

○家集
雖かだに通はむことは大島やいかになる（あイ）との浦とかは見し　和泉式部

○同
萬十三
思ふこと鳴門の浦に拾ひつゝかひよりけりとしらせてしがな　相模

○長歌（なかとのうら、長門）
なかとのうらに　あさなぎに　みちくるしほの　ゆふなぎに
よりくるなみの　讀人しらず

○題不知（ながたのうら、未勘國）
六帖三
我が戀はながたの浦の濱千鳥をはにもみ（ふれ六）えぬ君がみゆらむ（ゑにイ）　同

○六帖題、みるめ（ながはまのうら、能登）
新六三
あさな夕な刈るてふ蜑のみるめだに猶程たえぬながはまの浦　信實朝臣

○最勝四天王院名所御障子、鳴海浦（尾張）
きくからにあはれなるみの小夜千鳥霧たつ波のすゑの松風　慈鎮和尚

○天祿三年五月資子内親王家歌合村上御時一宮（なだのうら、未勘國）
なだの浦しほになづさふ海松を汀の浪ぞとしはこえくる（へにけるイ）　讀人しらず

○題不レ知（なだかのうら、名高、紀伊或近江）
萬十一
紀の海の名高の浦による浪の音たかしかもあはぬ子故に　同

○同
萬十七
紫の名高の浦のなのそりのいそになびかむ時まつわれを　同

○同
萬十一
むらさきの名高の浦のなびきもの心は妹によりにしものを　同

○家百首
紀の國のなだかの浦にゆく舟の眞帆にも人をあひ見てしがな　民部卿爲家

○名たちのうらをよめる（なだちのうら、攝津）
萬代
かづきするなだちの浦のあま人は浪のぬれ衣幾夜きつらむ　二條太皇大后宮攝津

○堀河院御時百首（ながゐのうら、攝津）
新後撰秋下
嵐ふくいこまの山に雲はれてながゐの浦にすめる月かげ　中納言國信卿

○九月ばかりにながゐの浦といふ所にしほゆあみにいでて
住吉のながゐの浦も忘られて都へとのみいそがるゝかな　權中納言定賴卿

○貞應三年四季百首、夏海
吹きよするなみかぜ涼し夏の日のながゐのうらの松の下かげ　民部卿爲家

○家集（ながらのうら、長柄、攝津又近江）
玉藻かる巖のもととなりにけりながらの浦の濱の眞砂は　元輔

○同
萬代
あしびたく長柄の浦をこぎわけて幾千年（千ナシ（イ））といふに都みつらむ　能因法師

○寛元四年十禪師歌合
さゞ浪やかみよの松のそのまゝに昔ながらの浦風ぞふく　前大納言爲氏卿

○題不レ知（なはのうら、攝津又紀伊）
萬三
なはの浦にしほやく煙ゆふされはゆきすぎかねて山に棚引く　讀人しらず

○故宮落葉
紅葉するたかつのみやに風ふけば錦をあらふなはの浦波　權大納言實家卿

千鳥なくふけひのかたを見渡せば月影寂しなにはえのうら　西行上人

露のぼるあしの若葉に月さえて秋を爭ふなにはえのうら　同

なつかりのあしふくこやに通ひきて軒端涼しきなには浦風　正三位季能卿

なみかけの浦のねざめにいとゞしく物思ひそむる鴈がねの聲　太宰大貳高遠卿

東なるなさかの浦にしほみちて有明のうちに千鳥なくなり　顯仲朝臣

萬十五 武庫の浦の入江のすどりはぐゝもる君を離れて戀にしぬべし　讀人しらず

しほ風や寒く吹くらし武庫の浦の入江のすどりたち騷ぐなり　前大納言顯朝卿

萬十五 朝開きこぎ出で見れば武庫の浦潮干の方にたづが聲すも　讀人しらず

風はやの沖津しほざる高くともいだてにはしれ武庫の浦まで　權大納言公實卿

萬代 武庫の浦の沖のうけ船近づけば友さそふなり綱子（かこ）のよび聲　好子内親王家中納言

風わたる武庫のうらわにいでみれば浪のしめゆふ住吉の松　正三位知宗卿

萬代 夕さればむこのうらしほみちぬらし入江のすどり聲騷ぐなり　素性法師

萬十二 室の浦の瀬戸の崎なるなき島の磯こす浪のぬれぬらむかも　讀人しらず

室の戸や舟のとまやの夕なぎにからろにひゞく磯の松風　信覺

新六三 山のはにほてりせぬ夜は室の浦にあすはひよりといづる舟人　衣笠内大臣

室の浦にはやふねよせよ郭公せとのさきなる松になくなり　權僧正公朝

（家集、月歌中（なにはえのうら、攝津））

〇千五百番歌合（なにはのうら、攝津）

〇家集、鴈を（なみかけのうら、未勘國）

〇家集、なさかのうらを（未勘國）

〇題不レ知（むこのうら、攝津武庫）

〇建長八年百首歌合

〇題不レ知

〇堀河院御時百首

〇承安二年九月廣田社歌合、海上眺望、判者俊成卿

〇寶治二年百首、海眺望

〇題不レ知

〇同、（むろのうら、播磨）

〇寶治二年百首

〇六帖題

〇百十首歌中に（七イ）

○但馬の國へまかりける道にむすぶのうらといふ所にて（むすぶのうら、但馬或紀伊）

立ち歸りとくと急げばさしてこし結ぶの浦のかひもなきかな　能宣朝臣

○題不レ知

明玉　よそにきく結ぶの浦による浪のうちとけにける事ぞくやしき　承香殿女御

○うら

現存六　あじろすぎ結ぶの浦の朝日影はるかに出づるあまのうけ船　正三位知家卿

○述懷百首

世の中はうきつの蒲につらゝゐてすがの村鳥あくがれぬべし　俊頼朝臣

○光臺院入道二品親王家五十首、船中月

涙のみうきつの浦のなみ枕月にひたせる袖ぞかなしき　如願法師

○建長八年百首歌合

我が身かくうきつの浦の小夜千鳥あくがれいでてねをも鳴くかな　左近中將具氏卿

○家集（うきみのうら、未勘國）

波高きうき身の浦のしるべしていづれのかたの貝か拾はむ　四條宮下野

○題不レ知（のさかのうら、筑紫）

萬三　あしきたの野坂の浦に舟出して水島（みしま）にゆかむ浪たつなゆめ　讀人しらず

○家集

あしきたの野坂の浦のうつせ貝妹背ぞなべていくよへぬらむ　俊頼朝臣

○建長八年家百首歌合

あしきたの野坂の浦にくもりきて松のみなみははるゝ白雪　後九條內大臣

○國信卿家歌合、對レ泉述懷といふことを（のちせのうら、若狹）

八雲たつ　出雲やへがき　かきつめて　のちせの浦に　かづきする　あまのあまたの　みるめにも　はゞからぬまの　はながつみ　俊頼朝臣

○天平二十年正月二十五日ふせの水海にて作る歌（おふのうら、伊勢）

萬十八　愚かにぞ我は思ひしおふの浦の荒磯の廻り見れどあかずけり　田邊福丸

○建保三年名所百首

何故か底のみるめもおふの浦に逢ふ事なしの名には立つらむ　前中納言定家卿

○家集

萬代　おふの浦の霞を分くる海士小船いづれの島のたまもかるらむ　如願法師

○題不レ知
○同（おほのうら、尾張或近江）
○家集（おほいその浦、相模）
○長久元年五月良子內親王家貝合（大よどのうら、大淀、伊勢）
○最勝四天王院名所障子、大淀浦
○建長八年百首歌合（大わだのうら、大輪田、攝津）
○題しらず
○貞應二年六月當座百首詠千鳥（おきつのうら、未勘國）
○貞應三年百首、旅
○久安百首（くきのうら、未勘國）
○題不レ知（懐中やはぎのうら、常陸）
○ちどり（やそのうら、未勘國）
○弘安元年百首（まなかのうら、近江）
○題不レ知（まりふのうら、麻里布）

萬葉 みつ潮にかたえは浪の花なれやいりぬる磯のおふの浦なし　知　賢
萬八 大君のみことかしこみおふの浦をそがひに見つゝ都へ登る　讀人しらず
おほいその浦にこぎよする白波に恨みて返る程はまさらじ　元　眞
いかにせむけふ大淀の浦に來て菖蒲やひかむ貝やひろはむ　讀人しらず
大淀のよもの花かひ拾ひても千尋ばかりのあやめをぞひく　同
大淀の松はつらくも霞まねどなみぢ隔てて歸る鴈がね　參議雅經卿
大淀のみるめはうとくなりぬとも浪に鴈がね秋をわするな　慈鎮和尚
おほわだの浦わにこよひ船とめて清き濱邊の月をいざみむ　左近中將具氏卿
萬六 濱清くうらなつかしき神代より千船のとまるおほわだの浦　讀人しらず
うちよする汀のなみも音さえて沖津のうらに千鳥なくなり　民部卿爲家
あけぬとて沖津の浦のかり枕夜の間のなみの音はわすれじ　同
しのびやるふみゝまくきの浦にこそ波の心も行きて歸らめ　前大納言隆季卿
いくさみてやはぎの浦のあればこそ宿を隔てて人はいるらめ　讀人しらず
をちこちの潮風さむみもゝつてのやその浦わに千鳥鳴くなり　藤原孝繼
みほの崎まなかの浦のそなれ松なれずばいかゞ浪もかゝらむ　後九條內大臣
萬十五 大船にかし（ちイ）ふりたてて濱きよきまりふの浦に宿りかせまし　讀人しらず

○建長八年百首歌合

濱淸きまりふの浦の潮風になみこそあがれ數もしられず　光俊朝臣

○雜歌中（まきのうら、未勘國）

萬十一 なか〲に君に戀ひずばまきの浦の蜑ならましを玉藻刈りつゝ　讀人しらず

○（まどがたのうら、圓形、駿河或紀伊又播磨）

萬七 まどがたの浦の千鳥もなにたてば妻よびたててへに近づくも　同

○題しらず（まつらのうら、松浦、肥前肥後又周防）

萬五 君をまつ松浦のうらのをとめごは常世の國のあま少女かも　同

○家集（まののうら、眞野、近江）

まのの浦のと絶えがちなるまろき橋ふみ心みよげにや危き　基俊

○寛元四年十禪師歌合、海邊松風（まわのうら、眞若、紀伊）

松にふく潮風さむみ衣手のまわかの浦をきてみつるかな　光俊朝臣

○題不ㇾ知（ままのうら、間間、眞間、下總或上總）

萬四 かつしかの閒々の浦閒をこぐ船の舟人騷ぐ波たつらしも　讀人しらず

○長歌、松ほのうら、松帆、淡路）

萬六 なきすみの　ふるせにみゆる　あはぢしま　まつほのうらの　あさなぎに　たまもかりつゝ　夕なぎに　もしほやきつゝ　あまをとめ　笠金村

○千首歌

淡路しま松ほの浦にやくしほのからくも人をこふる頃かな　民部卿爲家

○題不ㇾ知（ふけひのうら、紀伊又和泉）

萬十二 沖津風ふけひの浦にいでゐつゝあがふ[そ古]命は妹がためとぞ　讀人しらず

○千五百番歌合

時津風ふけるひ浦にあがひても誰が爲にかは身をもをしみし　前中納言定家

○家集

をとめごが天の羽衣ひきつれてむべもふけひの浦におるらむ　庵主

○久安百首

冬さむみさよもふけひの浦風に島わたりする舟やいづらむ　前大納言隆季卿

○長歌（ふぢゐのうら、和泉）

萬六 あらたへの　藤井の浦に　しひつくと　あまぶねとよみ　鹽　赤人

やくと

○建保三年名所百首歌めしけるに（ふた見のうら、伊勢又播磨）
玉くしげ二見の浦の夕づくよあけても見ねば夢路なりけり　順德院御製

あひにあはば二見のうらにねもしなむ荒礒なみの枕なりとも　従三位範宗卿

伊勢島やふたみの浦のかたし貝あはで月日を待つぞつれなき　藤原康光

○家集
伊勢
いまぞしる二見の浦の蛤を貝あはせとておほふなりけり　西行上人

○題不知（國中、ふるえのうら、武藏）
萬三　六三
あしたづの古江の浦にあさりするあまとや見らむ旅行く我を　讀人しらず

○万葉海にて作る歌（越中）
萬十八
ふせの浦をゆきてしみては百敷の大宮人にかたり告げてむ　福[illegible]丸

○題不知（國中、ふえのうら、丹後）
音高き波たちよりてききしかばふえの浦にも風はふきけり　讀人しらず

○江（ふぢえのうら、播江、但馬）
六帖
たまつしま藤江の浦の松風にたえずもかくる波の音かな　同

○旅泊待月
し歟
もえきする藤江の浦に船とめて月の出しほをまつぞ久しき　源仲正

○鵠
雲葉　新六三
夕なぎの藤江のうらの入海にすゞきつるてふあまのをとめ子　衣笠内大臣

○永承五年麗景殿女御歌合、鶴
續後拾遺
萬代の影をならべて鶴のすむ藤江の浦はまつぞこだかき　相摸

○正治二年百首（こやのうら、攝津）
津の國のこやの浦風おとづれて蘆のかれはに秋はきにけり　民部卿範光

○家集（ころものうら、三河）
波あらふ衣の浦のそで貝をみぎはに風のたゝみおくかな　西行上人

○百首歌
立ちわたるくもの衣の浦よりや玉とは見えてあられふるらむ　九條内大臣

○家集（ことのうらといふ所にて）（ことの浦、未勘國）
松風になみのしらぶることの浦は鷗の遊ぶところなりけり　源仲正

〇題不レ知(あみのうら、綱、紀伊或讃岐)
〇伊勢國にみゆきのとき京にとまりて
〇題不レ知(あきのうら、飽、紀伊)
〇家集、述懐中(あきのうら、攝津)
〇名所歌中有明浦(ありあけのうら、越後)
〇題不レ知(あこねのうら、阿故根、紀伊)
〇家集
〇題不レ知(あさかのうら、淺鹿、攝津又常陸)
〇建長八年百首歌合
〇題不レ知
〇弘長元年百首(あしのうら、攝津)
〇題不レ知(あしわかのうら、紀伊)
〇家集、あかしをいでて生田の杜をすぐとて(あかしのうら、播磨)
〇題不レ知
〇最勝四天王院名所御障子、明石浦

萬一 綱の浦のあまをとめごがやくしほの思ひぞやくる我がした心　人丸
萬一 綱の浦にふなのりすらむ少女子が玉藻の裾にしほみつらむか　同
萬七 あびきするあまとや見らむあきの浦の清き荒磯見にこし我を　同
もかり舟あきすの浦に棹さして思ふつまどちさしつゝぞゆく　恵慶法師
波のいろに在明の浦のすゑみえてしほせも白くのこる月影　爲實朝臣
萬一 わがおもひ(ほりし萬)し野島はみせつ底深きあこねの浦のたまも拾は(ぞ萬)ぬ　讀人しらず
よしさらば思ひもたえぬしの島やあこねが浦のたま／＼もうし　如願法師
六帖 萬十四 常陸なる淺香の浦の玉藻こそひけばたえすれ我はたえせじ　讀人しらず
萬代 しほかなふ淺香の浦の追風にかぢもとりあへずいづる舟人　伊嗣朝臣
住吉の淺香のうらの磯枕しほみちこずばこゝにあかさむ　惟範朝臣
萬二 夕さればしほみちきなむ住吉の淺香の浦にたまもかりてな　弓削皇子
こぎかへりなほ見て行かむ伊勢島や島めぐりするあしの浦浪　常磐井入道太政大臣
新勅撰 六五 あしわかの浦にきよする白浪のしらじな君はかく思ふとも　讀人しらず
しなばやと思ひ明石の浦を出でて生田の森をよそにこそみれ　俊頼朝臣
萬三 見わたせば明石の浦のたけるひのほ(にイ)にぞ出でぬる妹にこふらく　讀人しらず
秋のよの月故えたる浦の名をくもに嵐のつけてすぐなり　慈鎮和尚

〇久安百首（あしやのうら、攝津）
（新勅撰）はるかなる蘆屋のうらの浮寝にも夢路は近きみやこなりけり　皇太后宮大夫俊成

〇蘆屋浦
螢飛ぶあしやの浦にあまのたく一夜もはれぬ五月雨のそら　後鳥羽院御製

〇北野百首歌（あはでのうら、尾張）
よとともに悔るもくるしなにたてる逢はでの浦のあまの藻鹽火　同

〇承安二年廣田社歌合
見せばやなあはでの浦のうつせ貝うつぶしふして歎く景色を　琳仁法師

〇題不レ知
（歌林）なのりそをあまのみるめに刈りなしてあはでの浦に今宵忘れぬ　基行

〇家集
波風に友よびかはすさよ千鳥さてもあはでの恨みてぞ鳴く　前大納言基良卿

〇建長八年百首歌合（ありそのうら、越中）
うきめのみ見えわたればや濱千鳥思ひありその浦に鳴くらむ　鷹司院帥

〇題不レ知（越中、あそひのうら、丹後）
うち寄するみるかひありてよさの海の遊びの浦に頃もへぬべし　讀人しらず

〇家集（ありまのうら、有間、攝津）
心あるありまの浦のうら風はうきてこのはを殘すなりけり　庵主

〇同（あしりのうら、近江）
あけぬるかまだ月影はたかしまやあしりのうらをいづる釣船　従三位家隆卿

〇六帖題（さかひのうら、和泉又紀伊）
（新六三）行くはるのさかひの浦の櫻鯛あかぬかたみにけふやひくらむ　民部卿爲家

〇海
（現存六）紀の海のさかひの浦のおきつもを春のひくらしかづく蜑人　權律師頼淳

〇建保三十首歌
夏と秋とさかひの浦の松風にかたへ涼しくよするしら浪　法印圓曾

〇題不レ知（さひかのうら、狹日鹿紀伊）
（萬七　六二一）きの國のさひかの浦にいでてみればあまの燈火浪間より見ゆ　讀人しらず

〇建永元年和歌所歌合、海邊月（きよみがうら、駿河）
おほかたに物を思へどするがなる月は清見がうらの秋風（松イ）　大藏卿有家

〇寛元四年十首歌合海邊松風（きしのうら、未勘國）
沖津風岸のうらわの吹きあげにこずゑふりたる松の色かな　衣笠内大臣家大夫

○題不レ知

高七 いは注ぐ岸の浦わによする浪邊に來寄ればか事のしげけむ　讀人しらず

（弘安三年新熊野百首（ゆらのうら、紀伊或陸奥）

紀の國や由良の浦風靜かにてかすむみなとに春は來にけり　安嘉門院四條

○題不レ知

一字抄 あかつきや小島が磯の松風にころもかさねよゆらのうら人　神祇伯顯仲卿

○丹後ゆふ日のうら（丹後又伊勢）

いさご踏み見にこそ來つれいるかたや夕日の浦の天の橋立　祐擧

祐擧家集云ちごの歌をききてある人よめると云々

來ても問へかへると思へば下紐のゆふひの浦の貝もなきかな　讀人しらず

○建保三年名所百首（みくまのうら、紀伊）

昔見し玉かとのみぞみくまのゝうらまでとほる袖の涙は　僧正行意

み熊野のうらの濱ゆふ白妙の袖のわかれもいのりかさねよ　從二位家隆卿

○伊勢國に侍りける時今よりは契るべき由申しける人に（みつのうら、三津、御津、近江又攝津）

我もさぞたのみはかくるいせ島や戀しき君をみつの浦波　鴨長明

○題不レ知（みつの江の浦、丹後）

六三 みつの江の浦島の子が釣舟もおなじ浦にぞ三年こぐてふ　讀人しらず

六帖五 みつの江の浦島の子が玉くしげ明けてまさせば（さらまイ）妹にあひなまし　同

○藻

現存六 みつの浦にたまもかりおくあま人もわが心から袖はぬれつゝ　衣笠内大臣

○最勝四天王院名所御障子、難波浦

春の色はけふこそ三津のうらわかみ蘆の若葉をあらふ白波　前中納言定家卿

○永久四年百首、水海

あふみがた磯の濱松をる波に舟出やすらむみつの浦人　神祇伯顯仲卿

○題不レ知（みかみのうら、美神三神、近江）

萬一 さゞなみや國津みかみのうらさびてあれたる都見れば悲しも　高市黑人

○建長八年百首歌合（みまきのうら、美）

霞さへ棚びきにけりはるこまのみさきの浦のあまのあみなは　衣笠内大臣

沈み行くみしまの浦のはまひさぎ久しや袖を君にまかせて　中務卿のみこ鎌倉

現存六
うかりける三島の浦の藻鹽火のもえて焦れて世をつくせとや　讀人しらず

風ふけば花さく波のおるたびに櫻貝よる三島江のうら　西行上人

藻鹽やくあまだにいまはすまずとかみつえの浦に煙たえつゝ　能因法師

さよふけて都に出づる月影をみつえの浦にこよひ見しかな　同

萬六
ますかゞみ敏馬(みぬめ)の浦はもゝ舟のすぎてゆくべき濱ならなくに　田邊福麿

萬六
もゝ舟の　ひとのさだめてし　みぬめのうらは　朝風に　うきなみさわぎ　夕なみに　たまはきよする　同

萬三
みけむかふ　淡路の島に　たゞむきに　みぬのうらの　おきべには　ふかみるとりて　赤人

しるべせよ湊をいづるあまをぶね人をみぬめの浦はかひなし　安嘉門院高倉

しほこさぬ松だに沈む夕霞みぬめのうらの名にや立つらむ　常盤井入道太政大臣

絶えてなど敏馬(みぬめ)の浦にうきみるのかひなき名さへよる方もなし　光明峯寺入道攝政

おのづからみるめの浦も立つ煙風をしるべの道もはかなし　前中納言定家卿

すくもやくみをの浦人舟なれていくその夏をこがれきぬらむ　好忠

萬七
風早のみほの浦わをこぐ舟のふな人さわぐ浪立つらしも　讀人しらず

○現存、題（みしまのうら、攝津伊豫或肥後）
○うら
○家集
○家集、みづえのあたり（陸奥）
○家集○おもひやりて
○題不知、題（みぬめのうら、三大女攝津）
○法楽
○寶治二年百首
○常盤井入道相國家五十首、海邊
○建保元年内裏百首哥歌
○寛喜二年百首二十首（みるめのうら、未勘國）
○三百六十首中（みほのうら、三穗、攝津又駿河）
○題しらず

○六帖題
新六三 たえずのみもしほやくてふ風早のみほの浦わに煙立つ見ゆ　信実朝臣

○百首御歌
みほの浦を月とともにやいでつらむ沖の苫屋につぐる鴈がね　後鳥羽院御製

○家集、みほのうら
わすれめや山路うちいでてきよみがた遙かにみほの浦の松原　隆祐朝臣

○建長七年顕朝卿家千首歌
ちへにたつ浪にうきてもみゆるかなみほの浦わの磯の松原　源仲遠

○名所歌（みほのうら）
松風の夕しほかけてふきこせば涼しさみてるみほの浦浪　正三位為実卿

夕日かげ入うみ涼しおきつ風松にこたふるみほのうらなみ　藤原為顕

○貞應二年六月に百首（宮庭イ）、海邊月
ふじの山たかねの月を移しきて雪ふきよするみほの浦浪　民部卿為家

○住吉社三十首（しきつのうら、攝津）
松風やしきつの浦にゐるたづの千歳をゆづる聲かはすなり　従二位家隆卿

○家集
住吉のしきつのうらに旅寝してまつの葉風にめをさましつゝ　俊頼朝臣

○寄舟（しかつのうら、四賀津、近江）
高七 さゞ浪や志賀津のうらの船乗りにのりにし心つねに忘れず　讀人しらず

○雑御歌中
辛崎に船や寄すらむしらたづの羣れてしかつの浦傳ひする　紫金臺寺入道二品のみこ

○洞院攝政家百首（しがのうら、志賀、攝津又近江）
しがのうらの入江の氷とぢてけり汀にとほきあまの釣舟　従三位行能卿

○最勝四天王院名所御障子
こほりぬるしがの浦わにゐるたづの千代の翼にはらふ白雪　俊成卿女

しがの浦やよはに霜ふむあしたづのはがひの月をふく嵐かな　如願法師

○永仁大嘗會
しがの浦やみつぎを運ぶ上り船まかぢしげぬき月にこぐなり　前中納言俊光卿

○文曆三年百首御歌（しかのうら、鹿、肥後又對馬）
蜑少女鹽やきめ刈りしがの浦につげの小櫛もとるまなき頃　後鳥羽院御製

○題不レ知
○堀河院御時百首（しかまうら、飾磨、播磨）
○駿河歌（しだのうら、伊勢又駿河）
○題不知（懐中）
○名所歌中（しぶたにのうら、澁谷浦、越中）
○建長六年歌合（しのぶのうら、陸奥）
○題不レ知
○家集、しまのうらを
○獅集（しづくのうら、未勘國）
○千五百番歌合（しほやのうら、未勘國）
○題不レ知（しほつすがうら、未勘國）
○家集、海路心
○後九條内大臣家　合、水郷夜雪
○同

萬十二
しが浦の磯の刈りほす名告藻のなはつげてしなぞあひ難き　讀人しらず
懐中
あさりせししがの浦わにゆきしよりよにふる貝も今や拾はむ　同
春霞しかまの浦をこめつればおぼつかなしやあまの釣舟　權大納言公實卿
萬十四
しだの浦を朝こぐ舟はよしなしに漕ぐらめかもよなしこざるらめ　讀人しらず
しだの浦を漕ぎ出づる船の目もはるにいや遠ざかる旅の侘しき　同
扶桑
雪の夜にしぶたにの浦をこぎ出でて釣する海士は袖やぬるらむ　同
思ひつゝ幾としなみに朽ちぬらむしのぶの浦のあまのたく繩　雅光卿
萬四
やまとぢの島の浦わに寄する浪あひだもなけむ我がこひまくは　讀人しらず
やまとぢのさほ山あらし吹きにけり島の浦わに紅葉ちりしく　素覺法師
秋風
たまくらのしづくの浦にみつ潮のつもれるちりをよする白浪　後九條内大臣
沖津風しほやの浦を吹くからにのぼりもやらぬ夕煙かな　第三のみこ
萬九
たかしまのあしりの海をこぎ過ぎてしほつすが浦今か漕ぐらむ　小辨
沖津浪たかしまめぐりこぎすぎて遙かになりぬしほつすが浦　權中納言長方卿
よをかさねしほつすが浦雪積りやまさす駒の跡やたえぬる　從二位家隆卿
あまのたくしばの浦風ふくまゝに煙とみえてたつ千鳥かな　光俊朝臣
このうたは鹿島社へまうで侍りけるみちにしはすのうらといふ所なす

ぐれば千鳥のむれたちぬる千萬といふばかりとわたるを見るに日のかげろふに志たがひて雪のふるがごとくなりまたけぶりのたつにも似たりければよみけると云々

○久安百首（しほのうら、未勘國）
網引すとあこと〻のふるしほの浦の霞こめたるあまの呼び聲　前大納言隆季卿

○建保三年名所百首御歌（しほがまのうら、陸奧）
雲のなみ煙の波ははれながらおぼろ月夜のしほがまの浦　順徳院御製

○最勝四天王院名所御障子
心あらば袖はいかにとあまをとへ（ぬイ）おぼろ月よのしほがまの浦　大藏卿有家

○同
ながむれば八十島かけて淺緑霞ぞたてるしほがまのうら　正三位家衡卿

○百首歌中、冬
しほがまのうらの浪風月さえて松こそ雪のたえまなりけれ　前中納言定家卿

○元久元年五辻殿御會、名所月
里わかずもろこしまでの月はあれど秋の半ばのしほがまの浦　同

○最勝四天王院名所御障子
霞とも花ともいはじ春の影いづくはあれどしほがまのうら　同

○同
春の月松に霞をふかみどり山のはもなきしほがまの浦　具親朝臣

○同
しきしまや大和にはあらぬ唐（もろこし）の春にもきかずしほがまの浦　從二位家隆卿

○建保三年名所百首
春よいかに花鶯の山よりもかすむばかりのしほがまのうら　同

○洞院攝政家百首
たち迷ふ煙も浪にまがひつ〻なのみぞちかのしほがまの浦　大納言經通卿

○家集（ゑしまのうら、淡路）
千鳥なく繪嶋の浦にすむ月を波にうつして見るこよひかな　西行上人
萬代　玉雜二　新六三

○雜歌中（ひがさのうら、日笠播磨）
くる〻まにすゞきつるらし夕潮のひがさの海にあまの袖みゆ　民部卿爲家

○題不レ知（ひさかのうら）
萬七
いなみ野はゆきすぎぬらし天傳ふひさかの浦に浪立てる見ゆ　讀人しらず

○爲忠家百首、羇旅歌（ひやうふのうら、未勘國）
たてきるか屛風のうらの春霞よにあふさかの關こさじとて　源仲正

○永久四年太神宮禰宜歌合、郭公（せきのうら）
時鳥關のうらわになくこゑを心をとめてけふもくらしつ　讀人しらず

○題不レ知（すまのうら、攝津）
續後、玉葉
いくたびか同じねざめになれぬらむと山にかゝるすまの浦浪　中納言行平卿

○十首歌合、海邊待月
久方の月まつかねのいそまくらかくて年ふるすまの浦人　如願法師

○名所歌中
雲葉
名をのみすまの浦なる濱びさぎ誰かはしらぬしをれたりとは　參議親隆卿

○堀河院御時百首
すまの浦の磯もとめする沖に出でてよられぬ船は綱手ひくなり　大納言師頼卿

○家集
須磨の浦に鶴のよびこのある時はこれや千代へむ物とやは見る　人丸

鹽竈

○文永八年毎日一首、述懷
流れくむなにはのみつのしほがまの法のまことに心しられて　民部卿爲家

○同二年毎日一首中
和歌の浦に蜑のやくてふしほがまの煙吹きけつこち風もがな　同

○元久元年十月内大臣家歌合、奥州名所題、鹽浦
浦に居て命をかけしものゝふは數定まれりちかのしほがま　藤原忠隆卿

○五社百首
夢にこそ都のこともみるべきを袖に波こすちかのしほがま　皇太后宮大夫俊成卿

○永久元年十一月藤原定通家歌合鹽
なにはめやしばをりくぶる鹽がまのやる方ぞなき戀の煙は　讀人しらず

○正治二年百首
霞引く春のしほやの煙かなふたみの浦のあけぼのの空　慈鎭和尚

○家集、名所
なるみがたとほきひがたの松影にけぶりぞ殘るうらの鹽竈　法眼慶融

○百首御歌、眺望
いせの海のみわたりかくる浪間より數も隱れぬあのの鹽竈　西園寺入道前太政大臣

○百首歌
伊勢の海の浦風さえてふぢかたやあのゝしほがま雪ふりにけり　寂念法師

○建長八年百首歌合
いせのあまのねるや潮の幾かへり辛(から)き思ひに身を焦すらむ　衣笠内大臣

○家集、鹽屋雪
潮ねるかまどの煙けをぬるみ雪もたまらぬあまのあばらや　源仲正

濱

○題不レ知
萬六 かたりそへ(つぎイ)しのびけらしきもゝ代へて忍ばれゆかむ淸き白濱　田邊福丸

○同
萬十一 たくひれの白濱浪の寄りも來ずあらぶる妹にこひつゝぞふる　讀人しらず

○家集
萬代 見にしゆかむ沖津白濱の濱廂波にやつれて朽ち果てぬよに　人丸

○題不レ知
萬三 潮ひなば玉藻かりつめ家の妹がはまづと請はば何を示さむ　赤人

○海道宿次百首、濱べ
昨日みしみちのながはま隔てゝもなほ慕ひくる浪の音かな　參議爲相卿

○七百首歌中（きよきはま）
ありかよふ船漕ぎよせよやまとだの淸き濱みむてれる月よに　權僧正公朝

○題不レ知（いでみのはま、攝津）
萬七 住吉の出見の濱に柴な刈りそね少女等が赤裳の裾の濡れ行かむ見む　人丸

○村上御時一品宮天祿三年五月資子内親王家歌合（いちのはま、未勘國）
我がかたはいちのの濱のさゞれ石の數に任せてのどかなるかな　讀人しらず

結び置くしもとはいざや岩代のはま松が枝にすめる月影　法橋顯昭

山おろしに紅葉ちりしく色の濱冬はこしぢのとまり寂しな　寂念法師

萬代
眞潮くむいほのはま船とまくちて波路はれせぬ五月雨の空　登蓮法師

朝なぎにつりする蜑のなければやいほずみの濱數もしられぬ　讀人しらず

懷中
つならばひききる程に風吹けば絲の濱にぞ舟もよりける　同

新六三
つれなさはいはきの濱のしき浪をなにと心のかけはじめけむ　衣笠内大臣

うき木よる雲の岸邊をかけみれば星合の濱もくらがりにけり　祐擧

六五
あふことは夢か星合のはま風に浪のよるみし人ぞ戀しき　讀人しらず

いせのうみ契りも深き秋ならばこよひかげみむほしあひの濱　土御門院御製

現存六
いせの海やなにあらはれて浪枕かはしやすらむほしあひの濱　後九條内大臣

伊勢の海の千尋の濱の眞砂もて君がよにへむ數はかぞへむ　元輔

たくなはを千尋の濱のくり返しこれにや蜑のよをつくすらむ　讀人しらず

妻こひむあきの尾上の鹿よりも千種の濱のかひよとぞ思ふ　祐擧

いろ／＼のかひありてこそ拾はるれ千種の濱を漁るまに／＼　讀人しらず

出雲なるちくみの濱のかさなぎにこぎ出でて行けば沖の島みゆ　中務卿のみこ鎌倉

末とほきちさとの濱に日はくれて秋風おくるいはしろの松　寂惠法師

○千五百番歌合
○百首歌（いろのはま、越前）
○百首歌中（いほのはま、未勘國）
○題不知（懷中、いほずみのはま、播磨）
○（いとのはま、紀伊）
○六帖題、濱（いはきのはま、伊豆）
○家集（ほしあひのはま）
○題不知
○百首御歌
○ほしあひの濱
○天徳二年右大臣家賀屛風（ちもろのはま、紀伊又伊勢）
○題不知（懷中）
○實方のきみにたちをこひにやるとて（ちぐさのはま、上總）ひイ
○題不知、懷中
○綱集（ちくみのはま、出雲）
○くまのへにまゐり侍るとて（ちきとのはま、未勘國）

見わたせば千里の濱のほかまでもなをたちあまる春霞かな　浄忠
○弘長三年玉津島歌合、渚霞（安イ）

あま人もおものの濱のはまづとを月にあけぬと今や急がむ　正三位知家卿
○寶治二年百首、湖月（をものはま、近江）

なき名をば濯ぎやすると思ひしにいとゞおり立ちの濱にぞありける　讀人しらず
○題不レ知　懷中、おりたちのはま近江）

年經ともいつも我こそ忘れずの濱千鳥とはなき渡りつれ　伊勢
○家集（わすれずのはま、陸奥）

萬代
さゞ波の志賀の浦わに霧はれて月すみわたるからさきの濱　後鳥羽院御製
○百首御歌（からさきの濱、唐崎近江）

君が爲八千代の數をためしにてからさきの濱に千鳥しば鳴く　兼仲卿
○正安大嘗會

戀しさの慰むやとて逢ふまではいざやかたみの濱にかもねむ　讀人しらず
○（かたみのはま）

懷中　袋草子
おしてるやよさの濱こぐかひ繋し渡（涙カ）をよする方しなければ　慈心上人
○（よさのはま、丹後）

榮え行く司くらゐはたかはまの千歳の春をまつとしらなむ　前大納言隆季卿
○久安百首（たかはま、越後又攝津）

新六六
たか濱のまさごにたてる松の根のそこへもいらぬわが心かな　光俊朝臣
○六帖題

ふりくらす雪のたか濱はる〴〵と木陰も見えぬこしの浦風　民部卿爲家
○洞院攝政家百首

六三
別るれど別ると思へばいではなる津輕の濱のたえじとぞ思ふ　讀人しらず
○雜歌中六帖（つがるのはま、出羽）

わが戀はつゝ井の濱となりななむ心をくみて人のしるべく　兼盛
○家集（つゝゐのはま、未勘國）

萬三
こしのうみの　つがるのはまに　おほ舟に　まかぢぬきおろし　くぢらとる　うみべに出でて　笠金村
○長歌

たこの濱すさきのひがた心して底の玉藻はわれにしらせよ　忠峯
○家集（たこのはま、未勘國）

萬一 新勅撰 おほとものたかしのはまの松が根を枕にぬれど家しのばゆ　置始東人

雜古四二 あだ波のたかしの濱のそなれ松なれずばかけて我戀ひめやも　前中納言定家卿

わが戀は高師の濱に居るたづの尋ねてゆかむかたも覺えず　藤原爲眞

おほともの松のはひねを枕にて高師の濱にまろねしてけり　前大納言隆季卿

光俊家集 いせの海は名殘だになく荒れにけり名のみ高師の濱と聞えて　讀人しらず

萬九 逢妻したかにありせばしらずとも手綱の濱の尋ねきなまし　同

古來歌合 たちゐるなく聲高砂の濱千鳥あとかたなしとよないとふかな　權僧都源信

みちのくの奥ゆかしくぞ思ほゆる壺の石ぶみそとの濱風　西行上人

白妙のながらの濱の霜の上にあとさだかなるけさのかち人　民部卿爲家

もともなきながらのはまの浪間よりかすみてうすき淡路島山　同

君がよのながらの濱のはま松のかはらぬ色のかげの久しさ　同

家 はかなくやけふの子の日を過さまし名草の濱の松なかりせば　清正

里通ふあまのゆききもあとたえぬたれとなぐさの濱の白雪　參議雅經卿

堀河題 或本 きい國のなぐさの濱に貝拾ふ蜑のめざしのおとなかりせば（なイ）　讀人しらず

萬代を我にゆづるや聲たえずなかすの濱になきわたるらむ　相摸

萬七 ふねつけば（ことにイ）かしふり立てて庭（セイ）するなごえの濱べすぎがてぬかも　讀人しらず

〇題不知（たかしのたま、高師、和泉又伊賀）
〇建保三年名所百首
〇元永元年十月内大臣家歌合、戀
〇久安百首
〇題不知（夢中）
〇（たづなのはま、手綱、紀伊）
〇千鳥を（たかさごのはま、播磨）
〇家集（そとのはま、陸奥）
〇正治元年録日一首中（ながらのはま、攝津）
〇貞應三年百首
〇子日歌
〇きのくにに子日しけるに（なぐさのはま、紀伊）
〇建保五年歌合、冬浦雪
〇題不知、袖中
〇家集（なかすのはま、攝津）
〇題不知（なごえのはま、攝津）

○千首歌
たち歸りなほ過ぎがてにみつるかななごえの濱によする白浪
民部卿爲家

○題不知
萬七 住吉のなごの濱邊にうまたててたま拾ひつゝつね忘られず
人丸

○家集、千首歌
ひろふてふ玉光るなり住吉のなごのはまべの秋のよの月
前大納言顯朝卿

○建長八年百首歌合
霞ふるなごの濱邊の眞砂路にいづれをもとの玉と拾はむ
右近中將具氏卿

○千五百番歌合（なるとのはま、阿波）
君がよははるかなるとの濱びさし久しき影は神のまに／＼
家長朝臣

○家集（なみだのはま、未勘國）
いかばかりあまの衣手しほるらむ涙のはまの五月雨の頃
典侍親子朝臣

○名所の歌人によませ侍りけるに なみだのはま
萬代 わが袖は涙のはまにあさりせしあまの袂におとりやはする
和泉式部

○喜多院入道二品親王家五十首、眺望（なちのはま、紀伊）
遥かなるなちの濱路をすぎてこそ浦と海とのはては見えけれ
皇太后宮大夫俊成卿

○同（ながはま、備前又近江伊勢越後）
すべらぎのみよ長濱に船出して樂しき聲にうたふあまびと
法橋顯昭

○寛治八年八月高陽院關白家歌合、祝（ながゐのはま、攝津）
君がよはながゐの濱のさゞれ石の岩根の山となりはつるまで
藤原顯綱朝臣

○天仁二年十一月顯季家歌合
君がよは長井の濱にゐる鶴の數多の千代もあかずぞありける
讀人しらず

○家集（むしあけのはま、未勘國）
船とむるむしあけの濱の松の風たが夢路にかまた通ふらむ
大納言通具卿

○久安百首（うとはま、駿河）
あふ事はいやうと濱に置く網の今ひとめだにみるよしもがな
待賢門院安藝

○家集、霞
うとはまの天の羽衣はるはきていまも霞の袖やふるらむ
從二位家隆卿

○家集（うちいでのはま、打出、近江）
白浪のうちいでの濱の秋風にしかのはつねをそへてきくかな
能宣朝臣

○日吉社百首
春の波のうちいでの濱の濱風に花ふくやみをしがの山越
慈鎭和尚

假にとは思はぬ旅を磯なれやうづらの濱をば行き暮らすらむ　讀人しらず

千鳥なくゐなのはまやのあけがたに苫もる月の影ぞ寂しき　覺延法師

現玉
おほわだの濱の松吹くうら風にしかのてこらが袖かへるみゆ　後九條内大臣

萬六
はま清み浦なつかしみ神代より千舟のとまるおほわだの濱　田邊福丸

心のみ沖津の濱にひくあみのめに影ながらあはぬ戀かな　中務卿みこ鎌倉

いせの海にけふは開かねど大淀の濱のみるめは白くぞありける　順

松のこだち浪こす岩のけしきまでげに見どころは大磯の濱　參議爲相卿

はるかにも思ほゆるかなくもの濱あまの河原に行きや通へる　讀人しらず

萬代　玉葉　更級日記
まどろまじ今宵ならではいつかみむくろとの濱の秋の夜の月　菅原孝標女

此の歌信濃國よりのぼり侍りけるに下野國黒戸のはまといふところにて月をみてよみ侍りける

來る蜑のそこら刈りおくみるめをば何處につまむくらなしの濱　讀人しらず

春の日の遥かにみちて見えつるは八尋の濱をゆけばなりけり　太宰大貳高遠卿

萬十二
いくよねぬ白玉寄するましらゝの濱松かげにまつはおりしき　仲實朝臣

豐國のまゝの濱邊のまなごちにまほにしあらばいかゞ嘆かむ　讀人しらず

汀なるあしの萎れ葉ふきさやぎこほりもよほすまのの濱風　民部卿爲家

○題不知（懐中、うづらはま、筑前）
○喜多院入道二品親王家五十首（ゐなのはま、攝津）
○建長八年百首歌合（おほわだのはま、攝津）
○題しらず
○六帖題御歌ちかくてあはず（おきのはま、和泉）
○家集（おほよどのはま、伊勢）
○海道宿次百首おほいそのはま（相模）
○若狭國（懐中、くものはま、若狭）
○題しらず（くらなしのはま、上總、懐中）
○家歌（やひろのはま、豐前）
○永久四年百首（ましらゝのはま、未勘國）
○豐前國（まゝのはま、豐前又近江の濱）
○貞應三年七月百首、水無瀨釜莚

〇家集（まつのはま、未勘國）
日をふれど松の濱邊にある船の千年を見むといでぬなるべし　元眞

〇新本影供百首（けしきのはま、未勘國）
變りゆくけしきの濱の夕煙たがふかきえにまたかすむらむ　後九條内大臣

〇天祿三年五月資子内親王家歌合（ふけひのはま、和泉）
浪間より吹飯のはまを見渡せば汀の松ぞこだかかりける　讀人しらず

〇嘉保三年三月花山院左大臣家歌合、千鳥（ふきこしの濱、未勘國）
ふきこしの濱の潮風身にしみて千鳥の聲のきこゆなるかな

〇家集（ふきでのはま、未勘國）
秋風の吹きでの濱のはまひめはよさむになれや衣片しく　祐擧

〇はま
現存六　秋の夜はさぞさむからし浦風の吹きでの濱の千鳥なくなり　鷹司院帥

〇はりまの國印南野に幸の時作る歌（ふなせのはま、船瀬、攝津又播磨）
萬六　行き歸りみれどもあかめやなきすみのふなせの濱によする（しきる萬）白浪　笠金村

〇百首歌
現存六　ゆきかへるふなせの濱の朝風にみぎはをこえてしきる白波　民部卿爲家

〇（ふきあげのはま、紀伊）
月影はちさとも清くみつ潮にみなみはれたる吹きあげの濱　後九條内大臣

〇古今一句百首
潮風の吹きあげにみゆる濱びさしあるゝもしらず浪の立てるか　同

〇寛喜元年女御入内御屛風、海邊松下行人
現存六　おきつ風吹きあげの濱の松かげにたちよる浪の音ぞ涼しき　西園寺入道前太政大臣

〇御集
現存六　新千冬　沖津風吹きあげの濱の潮干がたまさごみだれて霰ふるなり　岡屋入道攝政

〇家集、戀歌
眞砂路の吹きあげの濱の月をみて戀しきことの數ぞまされる　従二位家隆卿

〇最勝四天王院名所御障子、吹上濱
千鳥なくふきあげにたてる松風のこゑすむ空に月ぞ宿れる　如願法師

〇題不知
増鏡　六三　よそなりし思ひ吹上の濱にほすみるめはかたき物にぞありける　讀人しらず

〇大嘗會主基方御屛風（ふなきのはま、未勘國）
かはしまやふなきの濱にゐる千鳥おのれが名をば年と賴まむ　前中納言匡房卿

○永久三年大宮歌合（こまつのはま、近江）
夕浪やしげくよすらむ近江路のこまつの濱に千鳥なくなり　圓　親

○詮（こぬみのはま、許奴美、駿河）
現存六
風ふけばとはに波こすいそざきのこぬみの濱は鵆も通はず　民部卿爲家

○百首歌
新續古歌
駒なづむいはきの山をこえかねて人もこぬみの濱にかもねむ　前中納言定家卿

○六帖題
かち人はちえの浦わにゆきなやみこぬみの濱の眞砂くるしも　權僧正公朝

○千首歌
よしさらばこぬみの濱の浦松のとはに波こすねをもしのばじ　民部卿爲家

○十首御歌、寄レ木戀
頼めてもこぬみのはまの濱松のつれなき色に戀ひわたりつゝ　後鳥羽院御製

○戀歌中（恨中、こひのはま、播磨）
人しれず苦しき物としりぬればなも恨めしきこひの濱かな　讀人しらず

○題不知、御集中、えなのはま、上総）
ちりにける秋の名殘の戀しさにえだの濱邊をいざゆきてみむ　同

○寶治二年百首（あらつのはま、越前）
沖津風あらつのはまの波枕ならはぬもののねむかたもなし　衣笠内大臣

○題不知
萬十二
白妙の袖の別れをかたみにてあらすの濱に宿りするかも　讀人しらず

○同（あきづのはま、紀伊）
六三　萬十一　新勅撰同
きのくにのあきつの濱の忘れ貝われは忘れず年は經れども　同

○千五百番歌合（あかしのはま、播磨或攝津）
ながむれば月はなみぢに影きえてあかしの濱につもる白雪　前大納言忠良卿

○家集、いろはの歌
ほのぼのと明石の濱を見渡せば春の波わけいづる舟のほ　顯

○はま
思ひくれ歎きあかしの濱によるみるめ少なくなりぬべきかな　讀人しらず

○題不レ知（國中、あじろのはま、伊勢）
我がこふる八十宇治人にあひもみてあじろの濱にひをもふるかな　同

○家集
しほみてば入江の水もふかからしあじろの濱による沖津浪　躬恒

○久安二年三月顯季卿家歌合、後朝戀（あしたの濱、未國）
○題不レ知（あくらのはま、飽等、紀伊）
○家集（ありそのはま、越中）
○題不レ知（きくのながはま、豐前）
○家集（きくのはま、豐前）
○建長三年九月十三夜鳥羽殿十首歌合、名所月
○九十九首イ 首菊歌中
○千首歌
○題不レ知（ゆきのしらはま、但馬）
○御集、海邊冬月
○家集、いはひの歌、みやはま、（みやはま、未勘國）
○題不レ知（みつのはま、三津、近江又攝津）
○寶治二年五十首
○弘長元年百首

立ちかへるあしたの濱のはま千鳥戀しき浪にねをのみぞなく　源家明朝臣

此の歌八條入道大相國云右歌こひしきなみいかにぞやきこゆ又あしたのはまもふるくよめりともおぼえねどもさるはまのあるにこそと云々

萬十一 六三 きのくにのあくらの濱のわすれ貝我は忘れじ年はふるとも　讀人しらず

萬十七 しぬらむとかねてしりせば越の海の荒磯の濱はみてまし物を　中納言家持卿

萬十一 豐國のきくのなが濱行きくらし日のくれゆけば妹をしぞ思ふ　讀人しらず

やほかゆく菊の濱松世とともに秋の千年はしるくもあるかな　從二位家隆卿

ながつきのきくのたかはま月影に移ろふ浪を花かとぞみる　從二位行家卿

風ふけば波とやみえむ豐國の花こそたてれきくのながはま　爲實卿

よそにのみ菊のなが濱ながらへて心づくしにこひやわたらむ　民部卿爲家

六二 たぢまなる雪の白はまもゝ ろよ六 とせに思ひしものを人のとやみむ　讀人しらず

月のすむいけの松風 そ集 さえ／＼て白くぞみゆる雪の白はま　鎌倉右大臣

みやはまのいさごのこずなわが君の寶の位かぞへ見むかし　元輔

萬一 大伴のみつの濱にある忘れ貝いへにある妹をわすれて思へや　身人部王

拾遺 みや木もるとものをひろき大伴のみつの濱松かすみわたれり　權僧正公朝

うしつらしみつの濱邊に寄る貝をたれ我が爲に拾ひそめけむ　從二位行家卿

○[illegible]歌合、[illegible]	ありあけのみつの濱松すむ鶴の子を思ふこのすゑぞ久しき	從二位家隆卿
○題不レ知(國中、みのうはま)	みのうはま難波の浪のよるをまつ貴こそ貝の色も見えけれ	讀人しらず
○天平二十四年正月二十九日作歌(しなののはま、越中)	萬十七 こしの海のしなのの濱をゆきくらし長き春日も忘れて思へや	中納言家持卿
○寶治二年百首	駒なめて急ぐとすれどこしの海のしなのの濱は末ぞはるけき	權僧正公朝
○百首御歌(しまのはま、未勘國)	みけくにの島の濱より霞むらしあまねく春を人にしれつゝ	光明峯寺入道攝政
○[illegible]三首歌合(しろこのはま、未勘國)	月影にしろこのはまのしろかひは浪も一つに見え渡るかな	讀人しらず
○入道[illegible](しらゝのはま、紀伊)	君が代のかずともとらむ紀伊國のしらゝの濱にしける石をば	兼　盛
○家集	波たてる松は緑の色なるをいづくしらゝの濱といふらむ	能宣朝臣
○寛治三年八月四條宮扇合歌	鳴るるしらゝの濱の見なそこにそのたまみゆる秋のよの月	讀人しらず
○百首歌	雪のいろにおなじしらゝの濱千鳥こゑさへさゆる曙の空	寂念法師
○伊勢記に云いはぶちと云ふ所にて三首歌、月明に(しほあひのはま、伊勢)	月はたゞひろかは山の雲きえて光もみちぬしほあひの濱	鴨長明
○寶治二年百首(ひたかのはま、未勘國)	祝讃賞 よをてらすひたかの濱のみや木もり繁き御蔭に今かあふらし	光俊朝臣
○廣田社歌合(ひろたのはま)	人はいさわれとはふまじかみ垣やひろたの濱にふれる白雪	惟宗廣言朝臣
○家集(すまのはま、攝津)	まちどほに都のひとや思ふらむすまの濱邊はすみよかりけり	惠慶法師
○題不レ知(すみよしの濱、攝津)	萬六 いまのみにあきたらめやも白浪の磯崎めぐるすみよしの濱	讀人しらず
	萬十一 住吉の濱によるてふうつせ貝みなきこともて我こひめやも	同

湊

○家集

六三 土佐日記
てる月のながるゝ見れば天の川いづる湊は海にぞありける　貫之

○日吉社歌合

波にゆく心のはてやこれならむ花のみなとの春の曙　慈鎮和尚

○洞院攝政家百首、五月雨

浪さわぐみなとの河や濁るらむたかせのよどの五月雨の頃　信實朝臣

○御集、湊春曙（うらのみなと）

いつのまにいでつる舟のかすむらむ浦のみなとの春の曙　中務卿のみこ

○五十首歌、海旅

こぐ舟のあとの白浪かへりみる浦のみなとぞ遠ざかりゆく　土御門院小宰相

○楚忽百首歌（みなとふじかは）

煙たつ高峯はよその雲居にてみなとにわたるふじの川霧　藤原爲顯

○五十首歌、河月（みなとみなのせがは）

さし登るみなのせ川の夕しほにみなとの月の影ぞちかづく　参議爲相卿

○題不ㇾ知（あとのみなと、足速、近江）

萬九
あしりをば（アトモヒテ）こぎ行く船は高島のあとの湊にはてにけむかも　讀人しらず

萬四
まどがたの湊のす鳥波たてば妻よびたてゝへに近づくも　同

○寶治二年百首

現存六
人知れぬねをこそなかめまどがたの湊のすどり波にぬれつゝ　正三位知家卿

○題不ㇾ知（やそのみなと、近江）

萬三
いそさきをこぎてめぐれば近江の海やその湊にたづ澤に鳴く　高市連黒人

○洞院入道攝政家百首、湊千鳥

風さゆるやその湊のあくるよに磯崎かけて千鳥なくなり　信實朝臣

○弘長二年中務卿親王家百首（なかのみなと、讃岐）

敷島のなかのみなとの小夜千鳥妻よびたてゝ浦づたひゆく　權僧正公朝

○長歌

萬二
しきしまの（ツキテクル）　なかのみなとに　舟うけて　わがこぎくれば　人丸

とつきかぜ　くもゐにふくに　おきみれば　あとゐなみたち（シキナミタチ）

○光明峯寺入道攝政家百首、寄名所一戀（そでのみなと、長門或出雲）

松浦潟袖の湊に漕ぎよせむもろこし舟のとまりもとめば　大藏卿有家

○文應二年毎日百首中

新六三　とこの海に流れておつる涙川袖のみなとのさわぐなもうし　民部卿爲家

○六帖題（あけのみなと、未勘國）

しぼむかふかけの湊の入海にあはれ我が身のいでがたのよや　同

○題不知

萬十四　あぢがまのかけの湊に入る瀬のこちたきくもかいりて招くも　讀人しらず

○家集（いなのみなと、攝津）（なつイ）

萬代　浦傳ふたづの諸聲に聞ゆなりゐなのみなとに潮やさすらむ（なつイ）　藤原親盛

○海邊郭公

一字抄　高砂の松になきけり時鳥このみなとには舟をとゞめむ　修理大夫顯季卿

○題不知（をののみなと、伊勢）

六三　續後撰二　いせの海のをののみなとの流れえに流れてもみむ人の心を　讀人しらず

○同

懷中　みそぎするをのの湊の松をこそ幾代かへしと問ふべかりけれ　同

○同（かほのみなと、出羽）

懷中　君みねばかほの湊にうちはへて戀しき浪のたたぬ日ぞなき　同

○同（をみのみなと、筑前）

催馬樂　朝倉やをみの湊に網引するたま（あまイ）のあざしに網引きあひにけり　同

○同（こふのみなと、伊賀）

人をのみこふの湊に寄る浪は袖をのみこそうちぬらしけれ　同

○寶治二年百首

風荒きとさのみなとをこぐ舟のくるしきものは心なりけり　太宰帥爲經卿

○同（をかのみなと、近江又河内或讃岐土佐）

みづぐきの岡の港に立つ浪のふかき底をば汲みてしらなむ　光臺院入道二品のみこ

○題不知

萬七　あまぎりあひひがた吹くらし水ぐきの岡の湊に浪立ちわたる　讀人しらず

○六帖題、秋のかぜ

ひがたふく音ぞ寂しき水ぐきの岡のみなとの秋のしほかぜ　權僧正公朝

○御集
現存六 月かげの宿ればこほる水ぐきの岡のみなとに秋風ぞふく　後九條内大臣

○文永五年毎日一首中
水莖の岡のみなとの浪よりやふでのうみてふ名にはたちけむ　民部卿爲家

○春歌中
雲葉 新拾春上 水莖の岡のみなとのうへにかずかきすてて歸る鴈がね　素暹法師

○家集（しらすげのみなと、遠江）
新後撰旅 ふき送る風のたよりもしらすげの湊わかれていづる舟人　源俊定朝臣

○承久の後の御百首（おきのみなと、讃岐）
遠島御百首雜 なみまわけおきの湊に入る舟の我ぞこがるゝたえぬ思ひに　後鳥羽院御製

○康平四年二月禎子内親王家名所歌合（あきのみなと、豊前）　三イ　巣イ
梢にはみえずなりゆく紅葉ばのとまるや秋の湊なるらむ　攝津

○洞院攝政家百首、忍戀（なみだのみなと、未勘國）
もらすなよ袖の涙のみなと河したはふあしの下にくつとも　隆祐朝臣

○正治二年百首（ゆらのみなと、由良、紀伊）
濱きよきゆらの湊になく千鳥よふねやのぼる聲騷ぐなり　小侍従

○寶治二年百首、渡月
月さゆるゆらの湊やふけぬらむをちかた人の聲ぞのこれる　後九條内大臣

○海路をよめる
萬代 行く船のゆらの湊のおきつすにかぢとりむけてよする浦人　平政村朝臣

○日吉社歌合（みなとたごのうら）
たごのうらの波に霞の色さえてはるのみなとに有明の月　慈鎭和尚

○三體和歌（よさのみなと、余作、丹後）
新後拾夏 まつたてるよさのみなとの夕涼みいまもふかなむ沖津潮風　後京極攝政

○久永二年七月白川殿七百首（山のゐのみなと、未勘國）　元久イ
山の井のみなと別れてゆく舟のあかでも人にぬるゝ袖かな　光俊朝臣

○寶治二年百首（みつのみなと、攝津）
あふ事はよをへだつなと玉がきのみつの湊に手向けをぞする　同

○弘長元年百首、五月雨
行く人のたむけも見えず玉垣のみつのみなとの五月雨の頃　従二位行家卿

○三百六十首中
玉がきのみつの湊にはるくれば行きかふ人ぞ花をたむくる　好忠

○題不レ知（ひらのみなと、近江）
○六帖題
○同
○家集、いほのみなと（播磨）
○仁安三年奈良歌合（すはのみなと、信濃か）
○家集、みなと（ふたみがた）
○あののみなと（伊勢）

萬三 わが舟はひらの湊にこぎとめむ沖べな行きそさよ更けにけり　讀人しらず
新六三 沖津島月いさよはばこぎいで（いてイ）むひらの湊はさよふけぬとも　正三位知家卿
新六三 さゞなみやひらの湊の山おろしに舟いりわぶるしがの大和田　衣笠内大臣
新續古冬 浮きよに寢覺めて聞けばはりまがたいほの湊に千鳥なくなり　大江嘉言
月影のすはの湊にすむよははまだきに結ぶ氷なりけり　法印智海
この歌判者俊成卿云右歌すはのみなとの冰つれにききわたる心ちして
これも猶持と見えたり云々
二見潟をちの湊やいかならむしほあひは駒の爪もかくれず　鴨長明
此の歌伊勢記云あけぬれば二見へゆくともなる人しほどきいかゞあらむ今はみなとにはのぞみぬらむかし馬をはやめよといふみわたりにならびていかゞと思へどいと疾く來て水もなしこのわたりをしほあひといふ事は東西の湊よりみちくろしほのこゝに行きあへばなるべし云々
うちわたすあのの湊田ほのぐ〱と刈るもからぬも見えぬ朝霧　同
このうたは伊勢へくだりけるにあのといふ所にとまりて曉たつとて田の中をよをこめてすぐるに霧ふかくてみちも見えればよめる云々

潟

○題不レ知（あかしがた、播磨）
萬六
明石潟しほひの道をあすよりはしたうれしけむ家路かづけば　赤人

○寶治二年百首、潟千鳥
あすか潟跡ふみつくるかち人のしほひの道に千鳥なくなり　從二位賴氏卿

○千五百番歌合（なるみがた、尾張）
松風もいまは嵐になるみがた色なきなみの冬ぞさびしき　具親朝臣

○花月百首御歌
鳴海潟あらいそなみの音はして沖の岩こす月のかげかな　後京極攝政

○御集
うちわたすいまか潮干に鳴海潟とほよる舟のこゑも通はず　常磐井入道太政大臣

○洞院攝政家百首、旅
鳴海潟しほせはるかにひにけらし昨日のおきを通ふかち人　從三位行能卿

○六帖題、かた
なるみ潟岡をめぐりてゆく人は都のつとになにを語らむ　權僧正公朝

○あづまへくだり侍りけるに
十六夜日記
なるみ潟わかの浦風へだてずばおなじ心に神もうくらむ　安嘉門院四條

同
滿潮のさしてぞきつるなるみがた神やあはれとみるめ尋ねて　同

このうた路次の記云をはりの國なりとのむまやをいでてゆくよきぬみちなればあつたの宮へまゐりてすゞりとりいでてかきつけてたてまつる歌五首中歌

○題不レ知（かしひがた、筑前）
萬六
時津風ふくべくなりぬかしひ潟しほひのきはに玉もかりてな　小野宮左大臣

○百首歌、濱島千鳥
かしひ潟夕霧かくれ漕ぎくればあへのしまわに千鳥しばなく　小侍従

○六帖題、いそ
○六帖題、いかり（さつまがた）
○題不知（ともがた、未勘國）
○たゆひがた（手結、越前）
○あゆちがた（年魚市方、紀伊）
○御集、舟を
○夕立を
○和歌御影供歌合、濱邊千鳥（あかしがた、播磨）
○住吉影供百首（かつらがた、筑前）
○百首（まつらがた、肥前）歌イ
○題不知
○久安百首（はりまがた）
○建保三年名所百首（ふけひがた紀伊）
○あづまにくだりける道にて（おきつがた、駿河）

新六三
しほたれば蜑にも袖をかしひがた磯菜つみにと浪をわけつゝ　信実朝臣
さつま潟せとのはやみの潮ざるはたゞこぎすぎよ舖おろさで　僧正公朝
萬七
潮干ればともがたにいでて鳴くたづの聲遠ざかる漁りすらしも　読人しらず
萬十四
たゆひ潟しほみち渡るいつ行かむ悲しきせろがわたり通はむ　同
萬七
あゆち潟潮ひにけらしちたの浦に朝こぐ舟も沖によるみゆ　同
あゆちがた朝こぐ舟のほの〴〵とちたの浦べに浪よするみゆ　中務卿のみこ
古葉歌
なみの上に夕立すれどあゆち潟雲もかゝらぬうらの遠山　平政村朝臣
明石がた波にたちまふ濱千鳥まつふく風に聲しきるなり　如願法師
春のよの潮干の月のかつらがた山までつゞく海のなかみち　後九條内大臣
松浦潟とほざかりゆく時鳥こゑのゆくへやもろこしの空　正三位知家卿
もろこしのしほぢはるかに松浦潟西に山なき月をみるかな　觀惠法師
はりま潟明石のとなみ騒ぐめりしばしないでそかこの船人　實信朝臣（満イ）
いたづらに我が世の秋やふけひがた袖なる月も傾きにけり　従三位行家卿
おきつがたいそねにちかき岩枕かけぬ波にも袖はぬれけり　源光行
此の歌諸次記云この關とほからぬほどにおきつといふ所ありうみにむかひたる家にやどりて留りたればゆふべによる浪のおと身のうへにか

かろやうにおぼえてと云々

○家集、月歌中（きよみがた、駿河）
きよみ潟おきの岩こすしら浪に光をかはす秋の夜の月　西行上人

○六百番歌合、旅戀
きよみがたいはしく袖の浪のうへに思ふわびしき君が面影　寂蓮法師

○洞院攝政家百首、眺望
きよみがた浦路も遠く雲きえてなみのうへなる山のはの月　從二位賴氏卿

○六帖題、むまや
浪の上にますかげぞなき清見潟うまや傳ひの月はみれども　權僧正公朝

○建保三年名所百首（ふたみがた伊勢）
二見がたいせのはまをぎしきたへの衣手かれて夢も結ばず　前中納言定家卿

○題不知
桑門 浪の上にいづるも入るもふたみ潟月にうらむる山のはぞなき　讀人不知

○（なにはがた、攝津）
萬二十 よそにのみ見てやわたらむ難浪潟雲居に見ゆる島ならなくに　同

萬九 なには潟潮干にいでて玉藻刈るあまの少女ら汝が名つけさね　同

○家集
萬代 にくさひぞかくべかりける難波潟船うつ波にいこそねられぬ　能因法師

○同
なには潟雲居にみゆる島がくれこぎゆく舟のよそのうき雲　從二位家隆卿

○最勝四天王院名所御障子
なにはがた霞の空に鴈ぞなくあしの若葉や春いそぐらむ　俊成卿女

○貞應二年七月百首歌
なにはがた朝みつ潮はとほけれどゆきにかくるゝ浦の松原　民部卿爲家

○喜多院入道親王家五十首
難波潟さはべをたちてはる／＼と緑の空に遊ぶあしたづ　三條入道左大臣

○家集
難波潟たまえの蘆をふみしだき鳴くらむたづはわが爲にかも　伊勢

○題不知
六三 懐中 潮風にけさひえにけり難波潟あし火たくやぞこひわたりける　讀人しらず

○後九條内大臣家歌合、秋戀（いせをがた、不見イ）
○行路戀を（いはみがた、不見）
○六百番歌合
○六帖題、かた（はりまがた、播磨）
○堀河院御時百首
○正治二年百首
○百首御歌（うなかみがた、宇奈加美、上總或上野）
○題不レ知
○かた
○同（あさかがた、朝香、未勘國）
○六帖題、かた

いせをがた煙も浪もつらからずそれにも秋の色しみえねば　民部卿爲家
石見がたことだが磯に寄る浪はくだけてかへる物としらずや　俊頼朝臣
石見がた千尋の底もたとふれば淺きせになる身の恨みかな　寂蓮法師
新六三 はりま潟朝漕ぐ舟のほのかにも見えたる山はあはの島かも　光俊朝臣
風雅二 はりまがた恨みてのみぞすぎしかと今宵とまりぬあふの松原　修理大夫顯季
はりまがたすまの浦風月さえて千鳥ともなふあけがたの空　三條入道左大臣
人心うなかみがたの沖津島潮ひのゆたにねをやなくらむ　後九條内大臣
遙かにもきにける程ぞしられけるうなかみ潟を浪ごしにみて　光俊朝臣

此の歌は康元元年十一月鹿島社に詣で侍りけるにかのしまさきのむかひはうなかみがたになむ侍りいはたかく松所々におひたりうち海をへだててほどちかくみわだされたるなり云々

萬七 夏ぞひくうなかみ潟の沖津洲に鳥はすだけど君は音もせず　讀人しらず
現存六 浮寢するうなかみ潟の沖つすに鶴ぞなくなるよや更けぬらむ　正三位知家卿
萬十一 ゆきて見て來てぞ戀しき朝香潟山ごしにおきていねがてぬかも　讀人しらず
萬十四 朝香潟潮干のゆたにおもへらばうけらが花の色に出でめやも　同
新六三 朝香潟うけらが花のいとゞまた色こそみえねけふしぐれつゝ　正三位知家卿

○御集
○月歌中（あはぢがた、淡路）
○永久四年百首（くろうしがた、黒牛方、紀伊）
○雜歌（ふぢかた、伊勢）
○家集（まとがた、播磨）

○寛元四年日吉社歌合
○題不レ知（のこのとまり、筑前）
○からとまり（筑前）
○六帖題御歌、とまり
○題不レ知（みつのとまり、攝津）
○家集
○御集、旅泊
○家集

古來歌 山ごしに煙ぞ見ゆるあさゝ潟（かい）からき戀するあまのしわざか　後一條入道關白

秋風 淡路潟しほのはやみのせとわたり心そらなる月をみるかな　光俊朝臣

黑牛潟漕ぎ出づるあまの友舟はすゞきつりにや浪まわくらむ　神祇伯隆仲卿

萬代 ひきてこし人忘れずばふぢ潟の松も昔のものがたりせよ　六條右大臣室

梓弓いるまと潟にみつ潮のひるあひ難みよるをこそまて　躬恆

泊

雲間より入日にむかふ島山の麓めぐらばとまりとぞきく　民部卿爲家

現存六 泊りあらば浦の友舟こぎよせよ雲のすゞけに日は暮れにけり　信實朝臣

萬十五 風ふけばおきつ白浪かしこみと能許の泊りにあまたにぞぬる　讀人しらず

萬十五 から泊りのこの浦浪たたぬ日はあれども家にこひぬ日はなし　同

潮風は荒くもそなるからどまりのこのうら浪漕ぎいづな夢　中務卿のみこ鎌倉

萬十五 大伴のみつの泊りに舟泊てて立田の山をいつかこえけむ　讀人しらず

新拾旅 たつた山ゆふこえくれば大伴のみつの泊りに舟やまつらむ　從二位家隆卿

これもまたなれなばさぞな浮寢するみつの泊りのよはの松風　中務卿のみこ鎌倉

家 近江なるみつの泊りを打ち過ぎて舟でていなむ事をしぞ思ふ　好忠

○十首歌合（首イ）（たけのとまり、未勘國）
○家集（にしのとまり、未勘國）
○泊五月雨といふことを（からことのとまり、備前）
○千五百番歌合
○題、泊
○洞院攝政家百首、眺望（むろのとまり）
○六帖題、とまり
○貞應三年百首
○正嘉三年毎日一首中
○弘長三年内裏百首、羇中泊
○百首御歌、霞（ひなのとまり）
○（もたひのとまり、備中）

越の海のたけの泊りをけさみれば一夜をこめて雪ふりにけり　藤原家盛

のりのため苦しき道をこがれきて西の泊りときくぞ嬉しき　前大僧正行尊

けふもなほとまりやせましからことの日數長びく五月雨の頃　後嵯峨院御製

住吉の松風通ふからことを浪のをすげてしほやひくらむ　土御門内大臣

（新六三）浪の音も風のかけたるからことに引きとめられぬ船人ぞなき　正三位知家卿

こぎいづる室のとまりの曙はくもに離るゝ高砂の松　後九條内大臣

幡磨路や空は日よりになりぬともしばしはいでじ室の泊りを　權僧正公朝

うきねする室の泊りの浪枕よるよるゆめのなかぞたえ行く　民部卿爲家

あけぬよりむろのとまりの追風にかぢの音高く出づる舟人　同

南ふく沖のなごろにけふもなほえぞいでやらぬ室の友舟　從二位行家卿

霞わけ明石の門よりとぶ鳥のひなの泊りはいづくなるらむ　後九條内大臣

（萬代）貢物はこぶ千船も漕ぎ出でよもたひの泊りしほもかなひぬ　前中納言資實卿

この歌建久九年大嘗會主基方備中國御屛風

夫木和歌抄巻第二十五　終

夫木和歌抄　卷第二十六

雜部八

題
津　磯　崎　迫門　渡　岸
洲　淀　瀧　澤　井　溫泉
水

津

○詠泉郎（しかつ、近江）
○題不レ知
○同（大津、近江）
○六帖題
○題不レ知

萬七
さゞ波の志賀津の蜑は我なしにいさりはするな（なせそイ）波たゞずとも　人丸

萬二
さゞ波のしがつのこらがまかりぢ（死）の川瀬ぢ見れば（のみちを見ればさぶしめ萬）哀れなるかも　同

萬三
我が命まさぢ（きく萬）もあらばまたもみむしがの大津によする白波　讀人しらず

新六一
さゞ波や大津の宮はあれぬれど春はふるさずたちかはる（つ霞拾）かな　衣笠内大臣

萬五
大伴のみつの松原かきわけてわれたちまたむはや歸りませ　讀人しらず

萬十五
大伴のみつに舟のり漕ぎ出てはいづれの島にいほりせむ我　同

萬十一
白妙のみつのはにふの色に出でていはずてのみぞわがこふらくは　同

萬二　新古旅　いざこどもはや日のもとへ大伴のみつの濱松まち戀ひぬらむ　山上憶良
新拾雜中　まちこひし昔はいまもしのばれてかたみ久しきみつの濱松　前中納言定家卿
心あてのいく秋霧にこぎなれて波おたどらぬみつの濱人　鴨長明
萬二十　おしてるや難波の津より船よそひあれはこぎぬと妹につげこそ（せイ）　讀人しらず
萬二十　難波津にみふねおろすゑやそか（ちイ）ぬき今はこぎぬと妹につげこそ（せイ）　同
懷　百千鳥なくやはるべのなにはづに浦風ふかくにほふ梅が枝　從二位家隆卿
萬三　續後撰雜上　住吉のえなつにたちて見渡せばむこの浦よりいづる舟人　高市連黑人
萬三　久方の天のさくめが岩船をとめしたかつはあせにけるかも　角　丸
萬十二　住吉の敷津の浦のなのりそのなはつげてしをあはぬも怪し　讀人しらず
都路はいくかもなきをもしほ草しきつの浪は袖にかけけり　皇太后宮大夫俊成卿
春霞たえま〳〵にながむればしきつの浦の松のむらぎえ　民部卿範光
住吉の浦にしきつのもしほ草かさねてさゆるよはの衣手　從三位範（宗イ）季卿
ふりにける松の心もあらはれぬおきつのあまの昔語りに　參議爲相卿
萬十一　あぢがまの鹽津にさして（をイ）漕ぐ舟の名はいひてしを逢はざらめやも　讀人しらず
萬十四　さきたまの津になる舟の風を痛み綱はたゆとも事な絶えそね　同
萬七　梓弓ひきつべ（のへイ）にあるなのりそのな（なるイ）（は、さくイ）はとるまでにあはざらめやも　人丸

〇同
〇建保三年名所百首
〇仲實が[illegible]きあしたにみつのふねいづるをみて
〇題不知（なにはづ、攝津又山城近江）
〇第[illegible]百首歌中
〇題不知（えなつ、攝津）
〇同
〇同（しきつ、攝津）
〇文治六年五社百首、旅
〇正治六年百首
〇建保三年名所百首、住吉浦
〇海道宿次百首、おきつ（駿河）
〇題不知（しほつ、近江）
〇武藏國歌（さきたまのつ、武藏）
〇題不知（ひきつ、壹岐）

○同（いちひづ、櫟、武藏）
萬十六　さしなべに湯わかせ子共櫟津のひがしよりこむ狐にあむさむ　讀人しらず

○伊豫溫泉にて（にぎたづ、伊豫）
萬三　百敷の大宮人のにぎたづに舟乘りしけむとしのしらなく　赤人

○題不レ知
萬十二　にぎたづに船乘りせむと聞きしなべに何ぞも君がみれどこざらむ　讀人しらず

○長歌
萬二　くぢらとる　あまづをさして　にぎたづの　あらいその上に　人丸
まあをなる　たまもおきつも

○佐良之奈日記（いしづ、和泉）
ある丶波に風よりさきに舟はてて石津の浪ときえなましかば　讀人しらず

○家集（むろつ、播磨）
淺ましや室津はうきとききしかど沈みぬる身の泊りなりけり　俊賴朝臣

○同（あはづ、近江）
水海のあはづに宿る君故にはかなくしほをたれてけるかな　重之

磯

○寄レ藻
萬七　拾戀五　潮みてば入りぬる磯の草なれや見らく少なくこふらくの多き　讀人しらず

○題不レ知
萬七　いその上に妻木をりたきなが爲とわがかつぎこし沖津白玉　同

萬十一　みさごゐる沖の荒磯による波の行方もしらず我がこふらくは　同

萬七　大海のいそもとゆすり立つ波のよらむと思へる濱のさやけく　同

○百首歌、戀
荒磯の岩もとゆすり立つ波のたくましきまでぬる丶袖かな　寂蓮法師

○爲家卿家百首
わたの原磯もとゆすりたつ波のゆたかにた丶ふ袖の上かな　家長朝臣

○旅
萬二　新古旅
いざこどもはや日のもとへ大伴のみつの濱松まち戀ひぬらむ　山上憶良

〔建保三年名所百首
新拾雜中
まちこひし昔はいまもしのばれてかたみ久しきみつの濱松　前中納言定家卿

〔伊勢ぢに[illegible]きあしたにみつのふねいづるをみて
心あてのいく秋霧にこぎなれて波ぢたどらぬみつの濱人　鴨長明

○題不レ知（なにはづ、攝津又山城近江）
萬二十
おしてるや難波の津より船よそひあれはこぎぬと妹につげこ（せイ）そ　讀人しらず

萬二十
難波津にみふねおろすゑやそか（ちイ）ぬき今はこぎぬと妹につげこ（せイ）そ　同

〔第三親王家十五首歌中
百千鳥なくやはるべのなにはづに浦風ふかくにほふ梅が枝　從二位家隆卿

○題不知（えなつ、攝津）
萬三　夫木後撰雜上
住吉のえなつにたちて見渡せばむこの浦よりいづる舟人　高市連黑人

〔同
萬三
久方の天のさくめが岩船をとめしたかつはあせにけるかも　角丸

○同（しきつ、攝津）
萬十二
住吉の敷津の浦のなのりそのなはつけてしをあはぬも怪し　讀人しらず

○文治六年五社百首、旅
都路はいくかもなきをもしほ草しきつの浪は袖にかけけり　皇太后宮大夫俊成卿

〔正治六年百首
春霞たえま〳〵にながむればしきつの浦の松のむらぎえ　民部卿範光

○建保三年名所百首、住吉浦
住吉の浦にしきつのもしほ草かさねてさゆるよはの衣手　從三位範季（宗イ）卿

〔[illegible]百首、おきつ、駿河）
ふりにける松の心もあらはれぬおきつのあまの昔語りに　參議爲相卿

○題不レ知（しほつ、近江）
萬十一
おちがまの鹽津に（をイ）さして漕ぐ舟の名はいひてしを逢はざらめやも　讀人しらず

○武藏國歌、さきたまのつ、武藏）
萬十四
さきたまの津にをる舟の風を痛ゝ綱はたゆとも事な絶えそね　同

○題不知（ひきつ、壹岐）
萬七
梓弓ひきつべ（の）に（へ）あ（な）る（ろイ）なのりそのな（は）は（さくイ）とるまでにあはざらめやも　人丸

〇同（いちひづ、櫟、武藏）
萬十六 さしなべに湯わかせ子共櫟津(いちひづ)のひがしより(はイ)こむ狐(きつ)にあむさむ　讀人しらず

〇伊豫溫泉にて（にぎたづ、伊豫）
萬三 百敷の大宮人のにぎたづに舟乘りしけむとしのしらなく　赤人

〇題不レ知
萬十二 にぎたづに船乘りせむと聞きしなべに何ぞも君がみれどこざらむ　讀人しらず

〇長歌
萬二 くぢらとる　あまづをさして　にぎたづの　あらいその上に
まあをなる　たまもおきつも　人丸

〇佐良之奈日記（いしづ、和泉）
あるゝ波に風よりさきに舟はてて石津の浪ときえなましかば　讀人しらず

〇家集（むろつ、播磨）
淺ましや室津はうきときゝしかど沈みぬる身の泊りなりけり　俊頼朝臣

〇同（あはづ、近江）
水海のあはづに宿る君故にはかなくしほをたれてけるかな　重之

磯

〇寄レ藻
萬七 拾戀五 潮みてば入りぬる磯の草なれや見らく少なくこふらくの多き　讀人しらず

〇題不レ知
萬七 いその上(うへ)に妻木をりたきなが爲とわがかつぎこし沖津白玉　同

萬十一 みさごゐる沖の荒磯によする波の行方もしらず我がこふらくは　同

萬七 大海のいそもとゆすり立つ波のよらむと思へる濱のさやけく　同

〇百首歌、戀
荒磯の岩もとゆすり立つ波のたくましきまでぬるゝ袖かな　寂蓮法師

〇爲家卿家百首
わたの原磯もとゆすりたつ波のゆたかにたゝふ袖の上かな　家長朝臣

○百首歌
雲葉
あれはてて人も渚の礒やかたいつより蜑のすみうかれけむ　増基法師

○文應元年七社百首、海邊
風むかふ荒礒影のとまり舟世にいでやらぬ身とぞなりゆく　民部卿爲家

○家集、たかし山をこゆとて
たかし山松なきかたの松風やふもとの浦のいそなみの聲　前民部卿雅有

○百首御歌中
萬代
わが戀はみなぎる浪のあらいそに舟まちかねて心まよはず（とイ）　後鳥羽院御製

○秋歌中（としまがいそ、攝津
林葉
舟とむるとしまが礒の山颪ちるもみぢ葉やとまのうはぶき　藤原眞清

○題不レ知
萬二十
遠江しるはのいそとにへの浦とあひてしあらばことも通はむ　讀人しらず

○建保四年百首
東路やしるはのいそのいは枕しげくもとひてかへる波かな　從二位家隆卿

○將家卿家百首
うきことをしるはの礒の敷波もいかなる御代に哀れかけけむ　家長朝臣

○題不レ知
明題集　六帖三
かつぎ出ぬなみだが礒の蚫故海てふ海はかづきつくしつ　讀人しらず

○家集、片思
袖の上は涙がいそのあはび貝いでやよしなき片思ひかな　六條院宣旨

○家集、さがみにてよめる（こゆるぎのいそ、相模）
こゆるぎの礒の若芽もからぬ身を沖のこ波やたれをよすらむ　重之

○千五百番歌合
やくわかめかりそめぶしの袖の上にけふ年波もこゆるぎの礒　後鳥羽院宮內卿

○建保三年和歌所歌合、松經年
いつまでか松のしづえにこゆるぎの礒路にかゝる波も恨めし　參議雅經卿

○家集
鶴も住み松も生ひたるこゆるぎの礒の蜑さへ千世をこそ祈れ　能宣朝臣

○寶治二年百首
弘安イ
こゆるぎの礒の波わけ見渡せばめに近からぬ沖つ島かな　從二位行家卿

○寶治元年百首
こゆるぎの礒の波わけ花ぞちるけふゆく春は沖に出でにけり　後九條內大臣

○家集中
○以下九首雜歌雜亂題不ㇾ知（ひちきのなだ、播磨或土佐）
○家集、ひゞきのなだ（ひゞきの、播磨）
○三百首御歌
○家集戀歌中
○家集
○同
○御集、わづらひ給ひてほど〳〵しかりつるとて女のもとに
○返事
○家集千鳥（さしでの磯、甲斐）
○百首御歌、片戀
○六百番歌合、寄海戀
○百首歌、磯いはほ

こゆるぎのいそ山櫻さきしよりおきつ波まにとまる舟人　隆祐朝臣

萬十七
昨日こそ船出はせしかいさな取りひちきの灘を（せたイ）今日見つるかも　讀人しらず

ありしとき響の灘といひしかば戀しからずのさきぞゆくらむ　伊勢

浦人のとるやいそなもたゆむらむひゞきの灘の五月雨の頃　中務卿のみこ

萬代戀三
しまきふくひゞきの灘の船わたり心まどふもたれによりてぞ　權中納言長方卿

家
としをへて響の灘に沉む舟波のよするをまつにぞありける　忠見

數ならぬ身をうき舟はよるべなみひゞきの灘の波をこそまて　中務

風はやきひゞきの灘の舟よりもいきがたかりし程は聞ききや　謙徳公

よそ人もかかる響のなだゆゑにきくは袂のたゞならぬかな　讀人しらず

此の歌惠慶法師集播磨よりわたるにひゞきなだに風ふきていといみじきめ見たりとききて惠慶にある人つかはしけると云々

悲しさはひゞきの灘にみちにけり都の人もききおづるまで　惠慶法師

おきつしほさしいでの磯の濱千鳥風さむからし夜はに友よぶ　權中納言長方卿

波さわぐさしいでの磯の岩ね松かた〳〵にのみ袖ぬらせとや　後徳大寺左大臣

浪かくるさし出での磯の岩根松根にあらはれて乾く間もなし　中宮權大夫家房卿

年ふとも色は變らじいはが根のさしいでの磯をあらふ白波　前大納言資季卿

波のうへやなほすみまさるあま小舟さしいでの磯の秋の月影　民部卿爲家

みつしほのさしいでの磯にすむ月は千世も限らじ久方の空　從二（三イ）位範定（宗イ）卿

みつ汐にひかれてもまた立ちかへれさしいでの磯の蜑の釣舟　源　俊平

淸みがたひとりいそねの秋の夜に月も鼠も頃ぞかなしき　後京極攝政

月ぞすむなれこし秋は夢なれやむしあけの磯のよはの松風　鎌倉右大臣

あまの袖いかにほしあへて松島やをじまがいそに衣うつらむ　家長朝臣

玉葉
松が浦の泊りの磯ときくものを名にもさはらずかへる波かな　從二位行能（宗イ）卿

宗　六帖四　玉貫
鹽竈の磯のいさごをつゝみもて御代の數とぞ思ふべらなる　忠岑

大磯にあさなゆふなにかづきぬる蜑もわがごと袖やぬるらむ　仲實朝臣

六帖
常陸なるたなべの磯にけふよりや風のふかぬに浪の立つらむ　讀人しらず

いづくとてふみ惑はせる玉章をこゝはたなべの磯ならなくに　同

しまきするおまへの灘は過ぎねどもけさの沖こそ思ひやらるれ　俊惠法師

續古今戀二
あしの屋の灘の汐くむ蜑人もしほるに袖のいとまなきかな　後鳥羽院御製

沖津波あらひの磯の岩におふる松にもにたる袖の上かな　正三位季經卿

〇建長三年百首、月前舟
〇洞院攝政家百首秋
〇文永二年十月白河殿（七イ）百首
〇六百番歌合、寄海戀（いそ）
〇題缺、いそべむしあけの磯、信濃
〇千五百番歌合
〇[illegible]入道二品親王家五十首（とをりの磯、陸奥）
〇題缺（しほがまの磯、陸奥）
〇永久四年百首（大いそ、相模）
〇題不知歌中（たなべの磯、常陸）
〇戀歌中（おまへのなだ、攝津）
〇千五百番歌合（あしやのなだ、攝津）
〇家集（あらひの磯、武藏）

崎

○六帖題、崎（ぬまさき）
新六三 鷗とぶゆふしほ路の濱さきに玉もかゝるてふ舟よばふなり　光俊朝臣

○家集、いかゞの崎（常陸）
常陸なるいかゞの崎の忘れ貝拾ふかひなき物にぞありける　元眞

○郭公歌中
續後拾夏 蜑のかるいらごがさきのなのりその名のりもはてぬ郭公かな　前中納言匡房卿

○堀河院御時百首
波のをるいらごが崎を入る船ははやこぎれ渡しまきもぞする　中納言國信卿

○家集
波もなしいらごが崎にこぎ出でてわれからつけるわかめかれ蜑　西行上人
いらご崎に鰹つる舟ならび浮きてはかけの波に浮びてぞよる

○雜歌中
みさごゐるいらごが崎のそなれ松幾世の波にしをれきぬらむ　讀人しらず

○三百六十番歌合
風わたるいらごが崎のそなれ松しづえは浪の花咲きにけり　喜多院入道二品のみこ

○參河國名所歌合、伊良古賀崎
なぐさめに拾へば袖ぞぬれまさるいらごが崎の戀わすれ貝　爲忠朝臣
岩におふるいらごが崎の松よりもつれなき人はねがたかりけり　清輔朝臣
我が戀はいらごが崎の海人なれややく鹽竈の煙たえねば　參西法師

○歌林苑歌合（いそらがさき、美濃又伊勢或越前）
伊勢島やいそらが崎の朝霧にたななしを舟こぎはなれつゝ　源有房

○家集、海邊月
伊勢島やいそらが崎にすむ月の影におきこぐあけのそぼ舟　盛方朝臣

○雜歌中
歌林 島影に立ちわかれつゝゐるさきやいそらが崎の雪のむらぎえ　敦仲

○六百番歌合
みさごゐるいそらが崎に漁りする蜑もみるめを猶もとめけり　中宮權大夫家房卿

○六帖題、崎（いでさき、播磨）
新六三 はりま潟いでさき巡る夕暮のふなこの聲も哀れなりけり　衣笠內大臣

○名所歌（いつのさき）
いつのさき海と波とのめもはるにそのきはみえぬ雲の夕なぎ　法眼慶融

○家集（はこざき）
筥崎の松はまことの緣にてかしひのかたもつては聞えず　俊頼朝臣

○堀河院御時百首（星ざき、尾張）
ほし崎やあつたのかたの漁り火のほのもしりぬや思ふ心を　仲實朝臣

○題不レ知（としまのさき、攝津）
萬三　島づたひとしまが崎をこぎまへばやまと戀しく鶴澤になく　讀人しらず

○家集（をぐろざき、陸奥）
小黒崎あさきとだえのみをつくし立てる姿もふりぬとはみよ　俊頼朝臣
小黒崎ぬまのねぬなはふみしだき日もゆふましに蛙鳴くなり

○雜歌中
現存六　小黒崎ぬまのねぬなは苦るしきにこのよにしける心なりけり　光俊朝臣

○題不レ知（をかざき、大和）
萬十一　岡崎のだみたる道を人な通ひそ有りつゝも君が來座(きまさ)む善き道にせむ　讀人しらず

○家集（をののみさき）
常陸なるをののみさきの露草のうつれば駒の松にぞありける　閑院大將朝光

○嘉元三年百首、海邊（わだのみさき、攝津）
玉葉雜二　夕づく日わだのみさきをこぐ舟の片帆にひくやむこの浦風　入道前太政大臣

○海路郭公
系門　みなと川こぎいでてきけば時鳥わだのみさきの松に鳴くなり　觀意法師

○文永十年毎日一首中（からさき、近江又不見）
珍らしやそよから崎の濱ひさし久しくみぬも驚かれつゝ　民部卿爲家
みるたびに珍らしきかな白妙のまさごにたてる唐崎の松

○最勝四天王院名所御障子
からさきやこほりふきゆく松風に汀のたづも遠ざかるなり　後久我太政大臣

○寶治二年百首
にほの海をいづてふ月の宵のまにかげは西なる唐崎の松　信實朝臣

○題不レ知
萬二　やすみしる我が大君のおほみふねまちかこひなむしがの唐崎　讀人しらず

萬一 さゞ波のしがの唐崎さちはあれど大宮人の舟まちかねつ　人丸

○家集（かしまがさき、常陸）

夜もすがら磯の松がね片しきてかしまが崎の月を見るかな　道因法師

○題不レ知

萬七 あられふる鹿島が崎を波たかみすぎてやゆかむ戀しきものを　讀人しらず

○百首御歌、眺望

山もなきかしまが崎の浪間よりいづる月日や潮干なるらむ　後九條内大臣

波たかき鹿島の崎にたどりきて東のはて（潮干）やけふみつるかな　光俊朝臣

此の歌康元元年十一月鹿嶋社詣で（にイ）てかの島の崎に詣りてみれば我が國の東のはてになむ有りけるかの社より崎へは七里とぞ申すめると云々

○かすみの崎（懷中、武藏）

はるかにも霞のさきを思ふかな波の花もやたちまがふらむ　讀人しらず

○永久四年七月家歌合、女郎花（かほよのさき、未勘國）

さき匂ふかほよの崎の女郎花たれかはみにと尋ねこざらむ　藤原忠隆

○六帖題

新六二 白波の岩うつ音やひゞくらむかねのみさきのあかつきの空　衣笠内大臣

○家集、自筑紫都へ歸るとて

音にきくかねのみ崎はつきもせずなく聲響くわたりなりけり　俊頼朝臣

○題不レ知（かみさき）

萬七 かみ崎の荒磯もみえず波立ちぬいづくより行かむよき道なしに　讀人しらず

○家集（たてがさき）

うつ浪にみちくる潮の戰ふを楯が崎とはいふにぞありける　盧主

○家集、よろづの事歌よみけるに

さかろおすたていし崎の白波は荒き潮にもかゝりけるかな　西行上人

○家集、海を

天地のひらけし世より神さびて遙かになりぬたかひこの崎　鎌倉右大臣

○布勢湖にて作る歌（たるひめのさき、越中）

萬十八 神さぶるたるひめの崎を漕ぎ廻りみれどもあかずいかに我せむ　福丸

○伊勢國行幸の時（たふしのさき伊勢名所不審未勘之）

萬一
たちはきのたふしの崎にけふしかも大宮人の玉もかるらむ　人丸

○越中に下る時

萬十八
たこの崎このくれ茂き郭公きなきとよめばはたこひめやも　中納言家持卿

○大嘗會悠紀方屏風

新拾遺賀
はる〳〵とくもりなきよを諭ふなりつきてかさぎの蜑の釣舟　清輔朝臣

○同（ねの日が崎、丹後）

はるかなる子の日が崎に住む蜑は浦松をのみひきやよすらむ　讀人しらず

○長歌（なにはの崎、攝津）

萬十三
おしてるや　難波の崎に　ひきのぼる　あけのそほふね　そほふねに　つなとりかけて　同

○承安二年廣田社歌合（むこのさき、武庫、攝津）

武庫の崎浦よりをちにこぎゆけばきし方ははや霞みけらしな　素覺法師

○題不知（野島崎、淡路或越中）

萬三
あはみちの野島が崎の濱風に妹がむすびしひも吹きかへす　人丸

○同

萬十五
玉もかるをとめをすぎて夏草の野島が崎にいほりすわれは　讀人しらず

○六百番歌合

夏草や野島がさきの朝露をわけてぞきつる萩の花ずり　法橋顯昭

○建保三年内大臣家百首、濱雪

いほりさす野島がさきの濱風に薄おしなみゆきはふりきぬ　從二位家隆卿

○長歌（おほのさき、越中）

萬十八
おふの崎　はなちりまがひ　なぎさには　あしがもさわぎ　さゞれなみ　讀人しらず

○崎イ（大崎、土佐又越中）

現存六
大崎のありそのわたり霧こめてをちかた聲も舟よばふなり　藤原季氏

○家集

末遠き千世のかげこそ久しけれまた二葉なる大崎の松　前中納言經光卿

○土佐國にて作る歌

萬六
大崎の神のをはまはせばけれど百舟人も過ぐといはなくに　石上乙丸

(崎月
○駿河國に下りけるにくきが崎にて(駿河、又攝津)
○題不知(懷中)
○同(くもつが崎、伊勢)

○家集(やまぶきのさき、山吹)近江)
○題不知(やらのさき、屋良、筑前)
○同(慶中、まつが崎、山城又尾張)
○天延元年内裏御屛風、夏、かみのやしろ
○正治二年百首御歌(こじまが崎山城)
○家集(これもがみさき、信濃)
○題不知(懷中、心みの崎、心見、近江)
○悠紀方御屛風小松湖崎邊(攝津又近江)
○家集、こまつがさき
○柿本影供百首(てうしの崎、未勘國)

古來歌
ちはやふる神のをはまに舟とめて大崎みれば月のさやけさ　光俊朝臣

波の花くきが崎より散りくめりこず𛁈もみえず風の早きに　堀河院中宮上總

人のわく心はうしとそむけどもにくきが崎に松もたつかな　讀人しらず

伊勢じまや月の御舟はよきてふけくもつが崎の松のむらだち　大中臣親守

此の歌は長明か伊勢記云二見のおとなしの山に人々ともなひてのぼりてはるかに山海をみてよめると云々

いはねどもくちなし色にしるきかなこや音にきく山吹の崎　左京大夫顯輔卿

萬十六
沖津鳥かもといふ舟のかへりこばやらの崎もり早くつげこせ　讀人しらす

竝べたてる松が崎なるあしたづは千代を重ぬるためしなりけり　同

松が崎たがつけし名ぞおふる岩の砂なりけむときは聞ききや　元輔イ

橘のこじまが崎の月影をながめやわたすうちのはしもり　後鳥羽院御製

すはの湖のこれもがみ崎眺めつゝけふ日暮しにおりくらすなみ(のイ)　大納言師氏卿

近江なる心みのさき年へてもよしこゝろみよ人忘るやと　讀人しらず

ねの日して小松が崎をけふ見ればはるかに千世の影ぞ浮べる　皇太后宮大夫俊成卿

なにはがた浦風さむみ潮みてば小松が崎に千鳥なくなり　勝命法師

こぐ船は苦もはらはでまかぢとるてうしのさきをいづる白雲　九條内大臣

○題不レ知（あれのさき、阿禮、三河）
萬一 いつくにか舟とめすらむあれの崎漕ぎ出でていにし棚なし小舟　高市黒人

○同（さでの崎、佐弖、未勘國）
萬四 あこの山いほ重かくせるさでの崎さてはえしこの（ねかイ）夢にしみゆる市原王

○同
萬三 いほはらの淸みが崎のみほの浦のゆたにみえつゝ物思ひもなし　田口益人

○同
六三 波のたつ淸見が崎にゐる千鳥たれみよとてか跡のさやけき　讀人しらず

○洞院攝政家百首、旅
いほはらや淸みが崎の磯枕たび〳〵みれどあかぬ浦かな　宗長朝臣

○同
我もまたかりねに結ぶいほはらの淸みが崎に月もかゝれり　從三位行能卿

○七百首歌中
月影のよきみが崎にゐる千鳥さやけきあとはよるもみつべし　權僧正公朝

○太宰任にて下りける時ゆふさきにてよめる（播磨）
神のますうら〳〵ごとにこぎ過ぎてかけてぞ祈るゆふ崎の松　太宰大貳高遠卿

○題不レ知（ゆらのさき、紀伊）
萬九 朝ぼらけこぎ出でてわれはゆらの崎つりする蜑をみて歸りこむ　讀人しらず

○建保三年名所百首中
櫻さく山には春もなかりけりゆらのみなとのあけぼのの空　順德院御製

花鳥の匂ひも聲もさもあらばあれゆらのみ崎の春の日ぐらし　前中納言定家卿

日にみかき風に波よるたまの緒のゆらのみ崎に袖なびくなり　俊成卿女

○題不知（美胡之、相模）
萬十四 鎌倉のみこしの崎のいはばえの君がくゆべき心はもたじ　讀人しらず

○同（みうらさき、相模）
萬十四 しはつきの三浦崎なるねつこ草あひみずあらばあれ戀ひめやも　同

○同（みぬめのさき）
萬三 島づたひみぬめの崎をこぎまへばやまと戀しく鶴澤になく　同

○千五百番歌合
波かくるみぬめの崎の友千鳥たつかとすればまた來なくなり　前大納言兼宗卿

○爲家卿家百首（見そめのさき、大和）
露ながらあだにをらすなわぎもこをみそめの崎の秋萩の花　従二位家隆卿

○家集（みかほのさき、下野）
萬代　新千旅
いしふまぬあその河原に行きくれてみかほの崎にけふや泊らむ　正三位知家卿

○雜歌中（みつのさき、攝津）
萬三
みつの崎波をかしこみこもりえの舟こぐ君かゆくかの島に　人丸

○長歌
萬八
たつのつまよひ　なにはがた　みつのさきより　おほふねに
まかぢしげぬき　笠　金村

○千首歌（三わがさき、三輪、紀伊）
三輪か崎荒磯みえずかくるてふ波よりまさる袖やくちなむ　民部卿爲家

○題不ㇾ知
萬七
三輪が崎荒磯もみえず波立ちぬ何處より行かむよき道はなしに　讀人しらず

○海邊千鳥
三輪が崎夕潮させばむら千鳥さののわたりに聲うつるなり　權大納言實家卿

○題不ㇾ知
萬三　新勅撰　續古旅
くるしくもふり來る雲か三輪が島さのの渡りに家もあらなくに　長忌寺奥丸

○建仁元年十首歌合、湖上曉霧（三保がさき、近江又駿河）
明けぬるか霧のたえまにみほが崎こぎ離れ行くをちの釣舟　後法性寺入道關白

○寶治二年百首、湖月
あふみがたみほの御崎の浦風にくもらぬ沖の月をみるかな　衣笠内大臣

○長寛六年八月白河歌合、月判者俊成卿
さゞ波やおほつの宮に月すめばみえこそわたれみほが崎まで　資隆朝臣

○御集中、秋海
古來歌
きよみ潟夜舟こぎいでてみほが崎松の上ゆく月をみるかな　中務卿御子

○題不ㇾ知（次歌の次か）
萬六
おくれにし人を思はじしでの崎ゆふとりしでてすまむとぞ思ふ　屋主眞人

○六帖題（しでのさき、四泥、伊勢）
新六三
けふは又たがみそぎとかしでの崎ゆふとりしでて波もこすらむ　正三位知家卿

○同
萬十七
しぶたにの崎のありそによする波いやしく／＼に古へ思ほゆ　讀人しらず

いく連ぞすゞのみ崎をふりすてゝこしなる里へ急ぐ鴈がね　法橋顕昭

〇承安二年広田社歌合、海上眺望（すゞのみさき、國未勘）

追(せ)門(と)

大島やせとのしほあひをこぐ舟の梶とりあへぬ戀もするかな　惠慶法師

〇家集、雜歌中

都にていかに語らむむしあけのせとの入江の松のたえまを　權大納言定（賢イ）宗卿

〇むしあけのせと（備前又土佐）

此の歌はかんたちめあまたいつくしまへまゐる事ありけるにうしまどのとまりにて人々歌よみけるによめると云々

むしあけのせとの曙みるをりぞ都のことも忘られにけり　平忠盛朝臣

此の歌備前守にて下しける時にむしあけといふ所のふるき寺のはしらにかきつけ侍りけると云々

契らねどよその逢瀬をたのむかなむしあけのせとの松の嵐に　後鳥羽院御製

〇十首御歌、舟中旅泊

むしあけのせとの汐あひをこぎくれば雲にかくるゝ淡路島山　民部卿爲家

〇貞應三年百首

萬十二　はや人のさつまのせとを雲居なす遠くも我はけふみつるかも　長田王

〇題不知（さつまのせと、讃岐）

家　きりのまにあかしのせとに入りにけり浦の松風音にしるしも　清輔朝臣

〇久安百首（あかしのせと、播磨）

夏のよをあかしのせとの波の上に月ふきかへせ磯の松風　後京極攝政

〇仙洞影供、海邊曉月

萬三　燈火の明石のせとに入る日にか漕ぎ別れなむ家のあたりみて　人丸

〇旅歌

○貞應三年百首（牛窓、備前）
牛窓やしほと風とのあひおひにはやく過ぎぬるせとの舟人　民部卿爲家

○家集、夏歌（むろのうらのせと播磨）
むろの浦のせとのはや舟波たてて片帆にかくる風の涼しさ　信實朝臣

○題不レ知
萬十二
むろの浦のせとの崎なるなき島の磯こす波にぬれにけるかも　讀人しらず

○家集、海路（みなとのせと、未勘國）
ひばかりは湊のせとにたててけりはやこぎ出でよとさの友舟　六條院宣旨

○六帖題（いり海のせと、未勘國）
新六三
いりうみのせとの崎なるたかいはに白波こしてあるゝ汐風　民部卿爲家

○堀河院御時百首（あはぢのせと淡路）
大島や淡路のせとのふきあけにのぼりくだりに片帆かくらむ　中納言匡房卿

○貞應三年名所百首歌
淡路島ゆきおふせとのしほ崎にやすくもわたる友千鳥かな　民部卿爲家

渡

○永觀元年一條大相國家障子繪歌（しかすがのわたり、志賀須香、參河）
行き通ふ舟路はあれどしかすがの渡りはこと（あと家）もなくこそありけれ　順

○家集
いづ方によりて渡らむしかすがの手向の神にまづやつげまし　能宣朝臣

○名所歌中
雲葉
嬉しきはけふしかすがのわたりにて都いでたる人にあひぬる　讀人しらず

○題不レ知（懷中）
あひみつゝ猶おぼつかなみやぢ山こやしかすがの渡りなるらむ　同

○祐子內親王家菖闘歌合
わたし舟ゆたのたゆたにしかすがは旅人わたす渡りなりけり　同

しかすがの遠き渡りにおなじくはなどやつはしを渡さざりけむ

○爲忠朝臣三河國名所歌合、志賀須加渡
思ひ出でて天津少女の戀しきはなほしかすがの渡りなりけり　藤原道經

○建保三年名所百首
うしとてもなほしかすがの渡守しるべの波のゆくへ敎へよ　僧正行意

○堀河院御時百首（くきの渡、攝津）
葉がへせし葦もまばらになり（枯れイ）果ててくきの渡りは寂しかりけり　修理大夫顯季卿

○家集（こまの渡、山城）
いしかはやはなだのおびの中たえばこまの渡りの人に語らむ　俊頼朝臣

此の歌は山城守なりける人の女をある人しのびて物申すときこえける
を程なくかれ〴〵になりぬとききてつかはしけると云々

○名所歌中
扶桑 やましろの駒のわたりの紅葉ばをから錦とや人はみるらむ　藤原爲眞

○御集（こふのわたり）
萬六 都人ありやとゝはば津のくにのこふのわたりにわぶと答へよ　法性寺入道關白

○家集、こふのわたりと云ふ所にて
尋ねつる心もしらで津のくにのこふとも人のつぐるなりけり　前大納言公任卿

○題不レ知（ありその渡、越中）
萬十 大崎のありその渡りはふくずの行きかたなくやこひ渡りなむ　讀人しらず

○うちの渡（山城）
萬十一 ちはや人うぢの渡りの早き瀨にあはずありとも後（のち）もわがつま

○家集（とばの渡、山城）
山城のとばのわたりをうちむれていなばの風に思ひこそやれ　重之

○同（よどの渡、山城）
扶桑 あやめ草尋ねてぞ引くまこもかる淀のわたりのふるき沼まで　祭主輔親卿

○同（よどの渡、山城）
淀わたり雨にはいとゞまこも草誠にそれをねになかれにし　和泉式部

○承久元年内裏歌合、渡紅葉（みつのわたり、攝津）
もみぢ葉のうつろふみつの渡もり風はゆききに厭ふのみかは　前大納言伊平卿

○百首歌
春の夜の夢のうき草根ぞたゆる憂世をさそふみつのわたりに　從二位家隆卿

○同
村雨にうすくもかけて行く舟のこがのわたりの夕暮のそら　同

○渡霧

からろおす音もほのかにゆく舟のこがのわたりの秋の夕霧　鎌倉右大臣

萬代　霧深きこがのわたりの渡し守きしのふなつき思ひさだめよ　西行上人

此の歌はむさしの國と下野のくにとの中にあるこがの渡りすとてきり深かりければよめりと云々

○題不レ知

萬十四　枕がのこがの渡りのからかぢの音高しもなねるへこゆゑ（くカ）に　讀人しらず

○閑居百首桐歌（せたの渡、勢多近江）

たなかみの山の木のはにしぐれしてせたの渡りは秋風ぞふく　中務卿御子

○題不レ知

日本紀　あふみのうみ瀨田の渡りにかつぐ鳥たなかみ過ぎてうぢに捕へつ　讀人しらず

○永久四年百首、船（やばせの渡、近江）

にほてるややばせの渡りする舟を幾度みつゝせたの橋もり　源兼昌

○家集（まがきの渡、陸奥）

陸奥のまがき渡りはおしなべてわかめ刈りにと蜑も行きかふ　大納言師氏卿

○古渡

古來　船人のつしまの渡り波たかみすぎわづらふやこの世なるらむ　中務卿のみこ

○三野連入唐之時

萬一　ありねよし對島の渡りわだ中にぬさとりむけてはや歸りこね　春日藏首老

○建長八年百首歌合

こゝぞこのつしまのわたり浪荒しいかに梶とり心ゆるすな　從二位行家卿

○題不レ知

古來　こぎいづるつしまの渡り程とほみ跡こそかすめゆきの島松　藤原基綱

○同（武庫渡、攝津）

萬十七　たまはやすむこの渡りに天傳ふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ　讀人しらず

○旅歌（香椎渡、筑前）

續古旋　雲葉　船出する沖つしほざる白妙のかしひのわたり波高くみゆ　中納言家持卿

○備中國をかの渡と云ふ所を夜ふかくすぐとて

萬代　備中　有明の月の夜ふかくいでぬれば岡のわたりに鴈ぞなくなる　大江嘉言

萬代
君を我かたのの里に賴めおきて幾夜みなせのわたりしつらむ　藤原憲盛

沖津風のどかになれや霞たつみほのわたりの春の曙　光俊朝臣

あまそぎに雪ふり積る舟をみてわたりがたきは岩瀨なりけり　讀人しらず

風さむみ冬はいはせの渡りにてをちの舟まつ音ぞわりなき

人家
五月雨はいはせのわたり波こえてみやさき山に雲ぞかゝれる　藤原基廣

夜をこめてわだの渡りをこぎくれば淡路の島に月ぞかゝれる　藤原季（尹イ）明

家集
都出でてよそになるかの渡り舟（マヽ）いづれの方をさして行くらむ　祐擧

家集
あけぬとて心みまではきにけれどまだ深き夜の渡りなりけり　清正

此の歌は近江へくだりけるに心みの渡りといふ所をきけるに夜いとふかしと云々

うちはへてかこの渡りにひく綱の行方は君にまかせたらなむ　前大納言隆季卿

歌苑抄
身をすててかこの渡りをせしときも君ばかりこそ忘れざりしか　大僧正快修

此の歌はこしのかたに修行しありきて歸りてのちもとあそあびけるわらはのもとへ遣はしけると云々

いたづらにやすく過ぎきぬ山伏のかこの渡りもあればあるよに　衣笠内大臣

わが戀はかこの渡りのつなでなはたゆたふ心やむ時もなし　鎌倉右大臣

○承安二年閏十二月東山歌合、隔レ河戀（みなせの渡、攝津）

○建長七年顯朝卿家千首、渡霞（みほの渡、未勘國）

○天喜元年八月顯家朝臣家歌中國名所歌合、石西渡（いはせの渡、武藏）

○五月雨を

○安元元年閏九月歌合、戀依月增（わだの渡、未勘國）

○筑前なるかのわたり（筑前）

○（こゝろみの渡、近江）

○久安百首（かこのわたり、伊勢尾張と中也）

○かこのわたり

○御集、戀歌中

○家集
ふけぬとも今宵かへらむあひ思ふ人はかたのの渡りなるらむ　能因法師

○同（かつらの渡、山城）
望月のこまひきたててひやしけるこゝや桂の渡りなるらむ　安法法師

○岡屋入道攝政家百首（袖渡、陸奥）
秋風
なみだ川あさき瀬ぞなき陸奥の袖のわたりに淵はあれども　従二位行家卿

○家集
新後拾戀一
みちのくの袖のわたりは涙川心のうちにながれてぞゆく　相摸

○百首歌中
しるらめや袖の渡りはしぐれしてみちの奥まで深き思ひを　寂念法師

○（みわたり、伊勢）
みわたりの礒わのうづち（へぢイ）なほ深し朝みつ潮のからきけふかな　鴨長明

此の歌伊勢記云みわたりと云ふ所あり潮干ぬればこなたのさきよりかなたのさきへなかばみちぬる時はめぐりて松崎と云ふ所をわたるしほみちとくぬればこれらをばえわたらで猶遠くめぐりていはぶちといふ所をわたるなりしほひにしたがひて渡りの三所にかはればみわたりとは云ふなりと云々

○喜多院入道二品親王家五十首（すだの渡、下總）
はるぐ＼とすだの河原を朝ゆけばかすめる程や渡りなるらむ　正三位季經卿

○永久四年八月雲居寺歌合、霧
夕霧にすだのわたりはみえねども舟人よばふ聲きこゆなり　源經兼朝臣

此の判者基俊云左歌すがたはあしうも侍らぬにすだのわたりとよみたるぞなさけなき心ちするにやこれは業平朝臣のいざこととはむとよみてかれこれかれいひになみだおとす所なりすみだ川の程におりゐてと

ぞかけるよしそれに思ひそめて覺ゆるにやあらむと云々

たれにかはみきと語らむ玉拾ふしらゝわたりの秋のよの月　鴨長明

岸

うらさむくしぐるゝ夜半の旅衣岸の埴生にいたくにほひぬ　殷富門院大輔

雲の波ひとつにみゆる沖の舟あまつ岸にぞこぎかへるめる　權大納言實家卿

結の内にうき世の岸を離れてやしらぬくすりの名をば尋ねむ　前中納言定家卿

萬二
岩代のきしの松がえ結びたり人はかへりてまたみけむかも　意吉丸

萬代
岩代の岸に年ふるむすび松のとくべくもなき戀もするかな　中院入道右大臣

岩代のきしの松影としふりておなじ緣にむすぶ苔かな　後九條内大臣

新六三
河岸にしがらむ竹のわれくだけ我が世やかくて沈みはてなむ　民部卿爲家

萬代
姬小松みむろの岸にひきつれて千年を祈るけふのたふとき　大僧正智淨

五月雨は日數ふれどもわたのべの大江の岸はひたらざりけり　隆源法師

五月雨はおほえの岸に水こえてこやの軒端に舟つなぎけり　俊惠法師

初春をくまなくてらす影をみて月にまづしるみもすその岸　西行上人

住吉の松の千年の君が代をうれしくのみぞみしまえの岸　信定卿

○家集（しらゝわたり、紀伊）
○嘉應二年住吉社歌合、旅宿時雨
○同（あまつきし）
○由來生・老・死三病長相隨、除勸無常心人間無藥治（うき世のきし）
○見結松
○永久四年四月鳥羽院歌合、戀
○寶治二年百首
○しがらみ
○大僧正覺讃八十賀しける時よめる也（みむろのきし）
○堀河院御時百首（おほえのきし大江、攝津）
○後法性寺入道關白家百首
○家集（みもすそのきし、伊勢）
○後三條院延久住吉行幸の時（みしまえのきし、攝津）

○五社百首、歳暮（はままつのきし、未勘國）
○千五百番歌合（まきもくの、大和）
○家集（住よしのきし、攝津）
○寶治二年百首
○題不レ知
○家集
○家集
○家集、ぬさ
○同（波かけのきし、筑前）
○（花ぞののきし、筑前）
○十月大井河紅葉見に人々まかる所（となせのきし、山城）
○題不レ知（みなみのきし）
○（松がえのきし、未國）

けふごとにいくとしなみを過ぎぬらむつもりの浦の濱松の岸　皇太后宮大夫俊成卿
まきもくの岸の小松に雪ふればひばらが末に雲ぞかゝれる　後鳥羽院御製
波に宿る月を汀にゆりよせてかゞみにかくる住吉のきし　西行上人
住吉のきしかたとほき松がねにをのれもふりて殘る苔かな　前大納言基良卿
すみよしの峯に年ふるこけむしろしきつの浦の波やかくらむ　土御門院小宰相
住吉の岸の岩ねにむす苔はいくらばかりの年かへぬらむ　鷹司院輔師（衍イ輔イ）
萬三 すみよしの岸の松原そのかみに我が大君の御ゆきしところ　角丸
萬六 白波のちえにきよする住吉のきしのはにふに匂ひてゆかな　車持千年
すみよしの岸による〻忘れがひせめての戀にけふぞ忘る〻　元眞
なごろたつあはぢのとより住吉の岸に向ひてぬさたてまつる　權僧正公朝
松のねもあらはれにけり年をへていかでくづれぬ波かけの岸　祐擧
花園の岸をあやぶみ風はなほよそにふけひの浦はありとも　同
大井川かは邊の紅葉散らぬまはとなせの岸にながるしぬべし　惠慶法師
柞葉 むろとより南の岸につたひけむ人の跡とふ波のうへかな　法印頁守
もみぢ葉をそむる時雨はふりくれど緑ぞまさる松がえの岸　皇太后宮大夫俊成卿
此の歌は悠紀方御屏風松賀江岸松柳（樹イ）茂盛也、山有二紅葉一所

洲

〇家集、参籠中（うらのおきす）
さよ千鳥波や高けむかざはやの浦のおきすに立ちゐなくなり　正三位知家卿

〇六帖題（みなとす）
新六一
たづのなく夕潮騒の湊洲にもかゝり小舟もいまやよすらむ　衣笠内大臣

〇洞院摂政家百首、眺望（ながれす）
はるかなる湊のおきのながれすにしほ風かけてとまる白波　民部卿為家

〇家百首歌（しらす）
玉秋下
浦とほきしらすの末のひとつ松まだ影もなくすめる月かな　同

〇家集、はまたの浦にてよめる
さまざまのなかすの姿あらはれて潮干の入江水ぞ少なき　民部卿雅有

〇月前千鳥を
萬代
有明の月かげさむみ難波がたおきの白洲に千鳥なくなり　俊恵法師

〇[illegible]中
現集
みさごゐるおきの白洲に潮こえてゆふ波あるゝよさの浦風　道供（洪イ）法師

〇同[illegible]入道摂政家百首、洲鶴
[illegible]がれのひがたの浦の離れ洲にたづぞなくなる友よばふらし　民部卿為家

〇海道宿次百首、しらすが
現存六
まさご越す浪かとみれば数しらず鷗むれゐる沖のはなれす　参議為相卿

〇家集（おきつ洲）
現存六
浮寝するうなかみがたの沖津洲にたづぞ鳴くなる夜や更けぬらむ　正三位知家卿

淀

〇家集（おほ井のよど）
現存六
夜もすがら嵐の山に風さえて大井のよどにこほりをぞしく　西行上人

〇十首歌合に、寄レ旅恋（たかせのよど）
続後撰一
こもまくら高瀬の淀にさすさでの借や戀路に萎れはてなむ　宗長朝臣

○建保仙洞百首中（六田のよど、大和）
いまよりはちるもをしまじ吉野川むつだの淀の花のしき浪　同

○西園寺入道攝政大臣家三千首歌中
柳原このしたかげの吉野河むつだのよどにけふも暮しつ　同

○家集
ふしつけしむつだの淀の朝冰とくれば袖のぬれまさるかな　藤原孝善朝臣

○題不レ知
萬七
音にきき目にはまだみぬ吉野川むつだの淀をけふみつるかな　讀人しらず

○同
同
いましくは見めやと思ひしみ吉野の大河淀をけふみつるかな　同

瀧

○延喜十七年御屏風
松の音（おと）をことにしらぶる山風は瀧の絲をやすげてひくらむ　貫之

○題不レ知
萬十二
かみのごと聞ゆる瀧の白波のおもしる君がみえぬこの頃　讀人しらず

○五社百首、苔
おちたぎつ瀧のうちはの岩の苔わが袖のうへにいづれ露けし　皇太后宮大夫俊成卿

○二條關白家にて松陰浮レ水と云ふことを
石ばしる瀧のそとものそなれ松影を並べていく世へぬらむ　俊頼朝臣

○家集
七夕のおりながしける布なれや空よりおつる瀧の景色は　同

○音羽瀧のもとにて
わきかへり浪路へさそへ瀧つせにたえてもくだる岩枕かな　同

○家集、冬歌中
續後拾冬
みなかみにこほりむすべば岩そゝぐ瀧の白絲みだれざりけり　惠慶法師

○文應元年毎日一首中
いかにせむ瀧の岩瀨の瀧枕みをはやながらくだりゆく世を　民部卿爲家

○六帖題
新六一
五月雨にたきもあまりの水走りところも（せ新六）おかぬ岩はざまかな　信實朝臣

寳六三
山はゝきびしくたゝむ岩門にとしへてきれぬ瀧の絲かな　　信實朝臣

みなせ山せきいれし瀧の秋の月思ひいづるも涙なりけり　　從二位家隆卿

雲居より聲たかさごにおちたぎつ流れぞ岩の衣なりける　　俊頼朝臣

此の歌りんけんほふしの大原の山里にまかりて瀧のもとにて飛瀧音淸

といへることをよめると云々

雲葉
昔よりなにがれたる岩瀧の水のしらいと幾世經ぬらむ　　左京大夫顯輔卿

奧山の谷の岩たきみをさらすわれてくだけてこふとしらなむ　　民部卿爲家

家傳歌
山城のいざなみの瀧いざなへどいざともいはずすぐせなければ讀人しらず

早くより水のみなかみ深めつゝいなせもみえずいな淵の瀧　　正三位知家

誰故になにくだくらむいな瀧によせくる玉のふたつなき身を　　法印實伊

此の歌列者光俊朝臣云いなたきによする波はふたつなしといふ歌なと

りてよせくるたまのふたつなき身なと侍ることさらちからいりてすが

たうるはしくみえはべると云々

當代
みなかみに紅葉ちるらしはつせ川瀧の白絲そめかけてけり　　素覺法師

雲かゝる山の高峯のゆふだちにとなせの瀧の音まさるなり　　民部卿爲家

石ばしるとがはの瀧も結ぶ手にしばしは淀むものとこそきけ　　俊頼朝臣

（五十首歌（たき、みなせ山）

（永治大書會侍房國

（寬元元年結題百首

（題不知（いざなみの瀧、山城）

○寳治二年百首、寄淵戀（いなぶちのたき、紀伊或大和）

○建長八年百首歌合（いなたき、紀伊）

○題不知（はつせ川のたき、大和）

（文應元年毎日一首中（となせのたき、山城）

○殿下にて人をうらむるといへることをよめる（とがはのたき、未國）

○建久二年右大將家由波四十七首（りうもんのたき、未國、大和たきのかど歟）

りうもんのたきにふりこし雲ばかり雨にまがひてちる櫻かな　前中納言定家卿

○家集

雲とみえて光まどはず（日をまどはすはイ）流れいでて瀧のかどよりきける（ゆイ）水かも　糸性法師

○最勝四天王院名所御障子（ぬのびきのたき、攝津）

布引のたきの白絲夏くればたえずぞひとの山路たづぬる　前中納言定家卿

いくよともしられぬものは白雲の上よりおつる布引の瀧　從二位家隆卿

○千五百番歌合

岩づたふ（雲葉）山の櫻のしきなみに風のかけたるぬのびきのたき　後九條内大臣

○百首歌

岩走るおとはこほりにとぢられて松風おつるぬのびきの瀧　寂蓮法師

○百首歌、詠閑二瀧水一

秋もいまだ遠山ひめの高峯よりなにゆゑさらすぬの引のたき　民部卿爲家

○貞永二年六月名所百首、夏歌

津の國のなにはをとめのいとまなみこや立ちぬはぬ布引の瀧　同

○嘉祿二年百首

さらしけるかひもあるかな山姫の尋ねてきつる布引の瀧　宇治入道關白

○御集

たちぬはぬ紅葉のころもそめいでてなに山ひめの布引の瀧　順德院御製

○建保三年名所百首御歌

くれ竹の夜のまの雨にあらひほして朝日にさらす布引のたき　入道前太政大臣北山

○布引瀧の竹を

さゞなみの大やまもりの手向とやしらゆふかくる布引の瀧　澄覺法親王

○布引百首御歌

いり日さすとよはた雲は布引の瀧のうへよりくれかゝるみゆ　同

布引の瀧みてけふの日はくれぬ一夜やどかせ峯のさゝたけ　同

ふだらくをしらはな山ときくなべによそへてみつる布引の瀧　同

布引のたきつ瀬かけてなにはづや梅が香おくる春の浦風　同

○布引瀧を
○千五百番歌合（おとはのたき、山城或近江）
○弘安三年内裏百首、瀧水
○弘安元年百首、雜歌
○六帖題（おとなしの瀧、陸奥或山城紀伊）
○戀歌中に
○建長七年顕朝卿家千首歌
○家集
○題不レ知（歌中）
○千首歌（龜尾、山城）
○建長七年顕朝卿家千首歌
○三百六十首中
○建長六年百首歌合 八イ

布引のたかねの瀧の白浪はくも居にさける花かとぞみる　道覺法親王

萬代 たちかへりいくたの森のいくたびかみれどもあかぬ布引の瀧　後久我太政大臣

手に結ぶ音羽の瀧になづさひて涼しくなりぬ松の下風　慈鎭和尚

みなかみやくもゐなるらむあまひこの音羽の瀧ぞ空に聞ゆる　從二位行家卿

岩がねにいまもやのこる音羽川せきいれし瀧の水莖のあと　法印定圓

新六三 おちたぎつ水の白玉ひとゞけども名は音なしのききぞふりぬる　正三位知家卿

石間 小野山の上よりおつる瀧の名の音なしにのみぬるゝ袖かな　西行法師

音なしの瀧の白玉こゑはせでもゆる螢のなみだにやかる こイ　大宮院權中納言

新拾遺中 都人きかぬはなきをおとなしの瀧とはなどかいひはじめけむ　能因法師

此の歌はくりはらの郡にてそこに有るものこれおとなしの瀧に侍り又

河は昔川といひ侍るといへばよよめると云々

いかにしていかによるらむをの山の上よりおつる音なしの瀧　讀人しらず

かめの尾のたぎつ岩根にむす苔の上なる玉は千世の數かも　民部卿爲家

春たてば冰とけゆく瀧の上のかめのをのへぞまづ霞みける　光俊朝臣

かこやまの瀧のこほりもとけなくに吉野の峯ぞ雪きえにける　好忠

いづる日の影ぞのどけきかこ山の瀧の冰もいまやとくらむ　藤原伊嗣朝臣

○芳野離宮幸の時（よしのの瀧、大和）
萬六　初瀬女のつくるゆふ花三吉野の瀧のみなわにさききたらずや　笠金村

○百首御歌
泊瀬女の袖かとぞ思ふみよしのの瀧のみなわの波のゆふ花　後鳥羽院御製

○御たけに詣づとて吉野川のほとりにて
萬代　よしの河いはの井ぜきにわきかへりしらゆふ花や瀧の玉水　俊頼朝臣

○美濃國多藝行宮にて
萬六　たとがはの瀧をきよみか昔より宮づかへけむ瀧ののうへに　中納言家持卿

○同
萬六　昔より人のいひくる老人のわかゆてふ水ぞ名におふ瀧のせ　大伴宿禰東人

○寶治二年百首（たつたの瀧、大和）
春もなほ川波さえて立田山たきのうはてにみゆきふるらし　後九條内大臣（従二位家隆卿イ）

○建保二年百首（なちの瀧、紀伊）
雲かゝるなちの瀧つせ風ふけばふるきのきばに玉ぞくだくる　従二位家隆卿（同イ）

○御集、なちの瀧を
み熊野のなちのを山に引くしめのうちはへてのみおつる瀧かな　鎌倉右大臣

○七百首歌中
瀧の音に松の嵐もうづもれぬなちのをやまのあきの夕暮　權僧正公朝

○正治二年百首（ながすの瀧、未國）
君が代はながすの瀧に年をへてちとせかさぬる鶴のけ衣　源師光

○家集四季歌中（なるたき、山城或紀伊）
なる瀧のおちくる聲の音なきは冰のくさびさしてけるかな　太宰大貳高遠卿

○三百六十首中
萬代　なる瀧の岩間のこほりとけぬらし春の初風夜半に吹くなり　好忠

○（やそせのたき瀧）
すゞか川やそせの瀧の音なきはこほりやせきて結びこめけむ

○六帖題、庭（ふるの瀧）
秋の野に庭をばつくれいまもかもふるの瀧みる君もこそくれ　權僧正公朝

○堀河院御時百首、霧（衣の瀧、山城或未國）
石ばしる音はかくれず夕霧のころもの瀧をたちこむれども　中納言國信卿

○衣の瀧にまかりて
明玉　家集　秋ごとの紅葉の錦きてみるを衣の瀧といふにやあるらむ　赤染右衞門

古來歌
岩がねに天くだりけるきよ瀧はいづれの神の流れなるらむ　前大僧正隆辨

山櫻人しらぬともきよ瀧の底なるはなやながれいづらむ　中務

たのみくる心も涼しきぶね川岩ねをこゆる瀧のしらたま　成家

一字抄
清水のこほりをわくる瀧の絲はいとゞよるこそ結ぼほれけれ　永源法師

流れてとおもふ心の深きにはなにかみのおの瀧となるべき　讀人しらず

忘れては雨かとおもふ瀧の音にみのおの山の名をやからまし　津守國助

みやの瀧うべもくれゆく春風に落つる白泡やさくらなるらむ　後九條内大臣

新深窓
みなかみに櫻ちるらし宮崎の水にきえせぬ雪ながれつゝ　源兼昌

身に積ることばの罪もあらはれて心すみぬるみかさねの瀧　西行上人

此の歌家集云なちに詣で侍りける時三重の瀧をながみけるにことにた

ふとく覺えて三業の罪もすゝがるゝ心ちしければと云々

六三
君こずばたれに見せまし白河のせゞに渦まく瀧のしらたま（瀧イ）　讀人しらず

いひしらぬ道にさきだつ涙こそしのぶの山の瀧となるらめ　後九條内大臣

孫姫式　袖中抄
わが君のながるゝ瀧のむせぶ聲聞えやすらむしひのをのたき　讀人しらず

もがみ川たきの白絲くる人のこゝによらぬは嵐とぞ思ふ　重之

此の歌詞云もがみ川といふ所はいといみじくおもしろき所なればまか

（名所歌、清瀧（きよ瀧、山城）
（家集
（文治二年貴丹歌合（きよみねのたき、山城）
（題不知（清水の瀧、山城）
（同（みのおのたき、攝津）
（勝尾寺にまうでて
（御集、瀧落花
（家集
（同（宮崎の瀧、紀伊）
（題不知（白川の瀧、山城）
（正治元年百首（しのぶの山の瀧、陸奥）
（題不知（檜峰、山城）
（家集（もがみ河の瀧、出羽）

○同
○建長八年百首歌合
○六百番歌合、鴫
○正治二年百首
○弘長元年百首
○六帖題
○六帖題、さは
○寛喜元年女御入内御屏風、江邊寥蘆霜結二鶴毛一
○喜多院入道二品親王家五十首（さは、なにはがた）
○駿河國歌（なる澤、駿河）
○正治二年百首

りてゝ見侍るとてと云々

もがみ河おちくる瀧の白絲は山のまゆよりくるにぞありける　同

春はいま霞ぞわたるもがみ川瀧のこほりもとけやそむらむ　左近中將具氏卿

此の歌判者光俊朝臣云もがみ川の瀧先達聊不審申す事侍りしかども作者定存知侍らむ不能難申すと云々

澤

波よする澤の蘆邊をふしわびて風にたつなるしぎのはねがき　後京極攝政

風渡る春の野澤のさわらびは波にまかせてをるにぞありける　宜秋門院丹後

つめばかつあらはれにけり眞砂行く澤のみかげにおふる若菜は　從二位行家卿

新六二
年へたる澤邊の古きむくいあれば鳩ゐる枝をまづぞ折りける　光俊朝臣

今年はやよそぢもすぎぬかま蒲をきる澤邊の水に袖ぬらしつゝ　權僧正公朝

あしたづの久しき影もあらはれてたてる澤べによする白波　民部卿爲家

なにはがた澤邊をたちてはるゞゝと綠の空に遊ぶあしたづ　三條入道大臣

萬十四
さぬらくは玉の緒ばかりこふらくはふじの高峯の鳴澤のこと　讀人しらず

ふる雪に峯の煙は殘れども富士のなる澤こほりゐにけり　二條院讃岐

いかばかりふりつむ雪のたかければきえずみゆらむふじの鳴澤　法　眼　全　員

此の歌判者清輔朝臣云富士の鳴澤いかなる事としれるにか富士の峯に池ありて常に波だつ所なりそれをきえずみゆるとよめるおぼつかなし煙などならばさも云ひてむ又富士の峯には登り付く人なし誰にてはなる澤の有無見ゆべからずと云々

春日ののゆきげの澤に袖ぬれて君が爲にとこぜりをぞつむ　仲　實　朝　臣

神山やおほたの澤のかきつばた深き賴みぞ色にみゆらむ　皇太后宮大夫俊成卿

いかで猶しばしも人に住吉のあさきは水のすゑはたゆとも　參　議　雅　經　卿

さやかなる月日もそへていとゞしく光ぞまさる玉影の澤　能　宣　朝　臣

秋の鴈風にきほひてこしぢよりたれをたのむの澤になくらむ　大　藏　卿　有　家

うりふのの澤にすみけるをし鳥は雲居に通ふ心あるらし　三條院女藏人左近

さをしかのいろ野の澤の秋風に寒きゆふべは妻をこひつゝ　常盤井入道太政大臣

春雨のふるのの澤の忘れみづありし昔やおもひいづらむ　民　部　卿　爲　家

水たまるいりぬの澤に影とめてあがる雲雀も行くかたぞなき　同

日をへつゝみつのの澤のまこも草あをめば春の駒ぞいばゆる　橘　　能　　元

五月雨ははら野の澤に水みちていづくみかはの沼の八橋　西　行　上　人

○永安元年八月十五夜法圓寺（坊イ）、會
○堀河院　時百首（ゆきげのさはかすがの）
○文治六年五百首（おほたのさは）（社イ）
○千五百番歌合
○家集（たまかけの澤、未國）
○建保三年秋十五首歌合、秋鴈（たのむのさは）
○家集（うりふののさは、山城）
○同集（いろ野の澤、未國）
○建保四年毎日一首中（ふる野の澤、大和）
○岡屋入道攝政家百首、澤雲雀
○天仁二年十月顯季卿家歌合、春駒（みつののさは）
○百首歌

風雅雑中
こゝのへの澤になくなる蘆たづの子を思ふ聲は空にきこゆや　藤原基俊
○光宗竪義請望とて（こゝのへのさは）

現存六
こゝのへの澤邊のあやめねを深み長くや引かむ伴のみやつこ　正三位知家卿

ふかさは田汀がくれのまこも草昨日菖蒲に引かれざりけり　和泉式部
○五月五日ちまき人のもとにやるとて（ふかさは）

かみなびの山の澤水きみなれや淺ましくのみ見えわたりぬる　平兼盛
○家集、いとつれなかりける女に（神なびの山のさは）

井

新六二
いかにせむ井の底にある大空のわが身ひとつにせばき憂世を　民部卿爲家
○六帖題、井

新六二
わきてその曉契る法の井は流れくむ身となるがたふとさ　光俊朝臣
○同

新六六
妹がくむてら井の上のかたかしの花さく程に春ぞなりぬる　衣笠内大臣
○同

萬十九　六帖
もののふの八十のいもらが汲み迷ふ寺井の上のかたかしの花　讀人しらず
○題不レ知

新六二
岩壺にたゝふばかりの山の井のつゝがなくても世を過さばや　衣笠内大臣
○六帖題（山の井、山城）

結ぶ手にきえぬおもひや山の井の流れにすだく螢なるらむ　慈鎭和尚
○百首御歌　首イ

明けはてばいざもらしてむあふ坂のせきに鳥なく山の井の水　同
○南海百番歌合

沈む身はたゞ山の井の底なれやうはくむ人に恐れてぞすむ　信實朝臣
○建長八年百首歌合

位山高くのぼらむと思ふかなわが三井にすむ蛙なれども　權律師教智
○新羅社歌合、述懐（三井）　合イ

さゞ波や三井の玉水くみあげていたゞく末をわれもながさむ　權僧正公朝
○百七十首歌に

○水

○建長八年百首歌合

現存六
大君の春の岩水そなふとてたが板井にかしめさしつらむ　正三位知家卿

○寶治二年百首歌、山家水

さゆる夜の風もおよばぬ底なればきいた井や冰らざるらむ　右近中將具氏卿

山影に里とほからぬ谷川やいた井の水のゆくへなるらむ　後九條内大臣

○堀河後百首、雜

堀河後百首
たがに汲む遠井の水のかけられて片菁しなる戀もするかな　源仲正

○毎日一首中（かげのいは井）

常磐木のかげの岩井の忘れ水夏をおぼえぬ名にこそありけれ　民部卿爲家

○建長五年毎日一首中（しばの井）

山里のしばのかけ井に月もりて眺めじとてもねられやする　同

○寶治二年百首、山家水（とこ井）

明玉
かきやれば庭に流るゝ山水の淀ないしまをとこ井にぞくむ　信實朝臣

○洞院攝政家百首（まゝの井、間聞、上總）

葛飾やまゝの井づゝの影ばかりさらぬ思ひの影をこひつゝ　光明峯寺入道攝政

○題不知

萬九
葛飾のまゝの井見ればたちならし水を汲みけむてこなしぞ思ふ　蟲丸

○同（ゆづるはの三井、弓弦葉、大和）

萬二
古にこふる鳥かもゆづるはの三井の上より鳴き渡り行く　額田王

○同（山のべのみゐ、伊勢）

山の邊の三井をみがてら神風の伊勢の少女にあひみつるかな　讀人しらず

此の歌は和銅五年四月遣長田王于伊勢齋宮之時、山邊御井作歌云々

○家集、夏歌中

神風やいせのをとめの夏衣涼しくむすぶやまの邊の三井　從二位家隆卿

○悠紀方御屏風、玉陵井（近江）

岩間もるたまかげの井の涼しきは千歳の秋をまつ風ぞふく　皇太后宮大夫俊成卿

○題不知、懷中、さかづきの井、上總）

東路にさしてこむとは思はねどさかづきの井に影をみるかな　讀人しらず

○主基方歌、丹波國滑井村、滑井、近江丹波或美濃）

明玉
わきかへりさか井の水もすみにけり大八洲しるみよの初めに　藤原茂明朝臣

○題不知（あすか井、飛鳥、山城）

懐中 あすか井に影宿しつるかりびとは水は寒みや駒にかふらむ　讀人しらず

○百首歌、寄名所戀

いかで猶我が手にかけて結びみむたゞ飛鳥井の影ばかりだに　前中納言定家卿

○千五百番歌合

駒なべてこゝにしばしややすらはむみま草もよき飛鳥井の影　野宮左大臣

○百首御歌

たえ〴〵に影をばみせて飛鳥井のみま草がくれとぶ螢かな　中務卿の御こ

○千五百番歌合（いし井、しがの山、近江又山城）

手にむすぶ石井の水のありてのみ春にわかるゝしがの山ごえ　後京極攝政

○家集、納涼を

ひさぎおふる片山影の石井づゝふみなほしても涼む頃かな　俊頼朝臣

○家集

たかはらの石井の水やあまるらむたつたの山の五月雨の頃　光俊朝臣

○同（關の岩井、近江）

風さむくなりにし日より逢坂の關のいは井にみくさるにけり　好忠

○題不レ知（よしの山井、大和）

象鏡 みよしのの山井の清水いにしへもいまも人には何か汲ませむ　讀人しらず

○（なが井、備中）

同 千歳ふるみつぎそなふるわが君のなが井の水の年へたるかな　同

○千五百番歌合（いさら井、在源氏）

せきとむる心も苦しいざさらばいさら井の水もらしいでてむ　土御門内大臣

○那賀郡曝井歌（さらし井、紀伊）

萬九 みくるすの中に向へる曝し井の絶えず通はむそこにつまもが　讀人しらず

○歌林苑歌合

山影のしづくに濁るさらし井の井づゝも見えず五月雨の頃　素覺法師

○中務卿親王家歌合、納涼

みくるすのなかにむかひて結びあげむうすき衣を曝し井の水　權僧正公朝

○題不レ知（いそしの三井、伊勢）

山の邊のいそしの三井はおのづから錦になして張れる山かも　讀人しらず

○千首歌

五月雨は雲まもみえず山の邊のいそしの三井も水まさりつゝ　民部卿爲家

○六ゝ題

○さくら井こゆる日

○[illegible]六年百首歌合（わすれ井、伊勢）

○[illegible]（きつ井、山城又近江）

○家集（岩代の井、紀伊）

○題不レ知（いづみ井、備中）

○（えのは井、榎葉、大和）

○題不レ知（えのは井、大和）

○家集（ときは井、山城）

○寶治元年八月十五夜名所月

○家集（みやこ井、信濃）

○文治六年五社百首

○百首和歌、祕

○水邊月（醒井、近江）

新六二
花ちりて春はくれにし櫻井のなにだに（さへ 新六）あかで結ぶ頃かな　正三位知家

こえくればたゞおなりけり櫻井と名のみぞ高き所なりける　和泉式部

秋風
涼しさに月もすみけり岩枕こよひぞ夏をわすれ井の水　従二位忠定卿

結びあぐる松井の水は底すみてうつるは君が千世の影かも　藤原茂明朝臣

岩代の玉まつがねの石井づゝ結べる影をまたむすぶかな　鴨長明

家集
園こほり今ぞさかえむいづみ井の君がみよにはたえじと思へば　讀人しらず

催馬樂
かつらぎやとよらの寺の西にあるえのは井にこそ白玉しづく　同

ふりにけるとよらの寺の榎の葉井になほ白玉を殘す月影　鴨長明

やがてわが心ぞうつる常磐井の水に宿れる月ならねども　少將内侍

此の歌は常磐井殿にて月あかき夜人々あそびけるに水に月のやどりたりけるをよめると云々

明玉
みるひともやどかる月も諸共に千歳すむべきときは井の水　後嵯峨院御製

都井ときくに影だに牀しきに水もつらゝになりにけるかな　爲仲朝臣

萬づよも御法のながれたえじとや龜井の水の清く澄むらむ　皇太后宮大夫俊成卿

よろづ世のかめ井の水を結びおきて流れ嬉しき世にもすむかな　慈鎭和尚

家
わくらばにゆきてもみしかさめが井のふるき清水に宿る月影　鎌倉右大臣

○あづまへ下りけるにさめが井といふ所にて

結ぶ手に濁る心をすゝぎなばうき世のゆめやさめが井の水　安嘉門院四條

○海道宿次百首（さめが井）

河となるするゑまで清し岩間よりあまりていづるさめが井の水　參議爲相卿

○玉井

思はずにぬるゝは里の名もつらし結ばですぎむ玉の井の水　同

○名所歌中に、寄二垂井一戀（たる井、美濃）

わが袖の雫にいかゞくらべみむまれに垂井の水のすくなき　同

六一

○題不レ知（ほりかねの井、武藏）

むさしなるほりかねの井の底あさみ思ふ心を何にたとへむ　同

○寶治二年百首

武藏野やほりかねのゐの深くのみ茂りぞまさるよもの夏草　冷泉太政大臣

淺からず思へばこそはほのめかせ堀金の井のつゝましき身を　俊頼朝臣

此の歌皇后宮にて會ありけるに院宣にまゐれどもよほしありければまゐりて戀の心をつかうまつりけると云々

○題不レ知

いかでもと思ふ心は堀金の井よりもなほぞふかさまされる　伊勢

○千五百番歌合（せか井、山城）

まどゐしていかゞ遊ばむ五月雨にせか井の水も岩こえにけり　法橋顯昭

○題不レ知（催馬樂、神樂歌）

大原やせか井の清水手にくみて遊びて行かむ鳥は鳴くとも　讀人しらず

○三百六十首中

大原やせか井のみ草かきわけて折りやたたまし涼みがてらに　好忠

○同（あさかのゐは井、陸奥）

水草（みくさ）おひし淺香の岩井夏くればたふさをひぢて結ひあぐるかも　同

溫泉

第十四
足柄の土肥の合内に出づる湯のよにもたよらにころがいはなくに　讀人しらず
渡つみの中に向ひていづる湯のいつのを山とうべもいひけり　鎌倉右大臣
走湯の神とはうべぞいひけらし早きしるしのあればなりけり　同
いちしなる岩ねに出づる七くりのけふはかひなきゆにもあるかな　橘俊綱朝臣
此の歌はふしみにゆわかして大納言信經卿をよび侍りけるにこざりければつかしけると云々
いちしなる七くりの湯も君が爲續しやまずときけば物うし　大納言經信卿
世の人の戀のやまひの藥とや七くりのゆのわきかへるらむ　二條太皇太后宮肥後
ありま山雲間もみえぬ五月雨にいで湯の末も水まさりけり　皇太后宮大夫俊成卿
六帖
あひ思ふ人を思はぬ病をばなにかありまのゆへも行くべき　讀人しらず
渡つ海ははるけき物をいかにして有馬の山にしほゆいづらむ　源俊昌
よと共に下に燒く火はなけれども高濱のみゆはさむるよもなし　神祇伯顯仲卿
ましらゝの浦の走湯うらさめて今はみゆきの影も映らず　仲實朝臣
眞熊野のゆこりのまろを捧す神の拾ひゆくらしかくていとなし　俊頼朝臣
信濃なるなすのみゆをもあむさはや人をはぐゝみ病やむべく　讀人しらず
この山や道のかぎりと思へどもかつまたのみゆ遠きなりけり　忠見

○相模國歌
○走湯山名號の時の歌
○家集（なゝくりのゆ、信濃）
○家集
○家集、題不知
○文治六年五社百首（有間湯、攝津）
○題不知
○堀河院百首、出湯
○同（しほみのみゆ、未國）
○同（ましらゝのうらのはしりゆ、紀伊）
○同（まくまのゝうらの、國未勘、紀伊）
○題不知（題中、なすのみゆ、信濃）
○家集（かつまたのみゆ、國未勘、武藏）

○同
よと共に歎かしき身を陸奥のさはこのみゆといはせてしがな　大納言師氏卿

○百首歌、湯（つかまのみゆ、信濃）
わきかへり燃えてぞ思ふうき人はつかまのみゆるふじの煙か　殷富門院大輔

水

○六帖歌
早き瀬の水の心をせきとめて波の聲あるうぢのあじろぎ　前中納言爲兼卿

○中務卿親王家歌合、水
おこなひに注ぐ水こそ冰りぬれちらす杖にてうちたゝけども　權僧正公朝

○五行歌に
ゆくへなし山の雫の露ばかり流るゝ水のすゑのしら波　前中納言定家卿

○文治六年女御入内御屛風
君が世にあふさか山のせきみづも影しづかなる望月の駒　皇太后宮大夫俊成卿

せき水の影もさやかにみゆるかな濁りなき世の望月のこま　前中納言定家卿

○文治二年百首、山（井の水）
夏ぞしる山井のしみづたづねきて同じこかげに結ぶ契りは　同

○千五百番歌合（山の井の水）
しるしらぬ一つ木影にたちよりて契りを結ぶ山の井の水　小侍從

○題不知（山下水）
玉雜四
とゞまらぬ人の命とあしびきの山した水といづれはやけむ　雅成のみこ

○六帖題御歌（いしうつ水）
いまの世はげにわび人のうれへこそ石うつ水の末もとほらぬ　中務卿のみこ鎌倉

○嘉元三年楚忽百首
味氣なく水を岩ほにかくるかなこたへぬ物と身をばたどらで　從三位爲家卿

○題不知（たるひの水）
萬十二
石ばしるたるひの水のはしきやし君にこふらくわが心から　讀人しらず

○同
萬七
いのちさち久しくよしも石ばしるたるみの水を結びみのつゝ　同

第十四 筑波ねの岩もとゞろに落つる水世にもたゆらに我が思はなくに　讀人しらず

僻案集 にはたづみこの下がくれ流れせばうたかた花を泡と見ましや　同

家集 色のみぞまさるべらなる礒の松かげみる水も緑なりけり　貫之

此の歌延喜十七年宣旨にてたてまつれる歌中御本云此の歌屏風に海づらに松生ひたる所と云々

いそのかみふる野の道の草わけて清水くみには又もかへらむ　同

くみてこそ心すむらめ賤のめはいたゞく水にやどる月影　西行上人

詞花夏下 すみよしの淺澤小野の忘れ水たえだえならであひみてしがな　藤原範綱

五月雨のふるからをのの忘れ水みな沼江にて渡る瀬もなし　俊頼朝臣

金葉上 わが戀はおぼろの清水岩こえてせきやるかたもなくて暮しつ　同

大原やおぼろの水にゆきぬれば夏はをちなる物にぞありける　仲實朝臣

東路にありといふなるにげ水の逃げ隱れてもよを過すかな　俊頼朝臣

現集 みくさゐるいそしの清水徒らにいはぬを汲みてしる人はなし　法親王澄覺

いかにせむ世をうみぎはの礒清水潮みちくれば辛きすみかを　源仲正

ゆく方もなき山の井にちる花のたまり水ともなりにけるかな　同

山賤の朝けの水にさぬくまる（まゐイ）沼井のながれすゑこほるらし　同

○常陸國歌（おつる水）
○雜歌（にはたづみ）
○（かげみる水）
○家集、題不レ知
○月をいたゞきてみちを行くと云ふ心を（いたゞく水）
○保延二年三月家成朝臣家歌合、寄レ水戀（わすれ水）
○家集、五月雨を
○寄レ水戀（おぼろのしみづ、山城）
○永久四年百首、戀雜
○家集（にげ水、武藏）
○懸網歌中（いそしのしみづ、伊勢）
○山家百首、海邊泉
○山水落花（たまり水）
○山水氷（あさけの水）

うはなみは末の松山こえにけりたらひの水の影はかはらで　前中納言匡房卿

忍ぶともよそめやいかに朝手あらふたらひの水の影も恥し　土御門内大臣

とぶ火のの雪げの水に袖ぬれてつみしわか菜はたれが爲ぞは　周防内侍

此の歌權中納言通俊卿春日よりかへりてとひたりける返事と云々

さゝ深き野中の清水風すぎてさらに昔のこゝろをぞくむ　大藏卿有家

ゐなみのやのなかの清水結ぶてのたまゆら涼しさゝの上露　具親朝臣

續後撰旅
昔みし野中の清水かはらねばわが影をもや思ひいづらむ　西行上人

此の歌は播磨の書寫へまゐるとて野中を見侍りし事一むかしとなりて後修行すとてとほり侍りしに同じさまにてかはらざりしかばよめりけると云々

そこすみて波こまかなるさゞれ水渡りやられぬ山川の影　同

春日山みづやの水のするまでも神にまかせて身を賴むかな　衣笠内大臣

いつとだにしられぬ世こそ悲しけれ命の水の流れひるまを　從二位行家卿

淵もせもひまなくかはるあすか川人の心の水やながるゝ　後京極攝政

ちりにけりやまは苔路の錦にて紅葉をあらふ谷のいは水　嘉陽門院越前

山里はたにの細水つらゝゐていはうつなみの音だにもせず　權中納言師時卿

○見ろかほはあらたまらざるに君が、はあらたまりにけり（たらひの水）
○千五百番歌合
○（雪げの水）
○最勝四天王院名所障子、野中清水（野中のし水、播磨）
○同
○家集
○題不レ知（さゞれ水）
○建長八年百首歌合（みづやの水）
○柿本影供百首（いのちの水）
○御集、夢中述懷（心の水）
○百首（たにのいは水）
○堀河院御時百首（たにのほそ水）

○永久五年五月内大臣家歌合、題(ほそ水)

下くゞる谷のほそ水むすびあけて岩うつよりも君はつれなし　藤原重基

○建長八年百首歌合(水のしらいと)

せきかくる水の白絲緒をよわみむすべば袖に玉ぞちりける　正三位忠定卿

○百首歌中(田水)

なはしろの田水に影を宿しつゝ家ぢに歸る鴈をしぞ思ふ　惠慶法師

○喜多院入道二品親王家五十首、閑居(さゞれ水)

山里は細谷川のさゞれ水おとなふさへぞさびしかりける　源師光

○返事せぬ人に(たな井のし水)

古來歌 袖ぬらすたな井のし水いかなればかきやる方も流れざるらむ　權大納言長雅卿

○毎日一首中(すぎのした水)

よそにきく涙をさへぞかきならすよかはのほらの杉の下水　民部卿爲家

○寛元三年結縁經百首(せきり水)イ

みな上は岩間にたぎつせきり水早くすぎける我がさかりはも　同

○家集(山のした水)

夜もすがらたぎりて落つる涙かなこやまちかねのやまの下水　俊頼朝臣

此の歌はかたらひ侍りける人の御前にさぶらふ程にてえおろすまじきよしを申したりければいひつかはしけると云々

○家集(おほ水)

いまはよもききもせじかしおほ水の深き心はなにと見せつゝ　和泉式部

○家集、戀歌中(山水)

岩まゆくこぐれが下の山水は今はとみれどたゆるものかは　如覺法師

○題不レ知(まし水)

六五 我がかどのいさら小川のまし水のましてぞ思ふ君ひとりをば　貫之

○貞應三年八月百首(やどのかけ水)

みなかみは山の白雪とぢてけりこほりてつゞく宿のかけ水　民部卿爲家

○文集百首、更無二俗物當二人眼一但有二泉聲洗二我心一

嬉しくもながむる空はむなしくて心をあらふ山の井の水　慈鎭和尚

○正治二年百首(井での玉水)

續後拾 やまと路をたえず通ひし折のみやまづくみ見けむ井手の玉水　皇太后宮大夫俊成卿

○六百番歌合

○光明峯寺入道攝政家歌合、行路見戀

○嘉應元年五月觀智法眼坊歌合、螢

○百首歌、寄レ水戀（よるべの水）

○御集

○いなりの祭見けるに人のもとよりつかはしける歌の返事

○嘉應二年十月住吉社歌合、社頭月

結ばむとちぎりし人を忘れずやまた影あさきゐでの玉みづ　家長朝臣

たのめこし契りはさてや大和路のゆくてにくみし井での玉水　從二位家隆卿

五月やみ窓にほたるの影せずばおとをぞきかむ軒のたま水　觀實法師

此の判歌者清輔朝臣云あめともいはで軒の玉水や荒涼に侍らむと云々

影たえてさてや汲まなむみ草ゐるよるべの水はすみ變るとも　從二位家隆卿

身に近くよるべの水の影はあれどよそに葵の草の名ぞうき　後九條內大臣

神かけて君はあらがふ誰かさはよるべに溜る水といひける　和泉式部

月影はさえにけらしな神がきやよる邊の水につらゝゐるまで　清輔朝臣

此の歌判者俊成卿云左歌よるべの水につらゝゐるまでなどいへる文字つゞきよろしくはみゆるをおぼつかなき事どもぞ侍めるまづよるべの水といふことは源氏の物がたりにもかものまつりの日の歌にさもこそはよるべの水もみくさゐめとよめりみたまへ（ふ脫歟）しさらではふるき歌にもえ見及び侍らずこの水をおろ／＼承はるにたとへばいづれの社にも侍らめどまづ當社のおまへの月にはうみのおもて氷をみがき濱のまさご玉をしけらむをばおきてよるべの水にむかひて月はさえにけらしなど思はむ事やいかゞと云々作者清輔朝臣云よるべの水はいづれの社にも

侍るにこそ又歌によめる事源氏のみにあらず和泉式部集などは御覽ぜざりけるにや又月よむべき所はおほかれど風情に隨ひてこそよめるかしなばすで山などをとりあつめてつくすべしと不レ存事なりなばすて山たかき名なりとて月の歌ごとにそれをよみて餘山をよむまじきにやと云々

夫木和歌抄巻第二十六　終

夫木和歌抄　巻第二十七

雑部九　動物部

題

鳥　鶴　鸚鵡　鷲　鵜　鷺
鵲　烏　鸐(やまどり)　鶏　鷹　木兎
梟　鶚(みさご)　鷗　鳰　鳩　鴫
鵥(はしはみ)　放鳥　鶖　都鳥　百舌鳥　鵐(しとど)
鴿　雀　山陵鳥(やまがら)　小陵鳥　四十雀　鶍(かやくき)
庭叩　鵮(ぬか)　増子鳥(ましこ)　火焼鳥(ひたき)　松毟(まつむしり)　都々鳥(つゝとり)
水乞鳥　箱鳥　佛法僧　龍　虬(たつ)　虎
熊　猪　牛　馬　犀　猿
野干(きつね)　犬　兎　猫　貉(たぬき)　鼠
狌(むさゝび)　龜　貝　蝸牛　蜻蛉　蛛
蝶　蝙蝠　蓑蟲　守宮(ともり)　海月　海老
蟹　魚　鯉　鮒　鮎　鰣(はえ)
鮻(いしぶし)　鯛　鱸

鳥

○題不レ知
萬五 梅の花いまさかりなりもゝ鳥の聲の戀しき(ともイ)春きたるらむ　讀人しらず

○家集
よと共に鳥の網はる宿なれば身はかからむとくる人もなし　貫之

○千五百番歌合
むこ川にあともとどめぬかほよ鳥なく音もみえぬ五月雨の頃　家長朝臣

○六帖題
萬六六 夏草の野澤がくれのはぬけ鳥ありしにもあらずなるわが身かな　民部卿爲家

○建長八年百首歌合
松の戸は木の本なれば見ずもあらずみもせぬ鳥や友となるらむ　後九條内大臣

○同
雲のゐる山の高峯もふみすぎぬあまとぶ鳥のみちとなるまで　衣笠内大臣

此の歌判者光俊朝臣云人如二鳥路一穿レ雲出云詩の心にやと推せられて
なかしくこそ侍ると云々

○洞院攝政家百首羈旅、待鳥聲
なぞもかく人の心のうかれ鳥わかれもよほす聲をたづねむ　光明峯寺入道攝政

○正治二年百首
なにとかや風にしりそぐ鳥の名よ嘆きて年を渡るとぞきく　前大納言隆房卿
おほとりの羽にふりにし霜の色を我が元結のものとなしつる

○久安百首
いひわかぬことぞわりなき大鳥の羽にも霜のふるやふらずや　前大納言隆季卿

○千五百番歌合
尋ね入る山路の深くなるまゝに鳥の聲までかはりゆくかな　從三位保季卿

○六帖題綱歌、鳥
山ははや雪ふかからしこの夕むれて小鳥の里にいでたる　鎌倉中務卿のみこ

○正治二年百首
ともすれば雪のみ山になく鳥の思ひさだめぬ身のゆくへかな　寂蓮法師
目に見えぬ鳥もよにふる身の程は蚊のまつ毛にも巣は作るなり　同
一はねに千里をかける鳥もなほゆたかに年を（とひこイ）ゆくすゑの空　同

○治承二年右大臣家百首
ひとはねに千里をかける鳥なれば君が齢の末はきはめし　正三位季經卿

○家集、戀心を
たまさかに來るかとすれば目をわくる鳥の速くも歸りぬるかな　俊頼朝臣

○六帖題
新六三 浮鳥のさながらぬるゝ水遊びなにぞは（さイ）までもかしらからげむ（かしげてイ）　信實朝臣

○家集
うちはぶく浪の上をばきぬなるに巣がくれたるか鳥の見えぬは　和泉式部

○家集、夕ぐれにむら鳥のすぐるを
松風のふくひと聲ときゝつるはむれたる鳥のすぐるなりけり　能因法師

○家集、夏歌春霽啼鳥急
限りとて春のたちにし時よりぞなく鳥の音もいたく聞ゆる　千里

鶴

○伊勢國幸時
萬六 妹にこひわかの松原みわたせばしほひの方にたづなきわたる　聖武天皇御製

○題不レ知
同 和歌の浦に汐みちくればかたをなみ蘆邊をさしてたづ鳴き渡る　赤人

○題不レ知
萬七 足柄の箱根とびこえ行くたづのともしきみれば山とし思ほゆ　讀人しらず
萬十四 坂こえてあべの田のもにゐる鶴のともしき君はあすさへもかも　同
萬十五 うば玉のよは明けぬらし玉の浦に漁りするたづなき渡るなり　同

○家集

○家集、或時歌合、松

○大井河行幸に猫のつる地にたてるを鶴のおるゝかと疑ひ云々

○正治二年百首、鶴

○洞院攝政家百首、祝

○題不レ知

○嘉保三年五月中宮權大夫（イ能實卿）家歌合、祝（寛イ）

○寛治八年京極關白家歌合、祝

同
朝開き漕ぎ出でてくればむこの浦の汐干の潟にたづは群すも　讀人しらず

萬十一
いせの海ゆ鳴き來るたづのおとゞろも君が聞えば我戀ひむやも　同

わが宿の松の梢にすむ鶴は千代の雪かとおもふべらなり　貫之

かの見ゆる鶴のむら鳥君にこそおのが齢をまかすべらなれ　同

むらたづのやどれる宿（人イ）とみるまでに松の緑をうづむ白雲　惠慶法師

雲居なるたづとみしかど鵲の橋のたよりに通ふなりけり　能宣朝臣

このうたは一品宮のうちにたてまつり給ひける御扇をいださせ給はむためにしろかねのすぎばこにしろきうすものをしき又しろきいとしてなむつるのかたをぬはせたまひてあしでにぬはせむうたとてめしけると云々

なぐら山おりゐる雲は谷川のかはべのたづはとほめなりけり　花山院御製

家
龜のをの岩根が上にゐるたづの心しりける水のいろかな　式子內親王

これもまたなでしたぐひか龜の尾の山の巖根のつるの毛衣　後九條內大臣

古來歌
龜のをの山のいはねの松が枝にむれゐるたづは心あるらし　後嵯峨院御製

かめ山の岩根の松にすむ鶴は君が千代へむためしなりけり　周防內侍

君が代は龜の尾山にすむ鶴の毛ごろもさへや千代をかさねむ　同

○家集
鶴のゐる方にぞありける白妙のあまの濡衣ほすかとおもへば　躬恒

○三百六十首中
あたらしめ神のみてぐらさせるかと澤邊に鶴のむれゐたるかな　好忠

○六帖題不レ知
六五 忘れてもあるべきものを蘆原の思ひ（にイ）いづるのなくぞわびしき　讀人しらず

○堀河院御時百首
誠にやよもぎの島に通ふらむつるにのるてふ人にとはばや　權僧正永縁

君が代のながゐの浦にむれゐたる友に千歳を契るたづかな　二條太皇太后宮肥後

○大嘗會悠紀方御屏風
我が君はちさかの浦にむれてゐるたづや雲居のためしなるらむ　前中納言匡房卿

○百首御歌、鶴
あしたづの汐干にあさる諸聲につながれにけるあまを舟かな　慈鎭和尚

○堀河院御時百首、鶴
鳴海潟朝みつ鹽やたかからむあさりもせなでたづなきわたる　修理大夫顯季卿

○永久四年百首、水うみ
さゞ浪や小松にたちて見わたせばみほがみ崎に（みイ）鶴むれてなく　仲實朝臣

○題不知
かしふ江に田鶴なき渡る志賀の浦に沖つ白浪たちしくらしつ（もイ）　讀人しらず

○最勝四天王院名所御障子
わかの浦や鹽路をさして行くたづの翼の浪にやどる月かげ　後久我太政大臣

○同
志賀の浦や氷もいくへゐる鶴の霜のうはけに雪はふりつゝ　前中納言定家卿

○百首歌
人とはでみきりあれにし庭の面にきくも寂しき鶴のひと聲　同

わかのうらになきてふりにし霜の鶴この頃見えて心やすめず　同

○寛喜元年女御入内御屏風
新千雜中 和歌の浦や入江の蘆の霜の鶴かかる光にあはむとやみし　従二位家隆卿

○天曆七年十月内裏菊合歌
拾遺雜賀 忠見集 千年ふる霜のつるをばおきながら菊の花こそ久しかりけれ　讀人しらず

○家集、鶴歌
ひとりねは毛衣さゆる霜のつるみふるふばかり寒けきものを　源仲正

○老若五十首歌合
葦たづも年經ぬるこそ哀れなれわがよふけひの浦になくなり　寂蓮法師

○建保二（三イ）年名所百首御歌
あしべより汐みちくらし天津風ふけひの浦にたづぞなくなる　順徳院御製

○同
今日のみとたづもなきしやさがの山みゆきも遠き千代の古道　從三位行能卿

○同
おほよどの浦にむれゐる友鶴の遊ぶ光（ひかげイ）のそらぞのどけき　從三位範定卿

○同
大とものみつの濱邊の松が枝に年へてすめるあしたづのこゑ　藤原康光

○千五百番歌合
さしのぼる日影たけ行くあさなぎの雲なき空にたづ運ぶなり　後鳥羽院宮内卿

○家集、鶴
山の端に日影いさよふあさなぎの雲居遙かにたづぞなくなる　民部卿爲家

○貞應二年當座百首、寒夜澤鶴
あしたづの霜の衣にかさねてもあらしや寒きさはの月影　同

○寶治二年百首、島鶴
人目みぬ離れ小島の寂しきに鶴のねぶりもたよりあるらし　信實朝臣

○百首歌
雨によりみのしま見れば汐のまにみ（けイ）かさを近み（にイ）田鶴なき渡る　光俊朝臣

○堀河院百首
網引するみつの濱邊に騒がれてあとをさしのべ田鶴歸るなり　俊頼朝臣

○百首歌
澤におふる眞菅の笛をふみしだき漁りするたづ聲しきるなり　同

○物へまかりける道にて
いとゞしく物思ひをれば山賤のすげかる澤にたづ騒ぐなり　同

○文治六年五社百首
松のもと千年の鶴のよるの聲かめのみやまにさぞ通ふらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○建保元年仙洞御歌、冬月
みなせ山松にすむつる幾千代か月のうはけに冬をかさねむ　從二位家隆卿

○百首御歌
さよふけて鳴く音も悲しから琴のしらべに通ふ籠のうちの鶴　土御門院御製

○千五百番歌合
諸共にすめばなりけり蘆鶴も吉野のおくのまつの木のもと　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首
苔の庭道ふみわけし跡もなしねぶるたづのみあるじがほにて　土御門内大臣

ゆく末をたれかはしらむ白鶴の千代よりほかの君が代なれは　前大納言隆房卿

○寶治二年百首、島鶴
河島の眞砂にたてるしらつるの霜のつばさに年ふりぬらむ　正三位知家卿

○題不レ知
萬六
潮干ればあしべにさわぐ白鶴のつまよぶ聲はみやもとゞろに　讀人しらず

○長治元年五月源廣綱朝臣家歌合
庭上鶴馴孤イ
庭の面に人になれたるあしたづは齡を君にゆづるなるべし　同

○建長八年百首歌合
鶴のすむ松より外はわが宿のとなりたえたる山の寂しさ　前大納言顯朝卿

此の歌判者光俊朝臣云洞裏移レ家鶴と鄰と云詩の心に申すと云々

○喜多院入道二品親王家五十首、述懐
おいぬれば我が元結にゐるたづのさても千年を契りやはする　前大納言隆房卿

○弘長元年百首歌、山家
山人のいでたるあとの秋の庵のこれるたづやよはになくらむ　後九條内大臣

○六帖題
新六六
山きたの草のとばりのあれまくに恨みてよるは鶴ぞ鳴くなる　光俊朝臣

○家集、池上鶴
あしたづのまるゐる岩根の池なれば浪もや千代の數にたつらむ　俊頼朝臣

○從二竹田庄一贈二女子大孃一歌
萬四
うち渡す竹田の原になくたづのまなく時なしわがこふらくは　坂上郎女

○千首歌
冬さむみたづぞなくなる打ちわたす竹田の原の長き夜すがら　民部卿爲家

むしろ田のいつぬき河に立つ浪も萬づ代かけてたづぞなくなる　同

○冷泉院御時大嘗會歌
やす川の川邊に遊ぶあしたづは千年の影にならべてぞみる　能宣朝臣

○悠紀方御屏風、安河村鶴
やす河にむれゐるたづのむれながら年をば君の年とこそせめ　前中納言匡房

○永久三年五月内大臣家歌合、祝
さほ川にむれゐるたづの數ごとに齡を君にゆづるなりけり　藤原道經

○百首御歌、祝
雲の上によはひゆづるとなく鳥は君が千年を空にしれとや　慈鎮和尚

○詠歌中
雲居よりおりゐる鶴の千代經べき栖はとはの松にぞありける　藤原資隆朝臣

○鶴契遐年と云ふことを
松の陰岩のたむけに巣くひする鶴の落葉に御代をしるかな　俊頼朝臣

○家集、内侍のかみがもとへ
よと共に齡を君にゆづりてもあはぬなるべし松に住むつる　元輔

○永観元年右大臣家賀屏風歌、池邊鶴
いけちかみむれたる鶴の千年をばたが世の中の數とするらむ　同

○後法性寺入道関白家百首
古郷に千代へて歸るあしたづの變らぬ君がみよにあふらむ　後京極攝政

○光臺院入道二品親王五十首歌、日暮多
行く鶴のとばたのさなへ里つゞき千代の數とるみよの民かな　従二位家隆卿

○日吉社撰歌合
霧ふかきいくへの澤になく鶴の聲も通はぬあけくれの空　前中納言定家卿

○文治六年五社百首
難波がたむれゐるたづの上毛こそ千年もきえぬ霜にはありけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年女御入内屏風
難波潟蘆のあなたにすむたづのかくれぬまでに霜がれにけり　後法性寺入道関白

○寶治二年百首、島鶴
子を思ふ聲もまがはじしほがまのみしまがくれの松の友鶴　従二位頼氏卿

時わかぬ袖の涙をゆのはらになくてふ鶴の音にやくらべむ　従二位行家卿

○建長八年百首歌合
玉津島みがくみことにあふ鶴はふりてや家のみちもひらけむ　後九條内大臣

○鶴岡別當僧都のもとへ雪ふりし朝つかはしける ○御集

やはた山木だかき松にゐるたづのはね白妙にみ雪ふるらし　鎌倉右大臣

たづのゐるながらの濱の濱風によろづ代かけて浪ぞよすなる　同

鸚鵡

○正治二年百首

哀れともいはばやいはむことのはを返すあふむの同じ心に　寂蓮法師

鷲

○十題百首

しのぶ山木立の奥にかふ鷲のその羽ばかりや人にしらるゝ　前中納言定家卿

○越中國歌　萬十六

しぶたにの二上山に鷲ぞ子うむといふさしはにも君がみために鷲ぞ子うむといふ　讀人しらず

○長歌　萬九

鷲の住む　つくばの山の　もはきつの　そのつの上に　いざなひて　をとめをとこの　ゆきつどひ　蟲丸

○壹岐守隆季朝臣家會、寄レ露戀

つれなさは露ふりもせぬ鷲のはのやよなぞかかる心こはさぞ　源仲正

○六帖題、わし　新六二

陸奥のえぞが千島の鷲の羽にたへなる法の文字もありけり　權僧正公朝

○同　同

人遠きみ山のわしもあはれなり誰にむくいのはね音すらむ　光俊朝臣

ともすればとやなる鷲の尾羽きれて立ち出で難き世を嘆くかな　民部卿爲家

同　もイ
又はよも羽をならぶる鳥もあらじ上見ぬ鷲の空の通ひぢ　信實朝臣

鵜

○家集
鳴海潟鵜のすむ岩におふるめの目もかれずこそ見まくほしけれ　俊頼朝臣

○六帖題
新六三
なにかその浪はかくれど宮瀧の鵜の居る石の上ぞかくれぬ　信實朝臣

○同
同
いかにしてえかふ入江のはなれ鵜のしばしが程も心やすめむ　民部卿爲家

○同
きよみがた荒磯岩のはなれ鵜の波にしをるゝ翼ほすらし　前中納言爲家卿

○題不知
萬三
あべのしま鵜の住む石による波のまなくこの頃大和し思ほゆ　赤人

六三　萬十九
白川の瀬々を尋ねて我がせこは鵜かはたゝさは心なぐさむ　讀人しらず

○あづまへ下りける道にて
しらはまに墨の色なる島津鳥筆もおよばゞゑにかきてまし　安嘉門院四條

此の歌路次の記にたかしの山もこえつゝうみみゆる程いとおもしろし浦風あれて松のひゞきすごく波あらしとおもしろきすさきにくろき鳥むれゐたるは鵜といふ鳥なりけりと云々

○家集
伊勢島によさの海よりとび通ふうはの空にもかひ（はカ）になしけり　祭主輔親

此のうたはうのかたしたるわりごを祭主輔親和泉式部にかりてかへすとてかもの子をいれてよめると云ふなり

○返事
飛び通ふよさのしまつを餘所人はとりも止めばかひはあらまし　和泉式部

○家集、鵜
久方の天のみまこのうまれます渚の宿は鵜の羽をぞふく　權僧正公朝

鷺

○住吉社百首御歌
住吉のまつのしづえにゐる鷺はたつ白浪のかゝるなりけり　慈鎭和尚

○建保名所百首
暮れぬとていくたの池をたつさぎのねぐらや寒き森の秋風　從二位家隆卿

○六帖題
新六六　いづみ川あさせもしるくたつ鷺のみのけみだるゝ風の寒けさ　衣笠内大臣

同　風のまく鷺のみの毛にたとふなる心よわが身いづちかもせむ（ねイ）　光俊朝臣

同　なか井せば心してゐよ梓弓やばせの河のさぎの一むら　信實朝臣

○建長七年顯朝卿千首
思ひがは人のうき瀨にゐる鷺ののぞきてだにもあふ由ぞなき　同

○正治二年百首
をちかたや岸の柳にゐる鷺のみの毛なみよる河風ぞ吹く　後京極攝政

新續古　あさぼらけ野澤の霧のたえまより立つしら鷺の聲のさむけさ　前大納言忠良卿

○樹陰風涼イ
玉夏　河風にうはけふかせてゐる鷺の涼しく見ゆるやなぎはらかな　源仲正

○鷺
六六　水まさる淀の川瀨にたつ鷺のたちてもゐても鳴かぬ日ぞなき　讀人しらず

○秋の御歌中
鷺のゐるそともの楮色づきて門田さびしき秋のゆふぐれ　中務卿のみこ

○百首歌
風雅　さぎのゐる池の汀に松ふりて都のほかのこゝちこそすれ　前中納言定家卿

○家集、河漁漂
○百首歌、白鷺立川
○建保三年百首、白鷺立レ河
○正治二年百首
○冬百首歌
○六帖題
○三百六十首中
○鳥連歌

玉葉
夕立のくも間の日影見えそめてやまのこなたをわたる白鷺　前中納言定家卿
大井川おりゐる鷺のたつあとを淺瀬としりて渡るかちびと　隆祐朝臣
あゆのふすせゞの岩間にゐる鷺のみの毛なみよるかもの河風　寂蓮法師
ゐる鷺の影さへそこにたちそひて汀にまさるかもの河浪　民部卿爲家
朝まだき淀野のまこも末わけてたつみと鷺のこゑもさむけき（しイ）　前大納言忠良卿
霜凍るすさきにたてるみと鷺の姿さむけき朝ぼらけかな　寂蓮法師
入潮のひがたにきゐるみと鷺のあさりにいづる蟹かとやみむ　正三位知家
鷺たてる五月のさはの菖蒲草よそめはひとのひくかとぞみる　好忠
むれゐたるとしまがさきの白鷺をたちなば雪のきゆるとやみむ　大藏卿行定（家イ）
いざやまたみなとの鷺の心ちして思ひたたれぬ嘆きをぞする　俊賢朝臣

この歌はよのありがたさにいかゞすべきなどおもひなげくなききてなほざりぬべからむ人をかたらへとをしへし人を後にいかき思ひなりぬるとたづれたりければいひつかはしけると云々

鵲

六五　玉葉二
かさゝぎの羽に霜ふり寒きよを獨り（にイ）やわがねむ君まちわびて　人丸

○建保四年仙洞百首
鵲のはがひの山の山風のはらひもあへぬしものうへの月　前中納言定家卿

○御集、夏月
新六六 鵲のおのが羽がひの山越えてなくねも涼しみじか夜の月　中務卿のみこ（行家イ）

○六帖歌
むばたまの夢の浮橋ちがへてもまたかさゝぎの渡すとやみむ　信實朝臣

○嘉元三年百首
みわたせば白すにたてる鵲をさしてぞくだすうぢの河船　入道前太政大臣

○顯季卿家會、戀歌中
ますかゞみ浦づたひする鵲のこゝろがるさの程をみるかな　俊頼朝臣

○八雲
月清み梢をめぐるかさゝぎのよるべもしらぬみをいかにせむ　讀人しらず

○三百六十首中イ
續古今戀一 鵲のちかふるはしのまとをにて隔つるなかに霜やおくらむ　好忠

○鵲飛山月曙
新撰萬葉 後撰夏 鵲の峯とび越えてなきゆ（くイ）けばみ山かくるゝ月かとぞみる　千里

烏

○承久二年四季百首
うちはぶきねにゆく空のむら烏おのがあはれは夏の夕暮　前中納言定家卿

○正治二年百首
村がらす梢のとこをあらそひて稲荷の杉にゆふかけてなく　前大納言隆房卿

いなり山峯の杉むら立ちいでてあけぬとつぐる友烏かな　正三位經家卿

○寛平御后時宮歌合
菅萬 雪のうちのみ山がらすぞ思はるゝ頭の白くなるをまづみよ　讀人しらず

○題不レ知
萬七 曉と夜がらすなきてこの山の梢のうれはいまだ靜けし　同

萬十二 朝烏はやくな鳴きそ我が背子があさけの姿みれば悲しも　同

○家集、冬歌中
風雅冬
霜しろき神の鳥居のあさがらすなくね寂しき冬のやまもと　従二位家隆卿

○家集、鳥
新六六
大君のみことかしこみ山烏うたのあがたの道しるべせよ　権僧正公朝

○六帖歌
新六一
ふく風に霜おきまよふみやまべに月夜がらすの夢もさむけし　衣笠内大臣

新六六
またこよひやもめ烏よひとすけ（気）のなきをもしらで我驚かす（ば新六）　信実朝臣

同
今更に里へないでぞ山からすうときかたには忘られぬべし　同

月さえて山は梢の静けきにうかれがらすのうたゝ鳴くらむ　光俊朝臣

あくるかとうかれ烏の鳴く聲におきいでてみれば月ぞ夜深き　前中納言為家卿

○同（からす）
大井川ゐくひにきゐる山烏鵜のまねすともうをはとらじな　権僧正公朝

○三島社七百首
雪ふれば御山烏のはがへしてまきの梢にさぎぞ羣れゐる　同

○五行御歌中、鳥
雪深きみ山の里の夕やみにねぐらもとむるからすなくなり　後京極攝政

○俊恵法法師の本にて題十首歌
にくかりしやもめ烏も嬉しきは唯ひとりぬる曉の空　殷富門院大輔

鷴（やまどり）

○正治二年百首
友なくて遙かにきたるやまどりは鏡を見てぞ鳴きはじめける　第三のみこ

○山鳥歌
新古雜五
ひるはきてよるは別るゝ山鳥のかげみる時ぞ音はなかれける　讀人しらず

六二
秋風のふきよるごとに山鳥のひとりねぬればものぞ悲しき　同

○六帖題
新六二 山鳥のはつをの鏡はつかにも別るゝつまの影みてぞなく　光俊朝臣

同 山鳥のおのづからとふ人もなし長きわかれにあらぬ身なれど　同

○百首御歌、初秋
露かけて秋くる宵は山鳥のおふさのかつらたまやぬくらむ　後九條内大臣

○題不レ知
萬十四 山鳥のをろの初尾に鏡かけとなふべみこそなによかりけめ　讀人しらず

○思不レ言戀
萬代 山鳥のをろのながをのを鏡にかかる心をみるやとほ妻　仲實朝臣

○嘉禎二年十首歌合、久戀
夜と共に亂れてぞ思ふ山鳥のをろのながをの長きつらさに　後鳥羽院御製

○六帖題歌、面かげ
山鳥のをろの鏡の霜ぐもりうき俤をかけてこひつゝ　中務卿のみこ

○六百番歌合、寄レ鳥戀
山どりのはつをの鏡かけねどもみし面影に音はなかれけり　法橋顯昭

○西園寺入道前太政大臣家三十首
山鳥のはつをの秋のますかゞみながき夜かけていづる月影　従二位家隆卿

○顯家（季イ）卿家にて人々の（戀イ）歌よみけるに
山鳥のはつをのかゞみ影ふれてかげをだにみぬ人ぞ戀しき　俊頼朝臣

○六百番歌合、暮戀
暮れぬまはかかりければや山鳥もよはの思ひに契りかへなむ　従二位家隆卿

○洞院攝政家百首、不レ逢戀
白雲の遠山どりのはつをばな手枕なれてたれむすぶらむ　従二位頼氏卿

○山鳥の啼くをききて
玉葉 山鳥のほろ／＼となく音きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ　行基菩薩

鷄

○六帖題
新六一 深き夜にまづひとしきり聲たてて木綿附鳥はまたねしてけり　信實朝臣

新六二 定めなきゆふつけ鳥も所がらにはにをりはへ名をぞあらはす　信實朝臣

○同
同 ねのみなく宿の鷄聞きなれて君につかへぬ年ぞへにける　民部卿爲家

○同
我もしる大和にはあらぬには鳥の時しりてこそ音はなかれけれ　鎌倉中務卿のみこ

○正治二年百首御歌
長き夜の夢さめよとやにはつどりあけゆく空を人につぐらむ　喜多院入道二品のみこ

○題不知
萬十一 にはつ鳥かけのたれ尾のしだりをの長き心も思ほえぬかも　讀人しらず

○兵部卿元良親王家歌合、曉別戀
萬代 新千[illegible]三 したひもを夕つけ鳥の聲たてずけさの別れに我ぞなきぬる　同

○正治二年百首
時しもあれ鳥ぞなくなる淺倉やきのまろどのをうたふ曙　土御門内大臣

くだかけはいづれの里をうかれきてまだ夜深きに八聲なくらむ　前大納言忠良卿

○建長七年顯朝卿千首歌
たが袖の別れをいまにゆふつけの鳥の一聲なきはじむらむ　從二位行家卿

○寶治二年百首、曉鷄
かねてみしゆふつけ鳥のゆふまどひ曉おきの爲にぞありける　信實朝臣

○家集月歌中、康元二年毎日一首
なきぬるか夕つけ鳥のおとはやま關路の月はまだ深き夜に　民部卿爲家

○五十首歌
いくる夜の夕つけ鳥のたちわかれ浦波とほくいづる舟人　前大納言定家卿

○家集、寄鳥戀
無き名のみゆふ附鳥の相坂にすてられてだに音をも鳴かばや　從二位家隆卿

○建保四年百首
立田山ねぐらの木の葉ちりはててゆふつけ鳥の色ぞ殘れる　同

○題不知
萬十一 には鳥のかけのたれ尾のしだり尾の長々し夜を獨りかもねむ　讀人しらず

○家集、梅
風吹かば梅のしたはな鷄のうはけに花ぞちりかゝりける　源仲正

○久安六年十二月顯輔卿家百首、後朝戀
すもり子の返らぬ事もありなましあけつげ鳥の聲なかりせば　源　忠季

○六百番歌合、曉戀
夜を深みしばなく影は我が如くねてもさめても戀ふやすべなき　法橋顯昭

○千五百番歌合
神がきによや明方になりぬらむ夕つけ鳥の聲のきこゆる　土御門内大臣

○六帖題、鷄
新六二 さかきばにゆふつけ鳥の聲すなり神がき近き夜はの旅寢に　正三位知家卿

○家集、戀歌中
夕つけの鳥のひとこゑあけぬればあかぬ別れと我ぞなりぬる　元眞

鷹

○越中國にて
萬十七 二上のをてもこのもにあみさしてあがまつ鷹をいめにつげこそ　中納言家持卿

○たか
六二 あら鷹の今は雲居になりぬれどきてもやゐると見する經緯(たてぬき)　讀人しらず

○十題百首
風たちて澤邊にかけるはやぶさの早くも秋の景色なるかな　前中納言定家卿

○家集、戀
たか山にはなれし鷹のかざながれ(かたなかれイ)行方もしらぬ戀もするかな　清輔朝臣

○たか
六二 へをとけて山に入りにし荒鷹の緒をきるべきそらごとなせそ　讀人しらず

○正治二年百首
雪ふれば身に引きそふるはし鷹の唯鷲の羽ぞしらふなりける　民部卿範光

暮れぬとも初(はつ)とや出(だ)しのはし鷹を一よりいかゞあはせざるべき　小侍從

○家集、戀歌中
いとせめてこゝろをすたか(素鷹)は慕はれど人の心はとりもかはれず　源　仲正

しるらめや遠山けぬるとやたかの變りもはてぬわが心とは　同

○家集
足引の山かへりぬるはし鷹のさもみえがたき穂もすゝるかな　顕季卿

○攝政家歌合
あまたとしとやふむ鷹はましろにて交野の草の霜にこそふれ　祭主輔親

○三百六十首中
とやみれば我が夏かひのかたがへり秋來にけりなおい(尾羽イ)ぞしなへる　好忠

○家集
すだか渡るはゝこが崎をうたがひて猶木にかへる山鳥(かへりイ)かな　西行上人

○寶治二年百首
いかにせむとやでの鷹のあふ事も稀なる穂にかゝりそめては　衣笠内大臣

○正治二年百首、鳥(鷹イ)
をしきかな人もてがけぬはし鷹のとかへる山に衣へにけり　後京極攝政

○同集、秋歌中
かりくらすかたののみのの秋風に夜鷹つなぎて月やみるらむ　後九條内大臣

○久安百首長歌
はしたかの　すゞろにすぐる　よはひかな　哀れうき世を
すてやらで　とやかへりぬる　おきなはの　たゞひとすぢに　待賢門院安藝

○六帖題
新六二
御狩場の眞白の鷹のもとをしは憂世にめぐるしわざなりけり　衣笠内大臣

新六二
山かへるあかけの鷹のてなれても心おかるゝ君にもあるかな　民部卿爲家

新六二
あふ事をいつとか待たむ我が幸の山のくろ(かみイ)つにつみしらせばや　同

新六二
へを放ち手がひに輕き鷹の子はもたりやすくも歸りぬるかな　信實朝臣

新六二
出ではなるひらかのみ鷹立ちかへり親の爲には鷲もとるなり　光俊朝臣

○六帖題、おほたか
かくもこそはとやと猶もいはれけれ八幡の宮に鈴たてまつる　權僧正公朝

○同、小鷹イ
新六二
いくかへり年は送れどはし鷹のましろはぬ身ぞ世をば恨みぬ　衣笠内大臣

新六二 夏かひの程もへなくにはし鷹の尾羽おしなべて秋風ぞふく　正三位知家卿
○同

み狩野にかざながれせしはし鷹の聲にもつかぬ恨みをぞする　俊頼朝臣
○よべどかへらぬ戀

我といへばさも有らぬ戀を敎へ置きて野守も見えぬくちの矢形尾　如覺法師
○家集、いつはりてありかををしふるこひ

陸奥のしらをの鷹を手にすゑてあだちが原を行くはたが子ぞ　能因法師
○家集

木兎

足引の山深くすむみゝづくはうき世(世のうきイ)の事をきかじとや思ふ　土御門院御製
○百首御製

新六二 山風にならの葉がしは音高しすむ木兎もききやおどろく　光俊朝臣
○六帖題

梟

山ふかみけぢかき鳥の音はせでもの恐しきふくろふの聲　西行上人
○寂然が本へつかはしける十五首

物思へば木だかき森に梟のくるしきかともとふ人ぞなき　寂蓮法師
○百首歌、戀

鴡(みさご)

夕まぐれたかとみつれど荒磯の浪間をあさるみさごなりけり　俊頼朝臣
此の歌はつくしへまかりける道にたかとみといふ所にてみさごのうた

とるをみてよめると云々

〇十題百首御歌
みさごゐる汀の風にゆられて(れきてイ)鳰の浮巣はたびねしてけり　後京極攝政

〇六百番歌合、寄海人・戀
みさごゐるいそらが(そイ)崎にあさりする蜑もみるめを猶求めけり　中宮權大夫家房卿

〇正治三(二イ)年百首
荒礒のさきいづる岩にゐるみさご絶えずや浪の花をみるらむ　三條入道左大臣

〇御集、冬歌
みさごゐる礒邊にたてるむろの木の枝もとをゝに雪ぞ積れる　鎌倉右大臣

〇御集、雜歌中
荒礒の浪にそなれて濱松はみさごのゐるぞたよりなりける　西行上人

〇しほがまの浦にていみじく年老いたるあまのあるをみて
みさごゐる礒邊の松と諸共にしほがまになの(おのがイ)おいにけるかな　能因法師

鷗

〇文治六年五社百首
浪の上にきえぬ雪かと見えつるはむれて浮べる鷗なりけり　俊成卿

〇寛平御時大井にてかもめ木になれたる
すにをればいさごの色に紛ふ鳥手にとるばかりなれにけるかな　躬恒

〇承安二年廣田社歌合、判者俊成卿
朝ぼらけあしやの沖を行く船の餘所めは鴨のゐるかとぞみる　公通卿按察使

〇正治二年百首
あさりするいらごが崎の蜑の子は浮ぶ鷗を友とみるらむ　正三位季經卿

〇建保三年名所百首
うき沈み遊ぶあさぢや(あまどもイ)多からむ淀の川瀬にかもめむれゐる　正三位經家卿

かもめゐるいそまの浦の夕浪にたが俤をかけてまつらむ　藤原康光

〇柿本影供百首
石にかへる松のかもめは聲さえて入日のうみにのこる汐風　後九條内大臣

○家集、海上眺望
むれゐたる沖の鷗やあさなぎにこぎはなれたる蜑の友舟　權大納言定家卿（宣イ）

○あづまへ下りけるに
鷗ゐるすさきの岩もよそながら浪のかげこす袖にそなれて（見日記）　安嘉門院西條
此の歌路次の記云はしもとの橋（はまなの橋日記）よりみわたせばかもめいと（といふ鳥日記）おほくとび
ちがひて水のそこへもいるいはのうへにもゐたりと云々

○二夜百首御歌、海路
かもめ浮かぶ浪路遙かにこぎ出でぬよそめばかりや沖の友舟　後京極攝政

鳰

○百首御歌
唐崎やにほの浮巣のいかにしてさすらひ渡るよを頼むらむ　順德院御製
蘆の葉につなぐ浮巣も氷りつゝすみあらしたるふゆ（小田イ）の鳰どり　土御門院御製

○百首歌、五月雨
みしまえの鳰の浮すもみだれ蘆の末葉にかゝる五月雨の頃　家隆卿

○建保三年名所百首
我が戀はます田の池の鳰鳥のたまもに遊ぶあともはかなし　同

○同
あとやなきあはでとしふる思ひのみ增田の池のにほの下路　藤原康光

○正治二年百首
鳰鳥はひとにもいたくみえしとや草がくれつゝなき渡るらむ　源師光

○題をいだし歌をよみけるにうちいでのはまのきりを
白浪のうち出の濱の秋霧にたえずもの思ふ鳰どりぞ鳴く　大貳高遠卿

○[illegible]
六三 ひとりのみ三津の堀江にすむ鳰の底はたえずも戀ひ（をイ）渡るかな　讀人しらず
六二 霜の上にとびかふ鳰の羽風にぞ獨りある人のいもねかねつる　同

○千五百番歌合
浪の上に行方もしらぬ浮巣かなすだちにけりな鳰のひなどり　家長朝臣

○六帖題、にほ
新六三 鳰鳥の浪のしたみちともすれば浮世の外とゆきかくれつゝ　正三位知家卿

○同
同 したにのみ鳰の通ひのみなくゝり入りぬる磯はみらく少なし　信實朝臣

○弘安二年若宮百首
夜もすがらあしのいとなく音づれて氷にすだく鳰のむら鳥　安嘉門院四條

○仁安二年歌合、山川山（水イ）鳥、判者俊成卿
うき沈み木の葉ながると見えつるはにぶの河瀬にかづく鳰鳥　智海法師

鳩

○家集、鳩を
とびかけるやはたの山の山鳩のなくなる聲はみやもとゞろに　鎌倉右大臣

○法輪百首、寄鳩述懐
足引の山鳩のみぞすさめけるちりぬる花のしべになるみは　源仲正

○鳩
六二一 我を秋とふる露なればゞ山鳩のなきこそ渡れ君まつのえに　讀人しらず

○六帖題
新六二 しけりつゝこぶかき山の夕暮はこもり聲にぞ鳩もなきける　信實朝臣

同 をとこ山おいのさか行く人はみな鳩の杖にもかゝりぬるかな　衣笠内大臣

同 庭さすをかべのましは末なびき（さわぎイ）はとふきかはす秋の初風　正三位知家卿

○正治二年百首、鳥五首中
とらせけむ行くへもしらぬ園にきてあたらひうちと鳴くやなになる　小侍従

をりにあへば鳩ふく秋の山人も萬づよとこそ聲たてつなれ　隆信朝臣

鶉

籠のうちにまだ住みなれぬ鶉鳥は心ならでも世をすぐすかな　土御門院御製

○百首御歌

呼びかはす（へイ）て（兒）この鶉鳥朝おきにいかゞまがへて世を過さまし　爲家卿

○文治七年毎日一首中

むれてゐるはるひえ鳥の水はみに枝ふみたるゝ岸の山吹　源仲正

○家集、岸欵冬

鳲（はしはみ）

怪しくも風にをるてふさゝなぎのはしばみよりも長く見ゆらむ　堀河右大臣

○はしばみと云ふ題を人々よむときゝて心みに

放鳥

萬一　しまみやのまなの池なるはなち鳥人めにこひて池にくゝらず　讀人しらず

○題不レ知

山櫻ちりしく池のはなち鳥おのが羽風も浪やよすらむ　常磐井入道太政大臣

○弘安元年百首、花

新六六　このうちの名殘わするなはなち鳥心のまゝにあくがれぬとも　衣笠内大臣

○六帖題

同　うかれ行く我が身のはてや放ち鳥しばしとだにも誰かをしまむ　爲家卿

鵼（ぬえ）

○家集、雜歌中

○題不知

○六帖題、みやこどり

○[illegible]守になりて下りけるに

○家集

○都どり

○はりまのしかまにて都どりのなくをききて

○つくしへ罷りけるにわだの御と云ふ所に都鳥のみえければ

○千五百番歌合、

○あづまへ下り侍りけるに

雨にまた水ぞひぬなり夜もすがらもの思ふ宿に鵼の聲しつ　俊頼朝臣

さらぬだに世のはかなさを思ふみにぬえなきわたる曙の空　西行上人

萬十 久方の天の河原にぬえ鳥のうらびれ（なけましつ萬）おりつくるしきまでに　赤人

都鳥

萬二十 ふな木ほふ堀江の川のみなぎはにきゐつゝなくは都鳥かも　讀人しらず

いざさらば昔をとはむみやこ鳥なには堀江にいまも鳴くなり　中務卿のみこ

舟とむる難波堀江にきゐるなりこれはたかつの都鳥かも　權僧正公朝

こしの海にむれてゐるともみやこ鳥都の人ぞ戀しかるべき　順

やそしまの都どりをぞ秋ののにはなみて歸るたよりにはみる　好忠

六二 わび人のすみくる宿の都鳥ことゞてたえて年をへぬらむ　讀人しらず

ふるさとをこふるねざめの浦風に聲なつかしき都鳥かな　相摸

名にしおはばしらじなわたの都鳥心づくしのかたはとふとも　俊頼朝臣

思ふ人あるにつけても都鳥あはれいまはとのりのかはをさ　寂蓮法師

こと問はむはしとあしとはあかざりし我がこし方（すむ日記）の都鳥かも（とイ日記）　安嘉門院四條

此の歌路次記云なるみのかたを過ぐるにしほひの程なればさはりなく

ひがたをすぎて行くすみだ川のわたりにこそありときゝしかどみやこ（日記ナシ）（此間詞歌アリ）
どりといふとりのはしとあしとあかきはこのうらにもありけりと云々

百舌鳥

○家集
垣根にはもずのはやにえたててけりしでの田長に忍びかねつゝ　後　頼　朝　臣

○正治二年百首
秋ののにもずのにえさしいかならむ露ふき結ぶ夕ぐれの風　民部卿範光

○題不レ知
萬十
春さればもずの草ぐきみえずとも我はみやらむ君があたりは　讀人しらず

○正治二年百首
尋ねこしもずの草ぐきくもりなく霞晴れ行くよにぞありける　隆　信　朝　臣

○六百番歌合、寄レ鳥戀
面影をほのみしまのに尋ぬれば行方もしらずもずの草ぐき　同

此の歌方人云みしまのにもずの草ぐきをよまれたるいかに證歌侍る歟
證歌なくては如何判者云みしまのにもずの草ぐき證歌あるべきよし如
何いづれの野によむべしよむまじきといふことや侍る

○百首歌、秋
散りぬべきはじの立枝の紅葉ばにもずのをふりのしたり顔なる寂　蓮　法　師

○賀茂社百首御歌
拾玉四
あさてほすはづきの枝にゐるもずの靜かならばや賤が庵まで　慈　鎭　和　尚

○詠レ鳥
萬十　新六二
秋の野の尾花が末になく鵙の聲きくらむか方（わくイ）きく吾妹子　讀人しらず

○六帖題
風わたる尾花が末にもずなきて秋の盛りとみゆる野邊かな　民部卿爲家

三六二
もずのゐるふる枝の萩も霜枯れてあしたの原に秋ぞくれゆく　衣笠內大臣

鵐（しとゞ）

人とはぬ冬の山路の寂しさよ垣根のそばにしとゞおりゐて　定家卿
○十題百首

風をいたみ田中のくろい山（やぶイ）がくれ垣根の側にしとゞおり鳴く　第三のみこ
○正治二年百首御歌

雨ふれば垣根のしとゞそぼぬれて囀りくらす春の山もと（ざイ）　源仲正
○常磐井百首、閑中春雨

鵤（いかるが）

春の日の長閑にかすむ山里にものあはれなるいかるがの聲　寂蓮法師
○百首歌中

雀

すそのには今こそすらしこだか狩山のしげみに雀かたよる　後京極攝政
○十題百首御歌

なるこひく田面の風になびきつゝ浪よる葉のむら雀かな　定家卿

友雀ひきゐておりぬ山城のとばたのおもにおちぼ拾ふと　三條入道左大臣
○正治二年百首

夜をかさねまがきの竹にふしなれて軒端に來るむら雀かな　前中納言忠良卿

呉竹のねぐらあらそふ村雀それのみともにきくぞ寂しき　二條院讚岐

夕さればまがきの竹のむら雀これをも友にたのむなりけり（とイ）　源師光

思へたゞすゞめの雛をかひおきて育つる程は悲しきものを　土御門内大臣

○百首御歌
明けぬるか木ずゑに夜はの雪とぢてねやの軒端に雀なくなり　慈鎮和尚

○三百六十首中
閨の上に雀の聲ぞすだくなるいでたちがたに夜やなりぬらむ　好忠

○家集、田家歌
いな雀むれ渡るなり賤のやの門田のひたにてだまやすむる　六條院宣旨

山陵鳥（やまがら）

○六帖題
新六六 山がらの廻すくるみのとにかくにもてあつかふは心なりけり　光俊朝臣

○十題百首
玉雑三 籠の内も猶羨まし山がらの身の程かくすゆふがほのやど　寂蓮法師

小陵鳥（こがら）

友ねしてはぐゝみかはすこがらめの思ふ人だにある世なりけり　寂蓮法師

○正治二年百首
はねかはすこがらめふしを見てもまづ我獨りねの契りをぞしる　小侍従

○賀茂社百首御中
春來ても見よかし人の山里にこがらむれゐる梅のたち枝を　慈鎮和尚

○百首御歌
みやまべの嵐にうつるこがらめは時雨に囀く木の葉なりけり　土御門院御製

○家集、寄二小鳥一戀
竝びゐるこがらめふしの中に入りて割なく人にむつれぬるかな　源仲正

四十唐

○十題百首

あさまだき四十唐めぞたゝくなる冬籠りせる蟲のすみかを　寂蓮法師

鶍(かやくき)

○正治二年百首

おく霜にかれもはてなでかやくきのいかで尾花の末になくらむ　正三位經家卿

庭叩

○十題百首

さらぬだに霜がれはつる草の葉をまづうち拂ふ庭たゝきかな　定家卿

○同

女郎花おほかる野邊の庭たゝきさがなきことな人に教へそ　寂蓮法師

鵒(ぬか)

○正治二年百首鳥歌

ことにわが一こはなれてかふぬかの額づくことは君を祈りて　慈鎭和尚

増子鳥(ましこ)

○昔を思ふといふことを

増子ゐるゐるゐのくづちはらうち拂ひみぎはかたてし昔こひしも　源仲正

時雨こし梢の色を思へとや枝にもきゐるてりましこかな　寂蓮法師
○十題百首

冬がれの岡邊に來るてりましこ紅葉にかへる梢なりけり　第三のみこ惟
○正治二年百首御歌

火焼松（ひたき）

百敷にすみか定めよひたき鳥なれかやどりも庭にみゆめり　源師光
○正治二年百首歌イ

思ひかねしばとりくぶる山里をなほ寂しとや火焼なくなり　寂蓮法師
○十題百首

松茟（まつむしり）

みやま木の雪ふるすよりうかれきて軒端に傳ふ松茟かな　同

都々鳥（つゝどり）

これもまたさすがにものぞ哀れなるかた山影のつゝ鳥のこゑ　同

水乞鳥

夏の日にもゆる我が身のわびしさに水乞鳥の音をのみぞなく　伊勢
○夏のいとあつき日人のもとにつかはしける　水イ

君をおきてことこひするは奥山に水乞鳥の水こふること　俊頼朝臣
○寄二小鳥一戀といふことを

山里は谷のかけひのたえ／＼にみづこひどりの聲聞ゆなり　西行上人

○家集、山家秋中

山の井の結ぶ雫や濁るらむみづこひどりのあかぬけしきは　寂蓮法師

○十題百首

箱鳥

新六六 春されば友まどはせる箱鳥のふたかみ山にあさな／＼なく　衣笠内大臣

○六帖題、はことり

同 よるは來てあくる悲しき箱とりはいつ浦島にかよひ初めけむ　爲家卿

同 夜は來て明くればかへる箱鳥は辛(つら)きならひにねをや鳴くらむ　正三位知家卿

同 明け渡るみむろの山の箱鳥はふた／＼とこそ飛びあがるなれ　光俊朝臣

ふたむらの山の端しらむ東雲にあけぬと告ぐる箱鳥の聲　小侍徒

○正治二年百首

佛法僧

わが國はみのりのみちの廣ければとりもとなふる佛法僧かな　慈鎭和尚

とりの音も三の御のりをきかすなりみ山の庵の明方のゆめ　家隆卿

○十題百首

うき事をきかぬみ山の鳥だにもなくねにたつるみつの御法を　寂蓮法師

新六六 松の尾のみね靜かなる曙にあふぎてきけば佛法僧なく　光俊朝臣

○六帖題

龍

○家集、寄ㇾ漬戀

契りあれば鵜の羽ふきけるはやまにも龍の宮姫通ひしものを　源仲正

虯（たつ）

○元永元年十月法性寺入道關白歌合

口惜しや雲居かくれにすむたつも思ふ人にはみゆなるものを　俊頼朝臣

○建保三年名所百首

雲騷ぎ日影にのぼるたつの市のうることもなき人を戀ひつゝ　從三位行能卿

虎

○百首絅歌、獸イ

人心てがひの虎にあらねどもなれしもなどか疎くなるらむ　土御門院御製

○六帖題絅歌、とら

たれか今竹の林に身をすてむうゑたる虎はある世なりとも　中務卿のみこ鎌倉

○十題百首

たか山のみねふみならす虎のこの登らむ道の末ぞはるけき　定家卿

世の中の虎おほかみは何ならず人の口こそ猶まさりけれ　後京極攝政

○弘長元年百首

ありふればもろこしならぬ我が國も虎の口をばえやは逃るゝ　後九條内大臣

○六百番歌合、寄ㇾ獸戀

身を捨てて思へどいかゞからくにや虎ふす谷に世をも盡さむ　法橋顯昭

もろこしの虎ふす島もへだつらむ思はぬ中のうとき景色は　寂蓮法師

六二一 あさぢふの小野の篠原いかなればてがひの虎の臥牀ならむ　讀人しらず
○虎

ものゝふのさげはくたちの尻鞘の虎の尾ふみて恐ろしい世や　權僧正公朝
○家集、雜歌中

ものゝふのたち尻鞘の虎のをは此の國にても踏まば恐ろし　同
○六帖題、虎

熊

荒熊のすむといふ山はしはせ山せめていふとも汝が名はつけし　讀人しらず
○題不レ知

あら熊のなれて住むなるしはせ山山もいかにか烈しかるらむ　後嵯峨院御製
○三百首御歌

あらぐまのすみける谷をとなりにて都に遠き柴の庵かな　後京極攝政
○十題百首御歌

信濃なるすがの荒野に住む熊のおそろしきまでぬるゝ袖かな　俊賴朝臣
○家集、雜歌中

新六二 おく山に住むあら熊の月のわに夜めこそいとゞ曇らざるらめ　衣笠內大臣
○六帖題

新六二 人なれぬすがの荒野のあら熊のいるやの崎もしらずがほなる　正三位知家卿

同 熊いすむ苔の岩山おそろしみうべなりけりな人も通はぬ　信實朝臣

同 みやまぢに住む荒熊も子をおもふ友にはなづく心あるらむ　爲家卿

猪

君こふとるのかるもより寢覺めしてあみけるぬた（泥土）に憔悴れてぞふる　俊賴朝臣
○戀歌中

○家集、行路春雨
春ののにいざ思ふとぢをがやふくあますの下(さイ)にゐのこぶしせむ　源仲正

○月照三草中ニ
てる月に萩のもとあらも慕はれてけきよく見ゆる斑猪のふし　同

○十題百首御歌
驚かぬ伏猪の牀のねぶりかなさらでも夢にすぐる此の世を　後京極攝政

落ちつもる木の葉も幾重埋むらむふす猪のかるもかきも拂はで　定家卿

○久安百首
戀をして伏猪の牀はまどろまでゐたうちさます夜半の寢覺めよ　待賢門院安藝

○保延四年權中納言經定卿歌合、月
秋の野のかるもが下に月もりてならびふす猪の影もかくれず　法性寺入道關白家三川

奥山のふす猪の牀やあれぬらむかるもも たえぬ雪の下葉(しばイ)は　後鳥羽院御製

○六帖、とこ
新六二 うちたえてさのみ伏猪の牀づめにかるもの亂れ朽ちや果てなむ　俊實朝臣

○正治二年百首
さえわびてふす猪の夢やさめぬらむかるもの牀に霰ふるなり　前大納言忠良卿

○六帖題
新六六 はた山の尾上續きのたかがやに伏猪ありとや人とよむらむ　爲家卿

○家集、戀歌中
いかにせむ伏猪もしらぬ浪の上も蜑のかるもに猶みだれつゝ　從二位家隆卿

牛

○賀茂社百首御歌
冬のきてはむものもなき牛の子のやせ行く里の頃のさびしさ　慈鎭和尚

○十題百首歌題
道のべにすぎける牛の跡みれば心の水はたぐひありけり　後京極攝政

霜がれの野がひの牛の景色までたつはものうき冬のやま里　寂蓮法師

○正治二年百首

里ちかく山路の末はなりにけり野がひの牛の子を思ふ聲　寂蓮法師

○百首御うた、けだもの

此の頃の賤がたがやすからすきの牛と思ふもちからなのよや　土御門院御製

○文永六年毎日一首中

いかにとよあべのの芝生跡もなし牛をさへひく蠶のたくなは　爲家卿

○同十一年毎日一首中

庭の面にさをとる牛のからすきにわたりて續く春のたをやめ　同

○六帖題

數多みゆる遠方野邊の牛の子のおやおやしりてつれぞ別るゝ　爲兼卿

新六二
ゆきの島まきのこ牛の三年にてはなさす程もたへがたのよや　衣笠內大臣

同
逢路わけ都にきたるはなれ牛草につけてや盛りみるべき　正三位知家卿

同
稻葉わけひとの田のあぜひく牛のよき道もなき時代なりけり　光俊朝臣

同
ことごとしことひの牛の角先のききあかみるも恐ろしのよや　信實朝臣

六二
敷島の大和ことひの音なればおもしろくこそけふは引きぬれ　讀人しらず

○七百首歌中

みゝあらふ人もなければ山川に水かふ牛をひきもかへさず　權僧正公朝

○六帖題、うし

綸にかける二つの牛をみる時はつながぬ身こそ長閑なりけれ　同

○權僧正永緣の許より牛を贈られたりける返しに九牛一毛の心を

嬉しさをきかする程はこゝのつの牛の一つのけにも及ばず　俊頼朝臣

馬

○家集、雜歌中

萬十一
家路には石ふむ山もなきものをわがまつ君か馬のつまづき　中納言家持卿

○題不レ知
○堀河院中宮御歌合、野馬夜嘶一字抄
○御集、春のくれの御歌中
○家集、文應元年毎日一首中イ
○六帖題
○長承三年六月常磐五番歌合、野徑草深
○六帖題
○家集、ちかに住みけるにたはぶれうた人々よみけるに
○建長七年顯朝卿千首
○六百番歌合、寄獸戀
○賀茂社百首
○百首御歌
○正治二年百首

同
妹が髮あげさゝはののはなれ駒あれ行きけらしあはぬ思ひは　讀人しらず
同十二
ませごしに麥はむ駒の野らなれど猶も戀しく思ひたたぬを　同
草しげみ粟津の野べのたはれ駒夜半にいばゆる聲きこゆなり　同
かへる春ひまの駒とめ逢坂の關のしみづにしばし水かへ　後德大寺左大臣
秋の夜の月げの駒にかけなべてわけしさがのは露も忘れず　爲家卿
新六二
旅人のはたごの馬のゆきふりになつのの草をすさめやはせぬ　同
新六一
關こえてくるればかへる大津馬のおのが一つれ道急ぐべし(なりイ)　正三位知家卿
新六五
おひつるゝなかにの駒にさすかたのほのみえ渡る後の荻原　源仲正
竹馬におきふしなれしそのかみのよゝはふれども忘れやはする　知家卿
竹馬を杖にも今日は賴むかなわらは遊びを思ひいでつゝ　西行上人
うなゐ子がたなれの駒の朝がひに露原はるゝをのの草ぶし　從二位行家卿
道遠みいもがり急ぐその駒に草とりかはむなづみもぞする　中宮權大夫家房卿
みまきより草おふ馬のくちのこをみるも悲しき世の習ひかな　慈鎭和尙
朝每にひま行く駒をはやめつゝいかなる方へ人のゆくらむ　土御門院御製
とゞめあへぬ隙行く駒といひながらいかにあけゆく秋の風ぞも　正三位季經卿
乘るこまも空ふく風に心あれや月あけぬれど出でもやられぬ　土御門院內大臣

いはた川谷のくもよにむらぎえてとゞむる駒の蹄も仄かに　後鳥羽院御製

○家集

餘所にみし大あらきの駒も草馴れて懐く許りに野はなりにけり　好忠

○寄馬毛雪

際もあらば小黒に立てる青鷺のこま〳〵とこそいはまほしけれ　信頼朝臣

○當座後百首、羈旅郭公

朝だちに駒のにくらをいそぎおきてききおほせつる時鳥かな　源仲正

○家集、雜歌中

やみなれど妹が宿をざさして行く月びたひなる駒にまかせて　同

○競馬

きほひ馬の鼓に我を打ちこめていだしも果てぬ世にこそ有りけれ　同

○堀河院御時百首

相坂の關路に今日や秋の田のほさかの駒をつれ〳〵とひく　權大納言公實卿

をがさ原すゞろにやくる下草になづまず歩くつるぶちの駒　仲實朝臣

○撰集、無常心を

たゞしばしおくれ先だつ競馬のはしりけならぬ世にはあらずや　花山院御製

○殿下競馬

かた〳〵にいとめる駒の足なみを五月ならではいつか比べむ　祭主輔親

○文永八年毎日一首中

千早ふる神のゆふしで引きかけて今日は異なるとほつらの馬（のれば大鏡）　為家卿

（大鏡六）とほつらの馬ならねども君がのるくるまも的にみゆるなりけり（ものかな大鏡）　和泉式部

此の歌は祭の日あるきんだちのまとのかたを車のわに作りたるをみて

よめると云々

○家集

乘りかへしはつまならねど世の中をねたくもとのみいはれぬるかな　信頼朝臣

○建久七年百二十八首

黒かりしわが駒の毛のかはるまでのぼりぞなづむ峯の庵に　定家卿

○久安百首御歌

岩がねのこりしく山をこえくれば我が黒駒もきになりにけり　崇徳院御製

○馬

山高み石ふむ路のはるけさに龍の馬をもいま得てしがな　實清朝臣

○題不レ知

六二 日本記 とつゐあまり八つゐを越ゆる龍の駒君すさめずばおいはてぬべし　讀人しらず

萬五 龍の駒をあれば求めむあをによしならの都にこむ人の爲　同

同 龍の駒も今もえてしかあをによしならの都にゆきてみむため　同

○むま

萬十三 衣手をあしげの駒のなくこゑも心あるかもつねにげになく　同

同十一 山しなのこばたの里に馬はあれどかちよりぞ送る君を思へば　同

○源顯家馬毛名歌合、足はらのつゐぶち馬

雲間よりとぶ足はらのつるぶちに難波の蘆けおひつかむやは　同

○しらいとのくりげ

白絲のくりげひき出でてみるからにふす淺茅生の虎毛なりけり　同

六五 まな鶴のあしげの駒や汝がぬしの我が門すぎば歩みとゞまれ　同

○六帖題

新六二 あれまさる駒のしなはのとりもあへず靜め難きは心なりけり　衣笠内大臣

○熊野へ參り侍りけるに馬やどの王子にかきつく云々

誰もみなそのうまやどに馬はあれど神の使にかちよりぞゆく　家長朝臣

新六二 數ならぬ身にしられたる馬さぐりさのみや同じ跡をふむらむ　信實朝臣

○馬

陸奥のまきのあら駒みの程にのりゐぬものは心なりけり　爲家卿

○久安六年十二月顯輔卿家歌合、冬月

冬の夜の月の光を雪かとてたなれの駒をはなちつるかな　太宰大貳重家卿

此の歌判者八條入道大相國云右歌月を雪と見てたなれのこまをはなつ

とよまれたるは何事にか若し雪中放レ馬朝尋レ跡と云ふ詩にやそれはことのおこりある事なり昔管仲といふものありき齊桓公臣也桓公孤竹といふ國をうちて歸る時道にまどへり管仲云老馬之智可レ用これによりて老馬を放ちて其の跡にしたがひて本國にかへる事を得たりとなむいへり道をしらむためにこそ馬をはなつなどもいはまほしけれたゞ雪ふらば馬をはなたむ事いかゞと云々

犀

○十題百首

うき身には犀のいき角えてしがな袖の涙もとほざかるやと　寂蓮法師

猿

○同

花ざかりむなしき山になく猿の心しらるゝはるの月影　定家卿

○百首御歌、獸

月影に命をかふる猿よりもしづみはてぬる我が身なりけり　土御門院御製

○百首歌中、無常

世の中をおもひしとけば山の井の月の影とるましらなりけり　後徳大寺左大臣

○六帖題御歌、さる

足引の山のゆきあひになく猿の聲のうへふむ峯のかけはし　中務卿のみこ

○百首歌、山家古松

谷ごしの松のふる枝や友猿の山傳ひするみちとなるらむ　寂蓮法師

○千五百番歌合
雲かゝる生駒高峯に月落ちて三輪のひはらにましらなくなり　後鳥羽院宮内卿

○六帖題
新六二 しぐれゆく秋の梢の木の葉ざるわが色がほにをしみてぞなく　爲家卿

同 深き夜の深山がくれのとのゐ猿ひとりおとなふ聲の寂しさ　信實朝臣

○猿
現存六 やはらぐる山のかひある日よしとやよもの猿（ましら）も悟りきぬらむ　祝部成茂

○閑詠百首、夜雨聞猿斷腸聲
木の下の雨に鳴くなるましらよりもわが袖の上の露ぞ悲しき　慈鎭和尙

○たかみに侍りける時むかひの山にさるの鳴きけるを
さらぬだにねざめの牀の寂しきに木傳ふ猿の聲きこゆなり　俊頼朝臣

○永久四年百首、さる
永久 たかのみこいとも怪しとみましけり猿麿をしもひきたててとや　同

同 夕づくひさすや嵐の山陰に物わびしきにましらなくなり　仲實朝臣

同 三たびてふ聲だにきけば餘所人に物思ひまさるねをのみぞ鳴く　藤原忠房

同 思ふことおほしの山に世の中をいかにせましと三聲なくなり　源兼昌

同 足引の山邊にあそぶ木の葉ざる思ふ心ぞありてなくなる　太皇大后宮肥後

野干

○百首御歌、獣
きつねだに影をうかゞふ山河の氷の上をふみてのみゆく　土御門院御製

○百首歌、獣五百首中
花をみる道のほとりのふる狐かりの色にや人迷ふらむ　藤原爲顯

○六帖題
新六一 人も見ばあなしら〴〵し老狐いとゞも晝のまじらひなせそ　信實朝臣

○十題百首御歌
古里の軒のひはだは草あれてあはれ狐のふしどころかな　後京極攝政

相坂の夕つけ鳥もともとやつかを離れてきつねなくらむ　寂蓮法師

つかふるき狐のかれる色よりも古きまどひにそむる心よ　定家卿

犬

○文永三年百首
山里は人のかよへるあともなしやどもる犬の聲ばかりして　定家卿

○寶治二百首御歌
玉櫻三
さとびたる犬の聲にてしられけり竹より奥の人の家居は　同

○弘長四年毎日一首中
思ひくまの人はなか〳〵なきものを哀れに犬の主をしりぬる　慈鎮和尚

○百首歌、獣五首中
一筋にいとひすつべき家の犬なにのよごとの人とがむらむ　爲家卿

○十題百首
さよ更けて急ぐ砧のあたりまでうたてもさらぬ里の犬かな　藤原爲顯

主しらぬ岡べの里をきてとへば答へぬさきに犬ぞとがむる　後京極攝政

兎

○百首御歌
なにとなく通ふ兎もあはれなりかたをか山の庵の垣根に　慈鎮和尚

○家集、雑歌中
月みても頼みをかけてまち渡るみちはしとなる兎住みけり　俊頼朝臣

○百首歌、獣五首中
まよふなり月の光の白うさぎ雪には深きみちもわすれず　藤原爲顯

○十題百首
露にふすうの毛の(ぬイ)いかにしをるらむ月の桂の影をたのみて　定家卿

猫

○十題百首
餘所にだに夜毎もしらぬ野ら猫のなく音は誰に契りおきけむ　寂蓮法師

○寄野戀
まくず原したはひありく野ら猫のなづけがたきは妹が心か　源仲正

○御集
しきしまの大和にはあらぬ唐猫の君が爲にぞもとめ出(たイ)でたる　花山院御製

此の御歌は三條の太皇太后宮よりねこやあるとありしかば人のもとなりしがをかしげなりしをとりてたてまつりしにあふぎのをれをふたにつくりてくびにつなぎてあそばされし御歌と云々

狢(たぬき)

○十題百首
人すまで鐘もおとせぬ古寺にたぬきのみこそ鼓うちけれ　寂蓮法師

鼠

後の世にみだの利生をかふらずばあなあさましの月の鼠や　後京極攝政

○家集、月をながめて
わがたのむ草のねをはむ鼠ぞと思へば月の恨めしきかな　俊頼朝臣

○百首御歌
冬がれの草葉にさわぐ日のねずみ昨日は今日になるぞ程なき　土御門院御製

世をしのふ心のうちのあな鼠やすくいづべき道もあるらむ　同

○久安百首
のどけかれ月の鼠よ露の身を宿す草葉の程もなき世に　清輔朝臣

いかにせむかかれる草の露のよを月のねずみはねに騒ぐなり　花園左大臣家小大進

○小式部内侍を婦らんじて和泉式部につかはしける
よめの子の小鼠いかゞなりぬらむあな美しと思ほゆるかな　法性寺入道関白

○御返事
君にかくよめのことだにしらるればこの小鼠の罪かろきかな　和泉式部

鼯（むさゝび）

○題不知
萬七　みくに山木ずゑにすまふ鼯の鳥まつがごと我まちやせむ　坂上郎女

○むさゝび
現存六　さよ更けて寂しくもあるかたかまどの尾上の宮のむさゝびの聲　源仲業

○題不知
萬六　ますらをのたかまど山を攻めくれば里におちくる鼯ぞこれ　坂上郎女

○同
鼯は木ずゑもとむと足引の山のさつをに逢ひにけるかな　志貴皇子

○六帖題
新六二　むさゝびのかたへおちくるみ山木に曉深くさゆる月影　為家卿

同　むさゝびの梢に來ゐるむら鳥をあはれ〳〵とまつやくるしき　知家卿

同　むさゝびの聲をちかたの山もとに里遠げなる森のひとむら　信實朝臣

春日山夜ふかき杉の梢よりあまたおちくるむさゝびの聲　為氏卿

龜

新六三 河ごしの道のなかぢ（をちのたなかの両本）の夕暗になにぞときけば龜のなくなる　同

ふりにけりいそのいはやに住む龜は幾年なみを重ねきぬらむ　前大納言爲定卿

わたつうみの石の龜だにいるものを古里遠みこひざらめやは　衣笠内大臣

判者光俊朝臣云石龜萬葉三代集中にも見及び侍らぬ事にておぼつかなく侍り文選にみるごとくならば思反身於綠水催ニ興於舟一尋但以ニ非蛙之智一難レ定ニ石龜之事一仍不レ加レ判云々

現存六 潮の間に釣するあまの流し繩くるよは龜のうき木なりけり　從三位行能卿

六三 古川の底のこひぢにありときく龜の甲ともしらせてしがな　讀人しらず

新六三 水とけて春はのどけき池水に汀のかめも日かげまちけり　衣笠内大臣

同 河の瀬にうきたる龜のさし櫛は見し世ながらのしるしなりけり（り）　光俊朝臣

思ひあまり（かねイ）龜の占へに言問へばいはぬもしろき身の行方かな　權僧正公朝

河龜もいま萬づ代はもろともに波の底にて住みわたるらむ　元眞

大井川　よろづ代（かめイ）をへて　すむ龜の　よはひゆづると　むれたりし　あしまのたづの　さしながら

○千五百番歌合

○建長八年百首歌合（五イ）

○家集、かめ

○かめ

○日影かめ（ナシイ）

○二條兵部卿の八十賀の屏風の歌
禁中の家の前に河あり此の水に龜あり

○久安百首、長歌

○河のむに氣をいたーして
○文治二年百首、又〔？〕一調〔？〕浮木ニ據者注文懸　マヽ
一〔家〕集、月あかきにかひふく聲をきこしめして
〔〕わすれ貝、題不知
○〔玉〕集
○同、戀歌中
○建保三年名所百首御歌　保イ
○わすれにけるかと申したりける女の返事に
○いさかひ、題不知
○同、あはび貝
○文治六年五社百首
○さくらがひ、内裏のかなあはせに人にかはりて

浮ぶてふうき木の龜にあひぬればこぞ（かうイ）のつみこそ心やすけれ　主　殿

（拾遺愚草上）
たとふなる浪路の龜のうき木かは明けて（あはでイ）も幾夜しをれきぬらむ　定　家　卿

貝

貝の音にふけ行く空はたぐひつゝ月みる程にあけぬべきかな　花山院御製

（萬七）
いとまあらば拾ひにゆかむ住吉の岸によるてふ戀わすれ貝　讀人しらず

（萬十二）
わかの浦に袖さへひぢて忘れ貝ひろへど妹に忘られなくに　同

（六三　續後撰戀五）
伊勢のうみに蜑の取るてふ忘れ貝忘れにけらし君はきまさず　同

忘れ貝ひろふばかりに住吉のうらみてわたる程はへにけり　元　眞

わすれ貝よせもやすると住吉の岸うつ波を數へつるかな　同

みつの濱いそこす（越イ）浪のわすれ貝忘れず見ゆるまつがねの夢　順德院御製

（四王）
白浪のいらこが島のわすれ貝人わするとも我わすれめや　俊（基俊イ）成　卿　女

（萬十一）
水そこの玉にまじれるいそ貝の片戀のみにとしはへにつゝ　人　丸

（萬十一　新勅戀四）
伊勢の蜑の朝な夕なにかづくてふあはびの貝の片思ひにして　同

浪かける岩根につけるあはび貝こや片戀のたぐひなるらむ　俊　成　卿

ふく風に花さく浪のをるたびに櫻かひよるみしまえの浦　西　行　上　人

○同、こがひ

難波潟しほひにむれて出でたたむしらすの崎のこ貝ひろひに　同

○そで貝

浪あらふ衣の浦の袖がひをしほひに風のたゝみおくかな　同

○すだれ貝

浪かくるふきあげの濱のすだれ貝風もぞおろす急ぎ拾はむ　同

○すゞめ貝

波による（近よするイ）竹のとまりの雀貝うれしき世にもあひにけるかな　同

○からすがひ

浪よするしらゝの濱の烏貝ひろひやすくも思ほゆるかな　同

○堀河院御時百首（うつせがひ）

思ふことありその海のうつせ貝あはでやみぬる名をや殘さむ　大納言師頼卿

○梅花貝人のもとより貝をこひて作りけるを遣はすとて

春風に波やをりけむみちのくのまがきのしまの梅の花貝　俊頼卿

○六帖題

新六五 さても又猶あふことはかたし貝ならびふしてもかひやなからむ（何にかはせむ新六）　知家卿

○同、いたや貝

新六三 あやしくもうら珍しきいたや貝苫ふくあまの習ひならずや　信實朝臣

○建長七年顯朝卿家千首、述懷、われがひ

和歌の浦ふるきくだけのわれ貝もひろへる數に又まじりぬる　同

○長久元年良子瀾主家歌合、ちぐさのかひ

君が代のためしとみゆるなが濱にちぐさの貝の數もつきせじ　讀人しらず

○みやこがひ

ともすれば戀しきかたに（もイ）名におへる都貝をぞまづ拾ひつる　同

○むらまつのはまと云ふ所はせみがひある

せみ貝の聲かときけばむら松の岸うつ浪のひゞきなりけり　同

○さまざまの花がひどもおほくよりたるを見て

えだながら渦まく浪もをらねばやちりぢりよする千代の花貝　同

○ふな貝

こぐ人も渚によするふな貝はふきくる風やつなぐなるらむ　同

○らうつ

立ち（たつイ）さわぐ蘆の本葉をかき分けて浦うつかひを拾ひつるかな　同

○なでしこ
ちしほしむ撫子貝もしくいろは倭からにもあらじとぞする（思ふイ）
讀人しらず

○内裏の貝あはせの歌に人にかはりてをす（そイ）ほのかひ
潮そむるまほす（そイ）の小貝拾ふとて色の濱とはいふと（にイ）やあるらむ
西行上人

○永承六年（久元イ）五月皇子内親王家歌合　ふぢかた
ふぢかたに濃き紫のいろ貝はいくしほ浪かそめかへしけむ
讀人しらず（ナシイ）

○永萬二年五月經盛卿家歌合、戀
潮みてばいそまになびく色貝のうきみしづみこひ渡るかな
菩提院關白家

○建保三年名所百首
伊勢島や二見の浦のかたし貝あはで月日をまつぞつれなき
藤原康光

○建久（長イ）元年五月皇子内親王歌合、ふぢかた（むらさきのかひ）
紫の貝よる浦のふぢかたは浪のかくるぞ花とみえける
讀人しらず

蝸牛

○百首御歌
家をすて（いでイ）ぬ心は同じ蝸牛たちまふべくもあらぬ世なれど
土御門院御製

○十題百首
牛の子にふまるな庭の蝸牛角のあ（ナシイ）ればとて身をな頼みそ
寂蓮法師

○永仁二年爲相卿家會、雜談中
家は捨てずなにかなにはの蝸牛津の國ありと身を頼むらむ
藤原爲顯

蜻蛉

○正治二年百首御歌
春雨に軒のかげろふみえわかずくれゆく雲のたど〳〵しさに
後鳥羽院御製

○百首御うた、蜻蛉
蜻蛉は（のイ）命かけたる夕露にたまのをすがく雲のいとすぢ
順德院御製

○六帖題
夕暮の軒のかげろふ見るまゝにあはれ定めもなき世なりけり
衣笠内大臣

○春日社百首、さわらび
蜻蛉の飛火の野邊のさわらびや先づもえ初めて折にあふらむ　藤原隆祐朝臣

○六帖題
新六一
あはれなり山おろしふく夕暮になき數まさる軒のかげろふ　光俊朝臣

○建長八年百首歌合
蜻蛉の夕さりくれば飛ぶほたるなれもなに故もゆる思ひぞ　法師寶伊（仲イ）

○三百六十首
かすがのの野中ふる道長き日に日影のどかにもゆるかげろふ　爲家卿

○十題百首
夏の日もあたりにしらぬ袂かなかげろふわたる竹の下風　寂蓮法師

○述懷百首
三日月の影にかゞよふ蜻蛉のほのほかにてもよを過すかな　俊頼朝臣

○かげろふ
六一
蜻蛉のひとめばかりに（はほの六）おぼめきてこぬ夜數多になりにけるかな　讀人しらず

蛛

○家集
思はじを（とイ）あれたる宿にかきくらす雲のいがきに風したまらば　和泉式部

わが袖は蛛のいがきにあらねどもうちはへて露の宿りぬるかな　知家卿

○寶治二年百首
秋のきて風吹きたたばさゝがにの蛛のあらがきあれまくもをし　同

○十題百首御うた
軒端よりまがきの草に（竹イ）片かけて風を限りのさゝがにの絲　後京極攝政

○月五十首歌
月のすむ軒端にかくる蛛の絲（いのイ）あるかなきかの身をいかにせむ　爲家卿

○隱居百首
むぐらはふおどろにまじる蛛のいのさも睦まじき我が心かな　同

○正嘉二年毎日一日中
誰がくべき宿とかたのむふる雨にたまりて飾るさゝがにの絲（宿イ）　同

○六帖題
○建長八年百首歌合
○百首うた
○家集松の木にくものいかきたるに露のおきたるをみて
○くものいにつゆのかゝれるを
○百首歌中

新六六 暮毎にねやつくりするさゝがにの軒端のつまに誰をまつらむ　爲家卿
新六六 かたしきに（きしイ新六）あらぬ軒端の便りにもかけ作りなるさゝがにの宿（いと新六）　信實朝臣
羨まし軒端にかゝるさゝがにのさもこと安き家つくりかな　従二位行家卿
天の河流れてくだる雨をうけて玉の網はるさゝがにの絲　西行上人
はかなしや朝日まつまの露おきて蛛手にぬける玉と見けるよ　和泉式部
さゝがにの絲にかくれば（かゝれるイ）白露はあれたる宿の玉すだれかな　能因法師
さゝがにもまた冬ごもるふるさとの軒端にかゝる青柳の絲　家隆卿

蝶

○文治三年百首、雑歌中
○十題百首御歌
○正治二年百首
○述懐歌
○家集、春の歌中
○三輪百首、蟲
○家集、薄招蝶

菊かれて飛びかふ蝶のみえぬかなさきちる花や命なりけむ　定家卿
我が宿のはるの花園みるたびにとびかふてふの人なれにけり　後京極攝政
常夏のあたりは風ものどかにて散りかふものは蝶のいろ〳〵（かずイ）　寂蓮法師
秋の野となり行く庭にとぶ蝶もねをこそたてねものや悲しき　家隆卿
尋ねくるはかなきはにも匂ふらむ軒端の梅の花のはつてふ　同
面白や花にむつるゝから蝶のなればや我も思ふあたりに　源仲正
はかなくも招く尾花にたはぶれてくれ行く秋をしらぬ蝶かな　同

蝙蝠

○家集

人もなく鳥もなからむ島にてはこのかはほりも君（たイ（ぞカ））も尋ねむ　和泉式部

○はやうみし人の物語などして歸りて扇を落したるをやるとて返し

うらさびて鳥だに見えぬ島なればこの蝙蝠ぞ嬉しかりける　同

蓑蟲

○松に蓑蟲のつきたるをすけちかおこせたりける

いかでかは露にもぬれむ雨ふれどもらし（えイ）が磯（とイ）の松の蓑蟲　祐擧

○返し、祐擧家集歌

みのむしの宿れる松のもとよりやぬれじと人は賴みそめけむ　讀人しらず

○家集、蟲

蓑蟲のすがる木の葉も落ちいでてつくかたもなき秋の暮かな　源仲正

○家集、柳にみのむしのつきたるを

雨ふれば梅の花がさあるものを柳につけるみのむしやなぞ　和泉式部

○十題百首御歌、蟲

古里のいたまにかゝる蓑蟲のもりける雨をしらせ顔なる　後京極攝政

春雨のふりにし里を來てみれば枕のちりにすがるみのむし　定家卿

ちぎりけむをぎの心もしらずして秋風たのむ蓑蟲の聲　寂蓮法師

守宮（ゐもり）

○寶治二年、寄蟲戀

我がせこがこぬだに辛（つら）き風の音にさこそはなかめ秋の蓑蟲　知家卿

○十題百首
ゐもりすむ山下水の秋の色は結ぶてにつくしるしなりけり　寂蓮法師

○百首御うた
神がきや斎るいのりは違けれど守宮のしるし猶やみゆらむ　土御門院御製

○寛喜四年内裏十首歌合
うたがひしゐもりの跡はそれながら人の心のあせにけるかな　二條院讃岐

○六帖題
新六五　哀れまたつくる心の山ぞなき守宮のしるしそれとみながら　知家卿

海月

○家集、連歌中
我が戀は海の月をぞまちわたる海月のほねにあふ夜ありやと　源仲正

海老

○老人心を
今は我よを海にすむ老えびのもくづが下にかゞまりぞせる　同

蟹

○蓮開雪
横はしろあしまの蟹の雪ふればあなさむげにや急ぎ隠るゝ　同

○三島社奉納神樂
あしはらの刈田の面にはひちりていなつき蟹も世を渡るらむ　權僧正公朝

魚

○六帖題御歌、魚
白き魚の御船のうちに入りしこそ代を治むべきしるしなりけれ　中務卿のみこ

○同
小車のわだちの水のかれ〲にひれふる魚は我をよばふか　權僧正公朝

○同
新六三 魚の子のかへるたのみもあるものをさらぬ別れの跡（程イ）ぞ悲しき　信實朝臣

同 雨すぐるた（田）のき（涯）のさ（狹）井の水溜りありはつまじきよをや頼まむ　正三位知家卿

○魚
同 夏河のせだえの水にすむ魚のせめ來るかたをしる時もなし　爲家卿

○戀歌中
こひをのみすさの入江に住む魚のうきぬ沈みぬ味氣なのよや　家隆卿

新六一 をとこやま秋の今日とや誓ひけむ河瀬に放つよものうろくづ　知家卿

○家集、網ひかせてみるにひく人の苦しげなるを見て
あみだぶといふにも魚はすくはれぬこや助くとはたとひなるらむ　和泉式部

○述懷百首歌
濁りなきみのもに月の宿らずばいかであさぢの數をしらまし　俊頼朝臣

此の歌はたなかみに侍りけるにまへの入江に月うつりて魚のあそぶもかくれなくみえければよめると云々

鯉

○六帖題
新六三 世の中は淀のいけすのつなぎ鯉身を心にもまかせやはする　知家

同 こぎまはる港の舟のこひはぜ（か新六）にひれのさわぎの浪高くみゆ　信實朝臣

同 水ふねに浮びひれふるいけ鯉の命まつまもせはしなのよや　光俊朝臣

○家集
宇治河の早瀬おちまふれう舟のかづきにちかふ鯉のむらまけ　西行上人

○寄逍遙
戀ひしなば鯉もしねかしなぞもかくこやの簗になぶられてふる源　仲正

鮒

○六帖題
新六三 古はいともかしこし堅田鮒つゝみやきなるなかの玉章　衣笠内大臣

同 志賀の浦にすなどる鮒をあはれ〳〵沖にもてきて放ちてしがな　光俊朝臣

同 ふしつくるおどろが下に住む鮒のいまの命も定めなのよや　知家卿

かれはてて後はなにせむにし河や悲しむ鮒のことわりぞかし　權僧正公朝

鮎

○題不知
萬六 隼人のせとのいはほも鮎はしるよしのの瀧になほしかずけり　帥大伴卿

○河歡木與同
歡木雜 をかみ川やきのはゐえに鮎つりて遊ぶもさめぬそのね思へば　俊頼朝臣

○江漁魚
しらなははは小鮎引かれて下る瀬にもちまふけたるこめのしき網　西行上人

○家集中に
新六二 賀茂河の後瀬しづけみさでさして鮎ふす淵をねるやたが子ぞ　爲家卿

○六帖題、鮎
同 鮎はしる瀧のいはつほわきかへりみるも涼しき水の色かな　衣笠内大臣

同 みやま河のぼる小鮎のたてながしからくも濁る世に生れけむ　知家卿

○土御門のうちのおほいどの春の比こがのさんさうに久ゐたまひたりしに

同 あさな／＼ひなみ備ふるかつら鮎あゆみを運ぶ道もかしこし　信實朝臣

あだなりと餘所(よめイ)にはみえて山河のかけへの鮎もかもつくるなり(あイ)　權僧正公朝

鮎はしるにしかはにのみ住みつきて花の都の春もすぎぬる　同

鰷

○六帖題

新六三 冬河の岸のした行く水ぬるみはえある世にもあひにけるかな　衣笠内大臣

○述懐百首

ふしつけしおどろが下にすむはえの心幼き身をいかにせむ　俊頼朝臣

鯼(いしぶし)

○家集、述懐

誰かさは網の目みせてすくふべき淵に沈める石ぶしのみを　源仲正

鯛

○六帖題

新六三 紀の海に引くてふ鯛の沖かけておくほどみゆるうけの數かな　衣笠内大臣

同 みなづきや君の情にあひそめてうくてふ鯛は今もありけり　知家卿

同 わぎもこがためと思ひてつる鯛はさこそ心にうけも引くらめ　信實朝臣

のどかなる春の日がたの浦浪に鯛つる小舟けふもいづらし　中務卿のみこ

あま人や鯛つるらしもなるみ潟沖津なみまに袖かへるみゆ　爲家卿

櫻鯛花の名なればあをやぎの絲をたれてや人のつりけむ　權僧正公朝

○三百六十首中
を鯛つるかるもの蜑も春くればうら／＼毎に眺めやぞする　好忠

○鯛
六三 あふことをあこぎが島にひく鯛のたび重ならば人しりぬべき　讀人しらず

鱸

○六帖題、鱸
新六三 夕なぎのふぢ江の浦の入海にすゞきつるてふ蜑のをとめ子　衣笠内大臣

同 鱸つるさをのたわみの緒をよわみ浪の便りによせてこそひけ　信實朝臣

同 夕なぎの港かたかけみつ汐にすゞきつる舟さしわたすみゆ　光俊朝臣

同 ひれふりし秋の鱸を思ひ出でてたれいかばかりよべど返らぬ　知家卿

○題不レ知
玉葉二 暮るゝ間にすゞきつるらし夕汐のひがたの浦にあまの袖みゆ　爲家卿

○家集中
秋風に鱸つる船はしるめりうのひとはしの名殘したひて　西行上人

○家集、とゞむれどとまらぬ戀といふことを
秋風にすゞきのなます思ひ出でてゆきけむ人の心地こそすれ　俊頼朝臣

○家集、秋海眺　初戀
すゞきつるあまの友舟さそひ出でよあさゐる風に浪も靜けし　源仲正

○永久四年百首、泉郎
くろし（うイ）がたこぎいづる蜑の友船はつ鱸るにや浪も分くらむ　神祇伯顯仲卿

○題不レ知
萬三 あらたへのふぢ江の浦にすゞきつる蜑とか見らむ旅行く我を　人丸

同

〇六帖題御歌、すゞき

〇題不レ知

萬十二　萬代
鱸つるあまの小舟のいさりびの灰かにだにや妹にあはざらむ　聖武天皇御製

秋のよのふけひの浦に船出して月にやあまの鱸つるらむ　中務卿のみこ

萬三
鱸つるふけひの浦のあまもが（にもか萬　だにイ）今なきゆきていへつゝ（しイ）まみむ　讀人しらず

夫木和抄巻第二十七終

夫木和歌抄　卷第二十八

雜歌十

題

草　竹　篠　葛　苔　日陰草
山橘　淺茅　茅花　蘿　鞭草　蘆
海松　藻　菰　蓬　思草　忍草
忘草　百代草　白慈草　爾古草　市　菅
萱　濱木綿　小々妻　藍　紅　紫
麻　葎　淺砂　蓼　芹　水葱
母子草　駒蘩　犬子草　土筆　折敷草　鏡草
莞草　射干　莎草　芝　山菅　目覺草
夕陰草　指燒草　萑　手向草　芭蕉　莫鳴菜
和布

草

○入道攝政九十賀屛風御歌

さをしかのゐるののの秋の下露にたれつまこめて草結ぶらむ　後京極攝政

○源顯家馬毛名歌合（あまのつむいそな草）
須磨の蜑の朝夕つめるいそな草けふからむちは波ぞうちける　讀人しらず

○障子繪に舟にのる人あり濱にもくづ多くよせたる所
沖つなみしきりによする濱邊には藻草かき分け貝もひろはむ　祭主輔親

○里のあまといふ所を（もしほ草）
桑門
もしほ草かきあつめたるかひありてみるめ嬉しき里のあま人　法印素覺

○家隆卿せうそこして侍りけるかへし
玉ならぬもしほの草もいかでかは藤江の浪にとはですぐべき　皇太后宮大夫俊成卿

○家集、もとのした草
露けくもなりまさるかなさくら麻のもとのした草拂ふ人なみ　元輔

○六帖題、うもれ草
新六六
大あらきの本あらの下の埋れ草さも老いらくの末ぞいぶせき　信實朝臣

○家集、春歌中（おもひ出ぐさ）
春ののはおひぬ物なく見ゆれども思ひいで草はなきよなりけり　忠岑

○戀歌中（こゝろのくさ）
雲葉
もの思ふこひぢや冬のほかならむ心の草は霜がれもなし　源師賢朝臣

○百首御歌、初戀（こひぐさ）
茂りあはむ末をもしらず戀草の宿の籬にめぐみこめぬる　慈鎭和尚

○千五百番歌合（はつくさ）
雲葉　新勅撰
春のなみの入江にまよふはつ草のはつかにみてし人ぞ戀しき　從二位家隆卿

○冬歌中（冬のわかくさ）
雲葉
霜がるゝよもぎがそまの枯れ間より雪げに似たる冬の若草　前中納言定家卿

竹

○千五百番歌合
この君とたのめて植ゑし唐人のちよの契りやいまのよのたけ　小侍從

○題不知
萬五
梅の花ちらまくをしみわが園のたけの林にうぐひすなくも　讀人しらず

○海道宿次百首、竹の下
山ふかき杉のしげみをふきおちてふもとに弱る竹の下風　爲相卿

○正治二年百首御歌
雪つもる有明の月は影さえてまがきの竹のうらみどりなる　後鳥羽院御製

○貞應三年百首歌
雨おもきまがきの竹のをれかへりくだれば上る露の白玉　爲家卿

○百首歌
岩にそふ竹のさ枝のしだれるやねに行く鳥のとまりをるらむ（うなイ）　光俊朝臣

○六帖題
（新六五）里人の軒端のたけのみしめ繩かけて祈りしるしあらはせ　衣笠内大臣

○家集、法文歌イ
いまはとて衣をかけし竹のはのそよさぞいかに悲しかるらむ　同

○家集、野邊イ
竹の葉にかけし衣の名殘かはとらふす野邊も睦ましきかな　六條院宣旨

○春日社百首
たけの葉に衣をかけしいにしへの人の心はなき世なりけり　隆祐朝臣

○二度百首詞うた
君ゆゑにとらふす野邊に身を捨てむたけの林の跡をたづねて　後京極攝政

○歳十五首
つなでひく竹のしたみちきりこめて舟ぢにまよふ淀の河岸　同

○家長朝臣すゝめける日吉社、竹間雪
神垣やおまへの竹に山おろしのたゆめばつもる庭の白雪　從二位家隆卿

○百首歌
はしだかのきりふの岡のたけの露ををふさの鈴とみがく月影　同

○寶治二年百首、里竹
風ふけば竹の葉そよぐあきしのの里も寒けき夕まぐれかな　衣笠内大臣

○百首歌
竹の葉も袂におちてから衣きなれの里のゆふべ露けし　正二位知家卿

○堀河院御時百首
むらさきの竹のまがきの藤ばかま契りありてや匂ひそめけむ　從二位家隆卿

○家の集、竹の子たをきたき物につかはすとて
いにしへの七のかしこき人もみな竹をかざして年ぞへにける　仲實朝臣

（赤染集）親のため昔の人はぬきけるを竹の子のため見るもめづらし　大江匡衡朝臣

○返し

同
雪分けてぬくこそ親のためならめこは盛りなる竹とこそみれ　讀人しらず

○六帖題

新六六
いかばかり雪の下なるたけのこのおや思ふ人の心しりけむ　光俊朝臣

○文應元年七社百首イ

何處よりおほし立てたる竹の子の楢の葉分けの影によるらむ　民部卿爲家

○弘長元年百首、呉竹

年たけてみかりにあひしこの川の人の名殘や岸のくれたけ　後九條内大臣

○寶治二年百首

新六一
くれ竹のよゝの昔にかけおきしたまかと見れば霰なりけり　光俊朝臣

○六帖題寶治二年百首里、竹

見渡せば波もかすみて河かみのゆづはのむらになびく呉竹　從二位賴氏卿

○百首歌

時わかぬおのが枯葉はつもれども色も變らぬ庭のくれ竹　從二位家隆卿

○八月十五夜内裏御會

月清みたまのみぎりのくれ竹にちよをならせる秋風ぞふく　前中納言定家卿

○光臺院入道二品親王家五十首、竹霜

五代までなれてふりぬる川竹のまた下影に霜ぞおきそふ　同

○文治二年女御入内御屏風

久しかれ君ちよませの河たけに色はえまさる常夏の花　隆信朝臣

○洞院攝政家百首

風ふけば汀になびくかは竹のおともあらはにこほる浪かな　從二位賴氏卿

○弘長元年百首、竹

もゝしきの玉のみぎりの御溝(みかは)たけ君が代長くうゑやそめけむ　常磐井入道太政大臣

○三島社七社百首歌

なよ竹のとほよる風の涼しきはひとよ隔てて秋やきぬらむ　權僧正公朝

○長歌

萬二
あきやまの　したへるいもな(ヤイ)　なゆ(ヨイ)竹の　とほよるこらは　人丸
いかさまに　思ひをりてか

○天元四年四月小野宮歌合、なぞなぞいぬのおひたるかひつ物

秋またぬ稲かと見しはなよ竹の下葉にねざすこにこそありけれ　讀人しらず

○久安百首、笛竹
笛竹をねぐらにならす鶯はさへづる聲もことにやあるらむ　待賢門院堀河

○長承三年六月常磐井五番歌合、竹風晩涼
ふえ竹にふすとりの音も涼しきは秋のしらべに風やふくらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○六帖題、一よへだつ
新六五 山賤の垣ほにかこふわれ竹のよませになどてあひみそめけむ（ね新六）（かイ）　光俊朝臣

○建保三年内大臣家歌合、谷竹風
風ならでとふ人もなき友なれや身をかくしすむ谷の呉竹　從二位家隆卿

○だいしらず
萬十九 わが宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけきこのゆふべかな　讀人しらず

○しのへ竹
新六六 うき節を思ひもいれずしのべ竹忍べどねこそまづなかれけれ（あカ）　衣笠内大臣

○ある女にふししげき竹をたぶとて
古今六 篠竹の節はあまたに見ゆれどもよゝに疎くもなり増さるかな　兵部卿御こ元眞

○家集、雜歌中
われなれや風をわづらふしの竹はおきふしものの心細くて　西行上人

○洞院攝政家百首、山家
かきこむるのだけの園にをかや吹く東やかたは都にも似ず　常磐井入道太政大臣

○長承三年七月常磐五番歌合、竹風晩涼（井イ）
ゆふさればまのの林に風吹きてやなぎの里ぞ夏はすゞしき　源仲正

○百首御歌中
人心神にたがはばまの竹のゆがまむかたをためて見よかし　慈鎮和尚

○賀茂社百首御うた
ふる雪にかもの河原を見渡せばたゞすの竹も下をれにけり　同

冬が今日たゞすの宮の呉竹に賀茂のみやまの山おろしの風　同

○題不知
萬代 ふる雪にとよらの竹の埋もれてひともよも見えずなりにけるかな　讀人しらず

○弘長二年當座百首
箱根路や山風そよぐさゝ竹のしのにみだれて霰ふるらし　安嘉門院四條

○千首歌
山賤のさかひになびく若竹のわか／＼しくて世をやすぎなむ　民部卿爲家

○建保元年老若五十首歌合
西のうみあらいそなみにより竹の一よになりぬ冬の日數は　後鳥羽院御製

○六帖題
新六六 數ならぬ賤が垣ほのあばら竹末をりかけてよをや過さむ　信實朝臣

○六帖題、から竹イ
同 から竹のふえにまくてふかば櫻春おもしろく風ぞふきける　正三位知家卿

○建長七年顯朝卿家千首歌合
うゑ竹のもとさへとよみ風ふけばそよゆら／＼にわれ忘れめや　光俊朝臣

篠

○別レ妻時
萬二 新古 さゝの葉はみ山もさやに亂るとも我は妹思ふ別れきぬれば　人丸

○題不レ知
萬七 かくしてや猶や老いなむみ雪ふる大あらきのの篠にあらなくに　讀人しらず

○保安三年法性寺入道前關白歌合 野風
古來歌 からさきやながらの山にあらねどもをざゝ波よるまのの秋風　權中納言師俊卿

○弘長二年篠槇宮百首
眺めやるたかねは春の日影にて谷のさゝふにきえぬ白雪　安嘉門院四條

○文永四年毎日一首中
くるゝ夜ぞ限りなりけるいなみ野の篠分くる道のはても見えね　民部卿爲家

○同七年毎日一首中イ 同イ
世々をへてうべさえけらし嵐山岩根のをざゝしもさやぐなり　同

○文永五年毎日一首中
さやぐらむをざゝの霜はしらねども遙かに白きひらの山の端　同

○家集、冬歌
月さえてゆふ霜こほる篠のはに霰ふるなりさらしなの山　從二位家隆卿

○洞院攝政家百首
秋は來ぬ露も嵐も月やまつそよさらしなの山のたまざゝ　同

○建保五年內裏歌合
むさしのや草はみながらうら枯れて霰にのこる篠の音かな　順德院御製

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれてゆくさき遠きのぢの篠原　安嘉門院四條

此の歌あづまへ下りけるに野ぢといふ所にて日くれかゝりて時雨しければと云々

○百首歌、多

いなみのやむこ山もとのをざゝ生に浦風さやぎ霰ふるなり　同

○家集、月歌

さよすがら武庫の浦風さえ〳〵て月ぞ隈なきゐなのさゝはら　權大納言實家卿

○御集、忍戀

時雨ふる大あらきのの小ざゝ原ぬればひづとも色にいでめや　鎌倉右大臣

○建保七年家十首歌

さゝの葉も上白妙に見ゆるまでおほあらきのにみ雪ふるなり　前大納言顯朝卿

○寶治二年百首御歌

篠の葉のさやぐ霜夜は水莖の岡のやかたにふしぞわびぬる　後嵯峨院御製

○同

そめておくやしほの岡の玉篠は君が八千代のすゑの緑を　俊成卿女

○同

よひ〳〵にさゝわくる袖は露おちて誰かしのびの岡の通ひぢ　後九條内大臣

○同

嵐ふくさのの岡べの朝つゆにさゝわけ衣ぬれつゝぞゆく　衣笠内大臣

○同

かれぬるかころものあきも神なびのあさ篠原の霜の下くさ　同

○同

さゝわくるきみよびかへせ古里のならしの岡の鳥のねならば　光俊朝臣

○寶治二年百首御歌

くれかゝるならびの岡を來てみれば露のみしげき小篠原かな　鷹司院帥

○建長八年百首歌合

露結ぶ小ざゝが原を見渡せばきそのみさかに秋はきにけり　左近中將具氏卿

○正治二年百首

雨ののち汀のをざゝ風ふけば露にたまそふ池のはちす葉　宜秋門院丹後

○千五百番歌合

花にあかぬよしのの奥の篠まくらいとはぬ月の雲がくれかな　具親朝臣

○百首御うた

五月雨にふる野のをざゝみがくれて雲に空なき三輪の山もと　慈鎮和尚

○家集、さゝを

山河の岩波のさゝはひたすらに忍びし節はあらはれにけり　俊頼朝臣

○洞院攝政家百首、忍戀

うへしげる垣根がくれの小篠原知られぬ戀はうきふしもなし　前中納言定家卿

○六帖題

新六六 山がつの賤が垣根のさゝくろめにぎはふまでの住家とやみし　信實朝臣

新六六 いもせ山なかにおひたる玉笹のひとよの隔てさもぞ露けき　同

葛（菖カ）（さきくさ）　草木雖レ未レ勘暫就二草字一草部入レ之

○家集康元二年毎日一首中

いかばかり久しかるらむかめやまの麓の松にまじるさき草　民部卿爲家

○千五百番歌合

古來歌 春毎にはこやの山にさき草のよろづよかけてとのづくりせり　家長朝臣

○大嘗會主基方御屏風

雲葉 あはづののこ萩が花に色そへて時しりがほにまじるさき草　宮内卿永範

○あやめを

千代ふべき宿のさき草ひき分けてみつばよつばにふく菖蒲かな　卜部兼直

○六帖題

新六六 いとゞ又作りますらむさき草の三つ葉四つ葉のさゝがにの宿（いと 新六）　正三位知家卿

苔

○延長四年御屏風

苔長くおふるいは井の久しさを君にくらべむ心やあるらむ　貫之

○延喜七年御屏風

續古今賀　家　六四
千代をふる松にかゝれる苔みれば年のを長くなりにけるかな　躬恒

○こけを

六四　六二　新古賀　躬恒集
常磐なる松にかゝれる苔なれば年のをながきしるべとぞ思ふ　讀人しらず

○家集、祝こゝろを

萬づ代をながらの濱のさゞれ石は今宵よりこそ苔は蒸すらめ　清原元輔

○堀河院御時百首、苔を

さよひめの遊ぶところか奥山のおをねか峯の苔のむしろは　權大納言公實卿

○同

河緣いはねが上にむす苔や空にのぼらぬけぶりなるらむ　前中納言匡房卿

○同

年ふれば苔のみづらをゆひわけ（かけイ）ていはの姿は神さびにけり　權中納言師時卿

○家集、苔上雪

年へたるいはほが上に雪ふりておいにけらしな苔の白鬚　源仲正

○文集百首

苔のおびに秋の山もと夕まぐれなかなかいまは物も思はず　慈鎭和尚

○述懷百首、こけを

いはたゝむ山のかたその苔むしろとこしなへにも物思ふかな　皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合

幾よへぬかざしをりけむ古に三輪のひはらの苔の通ひぢ　前中納言定家卿

○保安二年九月内大臣家歌合、庭露

岩の上の苔の葉ごとにおく露を玉しく庭とみけるやはわが　基俊

○承久元年内裏御歌合、庭苔

庭の面に苔のしがらみかけてけりせきいれし水の末弱るまで　從二位家隆卿

○千首歌

おく山の木だかき松のさかり苔おなじ綠に年やふりぬる　民部卿爲家

○六帖題御うた、こけを

谷ふかみとしふりにける岩がねの苔の葉なびき山風ぞふく　中務卿みこ鎌倉

○御集、夕立

風はやきをすての山の夕立にこけながらちるまきの下露　同

○寶治二年百首御うた、きしの苔

住吉とおもはむ人のためなれや岸にしくてふこけのさむしろ　後嵯峨院御製

○同
すみよしの浦わのきしによる浪の思はぬ程は苔むしにけり　衣笠内大臣

○同
まつとてもたれ住吉のきしもせむ浪の影ほす苔のさむしろ　民部卿爲家

日陰草

○六帖題
日影もて軒端ふくてふたましづめ永き世かけて猶まつれとや　前中納言爲兼卿

○同イ百首御歌
新六六
さばかりや木の下くらき奥山にあるべくもなき日陰草かな　光俊朝臣

○百首御歌
消えのこる垣根の雪のひまごとに春をも見する日かげ草かな　慈鎭和尚

○ひかげ
續詞花
けふかざす神のいがきの玉日かげ昔の事を尋ねてぞくる　讀人しらず

○日かげ
現存六
あかねさす日陰のかづら千代かけて少女さびすも祝ふ頃かな　從三位行能卿

○題不レ知
首四
我が宿のゆふかげ草の白露のけぬがにもとな思ほゆるかも　中納言家持卿

○爲家卿家百首
たぐひとてわがすむ宿の壁に生ふるみなしご草も衰へいつまで　從二位家隆卿

山橘

○題しらず
萬七
紫に絲をぞわがよる足引の山たちばなを拔かむと思ひて　人丸

萬二十
けのこりの雪にあへてる足引の山たちばなをつとにつみこな　讀人しらず

○物語
六五　萬四
足引の山たち花の色に出でて語らひつきてあふ時もあらむ　同

○貞應三年百首
岩間なる山たちばなの影みえて底まですめる庭のやり水　民部卿爲家

○六帖題
新六六
ふりにける卯月のけふのかみそぎは山橘の色もかはらず　正三位知家卿

現存六
岩がねは緑もあけもはへ色の山たちばなのときはかきはに　信實朝臣

淺茅

○題不レ知
萬十
我が宿の淺茅色づくふなばりのなみしばののは紅葉ちるらし　讀人しらず

同
わが宿の淺茅色づくふなばりのなづみの上に時雨ふりつゝ　同

萬八
秋萩はちりぬべからし(らなりイ)わが宿のあさぢか花のちり行くみれば　穗積皇子

○時鳥
六六
時鳥聲きくをのの秋風にあさぢさけれや音のともしき　讀人しらず

○家集、草花薄風
霧むすぶ秋には早くなりにけりあさぢが原の移ろふみれば　修理大夫顯季卿

○家集
さらぬだに秋はくまなき月影にあさぢが花をつみはやしつる　基俊

○題不レ知
萬六
印南野の淺茅おしなみさねし夜のけながくなれば家し忍ばる　赤人

○同
萬七
家にして我はこひなむいなみのの淺茅が下にてりし月よを　讀人しらず

○貞應三年名所百首
おのづからぬる夜も寂し印南野の淺茅おしなみわたる秋風　民部卿爲家

○三百六十首中
草木おふるあとの河原の淺茅野も殘らず霜に枯れはてにけり　好忠

○旅歌中
現存六
今日も又道行きくれていなみのの淺茅おしなみ旅寢してけり　從二位行家卿

○六百番歌合、蔦　あさぢたつ庭の色だにあるものを軒端の蔦はうちしぐれつゝ　寂蓮法師

○洞院攝政家百首　ふる雪の花野のあさぢ白妙になにの草木もわかぬ頃かな　光明峯寺入道攝政

○永曆元年八月清輔朝臣家後番歌合、雪　みかりする片ののをのを今朝みれば淺茅おしなみふれる白雪　源雅重朝臣

○文集百首　露そむる（むすぶイ）かたののあさぢ白妙に秋のよわたる風の寒けさ　前中納言定家卿

○同　宿しむる片岡やまのあさぢはら露にかたぶく月をみるかな　慈鎭和尚

此の歌者文集百首黃茅岡頭秋日晩、苦竹嶺下寒月低といふことなと云云

○寶元二年十月竹園御會　露をしくみかきが原のあさぢふに深き影みる秋のよの月　參議爲相卿

○六帖題御歌、あさぢ　このねぬる朝露さむみ水ぐきのをかのあさぢに秋風ぞふく　中務卿みこ鎌倉

○題不レ知　萬十二　春日野の淺茅が原におくれゐてその時となくわがこふらくは　讀人しらず

○文應元年七社百首　秋風はけふよりふきぬ春日野の淺茅が露もいかにおくらむ　民部卿爲家

○文永十年毎日一首中　ゆく秋の末葉の淺茅露霜のふるから小野ぞかねてしらるゝ　同

○文應二年毎日一首中　大原やをののあさぢの冬がれに霜さえまさるよはの月影　同

○洞院攝政家百首　夢かとも里の名のみや殘るらむ雪に跡なきをののあさぢふ　前中納言定家卿

○百首御歌　續千載雜上　あれにけり伏見の里のあさぢ原むなしき露のかゝる袖かな　式子內親王

○建保三年名所百首　むさしのの淺茅色づくいまよりや夜さむの衣かりもなくらむ　正三位知家卿

あらち山峯の淡雪いかならむ麓のあさぢうら枯れにけり　　僧正行意

○家集三十首歌、夕雲
あらち山夕日がくれの淺茅原いろづきぬとや蟲のなくらむ　　從二位家隆卿

茅花

○六帖題
新六六
ふる川の岸のあたりのあさくさにつばな浪よる夏の夕風　　民部卿爲家

同
日影くれ涼しき山のかたくだり茅花なびきて風わたるなり　　前中納言爲兼卿

○君臣歌合
青みわたるしばふの色も涼しきは茅花さゆる（かるゝイ）夏の夕暮　　同

○六帖題
新六六
春もすぎ夏もきぬらし野べに出でて茅花ぬきにも誰を誘はむ　　光俊朝臣

○家集三百六十首中
つばなぬく淺茅が原もおいにけり白わたひける家とみるまで　　好忠

新六六
春雨のふるのの茅原（あさぢイ）今日見れば茅花ぬくべくなりぞしぬらし　　衣笠内大臣

○家集、春歌中
つばなぬく片野の原の壺すみれ若紫にいろぞかよへる　　江中納言匡房卿

蘰（かづら）

○題しらず
萬二
玉蘰花のみ咲きてなすあるは（らざらばイ）たが戀にあらめ我がこひ思ふを　　巨勢郎女

萬十二
ゆふだゝみしらつき山のさねかづら後も必ず逢はむとぞ思ふ　　讀人しらず

丹波路（たにはぢ）の大江の山のたまかづら絶えむの心わが思はなくに　　同

○建保三年名所百首
夕すゞみ（たゞイ）大江の山もたまかづらあきをかけたる露ぞ涼しき　前中納言定家卿

○六帖題、さねかづら
新六六 思ふこと大江の山のさねかづらくるとあくとに嘆きつゝのみ　正三位知家卿

○建保三年内大臣家百首
いかにせむ逢坂山のさね葛はふきあまたにうつりはてなむ　従二位家隆卿

○文永六年毎日一首中
玉かづら露おきそへて大江山いくのをかけてすぐる夕立　民部卿爲家

○千首歌
秋深きすその露の玉かづらたゆるときなく蟲のなくらむ　同

○六帖題歌、玉かづら
み山木の末まではへる玉葛とりつくかたもいまはなき身か　中務卿みこ

○題不レ知（六帖）
萬十一 さねかづらいまする妹がうなひ髪（うらわかみ萬）ゑみみ怒りみきつゝ紐とく　讀人しらず

○爲家卿百首
初鴈の山とびこゆるさねかづらくる程しるき秋風ぞふく　従二位家隆卿

○六帖題
新六六 ときは木のかげのにしける玉葛苦しき物と世をぞしりぬる　衣笠内大臣

同五 磯のかみふるのの小野の玉かづらかけて昔をこひぬ日はなし　同

○寛元三年結縁經百首
草の原うは葉にはへる青葛くるしやことのしげき夏野は　民部卿爲家

鞭草（つゞら）

○述懐百首
柴の庵にはひおほゝ（とイ）れる青鞭草（つゞら）むつかしげなる世にもふるかな　俊頼朝臣

○六帖題
戀をのみするがの海の濱鞭草ゆふ浪かけてほすかたもなし　後九條内大臣

○家集十首歌中、戀の心
島人の縈みにはへる青つゞらくるしきものは夕されの戀　神祇伯顕仲卿

○文永四年毎日一首中
をぐら山松の下葉に青つゞらみちなき世こそ人くるしけれ　民部卿爲家

○建長四年毎日一首中
うたて世は荒礒山の瀧つゞら何につけてかたち上(のぼ)るべき　同

○家集、古今一句歌
谷せばみうきふし繁きあをつゞらいかに心をのばへてかみむ　從二位家隆卿

○百首御うた
日にそへてしげりぞまさる青鞭草くる人もなきまきの板戸に　後鳥羽院御製

○十首
柴垣の上はひかゝる青つゞらとひくる人やたえてなからむ　民部卿爲家

○六帖題
新六　永き日もくるすのをのの青つゞら末はさしそひ茂る頃かな　衣笠内大臣

新六二　しけり行くしばをの山のくり(きイ)つゞらくるゝも長きみな月の空

○家集、冬草
霜ふれば野原のつゞらふしたえて駒のつまづくつら物もなし　源仲正

○永久四年百首、餘寒
雲きえぬ青葉の山のあをつゞら春はくれども猶寒きかな　藤原忠房

○題不知
現存六　かへるさのあしたの原の青鞭草くるしき道といまぞしりぬる　讀人しらず

○百首歌、守山
青つゞらしげきひとめをもる山の下に通はぬ道ぞくるしき　藤原爲顯

蘆

○家集、毎日一首中
わかの浦代々のあしはら(朝イ)立ちかへりみたれば幸しよその白浪　民部卿爲家

○關屋入道攝政家百首、題蘆
津の國のなにはいつまで忍びけむ霜がれはつるとやの蘆原　同

○百首うた
あぢのすむすさの入江の蘆のはに綠まじらぬ冬は來にけり　同

○建長五年毎日一首中
いかにせむうきぬの澤にはふ蘆の下のみだれもわき難き世を　同

○文應二年毎日一首中
あしつきの夜のまの霜の影さえてさながら映るこやの池水　同

○弘長元年百首
遙かなる港の汐のながれ江に蘆の葉さむくこほるうら風　前大納言爲氏卿

○建保三年内大臣家百首、水郷寒蘆
大井河入江のあしの霜がれに殘るもさむき松の色かな　從二位家隆卿

○龜山十首歌、朝寒蘆
大井川すさきのあしの冬がれにあさけの霜のさえぬ日はなし　按察使資平卿

○堀河院御時百首
霜がれの野べのほとりの萎(しを)れ蘆は行きかふ駒もすさめざりけり　權大納言公實卿

○同
津の國の須磨の浦風ふくたびにしをれし蘆の音のみぞする　大納言師賴卿

○貞永百首御歌、早秋
あけてみるあしまの露の玉くしげ二見の浦に秋はきにけり　洞院攝政

○家集、水澤蘆葉
見渡せばあしはおしなみ茂りあひて道たど／＼し堀江こぐ船　修理大夫顯季卿

○百首歌
汐風にしをれにけりな流れ蘆のおきふし春をまつとせしまに　基俊

○御集
續古戀四
さはだ川ゐでなる蘆のかりそめに淺しや契り一夜ばかりは　中務卿みこ

○家集
さはだ川ゐでなる蘆の葉はかれて影さすなべに春ふけにけり　好忠

曾丹集
のちおひの角ぐむ蘆の程もなき憂世の中はすみうかりけり

○わすれたる人にいひやる
蘆間行くうぢの河浪流れてもひをのかばねをみせむとぞ思ふ　元眞

○百首歌、水鳥
しをれ蘆のふし葉が下にあさりする假の憂世を流れてぞふる　俊頼朝臣

思はずよなが井の浦の蘆分けの都になほもさはるべしとは　權大納言實家卿

此の歌は津の國わたりにかよふ女の都へかへりて後猶とかくさはると
て物申さざりしにつかはしけると云々

○百首御うた
冬きてはあらはれぬらむ蘆の葉にかくれてすみし水のえの月　順徳院御製

○家集、雜歌
すゝたれるこやのあれより漏る月やみししほ蘆のめにもあるらむ　俊頼朝臣

○永保三年十月侍子内親王家歌合
蘆花
むら／＼にさらせる布と見えつるは玉江の蘆の花にぞありける　源頼綱朝臣

○嘉應二年住吉社歌合、述懷
住吉のうきにおひたるしをれ蘆を波ひきたてよ神の惠みに　土御門院内大臣

○貞應三年百首
夏かりのあしのふるねの又はえに短くたまる冬の白雪　民部卿爲家

○六帖題
新六六
人なみに倩も世渡る流れ蘆のうきふし／＼はうきになしつゝ　同

新六三
けふもこずうきにかゝるてふ蘆づゝの薄きや人の契りなるらむ　正三位知家卿

○建保三年名所百首
鶴のなくたみのの島もしぐれつゝあしの枯葉に浦風ぞふく　從二位範宗卿

○承安三年廣田社歌合、判者俊成卿
沖津すに潮やみつらむあさりするあしまの鶴の立ち騷ぐめり（なりイ）　智經法師

○承保四年九月殿上歌合蘆花
古來歌
難波江にひまなくよする白浪と見えこそわたれ蘆の若ほの　藤原惟信

○冬歌中
なにはがたあしの花ふく浦風に浪にもきえぬ雪ぞちりける　右近大將通（忠イ）

○千五百番歌合
住吉の堀江の蘆も霜枯れてよそにもしるきみをつくしかな　法橋顯昭

浪かくる君にあふみのかただ舟茂きあしまをゆく方ぞなき　家長朝臣

○正治二年百首
みだれ蘆のほむけの風の片よりに秋をぞよするまのの浦浪　後京極攝政

○文應元年七社百首、寒蘆
冬きてはをばなに續く蘆のほのひとつによするまののうら浪　　民部卿爲家

○建保三年内大臣家百首、水郷寒蘆
まのの浦入江にすだく水鳥のうきねのあしも霜がれにけり　　大藏卿有家

○弘安三年新熊野宮百首
おく霜に人めばかりはかれあしの下にかはらで春やまつらむ　　安嘉門院四條

○題不レ知
萬十四
みなとあしの蘆の中なる玉小菅かりこ我がせこ牀のへたしに　　人丸

○家集
濱荻のおひしところにふみ分けて夕霧がくれたづぞなくなる　　同

○舟
六三　萬九
あしとみてこぎ行く舟は高島のあしまの（とイ）道につきにけむかも　　讀人しらず

○久しくまゐらざりける人たびたびになりければ
新宮女御集
うらみつの濱におふてふ蘆茨みひまなくものを思ふ頃かな　　天曆御製

○長歌
萬一
ならのみやこの　さほがはに　いゆきいたりて　わがねたる
ころものうへに　あさづくよ　さやかにみれば　あしのほに
よるの霜ふり　いはとこの　　人丸

海松

○百首歌
この頃は南の風にうきみるのよる〳〵涼しあしのやの里　　前中納言定家卿

○六百番歌合、見戀
妹が島荒磯による浮きみるのうきをもみるはみぬに優れり　　法橋顯昭

○家集、寄レ海戀
ちぬの海浪に漂ふ浮きみるのうきをみるはたゆかしかりけり　　俊頼朝臣

○家集、みるといふものを人のおこせたるを
磯に生ふるみるめにつけて鹽竈の浦寂しくも思ほゆるかな　　爲頼朝臣

○長歌
萬六 みけむかふ　淡路の島も　たゝむきて　みぬめのうらの　お　赤人
きべには　ふかみるとれり

○反歌
伊勢のうみの　あさなぎに　きよるふかみる　夕なぎに　き　讀人しらす
よるまたみる　ふかみるの

○題不レ知
良玉 打ち寄するみるかひありてよさの海の遊びの浦に頃もへぬべし　同

藻

萬七 うぢ川に生ふるすかもの川早みとらできにけり苞にせましを　讀人しらす

萬九 難波がた汐干にいでて玉藻かるあまの少女等なが名づけさね　同

○家集
かるもかきたく鹽竈にあらねども戀の煙や身よりたつらむ　大納言經信卿

○永承四年十一月内裏歌合、池水
新古賀 池水のよゝに久しくすみぬれば底の玉藻も光みえけり　伊勢大輔

○千五百番歌合
思ふこといまこそなけれわかの浦に沈む藻屑も花咲きにけり　法橋顯昭

○類集、戀歌
田子の浦の荒磯の玉藻浪の上にうきてたゆたふ戀もするかな　鎌倉右大臣

○寶治二年百首、寄煙戀
しほたれて我が身すくもにたつ煙蜑のしわざといつ思ひけむ　民部卿爲家

○文應〔永イ〕元年七社百首
ひをのよる網代にかゝる流れ藻の暫しまじるも厭はれやせむ　同

○六帖題御うた、藻
とにかくに人の心はみだれ藻の靡くとみるも頼まれぬかな　中務卿みこ

○建長八年百首歌合
蜑の刈る藻に庵して住む蟲の名はしりながら名を恨みつゝ　光俊朝臣

○皇子内親王家歌合、池氷一重疑
萬三
春の池にひとへのこれる（こぼれるイ）薄氷あをむ玉藻もかくれざりけり　美作

○題不レ知
萬三
たま藻かるとしまをすぎて夏草の野島が崎に舟近づきぬ　人丸

○長歌
萬二
とぶとりの　あすかの河の　のぼりせに　おふるたま藻は
くだりせに　流ふれふる（けりイ）　同

○家集、戀歌中
いつしかもけふをくらして飛鳥河渡りてはやく玉藻かづかむ　貫之

○六帖題
新六三
みさご居る濱の眞砂のうちあけに浪際見えてよるもくづかな　光俊朝臣

菰

○題不レ知
萬十一
まこもかるおふの川原のみごもりにこひこし妹か紐とく我は　讀人しらず

○三百六十首中
蛙なく井手のわかごも（とイ）刈りほす（るイ）と束ねもあへず亂れてぞふる　好忠

○六百番歌合
ゆく末の深きえにこそ契りつれまだ結ばれぬよどのわかごも　後京極攝政

○家集、右（石イ）義の宮の御許にちまきたてまつるとて
ふかざはの菰をぞかれる君が爲たまは衣のうらにかへらむ　和泉式部

○夏歌中
萬代
みしまえの玉江のまこも夏がりに繁く行きかふをちこちの舟　相摸

○題不レ知
六五　萬十一
刈菰のひとへをしきてきぬれども君としぬれば寒けくもなし　讀人しらず

六五　袖中抄
陸奥のとふのすが菰なゝふには君をねさせて我みふにねむ　同

○久安百首
○洞院攝政家百首
○六帖題
○建保四年内裏百首歌合
○同三年名所百首
○家集、みつ河にて
○文治六年五社百首
○家集
○毎日一首中
○同
○同
○千五百番歌合、如[illegible]
○[illegible]二年[illegible]関白家歌合、判者
○正治二年百首

君待つととふのすが菰みふにだにねてのみあかす秋をぞ重ぬに　前参議教長卿

山賤のふせやのまこもあみめよりかつみだれいる冬の白雪　民部卿爲家

寳六六　かりてほす淀野の眞菰あみ絲のちがひめおほき我が憂へかな　信實朝臣

風吹かばみなわになびく刈菰のみだれてのぼる淀の河舟　後久我太政大臣

下書讃　舟とむるみつのみまきのまこも草からで假寐の枕にぞしく　俊成卿女

刈りのこすみつの眞菰にかくろへて影もちかほになく蛙かな　西行上人

蓬

直しとてあさの蓬はなにならずみだれてもあれ野べの刈萱　皇太后宮大夫俊成卿

わが宿の雪はいくへと春やみむあれにし後の蓬生のかげ　前中納言定家卿

さくら麻のかりふの跡のよもぎにぞ移り行くよの程は悲しき　民部卿爲家

ふくとみし菖蒲はかるゝ古里の軒のしのぶにまじる蓬生　同

春またぬ冬がれのみもなにとして深きよもぎの跡やおくらむ　同

身につもる風の通ひ路尋ねずば蓬の關をいかですゑまし　寂蓮法師

かた〳〵にとるかたもなき蓬草人數ならぬ心ちこそすれ　讀人しらず

とふ人や山ぢの影にあとたえてよもぎが末に風ぞふくなる　前大納言忠良卿

○六帖題
新六六 まきもくの檜原に似たるかり蓬そまの茂みとうべいもひけり　信實朝臣

○弘長元年百首
山陰にしげき蓬のそまつくり我がすむ庵のかこひにぞかる　同

○家集
たれかきてみるべきものと我が宿のよもぎふ嵐吹き拂ふらむ　和泉式部

○蓬
現存六 霜深き庭にをれ伏す蓬生のたつかたなくて身はふりにけり　隆祐（信イ）朝臣

○爲家卿家歌合
きりぐ〵す庭の蓬のそまかたに聲ふきまよふ霜のゆふがほ　従二位家隆卿

思草

○秋雜歌中
萬十 道のべの尾花が本の思ひ草いまさらなにかもの思ふべき　人丸

○堀河院御時百首
ひくまののかやが下なる思ひぐさまた二心なしとしらずや　仲實朝臣

○建保三年名所百首
春日野の霞がくれのおもひ草下の思ひのはるゝよぞなき　正二位忠定卿

○同年内大臣家百首
春日野にまた霜がれのおもひ草おもふ心は神ぞしるらむ　正二位家隆卿

○同年内裏御會に、曉増戀
曉の牀はしほせのおもひ草人を見らくの夢もすくなし　同

○建保元年老若五十首歌合
春日野や下もえわたるおもひ草君のめぐみを空にまつかな　前中納言定家卿

○正治二年仙洞御會、枯野霜
朝霜の色にへだつるおもひ草きえずば疎しむさしのの原　同

○同年百首
あさぢふの露のみふかき思ひ草色をみすべき言の葉もなし　隆祐（信イ）朝臣

○光臺院入道二品親王家五十首、寄レ草戀
いかにせむしのぶの奥の思ひ草われのみしりて年はへにけり　従三位範宗卿

忍草

○六帖題

新六六 人しれぬ胸の思ひのせきいたに軒のしのぶはさぞ茂るらむ　信実朝臣

忘草

○延喜六年月次御屏風、忘草

六帖六 拾雑上 うちしのびいざ住のえの忘れ草忘れし人のまたやつまぬと　貫之

○忘草を

藻仁 片時もみてなぐさめよ昔よりうれへ忘るゝ草といふなり　中納言兼輔卿

○建保四年百首

下紐のゆふてもたゆきかひもなし忘るゝ草を君やつけけむ　前中納言定家卿

○嘉元元年百首、不レ逢戀

した紐につけたる草はなのみして心にかれぬ人の面影　参議為相卿

百代草

○六百番歌合

百代草もゝよまでなど頼めけむ刈り初めぶしのしぢのはしがき　法橋顕昭

○六帖題

新六六 露筆きいへの園なる百代草もゝよ妹こひそでぬらしつゝ（つもイ）　光俊朝臣

白慈草（すまひぐさ）

○百首歌合事と云ふ事を

けふにあふ雲居の庭のすまひ草とるてもあだに映るものかな　前参議雅経卿

すまひ草秋のはつきの折しりてうつる花にはたちなまじりそ　藤原為顕
○永仁元年楚忽百首

爾許草（にこぐさ）

新六六
おく霜に枯れにけらしなあしかり（ら新六）の箱根のねろに茂るにこ草　衣笠内大臣
○六帖題

萬十一
あしがきの中のにこ草にこやかに我とゑみして人にしらるゝ　人丸
○題不レ知

朮（うけら）

萬十四
こひしさは袖もふくむを武蔵野のうけらが花の色にいづな夢　讀人しらず

同
あさか潟潮干のゆたに思へらばうけらが花の色に出でめやも　同

新六三
あさか潟うけらが花のいとゞ又色こそみえねとるもくれつゝ（くらしつゝイ）　正三位知家卿
○六帖題

菅

音きけば人のものおもふ山すげをこゝろみ顔にさける花かな　和泉式部
○家集

限りなく頼まるゝかな露ばかりうつろふ色にあらぬ山すげ　讀人しらず
○天暦十一年坊城右大臣家歌合、山菅

ときはなる山のやますげ世々をへて變らぬ色は君のみぞ見る　同

いかにせむ野澤に生ふるまろ菅のまろすげもなき戀にけぬべし　修理大夫顯季卿
○家集、戀歌中

○建長七年顯朝家千首

露深きまのにおひたるしら菅のしらじな袖のぬれしをるとも　光俊朝臣

○六帖題

新六六　かくれぬの初瀬の山のいは小菅いはぬも長き（ぞ新六）ねはなかれつゝ（ける新六）　衣笠内大臣

○同

新六六　菅の根はむべながからし片淵の沼田に（ホイ）ふかみ誰かうゑけむ　信實朝臣

○同題歌、すげ

したねさす潮の入江のしのび菅しのびもあへず辛（から）き世なれば　權僧正公朝

○題不知

萬十二　やましろのいづみの小菅おしなみに妹が心を我思はなくに　人丸

○百首歌

さりともなよもたゞにては山城のいづみの小菅いつかあひみむ　法橋顯昭

○百首歌

いづくまで今日はいくのの道ならむえもしら菅の草枕かな　正三位季經卿

○千五百番歌合

山影の岩もとすげのねたくのみ色もかはらぬ物思ふらむ　野宮左大臣

○西園寺入道太政大臣三十首

嵐ふく春のみゆきは吉野山すがのね白き花ぞふりしく　従二位家隆卿

○正治二年百首

逢はばやなよそながらのみ三吉野のみくまが菅の假寢なりともこ　喜多院入道二品親王み

○題不知

萬十一　三吉野のみくまが菅をあまなくにかりのみかりて亂れなむとや　讀人しらず

萬七　春日山やまたかゝらし石（いし）の上（うへ）の菅のねみむと月まちがてに　同

萬七　はしだての倉梯川の青菅を我かりて笠にもあます河のあをすげ　同

萬十一　うばたまの黒髪山の山菅にこさめふりしきます／＼ぞ思ふ　同

六帖六　大伴のみ笠にぬへるありま菅ありつゝみれどことなき我妹子　同

○相撲國歌

萬十四　あしかりのまゝの小菅のすが枕あせかまかさむころせ手枕　同

○東宮賀御屛風、さがみのあしがらを
○家集、雜歌
○建長八年百首歌合
○弘長元年百首
○長歌
○建保五年歌合、冬山霜
○題不レ知
○千首歌
○家集
○六帖題
○戀御うた中

足柄の山に茂れるたま小菅行きかふ駒もすさめざりけり　元眞
風ふけば箱根の山のたまこすげなびきて我に心とゞめよ　同
妹山の岩根におふるまろ小菅まろこすとてや露けかるらむ　從二位行定卿
徒らに朽ちやはてなむ鶴のなくなごえの小菅むすぼほれつゝ　衣笠内大臣
萬十八 いやましにのみ　たづのなく　なごえのすげの　ねもころに
思ひむすぼれ　なげきつゝ　中納言家持卿
新後撰冬 敷島やみむろの山のいはこすげそれとも見えず霜さゆる頃　順德院御製
萬十一 見わたせばみむろの山の岩小菅しのびに我は片思ひする　人丸
萬十二 あさはのにたつ三輪小菅根隱れてたれ故にかは我こひざらむ　同
あさはのにたつみわ小菅しきたへの枕にしても一夜あかしつ　民部卿爲家
あさはのの露の白菅うちはえてかくれて永きねにぞなきぬる　同
ゆふはがは夏行く水の岩小菅ぬきも定めぬ玉ぞみだるゝ　從二位家隆卿
新六五 山陰(川)のみかげ(新六)のこすげ年をへて心長くもい(こ新六)ひわたるかな　衣笠内大臣
同六 皆人の笠に(にナシ新)ぬふ草の刈るあとのよにすげもなくなりにけるかな　正三位知家卿
現存六 武夫の弓柄(ゆづか)に卷けるみしま菅みしまゝならばとけぬつれなさ(きイ)　同
しられじな片しきあかす涙のみ眞菅のをこも下にくつとも　後九條内大臣

○題不レ知
ねぬなはに枝さしかはすまろ小菅まろをこすとや未だ定めじ　俊頼朝臣

○寶治百首歌合、忍久戀（マヽ）
下にのみしのぶの山の岩小菅いはで思ひの年ぞへにける　山階入道左大臣

○長歌
萬六 かねてしりせば　ちどりなく　そのさほがはに　いしにおふ　る　すがのねとりて　しのぶ草　讀人しらず

萱

○題不レ知
萬十四 川上の根白たか萱あやに／＼さね／＼てこそことに出でにしか　讀人しらず

○家集、雜歌中
をがみ川根白たか萱ふみしだきとるあしつきもせながためとぞ　俊頼朝臣

○久安百首
秋ふかみあだのおほのの露霜に萱がうら葉も色づきにけり　實清朝臣

○旅宿蟲
宮城の野萱がねに鳴くきり／＼すなれも旅寝や露けかるらむ　後德大寺左大臣

○百首歌
あはづ野の萱が下をれわけわびてうづらたつなり秋の夕暮　寂蓮法師

○文永元（二イ）年毎日一首中
あはづ野の萱が下葉のみだれより久ふきのぼるしがの山風　民部卿爲家

○千首歌
よしとだに人にはえこそいはれのの萱が下葉にいざ亂れなむ　同

○老若五十首歌合
蟲のねも秋のすゑ葉に枯れはてて霜にさえゆく庭の萱原　前大納言忠良卿

濱木綿

○題しらずイ
萬四
みくまのの浦の濱ゆふも丶へなる心は思へどたゞに逢はぬかも　人丸

○十題百首
濱ゆふのかさなる數をしるべにて思ひたちけりわかの浦浪　寂蓮法師

○仁安二年二月清輔朝臣家歌合、海邊霞
みくまのの浦の濱木綿見えぬまでいくへ霞の立ち隔つらむ　資隆朝臣

此の歌判云衆儀浦のはまゆふといふならばたちかさぬらむなどぞうちまかせたることにてあるをへだつとあればほいなきやうにこそきこゆれたゞしかきたがへにこそ侍めれ此のかすみはおぼつかなき所をいかにしてさだめらるべきよし申しあはれたる程にぬしの物したまへるにたづねられればはまゆふはへだつともよめるやうにこそと申さるゝを思ひいで侍ればふるくもはまゆふ心へだてて思ふ物かはなど申す事侍れどそれは男女の中の事に引きよせむ時こそあらめこの歌にはいかにもかされまほしき事になむと人々申されしかば左勝ちにきと云々

○久安百首
あはぬまは浦の濱木綿恨みつゝかく言の葉を夢にだにみよ　待賢門院堀河

○六帖題
新六三
かきつくる浦の濱ゆふなにとして夢には人をみせはじめけむ　光俊朝臣

小々妻（さゞめ）

○十題百首
山賤のむすびてかづくさゞめこそ衣の關と雨をとほさね　寂蓮法師

○堀河院御時百首

月清みあけの野原の白露にさとめわけくるころもさぬれば(ぬイ)　仲實朝臣

藍

○題不知（六帖）

萬十一 人しれずこひはしぬともみそのふの唐藍の花色にいでめや　讀人しらず

○百首御歌、草

幾しほもおのれが染むる色ぞかしなど紅のからあゐの花　土御門院御製

○六帖題

新六六 刈りおけるつかねの藍の心あればあくまでそみむ色と知らるゝ　正三位知家卿

紅

○題不知（六帖）

六五 たかまきし紅なれば三輪やまをひたくれなゐに匂はせるらむ　讀人しらず

同 かくらくのまとせの山をすにつくとよすめ神のまきし紅　同

○くれなゐ

新六五 紅の末さく花の道深くうつるばかりもつみしらせばや　民部卿爲家

紫

○題不知

萬十二 むらさきを草とわけ〳〵伏す鹿の野はことにして心はおなじ　讀人しらず

二三 つくば(まイ)のにおふる紫衣にそめいまだ着ずして色にいでにけり　中納言家持卿

萬四 から人の衣そむてふむらさきの心にしみて思ほゆるかな　麻田連陽(春イ)

○延喜二十一年三月京極御息所歌合
今年より匂ひそむめり春日野の若紫にてをなふれそも　讀人しらず

紫に手をこそふれ春日野の野守よ人にわかなつますな　同

○久安百首
紫のゆはた染むてふさすはひのあひみあかずば人しるらめや　前參議親隆卿

○六帖題
新六五 紫はなべて位の色なればこきもうすきもうはきなりけり　民部卿爲家

同 綠よりふかむらさきの衣きてつかへし事も昔なりけり　衣笠內大臣

麻

○題不レ知
萬十二 櫻麻のおふの下草露しあれば明けてをゆかむ親はしるとも　讀人しらず

○久安四年每日一首中
櫻麻のおふの山ばた刈りもあへず作りかへても何急ぐらむ　民部卿爲家

○十題百首
賤のめが心涼しきまとゐかなさくら麻ちるおふの下風　寂蓮法師

○久安百首
夏草や茂みの野らのあさの葉になど夕立のたまをぬくらむ　郁芳門院安藝

○正治二年百首
かりはやす麻のたち枝にしるきかな夏の末葉になれる景色は　土御門內大臣

○家集
我が戀ははじめもしらず賤の女が麻のをだまき末のみだれに　正三位知家卿

○三百（六十イ）首中
我がまきし麻をの種を今日みれば千枝にわかれて風ぞ涼しき　好忠

萍（うきくさ）

○うき草
○寶治二年百首
○六帖題
○同
○同
○六帖題
○同
○同
○たで
○同
○題不知

六六
こもりえに隙なくうける浮草のまなくぞ人はこひしかりけり　讀人しらず

さのみやはうきに年へむ浮草のねもみぬ物をいひもたえなで　正三位知家卿

淺砂

新六六
みれば又あさゞおふてふさは水は底の心のねをぞあらはす　信實朝臣

同
思ふことそこ深からぬうきねより心淺砂のさてぞおひける（ぬる新六）　正三位知家卿

新六六
池水におふてふ草のあさゞのみうきは習ひとぬらす袖かな　民部卿爲家

蓼

新六六
さぎのとふ河邊のほたで紅に夕日さびしき秋の水かな　衣笠内大臣

同
かきほなるほたで色づく露霜にむべさえけらし夜はの衣手　正三位知家卿

同
みるまゝにこまもすさめずつむ人もなき古里の蓼に花咲く　信實朝臣

現存六
うき世には身をのみつみし水たでの辛きめにこそ涙おちけれ　光俊朝臣

同
水たでのほづみに通ふ村どりのたちゐにつけて秋ぞ悲しき　後光明峯寺攝政

萬十六
童部もくさな刈りそね（ねナシイ）やほ蓼をほづみのあそがわき草をかれ　讀人しらず

六帖六
みな月の河原におふるあを蓼のからしや人にあはぬ心ちは　同

○三百六十首中

やほ蓼も河のせみれば生ひにけりからしや我も年をつみつゝ　好忠

○貞應三年百首

からきかな刈りもはやさぬ犬蓼のほになる程にひく人のなき　民部卿爲家

○たでといふ草の紅葉したるを

たでの葉(ほイ)も紅葉しぬればよそめには唐錦とぞ見えまがひける　惠慶法師

芹

○六帖題

新六六 水まさるさわ田に茂るふか芹のねもみぬ人をかく戀ひめやは　衣笠内大臣

新六六 こひぬまも水田のあぜにひく芹のねを現はして袖ぬらしけり　民部卿爲家

○家集、戀百首中

かつすゝぐ澤のこぜりのねを白みきよげに物を思はずもがな　西行上人

水葱(なぎ)

○六帖題

新六六 をしなべて茂る草葉にわかざりし沼のこなぎも花にさきつゝ　衣笠内大臣

同 露むすぶ田中の井どのなぎのはに光さしそふ夕づくひかな　民部卿爲家

同 おのれさへ戀路にぬれてなは代のこなぎがもとになく蛙かな　正三位知定卿

同 苗代の田づらの畦のうゐこなぎまくてふ種をとりやませけむ　信實朝臣

母子草

〇家集

花の里こゝろもしらず春の野にはら／＼つめる母子もちひそ　和泉式部

此の歌家集云有義りよ野老おこせたるてばこにくさもちいれてたてまつりてと云々

駒繫

〇寛喜三年百首、草

女郎花おほかる野べの駒つなぎおちけむ人や引きとゞめてし　民部卿爲家

犬子草

〇寛喜三年百首、草

ゐのこ草おのがころ／＼ほにいでて秋おく露の玉やどるらむ　同

土筆

〇寛喜三年百首、草

さほひめの筆かとぞみるつく／＼し雪かきわくる春の景色は　同

折敷草

〇寛喜三年百首、草

秋來ぬとききつる庭のをしき草いとゞ露をや末まさるらむ　同

鏡草

かたばみのそばにおいたる鏡草露さへ月にかげみがきつゝ　同

○貞應三年百首、草

莞草（ゐほひぐさ）

河千鳥なくやかはべのおほひ草裾うちおほひ一夜ねさせよ　清輔朝臣

○家集、戀

射干（あふぎ）

蓬生は（のイ）さることあれや庭の面にかくすあふぎのなどしげるらむ　西行上人

○家集、草歌

莎草（みくりぐさ）

新六六　みがくれに深き澤ねのみくりなは月日はくれどひく人もなし　民部卿爲家

○六帖題

同　狹山なる池のみくりのねもみねどうちはへ人のくるぞ待たるゝ　光俊朝臣

芝

ふみそめし跡はたのまむ春日野のみちの芝草ことしげくとも　前大納言爲氏卿

○弘長三年內裏百首、野夏草

○六帖題

新六二 いかにせむ內野の芝生年をへてあらぬつくりにせばくなるよを　民部卿爲家

同 しらざりしのぐちの里に宿かりて道の芝生にいまぞあさたつ　正三位爲家卿

新六六 駒放つ野べのうなゐが芝くらべ永き日くらすこれや慰め　同

同 いへの風ふき枯らしたる芝のねはおこし所もなくなりにけり　信實朝臣

同 たまぼこの道の芝草ほに出でて春のつばなもひと招くなり　同

同 もゝしきの庭のきりしばふる雪にこれを限りとぬれし袖かな　光俊朝臣

○家集、芝

あひにあふふぢのかざしのその春（松イ）もひかでぞ過ぎしきり芝のこと　前民部卿雅有

○建保七年百二十八首歌、芝

なつ山の川上きよき水の色はひとつに青き野邊のみち芝　前中納言定家卿

○建長四年內裏十首歌合

たまぼこの露の道しばうちなびきくるればすゞむ夕立の空　光明峯寺入道攝政

○六帖題

理存六 あかつきの露のみち芝なきわかれ袖のかたみに殘る月影　正三位知家卿

山ぢさ

○六帖題

いかばかり人めこふらしかくらくの初瀨にさける山さぢの花　權僧正公朝

目覺草

○題不レ知

萬十二 あかつきのめざまし草と花をだにみつゝ今まで我をしのばせ　讀人しらず

夕陰草

○題不レ知

萬四 我がやどの夕陰草の白露のけぬがにもとなおもほゆるかも　笠女郎

指焼草（さしもぐさ）

○雑歌中

六六 ちぎりけむ心からこそさしも草おのが思ひにもえわたりけり　讀人しらず

同 しもつけやしめぢ河原のさしも草おのが思ひに身をや焼くらむ　同

○正治二年百首

さしも草さしも忍ばぬ中ならば思ひありともいはましものを　皇太后宮大夫俊成卿

○六百番歌合、戀

淺ましやなどか思ひのさしも草露もおきあへずはてはもゆらむ　寂蓮法師

此の歌左方申云後拾遺にもいぶきによせてこそもゆともよみたれいぶき無くてもゆとよめるいかゞ右陳云古歌にさしも草もゆとよみたればよむなり判者俊成卿云左歌さしも草露おきあへずもゆらむ事もにはかにあまりなるにやと云々

葎

○正治二年百首

續後拾雑上 古里はむぐらの軒もうらがれてよる／＼はるゝ月の影かな　式子内親王

柴の戸をしける葎のさしこめて風だに夏はいらぬなりけり　正三位經家卿

むぐらはふ柴の庵に音信れて荻の葉すぐる夜はのあき風　俊成卿女

葎生ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなりけり　業平朝臣

手向草

萬一
白浪の濱松が枝のたむけ草いくよまでとかとしのへぬらむ　河島皇子

なら山すぎて　もののふの　うぢ川わたり　をとめらに　あ　讀人しらず
ふさか山に　たむけ草　いととりおきて　わぎもこに

芭蕉

秋風にあふ芭蕉葉のくだけつゝあるにもあらぬ世とは知らずや　前參議教長卿

風ふけばあだにやれ行く芭蕉葉の哀れと身をも賴むべき世か　西行上人

きりぎりすま近きかべにおとづれて宵の雨ふる庭の芭蕉葉　寂蓮法師

いかゞするやがてかれ行くばせをばに心してふく秋風もなし　民部卿爲家

莫鳴菜（なのりそ）

○建長三年鳥羽殿十首歌合、山家
歌匯
○家集
○題不レ知
○長歌
○久安百首
○家集
○正治二年百首
○百首歌、第二十首中

○天仁三年四月師時卿家歌合、寄レ衣戀
なのりそをかりほす蜑のあさ衣おのれしをるゝ戀もするかな　藤原定通

○題不レ知イ、なのりそ
萬十二
しがの蜑の磯にかりほす莫鳴草のなは告げてしをなぞ逢ひ難き　讀人しらず

○六帖題
新六
和歌の浦に磯のなのりそそればかり僅にかける蜑の寂しさ　民部卿爲家

○同
新六三
徒らに浪にゆらるゝなのりそを木の丸殿にいかでうゑまし　信實朝臣

○同
同
磯隱れのりにまじれるなのりそのなのりも今はしる人もなし　光俊朝臣

和布（みるめ）

○洞院攝政家百首
六一
うきめかるあまの小舟は我なれや恨みぞわたる朝な夕なに　正三位知家卿

○思二他人一
六五　萬四
難波がたしほひの名殘あくまでに人のみるめを我はともしき　讀人しらず

○見和布
六三　續後拾雜上　巽風集
白浪ををりかけあまのこぐ船は命にかふるみるめかりにか（ふねこき）　同

同三
わたつ海に神のいはへるみるめをばみとせにきてぞ蜑も刈るてふ（のそこにあれたる六以下同）　同

夫木和歌抄卷第二十八終

○文集百首、揷柳作高林、種桃成老樹。

夫木和歌抄　卷第二十九

雜十一

題

木	松	椿	栢	桂	楸
枝保持	槇	杉	檜	梨	李
杏	柏	楢	椎	栗	槻
枌	介法	櫧	楤	妻摩	歡合木
胡桃	樫	櫟	猿滑	樒	櫻
漆	もちゐの木	つげ	こぶし	ひいらぎ	そばの木
ねずもち	こめ〳〵	うはめの木	ねぶの木	すろ	めづら
樻	柹	桑	あせみ	逸師	樟
柴					

木

ひきうゑし木々の梢にとしたけて宿も主もおいにけるかな　慈鎮和尚

理（ことわり）をしらで木をはむ蟲なれば深きみのりを聞くかひもなし　権僧正公朝

なゝへなる植木の影も暗からず夏の夜ふかきの法の光に　能宣朝臣

陰清き七重のうゑ木うつり来てるりのとぼそも花かとぞみる　皇太后宮大夫俊成卿

いづみなる篠田のもりの千枝ながら玉のうゑ木にかざる白雪　前大納言隆季卿

わか葉さすたまのうゑ木の枝毎にいくよの光磨きそふらむ　後京極攝政

なべてよのたねともみえぬ梢かな玉のうゑ木の花の姿は　参議爲相卿

まだしらぬ玉のうゑ木の面影も雪のこずゑにみるこゝちする　民部卿爲家

新六二　すてられし昨日の山のふし折れ木倩もかひなく世にやくちなむ　同

新六三　難波潟潮干しほみち流れ木のうきては沉む身こそつらけれ　正三位知家卿

新六六　かざごしにたてる山木のうは枝は花も紅葉もあるときぞなき　光俊朝臣

いかにせむ尾上に立てるうつぼ木のあな戀しとも言はぬ思ひを　同

わたつ海の底の流れ木いたづらにからき思ひに沉みはてつゝ　民部卿爲家

雲葉　杣山にたてるふし木の徒らになどひく人のなき身なるらむ　藤原教嗣朝臣

柴木たくいほりに煙たちみちてたえ（はれイ）ずもの思ふ冬の山里　好忠

よと共に浪こす磯のそなれ木のしづえや戀の衣なるらむ　修理大夫顯遠卿

新千雜下　飛鳥河浮木に積る淡雪の浪立ち来れば頼もしげなきよにもあ　俊頼朝臣

○六帖題、むし
○粟田右大臣念佛申されけるによめる夏の事に侍りける
○七重寶樹風には一實相の理を調べ
○久安百首
○正治二年百首
○詩
○文永五年毎日一首中
○六帖題
○同（流木）
○同（山木）
○寶治二年百首
○嘉祿三年百首、寄レ木戀（そこのながれ木）
○杣木
○三百六十首中（しば木）
○家集、戀
○百首歌、旋頭歌（うき木）

○題不レ知
○千五百番歌合、建長八年百首
○建長八年百首イ
○建保四年百首
○六帖題
○承久二年四季百首
○家集（えだなき）
○同（まがり木）
○百首歌、老後初懐
○文應元年毎日一首中
○家集
○同（はゝきぎ）
○（あはれ木）

ゐかな

萬七
ふがなもてゆけの河原の埋れ木の顯はるまじき事にあらなくに　讀人しらず

五月雨はゆけの河原の埋れ木の顯はれてこそながれきにけれ　寂蓮法師

むもれ木のかれたる枝も花さきし昔になしてふれる白雪　從二位行家卿

和歌の浦の浪のうもれ木いく代へて君が惠みの春をしるらむ　從二位家隆卿

新六六
ふる河の繁きぬなはにつながれて流れもやらぬよゝ（せ）の埋れ木　正三位知家卿

拾遺員外
なみだ川春の月波たつごとに身は沈み木の下にくちつゝ　前中納言定家卿イ

野にたてる枝なき木にもおとりけり後の世しらぬ人の心は　西行法師

新千物名　惠慶集
わざとこそくり放つめれ曲り木にはひまつはるゝ青つゞらをば　重之

此の歌は慈慶法師のもとよりあなつゞらなこにくみてなつめ（くりイ）そなどな

花にまぜておこせたる

我ながらうたて朽木のみ（えイ）にしあへ（れイ）ば心の花のしたにありけり　寂蓮法師

風渡るをだのすぐろの常磐木に秋をきかするもずの聲かな　民部卿爲家

すみかぞと思ふも悲しくるゝ木をこりつゝ人のかへる山べに　和泉式部

新千穂集
はゝき木は思（おもこイ）ふふせやと思へばや近づく儘にかくれゆくらむ　俊頼朝臣

冬山の雪間にたてる（これ案）あはれ木の上にぞくゆる（はイ）かくすつみなく　順

○心似三空木浮二水上一(あまのうきき)
心をしあまのうき木になしつれば流るゝ水に沉まざりけり　千里

○寶治二年百首、寄レ木戀(あさぎのみやき)
取りかぬるあさぎのみやき節茂みさもわれ憎く人のいふかな　信實朝臣

松

○題不レ知
萬十二
ひら山の小松が末にあれこそはわが思ふ妹にあはずやみなめ　人丸

○同
六二 伊勢集 新古戀五
わがこふるみののを山のひとつ松結びし心いまもわすれず　讀人しらず

萬二
のちみむと君が結べるいはしろの小松がうれを又みつるかも　人丸

○結松枝
萬二
いはしろの濱松が枝を引きむすびまさしくあらば又歸りみむ　有間皇子

○見結松作歌
萬二
岩代の野なかにたてる結び松心もとけずむかしおもへば　意吉丸

○題不レ知
萬二十
やち草の花はうつろふときはなる松のさ枝をわれは結ばな　中納言イ 右中辨大伴家持

○同
萬十
風吹かば紅葉ちりつゝしばらくもわかの松原きよからなくに　讀人しらず

○同
同
足引のやまかも高きまきもくの木末の松にみ雪ふりけり　同

○同
萬四
君にこひいともすべなみなら山の小松がもとに立ち嘆くかも　同

○同
萬十二
とよくにのきくの濱松心にもなにとて妹にあひしそめけむ　同

○忠岑がもとへ
かひがねの松に年ふる君故にわれはなげきとなりぬべらなり　貫之

○元服の所にまかりて
春日野にいまもえいづる千代の松木高き影とはやもならなむ　能宣朝臣

○白河院御時紫野の子日に松のもとにて
續千賀　ひく人もなくて千歳をすごしける老木の松の影にやすまむ　法性寺入道關白

○家集、春歌中
おとは山峯の霞はたなびけど松の木ずゑはかはらざりけり　俊頼朝臣

○三百六十首中
をしほ山尾上のまつの枝ごとにふりしくゆきは花と見えつゝ　好忠

○建保三年名所百首
をしほ山夕霜しろき松のはのちりもいく代の年積るらむ　從三位行能卿

○寛喜元年百首
しらとりのとば山松の木のまよりさえたる月に秋風ぞふく　同

○文永五年毎日一百首中
われればかりともとぞ賴む小倉山おなじ麓のみよのふる松　民部卿爲家

○建長七年顯朝卿家千首歌
いたづらにたてりしものを古松のよこねがちなる老の後かな　信實朝臣

○六帖題
新六三　葉すくなに吹きからさるゝ浦まつの汐風寒みなほたてるかな　同

○家集
おいゆけば（とイ）末なき身こそ悲しけれかた山はたの松のかざをれ　西行上人

○承安三年七月右大臣家歌合、遇松
さきくさの三葉四葉に枝かはす松の千歳はきみがまに〳〵　俊惠法師

此の歌の判者淸輔朝臣云松な三葉四葉といはむこといかゞと云々

○正治二年百首、山家
山里は峯にたえせぬ松のこゑ木の葉にしのぶ谷のしたみづ　式子內親王

○百首歌
雲もなく空はれわたる峯だにも雨をふくむは松のおとかな　前中納言定嗣卿

○千五百番歌合
いくかへりおいそふ松の陰をみむはこやの山の春の木ずゑに　嘉陽門院越前

○正治二年百首御歌
千代ふべきはこやの山のとこ松を賴む心も色ぞかはらぬ　第三のみこ

○同
風春　いつもみし松の色かは初瀨山さくらにまじる花のひとしほ　前中納言定家卿

○文應元年毎日一首中
色かへぬ松はすくなきはつせ山花も紅葉も面影ぞたつ　民部卿爲家

○正嘉二年毎日一首中
たかの山さこそ千年とたのむらめ昔にかへす松のしるしに　同

○光臺院入道二品親王家五十首、寄レ松祝
君が代はたかのの山のみねの松まつも久しき月やみるべき　正三位行衡卿

○同
契りある高野の山の峯の松なほゆくすゑの千代も變らじ　如願法師

○正治二年百首
つくば山岩根の松の千代をへてしげきや君がめぐみなるらむ　前大納言忠良卿

○家集、峯松
しるしらず松をぞ頼む筑波ねのみねの紅葉はなべてちる頃　從二位家隆

○洞院攝政家百首、雪
和歌の浦や浪間の松をたよりにて興津しほあひにふれる白雪　後九條内大臣

○建保二年和歌所歌合、松經レ年
神代よりいくよかへにしをとめごが袖ふる山のみづがきの松　從二位家隆卿

○同
君が世の千とせにあまる末までも色變らじと松のいふなる　慈鎭和尚

○御集中
友千鳥さほのかはらの浪になけば聲うちそふる峯の松風　同

○人の許におほわりごを遣はしけるに子の日しけるかたあるを
（萬代）（新千賀）君がへむ九のかへりをかぞふればゐにかく松のおひかはるまで　道信朝臣

○建長八年百首歌合
ゐにかける松のためしも幾度か我が君が代におひかはるべき　衣笠内大臣

○千五百番歌合中
かみやまの峯におひそふ小松原幾木の千代も君がよの數　前大納言爲家卿

○養和元年百首、神祇
思ひのみ大原野べに年を（ナシイ）へぬるまづこと叶へ神のしるしに　前中納言定家卿

○家集、祝歌中
若葉さすひらのの松は更にまた枝にやちよのかずぞ添ふらむ　西行法師

○千五百番歌合
枝ごとに千代も八千代も色かへぬひらの野の松は君がまに／＼　宜秋門院丹後

都いでていきの松原音せずばいかでかよせむ戀わすれ貝　前大納言公任卿
○家集

おぼつかないざ古のこととはむあこやの松にもの語りして　顯仲朝臣
○堀河院御時百首

陸奥のあこやの松に木がくれていでたる（づべきイ）月の出でやらぬかな　讀人しらず
○題不レ知（歌イ）

我が君のみかさの松のかひあらば繁き惠みは千代もつきせじ　光俊朝臣
○家集

現葉
年月はいはでの松の下紅葉いろにいでてやいまはこひまじ　藤原經繼
○戀歌中

ふなをかの子の日のあとはそれながら北野の松にひく心かな　民部卿爲家
○文應元年七社百首

たのむかないまも北野の一夜松昔のあとに色もかはらず　同
○同

立田山あへぬ紅葉もあるものをしぐれにつよき松の影かな　同
○貞應二年六月名所百首

春ののにわがしめはふる姫小松おひゆく末を人にひかるな　同
○同年卒爾百首、契少人戀

あらましの心のうちの手向草まつとはしるや住吉の神　參議爲相卿
○嘉元元年百首、松

さよふけてたどこゝに聞くうら浪の聲をわけたる磯の松風　同
○乾元元年二月藤原長清家歌、松

玉旅　庭主
夜をこめていそぎつれ（きつれどイ）ども松がねに枕をしてもあかしつるかな　增基法師

此の歌は伊勢國にてしほのひたるにみわたりといふはまをすぎむとて夜のうちにおきて行くに道いまだくらくて見えざりければ松原の中にとまりて夜をあかしてよみ侍る

明玉
君が代にくらぶの山のいはね松幾度ばかりおひかはるらむ　左京大夫顯輔卿
○題不レ知

○御集中
君が代にくらぶの山の峯におふる松は千年をかぎるばかりぞ　鎌倉右大臣

○喜多院入道二品親王家五十首、祝
たとふべきものこそなけれ君が代にくらぶの山の松の千歳を　隆信朝臣

○岡屋入道攝政家百首、洞松
ひだ人のひくよもしらぬ谷影になにをか松とふりまさるらむ　民部卿爲家

○若臣御歌合
あめふれば雲おりかゝる山松の麓にのこる數ぞすくなき　前中納言爲兼卿

○嘉元三年仙洞歌合
岡のべやなびかぬ松は聲をなして下草しをる山おろしの風　同

○雜歌中
綠なるまつにはみえぬ春秋をつたと藤との色をあらはす　他阿上人

○建保三年家百首御歌、名所戀
深草やいくよの露かはらふらむ來ぬ人たのむやどの松風　光明峯寺入道攝政

○同年名所百首
冬もいま日數つもりの浦さえて雪にもなりぬあられまつ原　僧正行意

○題不レ知
六三 みくまのの浦の松原みがくれてねはひとつにや思ひいる（おひそはる六）らむ　讀人しらず

○千五百番歌合
おしてるや濱のみなみの松原もいく木の千代を君にそふらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首
何となく心ぞ留るそれとみてこぎはなれ行くむしあけの松　同

○洞院攝政家百首、旅
むしあけの松に秋風ふきすぎて涙もとめぬなみの音かな　俊成卿女

○雜歌中
すまの浦や渚に立てるそなれ松はひえを浪のうたぬ日ぞなき　俊頼（需イ）朝臣

○名所須磨浦
松風のせきやにさむき音までも時雨になりぬすまの浦浪　法眼慶融

○百首御歌
すまの浦やあまのとちかき入しほに映るも靑き松の色かな　順德院御製

○建保三年名所百首御歌、浮島松
ときしらぬ山はゆきげの雲ながら有明の月のうき島の松　同

○百首御歌
もしほ草しきつの浦に舟とめていましはきかむいその松風　慈鎮和尚

○同
いはやどに片枝かれたる霜の松たがよにうゑていくよへぬらむ　従二位家隆卿

○[illegible]智三十首
涼しとてたちやよらまし夏引のいとかの山の松の下風　文昭法師

○御所の障子の絵になる尾の松を
なる尾なる友なき松のつれ〴〵と獨りもくれに立てりけるかな　俊頼朝臣

○撰集
吹く風のなるをにたてるひとつ松寂しくもあるか友なしにして　中務卿みこ

○為家卿家百首
ゆき島の巌に立てるそなれ松まつかひもなきよにもふるかな　従三位行能卿

○元久元年詩歌合、水郷春望
しがの浦の浪より霞むあけぼのに山ふきおろす春の松風　慈鎮和尚

○六帖題
新六三
見わたせば木末ひとしきならび松しまさき遠く誰かうゑけむ　信實朝臣

ありへけむもとの千年にふりもせで我が君ちぎる峯の若松　前中納言定家卿

此の歌はみなせどのにあたらしくたきおとされ石たてられて後にまゐりて朝に清範朝臣のもとへ地形勝絶のよし申しけるついでによめると云々

玉雑一
松がねのいはたの岸の夕涼みきみがあれなと思ほゆるかな　西行上人

此の歌は夏熊野へまゐりける時いはたと云ふ所にてすゞみて（よみてイ）京なる西住がもとへつかはしけると云々

○建長八年百首歌合、田
をかたちの松の嵐の音聞かばおもひしよりも涙おちけり　衣笠内大臣

○同
たけくまのくちにし松の跡に又たれうゑかへて千代をつぎけむ　従二位行家卿

○同
いかゞせむ色も變らぬ辛(つら)さのみおほたの松のさても朽ちなば　左近中將具氏卿

○家集
二葉より今はおほたの松のはに幾世か君をこひてへぬらむ　兼盛

○文永七年毎日一首中
あづさ弓はるといふよりもの丶ふのやのの松原時をしるらし　民部卿爲家

○文應二年毎日一首中
あらし山松ふく音は變らねどさすがにかすむ程は見えけり　同

○光臺院入道二品親王五十首、松雪
しがらきの外山はうすき白雪のうづみもはてぬ松のむらだち　前中納言光經卿

○十(千イ)首歌
しがらきの外山の松はしぐるともつれなき色はえやはみるべき　民部卿爲家

とふ人のきなれの里はなのみして波よる岸の松ぞ寂しき　同

○題不レ知
(萬六)から衣きならの里の島松にたまをしつけむよき人もがな　讀人しらず

○元久元(年イ)年小野宮歌合、忍戀
谷川のこほるにつけてしのぶ山なほうきものはまつの夕風　従二位家隆卿

○寳治十首歌合（忍久戀イ）
われならぬしのぶの山の松の葉も年へて色にいづるものかは　大藏卿有家

○眺望のこゝろを、石(右イ)間
おしてるやなにはの浦にみ渡せば夕日かゝれるこやの松原　源仲業

○月歌中
難波江の岸にそなれて濱松をおとせであらふ月の白波　西行上人

○御集、立秋
松風の音こそかをれ紀のくにや吹上の海にあきやきぬらむ　鎌倉右大臣

○冬歌中、家集
浦風のふきあげの松のうれこえてあまぎる雪を浪かとぞみる　前中納言定家卿

○最勝四天王院名所御障子
千鳥なくふきあげにたてる松原の聲すむ袖に月ぞやどれる　如願法師

ふきおろす麓の草に露おちてこゑもたかしの[せイ]みねの松風　藤原爲守

冬の日をあられ降りはへあさたてば波に波こすさのゝ松風　前中納言定家卿

駒なづむさのゝあさけにみわたせば松原とほくふれる白雪　大藏卿隆博

たけくまにいづれたかへりくり駒のみあけの前に松たてる岡　藤原長能

くりこまの見あけと云ふ所一本の松あり山のくちに田ある所をよめると云々

萬一 みよし野の玉松が枝ははしきかも君がみことをもちてかよはく　讀人しらず

みよしのにたてる松原千代ふるを上もあるかな常ならぬよの　好忠

雲かゝるひらの高ねにふゞきしてさゞ波よするまのゝ[白雪イ]浦松　小侍從

春はなほ霞もはてぬけしきかなよしのゝ山のまつの村だち　寂蓮法師

なく鹿に聲うちそふる高砂のをのへの松もつまやこふらむ　二條院攝政

こほりするきよ瀧川はせだえしていはねにおつる松の風かな　從三位行能卿

白波の長閑けき浦の姫松はちとせの影ぞ染めて見えける　兼盛

しらなみのよりくる絲を緒にすげて風にしらぶる琴ひきの松　重之

續古今 家 うごきなき巖にねざすうみ松の千年をたれに浪のよすらむ　惠慶法師

家 おほゐ川岸にかけさすうみ松の風にや瀬々のなみもたつらむ　同

○高陽山秋
後撰
○鳥羽院くまのに御幸の時道の程の御會に
○[illegible]十二首歌
○家集
○題不知
○家集
○正治二年百首
○千五百番歌合
○同
○建保三年名所百首
○よるの網さうぞくいるゝはこのふたあしでにて
○日向國にことひき松の岸に浪よす
○石にうみ松のおひたるを
○六月八日蓮松院にすゞみにまかりたる

○家集
さらしなや雪のうちなる松よりも烈しきものはわが頼むつま（きイ）　同

○家集、みちのくにより都へかへるとて
くり原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはまし　業平朝臣

○千五百番歌合
くり原のあねはの松をさそひても都はいづとしらぬたひかな　正三位季能卿

○みちのくにあねはの松
かくばかり年積りぬる我よりもあねはの松はおいぬらむかし　祐擧

ふりにける雪の島なる結び松とくこそ人の見るべかりけれ　同

此の歌家集云中務丞雪をしまのかたに造りていはたて日かげをこけのかたにおほして松などあるをこきでんのだいばん所にいれたりけるをよめる

○月前千鳥
たまつ島わかの松原ゆめにだにまたみぬ月に千鳥なくなり　鎌倉右大臣

○松間雪
（續後拾神祇）雪つもるわかの松原ふりにけり幾代へぬらむたまつ島守　同

○保元二年毎日一首中
伊勢のうみあのの松原まつとてもいひし日數に波はこえつゝ　民部卿爲家

○九條大納言家歌合、霧隔旅霞と云ふ事を
すゞか山ふりはへこえてみ渡せば綠にかすむあのの松原　家長朝臣

○伊勢にくだり侍りけるにふぢかたの松をみて
（萬代）ひれこして人忘れずばふぢかたの松もむかしの物がたりせよ　六條右大臣室

○歸風歌、松原にたてる松の下に落ちつもる紅葉などかきとる人あり
かきつもる濱の松葉は年を經てこだかく拂ふ風にこそまて　太宰大貮高遠

○眺望を
大わたの濱の松ふく浦風にしがのてこらが袖かへるみゆ　後九條内大臣

○家集、冬歌
すみよしの岸の村松たわむまでふる（りえこイ）べかりぬるふるさとの雪　惠慶法師

住吉の松もみゆきはありけりとこは珍らしくみしまえの浦　小弁

山たかみ霞をわけて詠むればはるかにみゆる住吉の松　隆信朝臣

新六五
ときはなるちしほの緑神代よりそめてふるよの住吉のまつ　信實朝臣

末遠きあさかの山の峯におふる松には風も常磐なりけり　後京極攝政

神さぶるいこま高ねの昔より松にへにけるとしもしられず　正三位知家卿

龍田山したまでかはるもみぢ葉にひとり色なき谷の松風　民部卿爲家

秋風のふきくる峯の村雨にさしてやどかるわだのかさ松　同

波かくるいそべにたてるはなれ松いく汐風を身にならふらむ　同

うちわたすせたの長橋程もなくひとむらみゆる野ぢの松原　同

里の名もきみが千歳にあらはれてとはにふくべき松の風かな　正三位忠定卿

君すみてとはに見るべき里なればたのも遙かに松風(秋イ)ぞふく　同

新續古一
ひとしほもまだそめあへぬ高砂の松の緑は霞なりけり　芬陀利花院前關白（内大臣時）

二
高砂のをのへの花のよそめこそきえあへぬ松の雪と見えけれ　入道一品親王永助

五
たかさごの尾上の月に秋ふけて松風ちかく鹿ぞなくなる　隆直卿

高砂の松はつれなき尾上よりおのれ秋しるさをしかのこゑ　定家卿

○上東門院住吉社行啓之時
○文治六年女御入内御屛風、住吉松に雪ふれたる所
○六帖題、みどり
○宇治殿にて院御會、山霞
○寶治二年百首、嶺松
○貞應三年詞書百首、外宮御屛風、松色
○同年百首
○建保三年名所百首
○最勝四天王院名所御障子

椿

谷ふかきやつをの椿いく秋のしぐれにもれて年のへぬらむ　順徳院御製
契りてもとしのをながき玉椿陰には千代の數ぞこもれる　同
みやぎののしらたま椿君がへむやちよの數に老いぞしぬらむ　法性寺入道關白
君が代は貌姑射の山に幾度かやつをのつばき色變るべき　後京極攝政
君が代ははこやの山の峯におふる白玉つばきはがへせむまで　宜秋門院丹後
君が代はから紅のふかき色に八千歳つばき紅葉するまで　讀人しらず
君が代は朝日の山の玉つばきちりもくもらで八千代こそつめ　同
おとは山いはねに生ふる玉椿やちよはがへる常磐なりけり　同
君が代はかゞみの山のたま椿くもりもあらじときはかきはに　同
かゞみ山みかきぞへたる玉椿かげもくもらぬ春の空かな　前中納言定家卿
新六六 いやましの八峯に茂る青つばきつら〱ものを思ふ頃かな　信實朝臣
萬七 あなしやま椿さけれや八峯ごししかまつ君はいはひつゝかも　讀人しらず
萬二十 我がかどのかた山椿まことなれわが手ふれなく土に落ちしかも　同
萬一 こせ山のつら〱椿つら〱にみつゝ思ふなこせの春野を　同

○百首御歌
○同（たまつばき）
○御集、祝（しらたまつばき）
○正治二年百首
○千五百番歌合　六イ
○天喜二年兼房家歌合、祝（やちとせつばき）
○永久三年五月大神宮禰宜歌合、祝
○寛治五年十一月從二位石見親王家歌合
○永久三年十二月大神宮禰宜歌合祝
○家集
○六帖題（あをつばき）
○題不レ知（つばき）
○同
○同（つら〱つばき）

○同
同 河上のつら〳〵椿つら〳〵にみれどもあかずこせの春野は　讀人しらず

○かすみの歌合、霞を
霞たつこせの春野の玉椿つらねもあへず見えみみえずみ　殷富門院大輔

○久安百首（たまつばき）
たま椿光をみがく君が代にもゝかへりさく優曇華の花　待賢門院安藝

○家集、寄椿述
花にさくみやま椿をゝりそへてたが色好むはいにやくぞも　源仲正

栢（かへ）

○家集、六帖題
新六六 花さけど人もすさめぬかへの木の徒らにのみ身はなりにけり　衣笠内大臣

○同
同 道のべのかへのかさおち拾ふとて木の下がくれ行きぞやられぬ（もやられすイ）　信實朝臣

○同
同 ちはやふる三室の山のかへの木のはかへぬ色は君が爲かも　光俊朝臣

○建長七年顯朝卿千首歌
つまかくす矢野の山なるかへの木のつれなき戀に我年は經ぬ　同

○六帖題、かへ
つかの上に松とかへとの生ひむまで待たむと契る妹が畏こさ　權僧正公朝

○六百番歌合、寄ノ木戀
戀ひしなば苔むす塚にかへふりてもとの契りの朽ちやはてなむ　前中納言定家卿

此の歌の判者云左こけむすつかに栢ふりてといへる何事にか侍らむもし是は史記と申す文に晉文公が私の妻にわかるとて我をまたむ事二十五年までにかへらずば其の時つかなせよと申しければ妻わらひて二十五年の頃はひにはわがつかの上に栢のおひなむといひたる事をこそ見

侍りしか若し其の事を思へるにやと云々

桂

○柿本影供百首
やま人も月をちぎりの秋よりや桂の花のころもうつらむ　後九條内大臣

○前中納言定家卿家にて、寄レ桂戀
心なき草木なれども契りあればあふひ桂はかげもはなれず　家長朝臣

○六帖題
あふひかる頃にしなれば神山のもとあらの桂かくれがもなし　信實朝臣

○同
新六六
いつのよにたれ種うゑて久方の月にありてふかつらなるらむ　光俊朝臣

○三體和歌
宵の間の月のかつらのうす紅葉てるとしもなき初秋の空　鴨長明

○寶治二年百首、河紅葉
河ぞひの波のかけぢやそめつらむいはもと桂紅葉しにけり　信實朝臣

○六帖題
新六六
しるべとてをりし桂の枝もがな月の都も行きてみるべく　衣笠内大臣

○正治二年百首、桂
月も今あはれとや思ふわれ昔かつら折りてしひともと故に　民部卿範光

○新羅秋歌合、述懷
何となく我が身はふりぬ三度まで月の桂ををるとせしまに　泰覺法師

○六帖題、かつら
くもりなき鏡とぞ見る月のうちの桂を折りて身をたつる人　權僧正公朝

○永久四年百首、桂
わが身には吹くべき風も吹きこねば桂の枝もをらずぞありける　仲實朝臣

○同
堀川次郎
人しれずけふをしまつと風早きかつらの枝のをりもよからば　俊頼朝臣

○同
神山の桂を折れば月のうちにわが思ふことならざらめやは　二條后皇宮肥後

楸

○歌中
萬十 うちなびく春さり來らし山際にひさぎの末のさきゆく見れば　讀人しらず

○題不知
萬六 うば玉の夜の更け行けば楸生ふる淸き河原に千鳥しばなく　赤人

○同
萬十二 浪間よりみゆるこじまの濱楸久しくなりぬ君にあはずして　讀人しらず

○六百番歌合、寄木戀
涙にはうきみやま木も朽ちぬべし沖の小島のひさぎならねど　正三位經家卿

○喜多院入道二品親王家五十首
夜のまにや冬はきぬらむ楸おふるあとの川原に枯葉散りしく　禪性法師

○千五百番歌合
ひさぎおふるさほの河原に立つ千鳥聲さへ淸き月になくなり　從二位家隆卿

○六帖題
新六六 月影も淸きかはらの河おろしにちりてひさぎの下も曇らず　衣笠內大臣

○同
同 ひさぎおふる庭の木かげの秋風にひと聲そゝぐむら時雨かな　民部卿爲家

○建仁元年當座撰歌合、霞隔遠樹
ながめこしおきつ浪間の濱ひさぎ久しく見えぬ春霞かな　後京極攝政

○千首歌
しらせてもいかになるみの濱ひさぎしをるゝ波に袖を紛へて　民部卿爲家

○正治二年百首
五月雨は沼の入江のみをつくし岸のひさぎの梢なりけり　宜秋門院丹後

○御集、戀歌
沖津浪うちでの濱の濱ひさぎしをれてのみや年のへぬらむ　鎌倉右大臣

○家集、戀歌
いはき山こえてこぬみの濱ひさぎ久しくなりぬ浪にしをれて　從二位家隆卿

○十題百首、木
波の上になかば隠れし四つのをの契りも深きしほぢなりけり　寂蓮法師

枝保持

槇

○長承三年顕輔卿家歌合、紅葉
秋ふかみ朝夕露のもる山のまきのしたえは紅葉しにけり　維順朝臣

○題不レ知
萬三
すべらぎは神にてませば槇のたつ荒山なかにうみをなすかも　人丸

○長歌
わがおほぎみの　しろしめす　そとものくにの　まきたてる
ふは山こえて　かやたちの　讀人しらず

○同
萬一
いしばしる　あふみのくにの　ころもでの　たなかみ山の
まきさくひの　たをやめのてを　同

○題不レ知
萬七
あたへゆくをすての山の槇のはも久しくみねば苔おひにけり　同

○六帖題
新六六
みずひさになりぞしにけるをすて山槇のふるきの苔深きまで　民部卿爲家

○家集、冬歌中
雲葉
み吉野は槇の下葉のかれしより山も雪のふらぬ日はなし　從二位家隆卿

○建保四年内裏十首歌合
みよしののまきたつ雲の梢には花もつれなき色ぞ殘れる　參議雅經卿

○千五百番歌合
吉野山ゆきふるさともしかすがにまきのはしのぎ春風ぞふく　後京極攝政

○同
うたゝねの夢も嵐の山里にまきのはづたひ霰ふるなり
常磐入道前太政大臣

○建長三年毎日一首中
まださかぬ花かとみえてまき山のはだれに積るふゆの白雪
民部卿爲家

○百首御歌（寄二名所一戀イ）
くちねたゞ思ひくらぶの山高みたつをだまきはしる人もなし
光明峯寺入道攝政

○家集（秋題イ）
つくば山たつをだまきの繁けれど峯行くしかの聲はさはらず
從二位家隆卿

○百首歌
筑波山繁き惠みにもらさずばたつをだまきも花やさかまし
安嘉門院四條

○嘉元二年竹園千首御會、寄レ國戀
わが袖もほさでやくちむ奥山にたつをだまききのしげき年は
參議爲相卿

○建保名所百首
新六六
ふしわびぬ旅ねい袖を檜のはにふるや霰のさやの中山
正三位知家卿

○六帖題、檜
萬代雜三
陰くらき檜のしげ山つれ〴〵といつを月日のあかりともみず
信實朝臣（大イ）

○修行し侍りける時雪のふりける日
杣山の檜のたちかれ枝をなみおのれぞしるき雪はたまらず
前僧正道慶

杉

○題不レ知（番イ）
萬九
かみなびの三室の山にかくれすき思ひすぎむや苔おふるまで
讀人しらず

○百首歌合
杉ふかき片山陰のしたすゞみよそにぞすぐる夕立のそら
後京極攝政

○後九條内大臣家會に、寄二晩樹一戀
けふばかりまちみむとても月日へぬ軒端の杉の夕暮のそら
從二位家隆卿

○詠歌百二十八首
うきよりは住みよかりけりとばかりよ跡なき霜に杉たてる庭
前中納言定家卿

○文永八年毎日一首中
かしは原わがたつ袖に契りける杉のしるしも今こそはきけ
民部卿爲家

○ひののだけといふ山をみて
（こゝイ）とくにかくひのの杉むらうづむ雪をしほの松にけふや紛へる　紫式部

○題不レ知
萬三　いつしかも神さびけるか香具山のむすぎが本に苔おふるまで　讀人しらず

○六帖題
新六六　かこ山の峯の六杉のもとつはに緑をそへて苔おひにけり　光俊朝臣

○文集百首、不三是禪房無二熱到一但能心靜却身涼
嵐やま杉の葉かげの庵とて夏やはしらぬこゝろこそすめ　前中納言定家卿

○雜歌中
瀧のうへのとよふの山は苔ふりてみむらの杉も神さびぬらむ　後九條內大臣

○春のはじめに
けふといへば春のしるしをみやがはの岸の杉むら色變るなり　後京極攝政

○喜應（嘉イ）二年住吉社歌合、述懷
徒らに生ひにけるかな古の人のうゑけむ杉ならなくに　寂蓮（超イ）法師

○堀河院御時百首
逢坂の關のむら杉葉をしげみたえまにぞみる（みゆるイ）望月のこま　中納言國信卿

○永久四年百首、稻荷詣
稻荷山しるしの杉を尋ねきてあまねく人のかざすけふかな　神祇伯顯仲卿

○同
いなり山しるしの杉を春霞たなびきつゞくけふにもあるかな　仲實朝臣

○十題百首、神祇
いなり山峯の杉むら風ふりて神さびわたるしでの音かな　後京極攝政

○正治二年百首
常磐なるひら野の宮の杉むらは君が齡のしるしとぞみる　正三位季經卿

○太神宮三十六番歌合
よろづよを山田の原のあや杉に風しきたてて聲よばふなり　西行上人

○百首歌祝五首中
みわ山の杉のしるしも唐崎の松の綠に千代をそへつゝ　藤原爲顯

○後法性寺入道關白家百首
萬代　みぬさとる三わのはふりに言とはむ幾代かへぬる祝ふ杉村　藤原盛方朝臣

○家集、戀の歌中
みわの山しるしの杉も荒れはてゝなきよに我はきて尋ねつる（つゝイ）　元眞

○題不レ知

萬七　御幣取る三輪の祝（はふり）がいはふ杉原薪こり程々しくに手斧取られぬ　人丸

檜

○家集、修行の道にてイ

かみ山の岩ねのひはら苔むして梢も白くとしふりにけり　僧正行意

○千五百番歌合

みむろ山峯のひはらのつれなきをなしをる嵐に霰降るなり　後京極攝政

○同

君が代をわがたつ杣に祈りおきてひはら杉はら色もかはらじ　西園寺入道太政大臣

○建保四年百首

龍田頬峯のひはらの白露におるやかざしの玉ぞみだるゝ　從二位家隆卿

○道家攝家雪五首歌合（雪イ）

雪積るこしの山風ふきぬらしひはら松の葉あらはれにけり　從三位頼資卿

○百首御歌

をしねかる山田のくろのひはらより殘る嵐の音ぞ寂しき　慈鎮和尚

○十題百首、木

まきもくのひはらの茂みかき分けて昔のあとを尋ねてぞみる　前中納言定家卿

○百首御歌

まきもくのひはらくもりて降る雪に小松が原も跡たえぬべし　後鳥羽院御製

○題不レ知

萬十　新古冬　まきもくのひはらもいまだ曇らぬに小松が末に淡雪ぞふる　中納言家持卿

○詠レ花

萬七　古にありけむ人も我がごとやみわの檜原にかざしをりけむ　人丸

○洞院攝政家百首、五月雨

三輪の山五月の空のひまなきにひはらの雫ぞ雨をそふなる　前中納言定家卿

○奈良花林院歌合、雪

あしたづか（るイ）三輪の檜原に雪ふかみ宮木ひくをの通ひぢもなし　讀人しらず

○百首歌

雲消ゆるをちのやまもと見渡せば檜原ぞ庭のよもぎなりける　寂蓮法師

○獨集、秋雨
雲のゆくたかねのひはら音たてて村雨わたる秋のやま風　中務卿みこ

○文永七年毎日一首中
時雨ふるひはらが下葉色づきぬよその紅葉もさこそそむらめ　民部卿爲家

○千首中
あま小舟とませの山も白妙にひはらの雪の道みえぬまで　同

梨

○六帖題
新六六 時にあひて秋をもまたぬなしならば必ず西の枝ならずとも　正三位知家

○同
新六六 年ふれば(と新六)變らずながらつきなしのあらぬ物にも身こそなりぬれ　衣笠内大臣

○同
同 片枝はなりもならずもつまなしの思ひあへりやねては語らふ　信實朝臣

○弘長四年毎日一首中
山なしの花の白雪ふるさとの庭こそさらに冬ごもりけれ　民部卿爲家

○建長七年顯朝卿家千首、寄レ梨懷
こふるまはくるしき物を世の中にあはれ忍ぶの山梨もがな　信實朝臣

○六帖題、山なし
新六六 いとひてもいづくにしばし宿からむ浮世の外のやまなしの花　同イ 知家

○同
同 ききわたる面影見えて春雨の枝にかゝれるやまなしの花　民部卿爲家

○同
同 足引の山なしの花さきしよりたなびく雲のおもかげぞたつ　衣笠内大臣

○獨集
春はまたいづちこゆらむ武藏野はたえていく日も山なしの花　後九條内大臣

○近江獨息所歌合
六六 世の中をうしといひてもいづくにか身をばかくさむ山梨の花　讀人しらず

○かひにて山なしの花をみて
かひがねにさきにけらしな足引の山なしの岡の山なしの花　能因法師

李

○六帖題
新六六 きえがての雪と見るまで山賤のかきほの李花咲きにけり　民部卿爲家

○同
同 山賤の衣ほすてふかきほかと白きをみればすもゝ花咲く　正三位知家卿

○同
同 數ならぬ片山かげの青すもゝ身はあるかひもなくなりにけり　信實朝臣

○同
誰も見よ李の下の道せばみかぶりかたぶけ手やはふれつる　權僧正公朝

杏（からもゝ）

○六帖題
新六六 いかにして匂ひそめけむひのもとのわが國ならぬ杏（からもゝ）の花　衣笠内大臣

○同
同 もろこしの吉野の山にさきもせでおのが名しらぬ杏（からもゝ）の花　民部卿爲家

同 ことはよも聞きしらじとや杏（からもゝ）の物をばいはで花にのみさく　光俊朝臣

柏

○題不知
萬二十 いなみののあから柏は時はあれど君をあが思ふ時はさねなし　讀人しらず

○同
萬六 なら山のこのて柏のふた面とにもかくにもねぢけ人かも　同

○天慶二年二月貫之家歌合、仲冬
白雪の降りつもりぬる奥山はあからがしはもうづもれにけり　同

〇天祿三年五月資子内親王家歌合
〇御集、秋歌中
〇家集
〇建保三年家百首御歌
〇秋歌中
〇家集、心かろき聞えありける女のつれなくあたりけるに
〇雜歌中
〇建保四年内裏御會、遠村雪
〇家集、夏の風を
〇六帖（題イ）
〇なかめがしは
〇光臺院入道二品親王家五十首、朝時雨（あさがしは）
〇建保四年百首
〇三十首歌（たまがしは）
〇文應元年七社百首

君がためわがもる山の青柏萬づよまでにもえまさらなむ　同
ちらすなよこのて柏の薄紅葉はもりの神もめでざらめやは　後徳大寺左大臣
おのがみなおもひ〳〵に神山のこのて柏を手毎にぞとる　和泉式部
神山のこのてがしはをとりかざし卯月になればみを（きみをイ）こそ祈れ　光明峯寺入道攝政
いはれのの萩がたえまのひま〳〵にこのて柏の花咲きにけり　西行上人
我といへばこのて柏のおもて〳〵とくひもろぎも結ぼほれつゝ　清輔朝臣
三笠山あとふみたえて柏木のめづらしからぬ森の木のもと　正三位知家卿
うづもるゝ遠山もとのむら柏たが垣根（のきばイ）より雪はらふらむ（ふるらむカ）　従二位家隆卿
たま柏すゑこす風にはかられてまだきに鹿や聲たてつらむ　俊頼朝臣
新六六 齡ひみふるから小野のもと柏もとの身ばかり戀しきはなし　衣笠内大臣
同 雨やまぬふるからをのの遠かたにながめ柏もなにしおふらむ　信實朝臣
六六 人こふるながめがしはは古里の垣根にのみぞ繁くみえける　讀人しらず
嵐ふく原のと山のあさがしは降るや時雨の色にいでつゝ　常磐井入道太政大臣
みるまゝに色にいで行くあさ柏ふるやしぐれの東雲の空　家長朝臣
よしさらばたえなば絶えね玉柏さすがにかけて問ふもうるさし　同
かた野なるならの葉がしは吹く風に霰ふりそふ音の烈しさ　民部卿爲家

○寛喜四年三首、雜
○神祇歌中、入家
○家集
○寶治二年百首、寄木祝
○文永二年四季百首、秋歌
○洞院攝政家百首

片山のなゝのはがしは葉を茂み梢ひまなき蟬の聲かな　民部卿爲家

昔たれみつのかしはのさかづきを天てる神に手向けそめけむ　度會仲房

神風やみつの柏にこと問はで榁をまつてふつゝみてぞふる（そでにイ）　俊頼朝臣

此の歌は俊忠卿家十首歌にあはむことをうらなふといふことをよめると云々

伊勢島やみつの柏のたちはもて包む眞袖に神まつるらむ　民部卿爲家

神風やみつのかしはのうき沈みとふにつけてもぬるゝ袖かな　衣笠内大臣

萬づ代もなほなが月の答にあふみつの柏にみきたてまつる　從二位家隆卿

神風やみつのかしはの秋の色にとようちびとの袖さへぞてる　家長朝臣

みわそゝぐみつの柏のしだれ葉のなが〳〵し夜を親ひきにけり　鴨長明

此の歌伊勢記云この國にみつのかしはといふものあり小侍從がうたに「神風やみつのかしはにとふことのしづむにうくはなみだなりけり」とよめりこれにてうらなふ事あるにやとしごろおぼつかなく思ふ事を此のたび人々にたづぬればえきき及ばぬよしなのみいふいかなる事にか此のかしは輪親卿集にみもすそ河の岸に生ふるとよみ侍らばそのわたりにあるかとてたづぬればむかしやありけむいまの世にはしまぐにの

うちにとくのしまといふ所あり木の上にかづらのやうにておひたるをのぼりてきりおろす時ひらにふしておちたるをばとらずたてざまにおちたるばかりをとる其のおちやうにぞとふ事のありとかやいひつたへたるこれは神宮四度の御まつりの時かならず入る物なり御前の御あそびはてて四の御かどのわきにとくらのことゝいふおほみわをまうくやしろのつかさこのみつのかしはをおの／＼ひとはもちてよればその上にこのみわをそゝぐことさらこれをこしにさしていづるなりなが柏ともいふにや寂蓮法師百首の歌の中に「おもふ事とくのみしまのながかしはながくぞたのむひろきめぐみを」といへるかやうにきけどいまだそのすがたをばみずこの日ある人のもとよりおくれりかしはのやうにてひろさ三四寸ながさ三尺ばかりまことにつれの木草の葉には似ずと云々

楢

○林下時雨

一字抄

ゐな山のならのむらだち木がくれて時雨の雨にあま宿りしつ　大藏卿有家

○永久四年八政太條大臣家歌合、霰を

風寒みゐなの中山こえくればならのかれ葉に霰ふるなり　藤原道經

○正治二年百首御歌

ならがしは末葉に露やなりぬらむ木陰涼しきひぐらしの聲　第三のみこ惟

○洞院摂政家百首、暮春
夕霞かた野にたてるなら柴のなれはまさらで歸る春かな　　後九條内大臣

○百首歌、晩風如秋
ゆふかけてならのはそよぎ吹く風にまだき秋めく神なびの森　　後徳大寺左大臣

○六帖題
新六六
さほ山のならのかしは（はがしはイ）木又はへのもとつ葉茂み紅葉するなり　　信實朝臣

椎

○題不レ知
萬十四
おそはやも猶こそ待ため向つをの椎のこやでのあひは違はじ　　讀人しらず

○六帖題
新六六
むかつをの椎のこやてのよにふれば人の心にあひたがはめや　　衣笠内大臣

○六百番歌合
山人の便りなりとも岡邊なる椎のこやては折らずもあらなむ　　法橋顯昭

○建保三年名所百首
千代までも葉がへぬ色を頼むかな後瀬の山の峯のしひしば　　従二位家隆卿

○山雪を
閑玉
ときすぐる椎のさ枝もみえわかずのちせの山に積る白雪　　後光明峯寺入道攝政

○六帖題
新六六
秋風にのきばの椎のおちつれば庭にくろ石しくかとぞみる　　光俊朝臣

○百番歌合
いまはたゞ空だのめにもこりねとやまちかね山の峯の椎しば　　慈鎭和尚

○家集、述懐歌中
ときは山椎の下柴かりすてむかくれて思ふかひのなきかと　　西行上人

○家集、冬歌中
おぼつかなこしのをやまの椎柴の青葉も見えず積る白雪　　權中納言俊忠卿

○建保四年百首
忘れじと頼めし末はわがさちや後瀬の山のよその椎しば　　家長朝臣

○弘長元年百首、不レ逢戀
しぐれゆく秋にしられぬこもりえの初瀬の山の峯の椎しば　　西園寺入道太政大臣

いつまでかうきたの森の椎柴のしひても人をこひわたるべき　衣笠内大臣

降る雪もをやみ／＼と小野山に椎柴かるは暫しばかりぞ　神祇伯顯仲卿

くらゐ山峯のしひ柴としふとも移ろふ色はあらじとぞ思ふ　六條院大進

くらゐ山みねの椎柴としふりてこえゆく人ぞ羨まれける　隆信朝臣

君ならであとをばつけじみかさ山はや雪かゝれ椎が木ずゑに　寂蓮法師

此の歌は定家卿少將に敍しけるにことさら三日すぎて悦び申すべきよし思ひける程に雪の定朝家卿のもとより「みかさ山ふみ見しまゝにまちしかどけさの雪さへまたあともなし」といひ遣はしたりける返事と云々

栗

山風にみねのさゝ栗はら／＼と庭におちちるおほはらの里　寂然法師

しめこめて岡べにはやす栗柴の年をそへても茂る頃かな　源家識

埋もるゝ木のはの下のみなし栗かくてくちなむ身をばをしまず　土御門院御製

枝栗のしぶる／＼もわが方にむけるを見るぞゑむこゝちする　信實朝臣

風に落つる庭のさゝ栗拾ひおきてとひくる人の家づとにせむ　家長朝臣

○後嵯峨院御時百首
○永久四年百首、椎柴
○同
○六百番歌合
○西行上人高野よりといひて侍りける返歌中（さゝぐり）
○康和二年四月國信卿家歌合、歷（ナシイ）レ年戀
○百首御歌、木（みなしぐり）
○建長八年百首歌合
○洞院攝政家百首歌、山家（さゝぐり）

○百首
捨てられて木のはにまじるみなし栗拾ひ殘せる秋やへぬらむ　藤原爲顯卿

○貞應三年百首（わかぐり）
よの中は秋になりゆくわか栗のしぶる〳〵やゑみてすぎなむ　民部卿爲家

○栗
風まちてひろふとすれど袖の上にかゝる木陰の露のおち栗　參議爲家卿

槻（つき）

○十題百首、木
けふみれば(ゆみきる程になりにけりうゑし岡邊の槻の片枝　前中納言定家卿

○寄弓、戀
關守がゆみにきるてふつきの木のつきせぬ戀に我衰へぬ　修理大夫顯季卿

○いはひの心を
君が代はおほはつせぢの百枝つきもゝえながらも榮えますかな　俊頼朝臣

枌（むろ）

○六帖題、むろ
新六六
しほのみつ浦に年ふるむろの木の變らぬ色も下葉ちりつゝ　衣笠内大臣

○同
同
しぐるれど秋の色には離れ磯に緑かはらずたてるむろの木　正三位知家卿

○同
同
いかゞせむ我がゐる山のむろの木のなれみし人を忘れかねつる　光俊朝臣

○同
浦風は吹きしをれどもいそ山にはがへぬむろの色ぞつれなき　前中納言爲家卿

○六帖題御歌、むろの木
昔へ（ヤイ）を思へば遠しいはやどにねはふむろの木幾代へぬらむ　中務卿のみこ

○題不知
林葉
ともの浦の浪路遙かにこぐ舟のそがひにみゆる礒のむろの木　源仲業

〇同
萬十五 離れそにたてるむろの木うたかたも久しき時をすぎにけるかな　讀人しらず

〇同
萬三 吾妹子が見しとも浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき　同

〇同
同 磯の上にねはふ室の木みし人をいかなりと問はば語りつげむか　同

令法（はたつもり）

〇六帖題、はたつもり
新六六 里人や若菜つむらむはたつもり外山も今は春めきにけり　衣笠内大臣

〇同
同 はたつもり積りし雪も消えぬれば賤がすまひ（さび新六）に若なつむらし（んイ）　信實朝臣

〇同
同 ねやいらぬ外山の春のはたつもり葉にのみいでて人にしらるゝ　光俊朝臣

〇永久四年百首、忍戀
奥山のくきがくれなるはたつもりしられぬ戀にやまふ頃かな　俊頼朝臣

〇家集、或人令法と云ふ物をおこせたるにかくいひやりける
今よりは深山がくれのはたつもり我うち拂ふとこの名なれや　能因法師

樒

〇六帖題、しきみ
新六二 しきみつむ竹のはなこのはかなさも誠の道にいらざらめやは　衣笠内大臣

〇同
同 あはれなる樒の花の契りかな佛のためとたねやまきけむ　民部卿爲家

〇同
同 枝ながら峯の樒の葉を繁みこるとはいはでつみにこそつめ　信實朝臣

〇同
あか水に樒の青葉きりうけてさゝげもたれはぬるゝ袖かな　光俊朝臣

〇家集、百首のむを

あさ衣まだおりなれぬ奥山のしきみが花の露にぬれつゝ　従二位家隆卿

〇建長八年百首歌合

世をいとふ人すみけりとみゆるかなしきみ流るゝ山川の水　右近中將雅宗卿

判者光俊朝臣云、爰樒流之跡雖レ得二花麗之文辭一、因緣共不レ淺旨趣又可レ深云々

〇寶治二年百首、山家水

かくれすむ人のありかもしられけり樒ながるゝ山川の水　従二位頼氏卿

楪（ゆづりは）

〇六帖題、ゆづるは

新六二　ゆづる葉の常磐の色もうづもれぬあらくま山に雪のふれれば　衣笠内大臣

〇同

同　これぞこの春を迎ふるしるべとてゆづりはかざし歸る山人　従三位知家卿

〇同

新六　年毎になづとはすれどゆづる葉のかひこそなけれ老のしぼみは　信實朝臣

〇同

新六一　山人のつま木にそふるゆづるはに春をかけたる色は見えつゝ　衣笠内大臣

〇題不知

六帖　旅人の（にイ）宿かす（るイ）が野のゆづるはの紅葉せむよや君をわすれむ　讀人しらず

〇同

萬十四　あともへかあしくま山のゆづるはのふゝまる時に風吹かずかも　同

〇同

萬十二　古にこふる鳥かもゆづるはの三井の上より鳴き渡りゆく　弓削皇子

妻開々（つまゝ）

○六帖題、つまゝ
新六六 神さぶる磯のつまゝのねをはへて深くや人を下に忍ばむ　衣笠内大臣

○同
同 世とともに浪のゆふこそかけつらめ神さび渡る磯のつまゝに　民部卿爲家

○同
同 神さぶる磯の妻問のねをはへて君し問はねばいけりともなし　光俊朝臣

歡合木（かうか）又ねぶトモ

○題不レ知
萬八 我妹子が形見のかうか花（ねぶは）にのみ咲きてけだしも身にならぬかも　中納言家持

○同
新六六 我妹子にかくとばかりは告げやらむ形見のかうか花さきにけり　正三位知家卿

○六帖題
新六六 うかりけるかうかの花のためしかな我が思ふ事もならぬ身なれば　民部卿爲家

○同
同 よにたえぬ大内山のかたなしに古きかうかの木ずゑをぞみる　信實朝臣

○同
同 山深みいつよりねぶと名をかへてかうかの木には人惑ふらむ　光俊朝臣

胡桃

○六帖題
新六六 夏山の裾野にしげき（る新六）くるみ原くるみいとふな行きて恨（あひ新六）みむ　衣笠内大臣

○同
同 時雨にもぬれぬ胡桃のかわかずてをのが心をなににそむらむ　民部卿爲家

樫

○つかのなかに籠りながめ給ひけり(ろイ)御歌
○六帖題、かたかし
○四季百首歌
○六帖題、かたかし
○同
○賀茂社百首、御歌
○奈良花林院歌合、祝
○長歌
○貞應二年百首、木(三イ)
○同

樫の葉を神のかざりにさしし年も命(にイ)やまだき人ははふりも(てぶりもイ)　聖徳太子

新六六
外山なるをかのかしはら吹きなびきあれゆく頃の風の寒けさ　民部卿爲家

夏かけて山かをるらし白樫の落葉しをれて道うもれつゝ　慈鎭和尚

新六六
小車の諸輪にかくるかたのかしいづれもつよきわが心かな　正三位知家卿

同
かつはまた岩にたとふるかた樫もつれなき人の心にぞしる　信實朝臣

かしの葉の紅葉ぬからに散りつもる奥山寺の道ぞかなしき　慈鎭和尚

萬一
春日山みねの白樫よろづよを君にといへば神もすさめず　讀人しらず

たまだすき　うねびの山の　かしはらの　ひじりのみよに
あれましし　かみのところ　同

新六六
きりたふすたなかみ山の櫟の木は宇治の川瀬に流れ來にけり　衣笠内大臣

櫟

大井河しぐるゝ秋のいちゐだに山やあらしの色をかすらむ　民部卿爲家

猿滑（さるなめり）

足引の山のかけぢの猿滑りすべらかにてもよをわたらばや　同

糖(ぐみ)

○貞應二年百首、木(三イ)

小山田の苗代ぐみの春すぎて我が身の色にいでにけるかな　民部卿爲家

樛(とが)

○同

いざさらば繁りおひたる樛(とが)の木のとが〳〵しさを立ててすぎなむ　同

漆

○同

紅のおのが身に似ぬ漆(の)木ぬるとしぐれに何かはるらむ　同

もちひの木

○同

君がすむ宿の軒端のもちゐの木變らぬ色はときはかきはに　同

つげ

○同

賤のめが頭けづらず朝夕につげの小櫛やとるまなからむ　同

こぶし

○同
うちたえて手をにぎりたるこぶしの木心せばさを嘆く頃かな　民部卿爲家

ひゝら木

○同
世の中は数ならずともひゝら木の色にいでてはいはじとぞ思ふ　同

そばの木

○同
ありとても人にすさめぬそばの木の唯片そばに過すべきかな　同

ねずもち

○同
かた山のおどろにまじるねずもちのひく人ありと頼むべき世か　同

こめ／＼

○同
秋ふかき山の夕霧こめ／＼におのれも色やまづかはるらむ　同

うはめの木

○同

冬くれば霜をいたゞくうはめの木老の姿やいとゞ見ゆらむ　同

ねぶの木

○貞應二（三イ）年百首、木

秋といへば長き夜あかすねぶの木もねられぬ程にすめる月かな　同

すろの木

○同

朝まだき梢ばかりに音たてて棕櫚の葉すぐるむら時雨かな　同

めづら

○同

朝露のもる山かげのしためづら珍らしげなくぬるゝ袖かな　同

櫁（えのき）

○同

川端の岸のえの木の葉をしげみ道ゆく人の宿らぬはなし　同

柿

○同

秋くれば山の木のはのいかならむそのふの柿は紅葉しにけり　民部卿爲家

○家集

いにしへのやまと言葉の跡とめて遥かに仰ぐ柿のもとかな　信實朝臣

○百首歌

山里はかきの紅葉にはとなきて時雨もふりぬかぜもさむけし　寂蓮法師

○柿のみはのこりて葉のみなちりぬるをみて

世の中に嵐の風の吹きながら實をば殘せる柿のもみぢ葉　源仲正

桑

○寄レ木

萬七

たらちねの親の園なる桑もなほ願へば衣にきるといふものを　讀人しらず

○延喜十二年賀御屏風

ことし生ひのにひ桑繭の唐衣千代をかけてぞ祝ひそめつる　貫之

○たなかみの山ざとにてくはの木に露のおきたるを

露にさへしをるゝ桑の枝見ればこぎたてられしわが身なりけり　俊賴朝臣

○六帖題

新六六

山がつの園生の桑のくはまゆのいでやらぬ世は猶ぞ悲しき　衣笠內大臣

○同

同

吾妹子がこやのゑびらの數おほみあまたしめつるそのの桑原　正三位知家卿

○同

賤の女がつくり榮ゆる桑原のおなじさまなる枝つゞきかな　前中納言爲兼卿

○同

新六六

みのをはり堺つゞきに植ゑなめてよむともつきじ桑の幾もと　光俊朝臣

○あせみ

あせみ

おそろしやあせみの枝を折りたきて南に向ひ祈るいのりは　同

逸師

○題不レ知

萬四 大原のこのいちしばのいつしかと我が思ふ妹に今宵あへるかも　讀人しらず

○いちし

現存 立つ民もこゝろもで白し道のべのいちしの花の色にまがへて　光明峯寺入道攝政

○六帖題

新六六 大原はゆきてやみましいつしかとさく逸師ばの花のしるべに　信實朝臣

櫪（くぬぎ）

○題不レ知

萬四 佐保河の岸の司のしば櫪（わかイ くぬぎ）な刈りそ有筒も春し來たらば立ち隠るがね　讀人しらず

萬十二 わたらひの大川の邊のわかくぬぎ我久にあらば妹こひめやも　同

○六帖題（くぬぎはら）

新六六 たかせさすさほの川原の櫪原色づくみれば秋のくるかも　衣笠内大臣

○同

同 さほ河の岸くだりなるわかくぬぎ猶茂れとやかりはやすらむ　正三位知家卿

○同（くぬぎはら）

同 春きてもは山が裾の櫪原また冬がれのいろぞのこれる　光俊の朝臣

○同（ふしくぬぎ）

同 里人のほだきる冬のふし櫪おほかはの人のあれまくもうし　信實朝臣

明玉
なみたてるくぬぎが本に駒とめて沖津川原にしばしすゞまむ　皇太后宮大夫入道三品
煙たつをちのしのやのくぬぎ原そのふしもなく秋ぞ悲しき　前中納言定家卿

柴

あや柴を苔のたもとにかけぬれば色好むとや人は見るらむ　大僧正行意
ふる雪に杉のはならす三わの山大かたしばの葉も見えぬかな　讀人しらず
岡のべのならの眞柴に風立ちてかへるはくずのうら葉のみかは　俊惠法師
此の歌判者云右歌は野といふ事なしなかのべはなかべなりと云々
山おろしに人やは庭をなら柴のしばしもふれば道もなきまで　後京極攝政
片岡の花ものこらぬ梢より緑かさなるまつのしたしば　同
新六二
春をへて鳥（と）かへる山のたかつめに柴のたち枝もひこばえにけり　衣笠内大臣
山里の峯のした柴をり〳〵にもののあはれのたゆむまもなし　同
冬寒みしひの眞柴ををりさせば袖には風もたまらざりけり　正三位季經卿
うたの野やかれ柴かくれふす鳥のとびたつばかりふる霰かな　従三位行家卿
時雨する山のぬれしばこりにとやまだ夜をこめて賤がむれたつ　仲忠（正イ）
つま木とり谷の通ひ路うちはらひわけぞわびぬる柴の雪をれ　前中納言忠良卿

○[illegible]中
○建久三年九月十三夜後京極攝政家歌會（くぬぎはら）
○家集、雜歌中
○永久二年十二月太皇宮亮家歌合
○久安三年七月右大臣家歌合、野
○正治二年百首
○夏御歌中
○六帖題
○建長八年百首歌合（したしば）
○六百番歌合（しひのましば）
○弘長元年百首
○家集、曉時雨
○建仁元年老若五十首歌合

○家集、山家時雨を
宿かよふはゝその柴の色をさへしたひてそむるむら時雨かな　西行上人

○永承六年毎日一首中
をぐら山松の嵐の日にそへて寒きあさけにかはるしたしば　民部卿爲家

○弘長四年毎日一首中
まつとても人やはとはむをぐら山埋もれはつる雪の下柴　同

○述懐百首
栞するならのは柴にちるつゆのはら／＼とこそ音はなかれけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○同
しはつ山ならの眞柴にかざされて狙ふ獵夫のたゆみなの世や　同

○同
ふし柴に宿れるほやのおのれのみ常磐かきはに物をこそ思へ　俊頼朝臣

夫木和歌抄卷第二十九終

夫木和歌抄　卷第三十

雜十二

題　國　禁中　仙家　都　故鄕　故宮
閑居　宿　宅　廬　屋　屋形
鄰　山家　田家

國

○老若五十首歌合
玉神祇
我がくには天照神の末なれば日の本としもいふにぞありける　後京極攝政

○弘長元年百首題
山はみな東（あづま）もろこし貢みけりわが國ひろく花やさくらむ　後九條内大臣

○家百首
あきつしま人の心を種としてほかにはきかぬ大和言の葉　民部卿爲家

○永仁三年家歌合
島のほかも波治まれるあきつ國に道ある君の惠みをぞしる　參議爲相卿

○六帖題（てるひ）
六六一
天津空かはらずてらす日の本の國靜かなる御代ぞかしこき　正三位知家

○同（國）
新六二
さかひこそ數にはあらぬ國なれどあきつ島にぞ法は廣まる　光俊朝臣

○題不レ知
萬二十
いざ子どもたはわざなせそ天地のかためし國ぞ大和しまねは　讀人しらず

○大嘗會悠紀方御屛風
あし原やみづほの國をもる山(のイ)もとよのあかりの面白きかな　前中納言匡房卿

○御集、國イ
現存六
蘆原のくにつによせしいは舟のさして契りし末なたがへそ　洞院攝政

○國
現存六
いづる日のかたみの國をやすくにと祈る末をば神やてらさむ　卜部兼直

○建仁元年老若五十首御歌合
ひとのすむやまとは花の國なれやみよしのの山をはつせの山　慈鎭和尚

○同
むかしよりみくにつたはる法の水流れてすめる四の海かな　後京極攝政

○百首歌合、春曙
花の色鳥のこゑまで牀しきは彌陀の御國の春のあけぼの　權僧正公朝

○正治二年百首
いく萬づ君を惠まむ紀の國やみつの山にも千代をそへつゝ　皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合
いざなぎや色はも同じ末なれば君にちぎれるとよくにのつち　大納言道具卿

○同
もろこしの代々はうつれど敷島や大和島根は久しかりけり　土御門内大臣

○同
津の國のみつとないひそ山城のとはぬ辛さは身にあまるとも　後鳥羽院宮内卿

○建保三年名所百首
としへぬる松も昔に山城のとはにあひみむちよのふるみち　順徳院御製

○六帖題
新六五
よゝかけて思へば久し蘆原や中津國よりならふことのは　民部卿爲家

○同
同二
かけまくもかしこかるべし敷島や大倭ぐになる大みやどころ　同

○文永二年毎日一首中
ひとつにぞ神も佛も守るらむわが日の本の大やまとぐに(宮どころイ)　同

○住吉社三十首
名もしるし年も積りの國をへて猶もやそぢの(にイ)坂ぞこゆべき　從三位家隆卿

○建長八年百首歌合
萬六
おしてるやなにはのくにに夏のきて蘆の茂みは行く舟もなし　藤原伊嗣朝臣

○難波の幸の時、長歌

萬六
おしてるや　なにはくにの　あしがきの　ふりにし里と　人　笠　金　村
なみの　おもひやすみて　つれもなく

○長歌

萬一
あめつちも　よりてあるにぞ　いしばしる　あふみのくにの　讀　人　し　ら　ず
ころもでの　たなかみ山の

○同

萬十三
あしはらの　みづほのくにに　たむけすと　あまくだります　同
いほよろづ　千萬かみの　かみ代より

○同

萬一
あまさかる　ひなにはあれど　いしばしる　あふみのくにの　人　　丸
さゝなみの　おほつのみやに

○同

萬二十
すべらぎの　とほのみかどと　しらぬ火の　つくしのくには　中納言家持卿
あたまもる　おさへのきそと　きこしめす

○同

萬十三
こもりくの　はつせのくにに　さよはひに（とイ）　われがきたれば　讀　人　し　ら　ず
たなぐもり　雪はふりきぬ　さくもりて　あめはふりきぬ

○幸二吉野宮一の時

萬一
やまかはの　きよきがうちと　みこゝろを　よしののくにの　人　　丸
花ちりあふ　あきつののべに　みやばしら　ふとしきませば

雲葉
動きなき大和しまねのときはぎも國を治めし神やうゑけむ　卜　部　兼　直

此の歌は定嗣卿人々に貞觀政要の文をよませ侍りし時治レ國如レ栽レ樹

の心を

○雜歌の中

一須彌のよつのおもての空をゆく月日や國をまがへざるらむ　他阿上人

○六帖題

神國と豐あしはらを定めおきて君の守りの限りなのよや　權僧正公朝

○中務卿親王家五十首歌合

波たたで風をさまれる君が代にその名あらはす浦安のくに　同

此の歌判者光俊朝臣云浦安國は伊弉諾尊名付け給はりげにも他にことにこそ侍りければ波平風靜也嘉名かた〴〵賞め侍るべきにこそと云々

○五行の御歌中に

むかしより都しめたるこの里は唯わがくにのも中なりけり　後京極攝政

禁中

○寛喜元年女御入内御屛風

こゝのへの庭にかさぬるさかづきのさすや光の雲の上人　西園寺入道前太政大臣

○同

としごとの山あゐの袖にひく駒のたえせぬ今日の春の庭かな　從二位家隆卿

○同

霞しく雲居の春の空ながらゆきをめぐらす山あゐの袖　正三位知家卿

○二夜百首御歌

萩の戸の花のしたなるみかは水ちとせの秋の影ぞうつれる　後京極攝政

○同

冬のあした衞士の煙をたつるやのあたりは薄き九重の雪　同

○寶治二年百首、水邊螢

これもまた衞士のたくひ（にイ）か百敷のみかはの池の夏蟲のかげ　正三位知家卿

○題不レ知

名もたかき大内山をたちいでて月すみわたる御川水かな　賀茂重保

○洞院攝政家百首イ
いくちよの秋をばふともさゝだけの大内山の色は變らじ　従二位家隆卿

○續集、月
九重にたゝめる玉の御はしより傾く月のねりのぼるかな　法性寺入道關白

○同
とねりめすとよのあかりに月さえて宮人わたるたつの尾の道　同

○一二三を句のかみにおきて秋のむた
九重やながき夜すがらもる水の音さへさむきにはの初霜　後京極攝政

○十題百首、居所
もゝしきやもる白玉のあけがたにまだしも暗き鐘の音かな　中納言定家卿

○後京極攝政家十首歌合、紫宸殿
さえのぼる御はしの櫻雪ちりて春秋みするくもの上の月　同

○建久元年一字百首、冬歌
百敷やてる日の前にとるほこのたつる心は神もみるらむ　同

○仙洞三十首、花歌
恨みばや御はしの前にとるほこの身をたてかぬる花の下蔭　爲實卿 朝臣イ

○百首御歌、禁中
みやぎ野を思ひいづるぞあはれなるけふ萩の戸の秋の匂ひに　慈鎭和尚

○同
これをみむ人は心を磨くべしおほはのむくのいにしへの跡　同

○六帖題
新六二 とのへみれば古きみかきの瓦ふき變らぬ御代に又めぐるかな　信實朝臣

○十題百首御歌
もゝしきや玉のうてなにてる月の光をえたる秋のみや人　後京極攝政

○同二年百首
よろづよに玉しく庭の松の影はるの日かげものどかにぞさす　従二位家隆卿

○正治二年仙洞歌合、庭松
もゝしきや玉しくにはの清きせに光をそへて宿る月かな　正三位季經卿

○六帖題、秋の月
新六一 しひてみる秋の吃哩字（きりじ）のうへにこそ猶九重の月はすみけれ　光俊朝臣

○同、もゝしき
同二 たちよりてまづ袖みせしかたなしの軒の下こそ忘れがたけれ　同

百敷や流れ久しき河たけのちよの緑はきみぞみるべき　皇太后宮大夫俊成卿
○文永六年五社歌

河竹のかはらぬ色の深緑たましく庭のするゑぞしらるゝ　參議雅經卿
○百首歌禁中

をさまれる御代のためにやかきとめて風も音せぬ荒海の波　同
○同

仙家

漢故事和歌集
もゝの花しげきみ谷に尋ね入りて思はぬ里に年ぞへにける　仲實朝臣
○永久四年百首、仙家

たちぬはぬ衣の袖しふれければ三千とせふべき桃もなりけり　俊頼朝臣
○同

のりてゆくつるの羽風に雲はれて月もさやけくすむ山邊かな　源兼富
○同

やま人もすまでいく代の石のゆか霞に花はなほ匂ひつゝ　前中納言定家卿
○承久元年内裏（御會イ）

春秋をこゝにとゞめて年をふるわがすむ宿やこの名なるべき　龜山院御製
○弘安元年九月詩歌合、仙家勝趣

たづねけむ心をぞしる雲のなみ煙の波のふかきやどりを　入道前太政大臣
○同

うゑてみる山路の菊の年をへてをののえくちむ秋ぞ久しき　前大納言爲家卿
○同

ふく風もをさまる御代のあさぢ山いづる月日の影ものどけし　從三位顯成卿
○同

ふるさとは千歳の秋や過ぎぬらむ君すむ山の紅葉見るより　從二位行家卿
○仙洞詩歌合、仙家秋興

あしたづに乘りて通へる宿なればあとだに人はみえぬなりけり　能因法師
○龍門にまうでて仙屋（室にイ）書きつけける

都

〔題しらず〕
萬六 萬よに見ともあかめやみよしののたきつ河内の大宮どころ　笠金村

〔同〕
同 いづみ川ゆくせの水のたえばこそ大宮所うつろひゆかめ　讀人しらず

〔同〕
同 みかの原ふたいの野べを淸みこそ大宮どころ定めけらしも　同

〇弘長三年内裏百首、賀茂
山城の此のみやこをや守りけむをがたの賀茂にあとたれしより　從二位行家卿

〇六百番歌合
こひそめし心はいつぞ石の上みやこの奥のゆふぐれの空　慈鎭和尚

〔千五百番歌合〕
新後撰秋上 玉ぼこの道の芝草うちなびきふるきみやこに秋風ぞふく　後鳥羽院御製

〇家集、夏歌中（花のみやこ）
ほとゝぎす靑葉の山にかへるとも花のみやこを思ひわするな　前中納言道房卿

〔建保三年内裏百首御歌、御製（玉のみやこ）〕
いさぎよきたまの都をいづる日は我が立つ袖の光なるらむ　光明峯寺入道攝政

〇題不レ知（雲のみやこ）
新撰萬葉 かきちらし花とのみふる白雪はくもの都の玉のちるかも　讀人しらず

〇忽聞（顯イ）海上有二仙山一
尋ねずばいかでか知らむわたつ海のなみまにみゆる雲の都を　太宰大貳高遠卿

〇六帖題（ふるみやこ）
新六二 あともなき昔がたりの古都のこるなにははうらさびにけり　信實朝臣

〇題不レ知（なにはのみやこ）
萬三 むかしこそなにはゐ中と謂はれけめ今は都とそなはりにけり　式部卿宇合

〇仁和行幸御歌合、時鳥（ふるのみやこ）
萬六 さよふけてふるの都の時鳥かへる雲路に聲をきかせよ　讀人しらず

〔題不レ知（くにのみやこ）〕
現存六 みかのはら國の都はあれにけり大宮人のうつりいぬれば　同

〔百首歌
現存六 みかの原ふりにし國の都にも山と川とぞあと殘りける　光明峯寺入道攝政

○長歌
萬十七 やましろの　くにのみやこは　はるされば　花咲きをゝり　境部宿禰老丸
あきされば　もみぢばにほひ

○同
萬三 おほやまと　くにのみやこは　うちなびき　はるさりくれば　中納言家持卿
山べには　花さきをゝり　かはせには　あゆこさばしる

〔建治三年名所百首
たつのいちや千年をかへてくる民も國の都の我がきみのため　從二位家隆卿

○故郷秋風
明玉 さびしともたれかはきかむいづみ川國のみやこの松の秋風　法印尊海

萬二 たかてらす　日のわかみこは　とぶ鳥の　きよきみやこに　人丸
かみのまに　ふとしきまして

萬二 わたらひの　いもゐのみやこ　かみ風に　いぶきまどはし　同
あまぐもを　日のめもせず　とこやみに　おほひたまひて

〔吉野宮幸とき也（しきつみや）
萬一 この川の　たゆることなく　此の山の　いやたかからし　た　同
ま水の　たきつ（のイ）のみやこは　みれどあかぬかも

○建長七年顯朝卿家千首歌
今ははやこほりもとけぬたま水のたきの都は春めきぬらむ　藤原光朝朝臣

○洞院攝政家百首御歌、月
月影のやどりてみがく玉水のたきつみやこに秋風ぞふく　光明峯寺入道攝政

○題不レ知（ひさかたのみやこ）
萬十三 久方のみやこをおきて草枕旅ゆく君をいつとかまたむ　讀人しらず

○同（しがのみやこ）
明玉
ふりぬとてしがの都を山里にたれすみなして衣うつらむ　　祝部成茂

○同
萬一
いにしへの人にわれあれやさゝ波の古き都をみれば悲しき　　讀人しらず

○同（うぢのみや）
同
秋の野の尾花かりふき宿れりしうぢの都のかりいほし思ふ　　額田王

○秋歌中
續千秋下　石間
をばなふくかりいほ寒き秋風にうぢのみやこは衣うつなり　　藤原顯成（經イ）

○（ふぢはらのみや、大和）
萬十
藤はらの古きみやこの秋萩はさきてちりにき君まちかねて　　讀人しらず

○長歌
萬十三
あやにかしこき　藤原の　みやこしみゝに　ひとしもの　みちてはあれど　きみしもの　おほくおはせど　　同

○題不レ知（ならのみやこ）
萬十六
世の中をつねなきものと今ぞしるならの都の移ろふみれば　　福丸

○同
萬八
沫雪のほどろほどろに降りしけばならのみやこし思ほゆるかも　　太宰師大伴卿

○同
萬十五
うな原をやそ島がくれきぬれどもならの都は忘れかねつも　　讀人しらず

○同
萬十六
くれなゐに深くそみにし心かもならの都に年のへぬれば　　同

○同
萬十五
あをによし奈良の都にたなびける天の白雲みれどあかぬかも　　同

○たらの都にて作る歌
萬十六
たちかはり古きみやことなりぬれば道の芝草ながくおひけり　　同

○雜歌
萬代　續後拾雜
いにしへのならの都の宮柱このかたなしになほのこるかな　　中原光朝卿（朝光朝臣イ續後拾）

○神無月の比ならの都にて
雲葉
道芝の霜夜の月をふみならしふりにし都あれにけらしも　　三條右大臣

○題不レ知
ひなイ
しなさかる越の國邊にありしかばならの都もしらずなりにき　　鎌倉右大臣

竹のみや籬にうゑて千代までも祝ひそめけむ此の君ぞこれ　皇太后宮大夫俊成卿

思へたゞ竹の都にかすみつゝしめのほかなる御代の景色を　俊頼朝臣

此の歌は伊勢に侍りける頃正月二十八日齋宮おりさせ給ひぬとききてむろ山の入道がもとより「ふるさととなりぬるみやの夕がすみおもひかけずやたちかはりけむ」とよみておくりけるかへしと云々

霜ふかきそのの都にすむ人はきえかへりてか朝日をぞまつ　讀人しらず

此の歌判者清輔朝臣云しもふかきといへることばあと（そびイ）ひな（味）うまへるなどあるおもふ心なきにあらず但しそののみやこぞ歌合などにかやうにはよむべしともおぼえずと云々

故鄕

萬二
よそにみし眞弓の岡も君ませばとこつみかどと宿直するかも　讀人しらず

めぐりゆく秋やはもとの秋の空月ぞむかしのしがのふる里　後鳥羽院御製

新千春下
みやぎもり渚の霞たなびきて昔も遠きしがのはなぞの　前中納言定家卿

古里におもふ人あるいへづとは春にぞみゆるしがの山ごえ　寂蓮法師

萬二
ゆゑもなき　まゆみのをかに　みやばしら　ふとしきまして　人丸

○文治六年五社百首、伊勢（竹のみやこ）
○新羅社歌合、述懐
○故鄕歌
○千五百番歌合
○元久（永イ）二年詩歌合、水鄕春望
○六百番歌合
○長歌

みあらかを　たかしりまして　あさごとに

〇思故鄕

（萬七）清きせに千鳥つまよぶ山ぎはに霞立つらむかみなびの里　人丸

〇題不知

（萬三）わすれ草我が紐につくかく山のふりにし里を忘れし（ぬイ）がため　讀人しらず

〇長歌

（萬十）ますらをの　いでたちむかふ　故里の　かみなび山に　あけくれは　つみのさえだに　夕されば　同

〇題不知

（萬六）故鄕の飛鳥はあれどあをによしならの飛鳥をみらくしよしも　坂上郎女

〇同

（萬十一）大原のふりにし里に妹を置きてわれいねかねつ夢に見えつゝ　同

〇同

（萬二）よしもなくさたの岡邊にかへりゐばしまのみはしに誰かすまはむ　人丸

（萬二）わが里に大雪ふれり大原のふりしにし里にふらまくはのち　天武天皇御製

〇家集

冬くればふるさと寒し大原やおぼろの淸水さえやまさらむ　前中納言匡房卿

〇建長七年顯朝卿家千首歌、故鄕

みののくにたきののうへに宮居せしあとに流れて瀧ぞ殘れる　權少僧都玄覺

〇建保四年仙洞百首

祈りおきしわが古里の三笠山君のしるべとなほ思ふかな（觀イ）　前中納言定家卿

〇千五百番歌合

色深き萬づの葉までならのはの名におふ宮にちり初めけり　家長朝臣

〇永久四年百首、故鄕

さほどのの榮ゆる見れば影ふれて古鄕とこそおぼえざりけれ　源兼昌

〇同

さしながらまだ斧の柄はくちなくにまがきも間もあらぬ里かな　仲實朝臣

〇仁和寺法親王家五十首、里時鳥

時鳥誰しのべとか大あらきのふりにし里を今もとふらむ　前中納言定家

○毎日一首中、故郷
千早ふるならの宮ゐに祈りして大和言のは道をはるけよ　民部卿爲家

○千五百番歌合
しのべどもいはぬ色なる山吹の花に戀しきゐでのふるさと　後久我内大臣

○同
夏かりのあし間の浪の音はして月のみのこるみほの古里　寂蓮法師

○建仁元年老若五十首歌合
白雲のたつ野とよそに見えつるは卯の花さける小野のふる里　嘉陽門院越前

○秋御歌中、故郷秋
露の袖霜のさむしろいかならむあさぢ片しくをのの古里　後京極攝政

○天徳三年八月女房前栽合歌
けふよりはか（もイ）すむ（みイ）山路にたちのぼり三輪の古里灰かにぞ（けイ）みる　元眞

○題不レ知
ふぢ原の古里人になれる身を島松のえもさこそしるらめ　參議忠基卿

○文集百首歌に、秋風不破關
ふるさとのふはの中山日はくれてせきや寂しく秋風ぞふく　光俊朝臣

○建長七年顯朝卿家千首、關紅葉
山風にしぐれぞいまはふるさとのふはの關路は紅葉しにけり　信實朝臣

○貞應三年百首
ねやのうちの眞木の板さへ苔むしてやつれ果てたる草の故郷　民部卿爲家

故宮

○八幡若宮歌合仙洞より侍りけるに、故郷霧（しきしまの宮）
やまとかも敷島の宮しきしのぶ昔をいとゞきりやへだてむ　後京極攝政

○題不レ知（ののうへのみや）
萬二十
高圓の野の上の宮は荒れにけりたゞしき君のみよとほそけば　中納言家持卿

○百首御歌（たかまどの宮）
高まどやあれのみまさる宮のうちにのこる昔の庭の松風　土御門院御製

○同、をはたゞのみや（大和、攝津）
續古雜下
をはただの宮のふる道いかならむたえにしのちは夢の浮橋　同

○百首歌（ひはらのみや）
よそにみし古き木ずゑのあともなし檜原のみやの秋の夕霧　從三位家隆卿

○光明峯寺入道攝政家百首歌合、故鄕紅葉
おひかはる木末もあらずふりにけり檜原の宮の秋のもみぢば　信實朝臣

○後法性寺入道關白家百首歌（たまきの宮、大和）
まきもくのたまきの宮に雪降れば更に昔のあしたをぞ見る　皇太后宮大夫俊成卿

○一字百首（ふしみの宮、山城）
すが原やふしみの宮のあとふりていくらの冬の雪積るらむ　前中納言定家卿

○正治二年七月當座三首歌合
荒れにける高津の宮をきてみればまがきの蟲や主なるらむ　後鳥羽院御製

○御集
いにしへの高津の宮のあとふりて蟲の音のみぞ秋をわすれぬ　醍醐入道太政大臣

○家集
あれにける高津の宮のあさぢ原なほたましきの村雨の露　鴨長明

○雜歌中、秋風
日本紀竟宴歌
おほさゝぎ高津の宮は雨ふれどつかれぬことを民はよろこぶ　按察使國隆卿（經イ）

○百首歌
松風はいづくもおなじこゑすなりたかつのみやの秋の夕暮　慈鎭和尚

○同
玉葉五
昔おもふ高津の宮のあとふりてなにはのあしに通ふ浦風　同

○長歌
萬四
やすみしる　わが大君の　ありかよひ　なにはのみやは　く
ぢらとり　うみかたつきて　たまひろふ　はまべをちかみ　讀人しらず

○ふるさと（大津宮、近江）
現存六
舟とむる港やいづこさゞなみの大津のみやの秋の夕霧　後九條内大臣

○家集
拾遺
さゞ波や大津の宮は名のみして霞たなびき宮木もりなし　人丸

○同（ひのくまのいりのの宮、大和）
ひのくまのいりのの宮のさゆる日は川せこほりて駒も渡さず　光俊朝臣

○七百首歌、古宮（ながらのみや攝津）
古のながらの宮は跡もなしはし柱だにくちはつる世に　權僧正公朝

○同（あぢはらのみや）

おしてるや海かたまけてみせむかもあぢ原の宮に玉拾ふかも　同

○弘安元年中務卿親王家百首（よしのゝみや）

くにみせし昔はとほく霞きぬよし野のみやの春のよの月　同

○建長七年顯朝卿歌千首、故郷（あぢふのみや、攝津）

たづのなくあしべの浪に袖ぬれてあぢふの宮に月をみるかな　少僧都玄覺

○柿本影供百首（おきつのみや、大和）

古來歌　みよしのの秋津の宮の櫻花いくよさきてか神さびぬらむ　法印尊海

○題不知（つゞきのみや、山城）

日本紀　山城のつゞきの宮にものまうすわがせをみれば涙ぐましも　讀人しらず

○弘長元年百首（かしはらの宮、大和）

古來歌　あめつちの神代はしらずかしはらの宮ゐぞ國の始めなりける　法圓定圓

○六帖題、やな

そひがはにやなうつ男はやくこそにべ備へけれ柏原の宮　權僧正公朝

○題不レ知（ふたいのみや、山城）

萬六　ふたいやま山なみ見ればもゝ代にもかはるべからず大宮所　讀人しらず

○長歌

山しろの　かせ山ぎはに　みやばしら　ふとしきまはり　たかしりし　ふたいのみやは　かはちかみ　同

○同（うねびのみや）

萬二十　あきつしま　やまとのくにの　かしはらの　うねびのみやに　みやばしら　ふとしきたてて　あめのした　しらしめける　中納言家持卿

○同

萬二　わが大君の　よろづ代を　おもほしめして　つくらしし　かく山のみや　よろづよに　人丸

〔題不レ知

萬一　橘の島のみやにはあかずともさたのをかべにとのゐしにゆく　同

〔橘寺にまうでて月をみて

萬代　知らざりし昔さへこそ戀しけれたけちのみやの月を眺めて　寂蓮法師

(題不知)
いとねたしくゝりの宮の池にすむ鯉ゆゑ人にあざむかれぬる　讀人しらず

閑居

(文治百首)
我が宿のみぎりにたてる松の風それよりほかはうちも紛れず　前中納言定家卿

(同、知眞隱者不必住山林)
爪木こる宿としもなしすみはつるおのが心ぞ身をかくしける　同

(家五十首、閑居)
岩ねふむ山路は苔にうづもれて雲こそかよへ人はとひこず　喜多院入道二品のみこ

(同)
とことはに身をも離れぬ影だにも月入りぬればみえずなりけり　三條入道左大臣

(同)
いつとても人めまれなる山里はおもひもわかぬ冬の寂しさ　前大納言爲家卿

(同)
やま里はほそ谷川のさゞれ水おとなふさへぞさびしかりける　源師光

(同)
山里は月のひかりもすみかへてたもとの露に宿るなりけり　覺延法師

(同　閑居)
谷の水みねの松風おとづれてなにか寂しきすまゐなるべき　前大納言隆房卿

(同)
音たえぬ松の嵐もあるものをとへかし人の秋のけしきを　皇太后宮大夫俊成卿

(同)
さもこそは庭は木のはにうづもれめこけおひにけり松の下道　同

(同)
下雜三
殘る松かはる木草の色ならですぐる月日もしらぬ宿かな　定家卿

(同)
夕暮の哀れをたれにかたらまし人もとひこぬ山のすみかを　正三位季經卿

(同)
山田もるひたの音にぞおのづから人すむ里のあたりともきく　寂蓮法師

○六帖題、雑の月

○文集百首、閑居進不レ厭二市廛一、遠（イ）退哀（イ）不レ避二人老一

○後法性寺入道関白家百首、述懐

○十題百首、居所

○暁（晩イ）嵐掃レ雨斜陽見、寒浪問水流水無

○百首御歌

○千五百番歌合（野べのいはや）

○建久七年百八十首題歌

○大堂神童子いはやにて（神のいはや）

○文治三年十首歌、よしののいはや

○俊成卿十首歌

○家集、山家心を

○百首御歌中

○六帖題、みねのいはや

新六一 さこそあれまだ人おともせぬ庵にふけたる月をみるが悲しさ　光俊朝臣

里近きすみ（みイ）かを分けて慕はねばつかふる道をいとふともなし　前中納言定家卿

窟

うき世かなひとりいはやの奥にすむ苔の袂もなほしぼるなり　後京極摂政

山ぶしの岩屋のほらに年ふりてこけにかさなる墨染の袖　同

苔深きいはやの牀のむら時雨よそにきかばやありてうき世を　前中納言定家卿

山深き岩屋の月はあけやらでこけのとびらに秋風ぞふく　後九條内大臣

むかしきく野べの岩屋ぞ哀れなる嵐のそこを夢に見えけむ　皇太后宮大夫俊成卿

よしさらばともなひはてよ秋の月苔の岩屋によはそむくとも　前中納言定家卿

雲葉 雪間よりたちいでてみればかすみけり神のいはやの春の曙　前権僧正宗懐（定イ）

ふりまさる吉野のみ雪跡たえてもらぬ岩屋はおとづれもなし　前中納言定家卿

冬ごもる吉野の山の岩屋にはこけのしづくに春をしるらし　従三位頼政卿

吉野やま奥のいは屋を見ぬ人や雪降るさとを近しといふらむ　従二位家隆卿

ときは山かすみわたれる曙やおくの岩やも心すむらむ　後九條内大臣

新六一 あはれなり峯の岩屋の冬ごもりのぼる煙のたたぬばかりぞ　衣笠内大臣

おもひやる峯の岩屋の苔のうへにたれか今宵の月をみるらむ　前中納言定家卿

奥の海やえぞが岩屋の煙だに思へばなびく風は吹くらむ　従二位家隆卿

萬三 河上やかさぎの岩屋けをぬるみ苔をむしろとならす優婆塞　好忠

萬三 おほなむちすくなひこなのいましけむ賤の岩やは幾代經ぬらむ　讀人しらず

旗薄くめの若子がいましけるみほの岩屋は見れど厭かぬかも　同

同 岩屋戸にたてる松の木なれをみば昔の人をあひみしがごと　轉通法師

同 紀の國やみほの岩屋戸さすがなほ風こそ古き松にふくなれ　定圓法師

わが戀はみほの岩屋にふる雨のいづくもりてか人にしられむ　衣笠内大臣

宅

新六二 いかにせむ家に傳ふる名のみしていふにもたた（新六ら）ぬ大和言のは　民部卿為家

新六五 から人の我が妻しらぬ家うつりそれをためしの戀もするかな　光俊朝臣

山里はまばらの軒のかやまよりもりくる秋の夕づく夜かな　北院入道親王二品みこ

東路や杉いたぶきの隙をあらみあはぬ月日もさてすぐせとや　民部卿為家

まばらなる埴生の小屋もぬれなくに小雨にすぎて降る木の葉かな　權僧正公朝

まくずはふよもぎが宿の夕風にうらみもまさる蟲の聲かな

○花月百首、みねのいはや
○家集、雜歌中、えぞがいはや
○三百六十首中、かさぎのいはや
○題不レ知（しづのいはや、未勘國）
○同（みほのいはや、紀伊）
○紀伊三穂留にてよめり（るイ）
○弘安元年百首、雜歌中
○寶治二年百首
○六帖題
○同題、わする
○百首御歌、秋
○前院攝政家百首、不レ逢戀
○中務卿親王家五十首歌合
○同

○柴扉日暮隱ㇾ風掩

家集 わびしすむ宿に光のくれゆくは吹く風のみぞとざしなりける　大江千里

廬

○百首御歌

さゝ分くる野べの庵のとまを荒みあはでぬる夜の月ぞ殘れる　順徳院御製

○賀茂社百首御歌

つちかべに窓ぬりのこす庵までもすさめず宿る秋の夜の月　慈鎭和尚

○百首歌

雲につく峯の庵にねざめしてたどこゝもとに初鴈のこゑ　寂蓮法師

○寶治二年百首、旅宿

しの原やさても心はとまらねどみくさかりふきさす庵かな　正三位知家卿

○家集、山家春雨

山賤の庵はかやのぬけめよりわりなくもるゝ春の雨かな　源仲正

○題不ㇾ知

萬二十 たらちめの母を別れてまことわれ旅の假庵にやすくねむかも　讀人しらず

○嘉曆二年住吉社歌合、旅宿時雨

かりほさすならのかれはのむら時雨哀れまさきの音ばかりかは（してイ）　智經法師

○千首歌

行き暮れて宿かるいほの杉柱ひと夜のふしもわすれやはせむ　民部卿爲家

○寶治二年五首、滋五月雨

かけつくる谷のいほりの軒端よりしづくも長し五月雨の頃　信實朝臣

○建長八年百首歌合

山賤のいほはあらはに霜がれて心ばかりや冬ごもるらむ　從二位頁敎卿

○御集、田家月（田いほ）

まばらなる田庵にすこがいをやすみ月にもらして幾代あかしつ　後法性寺入道關白

○洞院攝政家百首（しばのいほり嵐山）

秋されば時雨もるまもあらし山もみぢふきそふ柴の庵に　光明峯寺入道關白

○寶治二年百首、夜鹿

小鹿なくみねのしばやの秋風にねやまのいほの夢はたえにき　常磐井入道太政大臣

續後拾遺雜上
よしの山もみぢのいほりいかならむ夜半の嵐の音ぞ烈しき　山田法師
○家集、秋のくれによしのの山にこもりたる人のもとへ

おもひやれ山は嵐の松のいほむすべば夢もやぶれやすさを　民部卿爲家
○山階入道左大臣家百首、山家（松のいほ、あらし山）

都人松のいほりの藤の花あめさへふりてゆふしをれつゝ　從二位家隆卿
○後鳥羽院遷所にて影供御歌、山家夕嵐（松のいほり）

をらでふく下葉のもみぢしぐるなりもる山人の庵もたまらず　同
○家集、秋歌中（いほ）

いなり山杉の庵に窓あけてあかたてまつる音ぞほのかに　寂蓮法師
○十題百首（杉のいほり）

よそにてやかすむと見まし吉野山峯にいほりを結ばざりせば　小侍從
○正治二年百首（みねのいほり、よしの山）

吉野山みねの嵐のはげしさに笹のいほりは露もたまらず　六條院大進
○建久四年、嵐（さゝのいほり）

萬七まこか
たかまどのあを（さかさま）さることやかくら（かこもり萬）くの初瀨の山に庵すといふ　讀人しらず
○題不知

をはつせの麓の庵もかをるらむ櫻吹きまく深山おろしに　大藏卿有家
○喜多院入道二品親王家五十首

いほの上にいくへにしきをふきつらむ花ちる春のを初瀨の山　慈鎭和尚
○花月百首

はつせ山花にうき世や殘るらむいほ哀れなる春の木のもと　後京極攝政
○御集、泊瀨山春

六二
雨ふればみかさの山の木の本（にイ）もぬれぬ庵はなしとこそきけ　讀人しらず
○山イ

都人くるればやがて歸る山なにそは獨りとまるいほりぞ　兵衞内侍
○建保三年名所百首（いほり歸山）

秋風になびく稻葉のたえまよりほのかにみゆる賤がしば庵　正三位季經卿
○文治六年女御入内御屏風（しばいほ）

山かげや嵐のいほのさゝ枕ふし待ちすぎて月もとひこず　前中納言定家卿
○後九條内大臣家三十首、旅宿（あらしのいほ）

とふ人のまねく便りもたえはてぬ尾花のいほの野べの霜がれ　民部卿爲家
○承久二（六イ）年百首（をばなのいほ）

〇建長四年三首、山家夏草（露のかりいほ）六イ
〇慈鎭和尙にまゐらせける哀傷十首中
〇旅御歌中（かりのいほり）
〇後法性寺入道關白家百首、雪（いほり、かひのしらね）
〇洞院攝政家百首、旅（霜のいほり、非なの）
〇御集（すさのいほり）
〇貞應三年百首、河邊家（いほり、よど川）
〇長歌（いほ、難波江）

〇題不ㇾ知
〇同
〇老若五十首歌合（あしのまろや）
〇千五百番歌合
〇家集、遇不ㇾ逢戀（あしや）

たれかこむ山陰ふるき夏草にまかせてむすぶ露のかりいほ　同

小山田の露のかりいほのやどりかな君を賴まむ稻妻の影　前中納言定家卿

あけがたになるや白露數そひぬかりの庵のあしのすだれに　後京極攝政

いほりさすかひのしらねの旅枕よすがに雪をはらひかねつゝ　同

さゝ結ぶ霜のいほりの假枕たれとゐなののよるの月影　後九條內大臣

月いづるうしろの山は雲はれてすまの庵にかへるうら風　同

いほりさす淀の河岸水こえてうきぬばかりの五月雨のころ　民部卿爲家

萬十六
おしてるや　なにはのうらに　いほつくり　かたまりてをる　あしがにを　おほぎみめすと　なにせむに　讀人しらず

屋

萬十一
難波人あし火たく屋のすゝたれ（けイ）とおのが妻こそとこ珍らしき（なれイ）　人丸

萬十六
夕づくひさすや河邊に造る屋の形をよしみ宜（うべ）ぞよりつる　讀人しらず

ふし馴らしあしの丸屋も霜がれてうちもあらはに宿る月かな　後京極攝政

詠めやる野べもひとつに霜がれて蘆のまろやに冬は來にけり　大藏卿有家

山賤の蘆屋にかけるたかすがきふしにくしとも思ひけるかな　俊賴朝臣

○文治六年五社百首
難波女が蘆のしのやのしのすがき一夜のふしも忘れやはする　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首（しがのはまや）
都路はとほからねども草枕しがのはまやも浪はかけけり　同

○堀河院御時百首
しなが鳥ゐなのは山に旅ねしてよはの干潟にめをさましつゝ　俊頼朝臣

○春日社奉納百首、不レ逢戀（みわのすぎや）
よそながら三輪のすぎやの板間（まつまのみイ）より幸さあらはに明くる山風　安嘉門院四條

○題不レ知（ひや）
萬十六
朝霞かひ屋がしたになく蛙しのびてありとつげむこもがも　讀人しらず

○永萬二年五月經盛卿歌合、戀（あづまや）
あづまやの軒のかやまにおふときく人を忍ぶは我が身なりけり　清輔朝臣

○百首歌（さゝや）
さえあかすさゝやの庵の假びさしたゞひとへなる夜半の白雪　太宰帥爲經卿

○楚忽百首、戀歌中（にや）
すゝきふくほやの軒端のひと方に靡かば神のしるしともみむ　參議爲相卿

○家五十首御歌、旅（ひなのさゝや）
さても世を過しけるよと外に見し鄙のさゝやに幾代とまりぬ　北院入道二品のみこ

○題不レ知
わくらばに問ふ人もがなあまさかる鄙のさゝやにわぶと答へむ　權僧正公朝

○百首御歌、冬（あばらや）
峯わたる風なかりせばあばらやの軒に木の葉を誰かふかまし　喜多院入道二品のみこ

○六帖題
新六一
あばらやの板間つゞきの長きよにうたゝめざます月の影かな　信實朝臣

○夕對二卯花一字抄（ふせや）
月にこそふせ屋のすだれあげしかど卯の花に又おろされぬかな　中納言資仲卿

○久安百首
冬の夜はとふのすがごもさえ〳〵て獨りふせやぞいとゞ寂しき　大炊御門右大臣

○百首御歌中（きそのふせや）
今朝みればきそのふせやの竹柱たわむばかりに雪降りにけり　喜多院入道二品のみこ

○同（すゞのしのや）
野邊しなるすゞの篠屋にしぎたちて窓に傾ぶく月をみるかな　慈鎭和尚

こよひたれすゞのしのやに夢さめて吉野の月に袖ぬらすらむ　後京極攝政

はるかなる野中の松を友と見てすゞのしのやに世をやすぎまし　寂蓮法師

吉野山秋風たちぬいかばかりすゞのしのやの涼しかるらむ　從二位家隆卿

片岡のすゞのしのやに秋暮れぬ時雨もらすなならのうはぶき　嘉陽門院越前

とまるべきすゞのしのやに荒れにける里まで送れ野べの月影　從二位家隆卿

瓦屋のしたたく人もこひわびぬさらば淺間の煙ともなし　同

冬の日のみじかきあしは霜がれて波の苫屋に風ぞよわらぬ　前中納言定家卿

苫の屋に浪立ちよらぬけしきにて餘り住み憂き程は見えにき　西行上人

くらぶ山かこふしば屋のうちまでも心治めぬところやはある　同

潮たるゝ蜑のかこやになにとしてやくとも叩くよはの水鷄ぞ　前參議親隆卿

うき身をばつかやの程にすむ鬼の一口にだになりねとぞ思ふ　寂蓮法師

杣人のまきのかりやのあだぶしに音する物は霰なりけり　西行上人

紀の國や蜑のふせやの苫庵ふきあげの千鳥月になくなり　後鳥羽院宮内卿

夕なぎに浪間の小島あらはれて蜑のふせやをてらすもしほ火　後京極攝政

新六二　春の日は行きもやられず蛙なくゐでのかはやに駒とゞめつゝ　重之

宿りする埴生の小屋のかつらにてぬるがうちだに見る夢もなし　民部卿爲家

○花月百首御歌

○百首歌

○家集、秋歌中

○千五百番歌合

○光臺院入道二品親王家五十首、野徑月（すゞのまろや）（しのイ）

○家集、羇旅中（かはらや）

○建保二年（三イ）内大臣家百首、水郷寒蘆（波のとまや）

○家集、ある人の贈答（とまのや）

○神力品如來一切祕要之藏（柴や）

○久安百首（あまのかこや）

○百首歌、述懐（つかや）

○家集、深山叢（まきのかりや）

○千五百番歌合（あまのふせや）

○十題百首御歌

○百首歌（ゐでのかはや）

○六帖題、やどり（はにふのこや）

○くちかたむ
○題不知
○三百六十首中（なにはのこや）
○寶治二年百首（あかしのこや）
○法輪百首、山家述懷（あふりや）
○家集、旅歌中（たびやかた）
○嘉應二年住吉社歌合、旅宿時雨
○寶治二年百首（かりやかた）
○久安百首（くゝめやかた）
○六帖題
○同
○同題の御歌、となり

新六五
河をちのはにふのこやの假枕ゆめになしても人にかたるな　光俊朝臣

萬十一
久方の埴生のこやに小雨ふり牀さへぬれぬ身にそへわぎも　讀人しらず

同又　新後拾遺
あしのはに隱れてくめる難波女のこ屋は夏こそ涼しかりけれ　好忠

おく露に袖さへぬれてをち方の明石のこやにあかしかねつゝ　衣笠内大臣

わび人のかたちにかくるあふりやの下くらなりや山陰にして　源仲正

屋形

朝夕にさしてはこえつ旅屋形立ち居につけていとまなのよや　源仲正

神無月しぐるゝ夜半の旅やかたもるとはなしにぬるゝ袖かな　藤原懷綱

假屋形又や結ばむいほさきのすみだ河原に今日も暮しつ　民部卿爲家

をかや葺くくゝめ屋形の竹柱ふしよからぬは旅寐なりけり　前參議親隆卿

鄰

新六二
里人の軒をならべて住むやどもいづく（は新六）までこそ鄰なりけれ　衣笠内大臣

同
家になき四のとなりの垣ごしはうたてといふも惜からぬかな　光俊朝臣

いかにせむよつの鄰の宿にだに悲しむ聲のたえぬうき世を　中務卿のみこ

○同 あまた度となりをかへて敎へける人の親こそかしこかりけれ　權僧正公朝

○幽谷聞鹿 鄰ゐぬはたの假屋に明かすよはしか哀れなる物にぞありける　西行上人

○家集、花十首歌中 春風のふくにつけてや山櫻となりのまつに花はかぞへむ　修理大夫顯季卿

○永久四年百首、隣 色かへてふりぬる物はとしたかき鄰の松とわれとなりけり　仲實朝臣

○同 たらちねの更に鄰をかへけるも子を思ふゆゑと聞くぞ悲しき　藤原忠房

○文集百首、寒鴻飛急覺秋盡、隣雞鳴遲知夜長 まきの屋に鄰の霜は白妙のゆふつけ鳥をいつか聞くべき　前中納言定家卿

山家

○延長二年御屏風 かひがねの山里みればあしたづの命をもたる人ぞすみける　貫之

○宇治殿にて、山家旅情（宿後拾） （後拾遺雜四）旅ねする宿は深山にとぢられてまさきの桂くる人もなし　大納言經信卿

○千五百番歌合 老の後月にすみけむからびとのあとを尋ねているやま路かな　土御門內大臣

○雜歌中 （古來歌）いしの橋松のはしらとすみぞめに（にイ）老をおくりし山ぞ牀しき　權中納言經平卿

○御集、山家松 ひきうゑしさとはみなせの庭の松ぬしなき色に春やへぬらむ　後鳥羽院御製

○正治二年百首、山家 入りぬとや都の人はながむらむまどより西にめぐる月かげ（ごえイ）　從二位家隆卿

○百首御歌 ゆきてみむ昔ながらに櫻花をりにあふみのしがの山里　慈鎭和尚

○洞院攝政百首、山家 道とほくまだ誰がそのにかけつらむ松木の舟にうくるやま水　常磐井入道太政大臣

○やまのは（い歟）へのあらしといへることをよめる
嵐のみたえぬ深山に住む民はいくへか茂るとふのすがこも（つかなみ散木）　俊頼朝臣

○洞院摂政家百首、山家
いしにふれ苔にかさなる春の雲なれていくよの枕なるらむ　後九条内大臣

○同
またれつる花のたよりも過ぎはてて誰の宿ぞいとゞ住みうき　従三位範宗卿

○同
みわたせば杉の葉青きかどもなし雪のさかりの三輪の山里　従二位頼氏卿

○寛元元年百首
きく人も見るひともなき山ぞうき風と月とのみちはあれども　後九条内大臣

○家集、山家
軒とづるみやまの檜原高ければほかにいでたる月をまつかな　同

○百首御歌
玉葉雑三
この里は雲の八重だつ峯なれやふもとに沈むとりのひと聲　後京極摂政

○家歌合、山家夜霜
草結ぶ夜半のとざしのかれしよりうちもあらはにおける霜かな　同

○雪花百首歌合、山家
三吉野の眞木立つ山に宿はあれど花みがてらの音づれもなし　同

○山家十五首御歌中
ふもとまで同じさゝ原あともなし深山のいほ露のした道　同

○同
玉葉雑三
山かげや軒ばの苔にしたくちて河原のうへに松ぞかたぶく（風ぞふくイ）　同

○同
かりそめのうきを出でたる草のいほに殘る心は古里の夢　同

○建保三年十首歌合、寄名列、山家秋風
我が宿の草のとざしのあとなれば（たイ）あけぬくれぬと秋風ぞふく　従二位成實卿

○同
ふしなれぬ程をばゆるせ竹の戸に風も夜さむの時もきぬらむ　従二位顕氏卿

○洞院摂政百首、山家
徒らにあけぬくれぬと住みわびぬ人めかれゆく草の戸ざしは　大納言経通卿

○同
松風の音にすみけむやま人のもとの心はなほやしたはむ　前中納言定家卿

○同
谷ごしの眞柴の軒のゆふ煙よそめばかりはすみうからしや　同

○同
山里はあしのまろやの妻ごひになくやを鹿の聲ぞなれぬる　從二位賴氏卿

○同家百首、郭公
時鳥いほりあまたにまたれつゝひと聲とほき谷の山里　同

○山家
道かへてたが世をわたる宿ならむ竹あむ門のまへのしば橋　光俊朝臣

○同
我のみと結びしいほもかずそひて杉のむらだち木つ葉もなし　家長朝臣

○山家歌中
山里の雲のとざしのあけがたに月影うすしにはの初霜　大納言教家卿

○久安百首
さら／＼にいやはねらるゝ山里のあしふく宿に時雨ふる夜は　季通朝臣

○山里のかれたり草といふことを
垣こめしすそののすゝき霜がれて寂しさまさる柴の庵かな　西行上人

○千五百番歌合
あともなし岩のかけ道たどりきて雪とわけつる庭の白雲（雪イ）　後久我太政大臣

○家集、山家心を
柴の戸もあけゆく山の峯（見イ）なれば軒にわかるゝよこぐもの空　從二位家隆卿

○寛喜元年女（御イ）御入内屛風、殘暮山邊民家
暮れぬとて民のかまども急ぐめりとしのこえゆくみねの山里　西園寺入道太政大臣

○正治二年百首、山家
みやこ人とはぬもいかゞ恨むべき雲にわけいる宿の通ひぢ　隆信朝臣

○文治六年五社百社
爪木こる山路ばかりはふみわけてよもぎの門は跡たえにけり　皇太后宮大夫俊成卿

○洞院攝政家百首、山家
なほしばし雲ゐる谷をたちかへり都の月にいづる山道　前中納言定家卿

○建久七年百二十六首、山家
山ふかみひとは昔の宿ふりて月よりさきに軒ぞかたぶく　同

○同
としへぬる宿たちいづる椎がもとよりゐるし石も苔あをくして　同

○同
たちかへり山路かなしき夕かないまは限りの宿をもとめて　前中納言定家卿

○文治三年閑居百首歌
瀧のおと峯のあらしもひとつにてうちあらはるゝ柴の垣かな　同

○正治二年百首
浪の音に宇治の里人よるさへやねてもあやふき夢の浮橋　同

○建久七年百二十八首
物思はぬ人のきけかし山里のこほれる池にひとりなくをし　同

○貞應三年日吉百首、衛山家暁月出題之中
峯の庵の窓よりいづる月だにも有明のころはなほまたれけり　民部卿爲家

○六帖題、山ざと
新六二
我かかる山里ずみをいかにとも（ぞと　新六）しる人あらば尋ねきなまし　同

○文治四年毎日一首中
なにはめがたく火とみえて山里のあしのまろやにとぶ螢かな　同

○建長三年毎日一首
山里のまつの木のまの池水にすまぬ心ぞ月におどろく　同

○同
小倉山もみぢふりしく谷影のあとなき庭はみる人もなし　同

○貞應三年百首、山家夕あらし
くれゆけばそのふの山にふく嵐なれずばいかに心うからむ　同

○文永六年毎日一首中
いくよしもたえてあらしの山里にあはれ烈しき風の音かな　同

○同
かげにゐて枝を折るにもなりぬべし軒ばの山を頼むつま木は　同

○千首歌
われとせぬもとの谷川やり水にいしたてわたす妹山のいほ　同

山ふかく年ふる程ぞしられけるしかも小鳥もひとになれつゝ　同

○家集、山家暮
たらちねの跡とてみれば小倉山昔のいほぞ昔にのこれる　法眼慶融

○嘉元元年式部卿親王家績千首、山家鶏
すむ人の宿まどほなる山路とてゆふつけ鳥も聲ぞすくなき　參議爲相卿

○君臣禍歌會（合イ）

身はかくてしばしとおもふ山里に心をかへすみねの松風　前中納言爲兼卿

高野より寂然法師のもとへつかはしける歌中

山深みなるゝかせきのけぢかさに世を遠ざかる程ぞしらるゝ　西行上人

○百首歌中

山里はそのふの野べの花盛りかきねのうちにたづねをぞする　寂蓮法師

○嘉禎二年山家十首歌合

とはれてもまぢかき程の里ぞなき山かげ深き庭のあしがき　後鳥羽院少輔

○同

雲かゝる峯の松がきあれにけり世をのがれこし年やへぬらむ　善眞法師

○家集

軒ちかくなごの釣舟くだすなり山だにこそとくちずさびして　俊頼朝臣

此の歌はたなかみにてくれかゝるほどになとこのこゑして山だにこそとくちずさみしてうたふ聲のしければなにごとかとたづねければつりぶれのくちずさみしてくだるなりといふをききてよみ侍りけると云々

○家集

谷かげや心のにほひ袖にみちてたかねの花の色もよしなし　慈鎭和尚

此の歌は文集百首に心足ニ即爲レ富身閑仍當（モト）富貴富貴在ニ此中一何必居ニ高位一

田家

○文治六年五社百首、田家

なかをかやおち穗拾ひし山里に昔をかけてたづらをぞ行く　皇太后宮大夫俊成卿

○弘長元年百首
○承久四年百首、秋山家
○貞應三（年イ）秋百首
○寶治二年（百首イ）、田家雨
○寛喜（錦イ）元年女御入内御屏風、田家
秋歌與
○弘長元年百首
○同
○内大臣家歌合、山田
○百首題
○嘉元百首、田家
○文應元年七社百首、田家
○嘉元四年七（十イ）月當座百首、田家
○正治二年百首
○堀河院御時百首
○田家の心を

わが門の稲葉のしたひつたひきてたごの水もる花のゆふかけ　後九條内大臣

續古今秋上
こりはてぬかり田のおものいなすまし鳴たつくれの薄霧の宿　前中納言定家卿

かりあぐる門田の面は霜がれてかきほに殘る竹のひとむら　民部卿爲家

いねかての田づらの庭の柴間より夜の雨さへもり明かしつゝ　從二位頼氏卿

新勅撰
年あれば秋の雲なすいなむしろ刈りしくとこのたえ（たみイ）ぬ日ぞなき　光明峯寺入道攝政

たづらなるわらやの軒のこもすだれこれや縣のしるしなるらむ　常盤井入道太政大臣

かりをだに立つるそほ（ウイ）づはかひもなし徒らならば門守りせよ　信實朝臣

いなしきや山田もるをのかりほにてねぬよの數を幾代へぬらむ　讀人しらず

かはづなく田中のゐどに日はくれておもだか靡く風渡るなり　寂蓮法師

山もとのたけより奧に家居して田のもをかよふ道の一すぢ　參議爲相卿

折ふしに心をつくるすまひかな田のもの奧の竹の一むら　民部卿爲家

秋風にとはましひとのおとづれもいくたの里は冬がれにけり　同

すみすてて刈田にのこる杉柱秋のしるしもみえぬいほかな　爲實朝臣

山里のわさ穗の庵におのづからともなふ物はみなぐちまもり　民部卿範光

種つ物み園にまきついざ子ども外面の小田に慈姑ひろはむ　顯仲朝臣

雲葉集
かこひなき柴の庵はかりそめのいなばぞ秋の爪木なりける　中納言國信卿

○六帖題

新六二 山賤の外面の小田の片あらし去年のつくりはしめもおろさず　正三位知家卿

○建治三年内大臣百首。田家時雨

をしねかるふしみの小田に初時雨心あるいほの板びさしかな　慈鎮和尚

○洞院摂政家百首

朝霞かひやの煙たてそめてまだ春あさきしづのをやま田　従二位家隆卿

夫木和歌抄巻第三十 終

夫木和歌抄　巻第三十一

雑部十三

題　郡　里　村　市　驛　庭
　　牀　樞　棟　窓　戸　門
　　墻　籬

郡

○かひのくににまかり申ししに、つるのこほり（都留、甲斐）

六一 新千載上
君がため命かひにぞ我は行くつるてふ郡千代をうるなり　忠岑

○題不レ知、六帖

六二
甲斐の國つるの郡のいたのなる白玉こすけ笠にぬひてむ　讀人しらず

○同

よろづ代を君に譲らむためにこそ都留の郡の早苗とるらめ　八條院六條

○同、龜鏡（愛智郡近江）

うらやみにえちの郡の稲をすへて（ぞ）神と君とにつく稲穂かな　讀人しらず

○六帖、日根郡和泉

六三
いづみなるひねの郡の日ねもすにこひてくらす（ぞくらすイ）と人はしらなむ（君かしるらむ六）　同

○龜鏡（ひかかみのこほり）

萬づ代のためしに稲をつきしよりひかみのこほり民ぞ榮えむ　同

○みのの國ときのこほりにて

旅人のわびしき（ものイ）ときは草枕雪ふる時のこほりなりけり　重之

武藏野のつゞきの郡續きつゝおの／＼ちよを思ふべらなり　能宣朝臣

東路やあまたこほりのその中にいかでかまくら榮えそめけむ　中務卿のみこ

新六二
長門なるあふの郡の杣いたはもろこし人もすさめざりけり　光俊朝臣

新六二
笹わくる音もさらゝのかうち（こほりイ）路に駒を早めてけふも暮しつ　信實朝臣

同
我がとこは奥の郡のえびすかげとにもかくにもひきちがへつゝ　民部卿爲家

あきつはのすがたの郡うごきなし國つもろ神守りをさめて　前中納言定宗卿

新六二
みちのくにけふの郡におる布のせばきは人のこゝろなりけり　衣笠内大臣

同
人めもる關をばゆるせ近江なるやすの郡の安くかよはむ　正三位知家卿

人心安のこほりときくなべにつけどつきせず運ぶ稻かな　左京大夫顯輔卿

君が代は安の郡のみつぎものゆにはの稻穗つきぞはじむる　兼仲卿

信濃なるいなのこほりと思ふには誰かたのめの里といふらむ　讀人しらず

いく代へぬ浦の秋風わたらひのこほりのうちに宮居せしより　後京極攝政

里

萬七
山もりの里べにかよふ山路はしげくなりける忘れけらしも　讀人しらず

新撰萬葉
あらしふく山したさとにふる雪はとくちる梅の花かとぞ見る　同

〇武藏守みつするくだりける餞に都筑郡
〇六帖題御歌、こほり（鎌倉郡、相摸）
〇同、阿武の郡（長門）
〇同、さらゝのこほり（河内）
〇おくのこほり（陸奥）
〇あきつはのすがたのこほり
〇六帖題、けふのこほり（陸奥）
〇同、やすのこほり（野州又近江）
〇大嘗會歌
〇正安大嘗會歌
〇題不レ知、いなのこほり（伊那、信濃）
〇百首御歌（伊勢）
〇題不レ知
〇寛平御時后宮歌合、山したさと

女郎花立てる野ざとをうち過ぎてうらみむ（のこらむイ）露にぬれや渡らむ　讀人しらず

さりともとたのむの鴈を頼みき（にイ）て入間の里にけふぞいりぬる　皇太后宮大夫俊成卿

いまよりやいはたのさとの秋風も夜さむにふけば衣うつらむ　民部卿爲家

妹がくるいとゐの里の手卷山より〳〵こゝに宿りぬるかな　同

さよ衣いるのの里にうつならし遠くきこゆる槌の音かな　西行上人

五月雨はいとかの里のひきまゆもたえぬに（とイ）すれや曝す日もなき　源仲正

限りあり（らイ）し鶴の林のかたみをばとゞめおきつるいかるがの里　殷富門院大輔

新六二
雨ふればかたそばつくるいま里のふる道とめておつる山水　正三位知家卿

萬代
日くるればをちのいま里かひたててとばたの面に煙たな引く　入道二品みこ覺性

わびつゝもかくて幾代を過ぎぬらむ假寐ならはぬいなしきの里　[illegible]入道二品親王

明玉
山吹はいはでの里の春よりやくちなし色の花にさくらむ　隆信朝臣

六一
東路のいまねの里は初秋のながき夜ひとりあかす我し（そイ）も　朝恆

但馬なるいづしの里のいつしかも戀しき人をみてなぐさまむ　讀人しらず

懷中
いつしかと我を（とイ）まちつゝこし人のいかで急ぎの里をきかばや　同

思ふだにかへらぬ山のさくら花（さしめ草）誰かいぶきの里をつけしぞ（は以上枕草紙）　清少納言

たち別れ稲葉の里にながゐしてさやは契りし待ちぞわびぬる　光俊朝臣

○昌泰元年亭子院歌合、野里
○後法性寺入道關白家百首、いろまのさと（武藏）
○文應元年七社百首、いはたのさと（尾張）
○寛喜七年毎日百首中、いとゐのさと（未勘國）
○閑中聞擣衣と云ふ事を
○長治二年權中納言俊忠家歌合、いとかの里（紀伊）
○大覺寺舍利の會はこの歌をみていかるがの里（未勘國）
○六帖題（今里、山城）
○御集
○正治二年百首、いなしきのさと（未勘國）
○名所歌中、いはでのさと（陸奧）
○初秋歌、いまねのさと（河内、未勘國）
○題不レ知懷中、いづしのさと（但馬）
○同、いそきのさと
○家集、いぶきのさと（伊勢、近江、又ハ下野加賀）
○同いなばのさと（河内）

○永久三年十二月大神宮禰宜歌合祝、いはゐの里（未勘國）
○題不レ知、いづみのさと（山城八雲和泉云々）
○野徑月（いひの野の里、丹後）
○正治二年百首
○堀河院御時百首
○正安大嘗會、いけだのさと（池田、近江）
○海道宿次百首いけだ
○一條前太政大臣家歌合、山家夕霞、は山の里（常陸）
○百首の御歌、曉鷄
○家百首歌合、はつかのさと（未勘國）
○太宰師にて下りける時はやみの里といふ所にて（筑前）
○三河國名所歌合、花ぞののさと
○永仁大嘗會、はながさのさと（近江）
○はぎはらのさと（常陸）

諸人はいはひの里にまどひしてともに千年をふべきなりけり　讀人しらず

萬四
いへ人に戀ひすぎめやも蛙なくいづみの里に年の經行けば　石河廣成

おぼつかな心は月にあくがれていかでいくのの金をすぐらむ　俊頼朝臣

駒なべていくのの奥の人里にみゆる煙やしるべなるらむ　小侍從

卯の花のさける垣根は布さらすいくのの里の心地こそすれ　顯仲朝臣

いつくさのあひ亂れたるたなつもの池田の里に雲をなしつゝ　兼仲卿

そのかみの里は河瀨となりにけりこゝも池田のおなじ名なれど（はイ）　參議爲相卿

つくば山葉やまのさとにたつ煙かすみもしげし春の夕暮　從二位家隆卿

つくば山葉やまの月の深きよを里にはしげき鳥のこゑかな　後九條内大臣

まつ月ははつかの里の宵のまを誰あらましにころも擣つらむ　同

なにごとのゆかしければか道遠みはやみの里に急ぎ來つらむ　太宰大貳高遠卿

淺みどりかすめる雲のたえまより梢ぞしるき花ぞのの里　爲忠朝臣

よそながら匂ふこずゑも見るばかり霞なこめそ花ぞのの里　藤原道經

新續古賀
春がすみたちかくせども鶯のなくねにしるき（レイ）花ぞのの里　盛忠

白妙のゆふとりしでてかみまつるうづきに匂ふ花がさの里　前中納言俊光卿

秋ならば花に心やとゞめまし霜にかれたる萩原のさと　光俊朝臣

此の歌は康元二年鹿島の社に詣で侍りけるに近所に萩はらの里といふ
所をよめると云々

布さらすにまの里ともみゆるかなうの花さけるかきね〳〵に　藤原季綱

君が代はにまの里人つくる田のいねの穗末の數にまかせむ　隆信朝臣

末とほき春のむかへの貢物かず〳〵はこぶにまの里人　大藏卿隆教

春ごとにうゑける花のかひありてさき亂れたる常夏の里　左京大夫顯輔卿

常夏の里とはなどかいはざらむからなでしこの咲ける頃にて　祭主輔親卿

舟路にてともゆひの里に宿とればとけてねられぬ浪の音かな　安法法師

時にあふ民の心もやすらけき御代のはじめの豐岡のさと　大藏卿隆教

わするなよときはの里の槇柱つれなき中に立てしちかひを　後九條内大臣

時鳥ときはの里にすむ人はいつとわきてかはつね待つらむ　民部卿爲宗

六五　拾遺貫

いつしかと行きて語らむ大和なるとほちの里のすみうかりしを　讀人しらず

あふことのとほちの里に程へしは君はよしのと思ふなりけむ　同

此の歌は大和よりかへらせ給うて侍りける女のもとよりと云々

あふことのとほちの里はやまと河思はぬ中にありとこそ聞け　清輔朝臣

みよし野のきさ山ぎはにまつ月はとほちの里のかけよりぞみる　宮左大臣

○寬治五年八月定通卿歌合、にまのさと（二萬、備中）
○千五百番歌合
○正安大嘗會
○家集、とこなつのさと（近江、常陸）
○同
○同、ともゆひのさと（山城）
○正安大嘗會、とよ岡のさと（豐岡、備中
○家集
○家集歌中
○物語
○爲德公集
○家集、戀
○千五百番歌合

○堀河院百首
雲かゝるとほちの里のかやり火は煙立つとも見えぬなりけり　　權中納言師時卿

○最勝四天王院名所障子
雲ゐとぶ鴈の羽風に月さえてとばたの里にころもうつなり　　後鳥羽院御製

○太宰帥にて下りける時、とほるのさと（未勘國）
［家］行く道をとほるの里にみそぎして今も［ぞ歟］島根をいではなれぬる　　太宰大貳高遠卿

○天仁大嘗會、ちくらのさと（千䟽、近江）
見渡せばちくらの里にあまるまで數も知られずとる早苗かな　　左京大夫顯輔卿

○御集イ、宇治より京へわたらせ給ふとて
春なれば花の都にかへるまにをぐらの里の霞みぬるかな　　宇治入道關白

○秋の比法輪寺にて
わがものと秋の梢をみつるかなをぐらの里に家居せしより　　西行上人

○承安二年閏十二月東山歌合
えぞ行かぬをばただの里の妹がりは板田の橋の桁もとだえて　　道因法師

○寶治二年百首、寄玉戀、（をごとのさと、備中或近江）
いまはまた通ふためしもよそにきく玉のをごとの里の松風　　從三位賴氏卿

○御集、山家卯花、（をがはのさと）
白浪のかゝる汀とみえつるはをがはの里にさけるうの花　　後德大寺左大臣

○長久二年祐子内親王名所歌、（五月イ）小山田里
小山田の里の早苗のさなほりにをがはにすぐるこのしたにして　　讀人しらず

○家集、をやまのさと（小山、下野或近江）
紅葉せし小山の里の戀しさにしぐれてのみもあけくらすかな　　俊賴朝臣

○家集、小鹽（山城）
大原やをしほの里の朝霞ゆききになれし春ぞわすれぬ　　後久我太政大臣

○六帖題、こほり（をたぎのさと）
わが國のかずのこほりのうちにしもをだきの里のおほみや所　　權僧正公朝

○海道宿次百首（をかべの里、駿河）
夕日さすけしきも寂し松たてる岡べの里は山かげにして　　參議爲相卿

○六帖題イ
○おとなしの里（紀伊）
新六二
うきことの暫し聞えぬ時やあるといざ音なしの里を尋ねむ　　民部卿爲家

○家集
こほり皆水といふ水はとぢつれば冬はいづくも音なしのさと　　和泉式部

山城のをのの山邊の里とほみかりの宿りととりぞかねぬる（たゞ家　けイ　鳴くなる家）　能宣朝臣

此の歌は屏風になのといふ山里に人の家のもみぢおもしろきに女ども

いでゐ侍りかりする人たかすゑてきたる所をよめると云々

櫻さく野べの春風ふぬかまにいざみにゆかむをのの里人　後鳥羽院御製

萬三
春がすみ春日の里に上もなき苗なりといひしえ（枝）はさしにけむ　讀人しらず

萬八
かすみたつ春日の里の梅の花はなにとはむとわが思はなくに　駿河丸

萬八
霞たつ春日の里のさくら花山おろす風にちりやし（こすなゆめ萬）ぬらぬ　讀人しらず

しらつるは千代ものどかに片岡の里をところとむれつゝぞ居る　兼仲卿

白妙の浪もしづけき色見えてかはべの里にさけるうの花　大藏卿隆教

現存六
昔にも立ちこそまされ民の戸のけぶりにぎはふ鎌倉の里　藤原基政

十年あまり五年までに住みなれてなほ忘られぬかまくらの里　中務卿みこ

春きては花の都をみてもなほかすみの里にこゝろをぞやる　式部

かさゝぎのあけてとわたる山もとに河霧のこる神なびの里　後九條内大臣

旅人もゆききも見えずなりにけりかどのの里の今朝の朝ぎり　仲實朝臣

これもこの所ならひと門毎にほすてふ布をかけがはの里　參議爲相卿

いとふなよ菊がは渡る道をよきてとはむと思ふかつまたの里　同

○同、をののさと（山城）

○五十首歌、遠村花

○題不レ知、かすがのさと（大和）

○同

○越後國（備中）

○正安大嘗會、かたをかのさと（片岡、近江）

○川邊里（備中）

○かまくらのさと（相模）

○綱帶イ

○康平四年三月祐子内親王家歌合霞里（かすみのさと、武藏）

○御集、秋御歌中、かみなびのさと（大和）

○永久四年九月雲居寺後歌合、霧（かどのゝ里、未詳國）

○海道宿次百首、かけがはの里（駿河、遠江）

○楚忽百首かつまたのさと（播磨國、遠江又は大和或美濃）

苗代の水くみにこしけふよりは早苗とるらむかつまたの里　讀人しらず

さき匂ふかほよの里の女郎花誰かは見にとたづね來ざらむ　藤原忠隆

あらち山雪けの空になりぬればかいづの里にみぞれふりつゝ　仲實朝臣

道わかぬ夕日の影もみねさえてかたのの里は片しぐれつゝ　前大納言忠定卿

明玉
あまの河やゝ夜さむなる風の音にかたのの里も衣うつなり　土御門内大臣

てる月のかつらの里の時鳥あかであけゆく雲になりくなり　民部卿爲家

月のわのかげをば今宵見つれどもことの桂はいかで忘れむ　能宣朝臣

月をだによしみの里の秋のくれ松風ならでとふ人もなし　俊成卿女

幾ちよの秋かすむべき菊の花にほひをうつす（せイ）よしみづの里　皇太后宮大夫俊成卿

せく水もよし田の里にううる田はかねて年得む影ぞみえける　同

名にたてる吉田の里のいねなればつくともつきじちよの秋まで　能宣朝臣

袖かはす人もなき身をいかゞせむよさむの里に嵐ふくなり　神祇伯顯仲卿

もろともになきあかしたる（つるイ）きりぎりすよさむの里の草の枕に　仲實朝臣

きくまゝに嵐吹きそふ秋とてや夜さむの里の衣うつらむ　式乾門院御達（本ノマヽ）

ながめわびぬ立田の里の神無月木の葉ふみわけとふ人もなし　慈鎭和尚

霧ふかきたつたの里の夕まぐれ梢をわけてかりぞなくなる　前大納言忠良卿

○長久二年五月庚申夜祐子親王家名所歌合、勝田のさとのさなへ（かつまたの里、勝間田、大和又美濃）
○永久四年歌合、共簗女郎花（かほよのさと、未勘國）
○永久四年百首、かいづのさと、梅津、近江）
○建保三年名所百首、かたののさと（河内）
○龜山殿百首歌、河邊擣衣
○貞應二年名所百首、かつらのさと（桂、山城）
○家集
○家集、よしみの里（大和）
○吉水鄕、悠紀方御屏風イ
○よし田のさと（近江）
○冷泉院御時大嘗會歌、よし田のさと
○永久四年百首、嵐（よさむのさと、未勘國）
○同四年九月雲居寺後番歌合
○弘安三年百首
○百首の（御イ）歌、たつたの里（大和）
○正治二年百首

○百首歌、たかやすのさと（河内）
雲はれぬいこまの山のいかならむふもとも雪はたかやすの里　家長朝臣

○家集
あけぬとてひとり立田の山のはに有明の月はたかやすの里　鴨長明

○建長八年百首歌合、たかせのさと（河内又未勘國）
さしのぼるたかせの里のいたづらに通ふ人なき五月雨のころ　衣笠内大臣

○家集、たまの井のさと（山城）
夕立のひとむらすぐる草の葉におく白露の玉の井のさと　中務卿のみこ鎌倉

○永久四年百首、避暑
みづはよしあたりもしみよ吹きすぐる風さへさゆる玉の井の里　俊頼朝臣

○題不知、懐中、たびゐのさと（未勘國）
都いでてたびゐ（ねイ）の里を眺むれば月ばかりこそ渡らざりけり　讀人しらず

○寶治二年百首、たのむの里（未勘國）
いまこむと秋をたのむの里人もまつかひあれや初鴈の聲　源俊平朝臣

○家集、たまわけのさと（未勘國）
家の井の（にイ）玉分くさとに妹おきてこひやわたらむ長き春日を　人丸

○寶治元年五月院宗尊家歌合、旅宿時鳥
いそげどもたかまの里に旅寢して山時鳥はるかにぞきく　藤原家行

○大嘗會御屛風、高宮鄕（たかみやのさと、高宮、近江）
織女に（をイ）今朝ひく絲もながかれと君にぞいのるたかみやのさと　皇太后宮大夫俊成卿

○雪後
朝まだきふりさけみれば白妙の雪つもれるやたかみやの里　左京大夫顯輔卿

○萩、たかまどの里（大和）
たかまどの古里人はいつまでかのこりて萩のかざし折りけむ　前中納言資實卿

○光台院入道二品親王家五十首、里時鳥（たかまどの里）
たかまどのあれたる里の時鳥なく夕ぐれを誰かしのばむ　従三（二イ）位行家卿

○前大納言忠良卿家會、雪歌
たかまどの尾上の里に雪深し猶ふりゆかむあとをこそ思へ　寂蓮法師

○永久四年百首、水鷄（たけだの里、竹田、山城）
心からたけだの里にふしなれていくよ水鷄にはかられぬらむ　俊頼朝臣

○三河國名所歌合、竹屋の里、たけのさと（三河）
絲なる色もかはらで世の常にいくよかへぬるたけのやの里　藤原道經

○同
住吉の松のたぐひとおもはばや朸にもよせぬ竹のやの里　琳賢法師

○たのめの里（信濃）
明玉 玉のをのおもひ絶えてもあるべきに頼めの里に年をふるかな　二條太皇大后宮肥後

○正治二年百首、たま川の里（玉河、山城或陸奥）
五月雨はうの花さかぬかきねにも浪こそかくれ玉川の里　前大納言忠良卿

○建保三年名所百首
てづくりやさらす垣根の朝露をつらぬきとむるたま川の里　前中納言定家卿

○同
日にみがき風に磨ける光かなのどかにすめる玉川のさと　順徳院御製

○同
萬十四 玉川にさらすてづくりさらに世に頼む日かげの哀れすぎ行く　從二位家隆卿

○題不レ知
玉河にさらすてづくりさら〳〵になにぞこの頃こゝら悲しき　讀人しらず

○家集、祭歌、そともの里（未勘國）
神無月雲間の山に雲かゝるそとものさとや時雨ふるらむ　顯仲朝臣

○つるの里松ばら（未勘國）
君が代はつるの里なる松原のはまの眞砂もかずしらぬかな　祐擧

○主基方御屏風、丹近國イ、月よみのさと（又イ近江）
曇りなきとよのあかりに空はれて光をそふる月よみの里　藤原茂明朝臣

○みのの國月よしの里
やみならばねぬべきものを頼めぬも（をイ）人にまたるゝ月よしの里　元輔

○題不レ知（つのの里、石見）
萬一 夏草のおもひしなへて嘆くらむつのの里みむなびけこの山　讀人しらず

○同、ならのさと（奈良、大和）
萬十 わが宿の萩さきにけり散らぬまにはやきてみませならの里人　同

○家集
いとけなきわが子をならの里におきて今宵の月に面影にたつ　基俊

○正安大嘗會、ながたのさと（近江又出雲）
雨露もめぐみあまねき時にあひてなかたの里（夜イ）に早苗とるなり　兼仲卿

○家集、里思秋と云ふ事を
やゝ寒くなるをの里の秋風に波かけ衣うたぬ日はなし　民部卿爲家

○光臺院入道二品親王家五十首 郭公、なが井の里（未勘國）
鳴きすてて急ぎなすぎそ時鳥ながゐの里の名をぞたのまむ　法印覺寛

○寄レ里戀、なとりの里（陸奥）
明玉 しひてとふ人はありとも戀すてふ名取の里をそことしらすな　前大僧正澄覺

○三十六人歌合（なるみの里、尾張）
昔にもあらずなるみの里にきてみやこ戀しき旅ねをぞする　法印靜賢

○むら雲の里、懐中
神無月やまの景色はつれなくて時雨ふりくるむらくもの里　祐盛

○長治元年五月[illegible]家歌合 題隔二山家一
おぼつかな端もみえずなりにけり霞へだつる村雲の里　讀人しらず

○むかふの里（無河有、未勘國）
現存六 七そぢにむかふの里のふる蓬うたゝ朽ちねとなれる樣かな　信實朝臣

○題不レ知（うちはの里、打廻、大和）
萬四 衣でをうちはの里にある我をしらずて人はまてどこずけり　笠女郎

○弘長元年百首、夏月
手にならすおなじうちはの里人の夏のなかばの月やみるらむ　後九條内大臣

○題不レ知僞中（うりふの里若狭又山城）
小大君集 雲のたつうりふの里の女郎花くちなし色にいひぞわづらふ（はくいぞわづらふ家）　讀人しらず

○正治元年百首、山家
浪の音に宇治のさと人よるさへやねてもあやふき夢の浮橋　前中納言定家卿

○家集、のがみのさと（美濃）
なつなかと霞のひまに見えつるはのがみの里の春のこすゑか　刑部卿範兼卿

○同一字抄
いかにしてのがみの里を過ぎゆかむ夜深く關に雪ふりにけり　權僧正永縁

○正安大嘗會國々名所歌（の山のさと、野山、備中）
あかすこそ秋の野やまの里人はくもりなきよの月をみるらめ　大藏卿隆教

○三百首歌、のさかのさと（肥後）
夜半にふく河風さむみあしきたの野坂の里は衣うつなり　中務卿みこ鎌倉

○正治二年百首、おぼろの里（山城）
稀にこし朧の里に住み馴れておいは清水のしるしなりけり　宜秋門院丹後

○家集、をぎ原の里（三河）
風ふかぬ恨みやすらむうしろめたのどかにおもへ荻原の里　實方朝臣

○百首歌、おくの里（みよしの、大和）
みよしのの奥の里人いかゞする都もふかき雪のあしたに　殷富門院大輔

○正治二年百首、おほはらのさと（大原、山城）
見わたせば軒のしのぶにたるひして吹雪にこもる大原のさと　源師光

○同
あさゆふの煙は庭をあるじにてひとは音せぬ大原のさと　小侍従

○同
秋の月にみやこをいそぐ賤のめが歸る程なき大原の里　前中納言定家卿

○家集、寂然法師すみたる大原へ遣はしける
水の音はまくらにおつる心ちしてねざめがちなる大原の里　西行上人

○九月十三夜十首歌、里月（あきゐの里、陸奥）
明玉
よもすがら袂にはらふ白露のおきゐの里に月をみるかな　第三のみこ

○光臺院入道二品親王家五十首、擣衣 幽イ
賤の女が月におきゐの里とほみ追風しるくころもうつなり　藤原孝經

○祝歌中、龜鏡、おほいそのさと（未勘國）
はこべともつきせざりけり貢物大磯の里の道のまもなく　維衡卿

○家集、おほくらのさと（近江）
君が代をまちしもしるく大倉の里のなかぢを見るが樂しさ　兼盛

○名所歌、龜鏡、くらぶのさと（近江）
何事もならひなくのみみゆるかなくらぶの里にいかゞいふべき　貫政

○家集、くろづのさと（黒津、近江）
つかなみの上による〳〵旅寢して黒津の里になれにけるかな　源俊重

○題不ㇾ知、懷中（くろまの里、上野）
都よりかへりくるまの里人はひとねがはをば渡らざらなむ　讀人しらず

○長治元年五月源朝綱朝臣家歌合 頼政
春がすみ八重たちぬれば尋ねゆく道も別れずくらはしの里　同

○主基方御屏風、くらかきの里（未勘國）家イ
くらかきの里に波よる秋の田の年なかひこの稻にぞありける　前中納言匡房卿

○保延元年八月宗成卿家歌合、くきのさと（未勘國）
萬代
月かげをあなしの波に夢さめてあけぬとや思ふくきのさと人　藤原忠兼

○水郷冬望（くさかりの里、河内）
ふる河の入江のあしは霜がれて寂しくなりぬ草刈の里　仲原師光朝臣

やちこちも今はたみえずうばたまのくろだの里の夕暗の空　參議爲相卿

梓弓はるといふよりひきかへてはやくぞいはふやのの里人　民部卿爲家

新六六
あづさ弓やはぎの里のかば櫻花にのみいるわがこゝろかな　同

月かげをまつもをしむもくるしきにいづくなるらむ山梨の里　源　雅光

外よりもひかり久しくさやけきは月のかくるゝ山なしの里　津守國基

冬のくるいはたの里のこがらしにはゝそしぐるゝ山しなの里　小野イ　惟宗行賢

時鳥しのばぬ聲をきくよかや山田の里にさなへとるらむ　堀河右大臣

なはしろの水を心にまかすれば山田のさとはたねまきにけり　六條院宣旨

日にそへて姿ぞ影になりにけりやせの里なる妹をこふとて　印　性　法　師

家
やすみしるわが大君の御代にこそいとゞやすらの里もとみけれ　左京大夫顯輔卿

粟花
からびとのねがふ心に近江なるやすらの里のやすらけきかな　祭主輔親卿

うちすぐる人も煙になれよとやもしほやきての里の松風　證　心　法　師

此の歌鴨長明が伊勢記云伊勢へ下りけるにやきてのさとくもつの濱などすぐるほどにやゝきりはれゆき伊勢の海のおきのしらす濱の松原ほのぼのあらはれわたるなみれすしほがまかすもしらず打ちちりて繪にかけるごとくなるをよめると云々

○建保二年内裏百首、くろだ、くろだのさと（尾張）
○文治六年五社百首中、やのの里（安藝國）
○六帖題、やはぎの里（三河）
○保安二年内大臣家歌合、九月イ　山なしの里（下總）
○山なしの里を
○承安二人寄、山しなの里（山科、山城）
○栂尾、殿歌、山だのさと（山城）
○安元、名所歌よみける中
○建保中、歌合、やせの里（山城）
○天仁大嘗會、やすらのさと（安良、近江）
○安元
○やきての里（伊勢）

○題不知、懷中（ますだの里、近江）
年ごとにますだの里の稲なればつくともつきじちよの秋まで　讀人しらず

○まきの里（山城）
名にしおはばいざやねとめむまきの里戀ひ來る人もありと云ふなり　爲頼朝臣

○題不知、懷中、まつかぜのさと（尾張）
松風の里にむれゐるまな鶴は千年かさぬるこゝちこそすれ　讀人しらず

○同、けぶりの里（丹波）
懷中　戀しきをおもひのがるとせしかどもいとゞ煙の里にこそふれ　同

○同、まきの里（山城）
扶桑　布さらすまきの里ともみゆるかな卯の花さけるかきね／＼は　同

○まつむらのさと（未勘國）
龜鏡　春秋はおほくつもれど年をへてときはにみゆる松原の里　同

○祝歌中、まつばらの里イ
君がためひときにちよを契りつゝゆく末とほき松原のさと　二條太皇大宮肥後

○建久五年左大將家歌合（深草の里雪）
雪をれの竹の下道あともなしあれにしのちの深草のさと　前中納言定家卿

○寶治二年百首里竹、（ふしみの里）
あれまくに誰ほうりうゑて呉竹のふしみの里はよにふりにけむ　民部卿爲家

○最勝四天王院御障子
一夜ふすふしみの里の岡邊なるわさ田もかりに鹿ぞなくなる　後久我太政大臣

○同
鹿のねにねざめの秋と松の風ふしみの里につきやちぎりし　俊成卿女

○同
かどたふく野風を寒みかりにきてふしみの里のいねがての露　大藏卿有家

○家集
野邊ごとに折りこそ盡せ女郎花ふしみの里はむぐらはふまで　相摸

○秋歌中
夏林　あしがきにはづれて見えし妹故にいとゞふしみの里ぞ戀しき　智經法師

○家集
ふしみすぎ岡の屋になほとゞまらじ日野までゆきてこま心みむ　西行上人

○同、ふたみの里（播磨又伊勢）
桑門　玉くしげふたみの里のうの花を有明の月とおもひけるかな　戒秀法師

時ならでまた桜の花ざかり春をふたみといふべかりけり　　鴨　長明

此の歌伊勢記云九月ばかり二見の里に侍りけるにある人のもとよりさかりにさける桜を一枝おこせたりければつかはしたりけると云々

心せむひとつみのりの末までもふたみの里はひとへたてけり　　同

此の歌同記云二見に侍りけるにちかきあたりに如法経の十種供養とて人々あつまるとききて折しもさるべきにこそと思ひて聴聞すべきよしいへどかの願主に侍るにやあらむあるべきことにもあらずとてはなるゝよしなききてよめると云々

峯たかきあらしの山のもみぢばはふもとの里の錦とぞみる　　前中納言師時卿

ちりまがふ嵐の山の紅葉ばはふもとの里の秋にぞありける　　藤原信宗卿

むら雲のさえゆくまゝに嵐山ふもとのさとは霰ふるなり　　民部卿為家

いとひするさのの中道くさ葉よりわれこひわたる舟橋の里　　結　擧

萬十
藤原のふりにしさとの秋萩はさきてちりにき君にちかひて　　読人しらず

みかさ山神のちかひにたつ鹿のこゑかすかなる藤原の里　　同

ちらすなよその同胞を尋ねてもふせやといはむ里のしるべを（ころイ）　　寂蓮法師

さてもなほいつかはるべき日数のみふるのの里の五月雨の空　　喜多院入道二品のみこ

〇堀河院御時百首、ふもとのさと（あらしやま）
〇永承四年十一月内裏歌合、紅葉
〇弘長四年毎日百首中
〇さのの中道（ふなばしの里、武蔵、上野）
〇題不レ知（藤原の里、大和）
〇仁安三年奈良歌合、鹿
〇百首歌、忍寄傲恋（ふせやの里、信濃）
〇正治二年百首御歌、ふる野の里

とはざらむ人もうらみじあとたえてふるのの里の雪の深さに　俊成卿女

新千冬 初時雨ふるの山ざといかならむすむ人さへや袖のひづらむ（ぬる新千）　好忠

たが代よりうゑて此の名を留めけむ園屋の竹のふたむらの里　冷泉太政大臣

ふるいちの名にあらはるゝ里なれば久しくかゝるいけの藤浪　兼仲卿

秋風のふけの里人おとすやと我もこゝろにかゝるかはなみ　祐子内親王家紀伊

新續古秋下 かち人のみちをぞおもふやましなのこばたの里のあきの夕霧　後京極攝

色そむる木の葉の里の唐錦あらくなたちそすがの山かぜ　九條内大臣

吹き來なる風の音こそさびしけれ木の葉の里の秋の夕暮　讀人しらず

秋ふかみ嵐にそひてしぐるれば木のはの里ぞ寂しかりける　同

ふた千代を重ねてゆづれ君をいのる小松の里の鶴の毛ごろも　喜多院入道二品のみこ

山ちかみ朝たつ雲と見えつるはこまのの里の煙なりけり　前大納言公任卿

此の歌春日よりかへり侍りけるに山づらにひぶりの立ちけるをなどへば
こまのの里といひければよめると云々

夕されば峯の松風おとづれてもみぢ（木のはイ）散りしく衣手のさと　讀人しらず

かたしきのとこの初霜色にいでてよな〳〵さゆる衣手の里　正三位知家卿

いまも又（猶イ）涙やさそふほとゝぎすわが衣手の里に鳴くなり　西園寺入道太政大臣

○千五百番歌合
○寛和二年殿上歌合に、ふるのの山里（大和）
○寶治二年百首、里竹（ふたむらのさと尾張）
○正安大嘗會、ふるいちの里（近江）
○家集、宇治にてよめるイ（ふけのさと山城）
○千五百番歌合、こばたのさと（山城）
○弘長百首紅葉（このはの里、越中）
○天喜元年八月賴家朝臣家越中國名所歌合、木葉里
○同
正治二年百首、こまつの里（未勘國）
○こまのの里（狛野、山城）

○延久歌合、衣での里（山城）
○家集
○光臺院入道二品親王家五十首、里時鳥

○家集、ころもの里（陸奥）
わぎもこがころもの里の梅の花さぞくれなゐの色にさくらむ　中納言定家

○爲忠朝臣家三河國名所歌合、春霞
現存六
いまよりの霞もさこそたちぬらめ衣の里に春しきぬれば　鷹司院按察

○同
夜をかさねみやま立ち出で時鳥衣のさとにきつゝなくなり　平　忠（爲イ）盛

○同
春すぎて夏のひとへになりながら衣の里は名こそかはらね　意尊法師

○道家卿五首歌合、月、こしのさと
月影にうづもれぬとや思ふらむ雪にならべるこしの里人　從三位頼氏卿

○十題百首御歌、えびすのさと（陸奥）
わが思ふ人だにすまば道の野のえびすの里のうときものかは　後京極攝政

○題不レ知、あすかのさと（大和）
萬一
飛ぶ鳥の飛鳥の里をおきいなば君があたりはみえずかもあらむ　元明天皇御製

○建長七年顯朝卿の家の千首、故郷霞
とぶ鳥のゆくすゑみえぬあすか川里の名こめてたつ霞かな　從二位行家卿

○久安五年七年七月山路歌合、花
飛ぶ鳥のあすかのさとのさくら花空にぞあそぶ風にみだれて　隆緣法師

○文永二年（七月イ）白河殿百首
あかしのさと（播磨）
浦人のおのがものとや眺むらむあかしのさとのよはの月影　從一位良教卿

○最勝四天王院名所御障子イ
あかしがたいざをちこちも白露のをかべの里の波の月影　前中納言定家卿

○千五百番歌合、あしやのさと（攝津）
浦近きあしやの里に日はくれて浪路のきりに螢のいさり火　前大納言忠良卿

○貞應三年百首
山とほきゆふつけ鳥もあけぬとてあしやの里に舟いそぐなり　民部卿爲家

○最勝四天王院名所御障子イ
くれぬとはつげの小櫛をささずとも蘆屋の里に螢とぶなり　大藏卿有家

○同
ゆふされば秋やは松をふく風に軒うちそよぐあしのやのさと　參議雅經卿

○同
あしの葉の霜がれはてし里の名を霞にこむる空のあけぼの　俊成卿女

現存六
あしのやの里の入江による草のみるめにうきて行く螢かな　後九條内大臣

霜のつるおきゐてすだく聲すなりさえ行くよはの蘆のやの里　爲忠朝臣

むれたけ(こイ)る垣根の木の葉霜がれてかくれがもなし蘆の屋の里　琳賢法師

夜の内のゆふつけ鳥も聞こえてあけてあはづの里にきにけり　民部卿爲家

日くるればあはでの里の童べのゆふとゞろきか物も聞えず　讀人しらず

鹿のねに草の庵も露けくて涙ながるゝあとむらのさと　相模

扶桑
年つみて蚕のすむらむあさくらの里の若めもいかでわれ(すれむイ)みむ　顯綱朝臣

いつしかと朝日に里を立ち出でて急ぎもはらふ貢物かな　左京大夫顯輔卿

木がらしの風はふけども散らずして青柳の里常磐なるらむ　讀人しらず

早苗とるたごのひまなみ五月雨のふろも時しるあさはらの里　前中納言俊光卿

みな月の頃とも見えぬ草葉かなあさつの里のみちの露けさ　法印定圓

續詞花連歌
見わたせばきりべの山もかすみつゝ秋つの里は春めきにけり　讀人しらず

かひなしや尋ね來たれどみちの野の會津の里も名のみなりけり　藤原定國

下もえによをのみつくす人ならで誰かふすぶるあくた火の里　祐擧

一夜みし人のなさけは立ちかへり心にやどるあをはかの里　慈鎭和尚

こぜりつむさはのこほりのひまたえて春めきそむる櫻井の里　西行上人

○みるめ
○三河國名所歌合（あしやの里）
○同
○建長六年（八イ）（毎日イ）一首中
○題不知、懷中（あはでのさと、尾張）
○家集（あとむらの里）
○雑歌中、あさくらの里（但馬）
○家集、大嘗會歌合、あさ日のさと（朝日、山城）
○あをやぎのさと（未勘國）
○永仁大嘗會、あさはらの里
○家集、秋風（あさつの里、大和或紀伊）
○元永二年十月内大臣家、あひづの里（陸奥）
○あくた火の里
○海北百首歌合（番イ）、あをはかの里
○家集、さくら井の里（櫻井、山城或攝津）

(同)
秋風のふくにちりかふもみぢばを花とは思ふさくら井の里　寛方朝臣

〇家集、名所歌
さくら井の里にて春の花をみて秋はかつらの月をながめむ　備中納言長方

〇弘長四年(毎日イ)一百首中
花をみし春の錦のなごりとて木葉色づくさくら井のさと　民部卿爲家

〇建保三年名所百首(更科の里、信濃)
はるかなる月の都に契りありて秋のよあかすさらしなの里　前中納言定家卿

雲やなきをばすて山の秋の空月ぞすみけるさらしなのさと　正二位家衡卿

〇時鳥歌中(をたぎの里、攝津、大和)
なきおくれうちこせ山の時鳥きけばほの里の松のたえまに　俊頼朝臣

〇七百首歌、きなれのさと(大和)
萬代
唐衣きなれの里にうちそめぬしま松風や夜さむなるらむ　權僧正公朝

〇御集
から衣きなれのさとに君をおきて島松のきのまてばくるしも　鎌倉右大臣

〇建長五年毎日一百首中イ(きくがはの面、遠江)
夫木十一
神無月まだうつろはぬきく(くイ)がはに里をばかれず秋ぞ殘れる　民部卿爲家

〇題不知(ゆき(くイ)見の里、山城、未勘國)
現存六
立ちわかれゆきみの里にいもを置きて心空なり土はふめども　讀人しらず

〇さと
なきすてゝゆくみの里の郭公心そらなりあかぬ名ごりに　從二位行家卿

〇百首、戀歌
妹が家にゆく(へ)みの里の道遠み急ぎながらもゆかぬよぞなき　正三位知家卿

(永久四年百首、春日祭、みかさのさと
こまなべてみかさの里へ行く人は天の下祈るつかひなりけり　源　兼昌

〇あづまへ下りけるに(みつけの里)
誰か來てみつけの里と聞くからにいとゞ旅寢の空おそろしき　安嘉門院四條

此の歌は路次記云こよひとほつあふみ見つけのがうといふ所にとゞまりてさとあれて物おそろし水の江ありと云々

○家集、みのぶのさと（甲斐）

雨すぐる（しのぐイ）みのぶの里のかき柴にすだちはじむる鶯の聲　西行上人

○みうらの里（相摸）

我が心とほつあふみの濱名よりみうらの里の妹がりぞゆく　源仲正

○みねのの里

萬代

たれかいま思ひおこさむ東路やみねのの里の夕暮のそら　祝部成茂

○建保四年内裏十首歌合、みよしのの里（大和又武藏）

すみなるゝときは夏みのかは淀に山かげ涼しみよしのの里　西園寺入道太政大臣

○家集

行くすゑはたのむのかりの玉章を忘れがたみに（へイ）みよしのの里　正三位知家卿

○遠所十首歌合、山家（みなせの里、山城或は攝津）

古來歌

ひきうゑし里はみなせの庭の松ぬしなき庵に春やねぬらむ　後鳥羽院御製

○題不レ知（みつのさと、三豆、御津、山城又近江）

さゞ波や志賀の浦風ふきこしてよさむなるらしみつの里人　右兵衛督惟方

○建仁二年五十首三わの里（三輪、大和又丹波）

みわのさとの花のさかりは磯のかみふるのの末にかゝる白雲　慈鎭和尚

○後九條内大臣家會、秋曉里（しのぶの里、陸奥）

有明の月のひかりも鳥のねもえやはしのぶのさとの秋風　從三位家隆卿

萬代　續後拾遺一

いはぬまは人こそしらね陸奥の忍ぶの里にしめはゆひてき　八條院高倉

○寶治二年百首

いたづらに露やおくらむ人しれず忍ぶの里のおくの篠原　兵部卿隆親

○安井、しかまの里（飾磨、播磨）

現存六

はりまなるしかまの里にほすあゐのいつか思ひの色に出づべき　衣笠内大臣

初時雨しかまの里のうす紅葉などあながちにわきてそむらむ　家長朝臣

○家集、しづはらの里（山城）

山賤のすみぬとみゆるわたりかな冬にあせゆくしづ原の里　西行上人

○同、しほのやの里

明玉

霞さへたえぬ煙にたちそひてはれまもみえぬしほのやの里　二條太皇大后宮肥後

○題不レ知（しのだの里、和泉）

いづみなる高師の濱の浪しあれば篠田の里もあらはれにけり　讀人しらず

こととはむしほやの里にすむ蜑も（のイ）わがごとからき物や思ふと（思ふやとイ）　中務卿親王

おりたちてしみづの里にすみぬれば夏をば外（ほか）にきき渡るかな　二條太皇大后宮肥後

夏來ればふせやが下に安らひて清水の里にすみつきぬべし　二條院大進

下柴のかれ行く程にふりぬればつまぎこりつむしがらきの里　正三位經家卿

春あさみすまのまがきに風さえてまだ雪きえぬしがらきの里　西行上人

花はまたじ心はそらにあさ緑はるめくころの白川の里　慈鎮和尚

浪ぞよるさても見るめはなきものを恨みなれたるしがの里人　後京極攝政

櫻さくゑじまの里をむら／＼にいろどるものは霞なりけり　源仲正

[illegible]曇りなき君が御代にはあかねさすひおきの里も賑はひにけり　前中納言匡房卿

新六　近江なるひものの里のかば櫻花をばわきてをる人もなし　光俊朝臣

東路のもろこしの里におりてたつきぬをや唐の衣といふらむ　人丸

せたの里はしのうまふみ朽ちめおほみそこの涙も面影にたつ　俊頼朝臣

よをそむくかどではしたり大原やせれふの里の草の庵に　後徳大寺左大臣

大原やせれふの里の月はみついつかわが身もすむべかるらむ　權中納言實家卿

此の歌は大原にせれふといふ所にまかりてある聖人にあひて侍りける
にいまはみやこへ歸らむとするに月のあか〳〵侍りしに何となく心すみ

○しほやのさと（下野）
○しみづの里（播磨又信濃）
○正治二年百首、しがらきのさと
○家集
○寳治百首（番イ）歌合、しらかはのさと（山城又陸奥）
○六百番歌合、怨戀（志賀の里、志賀）
○家集、百首、ゑじまの里
○永保六年大嘗會主基御屏風、ひおきの里（丹波又備中）
○六帖題、ひものの里（相模、遠江）
○家集、もろこしの里（駿河）
○せたの里（近江）
○御集、大原せれふ里と云ふ所にて

ておぼえしによめると云々

大原やせれふの里の煙をばまだき霞のたつかとぞみる　季通朝臣

いほさきの墨田河原に日は暮れぬせきやの里に宿やからまし　光俊朝臣

此の歌は家集に云康元元年九月鹿島社に詣でけるにすみだ河のわたりにて此のわたりのかみのかたに河のかたにつきて里のあるをたづぬればせきやのさとと申すまへには海ふねもおほくとまりたりと云々

山どりのすゑたの里もふしわびぬ竹の葉しだり永きよの霜　従二位家隆卿

つくばねのすそわの里の夕煙このもかのものすまひをぞしる　覺盛法師

おきつうみ水底深く思ひつゝもひきならしし菅原の里　讀人しらず

（萬二千）（萬の）

村

白菊のいづみのむらにすむ人は黒髪ながらとしをこそふれ　前中納言匡房卿

うたふらしよを治まれといはくらの村のもろ人もろ聲にして　大藏卿隆敎

わが君につかへまつらむ苦深きいはねの村の萬代までに　資業卿

（萬代）

色々の木々のもみぢをみ渡せばたれ織りかくるにしきべの里　兼仲卿

煙たつ春べの村はいにしへの難波のみつの氣色こそすれ　前中納言匡房卿

○久安百首イ

○せきやの里

○光台院入道二品親王家五十首、竹篇（すゑたの里、未勘國）

○五百六十番歌合

○題不知、すがはらの里

○永保元年大嘗會、いづみのむらの人の家に菊花さかりなり（いづみの村、丹波）

○正安大嘗會、石倉のむら（備中）

○永承大嘗會、いはねのむら（近江）

○正安大嘗會、にしきべのむら（錦部、近江）

○永保元年大嘗會、はるべのむら（丹波）

○永仁大嘗會、ちえだのむら（丹波）
○承保元年大嘗會主基方稲舂歌、かみたのむら（未勘國）
○よしみのむら（未勘國）
○天仁元年大嘗會悠紀方稲舂歌、よしだのむら（近江）
○永保元年大嘗會、五月雨、たかののむら（近江）
○たか田のむら
○永仁大嘗會名所、たなかのむら（田中、近江）
○たてりのむら（立入、近江）
○天仁大嘗會（ながらのむら、近江又丹波）
○名所歌中に稲衣（たまむら、玉村近江）
○家集、ながたのむら（長田、丹波）
○家集、うしかひの村（伊賀）
○正安大嘗會、八重村（備中）
○家集、やすらのむら（安良、近江）
○天仁元年大嘗會、まきのむら（眞木、近江）
○爲忠朝臣三河國名所歌（合イ）、藤野村（三河）

玉葉賀
うすくこく千枝にさける藤浪のさかりも久しよろづ代の春　　前中納言俊光卿

千はやふる神田の村のいねなれば月日とともに久しかるべし　　前中納言匡房卿

君が代はよしみの村の民もみな春をまつとや急ぎたつらむ　　皇太后宮大夫俊成卿

時雨せぬ吉田の村の秋をさめかりほす稲のはかりなきかな　　前中納言匡房卿

わが君のちよのかずかも五月雨のたか野の村の軒の玉水　　同

天の下かくこそはみめかへ原やたか田の村は得ぬ年ぞなき　　同

皇のちいほの秋のはじめにはたなかの稲のわさぼをぞつむ（くイ）　　前中納言俊光卿

うつろはでたてりの村の白菊はさていく秋の露しもかへむ　　同

はる／＼と年も遙かに見ゆるかなながらの村のなかひこの稲　　藤原正宗朝臣

うつろはで庭面白き初霜におなじ色なるたまむらの菊　　藤（原）義（資）方（忠イ）

靜かなるながたの村にすむ人のかりつむ稲のはかりなきかな　　同

いなり松みにとてゆけばおそろしく草かひまさる牛かひの村　　結　學

八重村にさける山吹幾とせかあかぬ匂ひの色（春イ）をかさねむ　　大藏卿隆敦

さなへとるやすらの村の五月雨に天が下こそ賑はひにけれ　　前中納言匡房卿

まきの村つら／＼椿つら／＼に思へば久し君が八千代は　　同

紫の絲くりかくと見えつるは藤野の村の花ざかりかも　　藤原宗國

○同
○中務卿親王家九山和歌、ふしみのむら
○柿本影供百首、ふるえの村（駿河）

○家集、こもしのむら
○花祭を、ありまのむら（有馬、攝津又紀伊）
○久安百首
○題不レ知、日本紀
○康治元年近衞院大嘗會、青柳村（近江）
○永德元年大嘗會主基方御屛風、さかひの村（丹波）
○正安大嘗會、きゝのむら（備中）
○題不レ知、ゆづはのむら（湯都磐伊勢）
○光明峯寺入道攝政家百首（遠村紅葉）

きしなくてふぢのの村の藤浪は松の梢にかゝるなりけり　藤原道經

見わたせばふしみの村の夕霞たが歸るさの道迷ふらむ　源基（印イ）長朝臣

古來歌 新拾夏
五月雨はふるえの村のとまやかた軒までかゝるたごの浦波　法師定圓

此の歌は萬葉集十七家持卿天平九年九月二十六日思ニ放逸鷹一夢見感悦作長歌に「つなしとる、ひみのえすぎて、たこのしま、とびたもとほり、あしがもの、すだくふるえに、をとつひも」云々同右射水水郡古江村取ニ獲蒼鷹一形容美麗鷙秀群也云々（此心歟）イ

（はるゝイ）
花なみのくるすもいかになりぬらむこもしの村にみゆる笹栗　祐擧

明玉
神まつる花の時にやなりぬらむありまの村にかく（かイ）るしらゆふ　光俊朝臣

紀伊國や有馬の村にます神のたむくる花はちらじとぞ思ふ　大炊御門右大臣

春風に木ずゑさきゆく紀の國や有馬の村にかみまつりせよ　讀人しらず

玉賀 家
君が代は民の心のひとかたになびきてみゆる青柳の村　右京大夫顯輔卿

八隅しる我がすべらぎの御代にこそさかひの村の水もすみけれ　前中納言匡房卿

色毎にそむるもみぢの木々の村しぐれけりとは今ぞしらるゝ　大藏卿隆教

萬一
河上のゆづはの村に草むさす常にもがもなとこをとめにて　讀人しらず

かは上のゆづはのむらのうす紅葉した草かけて露やおくらむ　從二位家隆卿

○文永二年七月百河殿七百首（名所村）
○[illegible]、木綿園村（近江）
○題しらず

いせぢゆく人や宿らむ河上のゆづはの村も日はくれにけり　光俊朝臣

をちこちの卯の花月夜あかければひろとぞみゆる夕園の村　前中納言匡房卿

萬一
かゞり火の煙たつなり里とほみゆづはの村に日は暮れにけり　源仲遠

市

○六百番歌合、寄二商人一戀
○家集、[illegible]屏風、市ひめのかたをかける所
○十題百首、三輪の市（大和）
○百首歌、市時鳥
○六百番歌合、寄二商人一戀（戀イ）
○長歌、かるの市（大和）
○文永四年七月百河殿七百首、市商客、たつ田の市（大和）　二イ

たちくらす市めもさこそなげくらめ心をかへて思ひしるかな　正イ 三位経家卿

市姫の神のい垣のいかなれやあきなひものに千代をつむらむ　俊頼朝臣

大和なる三輪の市路に急ぎてもいつまで世にはふるの山ごえ　寂蓮法師

ききわかむ里すみてなけ時鳥すぎゆく三輪の市とよむなり　従二位家隆卿

尋ねばやほのかに三輪の市にいでて命にかふるしるしありやと　隆信朝臣

此の歌左方申云かふるしるし如何判者俊成卿云ほのかに三輪の市はいのちにかふるぞにはなるやうに侍れど三わの市にしるしありやなどいへらむゆゑなきにはあらずと云々

萬二
やまといでみし　かるのいちに　わがたちきけば　玉だすき　人丸
うねびの山に　なく鳥の

しるしらず人はたつたの市なれば誰をたれとかわきて頼まむ　参議忠[illegible]卿

○篇集十首御歌、寄市戀
つれもなき名のみたつたの市もあらば心をかへて思ひしれかし　後鳥羽院御製

○建保三年名所百首
玉ぼこやおほくの民のたつ市にくるれば歸るかずもみえけり　順徳院御製

○同
いたづらにけふも暮れなばたつの市日數經ぬべき鄙人かな　正三位行家卿

○同
辰の市や行きかふ人もくれ行かばうるまの清水影もとゞめず　正三位知家卿

○同
たつの市にうるまの清水底すみて人の心のくまものこらず　藤原康光

○家集
たつの市うるまの清水涼しくてけふはかひある心ちこそすれ　俊頼朝臣

此の歌は右のむまのかみの八條の家にていづみ夏のともたりといへることをよめると云々

○同
時しあればたつの市路のいちじるくさけども花をうる時ぞなき　正三位知家卿

○建保三年名所百首（しかまの市、播磨）
君が代はしかまの市におくかぢの千年をへても色やまさらむ　從三位範宗卿

○最勝四天王院御障子
萬代 秋くればしかまの市にほすかぢの深き色なる風の音かな　如願法師

○題不レ知（さがみの市、相模）
萬代 布さらすこれやさがみの市ならむさゝわけ衣ぬぎもかへばや　四條太皇太后宮下野

○あべの市（阿部、駿河）
萬三 やきつべをわが行きしかば駿河なるあへの市路にあひしこらかも　讀人しらず

驛

六二 東路のうまや〳〵と數へつゝあふみの近くなるが嬉しき　讀人しらず

とりつなぐうまや〳〵と思ふまにゆけどつきせぬ道のなが濱　太宰大貳高遠卿

○百首歌、あかしのうまや（播磨）
旅枕いくたび夢のたえぬらむ思ひあかしのうまや〳〵と　前中納言定家卿

○六帖題、せきのうまや（伊勢）
新六二
道ほそき關の驛のすゞか山ふりはへすぐるともよばふなり　民部卿爲家

○建保七年家千首、驛路（かこの驛や）
松原はそこともみえずはりま路のかこの驛は霧深くして　前大納言顯朝

○なしはらのうまや（大和）
六二一
君ばかりおぼゆるものはなし原の驛いでこむたぐひなきかな　讀人しらず

○承安三年經正朝臣家歌合、時鳥
時鳥きこゆることもなし原のうまや〳〵とまちあかしつる　藤原實隆朝臣

○建長三年十首歌合、行路紅葉
こし方はそむるしぐれもなし原の驛あるてふ山の紅葉ば　正三位知家

庭

○家集、建長四年毎日一首中
秋のよの雨にまされるおとすなり木の下影の庭の瀧つせ　民部卿爲家

○同五年毎日一首
せきいるゝ山下水のともすればとだえがちなる庭の瀧つせ　同

○百首御歌
みむろ山の冬のやまもとかさみびて庭の木の葉に峯の松風　慈鎭和尚

○同
すみよしの庭の梢も霜がれて冬こそまつの色はありけれ　同

○同、宴遊
庭の松のとこしよぶなる風の音にうち合はせてもとる拍子かな　同

○六帖題
新六二
宿しめてかひこそなけれ苔の上の庭つくりせぬ山の岩かど　信實朝臣

○同
新六二
春はまづ袖をつらねしむらさきの庭ぞたちゐるに今も忘れぬ　民部卿爲家

○後法性寺入道關白家百首

紫の庭の雪にはみなしるしみな白妙のみよしのの山　皇太后宮大夫俊成卿

○二夜百首、禁中

むらさきの庭の春風長閑にて花にかすめる雲のうへかな　後京極攝政

○六帖題、かざし

藤さくらかざしつゞくるもろ人の袖をつらぬる九重の庭　前中納言爲衆卿

○天仁四年師時卿家歌合、卯花、玉の庭

うの花のしらゝにさけば山賤の垣根もたまのにはとなるらむ　仲實朝臣

○堀河院御時百首

柴の庵のはひりのにはにおく蚊火の煙うるさき夏の夕暮　顯仲卿

○たはぶれ歌とてよみたる中に

我もさぞ庭のまさごの土遊びさておひ立つるみにこそありけれ　西行上人

○題不レ知

萬十四　庭にたつあさで小衾今宵だにつまよしこさねあさでこぶすま　讀人しらず

○建長七年顯朝卿家千首

庭にたつあさでが袖もなほさえぬ春はきたれど雪のけなくに　光俊朝臣

○六帖題

新六三　眺めのみ唯つれ〴〵の庭たづみよにふりはてて行く方もなし　民部卿爲家

○貞應二年當座百首、山家庭菫（六イ）

とふ人はあるじとてだにこぬ山のがけぢの庭にさく菫かな　同

樞

○建保三年名所百首

春は今宵しばのとぼそにかへる山あさけの庭に誰をまたまし　僧正行意

○同

はつせ山まつの戸ぼその明方にそよふきそむる秋の初風　正三位忠定卿

○文永九年毎日一首中

夕顔のみさへ空しきとぼそこそさしてうき世の事もしらるれ　民部卿爲家

牀

○久安百首
山賤のすがきのとこのしたさえて冬來にけりとしらせ顏なる　上西門院兵衛

○家集
萬代 かげにそふむぐらの牀の一人ねも月より外のなぐさめぞなき　選子内親王家大輔

○家集、詠歌中
草結ぶ牀だにあるゝ夕暮のあらしのそこにこよひだにねむ（かもイ）　大納言通具卿

○六帖題
新六二 黑染の袖をつらぬるなかとこは時まつとてもあだにやはある（ゐ新六）　光俊朝臣

○同
同一 哀れわがあなうら結ぶ牀の上に待ちいづる月の影の長閑けき（さイ）　同

○よるひとりなり
新六五 さりとてはさもあらましの牀中に膝をいだきて幾代あかしつ　信實朝臣

棟

○家集、霰をよめる
あれはててむねもくもらぬ宿なれば霰ならではもる人もなし　俊頼朝臣

○同、山里落葉
あれはててむねまばらなる山里はちる紅葉ばをとこにこそしけ　同

窓

○題不知
第十一 窓停に月さし入りてあしびきのあらしふく夜は君をしぞ思ふ（しイ）　讀人しらず

○書在二窓一人来レ戯
からくしげあけてしみれば窓深きたまの光をしる人ぞなき　太宰大貳高遠卿

○最勝四天王院名所御障子
はつせ山よのうきのもはすみぬべしすぎの窓ふく雪の下風　後鳥羽院御製

○十題百首御歌
月清みしぐれぬ夜半の寢覺めにも窓うつものは庭の松かぜ　後京極攝政

○百首の御歌
月させどおろさぬ窓の夕風に軒ばの梅はほころびにけり　小侍從

○建長八年百首歌合
月の夜のころをほそめに窓あけて心をやれる歌ながめかな　信實朝臣

○六帖題（ねまち）
新六一 窓あけて山のはみゆるねやの內に枕そばだて月をみるかな　同

○家集
おとはしていはにたばしる霰こそよもぎの窓の友となりけれ　西行上人

○建仁元年老若五十首歌合
谷深きかすみの窓は明けやらで雲ぞいさよふ鶯のこゑ　寂蓮法師

○式部卿王續子首、曉月
秋寒きあらしの窓はあけやらでねざめに見よとすめる月影　參議爲相卿

○六百番歌合
夏きてぞ野中のいほはあれまさる窓とぢてけり軒のした草　大藏卿有家

○光臺院入道二親王家五十首、閑中燈
つたへきくまどしづかなるきみが代に光をそふるのりの燈火　從三位保季卿

○夏日北窓風枕寄如涼秋
さよふけて窓おしあくるうたゝねにまくら涼しき庭の松風　慈鎭和尚

戸

○六帖題
新六二 いかにせむ時にひくとのいでたちにかた〴〵見まくほしき昔を　民部卿爲家

○寛元元年結緣經百首、夜戸
我がせこが夜戸出の姿そのまゝに今もささずて待つが苦しさ　同

○同
あな戀しこやの戸いでしかた廂久しくみねばおも影ぞたつ　同

○題不知

萬十一
足曳の山櫻戸をあけおきてわがまつ君をたれかとどむる　人丸

○洞院攝政百首、山家

たれかすむ山さくら戸のたてながらあくるまもなき軒の白雲　光明峯寺入道攝政

○家集、閑花

あふさかの山さくらどの關もりは入やりならぬ花を見るらむ　從二位家隆

○春歌中

みかりするかり場のをのに今日暮れぬ山櫻戸に宿やからまし　同

○千首歌

あしびきの山櫻戸のあけたては錦おりはへ鶯ぞなく　民部卿爲家

○千五百番歌合、すぎのあみ戸

時鳥あはれも深くすむ山に杉のあみ戸のあけくれのこゑ　西園寺入道太政大臣

○洞院攝政家百首、山家

山里の柴のかた戸のかたびさしあたけにみゆるかりの宿かな　常盤井入道太政大臣

○百首歌

柴の戸をとはであくるやたれならむ通ひなれたる峯の松風　寂蓮法師

○光明院入道二品親王家五十首、萩露

さきかくす野寺がいほのさゝの戸もあらはにおける萩の朝露　從二位家隆卿

○秋歌中、はぎの戸（庭イ）

こゝのへに花の散りしく萩の戸はさぞ紫のにはとみゆらむ　後九條内大臣

○内裏當座御會、草花

さきやらぬ萩の戸わたる村雨にたましくにはをみする白露　民部卿爲家

○正嘉三年毎日一首中（あみ戸）

あけくれの客にやいはむ朝日さすあみ戸にかゝる夕がほの花　同

○六帖題、柴のあみ戸

新六二
山里の柴のあみ戸のあけたては峯のあらしの心なりけり　衣笠内大臣

○同

同
世を背く柴のあみ戸のかけがねの思ひはつせは人ぞ待たるゝ　信實朝臣

○中つまど

同
逢ひ見ての後の幸さの中妻戸折戸もあけぬとおどしだてかな　同

○同、ちがへやり戸

同
今宵さへ事しげしとて逢ふ事をちがへ遣戸のたてながらのみ　正三位知家卿

○つま戸
現存六
ねられねば宿の妻戸をおしあけて南にすめる月をみるかな　隆祐朝臣

○三百六十首中
我がせこが板屋のすゝ戸かけさけてたえぬをみるぞ秋はすべなき　好忠

○かさ戸
現存六
よをこめて秋はたつなり我がせこが閨のかさ戸を今やさゝまし　衣笠内大臣

○題不レ知、眞木の板戸
萬十四
奥山の槇の板戸をとくさしてわが開かむに入り來てなさぬ（いできまさねイ）　讀人しらず

○例の妻戸をならし給ひければきゝすぐして明けにける又のつとめて
まつ人やありあけの月と思ひしをさして（さでイ）やみにし槇の妻戸を　前大納言公任卿

○御返事
ひとりのみ有明の月の山のはにいるまでさゝぬ眞木の妻戸を　權中納言定頼卿

○修理大夫顯季（六條のイ）家にて、曉水鷄、くろどの御戸
誰しかも水鷄ならでは叩くべき黑戸のみと（のイ）をひましらむまで　俊頼朝臣

○題しらず
萬三
豐國の鏡の山のいはとだてかくれにけらしまてどきまさぬ　手持女王

○八幡若宮六首の歌合、山家
すみすてて人はあとなきいはの戸にいまも松風庭はらふなり　後京極攝政

門

○十題百首
あきつ島をさむるかどの長閑けきをつたふるきたの藤浪の影　前中納言定家卿

○述懐歌中（くはの門）
新六二
かき籠る桑のとざしの老らくよこはいかなれやねのみなかるゝ（るイ）　民部卿爲家

○六帖題
新六二
同じくはとぢこもれかし桑の門名にのみたてて年のへぬらむ　光俊朝臣

○同
新六二
からくして入りしはなにぞ桑の門みちの心よそのしるしあれ　正三位知家卿

○同
同六
世にしあらば行きかふ人もいかばかり蓬の門に市をなさまし　同

○同、門柱

同六おのづから朽ち殘りたる門柱がわいへいかで立てなほさまし　信實朝臣

○同

同荒れはてゝ怪しけれどもあや筵かけたる門はさすがなりけり　衣笠内大臣

○むしろの門

唐のむしろの門はいやしきに車のあとぞたえずみえける　權僧正公朝

○かど

引きかへてすゞみ（めイ）のあみをかけてけりこや市をなす門とみえけり　同

○文治六年五社百首

春雨はくる人もなくあとたえぬ柳の門の軒のいと水　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首

跡たゆるやなぎの門の春深みあくるもさすも風にまかせて　土御門内大臣

○同

いはまもるかた山かげのさゞれ水せかねど門の內にこそすめ　三條入道左大臣

老おくる門に柳を植ゑおかむさてぞ昔も日をくらしける　前大納言隆房卿

○夕戀

とはれむとさしてはすます松の門みはてむための秋の夕暮　從二位家隆卿

○正治二年百首

すみわびてなほ山深くあとたえばたれをかこゝに松たてる門　寂蓮法師

○家五十首、祝

年ふれど老いせぬ門をいく千代か月日の影のさゝむとすらむ　喜多院入道二品親王

○千五百番歌合、判詞歌

山路よりさすか月影しばの門見るもさびしき霧のまがきに　後鳥羽院御製

○祇園社百首（西門）

きりのうちもまつ面影にたつるかな西の（のイ）御門の石のきざはし　皇太后宮大夫俊成卿

○久安百首

我が門のいつもと柳いかにして宿もよそなる春をしるらむ（待イ）　清輔朝臣

○題不ㇾ知

萬二十我が門のいつもと柳いつも〳〵おもがこひすなりましつしも　讀人しらず

○同（いもがかど）

萬十二いもが門ゆきすぎかねて草結ぶ風ふきとくな又かへりこむ　同

○御集三首御歌、山家（柴の門）
奥山のきりのたえまの眞木の門いかなる人のすみかなるらむ　後鳥羽院御製

墻

○三百六十首
朝な／＼には草とるとせしほどにいもが垣根は薄らぎにけり　好忠

○永久四年百首（瞿麥）
とこなつの花さく宿にいかにしてをり（ふし百）よき竹を夏にゆはまし　藤原忠房

○六百番歌合
おのづからなさけぞみゆるあらてくむ賤がそともの夕顔の花　法橋顯昭

○家集、垣根雪
やのはやす（きイ）垣根の雪はつるのはのもとしろにこそ消え殘りけれ　源仲正

○正治二年七月當座百首歌合
垣根もるいさゝ小河に背かけて門田のいなば穂浪たつなり　參議雅經卿

○六帖題（かきほ）
新六二　かくて世を危げにてもすぐる（みゆイ）かな圍ふ垣根のねもぞ朽ちつゝ　正三位知家卿

○同
同　くづれそふ破れついぢの犬ばしりふまへ處もなき我が身かな　信實朝臣

○嘉元三年夢想百首
わが宿は秋のあはれをこめがほに垣根の山に鹿ぞなくなる　爲實朝臣

○百首御歌
いかにせむおくもかくれぬさゝ垣のあらはにうすき人の心を　順徳院御製

○俊頼朝臣の所へ旅なる所にて
玉旅　散木旅　草枕さゝがきうすきあしのやはところせきまで袖ぞ露けき　二條太皇大后宮肥後

○かへし
散木　さゝがきの薄き蘆屋の露けさに萎れ（はイ）にけりとみえもするかな　俊頼朝臣

○山里
現存六はイ　山里にたゞかりそめのすゝき垣ふちする人もなきわが世（身イ）かな　信實朝臣

○貞應三年百首、野亭歳暮
雪つもる野原にうづむあしがきのひとよのほどの春ぞま近き　民部卿爲家

○石清水三首歌合

○家集、雪歌中

○秋御歌中、柴の袖垣

○家集、やへのしばがき

○永久四年四月鳥羽殿歌合、卯花

○承元三年長尾社歌合、社頭花

○同、はなのやへがき

○同、みやがき

○きり／＼すを（かやのかき）

○千首歌、竹がき

○百首歌、竹あめるかき

○千首歌、里の竹垣

○寛喜元年女御入内御屏風、沼江菖蒲、（沼のみづがき）

○六帖題、こけのかきね

○同

○文永二年七月白河殿七百首、しのがき

かりねするとこの柴かき隙を荒みうらもあらはにさゆる山風　後鳥羽院宮内卿

をりならぬめぐりの垣の卯の花を嬉しく雪のさかせつるかな　西行上人

萬代
心なき賤がしわざとみえぬかなあさがほさける柴の袖垣　花園左大臣

春きりてかつらの里に雪ふればやへのしば垣花さきにけり　仲實朝臣

卯の花のさけるさかりのやへ垣をたれ山賤の宿とみるらむ　同

古の誰そのかみに手向けおきて春もいくよの花のみづ垣　正三位知家卿

つまごめに宮るせしよのあとなれや八雲にまがふ花の八重垣　法眼宗圓

あまつ袖ふるきみや垣神さびて花も久しき名をとめてけり　從二位行能卿

現存六
うらがるゝかやの垣根のきり／＼す夜風をさむみ聲弱るなり　後一條入道關白

山賤のへだてにひしぐ竹垣のわれ碎けてもよをやすぎまし　民部卿爲家

庭の面は鹿のふしどとあれはてて世にふりにける竹あめる垣　前中納言定家卿

かた山の里（すゝ本イ）のたか（けイ）垣あみめよりもりくる秋の月のさびしさ　民部卿爲家

あやめかる沼のみづ垣幾かへり久しき御代にけふを待つらむ　同

新六六
我が宿のこけの垣根のきり／＼す野べにのみやは露は習ひし　信實朝臣

同二
心ある宿のとなりの中ひ垣ふみの通ひのはざまやはなき　同

とし月を中にへだつるしの垣のひと夜二夜にあふ山もがな　後嵯峨院御製

○建長三年十首歌合、山家秋風(山のかきほ)
○文永元年七社百首、神のあらがき
○永久元年七月藤原定通家歌合、雪(ふるのかきね)
○家集、山家納凉(すゞのかきね)
○あや日がき
○永久四年百首、夏衣
○弘長二年内裏百首、寄レ垣戀、(中がき)
○仁安二年二月清輔朝臣家歌合、あしの中がき
○久安五年七月山路歌合、雪(松がき)
○題不レ知(よもぎのかき)
○久安五年七月山路歌合、雪

人とはぬ山の垣ほの葛かづらかつ恨みつゝ秋風ぞふく　民部卿爲家
ちはやふる神のあらがき白妙にゆふかけわたす卯の花のころ　同
卯の花のふるの垣根の白雪はふたゝびさくとみゆるなりけり　歌林良材歌　讀人しらず
秋の月白くぞてれる梅原のあをふしがきも色かふるまで　同
此の歌は童蒙抄云日本紀の事代主神の海中に八重のあをふしがきつくりてかへりさりぬ(とイ)といへり
日影おほきすゞの垣根にかくれゐて外より夏をすぐすけふかな　權大納言實家卿
あやひ垣たてへだてたるあなたにてはたおる蟲の聲ぞ聞ゆる　同
五月雨にあひにけらしな夏衣ひとへひがきにかけてほさなむ　藤原忠房
君戀しつもる中垣三とせまでいかでゆるさぬへだてなるらむ　從二位行家卿
梅の花いかで匂ひのもりくらむあしの中垣ひまなきものを　太宰大貳重家卿
あらてくむ賤の松がきはなさきてあな面白の雪のあしたや　藤原顯方
萬代　しげかりし蓬のかきの隔てにもさはらぬものは冬にざりける　好忠
雪ふかき谷のはふやに朝ぼらけあけぞわづらふ柴のくみがき　西念法師
此の歌判者顯輔卿云右の歌はふやとよめるききよからず云々

籬

わが宿のすゝきおしなみふる雪に籬の野べの道ぞたえ行く　後京極攝政

いかなればよもの籬はかれはててなほ冬ごもる深山べの里　前中納言定家卿

山人の籬をかけてすむ庵はからぬましばを籬にぞゆふ　參議爲相

色かへぬまがきの竹のませの内にちよゆひそふる松蟲の聲　西園寺入道前太政大臣

家 あだにゆふ籬の内にとこ夏のおのれふしてや露にぬるらむ　信實朝臣

家 山里に匂ふをみれば菊の花たきとのまがき思ひこそやれ　惠慶法師

家 新千載下 くりかへししま垣の内に花つめばいと(まイ)はかりにもありとやは思ふ　同

此の歌は重之がもとにあをつゞらをこにくみて菓栗などを尾花にまぜてやるとてと云々

ぬれてほす露もちとせを契りおきて玉のまがきにうつす白菊　前中納言爲家卿

新六六 霜おけば一夜二夜にうつろひぬ竹の籬の白菊の花　衣笠内大臣

かこはねどよもぎの籬夏くればあばらの宿をおひかくしつゝ(も家)　好忠

秋はいぬ霧のまがきは霜かれてさてもすむやと問ふ人はなし　寂蓮法師

霜枯のまがきにのこる露や今朝さゝのつらゝと(にイ)結ぼほるらむ　從二位行家卿

○百首御歌

○百首初冬

○嘉元元年民部卿親王家賣千首、籬柴

○寛喜元年御入内御屏風

○光台院二品親王家五十首、籬下菊

○あるやんごとなき所より菊の移ろひけるを出し給へれば

○文永二年詩歌合、何家秋興

○六帖題

○三百六十首

○百首歌、きりのまがき

○建長八年百首歌合、霜がれのまがき

〇六帖題、あばら笆

新六六
我が庵のあばらま垣に柴そへて老らくのこはたちもかくれむ　正三位知家卿

夫木和抄巻第三十一　終

夫木和歌抄　巻第三十二

雑部十四

題

御調　酒　薬　文　硯　筆
太刀　刀　鞘　弓　矢　沓
行縢　杖　鞠　蓑　笠　琴
笛　鼓　鐘　率都婆　金　寶
玉　鏡　甃　枕　筵　簾
櫛　鬘　答簪　火取　挿頭　被麻
志折　標

御調

○六帖題

○寛喜元年女御入内御屏風

○冷泉院御時大嘗會歌

新六二
ゆたかなるなゝつのみちの貢ものうみ山かけて定めおきてき　民部卿為家

秋の田に民のみつぎをそなへても幾年あまり（ルイ）をしねほすらむ　同

くりもとやせたの橋桁たわむまで運びつゞくるみつぎ物かな　元輔

○安和元年大嘗會悠紀方近江國御屏風歌
みつぎ物たえずそなふる東路のせたの長橋おともとゞろに　兼盛

○大嘗會悠紀方御屏風
東路や日つぎのみつぎたえずして雪ふみわくるせたの長橋　皇太后宮大夫俊成卿

○同
さゞなみや志賀の浦より舟出して運ぶみつぎはかちも綟らず　前中納言匡房卿

○同
貢ものはこぶ舟せのかけ橋に駒のひづめのおとぞたえせぬ　同

○永久四年百首、貢調
みつぎ物ひく（に　ひ永久家集）桑まゆの絲をもてくるてもたゆく備へつるかな　俊頼朝臣

○同
あしたづや（あさつまやイ）はださす駒の聲（にイ）たてゝせたのなが橋ひき渡すなり　神祇伯顯仲卿

○同
なかとののひだちの御倉開きあけよけふ貢物をさめみつべく　仲實朝臣

すめらぎの民やすらげくをさむればひまなくはこぶ貢物かな　二條皇太后宮肥後

○六帖題
新六二 はるはまづ貢そなふる國ぶみをさしていくよも君のみぞ見む　光俊朝臣

○同、長歌
萬二十 なにはの宮は　きこしめす　よものくにより　たてまつる
みつぎの舟は　ほりえより　讀人しらず

酒

○詠酒歌イ
萬三 酒の名を聖といひし古のおほきひじりの言のよろしき（さイ）　大納言旅人萬 中納言家持卿

○同
萬三 よるひかる玉といへども酒のみて心をやるにあにしかめやも　同

○同
同 あたひなき寶といへど一つきの濁れる酒にあにまさらめや　同

○同
萬四
古い人ののませるきびの酒やもはらすへてぬきずたまはむ（めすへなし萬）　同

○同
同
あぢ酒を三輪のはふりが祝ひすぎ手觸れし罪か君にあひ難き　丹後大女娘子

○同本
萬八
あぢざけをみわの祝（はふり）が山てらす秋のもみぢのちらまくをしも　長屋王

○同
萬十一
あぢ酒の御室の山に立つ月のみがほしきみかうまのあの音ぞする　人丸

○十分一杯（盃イ）暖於人
あくまでにみてる酒にぞ寒き夜は人の身までにあたゝまりける　千里

○建長[illegible]、[illegible]田、載有[illegible]年 萬[illegible]
なみ衣白きをすゑてさかづきの惠みにゑへる夜半ぞ樂しき　定家卿

○久安百首
竹の葉にまがきの菊を折りそへてはなをふくらむたまの杯　前大納言隆季卿

○九月九日を
竹の葉にうかべる菊をかたぶけて我のみ沈むなげきとぞする　俊頼朝臣

○家集
朝出でてきびの豐酒のみかへしいはじとすれどしひて悲しき　同

○秋の御歌中
この下に積るおち葉をかきつめて露あたゝむる秋のさかづき　後京極攝政

○六百番歌合、重陽宴
春秋に（をイ）とめる宿には白菊をかすみの色にうかべてぞ見る　正三位季經卿

きよみきの理を誰もかたぶけてしひをつみえぬ人はあらじな　俊頼朝臣

此の歌は家集にいはく人のもとにまかりてよもすがらあそびけるにさけなむどのみてしひのありけるをつみなむとしてあるひじりのあやしきことなんどいち〳〵にいひけるついでによめると云々

○思ニ故郷一歌
○題不レ知
○家集、菊
○久安百首
○住吉社三十首
○千五百番歌合
○由來生老死三病長相隨、除却無生忍人間無藥治
○久安三年毎日一首中
○六道生死輪廻心を
○久安百首、金剛夜叉
○家集、不レ見レ文戀（三イ）
○文永六年白河殿七百首、披レ書知レ昔

藥

萬五 雲にとぶ藥はむよはみやこみは賤しきあが身またをちぬべし　讀人しらず

同 我が盛りいたくくだちぬ雲にとぶ藥はむともまたをちめやも　同

長月のきくの下水くみつればおいせぬくすりたれか尋ねむ　權中納言長方卿

尋ねゆく船路にとしのおゆるまであはぬ藥に似たる戀かな　花園左大臣家小大進

君がためよもぎがしまもよりぬべしいく藥とる（かイ）住吉の浦　從二位家隆卿

新後撰賀 浪の上にくすり求めし人もあらばはこやの山に道しるべせよ　寂蓮法師

舟のうちにうき世の岸を放れてやしらぬ藥の名をば尋ねむ　前中納言定家卿

草木まで佛のたねをきざす（かイ）とはたへなる法のくすりにぞしる　民部卿爲家

もとのしのさかの敎への藥あらば（なイ）われ永き世（よイ）に惑ひはてめや　花山院御製

いづかたも心にかなふ藥あらば西をぞつひのすみかにはせむ　花園左大臣家大進

文

年をへ（へイ）てとなりの壁はくづるれど夢にも文をみぬぞかひなき　俊頼朝臣

昔人やいかなる花を結びおきて今も其の世のことを知るらむ　後嵯峨院御製

○六帖題歌、文
ときおける法の文をあはれわがさとり開きてみる由もがな　中務卿みこ鎌倉

○梅本影供百首
朝ごとに文の塵をもうち拂ひいのちありけによをやたのまむ　後九條内大臣

○久安百首
淺からぬ心を文にかきのべてなくるをりにや我をしるらむ　前大納言隆季卿

○六帖題
新六五
いくかへり染めて色こき紅のふみ見しあとも今はたえつゝ　衣笠内大臣

○百首歌
みちの奧壺のいしぶみありときく何れか戀のさかひなるらむ　寂蓮法師

○千五百番歌合
夢との（にィ）み思ひいでてもやむべきに契りし文のなに殘るらむ　小侍從

○六帖題
新六五
武士のやそうぢぶみはかた〳〵に行き別れたる跡ぞみえける　正三位知家卿

○同
同
うたてなど大和にはあらぬから文の跡を學ばぬみとなりにけむ　民部卿爲家

○同
同
はては又しみのすみかの昔ぶみはらへば塵と見るぞ悲しき　信實朝臣

○度々返事侍といふ事を
結びめの違ひて返るたびもあらばみてけりとだに慰めてまし　資隆朝臣

○寄文雜
此の度はみて返しけり手なれつゝひくすみたがふ文のうはがき　前民部卿雅有

○六帖題、ふみ
なにとしてうちとの文を學びけむ卷くものふるも物うかる世に　權僧正公朝

○家集、詠懷百首歌
石ぶみやつがろのをちにありときくえぞ世の中を思ひ放れぬ　清輔朝臣

○六百番歌合、初戀
錦木にかきそへてこそ言の葉も思ひそめつる色はみゆらめ　法橋顯昭

此の歌右方申云にしきぎに心ざしを見せそむるにてこそあれふみなぞふべきことかは左陳云能因がかきたる物に錦木には必すふみをつくる

儀なりと云ふなり

硯

○家集、寄レ硯戀

いつはりの名をのみ立てて逢ひ見ぬは硯の上の塵やふきけむ　源仲正

○洞院攝政家百首、氷

池にすむ鳥のあとさへたえぬらむ氷るすゞりの水莖の末（跡イ）　家長朝臣

○正治二年百首御歌

いさぎよく蓮の法をうつしてぞ鵜も硯の水をそへける　喜多院入道二品のみこ

筆

○家集、くさのほたるを

水ぐきのあとふみならす我ならば草の螢をよそにみましや　憲慶法師

○同、日暗不レ見二小字書一イ

水ぐきのあとを霞の立ちこめてめにたなびくは老の春かな　能因法師

○家集

（新古雜下）水莖のあとにのこれるたま（き新古）の聲いかゞ（とし新古）もさむき秋のころ（聲新古）かな　能宣朝臣

この歌は貫之がかきあつめたる歌をとき文がもとへか（空イ）へすとてよめる

と云々

○貞應三年百首、筆御歌中

さほひめの筆かとぞみるつくづくし雪かきわくる春の景色は　民部卿爲家

○弘安元年百首

長らへて身にぞ知らるゝ筆の海かくまでかたは實にいとまなし　後九條內大臣

○柿本影供百首

わかの浦はおほくの人の筆の海沖にもへにも藻鹽かくらし　同

太刀

○題不知
萬十（つるぎ）たまだちをまきぬる妹もあらばこそよの永けきも嬉しかるべき　讀人しらす

○六帖題和歌
世をはかり人もあらばと武士のつばながしたる太刀もかしこし　中務卿のみこ

○同題歌、たち
伊勢島やみそしの濱の松がねにとし經てたてる太刀もかしこし　權僧正公朝

○同
新六五　からくにのふたつのたちは昔より君のまもりに定めおきてき　衣笠内大臣

○同
同　よの中をおもふ心もほそ（のイ）たちのさやはまろうかつ（まかつらイ）まりはつべき　信實朝臣

○同
同　山深み松のおふてふ岩かねになさめしたちは妹ぞしるらむ　光俊朝臣

○同
哀れにぞいひし契りをたがへじとつかの上までたちをかけける　大納言典侍

○久安百首
はく太刀の鞘はあるべきと思へどもせめて戀（あすかイ）しき物にぞありける　前參議親隆卿

○建保三年名所百首
旅人の草のまくらにおくたちのさやの中山けふやこえなむ　從二位家隆卿

刀

○六帖題、かたな
新六五　何事を思ひけりともしられじなふみのうちにも刀やはなき　衣笠内大臣

○同
同　きてはてず（ぬイ）みはさびはてぬ古刀さすがに世をば思ひたてども　民部卿爲家

○同
同　今は我まろはにとげる小刀のよにつかはれぬ身とぞなりにし　正三位知家卿

○同

（同）やまと歌のこしはなれたる錆刀さもよにたたずきえ（らイ）もなき物（語イ）　信實朝臣

○家集、五十首歌中

手にとれば人をさすてふいがぐりのゑみのうちなる刀恐ろし　權僧正公朝

鞘

○六題、さや

新六五　いまはしもさぞしりぬらむしり鞘のさしも心に思ふ氣色は　衣笠内大臣

（同）つじ祭けふをはれともみせざやのさき折りかけてねるや誰が子ぞ　正三位知家卿

（同）かつは又さす鞘くちにあふひつは心ありけるかなづくりかな　信實朝臣

弓

○文治六年五社百首

羨ましあだちの峯のそりま弓そりはてましを引きかへすらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○貞永六年十首歌合、寄弓戀

狩人のひくやゆずゑのよるさへやたゆまぬ關のもるに惑はむ　前中納言定家卿

○家集、寄レ弓戀

とがりするさつをの弓絃うちたえてあたらぬ戀にやもふ頃かな　信（俊イ）賴朝臣

○家集、寄レ弓戀

別れにしたつかの弓の白鳥をきのかはゆすりこひぬ日ぞなき　同

○久安百首

中々にたつかの弓となりにせば引き止めてもいはましものを　前參議親隆卿

○寛元四年日吉社歌合イ

いかでかは梓のまゆみつるきれておとせぬ人を恨みざるべき　光俊朝臣

○題しらず

まれにみむ君をみむとぞひだりての弓とるかたの眉根かきつる　讀人しらず

○同
萬二　みこもかる信濃の眞弓我ひけばむま人さびていなといはむかも　讀人しらず

○寶治二年百首、[illegible]
こひとのみ（をイ）信濃の眞弓ひきかねて強きなけきはよるぞ苦しき　後九條内大臣

○六帖題、まゆみ
新六五　みこもかる信濃の眞弓おしかへし思ふもくるし君によりなむ　權僧正公朝

○六題、弓
同　いかにせむ信濃の眞弓年をへてなびかぬほどの心づよさを　衣笠内大臣

○同
同　つるなれぬあらきの弓のそり高み借いたづらにひく人もなし　正二位知家卿

○同題、あひおもふ
同　梓弓末までとほすふせ竹の放れがたくも契るなかかな　信實朝臣

○寶治二年百首
手にならすかひこそなけれ梓弓ひけば中のみ遠ざかりつゝ　同

○たはぶれ歌とてよみ侍りけるイ
しのためてすゞめ弓はるをの原はひたひ烏帽子のほしげなるかな　西行上人

○題不知
萬二十 好忠家集　まくらなるを（まゝイ）ふちのま弓見るときぞ君が手風はいとゞ戀しき　讀人しらず

○天仁元年顯季卿家歌合
いかにせむよしきの弓のともすればひき放ちつゝあはぬ心を　琳賢法師

箭

○六帖題
新六五　どいぬればのやにさすてふつの鏑そう（らイ）〳〵しくぞなりにけるかな　民部卿爲家

○同
同　人心たのまれがたき狐矢はたゞ（はイ）そのまゝにまたおと（もイ）ぞせぬ　正三位知家卿

○同
同　今日は皆ゆ（やイ）だちのいての外までもすゞのいたつきこしなれにけり　俊（信イ）實朝臣

○同
同　今いよや弓の心もあらはれて放つやすぢのちがはざるらむ　光俊朝臣

○同
同 空にきくつゞみの聲のなかりせば身に立つ矢をばいかで抜かまし　同

○久安四年百首、草香
峯におへばむ(らイ)おともおちへ草のかう淺き裾野ぞ(にイ)とも矢たばさな　神祇伯顯仲卿

○六帖題
なるやもて鹿とりなびく夏草にうらはずふせてねらふさつをか　僧權正公朝

○家集、矢
きの國の昔ゆみをの手にもたるなるやならずや我が思ふこと　同

○家集、寄二水鳥一戀
我が戀はくるりはながす河の瀬にたちぬるとりのあとはかもな　源仲正

○正治二年百首
あづさ弓とも矢たばさみ諸人のおのがひき〳〵いどむなるかな　源師光

萬七 近江のややばしの篠を箭にかけてまことありとや戀しきものを　讀人しらず

萬一 ますらをの友矢たばさみ立ち向ひいるまとかたはみるにさやけし

行縢(むかばき)

○家集、五月雨
夏野ふむせこが行縢裾朽ちてほすひまもなくさみだるゝころ　源仲正

○戀歌中
よとゝにえこそあはせぬ行縢のかたかはもなき戀をのみして

○六帖題
新六二 たちならす野原の鹿の秋ふけてかたむかばき(きイ)の妻をこふらし　信實朝臣

○題不知
萬十六 すこもしき靑なにもてこうつばりにむかはきかけて休む此の君(めイ)讀　人しらず

沓

○家集、寶治（雲イ）
○千首中イ
○家集
○長歌
○正治二年百首
○六帖題和歌
○同
○同
○建保百首
○寶治八、題
○永久四年百首、賀
○同

山里はにはさへわたるあさ霜を杳すりけちてくる人もなし　源仲正
ふみ分けて誰急ぐらむ九重やとのへにつもる雪のふか杳　民部卿爲家
補中抄 むぐ杯のかさなる上に重なるはいもりのしるしかひはあらじな　讀人しらず
萬十八 庭の間もみえずちりしく（つむイ）木の葉杳はかでもたれの人か來てみむ　和泉式部
とぶとりの　あすかをとこが　そらはれて　ぬひしくろぐつ　さしはきて　にはにたゝずみ　讀人しらず

杖

男山はとの杖にはたづさひぬならさかのぼるしるしあらせよ　土御門内大臣
たらちめの諫めし杖の年をへてよわるはさこそ悲しかりけめ　中務卿のみこ鎌倉
新六四 あはれ我が家に杖つくよはひまで身をながらへて物を（む新六と同）やは見じ去　笠内大臣
新六二 斧の柄はさぞ朽ちにけむ身のうさの（さかイ）我がつら杖のたゆるよぞなき（とも新六）　信實朝臣
いかにしてこのよの闇をてらさまし光あさかの（かさイ）杖なかりせば　俊頼朝臣
山深み杖にすがりている人の心のそこのはづかしきかな　西行上人
つきもせぬ君が齢は幾千代と限れるたけの杖にやあるらむ　二（六イ）條院大進
我が君を（はイ）祝ひこめつゝたけの杖ちとせ（ちイ）かぎるぞ嬉しかりける　二條院皇太后宮肥後

つきもせぬ祝ひの杖は龜山のをのへに行きてきるにぞありける　讀人しらず
○家集

八千代へむ君のためにと神やまの白玉椿卯杖にぞきる　鴨長明
○題不レ知

歌林
鳩のゐる杖にたづさふ身を持ちてこえまほしきは逢坂の關　昌俊
○百首御歌

いかにして鳩てふ杖にかゝるまで君に仕へて此のよくらさむ　慈鎮和尚

散木春
老らくの腰ふたへなる身なれども卯杖をつきて若菜をぞつむ　藤原經業
○七日卯杖にあたりたる日わかなにそへて俊頼のもとへ

鳩のゐる杖に縋りてつみく(ツイ)ればそのしるしさへ頼もしきかな　俊頼朝臣
○返事

鞠

花のえにかけて數ふる鞠の音のなづまぬほどに雨そゝぐなり　慈鎮和尚
○百首御歌

秋の稲のをさまれるよの嬉しきは春の遊びのまりこゆみまで　同
○新

てりもせず風のどかなる夕暮にころ〳〵しるき鞠のかずかな　民部卿爲家
○久安(文永イ)四年毎日一首中

鞠の庭にさくら柳をうつしおきて春は錦にたちやまじらむ　同
○同十一年毎日一首中

蓑

玉
旅なれぬ人にをしへよ雪ふらば蓑うちかへせ吹雪もぞする　權中納言師時卿
○雪中旅行を

ますらをの蓑にささむと澤に生ふるささめかるにも袖はぬれけり　衣笠内大臣
○六帖題、澤

○同、みの
あま衣蓑きていへにいることは神やらひよりいむといふなり　權僧正公朝

○同
旅人の蓑ふきかへすあさあらしに村雨むかひ行きなづみぬる　前中納言爲兼卿

○題不知（山すげみの）
六帖 我妹子が袖をたのめて足曳の山すげ蓑をとらできにけり　讀人しらず

○六帖題、ふかみの
新六五 かち人の野分にあへるふる蓑の毛をふく世こそ苦しかりけれ　民部卿爲家

○同、かくれみの
同 きまほしきよのうき時のかくれ蓑なにかは山のおくも脉しき　信實朝臣

○同
同 隠れ蓑うき名をかくす方もなし心におにをつくる身なれば　衣笠内大臣

○家集、五月雨（さゝめのみの）
旅人のさゝめのみのをきてしより一日ぬがせぬ五月雨の空　權中納言定家卿

○中院入道右大臣家元永元年歌合　五月雨
朽ちにける昔のみの蓑におのづからふる五月雨の程をしるかな　八條入道太政大臣

笠

○堀河院御時百首
ますげよき笠のかりてのわさ蓑をうちきてのみやすぎ渡るべき　權大納言公實卿

○久安百首、みかさ
新六五 みさぶらひみ笠なめしそあさひ山木の下露も今はひぬらむ　季通朝臣

○六帖題
新六五 大みやのみ笠のかげの廣ければあめの下には誰かたのまむ　正三位知家卿

○同（つぼみがさ）
新六五 ふりやまぬ雪まの梅のつぼみがさ思ふ心のいつかひらけむ　衣笠内大臣

○同、袖がさ
同 なにせむに我がさすらし袖笠の下にぞなみだ雨とふりぬる　光俊朝臣

○同、しがらきがさ
同 雨すぐる外山の道のこがくれにしがらき笠ぞみえがくれする　民部卿爲家

○同、すげのあみがさ
○同、やぶれがさ
○延喜十一年京極御見所歌合
○同
○同
○題不知、なにはすががさ
○みのますががさ
○六百番歌合
○六帖題、おほひがさ
○仲實朝臣ことをあたらしく作りてみせければかきならして

同 ますらをの菅のあみ笠うち垂れてめをもあはせず人のなりゆく　衣笠内大臣
同 さりとてもさせる(はイ)ことなき破れ笠ほねを折りてぞ君に仕へし　信實朝臣
まのの浦の小菅の笠をとりもあへずしぐれて渡る淀のつぎ橋　中務卿親王鎌倉
こまなべて君が見にくる春日野はまつがさ繁し雨にぬらすな　讀人しらず
ぬれつゝも雨にはゆかむまつがさは千年の春をちらさざらなむ　同
萬十一 おし照るや難波菅笠おきふるしのちはたが著むかさならなくに　同
萬 みしま菅いまだなへなり時またばきずやなりなむ三島菅笠　同
たれかゆく夏の野(野のイ)草の葉末よりほのかにみゆるみしますが笠　正三位季經卿
世を捨てぬ人の樣かはおほひ笠かけぬばかりはかごとなれども　權僧正公朝

琴

ひきならす聲ぞさやかに聞ゆなるくちにし舟のみことならねど　俊頼朝臣
此の歌は日本紀第十應神天皇五年冬十月伊豆國におほせてながさ十丈の舟をつくらしむ試みに海にうかぶ則ちかろくうかびてとく行く事はしるがごとし故に其の名を枯野といふ輕野とはのちの人誤り也同三十一年秋八月宮船枯野朽ちて用にたたず其の舟の名をたたずして後葉(世へ)に

つたへむとて有司に令其の船材を薪として鹽をやかしむ五百籍なふたり則ち諸國に賜ひて船をつくらしむ初め枯野船を鹽のたきゞにせし日餘燼ありすなはち其のもえざるをあやしみて天皇に獻す琴につくらしむ其の音鏘鏘として遠聆云々

琴のねに水のしらべや通ひけむさもほしがたきけさの袖かな　如覺法師

宋集云此の水のしらべといふ事ないかゞと思ひてねたる夜父の伯夢にいはく水調といふ事あればひがごとにあらずとなむありしと云々

ひく琴のねのうちつけに月影を秋の雪かとおどろかれつゝ　貫之

月影を雪かとみつきひく琴をききてめづとは知らずやあるらむ　同

（新六五）夏くれば東のことのあしつなによりあけてける藤波の花　衣笠内大臣

琴の音のことぢにむせぶ夕暮は毛もいよだちぬすゞの寒さに　俊頼朝臣

寒の色によそへる琴の琴ぢをばつらなるかりと思ひけるかな　仲實朝臣

さよ更けてもののね高くなりぬらし調ぶる琴はことぢあくらし　源兼昌

絲なる玉の緒ごとのことぢかもみれば音する秋の鴈がね　民部卿爲家

昔きく君がたなれの琴なくば夢にしられてねをもたてまし　前中納言定家卿

此の歌判者云左の歌殊なる事なし萬葉に梧桐日本琴夢に娘子に化して

ゆふさりのきあかしてかへりける
あしたに遣はしける

〔天養三年宰相中將家歌合、月に
寄ひく琴よめる

〔同

〔六帖題、こと

〔永久四年百首、箏

〔同

〔同

〔文應元年七月廿一首中

〔六百番歌合、寄琴戀

云「いかにあらむ日の時にかもこゑしらむ人のひざのへわれまくらせむ」といへる歌の心にこそ侍るめれゆゑなきにはあらざるべしと云々

〇色葉四十七首
律（しらべイ）のうたに琴の音あへる夕まぐれ片絲なびくにはの青柳　同

〇六帖題、こと
新六五
我が齡たづか琴ぢの緒あはせのたゞせめにのみせめもゆくかな　實朝臣

〇百首中
あふさかの關のいほ（たイ）りと思ふにも東の琴ぞ身にはしみける　寂蓮法師

〇建保三年名所百首
逢坂のせきの庵の琴のねはふかき木ずゑの松風ぞふく（ひくイ）　從二位家隆卿

笛

〇永久四年百首、笛
あなたけを雲のうへ人ふきたてて春のうぐひす囀らすなり　俊頼朝臣

〇同
吹きたつるふえの調の聲きけばのどけきちりも嵐とぞ思ふ　仲實朝臣

〇同
波の音にたぐへてぞきく墨の江の汀にてきく駒笛のこゑ　源兼昌

〇權中納言家屏風歌集、歌人の家の琴ひき笛ふきてあそびたる所
きく人の耳さへさむき秋風にふきあはせたる笛のこゑかな　和泉式部

〇同
笛のねは紅葉をふくにあらねどもひゞきに枝も動くべきかな　同

〇文永二年七月白河殿七百首
末の世と思ふもわびしよりたけはきりてぞ笛のねをもたてける　嵯峨後院御製

〇每日一新の中
吹き迷ふ紅葉の風のふえのねにたちまふ人の袖かへるみゆ　民部卿爲家

〇六百番歌合、寄笛戀
羨ましわが（袋 許）りこちくの笛の音をたのむる中の人はきくらむ　正三位季經卿

○六百番歌合、寄笛戀

獨り寐をいまはなにか慰まむ鄰のふえも吹きやみぬなり　法橋顕昭

此の歌判者云向子期が鄰人のふえはことばの中に鄰人ふえを吹くもの
あり其の聲寥暁といへども吹きやむゆゑもなきを吹きやめることのあ
るやうにきこゆいかゞと云々

○同

わが戀はまだ吹きなれぬ横竹の音にたつれどもあふ方もなし　隆信朝臣

○同

より竹の君によりけむことぞうき一よの節にねのみなかれて　正三位經家卿

○同

はるばると浪路わけくる笛たけを我がこひ妻と思はましかば　中宮權大夫家房卿

此の歌判云右歌なみぢおほくわけくるふえたけなどいへるおほくなみ
こそわけこしかなどいへる野（部曲イ）典のこゝろにやゐんなるに似たるべしと
云々

○柿本影供百首

（新六五）跡ふりて竹にぞかゝる秋の雲谷にのこれる笛のねもなし　後九條内大臣

○六帖題

（新六五）玉ぼこの道のちまたにふく笛の心ばかりはゆかぬものかは　衣笠内大臣

○同

（同）世の中はうき一節にふく笛のあなむづかしやねこそたえせね　民部卿爲家

○同

（同）ふきたつるとなりの笛の聲高み我が敷妙もちりはらふらむ　正三位知家卿

○同

（新六）みまきのの草かり笛（ゐ新六）のわらは聲あなかまとのみよそへてぞきく　信實朝臣

○同

（同）牛にのりまきのうなゐが吹く笛は深き悟りのしるべとぞきく　光俊朝臣

○家集、高麗山

○洞院攝政家百首、述懷イ

○正治二年百首

○百首歌

○續季卿すゝめける百首イ　堀河院御時百首イ

○文永九年毎日一首中

○弘長四年毎日一首中

○題不し知

○長歌

ふりことるみぎ(右)(かイ)のがくや(樂屋)の高麗笛に打ち合はするはから鼓かも　源　仲　正

笛のねをふきつる人もよるの鶴子を思ふ聲をあはれともきけ　家　長　朝　臣

鼓

君が代はいさめの鼓とりなれて風さへ枝をならさざりけり　土御門内大臣

さよ深き貴船の奥の松風にきねがつゞみのかたおろしなる　寂　蓮　法　師

うちならす人のなければ君が代はかけし鼓もこけ生ひにけり　祐子内親王家紀伊

時うつる法の鼓に打ち添へてたえせぬかねもあるべきをまて　民　部　卿　爲　家

ときもりの雲居の聲をへだてきてかはるつゞみになるゝ山里　民　部　卿　爲　家

萬十一　時守のうちなす鼓うちみれば時にはなりぬあひみぬ(はぬもイ)あやし　讀　人　し　ら　ず

萬二　ゆみとりもちし　みいくさを　あともひたまひ　とゝのふる　人
つゞみのおとは　いかづちの　こゑときくまで　ふきならす
をづゝのこゑも

老いてこそうつべかりけれよゝへても年の鼓の契りありやと　權中納言定頼卿

此の歌は女御どのの御いみはてて七月十五夜彦山の座主の此のとのの
みかどに常不輕(石イ禪イヘイ)つきにきたりけるをのちにききてよめると云々

鐘

花にあかぬ名残を思ふ春の日の心もしらぬかねのおとかな　後京極攝政
○花見侍りけるに日の暮れければ

吹きよわるたえ／＼に聞ゆなり入あひのかねをうづむ山風　後鳥羽院御製
○百首御歌

秋深みしもまつ峯の鐘の音にこゑうちそへて鹿なくなり　中納言兼宗卿
○御歌合、暁鐘

此の歌判者大僧正行尊云右（左イ）歌本文をよまれたるに侍るめりあさましく、遠耳聞きける人かな鹿や鳴くらむなどおしはかられたらばこそあらめ唐朝のかれのおとに日の本のしかの聲うちそへて鳴くなりと侍ればよと云々

ききつもるしもの齢の鐘のこゑ年はふれどもすむ心かな　殷富門院大輔
○百首歌

露霜をおくりむかふるかねの音にその事となくすむ心かな　後九條内大臣
○洞院攝政家百首、述懐

ちかひおく言葉にたがふ夕ぐれはくもりかねたる鐘の音かな　同
○柿本影供百首

霜におくあかつきおきの鐘のねを老の枕にたゝへてぞきく　民部卿爲家
○文暦元年七社百首

きく人のねざめの袖は露けくてをのへの鐘にしもやおくらむ　從二位家隆卿
○百首歌、暁

まぎれつる窓の嵐にこゑとめてふくるをつぐる鐘の音かな　西行上人
○家集

思ひきや大津のかねの浦づたひわがたつ杣にならむものとは　民部卿爲家
○弘長三年毎日一首中

○六帖題
新六一
昨日けふわたくなる鐘のおとにだに猶驚かぬながきよもうし（なイ）　同

○正治二年百首歌（御イ）
ひらまつはまた雲深くたちにけりあけゆく鐘はなにはわたりに　後鳥羽院御製

○同
わくらばにたのむる暮の入合はかはらぬかねの音ぞひさしき　前中納言定家卿

○建保三年内裏秋十五首歌合、旅
ふるさとは遠山どりの尾上より霜おくかねのながきよの空　同

○千五百番歌合
夜をかさね寂しき牀に草枕幾度かねのこゑをまつらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○題不レ知イ
○百首御歌
萩に鹿かやになく蟲こゝろせよ野守（寺イ）のかねのあきの夕暮　慈鎮和尚

○題不レ知
萬四
みな人をねよとの鐘はうつなれど君をし思へばいねがてぬかも　笠郎女

○六百番歌合
入あひの音につけてもまたれしをねよとの鐘に思ひよわりぬ　法橋顯昭

○六百番歌合
あはれをばいかにせよとて入合に聲うちそふる鹿のねならむ　正三位經家卿

此の歌左難云かれとなくて入あひとばかり如何判云右歌入あひばかならずしもかれとすゑずともかれにこそはときこゆらむと云々

○題不レ知
萬代
いたづらにけふもくれぬと入あひにまた廻りあふわが涙かな　慶政上人

○建保三年名所百首
あかつきのかねのひゞきにつくば山人はかけせぬとこの枕に　僧正行慶

○同年和歌所歌合
あらし山ころさへ辛（つら）きねざめかな時だにむせぶ曉の鐘　同

○百首歌、古寺松
ゆふぐれの鐘のひゞきを吹きそへて嵐のやまをおつる松風　從三位家隆卿

○家集、冬歌中
雪ふりてことしもけふに初瀨山あらしのかねの夕暮のそら　同

○遠懷歌
○最勝四天王院名所御障子
○文永二年七月白河殿七百首
○前大僧正慈鎭家障子繪關寺秋を畫きたるところイ
○文永二年白河殿七百首（七月イ）
○源[illegible]正[illegible]十首歌イ
○貞應三年關白百首（題字歌中イ）
○長河驛外失ニ行客一遙嶺嵐中送ニ遠情一
○家集歌とていひける中に
○六帖題
○千首中（歌イ）
○承久二年卒爾百首、無常（ニイ）
○百首、無常

ちかづくときゝけむ鐘もみなせ山おもひやりてや秋は悲しき　正三位家隆卿
みなせ山木の葉まばらになるまゝに尾上のかねの聲ぞ近づく　後鳥羽院御製
ちよふべき龜の尾山のむかひなる鐘の響きはいつもつきせじ　山階入道左大臣
あふさかや杉の下道たちこめて霧にくれぬる入あひの聲（かねイ）　前中納言爲世卿
くれぬとて入あひのかねに宿とへば關路の月にさそふ秋風　前民部卿雅有
あふさかや關の戸こゆる秋風に霧もへだてぬいりあひのこゑ　參議爲相卿
はつせ山入あひの鐘のこゑばかりくもり殘せる五月雨の空　民部卿爲家
定めなき嵐にかはる山かげのくもりはてたる入あひの鐘　前中納言定家卿
雪ふれば高くなりけるすゞか山いかなるしもに鐘ひゞくらむ　前中納言匡房卿

率都婆

新六四 たておきし塚のそとばも朽ちはてて殘る形見の跡はかもなし　衣笠内大臣
定めなきよの習ひこそ哀れなれひをへてまさる野べのそとばに　民部卿爲家
知るしらずこのよ盡きぬるはてなみよ野べのそとばの數に任せて　同
あさぢ原古きそとばに契りおかむ鄕とならば哀れともみよ　寂蓮法師

金

○みちのくよりはじめて金をまゐらせたりける時

萬十八 すめらぎの御代榮えむと東なるみちのく山にこがね花さく　中納言家持卿

○長歌

同 わがおほぎみの　もろ人を　いざなひたまへ　よきことを　はじめたまひて　こがねかも　たのしくあらむと　おほほしく　したなやますに　とりがなく　あづまのくにの　みちのくの　をたにある山に　こがねありと　まうしたまへれ　みこゝろを

○昔みちのくより金はじめてまゐりけるを

さきそめしこがねの花はすべらぎの光を開く初めなりけり　殷富門院大輔

○寄ㇾ金戀

こがねほるみちのく山にたつ民の命もしらぬ戀もするかな　鎌倉右大臣

○建長三年毎日一首中、夢

ふところにうけしこがねの末ひろみ榮え行く（みがくイ）べき光をぞまつ　民部卿爲家

○五行御歌、金

こむよまで長き寶となるなるものは佛につくるこがねなりけり　後京極攝政

○家集、寄ㇾ金戀

我が戀の鐘のみたけのかねならばみろくの代にもあはまし物を　源仲正

○はんれいがちやうなんの心を

捨てやらで命をこふる人はみな千々の黄金をもてかへるなり　西行上人

○六帖題、ことば

心せよいつはり人の言の葉はこがねをけすときくもおそろし　權僧正公朝

○題不ㇾ知

萬十四 ま金ふくにぶのまそほの色に出でていはなくのみぞあが戀ふらくは　讀人しらず

〇戀歌中

（眞玉）まがねふくにぶのまそほの色にだにいくはや人の哀れともみむ　素俊法師

寶

〇三種神寶の心を

神代よりみくさの寶つたはりて豐葦原のしるしとぞなる　從一位教良

玉

〇久安百首

なゝわたの玉にもをらば（緒をばイ）ぬく物を思ふ心をいかでとほさむ　清輔朝臣

〇文永二年中務卿親王家三首歌合　述懐

思ふことといのちばとほせ君に我あふなゝわたの玉津しま姬　法印尊（定）家（爲捨）

〇題不知、續詞花

けふかざす神の忌垣のたまひかけ昔のことを尋ねてぞくる　讀人しらず（象イ）

〇同

（玉緒三）わがたまを君が心に入れかへて思ふとだにもいはせてしがな　忠岑

（新古雜中）水莖のあとにのこれる玉の聲いかゞも寒き秋の風かな　能宣朝臣

〇家集、月を

黄金をもいひけつくちの玉みがく月をばえこそそしらざりけれ　法性寺入道關白

〇永久四年八月雲居寺歌合、露

稲妻の光にまがふ夕露をひかる玉とも思ひけるかな　源兼昌

〇家集、同歌合

たまをもちと（てイ）りうつ山の石よりもあひみることの難き君かな　源仲正

〇家集

石なごの玉のおちくる程なさにすぐる月日はかはりやはする　西行上人

〇家集、題不知

夜ひかる玉を包むと思ひしにあやなく袖の朽ちにけるかな　前中納言道房卿

○長承三年顯輔卿歌合
こひわびて落つる涙の玉ならば手箱の數もつきやしなまし　藤原雅親

○六帖題
新六五 誰もげに手にもつ玉のみえねばやよをてらしてはある人もなし　民部卿爲家

○同
同 たか山の峯に旗鉾われたてゝみがける玉は世の人のため　光俊朝臣

○同
同 古のさづけし玉はわだつうみのしほひしほみち心なりけり　衣笠内大臣

○百首御歌
みさごゐる荒磯浪による玉のありとはみれど手にもかゝらず　順（同イ）徳院御製

○久安百首
水の面にうかべる玉の程もなく消ゆるはよそのものとやはみる　前參議教長卿

○寶治二年百首、寄レ玉戀イ
人心また荒磯のなみのたま緒にもぬかねばとりやはつさむ　信實朝臣

○六帖題、玉を
新六五 和歌の浦に蜑のたもてる玉の緒の永くはすてぬ世にもあはなむ　民部卿爲家

○千五百番歌合
月みればやがてたもとのぬるゝかな心の玉や水をとるらむ　正三位季能卿

○家集
やまとにもまがりの玉と草なぎのつるぎは國の寶なりけり　中原師光朝臣

○題不知
萬二こもりくの萬 かくらくのはつせ少女が手に掛かる玉は亂れていはずかもあらむ（ありといはすやも萬）　讀人しらず

○弘安元年百首、不レ逢戀
誰ゆゑに思ふとはしるはつせめの手にまく玉のおのれ亂れて　民部卿爲家

○群臣御歌合
世にこゆる君がことばの玉はあれど光の底をしる人やなき　前中（大イ）納言爲家

○建長八年百首歌合
衣手にけふぬぎかへる玉の緒のながくもがなや思ふ子のため　從二位行家卿

○當座百首中
寶とはたまをもいはず世のために君を治むるうつは物なり　藤原爲顯

○家集中
島の子が心ゆるさぬ玉のはこあくれどあけぬ物にぞありける　實方朝臣

新拾遺三
人しれぬ思ひの玉のをたえなばなにしてあかぬ數をとらまし　伊勢大輔

○後法性寺入道關白家百首寄玉
此のり（ころイ）はうけてたもてる玉なれば永き世てらす寶なりけり　後京極攝政

○行幸名
萬八
松かげの清きなぎさにたましかば君來まさむか清き濱べに　藤原八束朝臣

○題不知
萬七
わだの原しづく白玉風ふきてうみはあるともとらずはやまじ　讀人しらず

○同
同
底清み雫てふ（しら萬）玉を見まほしみちへにぞつけしかつぎする蜑（くほりちたゞそのりし萬）　同

○同
同
秋風はふき（つイ）てなふきそわたの底おきなる玉を手にまくまでに　同

○同
同
あぢむらのとほよるうみに舟うけて白玉とらむ人にしらすな　人丸

○同
萬六
蜑をとめ玉もとむらし沖つ浪かしこき海に舟出せる見ゆ　讀人しらず

○同
萬七
伊勢の海の蜑のしまつのあくや玉とりて後もが戀のしげらむ　同

○同
萬十三
いぐしたてみわすゑまつる神主のうず玉かげみればともしも　同

○同
萬四
玉ぬしにたまはさづけてかつ〴〵に枕とわれはいざ二人ねむ　坂上郎女

○同
萬七
おほうみの水底てらすあはび玉尋ねてとらむ風な吹きこそ　讀人しらず

○同
萬代
足玉も手玉もゆら（ゆら家）におるはたを君がみきぬにぬいできせむかも　同

○同
わぎもこがうはのたますぢうちなびき戀しき方によるこころ（よれる萬家）かな　好忠

○家集、月
光をやさしかはすらむもろこしの玉つむ舟をてらす月影　清輔朝臣

○釋教
埋れてくまなき玉はあるものを塵をはらはでねがふはかなき（さイ）　同

○家集、寄レ玉聞戀

もろこしにありといふなる夜光るたま／＼人をきゝ渡りつゝ　權僧正公朝

○六帖題

あらはるゝ時こそありけれみよまでは石とてすぎしその唐玉も（拾て）　同

○嘉應元年五年覺智法眼御房歌合

浪よする汀にすだく螢こそうらにかへりし玉とみえける　實昭法師

此の歌判者淸輔朝臣云みぎはのほたるをうらにかへるたまになしたるこそゆゑありてきこゆれと云々

○日吉社五百歌合

よゝをへて玉ゆゑなきし人だにも終にはかくと知られやはせぬ　源光行

此の歌判者俊成卿云左歌たまゆゑなきしとは韓子曰楚卞和得二王璞於荊山一獻レ之（文イ）武王（ナシイ）玉人相曰石也、則左足刖（則）後、（武イ）文王即位又獻レ之玉人相曰石也、則其右足刖後、成王即位和抱二其玉璞一哭二楚山之下一三日三夜淚盡繼レ之以レ血玉人治レ之得レ寶名曰二和氏璧一云此の心に申したかしく侍ると云々

鏡

○六帖題、鏡

幾度も心を磨けますかゞみうらには影のうつるものかは（新六五）　衣笠內大臣

○同

御狩せぬ野守のかゞみ時にあはでうつし心もなく／＼ぞふる　民部卿爲家

○同

みがきなす鏡のおもてあきらけみよもの姿の移らぬもなし　前中納言爲兼卿

○同
○同
○同
○題不知、歌林良材
○千五百番歌合
○嘉元年竹園子百首歌、山陰
○寄鏡
○久安百首
○同
○伊勢國にて、鏡宿歌百續題
○仁安二年八月（俊イ）經盛卿家歌合、月
○題不知、歌林良材
○永久元年十一月定通卿家歌合、氷
○六百番歌合、野行幸

新六五
いかばかり磨きいでけむ秋のふちの水ともすめる増鏡かな　　正三位知家卿

同ほて新六
捨てやらぬ影はづかしきふる鏡さもぞ面はつれなかりける　　信實朝臣

同
曇りなき水の鏡のよにかくに見まくかひある世とこそはきけ　　光俊朝臣

サイ
ひかり草輝く影やきかひけむ白銅のかゞみくもらぬものを　　讀人しらず

さ根こじのさかきにかけし鏡にて君が常磐のかげはみえけむ　　前中納言定家卿

かこ山の峯の榊葉くちせずばかゞみをかけし枝もかはらじ　　參議爲相卿

くもりなき鏡の上にゐる塵を目にたててみる世とおもはばや　　西行上人

いざなぎのますみの鏡手にとりてうみしもしるくてらす月よみ　　實清朝臣

いかにしてよその思ひをしらせまし野守の鏡君は見ずとも　　前參議親隆卿

五月雨にとづるまがねを磨きつゝてる日にみゆる増鏡かな　　能因法師

てる月を波の上にてみる時ぞますみのかゞみ鑄ることゝちする　　祝部成仲

此の歌判者清輔朝臣云右百練鏡の心にや波のうへの月まことに一倒秋
凖水にことならず侍りけむかしと云々

新古戀五
東路の野守のかゞみ得てしがな思ひ思はずよそながらみむ　　讀人しらず

みかりするかりはの清水冰りけりこれやの森の鏡なるらむ　　同

古の野守のかゞみけふみればみゆきを移すこほりなりけり　　寂蓮法師

○家集、寄鏡戀
戀せじといのる御室の増鏡うつりし影をいかでわすれむ　民部卿爲家

○題不知
萬十二 はふりこ（らがイ）は祝ふみ室のますかゞみかけて忍びつ（ぞしのぶイ）ある人毎に　讀人しらず

同 ます鏡たゞめに君をみればこそ命に向ふわがこひやまめ　同

○御集
ひとりねのねやにかけたる増鏡わが身の影をともにだにみむ　後九條内大臣

○家集
六五 うちわびて獨りねたれば増鏡とるとゆめみつ妹にあふかも　人丸

○寄流帶月如瀉鏡イ
こほりわけ流れにすめる月影はたまくしげなる鏡とぞみる　前中納言匡房卿

○家集、戀歌中
見えぬには影やはうつるます鏡うらなる鶴のねをのみぞなく　俊頼朝臣

○御集十首御歌合（中イ）
むかへおくならの社のますかゞみなく／＼頼む影はみゆらむ　後鳥羽院御製

○三百六十首御歌中
山鳥のをだえのはしに鏡かけきよきよわたる秋の月かげ　中務卿みこ

○家集、寄鏡戀
照らすなる玻璃の鏡に罪ふかく忍ぶる戀やかくれなからむ　源仲正

○元日戀
千代までも影をならべてあひみむといはふ鏡の用ゐざらめや　同

○永久四年百首、王昭君
見えばやな見えばさりとも思ひ出づる鏡に身をもかへてけるかな　俊頼朝臣

枕

○題不知
萬十一 敷妙のまくらせし人言とへやそのまくらにはこけおひにけり　人丸

萬四 しき妙の枕をしげる涙にぞうきねをしげる戀のしげ（きイ）さに　讀人しらず

吹くかぜを夢のうちにもいとふかな花に枕を結ぶよな〳〵　宜秋門院丹後

新六五
ますらをも枕を高み安きよにひとりなげきはぬるよともなし　民部卿爲家

新六五
とおける枕ざうしの上にこそ昔がたりの夢はみえけれ　信實朝臣

牀のうへにふるき枕もくちはてて幾らぬ夢ぞ遠ざかりゆく　前中納言定家卿

露しけきよもぎがねやの隙とぢてふるきまくらに秋風ぞふく　寂蓮法師

波のみか苦やの下のうき枕もりきてつきも袖ぬらしけり　嘉陽門院越前

五月雨に山田のあぜのたき枕かずを重ねて落つるなりけり　西行上人

新六二
いまもまたよどのに結ぶこも枕たがにへ人のしわざなるらむ　正三位知家卿

夕されば牀のへさらぬつげ枕いつしかなれるぬしまちがたし（いとゞもきみをまつぞくるしきイ）　人丸

萬十一
ゆひし紐とかむ日遠みしきたへのわが小枕に苔おひにけり　同

はるかなりいく草枕結びてかその下紐のとけむとすらむ　慈鎭和尚

かきすつるあまのもしほの草枕心ぞとまるわかの浦風　皇太后宮大夫俊成卿

幾年になれにしとこのなりぬらむつげの枕も苔生ひにけり　同

見しまゝに牀もはなれぬつげ枕されども人はゆくへやはしる　正三位知家卿

蜑のかるたまもの枕霜とぢてわれからさゆるかたしきの袖　從二位家隆卿

すまの浦やもしほの枕とぶ螢かりねの夢ぢわぶと告げこせ　前中納言定家卿

○千五百番歌合

○六帖題

○同

○[illegible]

○千五百番歌合

○老若五十首歌合、うきまくら

○五月雨歌十五首歌中、たきまくら

○六帖題、こもまくら

○題不知、つげまくら

○家集、こまくら

○六百番歌合、草枕

○文治六年五社百首

○千五百番歌合、つげの枕

○寶治二年百首、つげまくら

○承久二年四季百首、たまの枕

○水無瀨殿御會、海邊見レ螢（もしほの枕）

○六百番歌合、あらしの枕
新後撰旅
ふるさとを出でしにまさる涙かなあらしの枕ゆめに別れて　同

○洞院攝政家百首、旅
こけのうへのあらしの枕山近えて（夢さめてイ）別るゝ月に露ぞこぼるゝ　後九條内大臣

○風のたまくら
六帖題和歌
やどからに蟬の羽衣あきやたつ風の手まくら月のさむしろ　前中納言定家

○六百番歌合、はつほのまくら
花すゝきはつほの枕そのまゝにうらがるゝまでとはぬ君かな　中務卿のみこ鎌倉

○千首歌、こけ枕
よひ／＼にかたしく岩の苔まくら幾秋風の袖になるらむ　民部卿爲家

○建保四年百首、あれ枕
菅原やふしみの里のあれまくらゆふかひもなき草の霜がれ（かなイ）　従二位家隆卿

○家集、冬歌中
よをへて（つゝイ）はうきねの牀のあれ枕をしぞなくなる池の冰に　同

○貞永元年八月十五夜三首歌合、あしまくら
波かくる難波のさとのあしまくら月みむとてや結びおきけむ　藻壁門院少將

○千五百番歌合、いそ枕
月いらばわれもさてやは磯枕旅ねも近ししがの浦浪　具親朝臣

○寶治二年百首、かぢまくら
荒磯のもくづのとこのかぢ枕袖よりほかの浪になれぬる　前大納言忠良卿

○寶治二年百首、袖まくら
五十首歌合イ
せきあへず涙にぬるゝ袖枕かわかずながらいくよへぬらむ　衣笠内大臣

○千五百番歌合
草の葉にしをれはてぬる袖まくら夢やは結ぶよはの白露　參議雅經卿

○五十首歌、花下送ㇾ日（袖のたまくら）
花かげの旅ねのあらしよころへて月ぞなれゆく袖のたまくら　後鳥羽院御製

○洞院攝政家百首、逢不ㇾ會戀、袖のまくら
朽ちにけりかはる契りのすゑの松まつに浪こす袖のた枕　俊成卿女

○雜歌中
曉のねざめのたびにねをぞなく後の世思ふ袖の枕に　光明峯寺入道攝政

○題不ㇾ知、手枕
萬十四
大君のみ言かしこみかなし妹がた枕放れよだちきぬるも　讀人しらず

○家集
○百首御歌、かや枕
○六帖題、枕
○家集、旅歌（かや枕）
○石清水三首歌合、旅宿嵐
○久安百首、こすげの枕
○嘉禎四年百首、いな枕
○九十九首菊歌中（あさての枕）
○ほうの木まくら
○いしの枕
○家集、つま枕
○ゆふ枕（誤）
○家集、金葉
○かへし、金葉

よもすがら物思ふ時の手枕はかひたるさこそ知られざりけれ（なだるさぞ家）（る家）　伊勢

手枕にいれし（な家）かたみと思はずば涙にくだす袖はをしまじ　喜多院入道二品のみこ

新六五
おのづから幾夜をふとも手枕のあかぬ契りにひぢやくださむ　俊実朝臣

秋風に心みだるゝ旅ねかなゆひとめられぬかや枕して　源仲正

かや枕かりそめぶしの寂しきによはのあらしぞ友となりける　法印道清

初鴈のこすげの枕つくりおけるかひこそなけれ妹しまさねば　清輔朝臣

夢とのみふしみの里のいな枕結びしのちのなさけだになし　民部卿為家

あづまやの庭の白菊しき忍びあさでのまくら秋風ぞふく　為実朝臣

六五
みちのくのくりこま山のほうのきの枕はあれど君が手まくら　読人しらず

同
ひとりねの牀にたまれる涙には石の枕もうきぬべらなり　同

萬十
河水にかはづなくなり夕されば衣手寒みつま枕せむ　人丸

かみつせにかはづなくなり夕されば河風寒し夕枕せむ　中納言宗持（誤）

甃

石だゝみありけるものを君に又しくものなしに思ひけるかな　皇太后宮大弐

名にしおはば身もひえぬべし石だゝみ片しく袖に衣重ねよ　俊頼朝臣

此の歌は皇后宮こうきでむにおはしましけるついで西おもてのほそ殿にてたちながら物申しける夜のふけ行くまゝにくるしかりければつちにゐたりけるをみて物をしかせまゐらせばやと女いひければいしだゝみも持つと申すをききてよめると云々

筵

たまゆかのおましのはしにはだふれて心はなぎぬ君なけれども　俊頼朝臣

新六二 道のべにそのゐ（もろイ）かりほす筵うちおのれかつ〴〵しくかとぞみる　信實朝臣

露のしく玉のむしろのとこなつに宿りやすらむ有明の月　爲忠朝臣

あづま野の露のかりねやかや筵みゆらむきえてしき忍ぶとは　前中納言定家卿

ひとよねぬあさでかりほす東屋のかやのこ筵敷き忍びつゝ　民部卿爲家

うちはらふをりもありけり牀の浦の浪にあれたるよはのさ筵　大納言通具卿

とへかしな身もいたづらにさしむしろひとへに戀ふる心長さを　正三位知家卿

あや筵をになるまでに戀ひわびぬ下くちぬらしとふの菅ごも　鎌倉右大臣

こがくれて浪のおりしく（おりけむ萬）谷河のみなむしろにも月ぞすみける　俊頼

み吉野のあをねが岸のこけ筵たれかおるらむたてぬきなしに　人丸

○たがひてあはぬ戀

○六帖題

○長承三（二イ）年六月家歌合、たまのむしろ

○家集、寄レ筵戀

○千首歌、かやのこむしろ

○千五百番歌合

○寛元四年日吉社歌合、さむしろ

○戀御歌中、あや筵

○家集、水上月（みなむしろ）紀

○こけむしろ

いなむしろしきつの浦の松風はもりくるなりぞ時雨ともしる　清輔朝臣

此の歌判者俊成卿云左歌松の風に時雨なまがへてもりくるなりぞ時雨ともしるといへる心はよろしくみゆるな此のいな筵しきつの浦といはむためおけるなるべしとみゆるを此のいなむしろのほんたい（らイ）なおもふにしきつのうらにことよかるべしとこそおぼえ侍られ河ならばなかしかるべしすみよしの松のしたにはいな筵しくべしともおほえ侍らぬなり又いな筵ばかりにてたびの心あるべしともおぼえぬ如何と云々作者云ふいな筵とはたびといふ事にはあらぬにや近人の歌にもたびにかへすはいな筵とやといへり又ふるき式にみなしるせる（かイ）を見られざるにや河にこそあるべけれと侍るはみなむしろなおもひたがへ給へるにやと云々

簾

萬十一　すきたりと許されずとも玉だれの一間にかけ（うイ）てみる由もがな　讀人しらず

新六二　玉だれのこすの簾をゆきかてにいは寐られねど君は通はず　同

へだつれどまばらにあめるしの簾忍ぶ人めのえこそかくれね　正三位知宗卿

○嘉應二（元イ）年十月住吉社歌合、旅宿時雨（いなむしろ）

○題不知

○こすげのすだれ

○六帖題、しのすだれ

○同いよすだれ

同 年をへて世に煤けたるいよ簾かけさけられて身をば捨ててき　光俊朝臣

○百首歌中

詞花戀下 あふ事のまどほにあめるいよ簾いよ／＼我をわびさするかな　惠慶法師

○こもすだれ

かやりびの煙になるゝともすだれ物むつかしきわが心かな　俊頼朝臣

○六帖題、玉簾

新六二 たえはててふりぬる宮の玉簾とに（こ新六）だにみえずなりにけるかな　衣笠内大臣

○同、あしすだれ

新六二 すくもたく難波少女か蘆すだれよにすゝけたる我が身なりけり　民部卿爲家

○同

同 世の中のはてはすゝけの葦すだれあしくかけけるわかの海かな　信實朝臣

櫛

○御集、櫛を古來歌合

とり櫛も猶みたびこそおかれぬれ誰を待つともなき身なれども　後一條入道關白

○戀御歌中、ゆつのをつぐし

明玉 我妹子がゆつのつま櫛さしもやはつれなき人を思ひわたらむ　後鳥羽院御製

○六帖題御歌、つげのつまぐし

をとめごがつげのつま櫛さしもなどうき世の中に心ひくらむ　中務卿みこ

○同、さしぐし

新六二 明け暮れてさし櫛もなくなりにけりたけふのせうのとるとせしまに　衣笠内大臣

○同

同 君におきてみせむと思ひしさし櫛をあした夕に誰かとりけむ　民部卿爲家

○家集、物へゆく人にさしぐしの宿にかきてつかはしける

さま／＼に神をぞ祈るさし櫛のさしはなるゝが心細さに　和泉式部

○六帖題、つげのをぐし

新六五 逢ふ事をとふや夕けの占まさにつげの小櫛もしるしみせなむ　信實朝臣

○建長八年百首歌合、つげのさしぐし

あふことをつげのさし櫛さしもやはあだなる夢に心引くべき　後九條内大臣

心をばなにゝおきてか白露の玉のを櫛をさして見すらむ　　少將內侍

○とうの治部卿にくしを遣はすとこ人にかはりて、玉のをぐし

［新後拾哀傷］行方なき玉のを櫛をかたみにてなほそのかみを忘れわびぬる　　前大納言忠良

○なき人の櫛をみて

君にやるかたみの櫛はわかれぢの神にまかせて新れとぞ思ふ　　能宣朝臣

○かたみのくし

［萬四］少女子が玉くしげなる玉櫛のめづらしげなく妹に逢はずあれば　　大伴郎女

○題不レ知、たまぐし

［萬三］志賀の蜑のめかり鹽やきいとまなみ櫛げの小櫛取りもみなくに　　石川少郎

○をぐし

髮

［新六五］末永くたのみしかども玉かつらいかなるすぢにかけ放れけむ　　民部卿爲家

○六帖題

［新六五］年ふともよもたえはてし玉鬘結ぶくみめのながき契りは　　正三位知家卿

○同

花鬘あかもの裾にくりためて花ふく妹をふれずはやまじ　　俊頼朝臣

○不レ逢戀の心を

あけにけりかざして出づる山鬘人もみるべき光ばかりに　　前中納言定家卿

○一字百首

いかにしてしらせ初めまし小山田のはつほの鬘露かゝりとも　　民部卿爲家

○百首中歌

ふる雨の傘のかりてのわさほ（をイ）もてなせるかづらにかくる白玉　　同

○弘長三年毎日一首中

［萬八］我妹子がわさと作れる秋の田の早稲穂の鬘見れど厭かぬかも　　中納言家持卿

○家集

［新六二］今は早秋近からし小山田のわさほのかづら末なびくまで　　衣笠內大臣

○六帖題

笭（かた）箐（み）

○六帖題
新六五 磯菜つむ蜑少女等がはながたみうらはの浪も影やそふらむ　衣笠内大臣

○同
新六五 おのかづらかたみにもらぬ水はありて命の止まるよやなかるらむ　光俊朝臣

○正治二年百首
賤の女がかたみの底は空しくておいぬ若菜に日數をぞ摘む　源師光

火取

○六帖題
六五 たき物のこのした煙ふすぶともわれ獨りをばしらすべしやは　讀人しらず

○同
同 この下にひとりやわびしたき物のなれも思ひにたえずとかきく　同

○六帖題
新六五 たきもののくゆる煙の下むせび我一人とや身をこがすらむ　民部卿爲家

○同
新六五 たき物の獨りのおきのいきながら灰まぎれてもよをすぐすらむ　正三位知家卿

○同
新六四 諸人のとるや火取のさきだてば登るをとめのかこそしるけれ　光俊朝臣

挿（かざ）頭（し）

○家集、祝歌中
敷島やみわのひはらも萬代の君がかざしとをりやそめけむ　從二位家隆卿

○六帖題
新六四 左り藤みぎさくらとてとりなれしかざしの花も昔なりけり　衣笠内大臣

〇同
同　うきことにゆき隠れてもみてしかな山の茂りにかざし／＼て　正三位知家卿

〇同
同　ことに出でて時の花をもかざしこしきさらぎ八月いつか忘れむ　光俊朝臣

祓麻

〇同題、ぬさ
新六四　今ひとあいもをみむろの神にこそぬさとりむけて祈り渡らめ　衣笠内大臣

〇同
新六五　今は我すてられながらあさぬさの君がてなれし時ぞ戀しき　民部卿爲家

〇同
新六四　浪たつるぬさの追風はやければまかぢしげぬきわたる舟人　光俊朝臣

〇洞院攝政家百首、旅
このもりの紅葉の錦たてながら道のたよりにぬさたてまつる　家長朝臣

〇爲家卿家百首
けふの日はぬさよくまつれ船人のかとりの沖に風むかふなり　從二位家隆卿

〇文治六年五社百首
逢坂の關もる神にたむけせしぬさのしるしは今宵なりけり　皇太后宮大夫俊成卿

〇ぬさイ
萬十三　すべかみにぬさとりむけて我こえむゆき逢坂の山とわかるな　人丸

〇同
六四　土佐日記　新千　わだつうみの千尋の底に手向するぬさの追風やまずおかなむ　讀人しらず

〇同
同　續之集　そめたちて祈れるぬさの思ひとはたむけの道の神やしるらむ　同

〇同
萬十一　たつぬさの我が思ひをばたまぼこの道の奥ごとに神もつけなむ　同

〇題不レ知
萬十一　あはなくにゆふけをとふとぬさにきりわが衣手は又ぞつくべき　同

〇從二筑紫一上二京時
萬四　千早ふる神の社にわがかけしぬさはたばらむ妹にあはなくに　土師宿禰水通

志　折

○喜多院入道二品親王家五十首、旅

旅衣あかつき露に袖ぬれていくしをりしつしらぬ山路に　野宮左大臣

○同五十首、述懐

花ゆゑになれし心や吉野山そむかむ道のしをりなるべき　正三位季經卿

○正治二年百首

柴の戸のあとみゆ（るイ）ばかりしをりせよ忘れぬ人のかりにもぞとふ　前中納言定家卿

○旅歌中

みわの山杉の技折をしるしにてたつきも知らぬかけぢをぞゆく　俊頼朝臣

○六帖題、しをり

新六六　いくしをりしばのさ枝は分け過ぎてはては及ばぬ奥のみ山木　信實朝臣

○後鳥羽院御時御撰十首歌合

しをりしてならひにけりな里人のかへる山路にいづる月影　如願法師

○喜多院入道家五十首歌、旅

夕暮は雲にしをりの道たえて名をだにきかぬ鳥の一聲　寂蓮法師

○百首歌、旅戀

かりにゆふ菜も雪にうづもれて尋ねぞわぶるもずの草ぐき　前中納言定家卿

標（しめ）

○百首歌

永き世のためしにひかむ鈴鹿河こえていつまのわらたひのしめ　從二位家隆卿

○建保二年内大臣家百首、寄二名所一戀

續拾戀一　葛城や高間の山にさすしめのよそにのみやは戀むと思ひし　同

○光臺院入道五十首歌

小波や山にしめゆふ人はなしつりする蜑やゆきにいづらむ　從三位行能卿

○寄レ墻述レ懐

今はげに神のいがきもこえぬべく思ひつゞくるやへのしめ繩　大納言雅忠卿

（家集
あさぢ原をのにしめゆひ契るともいつはり人をいかゞ頼まむ　従二位家隆卿
萬七
（題不知
淺茅原をのにしめゆふ空ごとにいかなりといひて君をまつらむ　讀人しらず
同
（同
山高み夕日かくれぬあさぢ原のちみむためにしめゆはましを　同
萬十二
（同
春日野にあさでしめゆひたためやと我が思ふ人はいやとほなかに　同
六五　萬十九
（しめ
君に似る草と見しよりわがしめし野山のあさぢ人なかりそも　中納言家持卿
同　萬七
（題不知
思ひあまりいともすべなみ玉だすき雲ゐる山にわれしめ結ぶ　讀人しらず
（うねびの山にわれはしめゆふ萬）
紀の國の室のはやわせひてずとも標をばはへよもると知るがね　同
六五　萬二
〇しめ
片引り岩ねを清み晉のねのひけばかたしとしめのみぞゆふ　中納言家持卿
同　萬三
（同
山ぬしはけだしありとも我妹子がしめ結ばむを人とがめやも　大伴駿河丸
萬二
（題不知
遺れゐて戀ひつゝあらずばあひしかむ道の隈わにしめゆへ吾が背　但馬皇女

夫木和歌抄巻第三十二終

夫木和歌抄 巻第三十三

雑部十五

題

衣　裳　袴　袋　紐　帯
綾　錦　綿　布　絲　機
櫃　斤　車　樋　筏　船付梶楫
綱　縄　緒　網　魚簗

衣

○六帖題
新六五
山影の櫻あさもておる心花のたもとの名をやたつらむ　民部卿爲家

○同
つかふとて著しや衣のさかさまに年はゆかなむ今になるやと　同

○文永二年七月白河殿七百首
さかさまに夜半の衣を急ぎつゝ君につかふる身をばやすめず　前大納言爲氏卿

○六帖題
さかさまに著るや衣のとしもへぬつかふる道に急ぐならひは　前中納言爲家卿

○建長七年顯朝卿家千首中
すつる身の衣をなにゝたとへまし山路の苔のなき世なりせば　光俊朝臣

○擣衣驚聽
古來歌
ふく風に聲うらむなりまくずもておれる衣をたれかうつらむ　同

新六一 雪ふりてたけのよごとの寒けきに許す衣のみへやきてまし（よ新六）　光俊朝臣

古來歌 あさかほにそめし衣をぬぎしより常なき世とは思ひしりにき　前中納言定家卿

新古哀傷 ほしあへぬ衣の暗にくらされて月ともいはずまとひぬるかな　道信朝臣

うすはだにおれる衣は夏きても春のかけつゝをしまれしかな　惠慶

急續 神中十五 かしは木のゆはた染むてふ紫のあはむあはじは衣の心も（ゾイ）　讀人しらず

逢ふ事はわかけよそひの衣なれや年はゆけどもさせる日もなし　藤原季通朝臣

人しれずすりはこのまず陸奥の忍ぶのもぢもなにゝかはせむ　前參議親隆卿

古來歌 賤のめがつま木とりにとあさをきていろ／＼衣袖まくりしつ　讀人しらず

萬代 かくてしも世をやつくさむ山鳥のはつかり衣くちはてぬとも　後久我太政大臣

紫のはつしほぞめのにひ衣ほどなく色のあかれとぞ思ふ　清輔朝臣

萬十四 つくばねの新桑まゆの絹はあれど君がみけしの綾にきほしも　讀人しらず

萬十六 さにづらふ　色になづける　むらさきの　錦の衣　すみのえの　とほざとをのの　まはぎまで　にほらしききぬに　同

新六五 あさましや賤がいもとのとき衣ふみあらはれば人もこそしれ　民部卿爲家

萬十一 とき衣の思ひみだれてこふれどもなど汝が故ととふ人もなし（ナシイ）　人丸

新六五 世の中にうき濡衣の機はりはのべもしらしめもせられやはせむ　信實朝臣

○六帖題
○夫木影供百首
○服なる女のもとへ月あがき夜のつき日
○家集
○衣をよめる歌に
○久安百首
○同百首名歌（すゞりばこ）
○返抄物中、いろ／＼衣
○建保四年院選庚申久縫（はつかり衣）
○院信朝臣四品して今日悦びにつかはしたる言葉、にひ衣
○題不ㇾ知（にひくはまゆのきぬ）
○長歌、にしきの衣
○六帖題、とき衣
○家集
○六帖題、ぬれ衣

○同、をみごろも
（同）梅がえの一しほずりのをみ衣色こきよりも目にぞたちける　同

○長久二年四月、土
年をへて日かげにみれどをみ衣するめ（リカ）ごとにも珍らしきかな　讀人しらず

○堀河院御時百首
をとこ山かざしの花も春なればをみの衣もはゆるなりけり　仲實朝臣

○家集
八少女のをみの衣のゆかしきはなれぬほどをば誰か忍ばむ　伊勢

○同、寄レ衣戀
唐衣ふぢのまろ屋はあやにくに重ねもあへずぬぎすてゝこし　俊頼朝臣

○同、かり衣
かり衣ほやの綾すりうちはへてあけのゆひひも結びしてけり　同

○六帖題
（新六五）かりごろもわくる野原の柴ずりにうつろふ露の色ぞみだるゝ　正三位知家卿

いろ〳〵の柳櫻のかりごろもたちましろひし春をぞおもふ　衣笠内大臣

○天仁二年四月師時卿家歌合、寄レ衣戀
我が戀は賤のかり衣おのが身にあはぬことをも嘆きぬるかな　源顯國朝臣

○同、かたみの衣
（萬四）下にきるかたみの衣あはぬ間に袖やくちなむ涙ほしあへず（ぬイ）　寂念法師

○題不レ知
（萬四）わがせこが形見の衣つまど（ごイ）ひにわが身はな（さけ萬）たじ言とはずとも　讀人しらず

○詠二仙人形一（かは衣）
（萬九）とこしへに夏冬ゆけや皮ごろもあふぎはなたず山にすむ人　同

○六帖題
（新六五）山ふかくおこなふ道のかは衣よものかせぎもきてなれにけり　民部卿爲家

○同
（同）谷ふかくかはの衣に身をかへてうき世へだつる雪の山人　光俊朝臣

（同）わさづのをかたみかけたる皮衣けふのみあれを待ち渡りけり　衣笠内大臣

○同題歌、かは衣
なにかいとふ霜夜やつねの皮衣けむづかしとてぬぎも捨てぬに　權僧正公朝

○寶治二年百首、寄裘衣
○嘉元元年仙洞百首、月照山雪（かひのけ衣）
○人家百首
夫イ
○文永七年五月十日中務入道右大臣家歌合、旅（たまきぬ）
○六ノ題和歌、たま衣
○弘長元年百首、袖つき衣
○建保三年名所百首、月の衣
○題不知（つるばみの衣）
○三、鷹狩中、ねずりの衣
○三百六十首中、ねごろも
○百首歌中（なれ衣）
○建長三年九百番歌合、月催涙、濃の衣（うすぞめ衣）
○題不知
○三百六十首中、うすら衣
○詠衣歌（うづらの衣）
○信成卿北野會にて、旅浦嵐（うらわけ衣）

なれ／＼しとこはふるきの皮衣君きまさねばあたら寒けし　正三位知家卿
月影にかひのけ衣きらすかとみればしらねの雪にぞありける　太宰大貳重家卿
ふり積る白根の雪はいなをさのかひの毛衣ほすとみえけり　前大納言隆季卿
こひわぶる涙の袖をあぢきなく玉の衣とひとや見るらむ　神祇伯顯仲卿
袖をだにひきもとゞめず玉ごろもたま／＼きては急ぐ君かな　中務卿のみこ
秋萩はうつりにけりな宮人の袖つきごろも色かはるまで　前大納言爲氏卿
白妙の月の衣手かたしきてねぬ夜あまたのうぢのはしひめ　從三位行家卿
つるばみの衣ときあらひまつち山昔の人になほしかずなり（けイ）　讀人しらず
みかりするかきのねずりの衣手に亂れもとろにしめるわが戀　大納言經信卿
わぎもこがさ夜のね衣かさねきてはだへを近みむつれてぞぬる　好忠
てもたゆくしぼる涙になれ衣なれぬ人ゆゑ袖やくちなむ　安嘉門院四條
うき人に涙のころもひきかへしやどすとかたれ袖の月かげ　民部卿爲家
紅のうすぞめ衣あさはかにあひみる人にこふる頃かな（萬十二）　人丸
せみの羽のうすら衣になりゆくになどうちとけぬ山時鳥　好忠
今もなほ野となる里に誰すみて秋はうづらの衣うつらむ　從三位廣範卿
夕あらしうらわけ衣ふきはらへもしほの煙そでにたなびく　從二位家隆卿

○六帖題、のりの衣
○三十首歌、旅宿（雪の衣）
○百首歌、殘雪（やなぎの衣）
○題不レ知（やしほの衣）
○同
○家集、ふる衣
○天仁三年四月師時卿家歌合、寄レ衣戀、ふぢ衣
○貞應二年當座百首、初戀
○寛元四年日吉社歌合、ふかぞめ衣
○六帖題和歌、雜戀（まだら衣）
○題不レ知
○こけ衣
○千首歌
○中務卿親王家五十首歌合 忠イ
○法眼定忍にあひて侍りし時大峯の物語せしを聞きてよめる（こけおり衣）
○元永元年六月八條太政大臣家歌合、夏月、判者修理大夫、氷の衣

ときおきし法の衣をわがものとあらそひてひく夢もまさしや　権僧正公朝
かへすとも雲の衣はうらもあらじ一夜夢かせ峯のこがらし　従二位家隆卿
松の上に降るしら雪も春たてば柳のころもほすかとぞみる　六條院宣旨
萬十一 唐あゐのやしほの衣あさな〳〵なれはすれどもまし珍らしも　讀人しらず
雲葉 續古戀四 かくばかりありける物を紅のやしほの衣なににそめけむ　亭子院御製
萬十一 ふるごろもうちすつる（すてイ）人は秋風のたちくる時に物思ふものを　人丸
あびきするたてし（かイ）のあまのふぢ衣なにの爲にか袖はひづらむ　仲實朝臣
とはばやな汐くむあまの藤衣おもひたつより袖はぬるやと　民部卿爲家
けさはまた露をかこちて月くさのふかぞめ衣かへるつらしな（べきかなイ）　正三位知家卿
うき戀はまだら衣のとにかくに一色にやはそでもぬれける　中務卿のみこ鎌倉
六五 萬七 今つくるまだら衣の面影にわれにおもほゆあまたきねとも　讀人しらず
こけ衣ちふ串もよみふ串持てこのをかに菜つむす子かいへさけ　雄略天皇御製
えぞそめぬ身を奥山のこけ衣思へばやすき世とはしれとも　民部卿爲家
山深き谷のかきほの苔ごろも露けきほどもたれかきてみむ　左兵衛督教定卿
すゞかけの苔おりきぬの古衣をてもこのもにきつゝなれけむ　鎌倉右大臣
夏のよの峯さへわたる月かげにこほりの衣きぬ人ぞなき　源仲正

○題不知（あまごろも）

ことしゆくにひしまもりが麻衣かたのまよひは誰かとりみむ　讀人しらず

○六帖題和歌、あさ衣

逢ふことは新島守が肩にきる麻のころものまどほなれとや　中務卿のみこ

○六帖題

賤の女があづまからげのあさ衣ふたまたかしはさぞわたるらむ　信實朝臣

○建保三歌十首歌合、秋霜　仁政　年イ

ゆきあはぬかたのまよひに霜ぞおく新島守かあさのさ衣　大納言通具卿

○長歌

萬九　かつしかの　まゝのてこなか　あさぎぬに　あをふすまきて　ひたさをを　もにはおりきて　蟲丸

○六百番歌合、寄雨戀

下とほる涙に袖もくちはててきるかひもなきあま衣かな　法橋顯昭

○六帖題、あはせ衣

新六五　少女子があはせ衣のかくれづまうすき契りにうらみわびつゝ　衣笠内大臣

○題不知、或抄中

六三　須磨の浦に玉もかりほすあま衣袖みつしほのひる時やなき　讀人しらず

○家集、戀歌中

浪かゝくあまのさ衣袖をなみうらみありともなにをしぼらむ　從二位家隆卿

○家集、きごろも

秋霧のたちぬるけから心あてに色なき風のきごろもにしむ　好忠

○久安百首、きそのあさぎぬ

さらしなやきその麻衣袖せばみ著たるかひなし胸しあはねば　前參議親隆卿

○堀河院御時百首、祝、ゆはたの衣

君がためゆはたの衣をとりしでてかみにぞまつる萬代までに　修理大夫（顯季卿）

○二所へまうでたりし下向に春雨のいたくふりけるに（みちゆき衣）

春雨はいたくなふりそ旅人の道ゆきごろもぬれもこそすれ　鎌倉右大臣

○題不知（しろあさ衣）

六五　拾遺上　萬七　とにかくに人はいふともおりわかむわがはたものの白麻衣　人丸

○しろたへごろも

萬十　君にあはず久しき時はおりきたるしろたへ衣垢つくまでに　同

○百首歌
なれもきぬ白妙衣かけほすは夏のかきねのあるじなりけり　殷富門院大輔

○正治二年百首御歌（しばずり衣）
新千旅 いはねふむ山のたつきの夕されば柴ずり衣うちしをれつゝ　第三のみこ

○建保五年歌合、冬夕戀（しのの衣）
草枕しのの衣の夕しぐれいかなるいろをわきてそむらむ　權大納言忠信卿

○建保四年内裏百首歌合、秋歌（しもの衣）
白妙の霜のころもをうちわたすをちかた人や袖にしるらむ　光明峯寺入道攝政

○同五年歌合、冬夜戀
消えわぶる霜の衣をかさねても見る夜まれなる夢のかよひぢ　後久我太政大臣

○光明寺入道攝政歌合、行路見戀（しのぶの衣）
しられじな忍ぶの衣ゆきずりの人めばかりに亂れわぶとは　從二位家隆卿

○家集、戀歌中
うつりふし心の色にみだれつゝ獨りしのぶのころもへにけり　同

○弘長元年百首（しほなれごろも）
すゞか川誰が名をたてていせの蜑の鹽馴衣ふりすててけり　民部卿爲家

○六帖題
新六五 あまのすむまがきの島の波の間に鹽燒衣かけてほしつゝ　正三位知家

○題不知（しほやきぎぬ）
萬三十一 須磨の蜑のしほやき衣の藤衣ま遠にしあればいまだ著馴れず　讀人しらず

○毎日一首中
からき世にさてや慰む方やあらむ鹽燒衣の間どほりなせば　民部卿爲家

○寛喜元年女御入内御屏風（ひとしほ衣）
山あゐのひとしほごろも色そへてかざしに匂ふ花櫻かな　常磐井入道太政大臣

○ひと花衣
月草にそで（つゆ）をすりませむ秋萩のひとはなごろもいろふかくとも　後九條内大臣

○永仁三年内裏御會（もしほの衣）
くみぬらす藻鹽のころもふきほさで風のみせたる浦の月影　爲實朝臣

○すゞかけ衣
みよしのの苔路をつたふ山ぶしの鈴かけごろも露にぬれつゝ　衣笠内大臣

○三百六十首中（すみやき衣）
冬山のすみやき衣なれぬとて人をば人のたのむものかは　好忠

〇建仁元年十五首、寄レ衣戀（すり衣）

みしかけよさてや山藍のすり衣みそぎがひなきみたらしの波　前中納言定家卿

〇三百六十首中（すゞみ衣）

さくら波たちておりつる水のあやは夏の河原の涼み衣ぞ　好忠

裳

〇六帖題

新六五　我妹子が綺裳のひきこし長き夜をかけてぞ契るあかぬ餘りに　衣笠内大臣

〇同

同　引きかけて思ひなよりそあから裳のあから樣にも人しりぬべし　民部卿爲家

〇同

同　たをやめはうは裳ぞ結ぶ薄色のうすきを夏のしるしとや見む　正三位知家卿

〇同

同　たがためも長き契りを我妹子が上裳のこしのためしにぞ引く　信實朝臣

〇久安百首

衣手ぞさえ渡りけるあられぢは我が裳のこしにきればなりけり　郁芳門院安藝

〇家集、人の裳き侍るに

後拾遺賀　住吉の浦のたまもを結びかけて渚のまつのかげをこそ見め　元輔

〇宰相もとすけの朝臣の女のもぎ侍りしに

結びあぐる君が玉裳のひかり見ばさやけき月の影ぞ添ふらむ　同

袴

〇題不レ知

まふくたか修行に出でし片袴我こそぬひ（ふれイ）しかその片袴　行基菩薩

〇三百六十首中

あやめふく賤のさばかまぬれ〳〵も時にあふとぞ思ふべらなる　好忠

〇六帖題、おほたかがり

降る雪におちくさとむる犬かひの皮の袴はみるもおそろし　權僧正公朝

袋

○家集
袖みれば嬉しきものをつゝみたる袋かへしつかけてのみ見む　和泉式部
此の歌或所にきちやうのかたびらいれてまゐいらせたればふくろかへさせ給へるに

紐

○同
貫之集　六五
あけたては松さす紐の絲よわみたえてあはずば猶やみだれむ　貫之

○題不レ知（かたひも）
萬十一　六二　同五
かぎりなく人はいへどもこま錦我が片紐も結びあへなくに　讀人しらず

○寄二見物一戀（あかひも）
忘れずやかざし花の夕ばへもあかひもかけしをみの姿は　大納言經信卿

○題不知（はゆたのひも）
萬代　續後拾戀二
逢ふことは片結びするわぎもこがゆはたの紐よいつかとくべき基　俊

○俊忠がもとにて、戀十首歌
心みよゆはたの紐をときそめて深くしみなむ色はかはらじ　殷富門院大輔

○堀河院御時百首（錦のひも）
やとせまで錦の紐をむすばせてけふぞはじめて心とけぬる　權大納言公實卿

○同
わくらばに錦の紐のとけぬればうらなき物はよはのさごろも　前中納言匡房卿

○寛元四年十禪師歌合（はなのひも）
色みゆる人の心の花のひもはやもとくるやした裳なるらむ　信實朝臣

○六帖題
新六五
あひがたき八巻の法の花のひも結ぶ契りはむなしからじを　衣笠内大臣

いつか又とけてもあはむ我がせこが紐さす許り夜はなりにけり　光俊朝臣

帯

下帯のゆひ迷はせるゆきもこそ（あはすイ）みじかかりける我がすぐせかな　俊頼朝臣

なぞもかく分れそめけむ常陸なるかしまの帯の恨めしのよや　同

常陸帯のみちの奥なる遠妻にゆきめぐりてもあはむとぞ思ふ　基俊

我が戀は神にいのれるひたち帯の結ぶかごとを頼むばかりぞ　第三のみこ

常陸帯のとけよと祈る宮めぐりまづゆきあひの契りかもせむ　信實朝臣

年ひさにゆはたの帯をとりしでて神にぞまつる妹にあはむと　修理大夫顯季卿

紫のこぞめのおびの片むすびとけぬる夜の限りしらせみ　洞院攝政

冬くればほそ谷川にこほりしてたまのおびするきびの中山　權大納言實家卿

谷川のこほりの帯やむすぶらむ音こそきかねきびの中山　西園寺入道太政大臣

千戀二　ときかへしゐでの下帯ゆきめぐりあふせうれしき玉河の水　皇太后宮大夫俊成卿

露ぞおくゐでの下おびさばかりも結ばぬのべの草のゆかりに　前中納言定家卿

新六五　いまさらにむすぶ契りもたのまれず人に解けけるゐでの下帯　民部卿爲家

すゑにだにめぐりあはなむ山城のゐでの下おび契りたえずば　中務卿のみこ

○百首歌合

○家集、寄レ帯戀（したおび）（下イ）

○常陸守つねかねが下りけるにつかはしける（かしまのおび）

○題二遇人一といふことを（ひだちおび）

○正治二年百首

○寛元四年十禪師宮歌合

○家集、戀歌、ゆはたおび

○三十首歌合、寄帯戀、こぞめおび

○家集、たまのおび

○綱集

○後法性寺入道關白家、初逢戀（ゐでのしたおび）

○光明峯寺入道攝政家歌合六首歌中、行路見戀

○六帖題

○同題補歌、帯

○同
山城のゐでの下帯いくよへて結ぶちぎりの哀れしるらむ　讀人しらず

○弘長百首、初鴈(くもの下おび)
山もとのくもの下帯ながき世に幾むすびして鴈もきぬらむ　後九條内大臣

○六帖題(かけおび)
新六五 をりしもあれえやは心をかけ帯の思ひは胸のへだてなるべし　信實朝臣

○同(石のおび)
思ひきや我が身しづめる石の帯のうはてに人をかけてみむとは　光俊朝臣

○題不レ知(しづはたおび)
萬十一 いにしへの賤機帯をむすびたれ誰といふとも君にはまさじ　中納言家持卿

○家集、寄レ菊戀(菊の花おび)
君やさばひら緒の下にほの見えて殘りゆかしき菊の花おび　源仲正

綾

○奈良歌合
くれはとり二むら山をきてみれば目も綾にこそ月はすみけれ　俊頼朝臣

○家集
新六五 うらもなく今はひとへに我妹子が袖みそめけむくもとりの綾　修理大夫顯季卿

○六帖題(綾)
吹き拂ふ風に漂ふくもとりのあやしや(うイ)うきて世を過ぐる身は　民部卿爲家

○同
人の國に織るてふはとり傳へても怪しやいかにこゝにしもきる(く拾)　前中納言爲兼卿

○同
土にひく春の衣の一かさね千々のこがねの數にまされり　權僧正公朝

○家集、木のまの月おもしろきをみて
庭のおもぞ夜るの綾とはなりにける木の下陰の月のまに〳〵　能因法師

○六帖題御歌(あや)
江のみなみ春ゆく水の色ふかくそめし衣手あやに著まほし　中務卿のみこ

錦

みぐるまのにしきの紐をとけむとき君も忘れよ我もたのまじ　讀人しらず
春の夜のあかぬわかれの曉は千重に錦をたつにまされり　同
新六五 吉野に又もかへらば後の世にちへの錦を著てもなにせむ　正三位知家卿
同 夢にみし夜のにしきのたまくにはかなや人のなど戀ひけむ　光俊朝臣
らんせいのにしきの色もいかならむかさへ(たイ)にほへる山櫻かな　民部卿爲家
花にしきをらでは人の山櫻ひとむらぬすめよものやま風　待賢門院安藝
紅葉する秋のやま人のぬれ錦ほせとや雨のおしはれぬらむ　源仲正
六五 第十一 限りなく人はいへどもこま錦わが片紐もむすびあへなく　讀人しらず
萬十一 六五 こま錦ひもときあけて夕ともしらぬ命をこひつゝやあらむ　同
同 高麗錦紐の片えぞ牀(ゆか)に落ちにける明日の夜來むと言せば取り置きてまし　人丸
朝露のおきゐる庭のとこにしきたが敷島の山となでしこ　俊頼朝臣
から國の錦におれることの葉も見えぬばかりにすめる月影　玄有法師
　此の歌判者清輔朝臣云何事にか侍らむ文にくらき者已子細にまどへり
若し朗詠集に侍る織錦機中已辨相思之字と云ふ文の心にや凡そは本文

○題不レ知
○兵部卿元(良輔)親王家歌合、暁別
○六帖題(にしき)
○同
○貞應三年一字百首歌
○久安百首
○家集、ぬれにしき
○こまにしき
○旋頭歌、題不レ知
○家集、瞿麥(とこにしき)
○承安元年八月全玄法印歌合、月

を詠レ歌事は古人誡レ之昔歌にはいともみえず就中に歌合にはよしなき
事なりと云々

布

新六五 さほ川にをりはへさらす手作りは波のかけたる色かとぞみる　衣笠内大臣

六五 袖中十五 をち方に白き花こそいなをさのかひのてなごのさらす手作り　讀人しらず

むかつをの機のかこひの卯の花や賤のさらせるてづくりの布　源仲正

思へたゞけふのさぬのの麻衣きてもあひみぬ胸のくるしさ　中務卿のみこ

しかまなるいちめがもてるかち布の色深くのみ人を戀ひつゝ　同

いかなれば戀にむさるゝたく布のなほさゆみなる人の心ぞ　源仲正

石文のけふのせば布はつ／＼にあひみても猶あかぬけさかな　仲實朝臣

錦木のちづかの數よけふみちてけふの細布のむねやあふべき　皇太后宮大夫俊成卿

後拾戀一 錦木はたてながらこそ朽ちにけれけふの細布むねあはじとや　讀人しらず

うの花の垣根なりけり山賤の月にもさらすけふとみつるは　俊頼朝臣

世の末の習ひときけどあさ布の薄くなりゆくたみもいとほし　新六 權僧正公朝

新六五 こしにあふをみの麻布とぢかけし宵曉もそのかみのもと　民部卿爲家

○六帖題
○布
○家集、遠村卯花
○六帖題和歌
○寄レ布戀（たくぬの）
○堀河院御時百首（けふのせば布）
○文治六年五社百首（けふのほそ布）
○布六帖
○卯花作レ墻 題布イ
○六帖（あさ布）
○同（をみのあさ布）

○同（おく布）
○同（かたびら布）
○同
○同
○同
○同
○題不知
○題不知
○六帖題（しけいと）
○承安五年三月重家卿家歌合、逢不ㇾ逢戀
○六帖題

同 いまは世にあるも稀なるおく布のもちゐられしは昔なりけり　光俊朝臣
同 いかにせむかたびら布の片よりは身を返すべき物とやはみる　正三位知家卿

綿

同 駿河なるふじのくはこの新綿はたかねの雪の色に似るらし　民部卿爲家
同 敷島や大和にはあらぬ唐人の植ゑてしわたのたねは絶えにき　衣笠内大臣
同 秋のくるよはの衣のひとへ綿ひとへになほぞ風は身にしむ　正三位知家卿
同 それもまた子を思ふ母の綿なればいつかはおしの花も恨みし　光俊朝臣
哀れ我が身はくはこにぞなりなまし綿の端山のたすけざりせば　權僧正公朝
萬三 しらぬひの筑紫の綿は身につけていましはきねご暖かにみゆ　沙彌滿誓

絲

家集 浪かくる玉えの絲をくりかけてしのにほすてふ衣おるらし　貫之
新六五 我が戀は賤のしけ絲くりかねていかなるふしに思ひ立つらむ　衣笠内大臣
よぶたびにくれと（生は新六）もなどやしけ絲のよるは心に任せざるらむ　勝命法師
新六五 一筋に心もいはばしけ絲のうきふしがちに世のなりしより　民部卿爲家

○戀歌中、歌苑抄
ことわりや絶えればこそは亂るらめふし繁かりし賤のしげ絲　鴨長明

○日吉社歌合（あさのうみ絲）
賤機の麻のうみ絲よるとても絶えにし後はあはむものかは　民部卿爲家

○同
賤の女がすがくる絲に露そひて思ふにたがふ戀もするかな　西行上人

○六帖題（わくてのいと）
新六五 われかくてわくての絲の幾めぐり命ながくて（も 新六五）年をへぬらむ　正三位知家卿

○家集、戀歌（てぞめのいと）
河内女の手染の絲の亂れあひてよりあふべくもみえぬ君かな　修理大夫顯季卿

○洞院攝政家百首、怨戀
なか〳〵に絶えもはてなで河内女の手染の絲の結ぼほれゆく　從二位賴氏卿

○同百首、不レ會戀（かた絲）
よりかけて又手にかけぬ玉の緒の片絲ながら絶えやはてなむ　前中納言定家卿

機

○六帖題御歌
かけておる賤が麻機あさましや間どほにだにも君がきまさぬ　中務卿みこ

○同
新六五 麻機たにおるてふ布のぬきを荒らみ夜はの嵐とえやは防がむ　衣笠內大臣

○同
同 山道やみののひろぎぬおる機のおよび苦しき戀もするかな　民部卿爲家

○同
同 しぐれつゝ秋のみけしをそめ機のおるてにあかずたつ嵐かな　正三位知家卿

○同
同 山賤の麻てにかけておる機のおさ〳〵しきは我が身なりけり　光俊朝臣

○戀歌中
しづがおる貢の麻のすぢ弱みくるしき戀のしげきふしかな　權中納言長方卿

斤(はかり)

○六帖題
新六五 たれもみな心にかけて思へかしかうの斤の重さかろさを　衣笠内大臣

○同
民の戸に秋をさめする稲ばかり年ある御代をかけてしるらし　正三位知家卿

○同
足引の山にかけたる水ばかりかたさがりにもおつる瀧かな　信実朝臣

○同、斤
かけ稲のはかりの石は重くともことしは民のうれへあらじな　権僧正公朝

○寛平御時后宮歌合
新撰萬六五 かけつれば千々の黄金も数しりぬなど(新萬に)わが戀のあふばかりなき　讀人しらず

櫃

○家集、秋歌中
錦をばいくのへこゆる唐櫃にをさめて秋は行くにやあるらむ　西行上人

○雑歌中
をりひつに花のくだ物つみてけり吉野の人の宮たてにして　同

此の歌はみやたてと申しけるはしたものとしたかくなりてさまかへなどしてゆかりにつきてよしのにすみ侍りける思ひがけぬやうなれどもくやうなのべむれうにくだ物なかうやの山へつかはしたりけるに花と申すくだ物侍りけるをみてつかはしけると云々

車

○百首御歌
人心うしともいはじ昔よりくるまをくだく道にたとへて
後鳥羽院御製

○七十に成りて昔みし人の許にまかりてよめる
かぞふれば車をかくる齢にて猶この世にぞめぐり來にける
俊頼朝臣

○車
現存六 濱人のとま屋のとこはあれぬらむのせてかへりし小車のあと
源有長朝臣

○正嘉二年毎日一首中
をしほ山めぐり車の玉すだれゆく末かけて神やしるらむ
民部卿爲家

○永仁元年楚忽百首
物見にといづる車に心かけてすげるすだれのあふひ忘るな
藤原爲顯

○十題百首、小車
霜ふかく送るわかれの小車にあやなくつらき牛のこゑかな
前中納言定家卿

○建久七年百二十八首
玉夏 行きなやむ牛のあゆみにたつ塵の風さへあつき夏の小車
同

○百首歌
山がつのあふさか越ゆるをぐるまに心やりたる曉の聲
寂蓮法師

○六帖題
新六二 老が世にまたしぢたてぬ小車のつたふ力のなきぞ悲しき
信實朝臣

○同
新六二 小車の道のをのまつ早ともせわたりもみえず日はくれにけり
同

○家集、戀歌中
宵々に錦のひもは解くれどもなど小ぐるまの音だにもせぬ
前中納言匡房卿

○堀河院御時百首
又いかに結びかくらむ小車のにしきの紐はとけにしものを
仲實朝臣

○家集、〃年臥無レ寶戀
小車のわづかにとこはみつれども錦の紐はとりて返しつ
俊頼朝臣

○三十六人歌合、初逢戀
小車の錦のひもはとけにけりしぢのはしがき百夜つもりて
正三位經家卿

○千首歌（從車）
ふかき夜の竹田河原の從車あかつきかけて音きこゆなり　民部卿爲家

○六帖題（すき車）
新六二 哀れなど賀茂のみあれのすき車かざりて渡る世となりにけむ　同

○同（ちから車）
行きなやみちから車もひとくなりむそぢ餘りの嘆きつむとて　正三位知家卿

○多歌中（すみの車）
雪をこそつみあまりつれ市の南かどのほかなる炭の車に　權僧正公朝

○[illegible]二年百首（炭つみ車）
賤のをがおのかわたらひいとなみて炭つみ車ゆききしるなり　源師光

○六帖題、あふひ（かざり車）
年毎にみるも珍らしみあれい（ワカ）のあふひかけたるかざり車は　權僧正公朝

○[illegible]百首、寄氷[illegible]（すみ車）
いざひき（なびイ）て氷をきしるすみ車重きうれへは我ぞまされる　源仲正

○家集、寄車戀（から車）
我を君あはぬ戀とやから車やまとことひのかけずまひする　同

○深夜寄レ霜戀（しのび車）
さよふかす忍び車のうはしろに霜ふるまでも戸にたてれとや　同

○承安三年七月右大臣家歌合、水月（みづくるま）
はやき瀬に宿れる影をくみあげて月の輪かくる水ぐるまかな　同

○獨吟
眺めやるうぢの河せの水車ときはにこそ君はかけけれ　中務卿のみこ

○閑居百首
瀬絶えするしらすにたてる水車よに廻るべきこゝちこそせね　民部卿爲家

○柴車
柴車音すみやまの谷深みくだりざかなる身にこそありけれ　同

○正嘉二年[illegible]歌
かたそばの小ざゝくだりの柴車とゞめかねたる春のくれかな　權僧正公朝

○久安百首
あやふまで峯かりくだす柴車のりに心やそみかく（たくイ）たなる　花園左大臣家小大進

○家集柴（つみ車）
妻木こるをのの山べは霧こめて柴つみ車みちやまよへる　前齋宮肥後

○戀歌中
河ごしの柴つみぐるまいかゞする氷のくさび冬はたへまじ（せイ）　前中納言匡房卿

みぎは行く柴つみ車氷うすみくだくばかりに物をこそおもへ　同

樋

○百首御歌（かけひ）
里遠くはやまの道やなりぬらむかけひの水の音ぞまれなる　順徳院御製

○千首歌（竹のわれひ）
かけ渡す竹のわれひにもる水のたえぐ〵にだにとふ人ぞなき　民部卿爲家

○家集（したひ）
六三 萬十一
しめはへて山田のしたひくちぬらむ早苗も沈む五月雨の頃　從二位家隆卿

○題不レ知
六五
水鳥のかものすむ池の慕ひなくいぶかしきみをけふ見つるかな　讀人しらず

○永久四年百首落葉
あふ坂のかけひの水に流るゝはおとはの山の紅葉なりけり　源兼昌

○家集（うちひ）
傳へくるうちひをたえず任すれば山田は水もおよばざりけり　西行上人

○六帖題田かはのうちひ
新六三
水わくる田河のうちひうゑし田に乾くまなくてくつる袖かな　民部卿爲家

○同いしひ
同
まかせつるいしひの水の下にのみすますす心はしる人もなし　衣笠内大臣

○同かはらひ
同
踏みこゆる道にふせたるかはらひの朽つとも知らじ埋もるゝ身は　光俊朝臣

○同、いはでおもふ
同五
忍ぶわけてうつぼ柱にかくるひはもるてふ水のくちやなからむ　信實朝臣

○嘉禄百首（竹のかけひ）
山もとの竹の筧をもる水のわりなき世をもすみ渡るかな　民部卿爲家

○久安百首（かけひ）
はしり井のかけひの水の涼しさに越えもやられず逢坂の關　清輔朝臣

○[illegible]水閣になかば音まさるを聞きて
ねぬ程に夜は明方になりぬらむかけひの水の音まさるなり　前大僧正行尊

筏

○宇治網代あはする所に筏おろす
あじろ木にいさよふ浪のよるをみて暮れぬ日をさへ急ぐ筏士　[illegible]

○久安百首
となせ河こすいかだ士のつなでなは心細きは年のくれかな　待賢門院安藝

○家集
蘆分のみなとの筏さはりおほみ我が思ふ道や凍りはつらむ　後九條内大臣

○[illegible]百首
我がなげきやむ時もなくつみ置けどいつかいづみの杣の筏士　同

○東宮女御賀屏風歌、よしの河くだす
吉野川おろす筏のをりごとに思ひもやまずなみのこゝろを　元眞

○家集、大井河逍遥に
風ふかばとなせに音すいかだ士のあさの衣に錦おりかく　俊頼朝臣

萬代雑三
いかだ士にあふ杣川のみをつくし押しのけられてすぐる頃かな　同

○雑歌中
新拾雑中
大井川みなわさかまく岩淵もたゞむ筏のすぎがたのよや　同

えも河にいはこす棹のとりもあへず下す筏のいちはやのよや　同

○大井河行幸、あそぶかもめ人になれたり
夜とともに筏をくだす河なれば鷗も人におも馴れにけり　花山院御製

○一條[illegible]屏風の[illegible]に名所歌
大井河うける紅葉のいかだ士のさをの雫を時雨とや思ふ　能宣朝臣

○千五百番歌合
いかだしの晴をもわかぬみなれ棹さすがに夏は月を待つかな　後鳥羽院御製

○六帖題和歌
新拾雑中
かめ山の峯たち越えてみわたせば清たき川をおとすいかだし　後嵯峨院御製

○建長八年毎日一首中、述懐

杣木ひく弓削の河原の筏なはくだるを急ぐ世こそつらけれ　民部卿爲家

○寶治二年百首、杣山を

萬代 をちこちのしげき宮木をひきよせて杣山川に筏くむなり　源俊平朝臣

○百首歌、水鳥關と筏

程もなくたちぬるあとにかへる波いかだにちかふあぢの村鳥　寂蓮法師

○家集、氷筏を閉づといふことを

氷わる筏のさをのたゆければもちやこさましほづゐ山ごえ　西行上人

○長歌

萬十三 をのとりて　にぶのそま山　きとりきて　いかだにつくり　讀人しらず
にかぢぬき　いそぎにきつゝ

萬一 いづみがはに　もてこゆる　まきのつまでを　もえたたす　同
いかだにつくり　のぼすらむ

はつせ河に　いかだうけて　わがゆくかはの　かはくまの　同
やそくまおちず　よろづたび

船

忠峯集延喜七年亭子御門西河に行幸せさせ給へる時和歌序云序者忠峯
のりの御門ひじりの君秋の（暮歟）雪をきこしめさむと御舟共をならべること
雲をあめるいかだのごとしさすべきさをのしげれる事なみをかくめる
かきにしたりと云々

○題不レ知

萬十　青波に袖さへぬれてこぐ舟のかちふる程にさ夜ふけなむか　中納言家持卿

○屏風歌、はまべに男女みわたりけり

萬十雜三　荒浪のかけくる岸の清ければかざまにけふぞ船わたしする　兼盛

○延喜十三年三月三日亭子院歌合

千五二　新拾遺二　蘆の葉の散りにし日より難波えにつなで長くも戀ひ渡るかな　讀人しらず

○同五年二月定久家歌合、旅後戀

續古戀四　あふ事はいまはかたほになる舟の風まつ程はよる方もなし　忠岑

○家集、舟を

六三　伊勢集　追風に風はなほりて吹かぬとも綱のいかりに止まりやせむ　躬恒

○永久四年百首内

なごかれよみすりも須磨に燒きつみて赤穗もろての灘通る日ぞ　俊頼朝臣

○家集、海路戀

戀しさをさし荷につめる舟なれば舵もみどろく心せよ浪（レイ）　同

○堀河院御時百首

月影によものしまべを見渡せばしほもみな引く（かなひぬ塩）ふなでせよ君　基俊

○旅宿水鶏、一字抄

日も暮れぬすだく螢をかゞりにて明石の浦にふなとゞめせむ　大藏卿行宗

○久安百首御歌

新千別　おきつ波たちわたるとも音に聞くなか井の浦に舟とゞめすな　崇德院御製

○家集、五十首、眺望

日もはるに沖かけさかり行く船はかこの聲こそまづは消えけれ　喜多院入道二品のみこ

○百首歌、旅五月雨

五月雨にはやをの綱は朽ち果ててしほに引かるゝ舟ぞ危ふき　小侍從

○仁安二年二月、歌林苑歌合

難波江にくだす高瀨のこすさをに幾度たちぬかもの村鳥　登蓮法師

○弘長元年百首御歌

夕日さすやまもと遠くゆく舟の片ほいでたる秋の河霧　後九條內大臣

○百二十八首和歌

こし方もか行くさきもみぬ浪の上に風をたのみにとばす舟かな　前中納言定家卿

○最勝四天王院名所御障子

あはれとやかすむにつけて鹽竈の浦こぐ舟のとほざかる聲　後久我太政大臣

○家集、泊舟といふことを

岸ちかく寄せづなはへてさす舟にこゝぞとまりと人向ふなり　光俊朝臣

○千五百番歌合

高砂やこぎのく舟もうちむれて風やすげなる波の上かな　具親朝臣

○千首歌

いくてまてほなはつくらむ風早みみほの浦わにすぐる舟人　民部卿爲家

よせかへり浪うつ舟のとまやかた浮寢は夢もえやは見えける　同

寛喜　六イ

○延喜二年毎日一首中

うきてのみ末の世渡る舟のうちのその樂しみは盡きる日もなし　同

○一字三十首

たけをひく舟さしよする河むかひ霧のみ秋のあけぼのの色　前中納言定家卿

○家集、戀歌中

ゆめかさは波のたゞぢに行く舟の便りにつげしよはの人聲　從二位家隆卿

○建長八年百首歌合

風そよぐ蘆のうらまのよはの月鏡をかけし舟かとぞみる　光俊朝臣

此の歌判者知家卿云かゞみをかけし舟の中と侍るこれは日本紀に侍る事とかや本說たしかにて是非に不及侍るうへに歌のすがた詞うつしく侍ると云々

○題不レ知、まつら舟

萬七　さよ更けてほり江こぐなる松浦舟かぢ音たかしみを早みかも　人丸

○同

萬十二　松浦舟みだれ（くイ）堀江（ろイ）のみをはやみ梶とる間なく思ほゆるかも　讀人しらず

○家集、つくしにて歌よみけるにつくし〲し

雲かゝる浦に漕ぎつくつくし舟いづくかけふの泊りなるらむ　元眞

○光明峯寺入道攝政家歌百首、三舟

唐崎やおほみや人のみふね待つ汀もとほく氷しにけり　從二位家隆卿

○羇旅歌、あけのそほぶね

萬三　旅にしてもの戀しきに山本のあけのそぼ舟沖にこぐみゆ　高市黑人

○題不レ知、もゝ舟

萬六 ますかゞみぬめの浦はもゝ舟のすぎて行くべき浪ならなくに　田邊福丸

○相模國歌、あしがらをぶね

萬十四 百つ島あしがらを舟あゆき多みなこそかゝらめ心はもえど（じイ）　讀人しらず

○洞院攝政家百首御歌、不レ逢戀

行方なくわかなも湊たつ浪にあしがら小舟よるべしらせよ　光明峯寺入道攝政

○建長八年百首歌合

あさひらき漕りまちえて百つ島あしがらを舟とまりいづなり　前大納言顯朝卿

○かもといふ舟

浦わよりはるかにみれば沖津島かもといふ舟も浪にたゆたふ　同

○家集、あまのはしぶね

秋風にまかせて瀬戸を渡るかなすまのうらわの蜑のはし舟　紆位

○堀河院御時百首

むやひする浦のほなはの絶えばこそ蜑のはし船ゆらも忘れめ　俊頼朝臣

○同、なだのを舟

續後撰雜上 堀百 つなで引くなだの小舟や入りぬらむ難波のたづの浦渡りする　中納言國信卿

○同、たかさごふね

夜もすがらおなじこ（おほしま堀）あらしおろすなり高砂舟は今ぞいづべき　信實朝臣

○寛元四年日吉社歌合、からぶね

わが戀ははかたをいづる唐舟のゆたのたゆたに追風をまつ　隆源法師

○いづてぶね

いづて舟追風はやくなりぬらし（にけりイ）みほの浦わによする白浪　順徳院御製

○弘安二年三島社百首、沖津舟

いづ方にこぎはなるらむ沖つ舟ほのかに遠く浪ぢへだてて　安嘉門院四條

○文永十一年毎日一首中、一葉のふね

ちりやすき一葉の舟のうらながくさすが月日を叉わたりつゝ　民部卿爲家

○後法性寺入道關白家百首、遇不レ逢戀、なにはぶね

あし分の程こそあらめ難波舟沖にいでても漕ぎあはじとや　皇太后宮大夫俊成卿

○たまもかりぶね

蘆の葉も霜がれにけり難波潟たま藻かりぶね行き通ふまで　寂念法師

○三十首御歌、江上暮春、たまもあたぶね

にごり江のたまものを舟こぎ歸りうらみてくるゝ春の空かな　後鳥羽院御製

○かすみのをぶね
新後拾春下 堀えこぐ霞のをぶね行きなみや(やみイ)同じ春をもしたふ頃かな　前中納言定家卿

○六帖題、とまりぶね
新六三 湊江にかぢふりたつるとまり舟流るゝまでに潮はみちきぬ　衣笠内大臣

○ともぶね
新六三 友舟はつくしもいせもこぎ合ひの同じ泊りにうきねをぞする　信實朝臣

○建保三年名所百首御歌、あけのそほぶね
秋ふかき八十宇治川のはやき瀬に紅葉ぞくだすあけのそぼ舟　順徳院御製

○障子繪に海づらに人々ながめてゐたりまへより舟行く所
葛飾の眞間の浦わの沖津すにあけのそぼ舟からおろすなり　後賴朝臣

○家集、しばを舟
柴小舟まほに掛けなせゆふしでて西の宮人かざまつりしつ　同

○おいをなげきて、われふね
われ舟の世をうみ渡るしるしにはおもての浪におほはれにけり　同

○家集、海のほとりにて、あからをぶね
たれ人のつとまちがてらこぎ出でてあから小舟の月にたゆたふ　殷富門院大輔

○永久四年百首、舟
恐しやともろはしりぞ(かイ)浪間行くあからを舟のあからめなせそ　神祇伯顯仲卿

○同、こし舟
雲津よりすゝめくりするこし舟の沖かけ離るほのぼのにみゆ　仲實朝臣

○家集、寄舟戀、えぞふね
わが戀はあしかを狙ふえぞ舟のよりみよらずみ波間をぞ待て　源仲正

○片戀、河舟
せにかけてさしおとされぬ河舟の片思ひこそくるしかりけれ　同

○戀歌中
萬代 おふ事を久しく淀の川舟にとりこす綱のかゝらずもがな　殷富門院大輔

○三百六十首中、のぼり舟
上り舟こち吹く風をすぐすとてよをうしまどに泊りてぞふる　好忠

○亭子院御時長恨歌御屏風に、くものふね
しるべする雲の舟だになかりせば世をうみ中を誰かとはまし　伊勢

○家集、あまのをぶね
たななしの蜑の小舟の荒磯にあなたどたどし我ひとりゆく　同

○五百首御歌
年ふともしらじな心あま小舟かまのはなはの絶えずこふとも　後鳥羽院御製

○題不知、あまぶね
六三 蜑舟のへにくりつめる網のめはつらき心の數にぞありける　讀人しらず

○家集、思ふ事侍りける比
五塁三 こち風になびきもはてぬ蜑舟の身を恨みつゝこがれてぞふる　女御徽子女王

○[illegible]、あまのつり舟
たななしの蜑の釣舟浪間よりと渡る程ぞはるけかりける　讀人しらず

○しらでくやしむ戀
わが戀はみしまが沖にこぎ出でてなごろわづらふ蜑の釣舟　西行上人

○家集雜歌中、くれ舟
くれ舟よあさづま渡りけさなせそいぶきの嶽に雪しまくめり　同

○あさづまぶね
おぼつかないぶき颪のかさゝぎに淺妻舟のあひやしぬらむ　同

○日吉社にたてまつりける五十首初春歌
にほの海や淺妻舟も出でにけりつなぐ氷を風やとくらむ　家長朝臣

○十題三十首、旅
となかより早こぎかへせ山田舟ひらのたか峯に雲かゝりたり　權僧正公朝

○歌林苑にて海邊の霧を、とものすゝ舟
かこのおす音にしるしも霧の間にゆらのと渡るとものすゝ舟　盛方朝臣

○正治二年百首御歌、あはぢ舟
淡路舟きりがくれ漕ぐさほ歌の聲ばかりこそせとわたりけれ　壽成院入道二品のみこ

○[illegible]御時鳥羽にて花見の行幸に池上花、花のみふね
浪たてる禊のみかは池にさへ花のみふねを浮かべてぞみる　俊頼朝臣

○同院御時高陽院に行幸時御舟になりて
げにけさは花のみ舟をよそひても君が千年をつめるなりけり　同

○家集、しばふね
風ふけばゆらのと渡る柴舟のしばし焦れてよをすぐさばや　同

○太宰任に下りたるに舟路ひおきてもたひといふ泊りにて、ころ舟
ころ船にゐふ人ありと聞きつるはもたひに泊るけにやあるらむ　太宰大貳高遠卿

○家集、せたの橋の本にて歌よみける前にいをとる舟あり、いさりたぶね
浪のよる漁り小舟のみえつるはいをねられねば見ゆるなりけり　同

○寶治二年百首、いさり舟
○久安百首、あしはやをぶね
○釋敎歌中、のりのはしぶね
○弘長元年百首、釋敎法のはや舟
○ちかひのふね
○久安百首、たかせぶね
○同
○寛喜元女御入内御屛風、紅葉のみふね
○永承二年歌合、紅葉のふね
○新羅社歌合、紅葉
○同

海原やなぎたる蜑のいさり舟沖のすさきに漕ぎまはるみゆ　衣笠内大臣
かきくもり雨はふりきぬ水をさがあしはや小舟苫やふくらむ　前大納言隆季卿
玉釋教 目しひたる龜の浮木に會ふなれやたま〳〵えたる法のはし舟　高辨上人
新續古釋教 西の海みちひく汐にまかせつゝ我とはささぬのりのはや舟　後九條内大臣
わたし守いかひの舟は心せよのりかたぶくる人もこそあれ　信實朝臣
さをの長さをなすゝめそ高瀬舟都に我はさせる身ならず　季通朝臣
たかせ舟かぢふりたてよ大井川岸の紅葉をいかゞすぐべき　崇德院御製
新千秋下 大井川紅葉のみふねさし映へてふるきためしにかへる秋かな　從二位家隆卿
心せよ紅葉のふねのふなさして嵐の山のわたりわたらば　大納言經信卿
さゞなみに紅葉の舟をよするかな志賀の浦わは秋のとまりか　泰覺法師
水もせに紅葉の舟をむやひつゝ錦ほにかけて風ぞこぎ行く　檔律師致香

此の歌判者清輔朝臣云右歌もみぢの舟と云ひて又にしきをほにあぐと侍る如何たゞ舟に紅葉をちりかゝらせてにしきをほにあぐとぞいふべき物ひとつをふたつになしたる心えずや抑々木のはを舟に譬ふる事はふるくもみなよめり由緒あるべし木の葉の水にうきたるをみて智發して舟をばつくりいでたる事と申すめり又仙人の以二木葉一爲レ舟といふ

事本文侍るめりされば古今集に興風歌にや「白浪に秋の木の葉のうかべるをあまいながせる舟かとぞみる」とよめりかやうにはよめれどおきへて紅葉の舟といはむ事證歌なくてはいかゞとぞおぼゆる花のゆきにする事はむかしよりみることなれど近頃の歌合仲實判詞の花のしら雲とよめるをば花のしら雲といふものがきだまりあるやうなり歌合には猶いかゞとぞ難じて侍りめるこれおなじ事なりと云々

夕されば遠ちかた舟や迷ふらむきりになりゆくさほの河浪　從三位範宗卿

わたり舟それとも見えずあさぼらけ水のを（サイ）かけてかすむ河浪　從二位家隆卿

紀伊の海のゆらのとあるく渡り舟我が身さきよりいでかひもなし　民部卿爲家

猶しばし淀の河せのりをみむわたしをぶねはこぎなつけそも　信實朝臣

浦風のさそふもしらず難波江のあしの小舟に月をみるかな　從二位家隆卿

第十二　港入のあしわけ小舟さはりおほみ我が思ふ君にあはぬ頃かな　讀人しらず

六三　淺瀨こぐかたかけを舟流るともいたくなわびそ梶とりにゆかむ　同

新六三　淡路島かざまにわたる鹽舟のからろの音ぞおきにきこゆる　衣笠内大臣

同　ともすればとまりに沈むくち（つイ）舟のこぎでし方ぞさすが戀しき　民部卿爲家

小舟こぐともろにも猶たかしとやつなでをくゞる鴨の村鳥　三條右大臣實

〇光臺院入道二品親王家五十首、河霧、をちかた舟
〇石清水歌合、河上霧、わたりぶね
〇寛元三年結縁經百首
〇寛元二年百首、渡月、わたしをぶね
〇光明峯寺入道攝政家詞會、江舟月、あしのをぶね
〇題不レ知、あしわけをぶね
〇同、かたかけをぶね
〇六帖題、しほ舟
〇同、くちふね　つイ
〇嘉禎二年十月法性寺家歌合、水鳥を

○家集、夏歌中、まこもかりぶね

五月雨もをやむ晴間のなからめや水のかさほせまこもかり舟　西行上人

梶楫

○題不レ知

萬十二 やかぢかけ島がくれゆく我妹子（なは萬）が泊りとふらむ袖見えずとも（しかも萬）　讀人しらず

○文應元年七社百首、海路

淡島やと渡る舟のからかぢのからき憂世をしをれてぞふる　民部卿爲家

○述懷百首

磯がくれまかぢしげぬきこぐ舟の早くうき世を離れにしかな　皇太后宮大夫俊成卿

○六帖題

戀六四 波たてるぬさの追風早ければまかぢしげぬきわたる舟人　光俊朝臣

○承久後百首御歌

風早みおきこぐ舟のかぢ間にも忘るゝ間なき世々の故鄕　後鳥羽院御製

○御集

いそがでや梶ひきをりて舟人もあすになるとの潮やまつらむ　後九條內大臣

○寶治二年百首、旅泊

うきねして枕と賴む船ばたにおきならべたる梶もありけり　信實朝臣

○山階入道左大臣家百首、絕戀

契りこそ行方もしらぬゆらの戶やわたるかぢ緖の又も結ばで　民部卿爲家

碇

○六帖題御歌

今日の日はいかりそへよと舟人のつしまの渡り風もこそたて　中納卿みこ

○同、いかり

新六三 追風にはしる小舟のいかりなはくりかへしても昔をぞ思ふ　衣笠內大臣

○同

同 戀にのみこがるゝ舟のいかりなは思ひ沉めばくるしかりけり　民部卿爲家

同
沖つ舟下すいかりの綱つよみあやふからぬも猶ぞあやふき　信実朝臣

同
こぎ出づるとえりの舟の碇なはへにくりかくる聲きこゆなり　光俊朝臣

綱

難波がたつなでに靡くあしのほの羨ましくも立ちなほるかな　俊頼朝臣

萬十一
ひとことは惜し我妹子つなで引く海よりまして深くしぞ思ふ　人丸

萬十四
たこの嶺によせ綱はへてよすれどもあにくやしつのそのかほよきに（なイ）　読人しらず

みやぎ引くちびきの綱も弱るらしそまとほき山のいはねに　隆祐朝臣

朝夕に袖にかくして結ぶての憂世のつなをとかざらめやは　慈鎮和尚

思ひしる心のつなをよもに引きて老のねざめの亂れゆくかな　同

たちがたき思ひの綱もつながれてひきかへさるゝ事ぞ悲しき　清輔朝臣

人心なににつながむ色かはるさきさまのつなのよるもたまらず　従二位家隆卿

新勅撰戀一
緑衣いろにはいでじしもといふまさきの綱のよるの時雨に　光明峯寺入道攝政

夕ぐれのまさきのつなで春かけて月のみふねや外山いづらむ　後九條内大臣

新六三
住吉のあまのふる綱ひく人もいまは渚にくちぬべきかな　民部卿爲家

みやぎ引くねりその綱のもゝからみ弱る景色もみえぬ什かな　道因法師

○堀河院御時百首
○題不レ知
○上新國歌、よせづな
○ちびきのつな
○百首御歌、述懐、うき世のつな
○賀茂社百首御歌、こゝろのつな
○家集、述懐百首中、おもひのつな
○建保四年百首、をさきのつな
○洞院攝政家百首、忍戀
○百首御歌
○六帖題、あまのふるづな
○ねりそのつな

繩

木をきざみなはを結びし古も世をうきものと人やいひけむ　權僧正公朝

秋田もるひたのかけ繩うちはへてたゆまず人をこふる頃かな　衣笠内大臣

伊勢の海の波のよる〳〵人まつと苦しき物を蜑のかくなは　宜秋門院丹後

（新拾俳諧）辛きかな山のそま木の我ながらうつすみなはにひかぬ心は　民部卿爲家

今はげに神のいがきもこえぬべく思ひつゞくるやへのしめ繩　大納言雅忠卿

宮ゐせし千尋たくなは君が爲ながき契りを結びそめけむ　野宮左大臣

（新六三）千早ふるちひろたく繩もゝ結びうちとけてみよながき心を　殷富門院大輔

（新六三）海原やそこの心もしらるやと千尋たく繩うちかへてみむ　正三位知家卿

（げに新六）えぞしらぬ千尋のなはを沉めても及ばぬうみのそこの心を　後九條内大臣

（新六三）蜑のすむ里にほすてふたくなはの永き恨みはけふぞくるしき　民部卿爲家

緒

四そぢまでうれへのをにはつながれぬさて我ゆるせ住吉の神　慈鎭和尚

よそならぬ心のをこそみじかけれ夏の夜とのみ思ひけるかな　同

○述懷中に

百首御歌、ひたのかけなは

○正治二年百首、あまのかくなは

○寶治二年百首、杣山うつすみなは

○寄ㇾ垣述懷、やへのしめなは

○千五百番歌合

○六帖題、俊惠法師の許にて人に十首よみける頃に

○六帖題

○建長八年百首歌合、ちひろのなは

○六帖題、たくなは

○百首歌、述懷、うれへのを

○こゝろのを

○淨覺上人につかはしける
萬代
結ぼるゝ心のをこそ悲しけれ思ひしとけばとけやすき身を　慈鎮和尚

○六帖題、つりのたなを
新六二
岸高みつりのたなをのうちはへて長き日あかずくるゝ空かな　正三位知家卿

○三百首御歌
かぢをたえこと浦風にゆく舟の憂世の波にこがれてぞふる　順徳院御製

○家集
續古雜中
すまの蜑の浦こぐ舟の梶をたえよるべなき身ぞ悲しかりけり　小町

網

○建保三年名所百首
新後拾戀一
梓弓いそまの浦に引くあみの目にかけながらあはぬ君かな　前中納言定家卿

○貞永元年照十首歌、寄レ網戀
人心あだなる名のみたつしきのあみのゆくてになどかゝるらむ　同

○爲家卿家百首
蜑のたくなはの浦わにうちはへてひくてふ網によらぬ戀かな　從二位家隆卿

○六帖題
新六三
いせじまや蜑のたはれにすくあみのめならふ人も猶ぞ戀しき　衣笠内大臣

○同
現存六
すまの蜑の網の引綱くりかへしうちはへなどて戀しかるらむ　民部卿爲家

○住吉社百首
とにかくに昔をすくふ大網に哀れをかけよすみよしの神　慈鎮和尚

○障子の繪に住吉社にまうづる人ありあみひく所
住吉の神の久しきためしにて引くあみの目の數しらぬまに　祭主輔親

○題不レ知
萬十一
住吉の津守網引のうけのをのうかびか行かむこひつゝあらずば　讀人しらず

○同
六三　新勅戀一
いとへども猶住の江の濱にほすあみのめしげき戀もするかな　同

○同
萬六
ちぬわより雨ぞ降りくるしはつの蜑網の繩ほせりぬれはたむかも　同

○御集、霞隔レ浦

あびきするしきつの浦の蜑人は霞をわけて聲かはすなり　後徳大寺左大臣

○春御歌中、霞

あみはゆるあしやの沖のあさ霞よをこめてこそ網引きにけれ　同

○永久四年百首、泉郎

引くしまの網のうけ舟波間よりかうてふさすとゆふしでてみゆ　俊頼朝臣

○題不レ知

萬二
大宮のうちまで聞ゆあびきすとあことゝのふる蜑のよび聲　讀人しらず

○三百六十首中

みほの浦の引く網のつなたくれども長きは春の一日なりけり　好忠

○近江國にをかざきにてあみひくをみて

みほの海に網引くたみのてまもなく立ちゐにつけて都戀しも　紫式部

○寛喜元年女御入内御屏風、海邊引網

おくあみの霞をすむぶ春風に波のかざしの花ぞさきそふ　前中納言定家卿

○人にさはる戀

逢ふ事はまれかの浦にあさりする網もさのみや人めもるべき　俊頼朝臣

○久安百首

鳴海潟潮干における網なれやめにはかゝりてあはぬ戀する　大炊御門右大臣

○同

よさの海にひくてふ網のつなでなはくるをば人の心ともがな　前參議親隆卿

○六帖題御歌

浦人のあみのひきづなうちはへてうけくに物の悲しきはなぞ　中務卿のみこ

○同題

新六三
いまは又日もゆふかけておく網のとほくないでそ蜑のうけ舟　正三位知家卿

○同

同
春はなほ長き日くらしひくあみの心ゆるべぬなごの浦人　信實朝臣

○仁安三年無動寺歌合

人しれぬ身のみ思へばうしまどに引きほす網のいはで過ぎぬる　隆實

魚簗

○建保三年名所百首
いたづらにあはぬうき身の名取河やなせの波を袖にかけつゝ　僧正行意

○やな
現存六 早河にやなうちわたすあだ人の心のせにぞ思ひわびぬる　洞院攝政

○六帖題
新六二 せきかくる田上河ののぼりやな逆まく水のおちぞわづらふ　正三位知家卿

同 みなせ河（と新六）ゆくせの水のくだりやな春の日和にはやさしてけり　民部卿爲家

○家集、八月河狩
朝ぼらけやなせの浪の音はしてわたりやいづこやすの川霧　同

○六帖題和歌、やな
厭ふぞよ世にふる河の下り簗かゝるみくづはせきなとゞめそ　中務卿みこ

○同
雨はるゝ名殘の河のくだりやな濁れる水にうをぞおちそふ　前中納言爲家卿

○同
新六三 はや川のせあさにかゝる片岸にやな（と新六）うつけたの便りにぞかゝる　信實朝臣

○六帖題和歌、やな
たむくべき神のにへぞと事よせておまへの河原簗うちてけり　光俊朝臣

○建長八年百首歌（合イ）
五月雨にやすの早瀬ののぼりやな河波たかし落ちやしぬらむ　從二位行家卿

○三百六十首中
安河の早瀬にさせるのぼり簗けふの日よりにいくら積れり　好忠

夫木和歌抄巻第三十三 終

夫木和歌抄　巻第三十四

雑部十六

題　神祇付社付宮　釋敎付寺

神祇

○久百首、神祇歌中

あら神のあらはれいでし昔より神をば君とあふぎ初めてき　左京大夫顯輔卿

○同

飛びくだるな（りイ）なしの雉をいさりせば蜑のはゝやもなげざらましを　同

○同

いにしへも祭れるをりはけ衣にあけの衣をきるといひけり　前大納言隆季卿

○社頭秋風

ふりにけるあけのたまがき神さびて破れるみすに秋風ぞふく　鎌倉右大臣

○御集、神祇

八百萬づよもの神たち集れりたかまの原にきゞたかくして　同

○神祇歌

石間　君が代にごりもあらじたかくらや麓にすめるをしほ井の水　度會仲房

○長歌祭神

萬三　あまのはらより　むまれたる　神のみことを　おく山の　さ　坂上郎女
かきの枝に　しらがつけ　ゆふはりつけて

○家集、神祇歌
和らぐる光ときくもあとたるゝ所をいふはわがやまと國　民部卿爲家

○同
新拾神祇
道のべの杉の下葉に引きしめばみわすゑまつるしるしなるらし　同

○文永十一年毎日一首歌
神垣の巖の上のかりぶしにまろねのあしを洗ふみやつこ　同

○八幡百首、神祇歌
契りだにたがへざりせばわたつうみの底にも人やゆき通はまし　實清朝臣

○家集
たよせとは思はざらなむわたつ海の（にイ）祈る心は神ぞしるらむ　惠慶法師

白雲に色みえまがふみてぐらをたよせにうけよかみのこの神　同

此の歌は障子の繪に須磨の浦のかたかきたるに神のやしろにふねより
ゆく浪のたかければたよせにみてぐらたてまつるところをよめると云

云

○十題百首
たのもしな曉ちぎる月影のかねてすむらむみよしのの嶽　前中納言定家卿

○三社歌に
君が代はよさみの森のとことはに松と杉とや千度さかえむ　同

○永久四年百首、神
さかき葉を神の御室とあがむればゆふ附鳥のねぐらなりけり　俊頼朝臣

○御集、寄レ草戀
かけてこふる神のみむろの玉葛たえぬ契りをなほや恨みむ　後鳥羽院御製

○千五百番歌合
榊葉やいつも綠のしめのうちにはとふく秋は風ぞ身にしむ　土御門内大臣

○三百六十首御歌中
神こそは野をも山をもつくりおけ人に誠の道をふめとて（かめてイ）　後九條内大臣

○家集
神まつる宿にけふさす榊葉のときはにかへるやへのゆふしで　祝部成茂

○建長七年顯朝卿家十首

我ばかりけたぬ物かはふじのねの神だにもゆる思ひとぞきく　從二位行家卿

我が戀をなどかは神のにくみしていのる心のぬさもかひなき　光俊朝臣

○久安百首

神さびていはへるほこのみゆるかなこはよも山の人の守りか　前大納言隆季卿

○春神祇祈年祭

あらたまの年を祈ると引く駒のあともひさしききさらぎの空　前中納言定家

○正應五年三島社十首歌、社頭祝

よろづ代も久しくうけよ神垣や年に變らぬ君がいもゐを　參議爲相

○永仁元年禁忍百首

君が代を守るとならば萬づ神わきて久しきためしはじめよ　同

玉神祇

かしこまるしでに涙のかゝるかな又いつかはと思ふ哀れに　西行上人

この歌はそのかみよりなれけるならひに世をのがれて後も賀茂の社に參りけるにとしたかくなりて四國の方へ修行しけるに又まゐらぬ事もやとて仁安三年十月十日の夜まゐりて幣まゐらすとてたなをの社の許にてしづかに法施奉りける程に木の間の月のほの〴〵にて常よりも神さび哀れに覺え侍りければと云々

○三島社に參りける神樂和する歌篠

とも淵の笹の葉したり雪ふれば腰にさしたるかたなびきなる　權僧正公朝

○湊田

みなと田のかりたの面に雪ふれば八に限らでゐるくらゐかな　同

○[illegible]

み園生の木の根掘りはむ蕃霜のふりはのねたさ（きイ）うれたき（さイ）　同

○弘安元年百首（いざなぎ）

天づたふ月日こたへていざなぎの命の定めよはあきらけし　後九條內大臣

○久安百首（いざなみ）
いざなみのますみの鏡てにとりてうみしもしるくてらす月よみ　實清朝臣

○建仁元年十首歌合
神風やゝへの榊葉かさねてもみもすそ河の末ぞはるけき　後鳥羽院御製

○家集、神祇歌
ながれ出でてみあとたれます瑞垣は宮河よりや渡らひのしめ　西行上人

○久治六年五社百首（伊勢）
人しれずもゝ枝の松をたのむかなふぢの末葉も衰れかけなむ　皇太后宮大夫俊成卿

○百首御歌
神ぢ山もゝえの松のときはかげときには君をまもりけるかな　慈鎭和尚

○太神宮にて
神ぢ山たま垣ごしにみわたせば杉間にたかきちぎの片そぎ　僧正行意

（家集、神祇歌
いすゞ河そのみなかみを尋ぬれば神ぢの山にかゝる白雲　嘉陽門院越前

○同
古來歌
すゞか山神ぢの宮るふりはへてよをたてそめし天のみはしら　従三位行能卿

○光明峯寺入道攝政家百首
萬づ代に君もすめとやいすゞ河したつ岩根のしきなみの聲　従二位家隆

○二夜百首御歌、神祇
みもすその廣き流れにてらす日のあまねき影はよもの海まで　後京極攝政

○千五百番歌合
神風やみもすそ川のいは清水君がためとやすみはじめけむ　従二位家隆

○同
すゞか河やそせの波をへだてゝもわが神風に君をいのらむ　嘉陽門院越前

○承久二年四季百首、春神祇例幣
みてぐらのたつやいすゞの河浪に山の紅葉もぬさやたむくる　前中納言定家

（正治二年百首
君が代は山田の原にたつちぎの千度かはらむほどはかぎらじ　土御門内大臣

○建長八年百首歌合（いは清水）
いはし水すみはじめけむ月影のみつの衣にかげぞうつりし　衣笠内大臣

○八幡宮にたてまつりける
石清水まつ風高く影みえてたゆべくもあらず萬づ代までに　貫之

○永久四年百首、石清水臨時祭　たつ程のかさねかはらけなかりせば覺えて淀の渡りせましや　俊頼朝臣

○同　をとこ山かざしの花も春なればをみの衣ははゆるなりけり　仲實朝臣

○同　男山みねの櫻にもろびとのかざしの花をたゝへてぞみる　源兼昌

○石清水三首歌合、社頭松　はこざきや松吹く風に殘しけり波のほかまでなびくひゞきを　野宮右（左イ）大臣

○同　新續古神祇　やはた山あとたれそめししめのうちになほ萬世と松風ぞ吹く　後鳥羽院御製

○同　千世へても君ぞ綠のいはし水みゆきを松のかげやどしけり　前大納言忠良卿

○同　神がきやゆきめぐりても君ぞみむおひそふ松の萬世の影　嘉陽門院越前

○同　君が代を祈るしるしはみづがきやおひそふ松の幾千代かへむ　皇太后宮大夫俊成卿

○同　をとこ山みねの松風かみさびて梢にかよふあさくらのこゑ　後鳥羽院中納言

○同　男山種やまきけむ我が君の千世におひあひ（あひおひイ）のみねの若松　大藏卿有家

○同　神やまにおひそふ松の千世ごとに君が爲とやいのりおきけむ　俊成卿（女イ）

○同　をとこ山よろづよかけて種しあれば君がためしに相生の松　家長朝臣

○同社歌合　新後拾神祇　八幡山神やきりけむはとの杖おいてさかゆく道のためとて　同

○うなりによみて奉りける中の社（いなり山）　稻成山みつすきなか（りイ）にますか神わがごとたてて賴むかひあれ　惠慶法師

○續集、名所述懷　とぢはてし我がみちひらけ春日山神のみともるありあけの月　後九條内大臣

○社頭雪　明玉　かすがなるゆきあひとのに置く霜のふりて幾年神さびぬらむ　正三位知家卿

○あとのみや

○保延元年家成卿家歌合、祝（いはやどの神）

○春日社歌合（いはひぬし）

○戀歌中（いなづの神）

○建長八年百首歌合（にぶの神）

○この月は神の事するしとおもふ（はもりの神）

○久安百首神祇歌中（とよたまひめ）

○日吉社戀五百首歌合（わづらひの神）

○賀茂神を（わけいかづちの神）

○家集、神祇歌（かすが）

○かしま（常陸）

み空より跡たれたりしあとの宮その代もしらず神さびにけり　光俊朝臣

君か代のつきせぬ數はいはやどの神ばかりこそ空にしるらめ　神祇伯顯仲卿

君がよを祈る心にまかせたるいはひぬしとは神の御名なり　卜部兼直

逢ふ事を頼みたのまずいせくなるいなづの神の聞きもはなてや　明賢

河かみのにぶの庵のまきのいたとりてぞいはふ萬代までに　光俊朝臣

ことつけむ人もなければみやまなる葉もりの神を思ひこそやれ　成尋法師母

いまさらに行方もしらぬ我が戀はとよたまひめの心こそすれ　左京大夫顯輔卿

いざなぎのぬぎし衣もなき物をなど逢ふごとにわづらひの神　法橋顯昭

此の歌判者云日本紀に伊弉諾尊衣をぬぎておき給ひしかば煩神となれる事にや此れちかきことにあらずと云々

續古神祇

あまくだるわけいかづちの神しあれば治まりにける天の下かな　後京極攝政

新拾神祇

三笠山ふもとをめぐるさほ川のさして祈りし身をたのむかな　藤原長能

このうたは鹿島の社に跡宮と申す社は大明神のはじめて天くだらせ給ひし所なりと云々

神さぶる鹿島をみれば玉だれのこがめばかりぞまだ殘りける　同

此の歌は鹿島といふ島は社頭より十町ばかりのきて今は陸地よりつゞ

○鹿島社
○建久二年百首、神祇
○百首歌（賀茂）
○家集、曉神樂
○光明峯寺入道攝政家百首（賀茂）
○十題百首
○神祇歌中
○六帖題、しも月
○春日社法樂詞歌
○賀茂神主重保におくりたる十首歌中

きたる島になむ侍りその所につぼと云ふ物のまことにおほきなるが半すぎてうづもれてみえしを先達の僧にたづねしかばこれは神代よりとどまれるつぼにて今にのこれるよし申し侍りしこそ身のけはよだちておぼえ侍りしかこがめぞ事たがひてよめりけると云々

鹿島のやわしのはがひに乗りてこし昔の跡はたえせざりけり　後京極攝政

かしまのやひはらすぎ原ときはなる君が榮えは神のまに〳〵　前中納言定家卿

かも山の高峯にかゝる白雲やわけしなごりの空の通ひ路　參議雅經卿

神山のむつきのなかば月さえて鳥のはつねに御戸開くなり　從二位家隆

かみ山の峯のまさかき萬世にかをかぐはしみたちぞさかえむ　大藏卿爲家

秋の田をかものかはせにこぎよせて誰も千年を松の河舟　寂蓮法師

神山にあまの岩舟こぎよせてつなぎそめしもわが君のため　賀茂氏久

新六一
霜さゆるかもの河原に駒なめてみちゆきぶりの山あゐのそで　正三位知家卿

神がきやてがひの鹿のなつけよりしりぬひじりの天のは衣　慈鎭和尚

しめのうちに雲かとみゆる櫻花天くだりけむむかし思ほゆ　殷富門院大輔

家集
御禊して眺めわびぬるゆきもよに神のひほろぎとくる嬉しさ　二條太皇太后宮大貳

此の歌は賀茂にこもりたるにゆきのいみじうふるに心ぼそくてうちな

がむる程に神の御おろしとてくぼてをいれたるによめると云々

奧山のまさきのかづらくる人ぞまつやひらでの數はかくるゝ　和泉式部

此の歌は神祭日人々きてかしはのあるをとりて歌かきてとせめければ

よめると云々

新千載一
あひみむと思ふ心はまつらなる鏡のかみや空にしるらむ　紫式部

そのかみを思ひぞいづるかはあひの神にもなれし冬の夜の月　爲綱卿

たらちねの親のつくれるみ吉野のよしのの神は見るも尊し　源仲遠

ながめけむくものふるまひ空はれて月影きよき玉つしま姫　正三位季能卿

玉津島あかぬ宮井のみづ垣にいく年波をよせてすぐらむ　殷富門院大輔

六四
君を思ふ我が心しぞみえぬべきたむけの神もいかゞ思はむ　讀人しらず

白絲のたえずおちくるたきの原あとたれ初めて幾代へぬらむ　荒木田延季

おりのぼる人たのめとやこゝにしも跡をたるみの朱の玉垣　俊頼朝臣

よろづ代の春にもあかじ八重櫻なゝますかみの玉のみづがき　祝部成賢

めぐりあはむ契りの末は長道磐（ながちは）の神のしるべを頼むばかりぞ　參議爲相卿

とけやらぬひとの心はつらからで結ぶの神を恨みつるかな　藤原伊行

大ひえや祈るしるしを三輪の山かげをしわたる杉の梢に　法印定爲

○家集（かゞみの神、肥前）
○題不レ知（かみ、河合の神、山城）
○建長七年顯朝卿家千首歌、神祇（よしのの神、大和）
○千五百番歌合（玉津島、紀伊）
○百首歌
○社（たむけのかみ）
○神樂歌、瀧除宣（たきのはら、瀧原、伊勢）
○家集（たるみの神、和泉又播磨）
○社頭會、花を（なゝますがみ、近江）
○閑居百首中（ながちはの神）
○仁安二年八月經盛卿家歌合
○正安三年日吉社歌合

○百首歌（大原、山城）
思ひのみおほ原野邊に年へぬるまづことかなへ神のしるしに　前中納言定家卿

○十題百首、神祇（くまの）
雲かゝるなちの山風いかならむみぞれ烈しきながきよの暗　同

○建保四年百首
み熊野のはじめの年をかぞふれば我が身に殘る浦のはまゆふ　參議雅經卿

○千五百番歌合（くゝのちの神）
くゝのちの神も恨めしいかなればあだに櫻の花となりけむ　正三位季能卿

○（くにつかみ、近江）
やしまもるくにつみ神にいのりおきて千年は君が心なりけり　小侍從

○百首御歌
さゞ波やくにつみ神のます鏡かけていでたる月のさやけさ　光明峯寺入道攝政

○（やほあひの神、伊勢）
世の中をあめのみかけのうちになせ荒潮あみてやほあひの神　西行上人

此の歌は公卿勅使に土御門内府宰相にてたちけるをいすゞ河のほとりにてみてよめると云々

○家集（松尾、山城）
玉がきはあけも綠もうづもれて雪おもしろきまつの尾の山

○久安百首、神祇歌中（藤しろの神）
千早ふる君が千年を松の尾にかゝりてさける藤城の神　郁芳門院安藝

○家集、神祇歌中（こやねのかみ）
天てるや月日のあふぐ人のよをいかにこやねの神やすてつる　民部卿爲家

○（ことのまゝのかみ）
神かけて賴みしかども東路のことのまゝにはあらずぞありける　相摸

○題不知（あすはのかみ、足羽、越前或上野）
萬六
庭中のあすはの神にこしはさしあればいははむ歸りくまでに　讀人しらず

○久壽元年社百首、伊勢（あらがねの神）
あらがねの神の初めにあとたれし宮居の山はときはかきはに　民部卿爲家

○家集（あらがみ）
浪につきて磯わにいます荒神は潮くむきねをまつにやあるらむ　西行上人

○丹後国あまてる御社にて（あまてる神）

大江山昔のあとの絶えせぬ(ねイ)はあまてる神も哀れとやみむ　丹波忠貞朝臣

○あさ日山のふもとに神祭する所（あさ日山の神）

朝日山ふもとをかけてゆふだすきあけくれ神を祈るべきかな　實方朝臣

○家集（さきたまの宮、武蔵）

和らぐる光をはなにかざされて名をあらはせるさきたまの宮　西行上人

○雪朝右近馬場にて（きたの、山城）

古来歌

神がきの年ふる松にことよせてひとよにつもる野べの白雪　参議長成卿

（社頭月

月いすむきた野の宮のこ松原いくよをへてか神さびにけむ　鎌倉右大臣

○小野にまうでて

祈りこふことのしるしと北野なるうへの垣根の松ぞみえける　太宰大弐高遠

○久安元年上社百首、北野

萬代和歌

神はよもうけじなたけの言の葉も重なるよゝのあとを守らば　民部卿爲家

○島中有神の霊方（きさがたの神社か、出羽又羽前）

あめにますとよをか姫に言とはむ幾代になりぬきさがたの神　能因法師

○文永八年毎日百首中（祇園、山城）

かさにさす山鳥の尾のながき日に神のそのとぞ今日祭るらむ　民部卿爲家

○寛喜二年百首（きぶねのみや、山城）

つのさぶる貴船の宮の榊葉のちよとさしてもあかぬ御代かな　衣笠内大臣

○貞観二年四月家神祭所（わがやどの神）

み室山峯のさかき葉萬づよにをりてまつらむわが宿の神　能宣朝臣（能因法師イ）

○寛治二年百首、寄社祝、みむろの神、大和）

よゝかけて祝ふ三室の神やつこいやとこしへに祈りまつらむ　正三位知家卿

○たむけ

現存六

みむろ山とほつ宮井の神さびて風のみはなの手向をぞする　同

○千五百番歌合（みたらしの神）

戀すともつひにあふせを祈るかなこれをばうけよ御手洗の神　野宮左大臣

○家集、女のもとに（みこもりの神）

千早ふる天のいは(ひイ)くらおしひらき我にをかたれみこもりの神　藤原長能

○六百番歌合、祈恋

もろこしに今はなりなむ祈りの神のしるしはありとこそきけ　正三位經家

○州攝國みたけ山奉納歌

古へのよしのをうつすみたけ山黄金のはなもさこそさくらめ　前大僧正隆辨

○家集（しほがま、陸奥）

ちはやふる神もねのひと思へばや煙たなびく鹽竈の松　爲仲朝臣

○十題百首、神祇（しら山、加賀）

おもかげに思ふぞさびし埋もれぬほかたに冬の雪の白山　前中納言定家

（日吉社十五番歌合（ひよし、近江）

新古神祇　拾玉集一
もろ人のねがひをみつの濱風にこゝろ涼しきしでの音かな　後京極攝政

○信成卿日吉社會、社頭冬

あはれとはをの聖もかぞへしれ今年も冬のなかばすぎぬと　從二位家隆

○同社頭歌合、社頭松風

たのみこし春しも水のかはよどにいまさへ松の風ぞひさしき　前中納言定家卿

○久永五年毎日一首中、神祇歌

幾千代のしるしなるらむ今日まつる神のみゆきの唐崎の松　民部卿爲家

○同

唐崎の濱のさゞ波立ちかへり今日こそ神のみゆきなるらし　同

○同

とにかくに威德ぞあふぐひよしのや祈る心を神にまかせて　同

○弘安日吉一品經歌

きたの峯ふかきみのりをあふぐかな神は日吉の影をならべて　正三位能清卿

○同

天くだる日吉の神のしるしとやをひえの杉のこだかかるらむ　通基卿

○同

さしてなほ日吉のかげの曇らぬやみ舟をよせし梢なるらむ　左近大將家教卿

○嘉元三年楚忽百首、日吉七社歌

からさきの松の木ずゑに舟のぼせしるしをみせしみわの神杉　從三位爲實卿

○同

唐崎の松にみふねをとゞめおきて心をよせしさゞ波の跡　同

○同

みな月の空よりふりし雪にこそ跡たれけりと世にもしらるれ　同

○客人宮

現葉
みづがきに植ゑてしめゆふ花なれば匂はむ春ぞ久しかるべき　祝部國長宿禰

（建保四年日吉歌合、社頭松風）
（三百六十首中（ひろた））
○ひらの
○六帖題、ちかふ（ひだちの神）
（仁安二年二月清輔朝臣家歌合、祈レ神戀（ひとことぬし、一言、山城））
○祈レ神戀
（御禊（ひろせの神、廣瀬、山城））
（永仁大嘗會（ぬろがみ））
（家集（すさのを、出雲））

この歌は日吉の本社に千本の樹をうゑて千首の歌を人々にすゝめて侍りけるとき寄レ樹春といふことをよめると云々

神さぶるみとのゆふしでうち靡き鏡らぬちよの松風ぞふく　後九條内大臣

あはれひを廣田の濱に祈りてもいまはかひなき身の思ひかな　前中納言定家

白玉のみかどの親のおほぢこそひら野の神のひひこなりけれ　同

これは平野の神の御歌となむ

衣手のひたちの神のちかひにて人のつまをも結ぶなりけり　權僧正公朝

あふことをはるとや人ち契るとて一こと主にねぎぞかけつる　法橋顯昭

この歌は判者衆議云よるとや人もちぎるとかづらきの神ないのられけむもゆゑありてともにおもしろければ持つとぞ申しおはれたりしと云

云

夫木抄
つれなさを一言ぬしに祈りみむとけぬ辛さは思ひしるらむ　登蓮法師

現存六
たむけする廣瀬の神のしるしあらばこひの涙の淵もあせなむ　衣笠内大臣

あまてらす日影のたすきかけまくもかしこく守れ八十の諸神　前中納言俊光卿

すさのをの命を祈るともなしに越えてぞみまし波のやへ垣　和泉式部

やはらぐる光や空にみちぬらむ雲にわけいる千ぎのかたそぎ　寂蓮法師

この歌は出雲の大社に詣でみ侍りければあまぐもたなびく山の中まで
かたそぎの見えけるなむこのよのこととおぼえざりけるによめると
云々

月みればすくなみ神ぞうらめしき西には山をつくらざりせば　俊頼朝臣

拾玉二
のりの花ちりしむしろにのぞみてや光をましし住吉の神　慈鎭和尚

同
いしかはのつかの昔をたづねしをあはれとやみし住吉の神　同

君が代に久しくにほへ住吉のまつにちぎりしもゝくさの花　同

つれなくも猶すみの江に手向草ひきすてられし道のくち葉を　前中納言定家卿

住吉の神代の松の秋のしもふりても久しみつの玉がき　大藏卿有家

片削ぎのゆきあはぬ閒よりもる月の冱えて御禊の霜に置くらむ　西行上人

みだれゆくよにこそ願めもろこしをわが國になす住吉の神　慈鎭和尚

とそぢづゝよつの社のくはへます玉の緒ながく君ぞ榮えむ　從二位家隆

住の江にむこの浦風立ちそひてふたゝび神のめぐみをぞ見る　道因法師

新拾遺神祇
君がためたまての岸にやはらぐる光の末はちよもくもらじ　津守國平

社　付　宮

○家集、月歌中（すくなみの神、豐前）
○住吉にたてまつりける百首（すみよしの神、攝津）
○同
○同
○三社歌
○建保三年内大臣家百首、神祇
○住吉社にて、翫月
○住吉社百首御歌
○同社三十首
○承安二年廣田社歌合、述懷、判者俊成卿
○行家卿よませたる住吉歌合、社頭祝

ちはやふるいすゞの宮の增鏡くもらぬ御代を照らすとぞきく　大納言雅忠卿

月影もたえずや澄まむすゞか川いせをの宮の世々のふる道　兵衛内侍

續古神祇
神風やいすゞの川のいそのみやとこよの浪の聲ぞのどけき　花山院内大臣

そのかみや祈りし事はとようけのしるしぞ君が惠みなりける　土御門内大臣

うなゐごが垣根にいはふを社も思ふことだにならばたのまむ　上西門院兵衛

きくごとにたのむ心のすみまさる賀茂の社のみたらしの聲　前中納言定家

萬十一
天飛ぶやかるの社のいはひつぎ幾代までやらむかくれづまぞも　讀人しらず

この森は花を惜しまでよそならむ心を風の宮にまかせて　西行上人

ちはやふるかつまの宮の姫小松おいを手向けて仕へまつらむ　元輔

名にし負はばうき世の人の僞りをたゞすの宮に任せてぞ見る　慈鎭和尚

浪とみる花のしづえの岩枕たきのみやにや音よどむらむ　西行上人

萬六二
道のべの木の下陰のつじ社たれなほざりのぬさ手向くらむ　信實朝臣

草ふかき野なかの森のつま社こやはなすゝきほにいづるかみ　權僧正公朝

君が代を萬代とこそ數ふらめなゝのやしろのみつの聖は　慈鎭和尚

二つなき八とせの法を守るとてなゝます神はあとを垂れける　同

やをとめのふるてふ鈴のころ／＼になゝの社は宮居せりとぞ　衣笠内大臣

○寶治元年十首歌合、社頭祝、いすゞの宮）
○建保三年名所百首（いせをのみや）
○寶治元年十首歌合、社頭祝（いせのみや、伊勢）
○千五百番歌合（とようけのみや伊勢）
○久安百首（をやしろ）
○久治二年百首、神祇（かものやしろ）
○題不知（かるの社歟、大和、かぜのみや、伊勢）
○家集（かぜの宮、伊勢）
○同（かつまの宮、周防）
○建保三年内大臣家百首、賀茂（たゞすの宮、山城）
○家集（たきのみや、伊勢）
○六帖題（つじやしろ）
○中務卿親王家歌合、社（つまやしろ）
○建保元年十首歌合（なゝの社、近江）
○百首御歌
○六帖題、社

○承元三年長尾社歌合、社頭櫻花（ながをの社）
○家集（なゝのをやしろ、大和）
○文永六年毎日一首中、神祇歌、神寶（ならひのみや、伊勢）
○弘安百首歌　むすぶの宮、未國）
○御集（うちとの宮、内外宮、伊勢）
○六帖題御歌、ことの葉
○正八幡宮を（うさのみや、宇佐、豐前）
○家集（蒲除恋、うみのみや、伊勢）
○神祇を
○建長八年百首歌合（ゐでの社、未國）
○後鳥羽院御譜の時本宮三首歌（くまののみや、紀伊）
○寶治二年百首歌、社祝（くにつ社）

手向けして春やゆくらし千早ふるなかをの宮の花のゆふしで　前中納言定家

二郎百首
祈ることなゝのを社ころ／＼（かうイ）とことなはせよく口ばしるなり　俊頼朝臣

たきの原ならひの宮のかみたからなほすゑつゞき沖津（らイ）白浪　民部卿爲家

なぎの葉にみがける露のはや玉を結ぶの宮やひかりそふらむ　撿挍法親王

はたすゝき尾花かりふき神風やうちとの宮は萬代までに　鎌倉右大臣

をかたにかたちうつりし神代より傳へて久し大和ことのは　中務卿のみこ

わたの原浪路隔つるうさの宮深きちかひはよゝに變らじ　後京極攝政

朝日さすかしまの杉にゆふかけて曇らず照らせ世をうみの宮　西行上人

諸人をはぐゝむ誓ひありてこそうみの宮とはあとをたれけめ　正三位季經

東路やはり野のし水えてしよりゐでの社はなづけそめてき　前大納言顯季

此の歌判者光俊朝臣云ゐでの社は昔景行天皇の御時針野に（孫子 旅カ）し給ひける時寒水をえて卽社を被レ立たりけりかの夏后氏以レ松殷人以レ柏やしろをいはひけむもろこしまでもおもひよそへられていみじく侍りける和漢雖レ隔尊意是同と云々

千早ふる熊野の宮のなぎのはを變（はイ）らぬち世のためしにぞ引く　前中納言定家

あきつ島くにつ社のあきらけく守りはぐゝむ御代の久しき　民部卿爲家

○神祇歌（けひのみや、越前）
○百首歌（ふるの宮、大和）
○三百六十首中
○堀河院御時百首
○三十六人歌合
○久安百首
○家集
○家集、ふえふきの社（大和）
○久安六年毎日一首中（あさくまのみや、伊勢）
○神祇歌中
○（あそのみや、阿蘇、筑前）
○家集、神祇歌中（あさひのみや伊勢）

[illegible] 山をきるつるぎを峯に殘しおきて神さびにけりけひのふる宮　行　　遍

いくとせのかげとか神も契るらむふるの社のすぎの下風　順德院御製

ひはらもるふるの社の神やつこ春きにけりと知るらめやそも　好　　忠

新拾春上 いそのかみふるのやしろに春くれば霞たなびく高まどの山　大納言師頼

あれにけるふるの社のもみぢ葉や秋はかりする朱の玉垣　經正朝臣

五月雨のふるのやしろの時鳥みかさの山をさして鳴くなり　待賢門院安藝

いその上ふるの社をすぎぬれば吉野のやまにゆきやかよはむ　小　　辨

このうたはある人山寺になむしばしあるべきといへどもなくていふな
たづねてよめると云々

ふえふきの社のかみは音にきくあそび岡にやゆき通ふらむ　前大納言俊光卿

朝熊のしほひにのこるますかゞみなど白浪の思ひよりけむ　民部卿爲家

現存六 あさくまやいはねの櫻年ふれどはなの鏡のかげぞ曇らぬ　荒木田神主尚良（長イ）

今はとてしものはふりこ暇あれやあそのみ山に雪の積れる　藤原基長朝臣

このうたは宇佐使にてくだり侍りける時あその社にまうでて雪のつも
れるなみてよめると云々

玉葉神祇 神風や朝日の宮のみやうつし影ののどかなる世にこそありけれ　鎌倉右大臣

○同（あかぎの社、上野）

かみつけのせたのあかぎのから社大和にいかで跡をたれけむ　同

現存六　續古今
我がたのむあがたの宮の增鏡くもらぬ空をあふぎてぞまつ　正三位知家

○家集（さかとの宮、常陸）

桑門
あさましやさかとの宮の假宮のあやの亂れてさてやくちなむ　光俊朝臣

○百首歌（さくらの宮、伊勢）

名をもおもへ櫻の宮にいのりみむ花をちらさぬ神風もがな　皇太后宮大夫俊成

○神祇歌中（きぶねのみや、山城）

明玉
君が身はきぶねの宮にまかせたり賤めは神の名こそたちなめ　賀茂成助

○文治二年貴布禰社歌合

みづ垣のかげにぞみゆるきぶね川久しくすめる神の心は　法橋顯昭

○永久四年百首（みわの社、大和）

束ねつゝたて竝べたるあしやさは三輪の社のしるしなるらむ　源兼昌

○百首歌

新後撰神祇
思ふことみわの社に祈りみむ杉はたづぬるしるしのみかは　皇太后宮大夫俊成卿

○淸水でらのあんた（しみづのみや、豐前）

ほさばやな篠をりかけてほす衣淸水の宮の流れたえせで　前中納言匡房卿

○花歌中（しめのみや、未國）

古來歌　新拾遺神祇
神もさぞあかず見るらむ櫻ちるしめの宮もりあさ淸めすな　荒木田延季

○廣田社三首歌合、社頭雪（ひろたの社、廣田、攝津）

さかきとるむこの山風さえ〳〵て社も白く雪ふりにけり　道因法師

○六帖題（もろやしろ）

新六二
六十あまり國にみちたる諸社よのためにこそ跡はたれけめ　民部卿爲家

○御集（すぎ社、大和）

今つくる三輪のはふりがすぎ社すぎにしことは問はずともよし　鎌倉右大臣

釋教

○春雪

古來歌
さとりえて思ひとく日にあひぬれば程なくきえぬ罪の泡雪　僧都源信

○三界唯一心
すみにごる流れの末はかはれども心ひとつの法のみなかみ　心海上人

○同心を
色もかも心もほかになきものを惜しむに花のいかで散るらむ　前權僧正宗性

○心月輪の心を
玉葉
さとりゆく心のうちにすむ月はいでているべき山の端もなし　隆尊法師

○釋教の歌あまたよみけるに
大日
みそぢあまりなゝつの宮に影宿す月のあるじも心なりけり　權僧正公朝

○論の三種菩提心行影心（願イ）
おもはずばしのぶの奥へこましやは越えがたかりし白河の關　西行上人

○修習三密中、意を
いましむるいもゐの玉をえても猶つらき心の磨きやはする　民部卿爲家

○無量義經船師大船師
ともづなは生死の岸にときすてゝ解脱の風にふたよそひせよ　皇太后宮大夫俊成

○法花經二十八品歌序品爲捨王位
法の爲と思ふになればすべらぎの跡をだにこそあだに捨てしか　慈鎭和尚

○度諸衆生其數無有量
新古釋教
わたすべき數もかぎらず橋柱いかにたてける（ぬイ）ちかひなるらむ　皇太后宮大夫俊成

○是法希有如優曇華
つぼむよりなべてにもにぬ花なれば梢にかねてかをる春風　西行上人

○方便品諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世
今ぞしる野べにさくべき蓮葉をてらさむとてや山のはの月　慈鎭和尚

○同文
天の原くも吹きはらふ風なくばいでてややまむ山のはの月　西行上人

○深著於五欲如犛牛愛尾
高砂の尾上の櫻みしことも思へばかなしいろにめでける　皇太后宮大夫俊成卿

○喩品猶如火宅
まとひゆくうき世の中にもゆる火は古里とのみ思ひけるかな　慈鎭和尚

○其中衆生悉是吾子
新勅撰教
みなしごと何嘆きけむ世の中にかかる御法のありけるものを　俊成卿

○同文
ちもなくていはけなき身の憐みはこの法みてぞ思ひしらるゝ　西行上人

○家集、譬喩品の心を
うき世にて身はみなし子となりはてぬ我迷はすな法の垂乳根　家隆卿

○信解品以佛道聲
松風の聲をつたふる秋の葉もしかの園にやなびきそめけむ　慈鎭

○無上寶聚不求自得
まよひける心もはるゝ月影にもとめぬたまや袖にうつりし　俊成卿

○是時窮子聞父此言即大歡喜得未曾有
吉野山うれしかりけるしるべかなさらでは奥の花をみましや　西行上人

○藥草喩品汝等所行是菩薩道
しかの園にながめし花の色ながら露も變らぬ春のみやま路　慈鎭和尚

○我觀一切普皆平等無有彼此愛憎之心
春雨はこのもかのもの草も木もわかず綠に染むるなりけり　俊成卿

○同文
ひき／＼になは代水を分けやらでゆたかに流す末をとほさむ　西行上人

○授記品心備懷憂苦
すゝぎゆく法の衣やいかならむ羨ましきは濡るゝそでかな　慈鎭

○於未來世得成佛
續千載釋教
いかばかり嬉しかりけむさらでだにこむ世の事は知らまほしきを　俊成卿

○同文
おそ櫻みるべかりける契りあれや花の盛りはすぎにけれども　西行上人

○化城喩品以大慈悲力度苦惱衆生
世の中のくるしき道はあはれびの力車のはこぶなりけり　俊成卿

○我等與衆生皆共成佛道
秋の野の草の葉ごとにおく露をあつめば蓮の池たゝふべし　西行上人

○觀彼久遠猶如今日
する墨のいふばかりなき古もけふかきつくる心ちこそすれ　慈鎭

○五百弟子品内祕菩薩行外現是聲聞
山のはの月にぞのりし誓しこそ野べゆく鹿にかくるをぐるま　同

○同文
岩せきてこけきる水は深けれどくまぬ人には知られざりけり　西行

○同品心
たま衣身をはなれずときけど猶光みねばやありとしもなき　民部卿雅有

○世尊於長夜常愍見教化

長きよに猶さてのみやすぐさまし哀れとみつゝ教へざりせば　俊成卿

○人記品壽命無有量以愍衆生故

限りなき命となるもなべて世のものの哀れをしればなりけり　同

○同文

思ひありて盡きぬ命の憐れみをよその事にて過ぎにけるかな　西行

○同品我獻寶珠世尊納受

浪間よりひとつの玉をさゝげずばいかで五障の雲のはれまし　法性寺入道關白

○五願既滿

我が願ひみちて嬉しきまとゐかな誰も望みのかなふむしろに　慈鎭

○法師品法花最第一

春の山あきの野原をながめすてて庭に蓮の花さきにけり　同

○若見濕土泥決定知近水

千首歌
むさし野の堀かねの井もある物を嬉しく水のちかづきにける　俊成卿

○一念隨喜者我亦與授阿耨多羅三藐三菩提

夏草のひと葉にすがる白露も花の上にはたまらざりけり　西行上人

○寶塔品聞塔扶得先上佛道

かひなくて浮かぶよもなき身ならまし月のみ舟の法なかりせば　同

○若暫持者我即歡喜

まき／＼を備れる紐のたまゆらもたもてばほとけ悦びたまふ　俊成卿

○手把虚空而以遊行亦未爲難

五首歌
大空をてにとることは安くとも法にあふべきをりやなからむ　僧都源信

○移諸天人置於他土

三度までうつしかへてし大空に數限りなきひかりをぞみる　慈鎭

○提婆品龍女成佛

玉ゆゑにいでぬとみえし海の月のやがて南にさし昇るかな　同

○髻中明珠

明玉
いまぞ知るたふ（さイ）きの玉をえしことは心を磨くたとへなりけり　西行

○採薪及菓蓏隨時恭敬與

薪こり峯のこのみを求めてぞえがたき法はききはじめける　俊成卿

○同文

ねをはなれ繋がぬ舟を思ひしれば法えむことぞ嬉しかるべき　同

○勸持品我不愛（受イ）身命但惜無上道
數ならば惜しくやあらまし惜しからぬ憂き身ぞきけば嬉しかりける　西行上人

○何故憂色
ばせを葉やいかなる風をいたむらむ秋の心ぞ色にいでぬる　慈鎭

○安樂品行常有是好夢
思ふべし我がうつゝこそ悲しけれみ法の宿にみる夢ぞそれ　同

○深入禪定見十方佛
しづかなる庵をしめて入りぬれば一方ならぬ光をぞみる　俊成卿

○同
深きやま心の月しすみぬれば鏡によものさとりをぞみる　西行

○涌出品得成最正覺轉無上法輪
夏山の木かげだにこそ涼しきを岩のたゝみの悟りいかにぞ　同

○從レ地而涌出
池水の底より出づるはちす葉のいかで濁りにしまずなりけむ　俊成卿

○父少而子老
たらちねをわかの浦わとみしまゝに子は又老の波をかけける　慈鎭

○壽量品壽命無數劫
これぞまこと佛の道にいりしよりえてし命はつくるものかは　同

○得入無上道速成就佛身
まどふ人の心の行にしたがふや上なき道の知るべなるらむ　同

○同
わけいりしゆきのみ山のつもりにはいちじるかりし有明の月　西行上人

○現有滅不滅
續古釋教　月詣釋教
かりそめに夜半の煙とのぼりしやわしの高峯にかへる（か續古）白雲　俊成卿

○常在靈鷲山
わしの山法をこの葉にかきとめて花の紐とくしかのそのかな　家隆卿

○分別功德品不久詣道場
いそぎゆく宿にかはらぬ道なれや五つのしなも四つの誠も　慈鎭和尚

○若坐若經行除睡常攝心
おこたらず常に心ををさめつゝいつかうき世の眠りさむべき　俊成卿

○若坐若立若經行所
たちゐにもあゆく草葉の露ばかり心をほかにちらさずもがな　西行上人

から國や敎へ嬉しきつちはしもそのまゝをこそ違へざりけめ　西行上人

傳ひゆくいそぢの末の山の井にみのりの水をくみてしるかな　慈鎭和尙

新勅
谷河のながれの末をくむ人もきくはいかゞはしるしありける　俊成卿

さ夜更けていそぢにつたふ濱千鳥ききつゝ人も夢はさむなり　藤原爲顯

嬉しきはつひにすむべきみ山路の草もゆるがぬのりの秋風　慈鎭和尙

濁りなく清き心に磨かれて身こそますみのかゞみなりけれ　俊成卿

まし／＼て悟る思ひはほかならじ我が嘆きをば我しるなれば　西行上人

萬代を衣のいはにたゝみあけてありがたくてぞ法はききける　同

二十あまり八つてふ文字に顯はれて佛の種はかくれざりけり　慈鎭和尙

その上（かみ）のおらきたぶさの杖にこそつひにかゝりて導かれけれ　俊成卿

くらぶ山かこふしばやのうちまでに心をさめぬ所やはある　西行上人

法の花に佛のたねを結ぶことを歎ふまことと聞くぞうれしき　慈鎭和尙

この法をこのごろたもつこれぞこの佛の道に定めたる人　同

あふぎ思ふみ法の風に雲きえてわが爲にすむ月をみるかな　民部卿雅有

みたびなでて契りし君の勅なればけふまで誰もその示敎りき　慈鎭

さま／＼にきそのかけ路を傳ひ入りて奥をしりつゝ歸る山人　西行

○隨喜功德品如說而修行其福不可限
○如是展轉敎
○最後第五十聞一偈隨喜
○同品五十展轉隨喜功德
○法師功德品是人持此經安住希有地
○又如淨明鏡悉見諸色像
○唯獨自明了餘人所不見
　常不輕品時乃得聞是法華經
○我深敬汝等
○百千萬億之衆亦遣往
○神力品如來一切秘要之藏
○於我滅度後應受持斯經是人於佛道決定無有疑
○同文
○能持是經者則爲已見我
○囑累品如世尊勅
○佛之智慧如來智慧自然智慧

○今以付囑汝等
哀れけふみ法の末を開くことも讓りおきけるしるしなりけり　俊成

○同品心
行く末に世にひろめよと三度なで三たびさづけし法はこの法　雅有卿

○藥王品容顔甚奇妙光明照十方
花をわくる峯の朝日の影はやがて有明の月を磨くなりけり　西行

○廣宣流布
（玉葉釋教）法の花ちらぬやどこそなかりけれわしの高峯の山おろしの風　慈鎭

○即往安樂世界
たのむかな露の命のきゆる時はちすの上にうつしおくなる　俊成卿

○妙音品乃衆難處皆能救濟
あらき海きびしき山の中なれどたへなる聲は隔てざりけり　同

○正使和合百千萬月其而（面イ）貌端正
わが心さやけき影にすむものをあるよの月を日とつみるだに　西行

○八萬四千衆寶蓮花
鷲の山あまたはちすのひらけしを驚きながらしる人ぞなき　慈鎭

○普門品施無畏者
おそれなき道にみちびく聖こそ我が名にたてて人にしらるれ　同

○弘誓深如海歴劫不思議
ちかひける心のやがてうみなれば人を渡すもわづらひもなし　俊成卿

○同文
おしてるや深き誓ひの大網に引かれむことの頼もしきかな　西行

○陀羅尼品乃至夢中亦復莫惱
夢の中にさむる悟りのありければ苦しみなしと說きける物を

○同文
うつゝには更にもいはずぬば玉の夢の中にもはなれやはする　俊成卿

○羅刹女等
十の名を法のむしろにききしよりげになつかしき妹が言のは　慈鎭

○嚴王品願母放我等出家作沙門
たらちねを導かむとやたらちめに請ひしいとまの末ぞ嬉しき　同

○又如一眼之龜値浮木（孔）
同じくば嬉しからまし天のがは法をたづねしうき木なりせば　西行

○同文
我やこの浮木にあへる龜ならむこふはふれども法はしらぬを　俊成

○同品心
つちに入り天にのぼりて火をいだし水を流すもたらちねの爲　雅有卿

○勧發品成就四法
法の水を佛のみなにつたふとて四つの心に結びいれける　慈鎭

○卽往兜率天上
はるかなるその曉をまたずとも空の景色はみつべかりける　俊成卿

○若爲世中其有受持是經典者我當
あはれみの名殘を花もとゞめけりにごる思ひの水すまぬよに　西行

○釋敎歌中
流れくる玉のいづみのかげなれや霜おくつきの有明の空　慈鎭

○南北百番歌合
月のすむ都は昔まどひいでぬいくよかくらき道に迷はむ　後京極攝政

○誓佛智慧水永洗煩惱塵
のこらめや心の玉に水すまばよゝにつもれるちり深くとも　八條院高倉

○十講當座歌合
敎へおくまことの道のふかきこそ山のすぎふの雪にしらるれ　安嘉門院四條

○久安百首、涅槃經一切衆生悉有佛性
もろ人の心のうちにすむ月をいかなる罪の雲かくすらむ　左京大夫顯輔卿

○同經心
玉葉釋敎
ふたつなき玉をとめたる元結のとく事かたき法とこそきけ　待賢門院堀川

○同
ふたつなき法にあはずば影はなれ五つの雲もはれずやあらまし　上西門院兵衛

○寺にて丈六の佛をつくり奉りて供養すとて
新拾釋敎　康資王母集
いにしへのつるの林のみゆきかと思ひとくこそ哀れなりけれ　贍西上人

○題不知
花咲きしつるの林のそのかみを吉野の山の雲にみしかな　西行上人

○大比叡社十五番歌合
しがの浦の浪にかげをも宿すかなわしのみ山の有明の月　慈鎭

○四季百首御歌
うれしくも卯月の七日明くる日やこのよに佛むまれたまひし　同

○家集、舍利講雪中聞法
わしの山なごりをあとのしるべにて雪ふみわくる法の庭人　寂蓮

○建保三年内大臣家百首、釋迦
迎へこし姿も月もさやかにてうき世をてらすさがの山本　從二位家隆卿

○久安百首、一道無獨一乘佛性
しな／＼に四つの車をすゝめずばのり外れたる人やあらまし　前參議教長

○法花經妙莊嚴王品
皇のみゆきをいでてみざりせば今日まで世には眠まざらまし　左京大夫顯輔

○千五百番歌合
新拾釋教
谷の水峯のあらしを忍びてものりのたきゞにあふぞうれしき　寂蓮法師

○春雨するに聖のもとへ
一乘の雨ふるけふや妙法のはちすの池のみづまさるらむ　主殿

○久安百首、化縁大乘五性各別
わが身にも佛のたねのありなしは花の桂をかけてこそしれ　前參議教長卿

○眞言の心を
大日の種子よりいでてさまやかたさまやかたまた尊形となる　鎌倉右大臣

○藥師寺龍宮をうつす事を
十あまりふたつの誓ひ深くしてなみの下なるみやつくりかも　殷富門院大輔

○生死のやみに六道生死輪廻する心を
すべらぎのあづけられたるはこ捨てて今は同じく中試みむ　花山院御製

○同
つり針や食はせてしかど緒を弱み西こふるまに年はつきつゝ　後京極攝政

○同
よぶこ鳥うきよの人をさそひいでて入於深山思惟佛道　同

○建長七年百二十八首詠歌
かの岸にこのたびわたせ法の舟むまれてしぬるふる里の河　前中納言定家卿

○釋歌中
うちもねず宵々ごとに尋ねみよまことの道は關守もなし　法印定圓

○應無所住而生其心
またでみる姿ばかりや有明の月にわかれぬ名殘なりける　他阿上人

○六帖題
新六五
色ふかき法の衣のすみぞめは三世の佛のかたみにぞきる　衣笠内大臣

○同
同二
つきてその罪深きのりのみゐ（ゐはイ）流れくむ身となるがたふとき　光俊朝臣

○日吉社百首和歌
ごまの火の灰なき灰に種蒔きつまきつる種はうするものかは　慈鎮

○同
たのめとや昔聖のたつそまにたえにし斧のまた音のする　同

○同
いかにして罪の薪をこり果ててわがちゑの火にたきつくさまし　同

○釋教歌中
現葉
あか水にたゝく氷はとけやらでしきみを雪にすゝぎつるかな　法印印澄

○百首歌
古今六
もゝ草にかく水葉のあとはみなひとつみ法の海にいるらし　殷富門院大輔

○花摘らせけるをしきに霰のふりかゝりければ
しきみおくあかのをしきのふちなくば何に霰の玉とまらまし　西行

○百首和歌
けさみれば佛のあかにつむ花もいづれなるらむ雪のむもれ木　後鳥羽院

○六帖題
新六六
しきみつむ竹の花籠のはかなきも誠の道にいらざらめやは　衣笠内大臣

○家集
求むるにしたがふ法のたまなれば光さすがに失せぬとをしれ　俊頼

此の歌は藏人いへときがまもりをおとしたりけるを見つけてもとむるときゝてこれはそれかとへずゐくのたまのもとにむすびつけてつかはしけると云々

○百首歌、釋教
ふく風や七重寶樹に通ふらむこゝろ涼しきこのゆふべかな　八條院高倉

○成尊（尋イ）法師入唐の時
かの岸にほどなくこそは行きてこめ心にかなふ法の筏は　成尊（尋イ）法師母

○同
恨めしくこぎはなれぬるうき舟を法の筏とたのみけるかな　同

○家集、釋教歌
曉のはちすのうてないろ〳〵にしみまさるなり絲たけの聲　殷富門院大輔

○同
曇りなきるりの扉にさく花は遲れぬ影の色にぞありける　同

はれがたき惑ひの雲にくらされて六つの道にやいま歸るべき　六條院宣旨
此の歌はすぎにけむ世のつみのほどもおしはかられていまもいかゞと
あはれにてと云々

○百首歌中
六つの道四つの姿のかず〳〵に幾たびわが身うけつくしけむ　衣笠内大臣

蓮こそ野にも山にもさきにけれ佛のみちはこれよりぞゆく　慈鎮

○天王寺百首
三業を口業ばかりはかきつくるいまふたつをば君ぞしるらむ　同

○靈（聖イ）眞子十五番歌合
九品の玉のうてなの光こそみつの靈（聖イ）のかげとなりけれ　同

○百首御歌、釋教
さとりえて西に心をかくるかないけのはちすに法の白浪　同

すてゆかで子を思ふ鹿のしるべより假の宿りは厭ひ出でにき　家隆
この歌は天王寺繪堂慈鎭和尙つくりいでてうしろの障子に九品往生人
かゝれ侍りける時中品下生の人の心をよみけると云々

○花の盛り極樂を思ひやらせ給ひける御歌
續古釋敎
あだにちる花みるだにもある物をたかからの植木思ひこそやれ　花山院

○觀無量壽經日想觀を
いろ〳〵の雲のはたてをかざりにて入日やみだの光なるらむ　俊頼

○久安百首
西方にあみだ佛はますなればことわりなりやなもとゝなふる　季通朝臣

○同
ふだらくのみ山がくれに年をへてすむらむ月を思ひこそやれ　前大納言隆季

○補陀落山
浪あらき南の海のはなれ島たがためのりの舟通ふらむ　前大僧正隆辨

○久安百首、不動
立ちさらぬ誓ひたのめばおのづから花の臺にのぼらざらめや　花園左大臣家小大進

○毎日一首中、如意輪
なにごとも心の如く輪國（圓歟）の法のはじめにめぐりあひぬる　民部卿爲家

○同[illegible]中
観音の大慈大悲ぞむかふべき八葉のはすのむねに開きて　同

○同年毎日一首中
世のうさを數は取るともおのづからてにくる玉のをはり亂すな　同

○文永四年毎日一首中、寂光を
しづかなる光の都たづぬればむねの蓮の月ぞすみける　同

○同八年毎日一首中、十種供養
今日はるゝ空の光もしるきかな千種の法を（の歟）花のたむけに　[illegible]　同

○建長五年毎日一首中、自德
今日むくふさきの七世のかぞいろはもらさず救ふ誠ともがな　同

○地獄の繪をみてよめる
このみみし劍の枝にのぼれとてしもとのひしを身にたつるかな　西行

○同
つみ人はしでの山ぢの柚木かなをのの劍に身をわられつゝ　同

○同
ひとつ身を數多に風の吹ききりてほむらになすぞ悲しかりける　同

○同
何よりは舌ぬく苦こそ悲しけれ思ふことをもいはせじとはた　同

○くろきほむらの中にをとこ女もゆる所を
なべてなき黒きほむらの苦しみはよるの思ひの報いなるべし　同

同天王寺にまうで給へる時百首御歌
南無歸命敬禮救世くわんぜおんかかる契りはあらじとぞ思ふ　慈鎭和尚

○同
塔のうへにのこる光にはしたかの雲より通ふ跡ぞ嬉しき　同

○同

（風雅釋教）般若臺にをさめ置きてし法花經も夢とのうちぞうつゝにはみし　同

○同

のりのみちやさぞ面影にたつた山けさの霞の天のは衣　同

○同

なには潟法の花園ひらけそめて移ろふにこそ露は置きけれ　同

○同

極樂とこの津の國とあはれなりあまねき門をあけあはせつゝ　同

○同

東漸のみ法のふねの指南使は西のかたよりきたるなりけれ　同

○同

十あまり七つの誓ひせし人（の拾）はあとふむみよを見るよしもがな　同

○同

わが太子四方の八町のうちをだになほ化しかぬる心苦しき（さイ）　同

○同

わが寺の淨土まゐりのあそびこそあさき物から誠なりけれ　同

○佛の迎へを待つ心を

（古今歌）住吉とみだのみくにを聞きしよりいとゞ迎へをまつとしらずや　僧都源信

○天王寺にて病かぎりになりにける最後の歌七百首中

なにはの海雲居になして詠むれば遠くもみえずみだのみくには　從二位家隆

○日想觀を

海にいるなにはの浦の夕日こそ西にさしける光なりけり　爲家

○百首歌、諸佛光明所不能及

あまつ空月にあらそふ影はあらじかず／＼みゆる星の宿りも　藤原爲顯

○家集、おほぞらに常に樂音する心

（續千釋教）ふえのねに琴のしらべの通へるは棚びく雲に風や吹くらむ　俊頼朝臣

○伺知本願重願不虛

僞りのあるをならひの言の葉もちかふになればたのみやはせぬ　中務卿のみこ

○三心の心を

二つなく頼むになればおのづからみつの心はありけるものを　權僧正公朝

○觀經禁母緣を

はゝき木に何のうらをか結びけむところもおかぬ秋の霜かな　同

なほ頼めよもの佛のたちそひて守る我が身ぞ身をな惜しみそ　證空上人

此の歌は觀念法門五種增上緣中護念增上緣の心を

○他力の心を

現存
みても知れわれとはなれぬ夢の世の暗をてらして出づる月影　圓空上人

○行者歌中

みる度に珍らしきかな極樂のこがねの花のちらぬ木ずゑは　行仙上人

西へ行くまよひ悟りの道たえて南無あみだ佛の聲にまかせよ　一遍上人

此の歌はある人にしへゆく道をあまたにききわけてまよひぬべきなり

かとさだめむとよみたりけるかへしにつかはしけると云々

○釋教歌中

あともなき雲にあらそふ心こそなか／＼月のさはりなりけれ　同

○同

玉葉釋教
みなをよぶ人はあま夜の月なれや雲はれねども西へこそゆけ　同

○同

心より心をうるとこゝろえてこゝろに迷ふ心なりけり　同

○同

心をばこゝろの跡とこゝろえて心のなきをこゝろとはせよ　同

○同

心をばいかなる物としらねども名を唱ふれば佛とぞなる　同

○同

なにかなふ心は西にうつせみのもぬけ果てたる聲ぞ涼しき　同

心よりほかにぞのりの舟はあるしらぬも沈むしるもうかばず　他阿上人

此の歌或時人を教化ありけるに三業の外に稱名といふ事なむ心えずふ

るき聖の歌にも一心よりほかにはのりのふれもなししらればしづむし

れば しづまず」とこそあれと申しける人の返事と云々

○三心發得の心を

西へゆく月をば風もゆるがさずうきたる雲ぞ空にたゞよふ　他阿上人

○畢竟空の心を

いづくにも涯なき空を出でてゆく月日のみする色はとまらず　同

○法文の心を

すますべき山には雲のふるければ出でてぞみつる古里の月　同

○同

暗きより暗きにみつゝ夢路ぞと知るやねざめの初めなるらむ　同

○同

いきながらみだの誓ひに法の舟さして終りを待つぞうれしき　同

○同

かちをさへわれとはとらぬ浪路かな西ふく風に舟をまかせて　同

○同

さけばこそちらぬ櫻はあらはなれ散らずばさかぬ花を見ましや　同

○同

山のはにこゝろの月を先だてておいの姿ぞ西にかたぶく　同

○永仁三年歳暮の別時後業繋讃歌中

いとなみのひまゆく（なイ）駒に法しらばなどか誠の道にむかはぬ　同

○同

身を思ふ心のなかをたがはずばみには心ぞあだとなるべき　同

○同

苦しみとなげきをうけば我が心いつゝの慾にあひみち（く歟）なせそ　同

○念佛の歌

何事を思ふ思ひもはかりなき命のみなにたのみてぞふる　民部卿爲家

光させばさめぬかなへの湯なれども蓮の池になが（るイ）めるものを　西行上人

此の歌は地獄の繪に阿彌陀の光願にまかせて重業障の物をきらはず地獄を照らし給ふによりて地獄のかなへ湯清涼の池になりて蓮のひらけ

○聖衆倶會樂
○十題百首十如是前還
○極樂六時讃を

たる所をかきあらはせるをみてよめると云々

池の上にはちすのいたをしきみてゝ浪ゐる袖を風のたくめり　西行上人

すみまさる池の心にあらはれて黄金の峯に浪ぞよせける　前中納言定家卿

ほのかなる雲のあなたの笛の音もきけば佛のみ法なりけり　皇太后宮大夫俊成卿

此の歌は晨朝（時刻イ）朝に定より出程鷄に天の樂を聞く

朝まだきつゆけき花を折る程に玉しく庭にたまぞ（でイ）ちりしく　同

此の歌は黄金瑠璃の庭に出でて人々共に花を採る

曇りなき玉の臺にのぼりてぞはるかなるよのことも見えける　同

此の歌は日中時宮殿樓閣に登りて他方界を見む

新勅撰教
白妙に月か雪かとみえつるは西にさしける光なりけり　同

此の歌は日沒時西界悉く白銀光盛りなり普賢大士（にて新釈）來至すと

いろ〳〵に雲より花ぞちりまがふこれをや法の雨と云ふらむ　同

此の歌は時に大衆法を聞き歡喜讃仰せむ即時に自然に無數の妙花散亂す

かへりくる玉のうてなも花のうちも光は同じすみかなりけり　同

此の歌は初夜の時見佛聞法事畢りて本の坊に歸るべし或は金蓮花の中

金色淨土の如くなり或は瑠璃閣の中淨瑠璃淨土のごとくなり
深き夜の光も聲もしづかにて月のみかほをさやかにぞみる　同
此の歌は中夜時夜の境静かにて漸く半夜に至る程三五の人々共に出でて金繩界道歩みつゝ衆寶國土の界境の寂静安樂なるを見る光も聲も淨くして晝の界に異ならむ

新古今釋教
いにしへの尾上のかねに似たるかな岸うつ波のあかつきの聲　同
あけがたは池の蓮もひらくれば玉のすだれに風通ふなり　同
此の歌は曉到りて浪の聲金の岸に寄る程欲レ曙ゝれば風の音珠簾を過ぐる際也

○題不レ知　雲葉　續古今釋教
古にいかなる契りありてかは彌陀に仕ふる身となりにけむ　前律師永觀

○釋教歌中
阿彌陀佛と申すばかりをつとめにて淨土の莊嚴みるぞ嬉しき　源空上人

○同
極樂へつとめてとくと出でたたばみの終りには參りつきなむ　同

○同
おぼつかな誰かいひけむ小松には雲をさゝふるたかまつの枝　同

○同
阿彌陀佛といふより外は津の國の難波の事もあしかりぬべし　同
此の四首歌指南抄中よりかきいだせり

玉釋教
哀れなり日はくれ方になりぬれど西へゆくべき人のなきかな　讀人しらず

○中比ある僧の夢に僧三人行き合はせてよめる歌

雲葉 玉葉釋敎 極樂にゆかむと思ふ心にてなむあみだ佛といふぞみこゝろ

此の歌は或人三心をいかゞ心うべきとて八幡に祈請申しけるに夢にしめし給ひける御歌と云々

玉葉釋敎 いせ島や淸き渚はきてもあれわれはにごれる水に宿らむ　讀人しらず

此の歌は或抄云ひだちの國北郡といふ所に不斷念佛の堂あり善光寺如來を安置したてまつりて律僧と凡俗といづれにて念佛申すべきと思ひわづらひけるに律僧の夢に黑衣の僧來てしめしけると云々

風雅釋敎 待ちかねて恨むとつげよ皆人にいつをつとめて急がざるらむ　同

同 いそげ人みだのみ舟の通ふ世にのりおくれなば誰かわたさむ　同

此の二首は善光寺の如來の御歌となむ

寺

○伊呂波四十七首

れいの聲かねのひゞきも秋ちりし庵も寺も山ふかくして　前中納言定家卿

○家集、月明寺邊

昔と見る月にあくるをしらましや時をつくひの音なかりせば　西行上人

○柿本影供百首

たうたてしあとにはくつなふだらくの南の岸にのこる埋れ木　後九條内大臣

○賀茂社百首續歌

いにしへの三つの寶ぞ忍ばるゝ十五大寺のあとをみるにも　慈鎭和尚

○同
これやさは高野の山にすむこゝろ閼伽振鈴の夕暮のこゑ　同

永久四年百首
はじめなき罪のつもりの悲しさをぬかの聲々くどきつるかな　俊頼

うばそくがおこなふ山の櫻花今日のみゆきの色ぞありける　藤原長能

此の歌は花山院御覽じにありかせ給ふに御伴にさぶらひて山寺にあそぶといふ事など云々

○六條題
新六二
ふくる夜の寺行ひのかねの音にはかつゞみにうちぞ驚く　信實

○寺を
現存六
ながらなる橋本寺もつぐるなりおこさぬ家を何にたとへむ　同

○家集、山寺秋野
野べの末にをばなをみこす山本の紅葉にこもる寺のいし橋　前民部卿雅有

○古寺月
寺深きこのまの門に鐘さえてこの世の秋にみぬ月ぞすむ　同

○文永六年毎日一首中
小倉山今日しぐれぬとつぐるなりふもとの寺の入あひの鐘　爲家

○永仁元年九月十首、古寺暮秋
くれはつる秋もうらめし小倉山ふもとの寺の入相のかね　左近大將內實卿

○同
秋もくれ今日も暮れぬとつぐるかな水の南のいりあひのかね　大納言實泰卿

○嘉元元年式部卿親王家續千首歌
山寺夢
すみなるゝ山路靜けき夜な〳〵に枕の瀧や夢あらふらむ　參議爲相卿

○山寺竹
山ふかき寺のそとものひとむらや世のうきふしにあらぬ吳竹　同

○山寺鳥
つゞらをる道のゆくての峯たかみ蟬にまじれる鳥の聲かな　同

○嘉禎四年百首、山寺
あかすゝぐ水はしきみにおちそへてひとおともせぬ奥の山寺　爲家

○建長四年毎日一首中
○六帖題
○家集
○正治二年百首御歌
○千首歌（みねの山寺）
○光明峯寺入道攝政家百首、古寺紅葉
○山寺にて入相の鐘を聞きて（とほ山寺）
○今方獨方會、遠見山雪
○不ニ相思ニ（おほでら）
（千五百番歌合
○六帖題（みねの大寺）
○家集、山寺（こでら）
（山寺時雨
○文永二年七月白河殿七百首（みてら）
○文應元年七社百首（たちばなでら）
○六帖題

山寺のあけ行くかねにうちそへて枕のゆめをあらふたきつせ　爲家
新六六 しきみつむ時のまもなく山寺にわきて一度あかたてまつる　正三位知家
入あひの音のみならず山寺はふみよむ聲もあはれなりけり　西行
雪イ 霧ふかしそこともしらぬ山寺にはるかにひゞくれいの音かな　後鳥羽院
風雅中 あかだなの花のかれ葉もうちしめり朝霧ふかしみねの山寺　爲家卿
そばだつる枕におつる鐘の音も紅葉をいつかみねの山寺　定家卿
入あひの遠山寺のかねのこゑあな心ぼそわが身いくよぞ　基俊
みわたせば遠山寺の塔の上にふりかさねたるこゝのわたの雪　源仲正
萬四 六帖五 相おもはぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづくがごと　讀人しらず
朝夕はたのむとなしに大寺の空しき雲をうちながめつゝ　前中納言定家卿
新六二 たのもしな國を守れと誓ひおきしわがたつそまの峯の大寺　民部卿爲家
すまばやな峯のしきみの花を折り谷の水くむ山のこ寺に　源仲正
時雨する山のこでらは花につむしきみが上ぞつゆけかりける　同
白河やちかきみ寺の緑櫻としのをながく君ぞさかえむ　花山院内大臣
いにしへにたが袖のかをうつしおきて花立花の寺となしけむ　民部卿爲家
新六二 今よりは苔の下にてみえずとも空より花のふりしところぞ　光俊

○題不知

萬十六　たち花の寺のなかやに我ゐねしうなゐばなりは神あげつらむ　讀人しらず

○久永（仁イ）八年毎日一首中（花の山寺）

さかこえてのぼりやすくぞ思ひやるたむくる法の花の山寺　民部卿爲家

○建保元年八月十五月十首歌合、古寺月

玉秋下　またたぐひ嵐の山のふもと寺杉のいほりの有明のつき　皇太后宮大夫橘成

○題不知（ほうりん、山城）

歌林　おしなべて霞める野べのさかなれば法のわにさへ立ち廻りけり　源有房

法のわにめぐり車のしるしにやおもはぬ外の人のとひけむ　殷富門院大輔

此の歌は人々いざなひて大井河紅葉の次に法輪へ參るにときはのほどよりいよのかみもろかぬをもてのりたる車をつかはされしかばよめる

と云々

○建長四年毎日一首中、法輪寺

くももみなむなしき空に藏しつゝすめる嵐の山のはのつき　爲家

○弘長元年四月八日讃忽百首（さがのの寺）

月のこるさがの寺のかねの音に常にうき世の夢やさめなむ　同

（洞院攝政家百首、祝（法成寺、山城

君を守る法なる寺のまき柱あらためたてて千世もくちせじ　家長朝臣

○文應元年毎日一首中（雲居寺、山城）

山櫻花のさかりに尋ねきてくもゐる寺の名をみつるかな　爲家卿

○深夜歸鴈

雲ゐ寺ふくかひきけば歸るなる鴈がねにこそよはなりにけれ　源仲正

○題不レ知（兼作）

すむ月をみだのみ顏に眺むれば雲ゐる寺も名のみなりけり　式部大夫定業

○雲居寺歌合

歌林　雲ゐでらかすみふきとく春風にみだれてけりな青柳の絲　花園左大臣家小大進

○東山にて月あかき夜

久方はてにとるばかりなりにけり雲のゐるてふ寺にやどりて　惠慶法師

○建保三年内大臣家百首（阿彌陀）
しらぬよのふかき煙もはれぬらむ雲ゐるてらをいづる光に　家隆卿

○二夜百首佛寺五首中（高野、紀伊）
ながき夜に朝日まつまの心こそたかののおくに有明の月　後京極攝政

○同（しが寺、近江）
波にたぐふかねの音こそあはれなれ夕さびしきしがの山寺　同

○同（はつせ、大和）
雲にふす人の心ぞしられける今日をはつせのおくの山本　同

○寺
六一 はつせへと思ひ立田の山遠み駒ひきとめてをるすべもなし　讀人しらず

○西大寺（西のおほでら）
さりともと西の大寺頼むかなそなたのねがひともしかりしを　殷富門院大輔

○天王百首（なにはのてら）
西へとくむかふる君をたのむ道はなにはの寺の常なりけり　慈鎭

○同
昔より法のはちすをいけにみてこの大寺に心すみつゝ　同

○同
この寺を拜むしるしの石の上にかたく契りをむすびけるかな　同

○神力品即是道場
この國のなにはの浦の大寺の額のめいこそまことなりけれ　同

○康十二年毎日一首中、天王寺西門）
世をすくふ誓ひの海の入日こそなにはの水の照らすなりけれ　天王寺西門

○二夜百首佛寺五首中
難波江やひじりのあとに年くれぬ月日のいるを思ひおくりて　後京極攝政

○寺（雲林、山城）
六二 白河はたましけりともみえなくに雲の林をあらしつるかな　讀人しらず

○尋ニ花到ニ古寺ー
これやきく雲の林の寺ならむ花を尋ぬるこゝろやすめむ　西行上人

○たはぶれ歌とてよめる（たかを寺、山城）
高尾寺あはれなりけるつとめかなやすらひ花と鼓うつなり　同

○五十首中、古寺花（いその神寺、大和）
昔よりうゑけむときを人しれず花にふりぬるいその神寺　後鳥羽院宮内卿

○六帖題

新六二 石の上なにあふ寺の鐘のおとに古くなるよを聞くぞ悲しき　爲家

○同題、寺

わたつ海の花のあしたをまつべくははやわき返れ三井の玉水　權僧正公朝

○百首御歌、名所秋（とよらの寺大和）

鐘の音によもぎが露ぞおきまさるとよらの寺の秋のよの月　土御門院御製

○家集、竹上霜

かづらきやとよらの寺の竹のはに冰れる霜はとづるよもなし　家隆

○古寺紅葉

同じえもにしこそわきてそめつゝめとよらの寺の秋の紅葉ば　藤原爲顯

○建長七年顯朝卿家千首

苔深きとよらの寺は山ぶしのおこなひ聲もさびしかりけり　從二位行家卿

○禪林寺時鳥をききて（新拾イ）

新拾雜中 しのびねも音なかりけり時鳥こやしづかなる林なるらむ　前律師永觀

○家集、舟寺に僧ゐて經よむ所（ふねでら、攝津）

舟寺にのりうかぶなり夜もすがら聲をほにあげてよみすましつゝ　俊賴

○永久四年百首（しみづ寺、山城）

門を出でば尋ねてゆかむ清水寺名にたがはずばすみやとまると　藤原忠房

○清寺見戀（清水）

歌林 をがみするかために妹がみられつゝいづらは心清水のたき　俊惠法師

○六帖題、山寺

新六二 いたづらに行き來をとむる關寺はむつの道をや許さざるらむ　衣笠內大臣

○大僧正源忠泉障子繪、關寺秋

逢坂や霜をかさぬる寺ふりてかねのひゞきもすめる月影　前大僧正道瑜

○六帖題（あすかの寺、大和）

現存六 いかばかり光をそへむ朝日まつあすかの寺の法のともし火　正三位知家

○嘉元元年式部卿親王家千首歌、古寺月

みるまゝに影こそしらめとぶ鳥のあすかの寺の明方の月　爲相卿

○寂蓮法師のもとにつかはしける歌中（ひえの山寺、近江）

法の水あさくなりゆく末の世を思へばかなしひえの山寺　惠鎭和尚

○賀茂百首和歌

ひえの山竪義や近くなりぬらむ夜半にさえたる問答のこゑ　同

木夫和歌抄巻第三十四　終

夫木和歌抄　巻第三十五

雑部十七

題

帝王　院　春宮　中宮　親王　將軍
大臣　歌人　民　翁　法師　尼
優婆塞　父　稚子　未通女　島子　婦人
女　妹　我妹子　妻　使　商人
海人　夷　田子　匠　遊女　遊士
傀儡　樵夫　山老　健男　長　賤人
總角　垂髪子　奴僕　里子　唐人　楊貴妃
李夫人　正昭君　上陽人　陵園妾

帝王

○題不レ知（皇自祖）

萬十一
すめらぎの神の御門をかしこみとさぶらふ時にあへる君かも　讀人しらず

○大王

萬三
すめらぎの遠つみかどとあり通ふしまとをみれば神代しぞ思ふ　人丸

○長歌

萬四
天下の　しろしめしけむ　すめらぎの　神のみことの　おほ　同

みやは　こゝときけども

○同

萬三 すめらぎの　神のみことの　しきませる　くにのしろせる　赤人
みゆはしも　さはにあれども　しま山の　よろしきくにと

○讀不知

萬六 明つかみ我が天皇の天の下八洲の中に國はしも多くしあれども　讀人しらず

○同

萬六 やすみしし　我がおほぎみの　たかしきし　大和のくには　同
すめらぎの　神の御代より　しきませる　くににしあれば

○同

萬三 すめらぎの　つかはししまゝ　ひなさかる　國をさめにと　同
むらとりの　あさ立ちゆけば

○同

萬一 とほつかみ　わが大君の　みゆきよき　山ごしの風の　ひと　同
りをる　わが衣手に　あさゆふに

○同

萬一 やすみしし　わがおほぎみの　あめのした　申したまへば　人丸
よろづよに　しるしもあらむと

○同

萬十七 おほぎみの　まけのまに／＼　しなさかる　こしを治めに　讀人しらず
いでてこし　ますらわれすら

○讀不知

萬十七 おほぎみの　みことかしこみ　あしびきの　山野さはらず　同
あまさかる　ひなををさむる　ますらをや

○神龜五年秋八月作歌

萬九 ありしあひだに　うつせみの　よのひとなれば　おほぎみの　笠金村
みことかしこみ　あまさかる　ひなをさめにと

○天平元年冬十月作歌

萬九 うつせみの　よの人なれば　おほぎみの　みことかしこみ　同
しきしまの　やまとのくにの　いそのかみ　ふりにしさとを

○題不レ知

萬 我がみかど物なおほしそすめ神のつきて給へる我ならなくに　讀人しらず

○同

萬二 我がみかど千代と言葉に榮えむとおもひてありし我し悲しも　同

○同

萬二 大君は神にしませばあま雲のいほへの下にかくれ給ひぬ　同

○同

萬十二 大君のみ笠にぬへるあかま菅ありつゝみれどことなきわかくも　同

○長歌

萬六 すべらぎのみゆきのまにま我妹子が手枕まかす月ぞへにける　納中言家持卿

○題不知

萬三 仕のえの岸の松原とほつかみ我がおほぎみのみゆきしところ　角丸

○同

萬十一 おほぎみのしほやく蜑の藤衣なるとはすれどいやめづらしも　讀人しらず
萬三 大君のむつたまあへや豐國のかゞみの山を宮とさだむる
萬三 やすみしゝるわが大君のみけくにはやまともこゝに同じとぞ思ふ　師大伴卿

○題不レ知

萬三 やすみしる我が大君のたかてらすひのわがみこも大君とのに　人丸
萬三 大君はちとせにまさむ白雲もみふぬの山にたゆる日あらめや　春日王

○同

萬十七 ふる雪のしらかみまでに大君に仕へまつれば尊くもあるか　橘左大臣

○喜多院入道二品親王家五十首、祝
つきもせぬわが大君の流れかなみのりの水はとたびすむとも　前大納言經房卿

院

○正治二年百首
玉椿ふたゝび色はかはるともはこやの山の御代はつきせじ　後京極攝政

○同
よろづ代と常磐かきはに賴むかな藐姑射の山の君のみかげを　前中納言定家卿

○同
てらしみむやほ萬づ代ぞ曇りなきはこやの山の峯にすむ月　俊成卿女

春宮

○正治二年百首
くれ竹のそのよりうつる春の宮かねても千代の色はみえにき　後京極攝政

○百首歌、祝春宮
雲のうへも春のみ山の萬づ代も松と竹とのすゑにたとへば　參議雅經卿

○弘安七年春宮御方三首歌、見レ花
風の音ものどけき春の宮のうちに盛り久しき花をみるかかな　大藏卿隆持

中宮

○寛喜元年女御入内御屏風、京花（喜イ）
人家天皇
重ねてもかねて千年のしるきかな春に立ちそふ秋の宮人　從二位家隆卿

○洞院攝政家百首
月も日も影をならべて秋の宮くもらでのみや千代もめぐらむ　藻壁門院但馬

親王

○喜多院入道二品親王家五十首、祝
色かへぬ竹の園なる鶯はいくよろづ代の春をまつらむ　野宮左大臣

○同
年をへておひそふ竹の園のうちにつきせざるべき君の千代かな　大藏卿有家

○弘安元年百首
朝日かげさしさかえ行く竹の園ちよにやちよになほぞ重ねむ　從二位行家卿

緑なる竹のみその萬づ代になほもときはの影ぞしげらむ　民部卿爲家

將軍

○家集、將軍
下のおびの結ぶ冰にてをかけて空にぞうくるゆみはりの月　寂蓮法師

大臣

○建保二年内大臣家百首、祝
影なびくみかさの山の藤の花朝日さしいづる雲かとぞ思ふ　從二位家隆卿

○同
影なびく三笠の山にゐる雲の長閑けくもあるか風たゝぬ代は　大藏卿有家

○同
代をてらす影なびく星のくらゐ山なほさかゆかむ末も遙かに　藤原有季朝臣

○題不知
萬一 元明天皇御歌
ますらをの鞆の音すなり武夫の大まうち君たてまつらしも　聖武天皇御製

歌人

○千五百番歌合
かきつむるもくづをいかゞ思ふらむ浪になれたるわかの浦人　第三のみこ

○同
なしつぼの昔のあとに立ちかへりわかのうらにぞ浪のより人　家長朝臣

○文永二年毎日一首中
ためしなき代の煙にことゝはむ時しもいかにわかの浦人　民部卿爲家

○洞院攝政家百首、述懷
たらちねの及ばずとほき跡過ぎてみちをきはむるわかの浦人　定家卿

民

○御集、冬御歌中
おほふべき袖こそなけれ世の中に貧しき民のさむきよな〳〵　後京極攝政

○百首御歌
古來歌
いつまでと夜寒の衣ぬぎかけてあはれと民を思ひしりけむ　後一條入道關白

○題不レ知
現葉　新後撰雜中
むくゆべき世のことわりは思へども民の力を助けやはする　同

○毎日一首中、民
思ふべき民のつかさのなばかりになげく力のやすむ日もなし　爲家卿

○建長四年毎日一首中
いかにして民の心をうるほさむ小田の早苗に雨をまかせて　同

○同
五月雨のふるにかひあるうるひかな民のたもてる雨の下とて　同

○六十五韻字歌酒々好風吹北陽宜森林勝正中總
すべらぎの昔あまねきめぐみをやこの六月の民に施す　定家卿

○最勝四天王院名所御障子
君が代は誰もしかまのいちじるく年ある民のあまの塩かな　同

○同
いとまなきしかまのいちに立つ民もしのに數そふ君が代の秋　俊成卿

○家集、述懷
世の中はくさとるなみぞこゑ／＼にききもならはぬ曙の空　家隆卿

○六帖題
新六一 歸るさのいへぢを（に新六）急ぐ道（國同）にいでてゆふとゞろきの民の聲かな　信實朝臣

○建長八年百首歌合
海山もたちそふ民の煙にて御代の盛りはあらはれにけり　土御門院小（イ）宰相

○堀河院御時百首、雪
吉野川とをつ川上雪ふればけぶりやなみのいへゐなるらむ　中納言國信卿

翁

○六帖題御歌一首
この濱につりする翁あはれなり車のみぎにたれかのすべき　中務卿みこ

○翁
漢故事和歌集 深山よりいでてや君に仕へましよつのおきなの今もありせば　同

○百首御歌
心をばきたのおきなにならへども又立ち歸る駒だにもなし　土御門院御製

○六帖題
新六二 心をばいかにならはむ方もなしきたの翁に身はなりぬとも　衣笠内大臣

○同
同 いにしへのきたの翁もある物をなどあやにくに世を嘆くらむ　正三位知家卿

○おきな
清き名のおきならいかに心にはいでぬる家に身を宿しける　同

○六帖題、おきな
世の中はきたの翁の馬なれやよきもあしきも後をしらねば　權僧正公朝

○正治二年百首
いつのまに霜の翁となりぬらむ菊をば花のおとゞと思ふに　前大納言隆房

○六百番歌合
若菜つむ野原をみればたかとりの翁はむべもたはれあひけり　法橋顯昭

○六帖題、杖
六四 代々をへて古りたる翁杖つきて花のありかをみるよしもがな　讀人しらず

○翁
六三一 わたつみの翁も花はかざしけり春の至らぬところなければ　同

○永久四年百首
本ノマヽ しらなひくあこの濱屋に年ふりていか(ヤイ)見にましはしめられにけり　俊頼朝臣

○同
同 朝露をひさしき物と思ふ世に佛のあにいかでなりけむ　仲實朝臣

○堀河院御時百首、野
堀河百首 はる間に登りて見けむたかとりがこゝのこらの事をしぞ思ふ　師時

此の歌萬葉集の詞に値(昔萬イ)有二老翁一號曰二竹取翁一(也此翁　之萬)季春月登レ丘遠望、忽聽(値萬)レ煮レ羹、九箇女(子也萬)百嬌無レ儔花容無上署レ之といへり

法師

○六帖題、法師
新六二 かみをそり衣をそむる色なくばなにつたへて法をきかまし　爲家

○同
同 たかの山あけむ光をまつ人の長きよけたぬ法のともし火　知家

○同
同 あさな／＼あかの水くみしきみつみ苔の袂は岩にふれつゝ　光俊

○同
同五 山ぶしの姿けどほきかは衣こゝろこはくも身にそはぬかな　信實

○同題歌に
世の常の髪のしわざといさむれば佛をつりしのりの師もあり　同

○老若五十首歌合
山ぶしのほらふく峯の夕霧にそこともしらぬすゞのうは風　寂蓮法師

尼

○六帖題、尼

新六二 黒髪の色はかはらぬさけ尼のまことの筋に身は磨きつゝ　衣笠内大臣

○同

同 玉かづらかけし姿を改めておこなふ道はみるもかしこし　爲家

○同

同 一筋にいつゝのさはりいとひてや思ひすてても道にいるらむ　正三位知家

○同

同 なほざりの昔のけさの行く末に（へだ新六）かゝる悟りの身とぞなりぬる（け新六）　光信朝臣

優婆塞

○三百六十首中

うばそくがあさなにきざむ松の葉は山の雪にや埋もれぬらむ　好忠

○堀河院御時百首

うばそくは行ひすらし眞木の立つあら山中にまぶしさしつゝ　權中納言師時卿

父

○題不知

萬二十 たち花のみえりの里に父をおきて道のなかぢは行きがてぬかも　大部足丸

○同

六二 同じ色の松と竹とはたらちねの親こひさしきためしなりけり　貫之

○同

六四 拾遺四 たらちねの親のいさむるうたゝねは物思ふ時の業にぞありける　伊勢

○家集中

かぞいろはいかに哀れと思ふらむ三年になりぬ足たたずして　匡房卿

（六帖題、父
新六二
かぞいろのみしよの花の衣手にかけきやかゝる墨ぞめの袖　知　宗

（同題詠歌
君のため人を尋ねばたらちねの親につかふる心をぞみむ　中務のみこ鎌倉

稚　子

（題不知
萬十二
緑子のすもりめのとは求むてふちのめや君が重くとむらむ　讀人しらず

（同
同
我かせこにこふとにしあらじ緑子の夜泣きをしつゝいねがてらく　同

（雑歌
常磐なる松のみどりご君が經む千年の影にあらざらめやは　花山院

（六帖題
新六二
緑子のたぶさのなかの紅葉ばをあるもの顔に知るもはかなし　衣笠内大臣

（同
同
捨ててゆく親慕ふ子の片いざり世にたちかねて音こそなかるれ　爲　家

（同
同
世の中はいとけなきこのおもきらひみしがなきにはねこそ泣かるれ　知　宗

（同
同
ひとすぢにあるものとのみ緑子の鏡の影をとるがはかなき　光　俊

（同題
新六四
をさなごの春の初めのいたゞきにつかさくらるは僃へあけつゝ　信　實

（文集百首、眼前唯吾年多
緑ごをありふるまゝの友とみてなれしはうとき夕暮の空　定　家　卿

未通女（をとめ）

（題不知
萬四
をとめごが袖ふる山のみづ垣の久しき代より思ひそめてき　人　丸

〔陸奥國歌〕
萬十四 つくしなる匂ふこゆゑに陸奥のかとりをとめの結ひし紐とく　讀人しらず

○題不レ知
萬九 蘆の屋のうなひ少女がおくつきをゆき(かイ)くと見ては音(なりく)のみし泣かる(ゆイ)　蟲丸

○長歌
萬九 あしのやの　うなひをとめの　やどせこの　かたおひの時に　同
をはなちに　かみたぐまでに　ならびゐて

○題不レ知
萬九 君を待つ松浦の浦のをとめらは常世のくにの蜑をとめかも　讀人しらず

○久安百首御歌
ひれふりし松浦の山のをとめらもいと我ばかり思ひけむやも　崇徳院

○延喜二十七年三月五日京極御息女所歌合
千早ふる神し許さば春日野に立つやをとめのいつかたゆべき　讀人しらず

○御集
玉のえにすむといふなるをとめごが光の花もかくや咲くらむ　花山院

○永久四年百首、妓女
少女ごが裳裾にあまる黒髪の靡くをみるぞゆふかたもなき　神祇伯家仲卿

○家集、をとめ
をとめごがとみの男にひれふりてかへすま袖を忍ばざらめや　俊頼

○光明峯寺入道攝政家百首
光さすたましま川の月きよみをとめの衣袖さへぞてる　定家卿

○熊野山二十首歌
をとめごが挿頭にたをる高砂の外山のさくら花さきにけり　爲家卿

○家集
いそなつむ蜑のさをとめ心せよ沖ふく風に浪たかくなる　西行上人
此の歌は屛風のゑを人々よみけるはうみのきはにをさなき物あるところをよめると云々

○一句百首、冬歌
深き夜にをとめの姿風とぢて雲路にみてるよろづ代の聲　定家

○同

ちる雪に三年はすぎてをとめごの袖の色ますもゝしきの庭　定家

○六帖題

新六五 おしたるゝ東をとめがすぎかげに名殘多くて行きわかれぬる　衣笠内大臣

○瓊集、霰

冬されば初瀨をとめの袖さえて手にまく玉とちる霰かな　中務のみこ

○建長八年百首歌合

この程は天津をとめら暇なみさはだの早苗いそぎとるなり　前大納言顯朝卿

○題不知

萬四 庭にたつあさてかりほしし忍ぶ東をとめを忘れ給ふな　讀人しらず

○あづまに下りける道にて

ふじのねの風に漂ふ白雲をあまつをとめが袖かとぞみる　源光行

此の歌踏次記云たごのうらにうち出でてふじのたか(本歟)ねとみれば時わかぬゆきなれどもなべていまだしろたへにはあらずあをくしててんによれるすがたかたへの山よりこよなくみえて貞觀十七年の冬の比白衣美女ふたりありてこのいたゞきにならびまふと都良香が富士の山の記にかきたる故に思ひ出でらるゝと云々

島子

○題不レ知

萬九 後つひに命しにける水のえの浦島の子がいへらをぞみる　讀人しらず

○當座百首中、浦島子

とこよには又もかへしぬ浦島やさて水のえの波にくらべむ　參議爲相卿

婦人

○百首御歌
たをやめの袖うちはらふ村雨にとるや早苗のころもならはず　後鳥羽院

○建保三年名所百首
みしまえの浪のさをさすたをやめの春の衣の色ぞうつらふ　定家卿

○後京極攝政家詩歌合、花
玉すだれ同じ絲もたをやめのそむるころもにかをる春風　同

○家集
新拾秋上 たをやめが衣をうすみ秋やたつあすかに近きかづらきの山　匡房卿

女

○六帖題、をうな
新六二 我妹子がまだ朝顔やつゝむらむ髪ふりかけて面がくしする　知家

同 祝ひおくみよのはじめのやをんな（をとめ新六）に八百萬づ代の程は見えにき　信實

○久安百首　下女イ
あさでかりしき忍びけむあづまめも我が戀ばかり思ひけむやぞ　左京大夫顯輔卿

○家集、老不安をおもひかくる戀
いちこもるうはめをうなの重ねもつこのて柏におもて竝べむ　西行上人

○たうな
現存六 我がせこに年の數をもあらはさで猶わかゆてふさくさめの年　知家

萬七 かうちめの手染の絲をくり返し絲にありとも絶えむと思ふな　讀人しらず

○よしのの離宮の幸に
萬六 はつせめの作るゆふ花み吉野の瀧のみなわに咲きにけらずや　笠金村

○建保七年名所百首
はつせめのならすゆふべの山風に秋にはたえぬ賤のをだまき　定家

○弘長二年百首
誰ゆゑに思ふとかしる初瀨めの手にまく草のおのれ亂れて　爲家

○三百六十首中（なにはめ）
詞夏　新後拾遺
あしの葉に隱れてすめる（は新後）難波女のこやは夏こそ涼しかりけれ　好忠

妹

○題不レ知
萬十一
いけど／＼あはぬ妹ゆゑ久方のあまつゆ霜にぬれにたるかも　人丸

○同
同
月をみるくには同じき山邊にて美（うつく）し妹はへだてたるかも　同

○同
同
遠山に霞たなびきいやとほに妹がめみずてわがこふるかも　同

○同
同
近江の海に沖津白浪しらずとも妹がりとはばなぬかこえなむ　同

○同
同
久方のあまてる月のいりゆかばなにになぞへて妹を忍ばむ　同

我妹子

○同
萬十一
人目もるあし垣ごしに我妹子を逢ふみるからに事ぞさた多き　讀人しらず

○題不レ知
同
我妹子が逢ふ山をなみ駿河なるふじの高ねのもえつゝあらむ　同

○同
萬十一
我妹子にあをわすらすな礒のかみ袖ふる川のたたむと思ひつ　人丸

○家集
同
いかならむ神に幣をもたむけばか我が思ふ妹を夢にだにみむ　同

妻

○題不レ知

萬十一 八千ほこの神の御代よりともし妻人しりにけりつけて思へば　人丸

同 下戀 遠づまと手枕かはしねたる夜は鳥のねなくなあけはあくとも　同

○旋頭歌

萬十一 初瀬のや弓槻が下に隱れたる妻茜さし照れる月夜に人みてむかも　同

○題不レ知

萬十一 我が門に千鳥しばなくおきよ〳〵わがかくれ妻人にしらるな　讀人しらず

○六帖題、かくれづま

新六五 をとめごがあはせ衣のかくれづま薄き契りに恨みわびつゝ　衣笠内大臣

新六五 唐人のわがつましらぬ家うつりそれをためしの戀もするかな　光俊朝臣

○建長八年百首歌合

うき中のつまはかれにしさよ衣ま袖かたしきぬる空もなし　前大納言顯朝卿

○六百番歌合、寄レ草戀

戀づまのやがて軒端になりゆけばいとゞ忍ぶの草ぞしげれる　正三位經家卿

使

○題不レ知

萬二 紅葉ばのちりゆくなべに玉ぼこの使をみればみしひ（逢ひイ）思ほゆ　人丸

○同

萬十一 いへ人は道もしみゝに通へどもわがまつ妹が使こぬかも　讀人しらず

○同

萬四 玉かづら絶えぬ使の通はねば今年もあるごと思ひいづるかも　大伴坂上郎女

○建保三年内大臣家百首

春日山かすみたなびくしめの内に春の使もいまやたつらむ　家長朝臣

○六帖題、つかひ(やまとづかひ)

今の世にありとは聞かずもろこしの文學ぶてふやまと使は　權僧正公朝

○六帖題(うへのつかひ)

新六二　たてまつる上の使の名殘こそ時にのぞめばさすがなりしか　衣笠内大臣

○同

同　いまの代も光とぞみるあふひ草まつりにさせる加茂の使は　爲家卿

○同

同　あけばまた境へだてて伊勢島やかりの使のゆきや別れむ　正三位知家

○同

同　勅なればさぞ祈るらむ伊勢つかひ代は春なれど花をゝりつゝ　光俊

○同(ふみづかひ)

新六五　結びめのたがふも知らず文使ほかにみせずといふがはかなさ　同

○家集(こゝろづかひ)

思ひやる心づかひはいとなきに夢にみえずときくが怪しさ　好忠

○久永九年毎日一首中、つかひといふことを

すゞか山たよりの風をしるべにてことづて渡るまつ(くカ)まの浦　爲家

○千五百番歌合

君が代のつきぬちとせの友ならむ老の使になしと答へて　慈鎮和尚

○題不レ知

萬三千　み空行く雲のつかひと人はいへど家づと(ヤイ)あらむたつきしらずも　中納言家持卿

ゆふべ行く雲のつかひに言づてむうはの空なる便りなりとも　宗隆

商人

○六百番歌合、寄二商人一戀

年ふかき入江の秋の月みてもわかれをしまぬ人やかなしき　後京極攝政

○同

あき人の舟の昔を思ふにもうらみは深きなみだなりけり　慈鎮和尚

○同

辰の市や日をまつ賤のそれならばあすしらぬ身にかへて逢はまし　定家

○同
ともすれば別れをしらぬ浪の上にかきなすねをも人は問ひけり　家隆

すみわびてよにふる道はしらるとも難波の蘆の假にだにみむ　寂蓮法師

此の歌は判者云なにはのあしかるもの商人にとりてがすかなるにやと云々

海人

○家集、春歌中
はる〳〵とうら〳〵煙立ちわたり蜑（る家）の日和にもしほやくらむ（かも家）　好忠

○永承五年十一月俊綱朝臣歌合
藻鹽やくあまの濡衣ほすみれば磯べの松ぞはつきなりける　能因法師

○永久四年百首、泉郎
ぬれ衣いまぞはつきにかけてほすかつぎしてけりよさの蜑人　源兼昌

○同年十月二日宮宣旨家歌合、霞浦
春がすみ霞の浦をみわたせば蜑のふせやをこめてけるかな　讀人しらず

○筑前國志賀泉郎を
萬十六 大君のつかはさなくにさかしらにゆきしあらを沖に袖ふる　同

○題しらず
六三 あびきする蜑少女らが袖とほりぬれにし衣ほせどかわかず　同

○同
新勅戀一 あさな〳〵蜑のさをさす浦ふかみ及ばぬ戀も我はするかな　同

○同
伊勢集 追風に風はなほりて吹かねども蜑のいかりにとゞまりやせむ　同

○同
六三 萬七 しがのあまの釣する小舟うけたえず心に思ひいでてきにけり　同

○同
萬三 しがの蜑のやく鹽けぶり風を痛みたちはのぼらで山に棚びく　同

○同
○千首歌
○[illegible]
○[illegible]
○百首歌
○久安百首
○百首歌恨戀
○六百番歌合、寄海人戀
○家集
○御集

第十一
しがの蜑の鹽燒衣なるといへど戀といふものは忘れかねつも　同

しがのあまの鹽やく煙立つごとに人にしらるゝ浦風ぞふく　爲家卿

すまの蜑の身を吹きとほす浦風にもしほの袖やいとゞ寒けき　後鳥羽院

思ふかたいせをの蜑の釣竿のながきよあかずぬるゝ袖かな　同

六三　後撰雜四
伊勢の海に年へてすみし蜑なれば何れのもかはかづき殘さむ　伊勢

雨ふればあまの鏡にふくとまのもろ心にもあらぬ君かな　俊頼朝臣

新勅撰十五
いかにせむ蜑のさかてを打ち返し恨みても猶あかずもあるかな　俊成

新拾遺十五
己れのみ蜑のさかてをうつたへにふりしくこのは跡だにもなし　定家卿

我が戀はあまのさかてをうち返し思ひときてや世をも恨みむ　兼宗卿

此の歌右方云あまのさかて有異説等事也而ひとに海人にさだめ讀めるにや判者俊成卿云あまのさか手殊庶幾すべきにはあらねども海人によめらむにおきては何のうたがひかあらむや近来人の實説をいたすと云無其理歟愚老こそ往昔によみて侍りしそれな難するよしに侍るも汁勢物語のほか異なる證據なかるべしと云々

よさの海の蜑のあさたのまてかてになりやとるらむ浪の花なみ（かひ歟）　和泉式部

までかたに蜑のかきつむ藻鹽草煙はいかにたちぬとやきく　女御徽子女王

○家集、戀歌中
新勅撰雑四 いせの海の蜑のまてかたまて暫し恨みに浪のひまはなくとも　家隆

○文應元年七社百首、不レ逢戀
新後撰戀二 とへかしな蜑のまてかたさのみやはまつに命の長らへもせむ　爲家

○あま
いせの海の蜑のまてかたゆき歸りくみほす潮のまなくこひつゝ　行能卿

○六百番歌合、寄二海人一戀
伊勢の海の蜑のまてかたならねども戀のぞめきもいとなかりけり　法橋顯昭

○六帖題
新六三 いせの海の蜑のまてかたかきつめて幾度同じ藻鹽たるらむ　衣笠内大臣

○同
朝夕の蜑のたくなはいとまなみこの世ばかりを苦しとや思ふ　同

○同
みるめ刈る鹽やく蜑のあしたゆくくるれば歸るいとまなの身や　爲家

○同
をりかとふ濱松が枝の袖がきにかりほす蜑のみるめさびしも　光俊朝臣

○同
はまなかに汐風ばかり音信れてかたたよりなき蜑の宿かな　信實朝臣

○海邊宿次百首、しほみち
くれてはや汐みちぬらし浦々に釣舟よせておるゝあま人　爲相卿

○千五百番歌合
難波津におのが物ゆゑ行きかへりねになくあまも春になる頃　寂蓮法師

夷

○戀歌中
歌林 便りあらば津輕の奥にとめられてえぞ歸らぬと妹につげばや　道因法師

田子

○千五百番歌合
戀路にもおりたちぬればよそにみしたごの裳裾を袂にぞしる　嘉陽門院越前

匠

萬十一　拾遺
○題不レ知
とにかくにものは思はず飛驒工うつすみなはのたゞ一筋に　人丸

新六五
○六帖題（臨宮）
かつは又さす轄ぐちにあふひつは心ありけるかなたくみかな　信實朝臣

○寶治二年百首、杣山
そま工ひくやまさきのつな聲にさこそあづさの山とよむらめ　同

○家集
まさきわるひもの工やいでぬらむ村雨すぎぬかさとりの山　西行上人

遊女

新續古戀四
○六百番歌合、寄二遊女一戀
たれとなくよせてはかへる波枕うきたる舟の跡もとゞめず　後京極攝政

○同
いづかたを見ても忍ばむなにはめのうきねの跡にきゆる白浪　寂蓮

○同
その人とわきてまつらむつまよりも哀れは深き浪の上かな　慈鎭和尚

○同
浪の上にこがれてすぐるたはれめも頼む人には頼まれぬかは　前大納言兼家卿

○同
波の上にくだす小舟のむやひして月にうたひし妹ぞこひしき　中宮大夫家房卿

○六百番歌合、寄二遊女一戀
たれとなきうきねを忍ぶあま衣思ひは淺きうらみなりけり　家隆卿

○同
あしまわけ月にうたひてうく舟に心ぞまづはのりうつりぬる　法橋顯昭

○家集、遊女
河の瀬に浪の浮草うかれありくそのたはれめをいかゞ賴まむ　源仲正

○建長八年百首歌合
船よせの岸の上なるかどやより怪しや妹がみえがくれする　信實朝臣
此の歌判者光俊朝臣云遊女がすみかにこそおなじ事と申すながらひ云がことばにも舟中流上(浪イ)とこそかきて侍れ舟よせのかどやと侍るたゞひとへになしからむとたしなまれたるこそよしなくもやと云々

○寳治四年百首、寄二遊女一戀
うき舟のさだめぬ浪のちぎりだになほ夕暮は身もこがるなり　民部卿爲家

遊士

○題不レ知
萬六 海原の遠き渡りをあそびを(たはれイ)の遊ぶをみむとなづさひぞこし　讀人しらず

○長歌
萬八 をとめらが　かざしのために　たはれをの　かつらのためと　しきませる　くにのはたてに　さきにける　さくらのはなの　同

○贈二大伴宿禰田主一
萬二 たはれをと我はきけるを宿かさず我を歸せりをぞのたはれを　石川女郎

○報贈歌
たはれをに我はありけり宿貸さず歸せる我ぞたはれをにはある　大伴宿禰田主

○安久百首
かくばかり厭ふだにこそ戀しけれなど隱しけむをぞのたはれを　左京大夫顯輔卿

傀儡

○六百番歌合、寄二傀儡一
ひとよみし人のなさけは立ちかへる心にやどるあをはかの里　慈鎮和尚

○同
一夜かすのがみの里の草枕むすびすてける人のちぎりを　前中納言定家卿

○同
うらむべきかたこそなけれ東路ののがみのいほの暮方の空　寂蓮

○同
心ゆく野路の旅ねの友なくばいとゞ都や戀しからまし　兼宗卿

○同
一夜のみ宿かる人の契りして露むすびおくくさまくらかな　後京極攝政

○同
うかれめの浮かれて歩く旅やかたすみつき難き物にぞありける　正三位季經卿

○同
東路やかやつの原の朝露におきわかるらむ袖はものかは　有家卿

○建保四年百首、寄二傀儡一
大井河岸の苫やの竹ばしらうかりしふしやかぎりなりけむ　爲家卿

○貞應二年六月當座百首、同心を
かりそめのをばたの里の苫びさしとまらぬ袖の露をみせばや　同

○百首歌、くらす
小倉山ふもとの里の寂しきはゐせきの音よ峯のあらしよ　寂蓮法師

○同
泚さす山の端ちかきゆふづゝの影ほのかなるをののしの原　同

○同
あはれなきおほよそ鳥の心すら月よとなればされありくなり　同

樵　夫

○姑
六二 おちつもる松を拾ひて年ふれば老のつま木と人やみるらむ　藤原匡房

○心
六一 山かつのなげきこりつむ庵にはかすみやたちて煙ともなる　讀人しらず

○六百番歌合、寄二樵夫一戀
戀路をば風やはさそふ朝夕にたごの柴舟ゆきかへれども　後京極攝政

○家集、雜歌中
山人の手びきのかづらくりかへし頼む爪木のゆふかひもなし　從二位家隆卿

○同
しば舟の峯よりおつるをざゝ原風より荒きなみの音かな　同

○家集、雪歌中
あらし山さかしくくだる谷もなくからきの道をつくる白雪　西行上人

○閑屋入道攝政家百首、樵夫
山人の身におふ程とおもふだになほ世をすぐる道ぞ苦しき　爲家卿

○弘長二年内裏百首、礒波
たがために礒のつま木をこりわびてこす白波に袖ぬらすらむ　行家卿

○建長八年百首歌合
身におつる（ヘイ）已が仕業を賤のをがてもとこたへてこる爪木かな　信實

○内裏歌合、山夕風
玉雜三 かねの音を松にふきしく追風につま木やおもきかへる山人　定家卿

○永仁元年楚忽百首、戀歌中
身におはぬ嘆きこり積む山人のあふ事をいつとなく〳〵ぞふる　藤原爲顯

山老

○正治二年百首
ひまもなく軒をならぶる山がつのすまひをわかつ夕顔の花　源師光

○建保四年内裏歌合
新六六 いとゞしくうつろふ花は山賤のしづごゝろなく春風ぞふく　知家卿

○六帖題
新六五 山がつのそのふの李咲きにけり風をいとはぬ花やみるらむ　衣笠内大臣

○同
新六五 山がつの賤のあさ衣みしぶつき草とるた井にたたぬ日はなし　同

○同
山賤のをさをあらみのはたなれば音は間遠に聞えやはする　信實朝臣

健男（ますらを）　又男子

○題不レ知
萬十一
ますらをやうつし心も我はなしよる晝わかず戀しわたれば　人丸

○同
同
健すらゆき通るべきますらをも戀てふことは後のくいあり　同

○同
同
ますらをはとものぞめきに慰むる心もあらむ我ぞ苦しき　同

○三百六十首中
夏河のせゞに鮎つるますらをも我がうき影はみづからぞ思ふ　好忠

長　人長イ

○六帖題
新六一
人の長の神のをしへに從ひてこゑ〴〵すめる九重の庭　信實朝臣

○三百六十首中
あじろもる宇治の河をさ年積りいくそ月日を數へきぬらむ　好忠

○內裏御會、櫓中月
新後拾秋下
さしかへる雫も袖の影なれば月になれたる宇治の河をさ　爲家卿

忘られぬみゆきはわれぞみなれ棹思へばこひし淀の川をさ　從三位爲實卿

賤人

○題不レ知
萬四
しづたまき數にもあらぬ命にてなどかくばかりわがこひ渡る　蟲丸

○百首御歌
山深きねざめの友としづたまき數にもあらぬすさみなれども　後鳥羽院

○家集、戀歌中
賤たまき數にもあらぬ玉のをの亂れて戀ひむ絶えははつとも　家隆卿

○家集、秋の歌中
山風に初霜かけてしろたへのころもしてみつしづの神人　同

○六帖題、あさごろも
新六五 まどほなる賤がうみをのをさいれに心とうすき蟁の衣手　知家

○同、たまだすき
新六五 賤の女があさでほすての玉だすき思ひかくれば誓ふよもうし　爲家

○同
同 ねたげなる賤があさでの玉だすき誰に向ひてわきをかくらむ　信實

○千首歌
河の瀬にさでさす賤がぬれ衣ほさばわが身の心なるらむ　爲家卿

○洞院攝政家百首、紅葉
爪木こる賤がをだまきあさな〳〵のこしてけりな峯の紅葉ば　從二位賴氏卿

總角（あげまき）

○後京極攝政家三十首歌合
あげまきはあとだにたゆる庭もせにおのれ結べとしげる夏草　定家卿

○家集、女郎花
こまにかふ草のなかなる女郎花おのれむすべとしげる夏草　源仲正

垂髪子（うなゐご）

○六帖題徊歌、うなひ
日くれぬと山路をいそぐうなゐごが草かり笛の聲ぞ寂しき　中務のみこ

○同
新六二 うなゐごがふりわけ髪の行く末によそへてかくる草葛かな　知家卿

○同
同 垂髪子（うなゐご）がうちたれ髪をふり分けてむかひつぶての袖かざすなり　信實

○たはふれとてよみける中に

○六百番歌合、行旅

○同歌中

○後九條内大臣家百首、江上柳

いとほしやまだかぶろなるうなゐ共燒野に數多つばな拔くなり　同

うなゐごがすさみに鳴かす麥笛の聲におどろく夏のひるぶし　西行上人

えの淀にみそ貝拾ふうなゐごがたはぶれにだに問ふ人もなし　俊頼

此の歌はたなかみにてむかひのえにはらはへのあそびたはぶるゝただづねればみそがひひろふといふをききてよめると云々

奴（やっ）僕（こ）

いまはさは戀のやつこの行く末も賴むみおやの神にまかせむ　有家卿

此の歌方人云やつこは奴僕心なり此の歌のおもては彌子によまれたり

不審云々

萬代
神やつことろやなにそも千早ふるかもの祭にあふひなりけり　藤原淸平朝臣

里子

よど河の入江のきしの柳かげつなぐ小舟にすゞむさとの子　從二位家隆

唐人

○永仁四年百首、唐人
たつ波につゞみの聲をうちそへて唐人よせく沖の島より　神祇伯顯仲卿

○同
おしてるや千重の白浪わけし人わが敷島にいかできつらむ　仲實朝臣

○同
唐人はしかのをじまに舟出してなかしまつらしいたてましなり　俊頼

○同
嬉しきをいかにすればか唐人のことしも袖をせばくたつらむ　藤原忠房

○同
から人の衣にかざる白玉の見つゝ光の珍らしきかな　二條太皇太后宮肥後

○貞應元年閑居百首御歌
きてもみよ心なやます唐人の袖ふるあとのあはれしれとや　光明峯寺入道攝政

○最勝四天王院名所御障子
唐人のためし秋はすぎぬともまつらがおきに雲なへだてそ　知顯法師

楊貴妃

○文治二年百首、楊貴妃
磨きおく玉のすみかも袖ぬれて露ときえにし野べぞ悲しき　中務卿のみこ

○家集、楊貴妃
道のべに駒ひきわたす程もなきたまのをたえむ契りとやみし　二條太皇太后宮大貳

○同
（玉葉雜五　漢故事和歌集）まぼろしは玉のうてなに尋ねきて昔の秋の契りをぞきく　權中納言長方卿

○長恨歌馬嵬堤（坡イ）下泥土中
世の中を心つゝみの草の葉にきえにし露にぬれてこそゆけ　太宰大貳高遠

○九花帳裏夢魂驚
うたゝねのさめての後のくやしきは夢にも人をみさすなりけり　同

○春風桃李花開日
春風にゑみを開くる花のいろむかしの人のおもかげぞする　同

○秋露梧桐葉落時
この葉ちる時につけてぞ中々に我が身の秋はまづしられける　同

○西宮南苑多二秋草一
九重の玉のみぎりもあれにけり心としけるくさの上の露　同

○舊枕故衾誰與共
うちわたし獨りふすまのよな／＼は枕久しきねをのみぞなく　同

李夫人

○文治二年百首李夫人
仄かなる煙はたぐふ程もなしなれし雲居にたちかへれども　定家卿

○家集、雲・神祇
なき人はかへる煙もたてぬべしいけるつらさぞ面影もみぬ　雅有卿

○家集、李夫人
月詣集
なか／＼に散りなむ後の爲とてぞしをれし花の顏もはぢけむ　長方卿

王昭君

○文治二年百首、王昭君
うつすとも曇りあらじとたのみこし鏡の影のまづつらきかな　定家卿
（なイ）

○王昭君といふことを
しらざりき鏡の影を賴みてもうつしかへける筆の跡まで　公朝

○同
時しもあれさぞうかりけむ都出でしみさへいつきの秋の心は　爲相

○家集、王昭君
かくばかりせきわづらはば涙河都のかたへながれいらなむ　長方卿

○永久四年百首、王昭君
みる儘に我が姿をば書きてまし千々の黄金ををしまざりせば　源兼昌

○同
衰ふる鄙のわかれの悲しさにきずなき玉の身をぞ恨むる　二條太皇太后宮肥後

○同
道すがらなぐさむやとてひく琴のをごとに玉をぬく涙かな　六條院大進

○百首御歌、王昭君

あらず身のなり行く旅の別れ路にてなれし琴のねこそ忘れね　後徳大寺左大臣

○家集

瀧つせのしらべを袖にひき添へてならはぬ道に到るべしやは　源有仲

此の歌は王昭君の事かけるふみに琵琶を馬上にしらべてといへるをみてよめると云々

上陽人

○家集、東尋文歌中

そこばくの年つむ春にとぢられて花みる人になりぬべきかな　太宰大貳高遠

○春往秋來不記年

春秋のゆくかへり路もしらなくに何をしるしに年をかぞへむ　同

○唯向二深宮一望二明月一

みる人もなきやどてらす月影の心細くもみえわたるかな　同

○宮鶯百囀愁厭聞

もの思ふ時はなにせむ鶯のきく（きイ）いとはしき春にもあるかな　同

○家集、上陽人を

はかなしや空しき牀にあけくれて年のむそぢの空に過ぎぬる　長方卿

○同

紅にたとへしかほも霜降りてうとき人にはみえじとぞ思ふ　二條太皇太后宮大貳

○文治二年百首、上陽人

しらざりき塵も拂はぬ牀の上に一人よはひのつもるべしとは　定家卿

陵園妾

○陵園妾

なれきにし空の光の戀しさにひとりしをるゝ菊のうは露　同

○家集、同題

○三十六人歌合、陵園妾

春のうれへ秋の思ひの積りつゝ三代にも今はなりにけるかな　長方卿

續詞花雑中　さし續詞　ゆふべ續詞　め　く身のイ

松の戸をとぢてかへりしその日よりあくるよもなき物思ひかな　登蓮法師

新勅雑一　[illegible]

とぢはつる深山の奥の松の戸をうらやましくもいづる月かな　光行

夫木和歌抄巻第三十五 終

夫木和歌抄 巻第三十六

雑部十八

賀　大嘗會　元服　行幸　公事　旅
題　狩獵　眺望　哀傷　夢　戀　占
言語　述懐

賀

○正治二年百首御歌

よろづよを山はよばひて谷川の水はちとせの色ぞみえける　第三のみこ惟

○千五百番歌合

君が代にとたびすむべき水の色をくみてしりける山の聲かな　大藏卿有家

此の歌判者季經卿云黄河千年にすみ山萬歳をよばふことを君の御代にひきよせられたるあひかなひてこそきこえ侍れと云々

○建久五年後京極攝政家歌合、春日山

春日山峯のあさひをまつほどの空ものどけき萬代のこゑ　前中納言定家卿

○千五百番歌合

よもの海の浪の外まできこゆなりはこやの山のよろづ代の聲　従二位家隆卿

○同

おふの浦のそのなが濱による浪のゆたけき君のちよの末かな　具親朝臣

○同
○保延元年家成卿歌合、祝
○安元二年七月白河殿七百首、書
土御ノ山
○建長八年百首歌合
○同

○家集、題不知
○正治二年百首
○寛喜元年松有久色
○最勝四天王院名所御障子
○中納言兼宗卿家歌合
○家集或所有、祝
○閑居百首
○六帖題
○家集、祝
○百首歌

君か代は數へ盡さむ方ぞなきながたにちくら千もとこのいね　禖子内親王家中務

たまさかに千代に一たびすむ水をいくかへりとは君ぞ數へむ　藤原通憲

新續古今
みちありとわが君の代にいでゝはてゝ山の奥には住む人もなし　權大納言長雅卿

君か代のしげきみ影にたちなれて山のおくには住む人もなし　從一位良教卿

みことのり道にそむかぬ故とてや海の外にも守りあるらむ　前大納言顯朝卿

列子光俊朝臣云閣守在海外云詞雖清天下之政之敕是可謂頭誰不捉疵字之

天のした八すみのなかにひとりますしまの大君萬代までに　鎌倉右大臣

いくとせのいく萬代か君が代にゆき月花の友をまちみむ　式子内親王

春日なるみかさの山のたねなればちよに千年も相生の松　民部卿爲家

もろ人もちよのみかげに宿しめてとはにあひみむ松の秋風　前中納言定家卿

たむけ草しげき玉えにそなれ松よに久しきも君がためとも（ぞイ）　俊頼朝臣

鶴龜のいのちくらべのかちまけを君こそしらめ萬代をへて　源仲正

四つの海をたゞてのなかに照らすてふ君やくもらぬ鏡なるらむ　從二位行家

新六四
もちたから歌（聲イ）をとなふるさかづきの清く濁らぬみよの久しさ　衣笠内大臣

わたつうみのしらぬ浪間にすむ龜のよもぎが島も君が爲とぞ（年イ）　民部卿爲家

いざなぎの尊の時に定めてき我か君ひさによにまさむとは　仲實朝臣

大嘗會

○定家卿家集

君まちて再びすめる河水に千代そふとよのみそぎをぞみし　参議雅經卿

此の歌は建暦二年とよのみそぎふたゝびおこなはれけるつぎの日定家卿のもとへつかはす歌と云々

○返事

君が代のちよにちよそふみそぎしてふたゝびすめる鴨の河水　前中納言定家卿

元服

○永久四年百首、元服

もとゆひのこ染めの絲をくりかへし衣の色にひきやうつさむ　神祇伯顯仲卿

○同

こよひゆふわが元結の紫のまそでの色にはやもならなむ　仲實朝臣

○同

うなゐごがはなちのかみを取り立ててまきそめ河よ（にイ）淵瀬變るな　俊頼朝臣

○同

かぞいろの共に祈ればふたりさすしそくの影にちよぞ映れる　源兼昌

○同

紫の初元結にゆひおかむつるばみごろもちとせふるまで　六條院大進

行幸

○貞應百首御歌、述懷

海原やつりする人のとしふりていつか行幸の春にあふべき　光明峯寺入道攝政

○文應二年毎日一首、放生會
いはし水わがふる道や守るらむけふのみゆきの空ぞのどけき　民部卿爲家

○文永六年毎日一首、述懷
すゝまうす行幸の庭は遲けれどあらぬはしり（わイ）に人急ぐなり　同

○康元元年毎日一首中、八月十五日歌
男山けふのみゆきの三代までに仕へきぬるも神はしるらむ　同

○同七年毎日一首中
昔にきくおとはの瀧はけふとてや君が行幸は心みゆらむ　同

○文應元年毎日一首中
ありま山君が行幸も年ふりぬたのむしるしを神もあらはせ　同

○百首歌、川
もみぢ葉に埋もれてこそ立田川ふるき行幸のあとはみえけれ　從二位家隆卿

○六帖題（御幸）
とのまもり近き守りをすゝめぐ（ニイ）して おほみゆきする道ぞ畏き　前中納言爲家卿

○同
新六二
殿守のよるの行幸にともす燈のあきらけきよとなりにけるかな　光俊朝臣

○同
東（あづま）にもあとあることもまきもくのひじりの宮の深き行幸は　權僧正公朝

公事

○建保三年百首御會、公事
葦毛なる馬ひくけふのわかなには舍人待つこそ便りなりけれ　慈鎭和尙

○建保三年百首御歌、公事
新續古今佛名
百敷のかものみあれのしめのうちに佛の身をも猶すゝぐかな　同

○同
となふなるみよのほとけの名の數を幾千年まで君は重ねむ　同

○同
春のあしたはこやの山のみぎりよりまづ祝ひたつ雲の上人　參議雅經卿

○同
これもみなちとせの秋のためしかなけふことにひく望月の駒　同

○同
きみが代は雲の通ひぢ空はれてをとめの姿月にみるかな　同

○同
あら玉の春をむかふる年の内におにこもれりとやらふ聲かな　同

旅

○題不レ知
萬三 新古
あまさかる鄙のなかぢにこ(ゆ萬)ゝぎく(ひ萬)れば明石のとより大和島見ゆ　人丸

○同
萬五
あまさかるひなに五とせすまひつゝ都のてぶり忘られ(え萬)にけり　讀人しらず

○同
萬四
神風の伊勢のはま荻をりしきて旅ねやすらむあらき濱べに　同

○同
萬二
さほすぎてならの手向におく幣は妹をめかれず逢ひみそめとぞ　長屋王

○長歌
萬三
草枕　たびにあるまに　さほがはを　あさかはわたり　かすがのを　そがひにみつゝ　坂上郎女

○題不レ知
六二
いつしかと思ひたつたの山遠み駒ひきとめてくるすべもなし　讀人しらず

○同
六四 貫之集
行末もかへらむ事もたまぼこのたよりのかみは祈れとぞ思ふ　同

○長歌
六四
となみ山　たむけのかみに　ぬさまつり　あが戀のまへは　しきやし　君がたゝかを　同

○左中辨よしみつの馬のはなむけにせむとてよませける
玉ぼこのたむけの神も我がごとくわが思ふ事を思へとぞ思ふ　貫之

○ひだちのくにへくだりたる人に
別れ路につけてものこそ思ほゆれたむけの神も哀れとやみむ　能宣朝臣

○六帖題
新六四 あら山のとほりならはぬ岩づたひ手向の神にまかせてぞ行く　光俊朝臣

○題不レ知
古來歌 いくしをりこえて尋ねむなにたかきあさまの山の峯の白雲　月花門院

○洞院攝政家百首、旅
かへりみる雲まの梢たえ〴〵にあるかなきかの古里の山　後九條内大臣

○和歌所歌合、月前旅
草結ぶをのの篠原月さえてまだしきしもの袖にしらるゝ　如願法師

○寳治二年百首、旅行
さゝわけし袖こそあらめけふは又谷の細道もずそぬらしつ　正三位知家卿

○建長八年百首歌合
たなはしにかつ〴〵駒を促してうひ〳〵しくも出づる旅かな　信實朝臣

○久安百首
旅衣つかれにけらしひだりての弓とるかたのたゆくなるかな　前大納言隆季卿

○喜多院入道二品親王家五十首
面影の身にそふ宿にわれまつとをしまぬ草や霜がれぬらむ　前中納言定家卿

○建久七年百二十八首、旅
たのむかなその名もしらぬみ山木にしる人えたる松と杉とを　同

○建長八年百首歌合
露ふかきのちのさゝ原夜をこめて東雲はらひいづる旅かな　光俊朝臣

○弘長元年百首
山深みまだ名もしらぬ鳥のねをあけぬとききて今ぞこえ行く　從二位行家卿

○建保三年秋十五首歌合、秋旅
新續古旅 みやこ思ふ袖もかた〳〵ほしやらずあへの島山露深くして　大納言通具卿

○石清水三首歌合、旅宿嵐
雲近き峯の木のはをかたしきて枕の下にあらしをぞきく　前大納言忠良卿

○五十首御歌、旅泊月
忘れずないでし都のよはの月きよみが關にめぐりあふまで　後京極攝政

○南北百番歌合
忘れずばみやこの夢やおくるらし月は雲居をうつの山ごえ　同

○正治二年百首
雲はねや月はともし火かくしてもあかせばあくるさやの中山　同

○雑御歌中
雲かゝる都の空をながめつゝけふもこえぬるさやの中山　慈鎮和尚

○旅歌中
古来歌 新拾旅 旅人のよこをりふせる山こえて月にもいくよわかれしつらむ　中納言家持卿

○正治二年百首御歌
あともなく八重たつ雲にみちわけて涙しぐるゝさやの中山　喜多院入道二品のみこ

○同
風をいたみいくよあかしのこの本に花を旅ねのひじきものにて　宜秋門院丹後

○同
みるまゝにあらずなり行く山路にも空は都にかはらざりけり　正三位経（雅イ）家卿

○同
あはれなる春の曙あさたちぬ霞のそこやくれの旅ずみ　民部卿範光

○家集、旅歌
磯の山まさきをつなによりかけてしほみつ程の舟はつながむ　民部卿為家

○正嘉三年毎日一首中
舟くだす淀の河霧いつしかも都のかたの山なへだてそ　同

○貞應三年楚忽百首、旅中友
旅の空うきていでにし野山まで道もやどりも月ぞともなふ　同

○嘉元元年百首、海路
急げどもなほ山こえぬ浪のうへの雲をとまりとむかふ舟人　参議為相卿

○平宗宣朝臣すゝめける十首中、歌、旅
今日は早こえこそなづめ深山路や昨日分けこしのべにならひて　同

○永仁三年家歌合
めにかけし雲の尾のへをわけこえて昨日は遠き山路をぞゆく　同

○若宮御歌合
玉旅 とまるべき宿をば月にあくがれてあすの道ゆく夜半の旅人　前中納言為兼卿

○家集、文永元年、旅泊
玉旅 忘るなよおなじうきねのかぢ枕思ひ〳〵にこぎわかるとも　権僧正公朝

○千五百番歌合
假初と思ひしものを飛鳥井のみま草がくれいくよへぬらむ　第三のみこ

○同
あけぬれど浪は許さず清見潟關路はとりのねまでと思ふに　従三位保季卿

○建保三年名所百首
二見潟いせの濱荻しきたへの衣手かれて夢も結ばず　前中納言定家卿

○千五百番歌合
今ぞ思ふかた岡山の旅人も身をかへしけるむらさきの袖　寂蓮法師

○石清水三首歌合、旅宿嵐
野邊寒し荻のかれはをかたしきてすぐるあらしを枕にぞきく　慈鎭和尚

○同
したねするならの枯葉をふく嵐しらずやこれもたのむ木の本　後久我太政大臣

○同
山ぢ行くかりのいほりをとふあらしなれをぞたのむ旅の友とは　皇太后宮大夫俊成卿

○同
苔むしろ雲に重ぬるよはの袖ぬぎわかるゝは峯の松風　鴨長明

○百首歌
月よするうらわの浪をふもとにてまづ袖ぬらす峯の松かぜ　前中納言定家卿

○建保元年百首
里もなき浦としりてや旅人もあしまの舟に煙たつらむ　後九條内大臣

○同
しらまゆみつるがの船路よるもなほおしてひきこす浪のかけかは（そイ）　同

○寛喜二年十首歌合、羇旅
舟とむる沖つしほせの夕なぎに遠山うかぶ秋のうら浪　同

○同
けふは又あかしのとよりこぎ出でて心をつなぐよもの浦々　隆祐朝臣

○後京極攝政家詩歌合、羇中眺望
けふはまた山のはもなくなりにけりしらぬ濱路の夕暮の空　從二位家隆卿

○七百首歌中
さゞ波ややばせの船のいでぬまにのりおくれじと急ぐかち人　權僧正公朝

○家會、旅鷄聲
關越えてうちいでの濱の東雲にあとよりおくる鳥のこゑかな　參議爲相卿

○建長五年毎日一首中
風寒みあをのをゆけば信濃路のをちのたかねに雪ふりにけり　民部卿爲家

○百首御歌
清見潟ひとりいそねの秋の夜は月も嵐もこゝろぞ悲しき　慈鎭和尚

○同

○百首歌合 番イ

○經信卿つくしにてみまかりぬと
きゝてくだるとて

○同

○仲實朝臣くまのへまゐりけるに
つかはしける

○をざゝといふ所にて雨にぬれて

○旅歌中

○武藤家歌合、旅泊千鳥

○御集

○家集

○六帖題

○同

夏の夜の月はきよみが關にみつ秋はしのぶの里にながめむ　同

草枕涙かきあへぬねざめかなしぎの羽音に夢をのこして　同

筑紫船恨みをつみて戻るにはあしやにねてもしらねをぞする　俊頼朝臣

岸の上をさよなど見ればあぢきなく竹の節めになとれぬるかな　同

このうたはみしまえと云ふ所にてあけぼのにきしのうへにあやしき物をはしらにてあをきたけのうへにさゝげたりけるものを見てよめると云々

雲のゐるみこしいはかみこえむ日はけぶる心にかゝれとぞ思ふ　同

うちたのみ片敷く袖もぬれにけり小篠が宿にまとひするには　大僧正行尊

古來歌 鳴見潟しほひにうらやなりぬらむうへの道をゆく人もなし　藤原景綱

なるみ潟うきねの牀は風さえてふけゆくまゝに千鳥鳴くなり　平經正朝臣

天さかるひなのあら野にひとりねは物思ふより侘しかるべし　鎌倉右大臣

旅の空なれぬはにふのよるの牀侘しきまでにもる時雨かな　同

新六四 あふみのやのちの旅人急がなむやすがはらとて遠からぬかは　西行上人

新六四 道のべにたゝりなすなとみ禊して關もる神にぬさたてまつる　正三位知家卿

道のべのあしき岩根に幣むけてさかしき山をこえぞわづらふ　信實朝臣

○千首歌
○寛々一覧巳三年
○詩題結会
○太宰の任にてくだりける時月をみて
○久安百首
○同
○家集、旅歌中
○家集
○三十首御歌中に旅行を
○六帖題
○同、あかつきやみ
○旅
○光台院入道二品親王家五十首、山旅

長きよの有明の月もかたぶきぬ旅ゆく人や道急ぐらむ　民部卿為家
近からぬ程に一度わかるればとしのみとせぞへだたりにける　千里
朝毎に結ぼほれてぞすぐしくるふりにし里をこふる心は　同
ひまもなく物思ふときの旅宿りいかなるまにか月のもるらむ　大宰大弐高遠卿
おのづから都の別れにほどふれば都のてぶりかけぬ日ぞなき　左京大夫顕輔卿
旅づとにもたるかれいひのほろ〳〵と涙ぞおつる都思へば　清輔朝臣
朝立ちてわかれし人は今もかもひなのあらのに草結ぶらむ　實清朝臣
いかにせむすぐちはゆかで足柄やよこばしりする人の心を　源仲正
山里のきみがたびるは鶯を人にきかせむ心なりけり　堀河右大臣

此の歌に關白うちにいとひさしくおはして人々いとおほくてかへりたまふに鶯のなきたるをききてと云々

東路や旅の空こそあはれなれ野くれ山くれ駒にまかせて　慈鎮和尚
新六四
道のべの露わけ衣ほさずしてのくれ山くれいくよぬるらむ　衣笠内大臣
新六一
旅人のかたへいざなふこゑはしてゆく方みえぬ明暮の空　正三位知家卿
新六六
いくばくの道ゆきつかれ休むらむ椎のはせばき旅のかれいひ　信實朝臣
都出でし衣手かれてあらち山色かはりゆく秋風ぞふく　正三位知家卿

○建永元年和歌所三首歌合、羇中暮

ふみなれぬ山の岩ねの夕まよひおとやしるべの谷河の水　後京極攝政

○後京極攝政家詩歌合、羇中眺望

玉旅
秋の日のうすき衣に風たちてゆく人またぬをちの白雲　前中納言定家卿

○同

雲かゝるいはの枕にあけにけりかたぶく月を浪にまかせて　隆信朝臣イ

○旅歌中

國かはる境いくたびこえすぎておほくの民におもなれぬらむ　後京極攝政

○家集、内裏御會、羇中山

そこはかとみえぬ山路に言問へどこよひもうとし白雲の宿　前中納言定家卿

○二所詣下向後侍ども見えざりしかばよめると云々

旅をゆきしあとのやど守おの／＼に私あれやけさはいまだこぬ　鎌倉右大臣

狩獵

○内野御狩のとき

萬一
玉きはるうちの大野に馬なめてあさふますらむ園のさふけの（ニイ）　間人連老

○題不レ知

萬十九
たつか弓手にとりもちてあさかりに君はたちきぬ手枕の野に　讀人しらず

萬六
足曳の山にも野にもみかり人ともやたばさみ亂れたるみゆ　赤人

○長歌

同
みよしのの　あきつのをのの　のがみには　あとみすゑおき　人丸
て　みやまには　せこたちわたり　あさかりに　しゝふみお
こし　ゆふかりに　とりふみたてき　うまなべて　みかりぞ
たてし

○同

萬三
みかりにたてる　わがこもを　かりぢのをのに　しゝこそは　同

いはひふせらめ　うづらこそ　いはひもとほれ

よきことを萬代かけてみつるかなかづらき山のけふのみ狩に　源　清　陰

み狩する君かへるとてくめ川にひとことと主ぞいでませりける　有　穂

あきつのの上のの方にみちみすゑしゝふみおこし狩る人は誰　光　俊　朝　臣

獨吟後百首
山さつがねらふしがきやしげからむ居待の月のいでよきりする　源　仲　正

一字抄
ますらをが輌ふむのべを見渡せば雲居遥かにかへるせこなは　左京大夫顯輔卿

み狩人なすのなつのは心せよたが草がくれをれきふすなり　民部卿爲家

狩人のゆずゑふりたてちかへども笠はた見えぬなすの高がや　權僧正公朝

萬葉六
畔多きなすのみ狩のやさけびにのがれぬ鹿の聲ぞきこゆる　信　實　朝　臣

同
せこなはにひきこめらるゝ鹿ばかりあはれ心の行く方ぞなき　正三位知家卿

夏のたつおきのはずりのかさ音にふむのの鹿は今やおくらむ　神祇伯顯仲卿

夏草の茂みにかゝるせこなはにもるゝを鹿にあひはぐれつゝ　仲　實　朝　臣

ねらひする賤をがさつをさを鹿の一むら草とみてやよすらむ　源　兼　昌

夏かりのせこが入野にたつ鹿は秋よりさきにねをやなくらむ　藤　原　忠　房

夏狩の茂みを分けてかりくればかくれもあへぬ鹿のむらとも　二條太皇太后宮肥後

夏深きすかのあら野に狙ひするさつをはいかで鹿にあふらむ　藤　原　道　經

○日本紀竟宴
○同
○建長七年顯朝卿家千首、狩
○家集、暮待月
○時代不知
○洞院入道攝政家百首、狩獵
○六帖題、かや
○家集、狩
○かり
○永久四年百首、夏獵
○同
○同
○同
○同
○長承三年當學(非歟)五番歌合、野徑草深

○正治二年百首
み山いづる裾野の鹿をあさ立ちて袖そぼぬるゝ夏かりの露　民部卿範光

○建長八年百首歌合
外山なるゆずゑもみえずくらきよをしりてや鹿の引き歸るらむ　後九條内大臣

○五十首御歌
梓弓ゆづるまきかへますらをの片野の原にかりくらしつゝ　光明峯寺入道攝政

○文永二年七月白河殿七百首、島夏草
駒なべてのじまをすぐる狩人のゆずゑも見えずしげる夏草　後嵯峨院御製

○寶治二年百首御歌、夏草
ふりたつるゆずゑもみえず夏草の野じまが道をすぐる狩人　同

○題不レ知
六二 いなみ野に狩する鹿は(たひ六)草深み(しげ同)むつきは見えて弓のかず(は同)みゆ　讀人しらず

○六帖題
新六二 明け渡るもと山遠くせこたてて夜ごめの鹿のゆく方ぞなき　正三位知家卿

○同
同 何として深山おこしのせこ聲にやらはれながら鹿もすぐらむ　民部卿爲家

○同
新六二 しらやとくこらがつどひの山祭けふのかりくら空しからめや(む新六)　信實朝臣

○久安百首御歌
なさけなき狩子の耳にさを鹿のこよひの聲をいかできかせむ　崇徳院御製

○百首歌、原露
ま萩さくみやぎが原の白露をあさふますらむ狩人ぞうき　從二位家隆卿

眺望

○千五百番歌合
山高みかけぢの雲のたえまより麓のなみを出づる月かげ　前大納言忠良卿

浦近き峯のいほりのさびしきはふもとの雲に夕浪のこゑ　隆源法師

○正治二年百首
山たかみひとむら霞む古里のこずゑにしづむ宿をしぞ思ふ　民部卿範光

○喜多院入道二品親王家五十首、眺望
山高み梺の里をみわたせばよもの梢はなつなかりけり　大藏卿有家

夕日さすしほひにかすむ遠山の松のたえまにのこるつり舟　後九條内大臣

○洞院攝政家百首、眺望
足柄の山うちこゆる夕暮の浪のふもとやうき島が原　大納言經通卿

○同
海原や浪間にうかぶさゝだけの一葉ばかりのあまのつり舟　光明峯寺入道攝政

○同
むさしのや草のはらこす秋風の雲に露ちるゆくすゑの空　俊成卿女

○同
夕暮の空ゆきはてゝてる雲にしらぬさかひの山をみるかな　光俊朝臣

○文曆二年毎日一首中
さゞ浪や浦よりをちをみわたせばいぶきのたけにかゝる村雲　民部卿爲家

○あまのはしだてにて、新撰風體
はるかなる入海かけて沖つ波きくにこえたる天の橋立　前大納言爲家卿

○寛[illegible]、詠[illegible]心を
み渡せばみほの浦わの夕なぎになほなみかへる沖つ島山　隆祐朝臣

○寶治二年百首、海眺望
わたつ海はいかなる浪のはてならむ沖をも沖とみる程ぞみる　信實朝臣

○承安二年廣田社三首歌合、眺望
新續古今
わたの原こぎ放れゆく浪路には心もえこそつながざりけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○同
こぎいでてとほきうなづらみ渡せば雲居の岸にかへる白浪　盛方朝臣

○同
海原や雲居はるかにこぐ舟をうき木にのれる人かとぞみる　源仲綱

此の歌判者俊成卿云左うき木にのれるこれ又蜀郡靈符（誤歟）張騫が漢河に昇りしかとうたがへるなるべし心をかしく侍るめり

○いそのとまりと云ふ所にて夕日を
入日さす浪路をみればひと雲居あかしの浦はへだたりにけり　能因法師

○洞院攝政家百首、眺望
古を心のうちにながめても迷ふ夢ぢのはてをしらばや　家長朝臣

○建久七年百二十八首和歌
かへりみる雲よりしたの古里にかすむこずゑは春の若草　前中納言定家卿

哀傷

○延喜御子の御服にならせ給ひける時
墨染の身に睦ましくなりしよりおぼつかなきは侘しかりけり　天暦御製

○御返し
墨染の色だになくばほのかにも覺束なさは知らずやあらまし　讀人しらず

○世間の無常をいとふ歌に
萬十六
生死のふたつの海をいとはれてしほひの山を忍びつるかも　同

○かたらひ侍りける人のおやなくなれりけるに
風雅下
我がためにうすかりしこと墨染の色をば深くあはれとぞ思ふ　能宣朝臣

○權中納言俊忠卿とりべのの墓(墓イ)所
玉雜四
わけきつる袖の雫かとりべののなく／＼かへる道芝の露　皇太后宮大夫俊成卿

○家集、無常歌中
はかなさはふな岡山の夕まぐれしばしもたえぬ煙にもしれ　民部卿爲家

○嘉元四年當座百首
露ときえ煙とのぼりとにかくに結ぼほるゝはうき世なりけり　爲實朝臣

○家集
玉雜四
船岡の裾野のつかにかずそひて昔の人に君をなしつゝ　西行上人

此の歌はあひしりて侍りける人の身まかりてあとに十首歌人々よみけるによめると云々

○地獄のゑをみて
哀れ／＼かゝる憂目を見る／＼は何とて誰もよにまぎるらむ　同

○同
うかるべきつひの思ひをおきながら假初の世に迷ふはかなさ　同

○家集、無常歌中
鐘の聲日をふるまゝに殘るよのいとゞも近くなるぞ悲しき　登蓮法師

戀ひわぶる花のすがたはかげろふのもえし煙を胸にたきつゝ　前中納言定家卿

此の歌は建永元年三月後京極攝政にはかにうせ給ひてゆめの心ちし侍りけるあくる日家隆卿とぶらひたりける返事と云々

○建永二年三月百首御歌
かはらずよ三月七日のつゆはあきくもらば曇れ春のたなばた　慈鎮和尚

玉葉同
人のよは思へばなべてあだし野のよもぎがもとの一つ白露　同

○家集、無常歌中
うつりゆくときのつゞみの音毎に別れのとほくなるぞ悲しき　民部卿爲家

いつまでか形に宿るたましひの離れぬほどをありとたのまむ　同

○[illegible]二年[illegible]百首
何とかはたのみ頼まず日の前にあるも空しきかげろふの世を　安嘉門院四條

○雜歌中
別れとは身のある程ぞ我なくば人をもなにか哀れとはみむ　他阿上人

○同
草の葉の露にこの身をくらぶれば風のまゝなる命なりけり　同

○同
先立つといふもはかなしいつまでか空しきあとに身を殘すべき　同

○七百首歌
老が身は近くこえなむしでの山とほつ國とはいふべくもなし　權僧正公朝

○柿本影供百首
いつとだにしられぬよこそ悲しけれ命の水の流れひるまを　從二位行家卿

○源氏物語卷々をみるによみける
もえいづる峯の早蕨なき人のかたみにつみてみるもはかなし　西行上人

○久安百首
思へ唯水泡（みなわ）なす身のはかなさはあるかとみればきえぬる物を　前大納言隆季卿

○家集、山水の文の心を

山河のみなぎる水のおときけばせむる命ぞ思ひしらるゝ　西行上人

○家集、火をけにひとりゐて

向ひゐてみるにも悲しけぶりにし人を思ひのはひによそへて　和泉式部

○みちの國にて子におくれて

我がためと思ひおきけむ羅染はおのが煙の色にぞありける　重之

○浮生短二於夢一

よるべなく空にうかべる心こそ夢見るよりもはかなかりけれ　千里

夢

○家集、戀歌中

近くてはあはぬうつゝに今宵よりとほき夢みむ我ぞ侘しき　貫之

○題不レ知

六四　玉旅　貫之集

別れゆく人ををしむとこよひより遠き夢路をわれや通はむ　讀人しらず

○同

うば玉に戀しき人をみつる夜は夢のうちにてよをつくさばや　前中納言匡房卿

○同

萬代　家集

しきたへの枕をだにもかさばこそ夢のたましひしたに通はめ　素性法師

○正治二年百首

岩そゝぐこゑよりやがておどろけば夢あらひやむ谷の下水　喜多院入道二品のみこ

○貞應二年詠百首、山家松

山深き軒端の松にとしふりてなれゐる夢は風もいとはず　民部卿爲家

○喜多院入道二品親王家五十首

さらぬだに春はまさしき夢の中にちるとや花のみえむとすらむ　前大納言兼宗卿

○同年百首御歌

よしの山夢にも花をみる人や春はまさしといひはじめけむ　慈鎭和尚

○文治六年五社百首、夢

夢をなどはかなき物に譬ふらむみよの事までみゆとこそきけ　皇太后宮大夫俊成卿

○弘長元年百首

ぬるがうちに百年過ぎしことわりも夢てふものぞ誠なりける　常磐井入道太政大臣

○文治六年百首、夢
ぬるたまの夢はうつゝにまさりけりこのよにさむる花かはらで　前中納言定家卿

○花月百首
月清みねられぬよしも諸越の雲の夢までみるこゝちする　同

○一字百首
鶯のねはねざめの夢に覚えつゝ枕のはるにもなりにけるかな　同

○禊屋、雜歌
われはなほ夢のなごりも覚えけり雨の夕も雲のあしたも　後京極摂政

○建長元年百首、夢
いにしへの雲とあめとの山影はたが朝夕の夢ぢなるらむ　後九條内大臣

○六帖題、ひる
うちたゆむ晝間の夢のおもかげは雲にもあらず雨にもあらず　權僧正公朝

○千五百番歌合
見きとだにたれにかたらむ雨そゝぐ雲にまがひし曉の夢　小侍従

○正治二年百首
たまさかに相みし夜半に逢ふとみし夢は誠にいひけるものを　同

○[illegible]
萬代二戀二
夢ぢにはなこその關もなしといふ戀しき人のなどかみえこぬ　一品資子内親王

○承安三年[illegible]寺歌合、夢
幸かりし夢はさめても戀らぬにあふとみつるぞひだりなはなる　[illegible]盛法師

○百首和歌
思ひとけ夢の中なるうつゝこそうつゝの中の夢にはありけれ　慈鎮和尚

○五十首歌合羇旅
みる夢の迷ひの中にあけくれてさめぬをさむと思ひけるかな　中務卿みこ

○千首歌
とにかくに現にもあらぬこの世には夢こそ夢の夢にはありけれ　民部卿為家

○六帖題、夢
新六四
みぬもみえきかぬもききつ世の中に夢こそ戀の悟りなりけれ　信實朝臣

○同
同
ちらすなよ逢ふと見るよの夢語りうたてちかふる人もこそあれ　光俊朝臣

○為家卿家百首
立ちかへり猶ぞ戀しきたらちねの親のいさめしうたゝねの夢　従二位家隆卿

○建長八年百首

わが戀は海驢（みち）（神代紀三十一丁）のねながれさめやらぬ夢なりながら絶えやはてなむ　衣笠内大臣

判者光俊朝臣云海驢まつなにともえよみとき侍らず或云牛海驢は鮫魚にや侍らむ雲海流にたる時空に向ひて涙にれぶりてながれ行くとかや夢みることぞはかりがたかるべきおほよそこの事みづからしれるにはあらず就レ之論ニ勝劣一未レ得レ爲レ之責彌のがれがたしと云々

○文應元年七社百首、夢

たのむぞよ十（ライ）しほの聲をきく夢のもとの誓ひに思ひあはせて　民部卿爲家

○別後相思夢魂遙

別れにし時を思ひてたへぬれば夢のたま（どイ）しひはるけかりけり　千里

○家集、戀歌中

つらさのみまさりゆくかな思ひやる夢の魂いかに行くらむ　元眞

○家集

ねぬる夜の夢騷がしくみえつるはあふに命をかへやしつらむ　和泉式部

〔題不レ知〕

萬十一　わぎもこに戀ひてすべなみ白妙の袖かへししは夢に見えきや（つゝイ）　讀人しらず

○同

同　わがせこが袖かへすよの夢ならじまことも君にあへりしがごと　同

○康和二年國信卿家歌合

戀わびてかたしく袖はかへせどもいつかは君が夢にみえける　隆源法師

○千五百番歌合

夢にだに人を見よとやうたゝねの袖ふきかへす秋の初風　二條院讚岐

戀

○寛平御時后宮歌合

新撰萬葉　限りなく深き思ひを忍ぶれば身をころすにもおとらざりけり　讀人しらず

○同
白玉のきえて涙となりぬれば戀しきかげを袖にこそみれ　同

○兵部卿[illegible]王家歌合、[illegible]戀
こひわびて心まどへる寐覺めには面影をだに逢ふとたのまむ　同

○文治六年五社百首
はじめより思ふ心はきはもなしのりの道をもさこそいふなれ　皇太后宮大夫俊成卿

○同
袖ぬれてしぢのはしがきかきそめてすゑまた遠き道芝の露　同

○治承二年右大臣家百首、初戀
しるしあれと祝ひぞ初むん玉帶取る手ばかりの契りなりとも　同

○同
しるやいかに君をみたけの初いもひ心のしめもけふかけつとは　同

○六百番歌合、老戀
たまはゝき手にとる程も思ひきやかりにも戀をしがの山人　從二位家隆卿

○[illegible]供百首
うみをせき山をつくりしわが國の戀のはじめも神ぞしるらむ　後九條內大臣

○家集、[illegible]
つらさにも落ちし涙の今はたゞおしひたすらに戀しかるらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○文治三年百首、忍戀
わが戀よ君にもはては忍びけりなにをはじめに思ひそめけむ　前中納言定家卿

○家集
しるしあれと竹（よ家）の丸寢を數ふれば百代は臥しぬしぢのはしがき　俊　頼　朝　臣

○同
君こひて我がせこにさへうとまれぬこや羨みてあゆみせし人　同

○のちのあした
道すがらぬしなき戀やあくがれて歸る我が身にとりつきぬらむ　同

（次郎百首）
かきたえてみつきになりぬこれやさは心盡しの門出ならむ　同

○隔レ月戀
恨みのみ結びおきける身にしあればなどかは人をわきて思はむ　皇太后宮大夫俊成卿

○[illegible]社百首
をはつせや夜半の衣をかたしきていのる袂ぞいとゞ露けき　慈　鎭　和　尙

○[illegible]集二十首名所一戀

○五十首御歌被講中、戀
ふく風も物や思ふととひがほにうち眺むればまつの一聲　後京極攝政

○或抄中
雨中吟 をやみせずあま(ばイ)よの空になく涙もりぬしをれぬせく方もなし　前中納言定家卿

○家集、冬歌
涙川こひよりいでて流るればかくこほるよもさえぬなりけり　能因法師

○家集、戀歌中
家 六二 尋ぬればきたも南もわきやすしなど我が戀のあふ方のなき　前中納言匡房卿

○同
思ひあまり戀しき時は宿かれてあくがれぬべき心ちこそすれ　貫之

○六帖題
新六六 逢ふ事はかたちがひならさゝ結びよゝのむくいの契りつらしな　正三位知家卿

○百首歌、逢不レ會戀
長くしも結ばざりける契り故なにあげまきのよりあひにけむ　前中納言定家卿

こひやせて鏡の影をけさみればしらぬ人にもなりにけるかな　前中納言匡房卿

この歌はある女にたび(本ノマ)あやしき所にておもひかけずあひてのちあさがほのはなにつけてつかはしけるとなむ

○述懐百首歌、同
とにかくに身には恨みのみち〳〵て思ひを(そカ)むかむ方ぞ覺えぬ　皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合
いとせめて思ひいれたる歎きかなうき身ならでは恨みやはする　後鳥羽院宮内卿

○同
人もう(身のうへ)へ我もくやしきなぐさめは世々の契りの報いばかりぞ　前大納言忠良卿

○六百番歌合、契戀
頼むべきしぢのまろねの言の葉は思ひたえねといはぬばかりぞ　寂蓮法師

○同歌合、朝戀
いつしかにけさやる文の言の葉はあふ嬉しさとあはぬ恨みと　前大納言兼宗卿

○夕戀
君も又夕やわきて眺むらむわすれずはらふ荻の風かな　後京極攝政

○六帖題
新六四　まちかねし夕の袂のうたゝねもおどろかれぬる入相のかね　衣笠内大臣

○正治二年百首
駿河なるふじの煙のたたぬ日はありとも胸は晴れじとぞ思ふ　二條院讃岐

○六百番歌合、待戀
更けにけりたのめぬ鐘は音づれてならふ寢しきとふの菅ごも　大藏卿有家

○建保五年内裏歌合、
新續古戀三　かたしきの袖行く水のうすごほり思ひ碎けていく夜ねぬらむ　正三位忠定卿

○家集、戀歌中
七夕もとしに一夜はあふものをなどわが戀のとほめづらなる　前中納言匡房卿

○六帖題
新六五　今もなほ心にかゝる別れかなかみかきやりし人のうしろで　正三位知家卿

○建仁三年水無瀨殿十五首戀歌合
なかめしや心づくしの秋の月露のかごとも袖深きころ　參議雅經卿

○寶治十首歌合、忍久戀
月ゆゑと人にはいひて誰をかもめでても戀のおいとなるらむ　信實朝臣

○戀歌中
あぢきなく人をもこひし今はたゞ西に傾く月をながめむ　前中納言匡房卿

○家集
結びわけむ人のことのはあだなれや亂れて秋の風にちるらむ　伊勢

○戀歌中
山家下　あやひねるさゝめのうみのきぬと著む涙の雨を凌ぎがてらに　西行上人

○六百番歌合、寄雨戀
深き夜のねざめになにを思ひけむ窓うちすさむ曉の雨　寂蓮法師

○家集
六五　かりごもも心のうちにほさなくになどさみだれて物思ふらむ　貫之

○六帖題
新六五　いかにせむ戀と思ひと身にそへて來む世のたき木けつ方もなし　光俊朝臣

身はかくれ聲は音なふ山びこをたづぬるほどに夏ぞくれぬる　祭主輔親

此の歌はかたらひける女ありところをかくしてさすがふみなどありけ

る六月つごもりによみけると云々

○百首歌中に

玉葉二
つれ〴〵と空ぞみらるゝ思ふ人あまくだり来むものならなくに　和泉式部

○とほき所へまうづとてある人のもとへつかはしける

みほの海のうらみへ(にイ)ぞ行く尋ねずばみわの山人のさもたゞじとて　同

○六百番歌合、寄レ絵恋

主や誰みぬよのことをうつしおく筆のすさびにうかぶ面影　前中納言定家卿

○六百番歌合、寄レ絵恋

人しれずつくす心はかひぞなきこやゑにかける姿なるらむ　正三位季経卿

○後徳大寺左大臣家十首歌、寄ニ催馬楽一恋

あはでのみかへる野原の露なれどかふるはをしき萩が花ずり　皇太后宮大夫俊成卿

○稲荷社歌合、寄ニ催馬楽一恋

みし人はかれ〴〵になる東路にしげりのみゆく忘れ草かな　建禮門院右京大夫

○源氏物語の名によせてよめる恋歌

歌林抄
あはぬよの心ゆかしの手習ひは恋しとのみぞ筆はからるゝ　登蓮法師

○千五百番歌合

せきもあへず恋すてふ名や流れなむ水の下までかげ通ふなり　西園寺入道太政大臣

○同

あはでたゞ歎くばかりの契りをばこは何ゆゑに結びおきけむ　醍醐入道太政大臣

○洞院摂政家百首、後朝恋

忘れじのながき契りもあさね髪みだれてものはけさぞ悲しき　大納言経通卿

○同

夢をまつあかぬなごりのあさね髪かゝる涙ぞ猶みだれそふ　民部卿為家

○安元三年十月右大臣家歌合、暁恋

誰とねて君きぬ〴〵になりぬらむ片しきてこそ我はあかすに　道因法師

○六百番歌合、別恋

しばしなるけさのまたねに見つるかな心がはりの行末の夢　慈鎮和尚

○六帖題、後朝

新六五
あかぬ夜を月ぞ〳〵といふ程にげにしらむまで別れかねつゝ　民部卿為家

○永仁二年藤原長清が家歌に

我が袖のほかにないでそ涙川うき身なるみはせきあへずとも　参議為相卿

〇嘉元元年歌合
玉葉三
とはむしも今はよしやの明方もまたれずはなき月の夜すがら　前中納言爲兼卿

〇洞院攝政家百首、怨戀
續後拾遺四
とこはうみ枕は山となりぬべし涙もちりもつもる恨みに　從二位家隆卿

〇寛喜元年十二月家歌合、寄後朝
六四
相見ては睦じくこそなるときけつれなさのみもいやまさるかな　平定文

〇むぐら
六六
なにせむに玉のうてなも八重葎はえらむ宿に二人こそねめ　讀人しらず

〇題不レ知
萬一
なからふるつま吹く風の寒き夜にわがせの君は一人かぬらむ　同

〇同
萬十二
夕されば君やきますとまちし夜の名殘ぞ今はいねがてにする　同

〇同
萬四
をとゞしのさきつ年より今年までこふれどなぞも妹に逢ひ難き　中納言家持卿

〇同
萬十一
わぎもこがよとでの姿みてしより心空なりつちはふめども　人丸

占

〇題不レ知
萬十一
あはなくに夕けをとふとぬさに置く我が衣手はまたぞつくべき　讀人しらず

〇同
六一
ゆふけとふわが衣手に置く露を君に見せむと取ればきえつゝ　同

〇同
萬十一
ことだまのやその衢(ちまた)に夕けとひ占まさにせよ妹に逢はむよし　同

〇同
同
玉ぼこの道ゆき占にうらなくばいもにあはむと我にいひつる　同

〇同
月夜には門にいでたち夕けとふ足占をぞせしゆかまくをほり　中納言家持卿

〇同
萬十二
月夜よみ門にいで立つ足占してゆく時さへや妹にあはざらむ　讀人しらず

○長歌

萬十三 いつきまさむと　たまぼこの　みちにいでたち　夕うらを　わがとひしかば　ゆふうらの　われにつくらく　同

○題不知

萬十六 占へをも八十のちまたも占とへど君をあひみむたときしらずも　同

○國信卿家歌合

歌苑抄 たはれにし妹にあふやと道のべにとひし夕けぞ人だのめなる　基俊

○久安百首

玉鉾の夕けをとはむこのくれに山時鳥きくやきかずや　大炊御門右大臣

○千五百番歌合

こりはてぬうき身の程を疑ひて心のうらにつくべかりけり　前中納言兼宗卿

○建長八年百首歌合

夕けとふいしうらもちて逢ふ事のかたき戀とは思ひしりにき　從二位行家卿

言語

○延喜七年御屏風歌

照る月を見ざらましかばうば玉の夜は物へも行かずぞあらまし　貫之

○尾張守をきかた下るにぬささうぞくやるとて

人はいさ我は昔の忘れねばものへときゝて哀れとぞ思ふ　同

○延喜御時（御イ）屏風歌

浪の上にほのにみえつゝ行く舟は浦ふく風のしるべなりけり　躬恒

○家集

身に添ふる影とも人をなしてしかうしろ安さをみせむと思へば　伊勢

○題不知

萬代 夕けとふ道のほとりの人だにもことの答へはせぬとやはきく　清愼公

○同

同續四 ひたみちに頼めば人の辛くとも知らぬ顔にてあらむとぞ思ふ　西宮前左大臣

○家集

せこがきてふししかたはら寒き夜はわが手枕をわれぞしてぬる　和泉式部

○同
こぬ人をまたましよりも侘しきは物思ふ頃のよひ居なりけり　同

○あつき物といふ物を火より[illegible]をけにいれて十二月ばかりに
かくばかりさゆるにあつきけのすれば（るはイ）火取の桶のなればなりけり　同

○宿守のつとめて
けふよりはあしまの水やぬるからむ春のたちどの氷うすれて　同

○かみをひきしくけづらでかみのみだれたるに
胸をのみ亂れてぞ思ふたれかには今はなげかむうば玉のすぢ　同

○題不知
（萬代）いづれをかまづ憂へまし心にはあたはぬ事の多くもあるかな　相模

○同宮女房あまたにおはしましけるに題々にて、旅紅葉
朝ごとに色ますもみぢなかりせばなぐさめましや旅心を　權大納言長家卿

○承保二年内裏秋十五首歌合
月みてもわがよはすでに久方のあまねくてらせ秋の心を　大藏卿有宗

○同
すべてたゞこひせぬ袖の露だにももろきならひの秋の夕暮　同

○一字百首
ならの葉のそよぐ響きの下風に契らでつどふむらの里人　前中納言定家卿

○同
立田山ひと葉おちちる夏かげも思ひそめてし色は見えけり　同

○一句百首
我が宿にけふのねのひの松うゑて風まちつけむすゑの夏かげ　同

○同
うちそゝぐ秋の村雨ひやかにて風にさきだつしたのうき雲　同

○文治五年百首、萩
荻の葉にふき立つ風のおとなひよそよ秋ぞかし思ひつること　同

○六百番歌合
たのめぬをまちつる宵も過ぎはてて辛さとぢむる片しきの牀　同

○洞院攝政家百首
吹きはらふ紅葉のうへの霧はれて峯たしかなるあらし山かな　同

○後京極攝政家にて一字おく三十一首歌
明方になるや秋風たちそめていさゝか涼し夏のたまくら　同

○二見百首

○韻字詠雙蓮箱色先秋變、地芥恩有枕イ餘（釣イ）老拋

○無來無ㇾ去無ㇾ所ㇾ好、琴詩酒興隔ニ提携一

○鳴ニ暗巷（巷イ）蛩ニ露底一、驚ㇾ書還雁出ニ雲端一

○貞應二年九月四季百首、冬木

○康安元年毎日一首

○建長三年毎日一首中イ

○寛元三年結緣經百首

○嘉元百首

○同

○同

○海道宿次百首馬淵

○旅歌中

○嘉元元年百首

○平大納言の女につかはしける

たゞいまの野原をおのが物とみて心づよくもかへる秋かな　同

みそぎする麻のたちはは宿毎に刈る程もなくなけうてつなり　同

月の色にきりなへだてそ難波潟汀のあしはたづさはるとも　同

秋の夜を蟲のなく／＼恨むともつきじ思ひの露のかたはし　同

ちりつもるよもの木ずゑの木枯にのこりてすまふ峯の椎柴　民部卿爲家

しらせばやそよもろごとの安けくもなきよの中に思ひわぶとも　同

子を思ふ心ばかりにほだされてうき世を猶ぞいでがてにする　同

現存六
あだ名たつ浪の心もそと濱のうゝましながら又かへれとや　同

いかにせむたゞなほざりの世習ひにたのまぬ中をなげく心は　同

夕立の峯のむら雲たちさわぎおびたゞしくもぬるゝ袖かな　同

とにかくに心の鬼は日に添ひておそろしき世にふるぞ悲しき　同

たとひ世に猶ながらへてめぐるとも頼まれぬべきわが心かは　同

日もくれぬ渡せその馬淵もなきこの人かははせぶみせずとも　參議爲相卿

玉秋上
まつの色眞柴（つゆ玉）の風の夕げしきあすもやこゝにたへてながめむ　前中納言爲兼卿

よりふして唯うち休むとばかりにまどろみぬらし夢のみえつる　入道前太政大臣北山

住吉の岸のいぶかしくおもほえて浪のよるこそ立ちゐまたるれ　謙德公

○或所の屏風歌馬にのりたる人秋の野を行く
○山里の人の家にきくの花あるをしりてつくろふ
○東山に花みにありくとて、山櫻を
○家集、秋歌中
○百首歌中
○同
○家集、戀歌中
○右大臣家賀の屏風、十一月霜
○をさなきこのもとに人のかひをおこせて侍りしを
○殿上にて、時鳥十首歌
○時鳥[illegible]
○たなかみに侍りける比人をまつとて
○祝のこゝろを
○たかさごにて風のいたく吹きければおきにひさごいろと云ふものゝたつを
○旅離別と云ふことを

秋の野の花に心をよせつゝは駒うながさぬけふにもあるかな　惠慶法師
霜雪にあてぬさきより菊の花のつくろふ人の袖ぞ露けき　同
山櫻近くみむとの心にてけふは霞にかくまるゝかな　同
たちとがへするものにもが蟲の聲衣の袖もそぼちはてぬる　同
紅葉せぬときはの山のときは木も秋は下葉ぞけしきはむらし　同
一年のひたおもむきの春ならばのどけくみまし深山べの梅　同
秋萩の下葉につけて思ふかなうかりし人の心ばへをも　同
夜と共に心一つをやくしほのとくともなしに消えてみゆらむ　元輔
つなぎつゝいざみにゆかむふり積る雪をふみわけかる鹿の跡　同
行末を心もとなく思ひくるちひろの底のかひぞうれしき　同
散木夏
時鳥あかぬなげきのもりに来ていとゞも聲ををしみつるかな　俊頼朝臣
同
またずてふわが名もたてじ郭公なきおこしぬと人にかたるな　同
たれにまた思ひしらせむ君まつとたゝずむ庭の木枯の聲　同
散木
みづからにしろとをのゆふとりしでてあかふも君が萬代の爲　同
（かきのイ）（そぶイ）
同旅
ひさご花さけるけしきによそながら庭の心をくみてしるかな　同
今更にいも逸さめやいちじるきあすはの宮に小柴さすとも　同

○殿上にて戀のこゝろを
○文をみぬ戀といふ心を
○家集、戀歌
○人にしらるゝ戀
○としをへたる戀
○いやしきをいとふ戀
○顯輔卿家にて戀の心を
○左京大夫經忠卿家にて戀人によらずといふことを
○百首歌中に、松
○山
○橋
○返し

年へたるひさの植木のうちいたさ（こイ）を知らでも人に身をかふるかな　同
みさごだにうやまふ磯を打ちさらしはゝ（あらイ）ふる潮を眺めかねつる　同
文見ずと聞くにつけてもうたしめのはしたなきまでぬるゝ袖から　同
まづきては人めも知らず與へしを何さまあしくはしたなめけむ　同
まきの板を堀に渡して通ひこむ忍びもあえずいもがしるしに　俊頼朝臣
年ふとも（れどイ）こすのすけきのたえまより見えししなひは面影に立つ　同
金葉下
怪しきも嬉しかりけりおとしむる其の口のはにかゝると思へば　同
逢ひそめよよもたどにてはとほかりのこむと頼めし程は過さじ　同
紅の袖にはづれしまみよりもなれがつゞりのわゝけをぞ思ふ　同
みさごゐる磯開におふる松の根のせはしくみゆるよにもふるかな　同
幾しをり越えてか人に岩がねのこりしく山をかへりみるべき　同
朝夕に傳ふ板田のはしなればけたさへたえてたぢろぎにけり　同
こりはてぬにへの初鴈あさにする宿にもあらで人返しけり　同
此の歌　隆源法師のもとにたびゝゝまかりけれどもいたはるとてあはざりければさうじにかきつけける歌
初鴈のにへのひるけのつかなりと（なイ）ほかけぞすべきいかゞ返さむ隆源法師

○明後が歌をよみてかかる古歌おぼゆるとたづねたりしかばよみける

呉竹のつゝをのみゆるせはしさによもこの節はあらじとぞ思ふ　俊頼朝臣

○永久四年百首、別戀

妹が家のかたに關守すゑてしか朝わかれゆくわれとむるがに　源兼昌

○永安二年□崎寺歌合、草花

風ふけば千草の花もやすからで心ぐるしき秋の夕暮　法眼全眞

○□□十二月東山歌合、雲間月

行きとまる草の假庵のあだぶしは月にももれてあかすなりけり　賀茂重保

○同

尋ねつるはなかとてこそよぢ上れこひさめなれや峯の白雲　信蓮（寶イ）法師

○時々くる人をうらむる心ある女におほせて

逢ふことはしげめゆひかと思ひしをとほかりにこむ人は賴まじ　源仲正

○家集、寄井戀

濁りゐに影をならべてすむばかりかへばや人のつれな心を　同

○山家百首、忍戀

よもすがら身じろきをだにえこそせね衣返すと人やきくとて　同

○□□社百首、初戀

そのかみの戀の初めを思ふこそ猶はかなさのきはめなりけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○六百番歌合

玉葉二
雲とづる宿の軒ばのゆふながめこ（雲イ）ひよりおつる雨の音かな　慈鎭和尚

○同

眺めする心のねよりおひ初めて軒にしのぶはしげるなるべし　同

○同

涙川あふせもしらぬみをつくしたけこす程になりにけるかな　同

○千五百番歌合

今宵こむ人にぞあはむ七夕のたえぬ契りにあへむと思へば　同

○□若宮十首歌合

ながめをばてる日の影や隔つらむ春秋もなき夏姿かな　同

○同

いほりさす野澤の夏の夕涼み物どころせき秋にもあるかな　同

○同

三日月のほのめく空に秋をこめてそよろき渡る山のはの雲　同

○同
われいとふ人の心とおもはばやしたしくおつる袖の涙を　同

○文集百首、遙見二人家花一便入不レ論二貴賤與一レ親疎一
花を宿のあるじと賴む春なればみにくる人をきらふものかは　同

○賀茂百首御歌
谷かけていはねきびしき奥山におそき櫻をみる人やたれ　同

○同
賤のめも大路井筒に夕涼みしたるきあさの衣すゝぎて　慈鎭和尙

○同
くれ竹にいさゝか風のおとづれて吹くや枕にこのはちるなり　同

○同
荷ひもつざうきのいれこまちわした世渡る道を哀れとぞみる　同

○日吉社法樂歌
人ならば恨みもすべしいかゞせむ我をすかすはわが心なり　同

○建久二年春の比東林吟藥
昔人みぎりにうつす四季のゐのはるしも物を思ひけるかな　同

○述懷百首、歌旅
天さかる鄙の長路に日數へておちぶれぬべき身をいかにせむ　皇太后宮大夫俊成卿

○建長三年十五首歌合、春戀
さてもまたなぐさむやとて眺むべき涙も空もうすがすみつゝ　後鳥羽院内大臣

○御集
あぢきなし身の爲にこそ戀もすれ心さだむるわがなみだかな　後九條内大臣

○同
かくれじなうきもてなしの袖の露こととなき樣に打ち拂ふとも　同

○弘安元年百首
世の中のあだの習ひをあぢきなく（よイ）など昔おひて花のさくらむ　同

○五十首御歌、月前竹風
古里の月吹く風になよたけのなはりあひても幾世へぬらむ　後鳥羽院御製

○百首御歌
なまじひにいければ嬉し露の命あらばあふよをまつとなければ（どイ）　同

○御集、寄レ月戀
君に我うとくなりにしその日より袖に親しき月のかげかな　後京極攝政

○和歌所初度影供初恋
撰イ
○家集歌合、言語
○後法性寺入道関白家百首
○百首歌
○百首御歌
○保安二年九月内大臣家歌合、野関
○永久四年百首言語
○久安百首
○同
○六百番歌合、寄レ雲恋
○壬二家卿家百首
○家集
○遠所十首歌合、羇旅
○無百首歌中
○貞應三年百首題二十首中

すまの蜑のもしほの煙たちまちにむせぶ思ひをとふ人のなき　同

松島や濱風寒きいそねかなあまのかるもをひじきものにて

いのちもうし忍ぶにたへぬ身とならばその煙をも雲にかすめよ（ニイ）

夜舟こぐ明石の浦の月をみてふくるにおつるわが涙かな　寂蓮法師

さしもあらぬ時雨なれども玉柏ことにとりなす夜半の音かな　喜多院入道二品のみこ

旅衣のちのくさぶし寒けきに風もおなじくゆふるせよかし　明賢朝臣

ゆくすがら心もゆかず別れ路はなほふるさとのことぞ悲しき　仲實朝臣

野邊毎に人もゆるさぬ我もけふこや今やうのむさ（うま歟）のこと草　季通朝臣

諸共にけふぞ心は行きにけるひとづてならぬむつがたりして　前大納言隆季卿

おもひやる眺めもいまはたえぬとや心をうづむ夕暮の雲　従二位家隆卿

戀ひ死なば人笑へにもなりぬべししひてをいはむあるよばかりも　同

よそに聞くうるまの島のうるさくばいひだにはなて思ひたえなむ　同

あれくらし濱ゆく風のいやはやにたちそふ浪に千鳥なくなり　同

（新拾旅）をりしかむひまこそなけれ沖津風ゆふだつ波のあらき濱荻　同

朝露にぬれこし袖をほす程にやがてゆふだつわがたもとかな　西行上人

思ひわび今はわが身のかつかたにありし契りや人に語らむ　民部卿爲家

○家五十首、祝
たれも皆嬉しきしほにあひにけり浪も音せぬよもの海かな　喜多院入道二品のみこ

○久安二年六月顯輔卿家歌合、戀
大井川ゐぜきによどむいかだしを涙のくれにまつぞ悲しき　西住法師

○建長八年百首歌合
新六五 君が代をなににたとへむ天地のいやとほながき限りしらねば　前大納言顯朝卿

○六帖題
同 おのづから手枕はづしねなほれば我思はずに妹むつけたり　光俊朝臣

○同
同 おのづから妹が傳への口まねびあらぬ景色も懐しきかな　同

○同
辛かりし日頃を語る睦言になきみわらひみあかす夜半かな　信實朝臣

○百首歌
夕涼みあだねの牀のあけがたにすだれ動かし秋はきにけり　殷富門院大輔

○家集中
口をしき身にもかふべき物ならば今までよをばききてへましや　成尋法師母

新六一 村雨の空うちなびく秋の日の雲のはづれにのこる稻妻　信實朝臣

○建長の百首歌合
數ならぬみは山影のしづ／＼と物哀れにもなるすまひかな　同

○寶治二年百首
きり／＼す枕かたさることやなき曉かけて夢おどろかす　同

○弘長元年百首
ふる雪のつもる折こそわが宿にあしふみいれて人もとひけれ　同

○同
浪の上いそのあら／＼しらせてぞくだく心の程も見すべき　同

○御集、花恨レ風
心うき風にもあるかな櫻花さく程もなくちりぬべらなり　鎌倉右大臣

○家集、花歌中
花みればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりける　西行上人

よしの山花吹きぐして峯こゆる嵐は雲とよそに見ゆらむ　同

もろともに我をもぐしてちりね花うき世をいとふ心ある身ぞ　西行上人

あだにちるさこそ梢の花ならめすこしはのこせ春の山風　同

かたばかりつぼむと花を思ふよりそゝ又心ものになるらむ　同

○夏歌中

雲晴れて沼のみかさをおとさずば菖蒲もふかぬ五月ならまし　同

こざゝしくふるさとをのの道のあとを又澤になす五月雨の頃　同

○女郎花水近と云ふ事を

女郎花池のさなみに枝ひぢて物思ふ袖のぬるゝがほなる　同

○月歌中

悔しくも賤のふせやと脊しめて月のもるをもしらですぎけり　同

弓張の月にはづれてみし影のやさしかりしはいつかわすれむ　同

○雲歌中

なか／＼にとき／″＼雲の懸るこそ月をもてなす氣色なりけれ　同

○同

秋風のふけゆくのべの蟲のねにはしたなきまでぬるゝ袖かな　同

○家集

せくごとにたてる潮のおほ淀みよどむとくいもなき涙かな　同

○戀歌中

あやめつゝ人しるとてもいかゞせむ忍びはつべき袂ならねば　同

○同

さる事のあるなりけりと思ひ出でてしのぶ心の忍べとぞ思ふ　同

○同

さる事のあるべきかはと忍ばれて心いつまでみさをなりけむ　同

○同

煙たつふしに心のあらそひてよたけき戀をするがへぞ行く　同

○同

むかはらばわれが嘆きの報いにて誰ゆゑ君がものを思はむ　同

○同　さりともと仄かに人をみつれどもおぼえぬ夢の心ちこそすれ　西行上人

○同　こととへばもてはなれたる景色かな麗かなれや人の心の　同

○同　いとほしや更に心のをさなびてたまぎれらるゝ戀もするかな　同

○同　人しらぬ涙にむせぶ夕暮はひきかづきてぞうちふされける　同

○同　物思ふ袖に嘆きのたけ見えてしのぶしらぬは涙なりけり　同

○同　ものおもふ心のたけぞしられけるよな／＼月を眺めあかして　同

○同　いひたてて恨みはいかにつらからむ思へばうしや人の心は　同

○雜歌中　とをてさすひくの表にひく潮に沈む心ぞかなしかりける　同

○同　（玉神祇）かしこまりし（ゐイ）てに涙のかゝるかなまたいつかはと思ふ哀れに　同

此の歌家集云よをのがれて後仁安二年十月一日夜賀茂にまゐりてへいまゐらせけるにこのまの月ほの／＼とつねよりもあはれにおぼえてよめると云々

○家集、東山に阿彌陀佛と申しける聖人の庵室にまかりてよみたる　柴の庵といきくは賤しき名なれどもよに好もしき住居なりけり　同

○落花を　吹く風のなべて梢にあたるかなかばかり人のをしむ櫻に　同

○待レ花　今更に春を忘るゝ花もあらじやすくまちつゝけふもくらさむ　同

○雨中待レ秋　萩が葉に露のたまもる夕立は花まつ秋のまうけなりけり　同

○池上月
みさびゐぬ池の面の清ければ宿れるつきもめやすかりけり　同

○花歌中
よしの山雲をはかりに尋ね入りて心にかけし花をしるかな　同

○梅歌中
この春は賤が垣根にふしわびてむめが香とめむ人したしまむ　同

○戀百首中
われのみぞわが心をばいとほしむ憐れむ人のなきにつけても　同

○同
よだけたつ袖にたぐへてしのぶかな袂の瀧におつる涙を　同

○齋院おりさせ給ひて後かの所の女房に申しける
君住まぬみうちは荒れてありすがはいむ姿をも映しつるかな　同

いつか又いつきの宮のいつかれてしめのみうちの塵を拂はむ　同

此の歌はいせに齋宮おはしまさで年へにけり齋宮こたちばかり御かどみえてついがきもなきやうになるをみて云々

○家集
百敷にえられて植ゐる女郎花心おごりのなどかせざらむ　元（同イ）眞

○家集、戀歌中に
玉葉三
さりともと頼む心にはかられてしなれぬものは命なりけり　能宣朝臣

○家集、夏歌中
花ちりし春の嵐を惜しみおきて夏の日よりにふかせてしがな　好忠

○三百六十首中
さよなかにせこ（せ　六家一本）がきたらば寒くとも肌へを近み袖も隔てじ　同

○戀歌中
我妹子が衣うすれて見えしよりたはれねせじと思ひなりにき　同

○同　都イ
をだまきにあさけのま人わがごとや心のうちに物は思ふらむ　同

○鶴衣家歌合
たまさかに逢ひみても又別れぬるあさけのま人名殘悲しも　讀人しらず

述懷

○憂喜皆心灰
悲しきも嬉しきこともおほかたの心の灰となりぬべらなり　千　　里

○衰鬢俄頃變春花
黒髪のにはかに白くなりぬれば春の花とぞ見え渡りける　同

○夢中歡樂勝（異イ）然（竟イ）
風雅下
夢にても嬉しきことの見えつるはたゞに憂ふる身には增れり　同

○老眼早覺（夢イ）常殘ㇾ夜
老いてぬる目は早覺めぬ長しなへに夜はに明くれば寐てのみぞ經る　同

○自歎心共延壽命
騷ぎなく心ひとつをなしつるに命を延ぶるものはありけり　同

○心更老於身
世の中を思ひわびぬる心こそ身よりもすぎておいまさりけれ　同

○百首御歌委ㇾ形老少外忘ㇾ懷死生間
おもひとくに形（ナシイ）なければ心なし人てふ名をも穢しつるかな　慈　鎭　和　尙

○百首御歌、述懷
まだ死なで罪の報いを見つるかないきてもかかる世に生まれけり　同

○嘉應二年十月住吉社歌合、述懷
吾が盛りやよいづかたへ行きにけむしらぬ翁に身をば讓りて　清　輔　朝　臣

○述懷歌中
萬代　續古雜下
喜ぶも嘆くもあだに過ぐる世をなどかはいとふ心なるらむ　權　律　師　永　觀

同　玉釋教
あすよりはあだに月日を送らじと思ひながらも又くらしつゝ　慶　政　上　人

哀れげに逃れても世はうかりけり命ながらぞすぐべかりける　他　阿　上　人

○述懷の心を
身を思ふ心の中をたがはずば身には心ぞあだとなるべき　同

すてし身を又とりかへす僞りの心をいかでこゝろとはせむ　同

嘆きにはなげきはなきを悦ぶをもとむればこそ嘆きとはなれ　同

○嘉元三年十二月別時ののち
老らくは身は（のイ）なゝそぢのさかへにて心なとめそ胸の關守　同

○同
老が身の山とし高く上りきてくだりむきなる坂ぞ末なき　同

○仁和寺入道二品親王家五十首
いかでかく濁りの末にむまれきて月すむ秋をあまた見つらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○述懷歌中
沈む身はかへらぬ老の波なれば水行くかはの末ぞかなしき　前中納言定家卿

○貫之がもとへつかはしける
（貫之集）草も木もふけばかれぬる秋風にさきのみまさるもの思ひの花　躬恒

○返事
ことしげき心よりさく物思ひの花の枝をばつら杖につく　貫之

○家集
みな人の花の衣をきるなかにひとりぞおいに（のイ）しぼみはてぬる　躬恒

○あふぎに手ならひをし侍るとて
（雲葉）千歳まであとゝまる筆の跡なればかく人からや人もしのばむ　權大納言行成卿

○十首御歌、曉述懷
よをこめし朝まつりごと引きかへて今は佛の道ぞおこなふ　後鳥羽院御製

○五百首御歌
何かなげく何とかしのぶ徒らに思ひもをかし露の世の中　同

○御集
あはれなり錦のとばりひきかへて蜑の苫やは月もとまらず　同

○寄レ枕述懷
我が肱を枕にしつゝ思ふかなげに樂しみはこれにすぎじも　後嵯峨院御製

○白氏文集をひかれて
（古来歌）身をば雲心は水になしつれば人をもよをもうらみざりけり　後光明（明イ）峯寺（入道イ）攝政

○千五百番歌合
數ならぬ我が身は花にふくあらしすむよも月にかゝる浮雲　前大納言忠良卿

○寛喜三年名所百首
わかの浦の神にかきやるもしほ草心になびくたむけともがな　從二位家隆卿

○承元四年粟田社歌合
○百首歌
○同
○家集、述懐歌中
○建長四年毎日一首中
○文應元年七社百首、述懐
○嘉元元年式部卿親王家續千首寄沼述懐
○賀茂社百首
○三百歌十首御歌
○柿本影供百首
○同
○六帖題
○同
○同

わかの浦やなぎたる朝のみをつくしくちねかかひなき灘に殘りて　前中納言定家卿
いかにせむはてなき人は世にもなし止らぬ駒の影はすくめり　同
苔の下にうづまぬ名をば殘せどもはかなのみちや敷島の歌　同
數しらず誰もかきおく名のみして塵につくべき言の葉もなし　民部卿爲家
あとたれてまもるとならば玉津島横波たつなわかの浦風　同
天の原たかしとばかり仰ぎみておほふむくいを知らぬ悲しさ　同
人ごとのいつゝの教へたえはてぬ神も佛もなにをまもらむ　同
よに沈む言の葉ばかりのばへてもいかほの沼の水隱れぞうき　參議爲相卿
まちくだりよろぼひ行きて世を見れば物の理(ことわり)皆知られけり　慈鎭和尚
人を見るも我が身を見るもこはいかになもあみだ佛〱　同
神にむき佛にむきていのる身はみなみへ西へちる涙かな　後九條内大臣
樂しみになげきは影とそふものを世にあふ程は知る人やなき　同
山深く八重のさかもぎ引くとてもよのうき事はなきぞ通はむ　同
新六四 いかにかく心にむかじ目に涙うかばぬ時もなき身なるらむ　光俊朝臣
同 しらざりき佛と共におきふしてあけくらしける我が身なりとは　同
同 愚かなる心の師とはなりぬれど思ひ〱に身をばまかせじ　衣笠内大臣

○同

同
かた木こるたつきの斧の柄を弱み思ひきられぬ世こそ辛けれ　民部卿爲家

○文永二年毎日一首中

人しるやうき世の末の心とて雨くもるそら水にごるかは　同

心なき身にさへ物のなげかれてさらにいはきの情をぞしる　同

○恨身恥（運イ）述懐百首中

猶も〳〵云ひてもいはむけふけふも思ふおもひの積る積りを　使顯朝臣

年經ればけかしき（きにてくみたるもの）溝に落ちぶれて濡れしほどけぬいとほしの身や（よイ）　同

山賤のつぐらにゐたるわれなれや心せばきを嘆くと思へば　同

○長歌かひのくにへまゐり侍るとて

古本忠岑集
こぞのこぞ　とつきのゆばり（かイ）　ありしとき　さきのすべらの　忠岑
おほせして（に家）　しらくもゐなる（ま家）　かひがねに　さしつかはしし
ときはわが　ゆめよ〳〵と（いひしとこばめ家）　よひごとに　ちぎりしことは
わたのはら　ふかみどりにて（きイ）　ありそうみの　あだなみたつ
な　てふことを（は家）　をりかへしつゝ　いひおきて　しぐれとと
もに　ふりでにし　まなこのきりは（ち家）　たちみだれ　あづまの
道も　見えざりき　心のやみに　まどひつゝ　あふさか山を
こえいでて（はてイ）　しげき思ひを　やましなの（ろ家）　山をうしろに　み
なしつゝ　うしろめたしと　思ひおきて　わがみはせたの
はしにいたり　いかにせましと　うちなげき（かめ家）　あふみのうみ

をみやりしに　やむことなみの　たちしかば　はるかにみえし　たてしまの　からきわかれを　するがなる　ふじのみ山を（と家）　くゆれども　つひにとまらぬ　みちなれば　たむけのかみを　うちねぎて　さてゆく程に　いたりにき　のこれる冬は　はかなくて　くさの枕に　わびくらし　としだにこえば　はるがすみ　立ち歸りなむと　おもひしを（に家）　わがなすことの　しづはたに　みだれてならす　ありしかば　たちとゞまりて　へしほどに　せみのはつこゑ　なきしなべ　都よりこし　みやこどり　そらになくねを　ききしかば　君まつ山は　もみぢして　なみさへこゆと　つげしかば（きき家）　雲のうかべる　ことなれば　よにもあらしの　風ふきて　はれたる空を　うちながめ　いつしか山に　たちのぼり　まつ山ごとに　うつろひて（し家）　ありとみむとぞ　いそぎこし　なにかはさらに　さりければ　いろのみどりも　さしながら　こゝろねさへぞ　かれにける（ぼえ家）　さりとも水の　あわごゝろ　すみもしぬべく　おもひしを（に家）　にごりそめにし　あさきせは　かげみるごとの（しぐれとともに）

○長歌

前大僧正慈鎮（前中納言定家イ）

かたふちに（あさぎり家）　いでいり繁に（しげき家）　にほどりの　した（そこ家）さわがしう（おもは家）
かははすを（澁木に家）　よを（み家）うき草の　かくせども　かくしもあへず
なにはがた　みぎはにおふる　あしのねの　あしたゆふべに
あらはれて（たつるなり家）　きこゆることを　くるしびに（て家）　もえいでがほに
うつろひにけり
さてもいかに　わしのみ山の　月かげの　つるのはやしに
いりしより　經にける年を　かぞふれば　ふたちとせをも
すぎはてて　のちのいつゝの　もゝとせに　いりにけるこそ
かなしけれ　あはれみのりの　みづのあわ　きえ行く比に
なりぬれば（ゆけイ）　それに心を　すましてぞ　わがやまかはに　し
づみゆく　心あらそふ　のりの師の　われも／＼と　あをや
ぎの　いとところせく　みだれきて　はなも紅葉も　ちりゆ
けば　こずゑあとなき　み山べの　みちにまよひて　すぎな
がら　ひとり心を　とゞむるに　かひもなぎさの　しがのう
ら　あとたれましし　日よしのや　神のめぐみを　たのめど
も　人のねがひを　みつかはの　ながれもあさく　なりぬべ

し　みねのひじりの　すみかさへ　こけの下にぞ　うもれゆ
く　うちはらふべき　人もがな　あなうの花の　よの中や
はるのゆめぢは　むなしくて　秋のこずゑを　おもふより
冬のゆきをも　たれかとふ　かくてやいまは　あとたえむ
とおもふからに　くれはとり　あやしきよるの　わがおもひ
きえぬばかりを　たのみきて　なほざりともと　おもひつゝ
しばしみやこに　やすらひて　のこるみのりの　はなのかに
しひて心を　つくばやま　しげきなげきの　ねをたづね　し
づむむかしの　たまをとび　すくふ心を　ふかくして　つと
めゆくこそ　あはれなれ　み山のかねを　つく〴〵と　我が
君がよを　おもふにも　みねの松かぜ　のどかにて　ちよに
千とせを　そふるほど　のりのむしろの　花のいろ　のにも
山にも　にほひてぞ　人をわたさむ　はしとして　しばし心
を　やすむべき　つひにはいかゞ　あすか河　あすより後や
わがたちし　そまのたつきの　ひゞきより　みねの朝ぎり
はれのきて　くもらぬそらに　たちかへるべき

きりともと思ふ心ぞなほ深きたえてたえゆくやまかはの水

前中納言定家（前大僧正慈鎮イ）

ひさかたの　あめつち共に　かぎりなき　あまつひつぎを
ちかひおきし　神もろともに　まもれとて　わがたつそまと
いのりつゝ　むかしの人の　しめてける　みねのすぎ村　い
ろかへず　いくとし〴〵を　へだつとも　やへのしら雲　な
がめやる　みやこの春を　となりにて　みのりの花も　おと
ろへず　匂はむものと　思ひおきし　すゑはの露も　さだめ
なき　かやが下葉に　みだれつゝ　もとの心の　それならぬ
うきふししげき　くれたけの　はつねをたつる　うぐひすの
ふるすは雲に　あらしつゝ　あとたえぬべき　たにがくれ
こりつむなげき　しひしばの　しひてむかしに　かへされぬ
くずのうら葉は　うらむとも　きみはみかさの　山たかみ
雲居の空に　まじりつゝ　てる日をよゝに　たすけこし　ほ
しのやどりを　ふりすてて　ひとりいでにし　わしの山　よ
にもまれなる　あととめて　ふるきながれに　むすぶてふ
法の清水の　そこすみて　にごれる世にも　にごりなし　ぬ

〇反歌

〇かへし

○反歌

まのあしまに　かげやどす　秋のなかばの　月なれば　猶山の端を　行きめぐり　空ふく風を　あふぎても　むなしくなさぬ　行くすゑを　水の河なみ　たちかへり　心のやみもはるくべき　日よしのみかげ　のどかにて　君をいのらばよろづ世に　ちよをかさねて　まつがえを　つばさにならすつるのこの　ゆづるよはひは　わかのうらや　いまもたまもを　かきつめて　ためしもなみに　みがきおく　わがみちさても　たえせずば　ことのはごとの　いろ〳〵に　のちみむ人も　戀ひざらめかも

君を祈るこゝろ深くはたのむらむたえてはさらに山川の水

此の歌は後鳥羽院みなせどのにわたらせ給ひけるに慈鎭和尙のなが歌をたてまつられたりけるかへしたゞいまつかうまつるべきよしおほせ事侍りければやがてかきつけてたてまつりけると云々

夫木和歌抄卷第三十六　終

跋

長清法名蓮昭

此夫木和歌抄者、藤原朝臣長清自選也、昔中頃之歌仙之家集、並代々勅撰に漏るゝ和歌を拾集所也、自今以後之爲勅撰之、又此道に志あらむ人のために、世之嘲を不顧集置者也、又夫木抄と名付事、今案に非ず、此鈔之名を思案して、少しまどろみて有ける夢の中に、白衣之老翁一人來曰、汝所撰之和歌抄者、我朝之至寶也、末代之證歌成べし、倭國之風俗なれば扶桑集と可名付と謂れけるを、夢心地に是は誰人にて御座ぞと問ければ、我は是和歌の道に心を留し、江中納言匡房と云者也とて夢覺ぬ、此由を冷泉黄門爲相卿に被申ければ、爲相卿此事希代不思議之靈夢、末代之希特、誠我朝之深祕鈔也、但扶桑者日本國總名也、可有其憚、扶の字のつくり、桑の字の木を取合て、夫木和歌抄と名付。

夫木和歌抄いんさき藤原長淸えらびおきしより、しきしまの道に心をたのしぶ人、もてあそぶふみとなりにけり、しかはあれどながれの末にはとめずして、鳥のあとのみなもとうひ〳〵しくおもほえねば、いづれを見るもよすがなく、更にひとり〳〵の家集をかゞなへおほなは、たゞし侍るものならし、猶ねもごろには、ざえあらむまびとのこ、あらためたまふべし。

夫木和歌抄 終

昭和十三年一月十五日普及版印刷
昭和十三年一月二十日普及版發行

（非賣品）

校註國歌大系
第廿二卷

編輯者　中山泰昌
東京市神田區錦町一丁目五番地
發行者　小川菊松
東京市豐島區巣鴨五丁目一〇八二番地
印刷者　矢島勇三郎
東京市豐島區巣鴨五丁目一〇八二番地
印刷所　矢島印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目五番地
株式會社　誠文堂新光社
電話神田　自二一二六番　至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和五十年十一月十八日印刷　昭和五十年十一月二十日發行